超次元学園へようこそ！『アナザーストーリー』

なめ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超次元学園へようこそ！『アナザーストーリー』

【Ｎコード】
Ｎ２５１４Ｘ

【作者名】
なめ猫

【あらすじ】
真王さん公認の、「超次元学園へようこそ！！」のアナザーストーリーです。
主に、カイト達やネプ姉妹などの視点多めです。一応、本家に合わせていければいいかなと。

なお、１８禁要素も入るかもしれませんので、ご注意ください。

『書ける作品』

オリジナル、超次元ゲイムネプテューヌ（ｍｋ２）、ＦＦＴ（ファイナルファンタジータクティクス）、テイルズオブシンフォニア（ラタトスクも）・ヴェスペリア・マイソロ１２３、ひぐらしのなく頃に、らき☆すた、銀魂、リリカルなのは、まどかマギカ、マリオ、スマブラＸ・ＤＸ、キングダムハーツ、ファイナルファンタジー（ディシディアが主）、スクールデイズ、ボーボボ、アイドルマスター、ロックマンＸ（ネタのみ）

1話「パティシエ・ロイド」（前書き）

まずは、真王さんのリクエストからで、アンドロイドの話です。戦争も希望されましたが、あまり書けませんでした；

1話「パティシエ・ロイド」

真王が理事長として存在しているこの学園。そこには、幾多の特殊すぎる学生達がいて、ある意味最大に特別な学園である。
ここに入学した俺達は、そこで知りたいことを知ろうと、日々を過ごしていた。

これから語るのは、俺達の視点から見る学園の物語である。

……

かつて嫌な現実を知らしめられ、腐りきった学園から離別した俺達は、あの日…ネプテューヌ達の言葉をきっかけに、超次元学園へ入学した。
もう1度、学園というものを信じて…俺達はやり直すことにした。
きっと…理想がそこにあるんじゃないかって…

……

そして今日も、楽しくなりそうだ。

銀八「よーし、今日はお前らに伝えとく話がある」

カイト達の担当、銀八がホームルームの時間にこんな話をした。
横には、何やら人っぽい物が立っている。

銀八「今日は、こいつのテストをすることになった」
ミリア「それは…ロボット、ううん…アンドロイドですか？」
銀八「あぁ、その通りだ。前日できたばかりの新型アンドロイドだ」
「はじめまして、カロンと申しますの。よろしくお願いしますの」

アンドロイドと呼ばれた人が、生徒達に挨拶をした。特徴は、紫髪にピンクの衣装とゴーグルを装備した少女だ。

銀八「スカリエッティ先生作で、とあるマジカルパティシエを真似たらしい。後から他のアンドロイドも動かすかもしれねえから、そこんとこよろしく。絶対に壊したりしないよーにー」

そんなわけで、アンドロイドのテストが行われるらしい。

マリオ「テストって、何をするんですか？」
銀八「それは、これからの家庭の時間にやる。まあすぐにどんなアンドロイドなのか、すぐにわかるさ」

……

家庭科の時間

（ちなみに、こちらではお妙さんが担当になりました）

お妙「はい、というわけで今日はアンドロイドと一緒に調理をします。レシピは魚介類であれば何でもいいですよ」
ギルシア「そいつが調理を？」
スカリエッティ「その通りだ」

アンドロイドを観察するため、スカリエッティもいる。

スカリエッティ「その記念すべき1号であるカロンは、どんな材料でもあらゆる豪華料理を作ることができるのだよ。どんな材料でも…ね」
リュカ「本当？じゃあ、あのシャブスキーも作れるの？」
カロン「はい、余裕ですの」

カロンは自信ありげに答える。

スネーク「じゃあ、あのミラクルパフェとか、ヨッシークッキーもできるってのか？」
スバル「特上サーロインも！？」
ビビ「1UPプティングも作れるのー！？（☆▽☆）」
カロン「はい、どんとこいですの♪」

カロンはそう答え、これから証明することを約束した。

カイト「まじかよ…そりゃすげえな」
ミリア「じゃあ早速見せてくれるかな？」
カロン「わかりましたの。では、これからマグロとアワビ料理をごちそうさせますの！」

調理する机から、まず下ごしらえされてないアワビと野菜を取り出した。

カロン「まずは、アワビのステーキとサラダを作りますの。よーく洗った材料を…」

ぶんっ！

生徒達「え！？」

なんと、アワビ料理の材料を上にほうり投げたのだ。

カロン「ちゃちゃっと下ごしらえしますの！」

ジャキン！（両腕からツメが出る）

カイト「り、両腕からツメ！！？」

ユニ「まさか、ツメで切るっての！？無理でしょ！？」

カロン「レッツ・下ごしらえですの！」

しゅばっ！（ジャンプ）

すばばばばばばばばばばばっ！！！

結果、材料は綺麗に細かく切れました。

もちろん皿にも乗る。

生徒達「何いいいいいいいいっ！！！？？」

銀時「何だ今の！？ツメであんなに切れねえはずだろ！？」

スカリエッティ「それができるのだよ。あのツメはマスターシザーネイルといって、あらゆる材料を好きなように切ることができるのだ！もちろん1度に大量調理も可能！邪魔する雑魚も一網打尽できる、安全に料理をしたい人にオススメだ！」

マリオ「いやいや、思いっきり攻撃範囲やばいだろ！？安全じゃねえだろおい！？」

スカリエッティ「ちなみに、オリハルコンも切断できるぞ」

ノワール「本当に料理向けのアンドロイドなの！！？」

そんなツッコミをよそに、カロンの調理は続く。

カロン「さて、次はマグロですの」

じゃきん！

セイラ「またツメで切るのか…！？」

ジャンヌ「さっきみたいに、スパっと…？」

そう予想しながら見守っていると、カロンの様子が変わった。

カロン「…ぐちゃぐちゃのミンチにしてやんよ……」

生徒達「！！？」

ザスッ！！

黒い表情をし、ツメをマグロにつき刺す。

カロン「つぶれろ…！！」

ずがががががががががが！！！！（連打）

カロン「とどめやぁぁぁぁっ！！！！」

ずがぁぁぁぁん！！！

結果、ミンチになったマグロの身が皿の上にできました。

カロン「はい、マグロもこれで下ごしらえしましたの♪」

銀時「机粉砕したんですけどぉぉぉぉぉ！！？」

調理台の机を犠牲にして。

スカリエッティ「カロンは1秒につき16連打もできてね、さらにツメの威力と合わさってあらゆる物を砕くことができるのだよ。冷凍していても問題はない」

新八「いや問題あるよ!!?どう考えても戦闘向けでしょ!!!!」

ラム「ていうか、今黒くなったんだけど!?」

スカリエッティ「仕様だ、問題ない」

マリオ「だから問題ありすぎだろう!!?」

ルイージ「もはや兵器だよね…;」

生徒達は、カロンのバトル向けな仕様に引き気味だ。

カロン「では、あとは材料をまとめて…!」

ぶんっ（上に投げる）

カロン「クッキングしちゃうですの♪」

しゅばっ！（ジャンプ）

スネーク「まさか、また切りまくる気か?」

ぴかーーーっ！（光りだす）

零斗「うおっ、まぶしっ!?」

いきなり光りだしたが、それはすぐにおさまった。

すると…

カロン「完成、ですの♪」

なんか、綺麗にアワビステーキとマグロのたたきの混ぜご飯（アレンジ）ができました。

生徒達「えぇぇぇーーーーー！！！？？」

新八「ちょっと、今何したの！？絶対わかんなかったんだけど！！？」

ユニ「ネタがないからカット、なんて理由はなしよ！？」

スカリエッティ「ほう、鋭いね。その通り、まあそういう仕様だ」

生徒男達「おいいいいいいい！！！この人言っちゃったよぉぉぉ！！！」

わけがわからないよ。（ひろしより）

新八「ひろしって誰だよ！！？」

イェアアアッ！！！

ギルシア「もうええわ！！！」

銀時「ったく…おっかねえアンドロイドだな。こりゃ実用は無理じゃねえのか？」

あまりよろしくない評価をした銀時であったが…

お妙「まあ、なんて素晴らしいアンドロイドなのかしら！ぜひ、１機いただきたいわ♪」

新八「何言ってんすか姉上えええええぇーーーー！！？」

お妙さんは笑顔でほしいと言っちゃっていた。

何故だ…

で、肝心の料理の出来はどうなのか？
気になったカイトとミリアが味見をしてみた。

ぱくっ

カイト「！？……うまい…だと！？」
ミリア「すごい…本当によくできてる…！」
ティアナ「えっ、嘘！？」

本当なのか疑うティアナ達も、料理を口にしてみた。

ぱくっ

ティアナ「…本当だ…おいしい！」
スバル「すごーい！これ豪華料理そのものだよ！」

なんと、料理の出来は本物だったようだ。他の生徒達も料理を口にしてみた。そして、みんな料理に花丸の評価を下したのだった。

カイト「まさか、まじて作っちまうとは……恐るべし、カロン…！」
スカリエッティ「ははは、どうやらテストは成功のようだな。これならば、2号達も……」

ピーーーーッ！

全員「？」

ところが、その時カロンの目が赤く光り出し、さらにアラームまで

鳴り出した。

カロン「使徒接近！ネコッタ共が来ましたの！！カロン、出撃しますの！！」

ダッ、ガシャーン！！

突然カロンは、ロケットブースターを作動させ、窓ガラスを割りながら飛んでいった。

近藤「なな、何だ！？」

土方「勝手に飛んで行きやがったぞ！？」

スカリエッティ「ううむ…どうやら、宿敵のアンドロイド・ネコッタ軍団が来たようだな」

ネス「え、何それ！？」

スカリエッティ「私の宿敵ドーンが作ったというネコバージョンアンドロイドだ。奴はカロンとよく似ているが、ムチと電気で調理をするという。ドーンめ…私のアンドロイドを破壊するべく、量産してきたか」

銀時「何だそりゃ…；」

スカリエッティ「だが心配はいらん。カロンには対ネコッタ用に、特殊エネルギーによる攻撃も搭載している。また、能力も大きく上昇するため、天下無双のパティシエアンドロイドという呼び名もつく予定だ」

ノワール「あの、それもはやパティシエじゃないでしょ；」

ユニ「どう考えても戦闘用アンドロイドじゃない…；」

スカリエッティ「ふっ、今の時代は戦闘もできて当たり前なのだよ」

ビビ「どんだけー…；」

アンドロイドも、何でもありなのだろう。何というか、ツッコミ所

がありすぎるとしか言えないだろう。

スカリエッティ「ちなみに、衣装を剥ぐこともできる上、羞恥システムも搭載してるので嫁がほしい人にもオススメだ」

ラム「どうでもいいシステムばかりじゃない…；」

ロム「こくこく…；」

ちなみに、カロンはスターライトパワーをもって、１００体のネコッタを撃墜したらしい。

そして、やや全裸だったそうな。

……

カイト「…ドーン……どっかで聞いたような…？」

こうして、今日も時間は流れていく。

1話「パティシエ・ロイド」（後書き）

アンドロイドやロボットも、世紀末なんだろうなぁ。

2話「仲よくケンカしな」（前書き）

ネプテューヌ達4女神の競争話です。見てると、なんかトムとジェリーみたいです。

2話「仲よくケンカしな」

１１：００　休み時間

カイト「そういえば、気になったんだけどさ…」
ネプテューヌ「なあに？」
カイト「ネプテューヌ達って、ネプギア達より上の女神なんだよな？」
ノワール「えぇ、そうよ」
カイト「じゃあさ…」

『現在、４人の中で誰がトップ人気なんだ？』

４女神「！！！」

びしゅーーーん！！

４人に電撃走る。

ミリア「…？」
カイト「どうなんだ？」
ベール「決まってるじゃないですか。１番人気といえば、全面的に私ですわよ」

まず、ベールが笑顔で言う。

カイト「そうなのか？てことは、勉強も運動も？」

ベール「えぇ、抜かりはありませんわ♪」

どや顔でそう答えた。

しかし、3人は黙っていなかった。

ノワール「何を言ってるの?勉強と運動だけよくても、他の行動も大事よ。早解きのテストで私がいつも勝ってるのを忘れたのかしら?」

ぎくっ

ベール「うっ…わ、私だって遅くなんてありませんわよっ」

ノワール「ふふっ、素早くかつてきぱきにこなす私に、死角はないわ♪」

ブラン「…でも、以前早く終わらせた割に、間違いが多かったはず」

ぎくっ

ノワール「そ、それは…ちょこっと公式とかを勘違いしてただけよっ!それがなければ、パーフェクトいってたわ!」

ブラン「そのちょっとした勘違いが命取り……正確さなら、私が上」

ネプテューヌ「そうかな?体育の時、サッカーとかバスケットで、力を入れすぎて変な所にまで飛んで行くことが多い気がするよ?かけっこも速くないし」

ぎくっ

ブラン「む…でも、手は抜いてない…っ」

ネプテューヌ「ふふんっ、それでも体育は私がよく勝ってるよん♪やっぱり主人公には敵わないと思うなー」

ベール「いつ貴方が主人公になったんですの!?大体、貴方は実技がよくても、学科はほとんど私達より下でしょう?」

ぎくっ

ネプテューヌ「うぅっ…でもでも、ちゃんと黒点は取ってるよぉっ!いーすんの長時間説教とか嫌だし…」

ベール「でも、ほとんど理解できてないのでしょう?テストだけよければいいわけじゃありませんわよ」

ネプテューヌ「むぅぅ〜…でも、でもっ!」

カイト「…あ、あのー…」

ノワール「とにかく、トップは私よ!」

ベール「いいえ、私ですわっ!」

ブラン「私だっつってんだろうがぁっ!!」

ネプテューヌ「絶対私だよーっ!」

ワイワイギャーギャー!

女神達がケンカを始めました。

ミリア「ケンカしちゃってる…;」

カイト「…俺、なんかマズったか…?;」

ネプギア「あはは…;気にしないでください。いつものことですから」

ミリア「そ、そうなんだ…;」

ネプギアいわく、いつものことであるという言葉に、ミリア達は意外な気持ちになった。

とはいえ、いきなりバトルになったりしないあたり、ただのライバル同士なのだろうと、カイトは思うのだった。

ユニ「はぁ…全く、４人共いつもこれなんだから」
キャロ「ビビちゃんは、誰が１番だと思う？」
ビビ「んー……ちょっとわかんないなぁ。皆魅力的だから（ｆ＾｜＾；）」
銀時「変態淑女でもわからねえか」
ビビ「うっさいパーマ野郎」

他の人から見ても、どうも判断しにくいようだ。
ところが、そこにチフユがやって来る。

チフユ「そんなに白黒つけたいのなら、とっておきの奴があるぞ」
４女神「！！」
チフユ「どうせこの後は体育なんだ。そこで私が見てやろう」

……

体育の時間
運動場にて

チフユ「というわけで、種目はこれだ」

チフユが用意したのは、いろんな障害物が配置された４００ｍ走だった。

チフユ「この４００ｍ走には、運動だけでなく勉強や雑務などを必要とする障害物もある。全面的に優れた者でなければ、容易に突破できん。お前達にはちょうどいいだろう」

カイト「なるほど、これなら白黒つけやすいかもな」
チフユ「なお、ゴールには豪華料理としてお妙作の４等分済みショートケーキを用意している。もちろん先に食べた者の勝ちだ。わかったな？」

説明を受けた４女神はというと…

ノワール「悪くない種目ね。いいわ、これで白黒つけましょ」
ベール「えぇ…私達の中で誰が１番になれるのか…」
ブラン「決着をつけてやるぜ！」
ネプテューヌ「恨みっこはなしだからねっ！」

燃えているようだった。
白黒つけようと、皆やる気満々だ。
というわけで…

チフユ「ではトップランナーいくぞ。よーい、はじめ！！」

ピーッ！

トップランナーの女神達は、一斉にスタートした。
障害物は文字通り、いろいろ存在していた。女神達を苦しめる物もあれば、容易に突破される物もある。
他の生徒達は、ただじっと見守るのだった。

ノワール「こうしてああして…よし！」

書類の処理だったり、

ブラン「こんな重さ、容易…！」

重たいボールを投げる的当てだったり、

ベール「余裕ですわ！」

全学科のテストだったり、

ネプテューヌ「ほいなっ！それそれそれーっ！」

テグ人形を相手にしたり…

だが、勝負は互角だった。
それぞれ得意不得意が綺麗に分かれていて、ほとんど同位に並ぶことが多かったのだ。

そして、ラストスパートにさしかかった。

ノワール「後は、ケーキを食べるだけね！」
ネプテューヌ「とりゃー！1番は私がいただきー！」
ベール「そうはさせませんわよ！」
ブラン「どけやあぁぁぁぁっ！！！」

4人同時にケーキへ手が伸びる。

カイト「おっ、決着か！？」
ミリア「誰が勝つのかな！？」

4女神「もらったぁーーー！！」

誰が勝利を手にするのか？

生徒の誰もが、予測できない。
そしてケーキに触れたのは……

がばっ、ぱくっ！

４女神「！？」
生徒達「え！？」

ハタ「もぐもぐ……うははは！いやぁうまいうまぃっ、なんかいい匂いしたから仕事ほったらかしで飛び出してよかったー！」

学園の事務員なのに働かない、ハタ王子様だった。
つまり…

生徒達「何いいいいいいいいーーーーー！！！？？」

ドロー、というわけだ。

銀時「おいそこぉ！！何勝手にケーキ食いやがんだこの野郎！！？」
はやて「しかも一口で全部食べとるし！！？」
ハタ「もぐもぐ…ん？何だ、別にいいだろう。買ってくれれば」
チフユ「……まさかとは思うが、他に用意したケーキは…？；」
ハタ「んー？あぁ、それらもご馳走させてもらったぞ。うん、よくできてた！褒めてつかわそうって、作った奴に伝えといてくれ、もぐもぐ…」
全員「……」

全員沈黙せざるを得なかった。いや、しなくてどうするって話だ。

チフユ「……なんてことしてくれたのだ…馬鹿が…；」

新八「いますよね、空気読まない馬鹿って…」
桂「うむ…馬鹿と言うしかあるまい」
カイト「ちなみに、全部食われたってことは…；」
レーティア「もうこの４００m走は、できないことになるわね…」
ユニ「絶対馬鹿でしょ、あいつ…」
セイタ「馬鹿だな…」
零斗「馬鹿だ…」
ティアナ「信じられないくらいに馬鹿…」

当然、冷たい目で見るだろう。それほどのことをしたのだから。

ハタ「んぐっ…！な、こらそこっ、馬鹿馬鹿言うな！！馬鹿じゃないぞ！いいだろうが、たかがケーキごときで……」

ごごごごごごごご…！！

ハタ「ん…！？」

さらに、女神達にもケンカを売った。

ベール「ひどいですわ…せっかく、決着がつきそうでしたのに…（グングニル装備）」
ノワール「ほんとよ…最悪だわ…（カリバーン装備）」
ネプテューヌ「ひどいよぉ…空気ぶち壊されて、私すっごくイラってきちゃったよ…？（レーヴァテイン装備）」
ブラン「覚悟…できてんだろうな…？（ハードクラッシャー装備）」

４女神達の怒りを買ったハタ王子は、びびるしかなかった。

ハタ「ひ、ひぃぃぃぃっ！！？じ、じぃ何とかせい！！」

じい「はっ」

何とか逃れようと、そばにいたじいに助けを求めた。

じい「あのー…」

ばっ！（土下座）

じい「すみません！！私の注意を無視して食べられましたので、私だけは助けてください！！！」

だが、無駄だった。
じいは命ごいをしたのだ。

ブラン「…いいだろう…ただし、後で私らにケーキ買ってきてもらうからな…」
じい「私が助かるのであれば何なりとー！！！」
ハタ「え…？」

望みは、たやすく絶たれたのだ。もう逃げられまい。

ノワール「さぁて…覚悟はいいかしら…？」
ブラン「徹底的にぶちのめしてやる…！！」
ベール「保険には入られてますか？私達の前では、それが必要になりますわよ…」
ハタ「ひぃぃぃーーーーー！！？」
ネプテューヌ「大事な勝負を邪魔されたんだもん…私、すっごく怒ったからね…！！」
ハタ「ままま、待て待て！わわ、悪かった！ビックリマンシール全部やるから助け……」

だっ！（突撃）

４女神「天誅！！！！！」

ずどがばぎどばざしゅばごずがどがががががが！！！！

ハタ「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！」

あわれ、いや…愚かなり…ハタ王子。

ギルシア「あーあ…」

ジャンヌ「勝手なことするから…」

レオン「しかも、かなりの怒りを買ったようだな…」

ラム「うわっ…お姉ちゃんったら変身しちゃったよ…；」

ロム「がくがく…（震）」

ユニ「私のお姉ちゃんまで…あんな馬鹿相手に変身しなくていいのに…；」

ネプギア「私のお姉ちゃんは変身しないけど、奥義連発しちゃってるよ…ベールさんは変身してスレッドスピア連発…；」

ミリア「…まあ、ネプちゃん達には同情するよ…；」

カイト「そうだな…；」

結局、また決着がつかないまま終わってしまったネプテューヌ達。

やる気を全てなくした女神達は、昼食の時にやけ食いをしたとか何とか。

まだまだ決着がつくことはないのかもしれない。

2話「仲よくケンカしな」（後書き）

勝負の邪魔をした者って、ほぼぶちのめされることがパターンなんだよ…きっとね。

3話「恐竜保護作戦」（前書き）

真王さんリクで、恐竜の話です。恐竜ネタははじめてです；

3話「恐竜保護作戦」

登校中のこと。

カイト「いやぁ、この前のワリオマンとやらには困ったなぁ」
ミリア「確かにまいっちゃったね…でも、耐性ついたからもう大丈夫だよね」
カイト「そうだな。とりあえず、また来ても…」

「グルル…」

カイト・ミリア「？」

突然、学園入口からのどをならすような声が聞こえた。何なのか二人は見てみたら…いた。

カイト・ミリア「！！？」

恐竜が。

カイト「な、何だこいつ！？何で恐竜がここに！？」
ミリア「しかも首長竜！？」
首長竜「グルルル……グォーン」

その恐竜は、学園を平然と歩き回っていた。カイト達から見ると、エサを探してるのだろうか。

カイト「…殺気はないみたいだが、どうなってんだ…？」

たったっ…（来）

ギルシア「おーい、どうしたんだお前ら？」
レーティア「何かあった…の……」

……。

ギルレー「「えええぇぇーーーーーー！！！？？」」

ギルシアとレーティアも、たまげてしまったようだ。

リル「ぁうー？」
レーティア「ど、どうして首長竜が…？しかもこの学園に！？」
カイト「俺達が来た時に、すでにいたっぽいんだ；」
ギルシア「まじかよ…；」
ミリア「と、とにかく理事長に伝えなきゃ！」

……

かくして、カイト達はこのことを理事長に伝えるのだった。

９：００

銀時「で、どうだったんだ？なんかわかったのか？」
カイト「あぁ、あの恐竜は原始の森に住んでる奴らしくて、動物園に連れて来られたんだってさ」
神楽「動物園？どこのサファリパークアルネ？」
ミリア「それが、王魔時動物園って言ってたよ」

ネプギア「…あの動物園ですか…；」
カイト「？知ってるのか、ネプギア？」
ネプギア「はい、バイトしたことあります…；」

ネプギアは、その動物園でアルバイトをしていたらしいが、ちょっとわけありな顔をしている。
え？こっちじゃその話はない？気にしなくていい、問題ない。

マリオ「問題ありだ；」

ちなみに外を見てみると、首長竜はネプテューヌやラム、ロムと遊んでいた。

ネプテューヌ「わぁーーい！」
ラム「すっごく滑るぅーー！♪」
ロム「ふふふっ♪（にこにこ）」

首長竜も、嫌がるどころか懐いているようだ。

ベール「なんか、すっかり懐いてますわね…」
ジャンヌ「しかも楽しそう…」
ソラ「それで、どうするんだ？森に帰すのか？」
カイト「んー…まだ決めようがないんで、恐竜の心に語りかけてみようと思う」
生徒達「？？」

……

休み時間

ミリア「じゃ、語りかけるよ」

全員集まったことを確認し、ミリアは首長竜に手をあてて目を閉じた。
生徒達全員は息を飲み、カイトはただじっと見守る。
しばらくして、ミリアは目を開けて手を離した。

ミリア「終わったよ。ここにいる理由も教えてくれたよ」
カイト「それは？」
ミリア「この子や仲間のTレックス、トリケラ、ラプトル、ヴェロキラプトルは動物園で園長の世話を受けていたらしいの。ところが、犯罪組織らしき者達の襲撃を受けて、それで逃げてたらはぐれてしまったんだって…」
ユニ「迷子ってこと？」
ミリア「そうなるね…」
カイト「犯罪組織については、何か言ったか？」
ミリア「あまり情報はもらえなかったけど、目的だけははっきりしてた。犯罪組織が襲撃したのは、金目当てだよ」
アリス「何だと…！」
ネプギア「！（まさか、以前の悪い人達…？）」
カイト「そうか……まずいな…なら、事は一刻を争うぞ」
生徒達「？」

カイトは重く真剣な表情で話す。

カイト「金目当てということは、恐竜や動物を売り飛ばすつもりなんだろうな。動物園がどうなってるのかはわからないが、少なくとも追手を出してるはずだ。つまり…」
レオン「…恐竜を全て捕まえられる前に保護をしなければ、動物園の運営にも大打撃…そして、恐竜も無事では済まない…そういうこ

とか？」
カイト「あぁ…」

話を聞き、全員は危機感を抱いた。
他の恐竜も保護しなければならない、その判断はすぐにされた。

ネプギア「大変…！なら、すぐに保護しに行かないと！」
マリオ「わかってる、手分けして恐竜を全匹保護するぞ！」
銀時「んじゃ、さっさと理事長に居場所を見つけてもらおうぜ」
カイト「俺達は動物園に向かう。動物園に何かあってもアウトだ！行くぞミリア！」
ミリア「うんっ！」
ギルシア「俺達も行くぜ！」
レーティア「えぇ！ジャンヌも来なさい！」
ジャンヌ「もちろん！」

かくして、カイト達による保護作戦が始まった。

……

生徒達の行動は順調に進み、Tレックスも…

銀時「よし、見つけた！ロープと網をよこせ！俺がちゃっちゃと…」
神楽「ホオォアタアアぁぁぁぁあっ！！！！」
ずどがぁっ！！！
Tレックス「ギャオォォォ！！？」

どしーん！（倒）

神楽「はい、終わったアル♪」
銀時「おいいいいいいいい！！！？？何ヴァイオレンスに大人しくさせてんだこらあぁぁぁっ！！恐竜に恨まれたらどうすんの！！？」
神楽「大丈夫アル。きっと思い出さないアルネ」
新八「そういう問題じゃねえぇぇぇーーー！！！！」

トリケラも…

レオン「いたぞ、今なら捕まえやすいだろう」
ビビ「よーしっ、ここはビビちゃんが3秒でゲッチュしちゃいぞー！（＜▽＞）」

ばっ！（魔法陣）

ビビ「魔力高めて…そぉーれっ！！」

ばばばばばっ！！！（バインド）

トリケラ「ギャオォォォォォ！！？」
ガレーナ「よし、これで保護できたな」
ソラ「ＯＫ！」
マリオ「ちょいと過激すぎねえか…？；」

ラプトル２匹も…

ネプテューヌ「やっほーーいっ！いけいけーー！」
ネプギア「と、飛ばされちゃう～！」

ネプ姉妹が2匹の上に乗り、2匹はエサを追いかけている。

ザック・近藤「ひえぇぇーーーーーーー！！！？？」

エサを持つ二人を。

ザック「何でこんなことをぉーーーー！！？」
近藤「俺らまでやばいってぇぇーー！！！くっそー、ゴリラパワァァァーーーーーー！！！！」

ユニ「…またオーバーな作戦を…；」

恐竜達は無事保護されたのだった。

……

王魔時動物園

カイト「ここだな…」
ミリア「…この気配……うん、避難はしてるみたいだね。まわりに転がってる男達は…犯罪組織の者で間違いないね」
ギルシア「こりゃあ…シナとやらがやったのか？」
カイト「シナ…園長のことか」
レーティア「えぇ、ひとまず園長の元へ行きましょう」

カイト達は園長シナの元へ向った。
すると…

……

シナ「ちぃ…！」

シナは、緑髪のフード女に追いつめられていた。体力の限界がきてるのだろう。

「へへ…園長さんよぉ、そろそろ限界みたいだな？死にたくなきゃ、動物と恐竜をよこしなよ」
シナ「ふんっ…お主らなんぞに渡しては、こっちがつまらぬわ！」
「そうかい……なら、死にな！！（カマを振り上げる）」

ぶんっ！

カイト「待てやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ずどごおぉぉっ！！！！（木刀命中）

「ぐばあぁぁぁっ！！！？」

フード女は不意打ちをモロにくらい、壁に張りつけられた。

カイト「園長シナっ、大丈夫か！？」
シナ「お…お主らは…？」
カイト「超次元学園の生徒だ！あと、ネプギアからも話は聞いてる！」
ギルシア「よく持ちこたえてたな。だがもう大丈夫だ」

ジャンヌ「危なかったね…さて、あとは…」

壁から復帰したフード女に目を向ける。

「ってて…ごほっ、ごほっ…！やりやがったな…くそっ！」

カイト「犯罪組織の者だろ？よくもこんな騒動を起こしてくれたな。ただでは済まさねえぜ」

ミリア「貴方は何者？名を乗って！」

「ケッ…よく聞きやがれ！犯罪組織マジェコンヌのマジパネェ構成員、リンダ様だ！！」

……。

カイト「…下っ端か」

ミリア「下っ端だね」

ギルシア「下っ端だな」

レーティア「下っ端ね」

ジャンヌ「下っ端じゃん」

下っ端「なっ…だ、誰が下っ端だぁ！！なめてると…」

ばっ！ずどがぁっ！！！（木刀）

下っ端「ぐぼおぉっ！！？」

カイト「隙だけだ。どうやら口ほどにもないって言ってよさそうだな」

下っ端「げほっ…て、てめえ…！人がしゃべってる時に…卑怯だぞ！！」

カイト「知るかよ。言っとくが、恐竜はすでに保護した。さっさとここから手を引け」

カイトの不意打ちに、下っ端は焦りだしてきている。
さらに、作戦もつぶされていることを伝えられ、歯ぎしりもする。

下っ端「っ…くそっ……こんなはずじゃなかったのに…！覚えてやがれ！！」

しゅばっ！

下っ端はやむを得ず、逃げ出した。しかし…

ぴしゅーん！

ネプテューヌ「やっほーーーい！」

下っ端の上空から、保護した恐竜達が落ちてきた。ワープしてきたのだ。
さらに、ネプテューヌとネプギアも乗ってきていた。

ひゅーーーー……

下っ端「いっ！？」

どしぃぃーーーーん！！！！

下っ端「ぎぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！？？」

で、落下して下っ端はプレスされた。

ネプギア「あれ？何か聞こえたような…」
ネプテューヌ「おーい、カイトーーミリアーー！」

ミリア「ネプちゃん！来てくれたんだね！」
ネプテューヌ「恐竜はみんな無事に保護したよー！これでもう安心だね！」

こうして、恐竜は無事に返すことができ、さらに対策もうたれて解決したのであった。

シナ「お、お主…」
ネプギア「くすっ、これでお返ししましたよ、園長さん（笑顔）」
シナ「…ふっ、かたじけないのぅ」

ネプギアとシナも、安心しているようだ。

後に、恐竜達も再び動物園の生活に戻り、観客からも人気者になったという噂だ。

3話「恐竜保護作戦」（後書き）

あ…あの恐竜出してなかった。

……まあいいか、いつでも出せる奴だし。

4話「変態」（前書き）

カイトとミリアについて、題名の通りのことが明かされます。微裏あり

4話「変態」

更衣室で、こんなことがあったらしい。というか、公開2度目？

……

男性更衣室にて

この日、水泳があるのだが、この学園にもいるのだ。
変態が。

カイト「あれ？銀さん達、着替え早いんだな…もう出て行ったぞ」
エリオ「あー…それ、覗きをするためですよ；」
カイト「え、覗きだと？…まさか、食べる気で…？」
桂「心配はいらん。奴らはそこまで野蛮ではない。それよりも、女子達が過激だ」
カイト「どういうことだ？」
土方「ま…どうせすぐわかるだろうさ」
カイト「…？」

カイトは真相が気になっているのだが、桂達の言葉を信じることにした。

マリオ「ところで、ミリアはどうなんだ？」
カイト「何が？」
零斗「…変態なのかい？（ぼそっ）」
カイト「っ！！？」

カイトの顔に赤が宿った。蒸気が出そうなくらい。

零斗「おやぁ？どうしたのかねカイト君ｗ」
カイト「い、いいいいきなり何を…！？／／／」
ソラ「いやなに、ミリアはお前の彼女なんだろ？お前らが入学してから、まだそんなに経ってないから知りたくてな。ミリアはどんな奴なんだろう…ってな」
カイト「なな、何でわかったんだ！？」
カイム「何となくそんな気がしてた…という所だな」
桂「うむ」
零斗「ひゅーひゅー！いけない双子だな、このこのっ！」
カイト「ちょちょっ、からかうなよっ！」

ミリアのことをネタに、カイトはからかわれて赤くなっている。

零斗「で、どうなんだ？」
カイト「……えと、その…皆からしたら普通のいい性格だよ。あまり目立ちすぎる特徴とかもないんだし」
零斗「本当か？本当は銀時ラバースみたいに、かなりの変態じゃないのか？お前の下着とかを狙ったり、クンカクンカしたりしないのか！？」
セイタ「いやいや、それよりもカイトはヤってるかもしれないぜ？しかも淫乱だったりして！」
カイト「ちょっ、ミリアはそんなんじゃねえってーの！！！；」
零斗「くくく…真っ赤になってら！」
桂「カイト、下手に隠すとかえって墓穴を掘るだけだぞ？」
カイト「うっ…；」

何とか反論しようとあがくカイトだが、桂のその言葉にしづらくなる。

桂「…ま、愛し合っていることを堂々としてもよいのだがな」
カイト「…あんた、味方なのか敵なのかどっちなんだよ…；」
桂「さあな」

そう返されたカイトは、どうやってこの話を変えようか考えた。これ以上いろいろ聞かれてはまずい。
と、その時…

ばんっ！（ドア開く）

咲夜「ユーくぅ～んっ、もう待ちきれないよぉ～♪」
カイト「へっ！？」
ユーノ「うわっ！？」
男達「ちょっ！？」

なんと、咲夜が更衣室に突入してきた。
さらに…

アリス「いるんだろう、ソラ！」
ソラ「ぶっ！？」

アリスまで入って来た。

マリオ「おいまたか；」
桂「今さら言っても変わるまい。行って来い」
ユーノ「またそのパターン！？って、うわあぁぁぁーー！！？」
咲夜「うふふ、ユーくぅーんv」
アリス「ほら、早く行こうじゃいか！」
ソラ「お、おいおい！引っぱるなって！？」

シュタタタ…

で、二人は連れて行かれた。

カイト「……おい、いいのか…？；」

スネーク「好きにさせとけ」

皆にとってはいつものことだ。気にしても意味はあるまい。

セイタ「んで、どうなんだよカイト？ミリアとどんなことしてんだ？言ってみ、言ってみ？お兄さんに言ってみ？」

カイト「あー…わかったよ；…つっても、大差ないと思うぞ？一緒に修行したり、遊んだり、散歩したり…あとは……ミリアにチカンしてあげたり」

他一同「チカン！！！？？」

チカン…その言葉が出た。

カイト以外の男達は、その言葉を疑わずにはいられない。

マリオ「お、おいおい…チカンって…？；」

カイト「たまに、ミリアがいろんなシチュエーションや方法で誘惑してくるんだよ。それで、ちょっとチカンしたら喜ぶんだ。はじめは抵抗があったけど、ミリアの恋人として生きていくうちに慣れちまったよ」

新八「ま、マジで…？；」

エリオ「変わってる…って、言っていいの…；」

ネス「ていうか、それチカンなの…？；」

どうやら、カイトも変態なのだろうか？

そう予想する一同であった。

……

女子更衣室はというと…

ネプテューヌ「へぇー…カイトって、すごくいい人なんだね」

ミリア「うん♪カイト君は優しいし、まっすぐだし、いつも前へ進もうと努力するし、思いやりもあって、考えも深いし……ボク、もうカイト君の全てが大好きだよ」

ネプギア「そうなんですか。カイトさんとミリアさんの絆、うらやましいです」

はやて「せやなぁ。双子とか関係なしに、ラブラブでいいことや」

ミリア「えへへ…」

こちらも、ミリアはカイトのことについて聞かれていた。

ミリアはカイトのように下手に隠さず、ありのままに話している。

恋愛についてはカイトよりも積極的なため、ミリアは話しているうちに楽しそうになっているようだ。

カイトのことや、彼とのエピソードを聞いている女達は、ミリアが魅力的に見えていた。

ビビ「そっかぁ……悔しいけど、ミリアがそこまで深く語れるほど、カイトの器はでかいんだろうなぁ。世の中にはいい男もいるってわけか…（´・ｖ・、）」

それは、自称淑女の百合ハーレムを目指すビビでさえも、認めるほどである。

ベール「それで、デートもされてるんでしょう?普段カイトから、

どんなことをされてるのか気になりますわ」
ミリア「普段されてることですか？んー…いろいろしてくれてますよ」
ネプテューヌ「じゃあ、とびっきりのことを上げてよっ。これはすごく嬉しかったとか、されて一番嬉しいこととか！」
ミリア「とびっきり……そうだなぁ。変わってるっていえば…」
ネプテューヌ・ビビ「いえば！？」
ミリア「……チカン…かな／／／／」
一同「チカン！！！？？」

こちらでも、チカンという言葉が出た。
当然、驚愕しないわけがない。

フェイト「え、あの……ち、チカンって…？」
ミリア「えへへ、たまにしてくれるんだ……ボクがしてほしくなった時に、カイト君がそっとしてくれて…／／／」
ネプギア「ぐ、具体的に何を…！？」
ミリア「チカンはチカンだよ…ボクのお尻とか、胸を触ってくれたり……たまに、そのまましてくれたり……もちろん、ちゃんとお返ししてあげたりもするよ。コスプレしたり、誘惑したり…／／／／」

何故か、ミリアは頬を赤くしてるのに、うっとりとした微笑みで話している。
照れているのだろうか？

ネプテューヌ「み、ミリアって大胆なんだね…」
ネプギア「…あの、これって…；」
ユニ「…変態だったのね…；」

やはり、変態なのだろうか？こちらも、カイト同様の流れであった。

……

体育の水泳の後

カイトとミリアは、ベンチに座って話をしていた。

カイト「今日は絶好調だったじゃん。いいタイム出たんじゃないか？」

ミリア「うん、調子よかったよ。この調子を保っていきたいなぁ」

水泳でも、ぬかりはない二人。

ミリア「あ、ところでカイト君。私達の関係についてなんだけど…」

カイト「ん？…あぁ、こっちじゃもうばれちゃったよ。やっぱ隠せないなぁ…」

ミリア「くすっ、別にいいんだよ。隠すより、ありのままにしていた方がいいよ？」

カイト「ありのまま…か。まあ、それがいいのかもな」

ミリア「だから、こっちはもう自分から語ったよ。いろんなことを……あと…このことも／／／」

ミリアは照れながら、両足をすりすりし出した。

カイトはそれの意味を、すぐに理解する。

カイト「はは…話しすぎだよ。ミリアったら、いけない娘だなぁ」

そう言いながら、カイトはやった。

むに…（お尻触わる）

ミリア「ひゃんっ…ｖ／／／」

チカンを。

ミリア「あ…くすぐったいよぉ……やんっｖ／／／」

カイト「どうする？このまますまするか？」

ミリア「んんっ…まだだめぇ……放課後にしようよ…ね？／／／」

カイト「わかった…」

むにゅ、むに…

ミリア「ぁん…もっとぉ…ｖ／／／」

……

この二人の様子を見て、皆は言う。

ビビ「うわぁ…あんなにやらしい顔してる…（☆▽☆）」

銀時「……おい、あいつらって…」

スネーク「……第２のギルシアとレーティアってか？；」

ルイージ「…ねえ、若いから…上いくんじゃない？；」

ノワール「変態カップルがまた一組…；」

もう変態としか言いようがないだろう。

何にしろ、カイトとミリアはラブラブであることが判明したのであった。

4話「変態」（後書き）

人はみな変態なのさ…

5話「宇宙へいざなう者」（前書き）

本家からのリク、ＵＦＯネタです。しかし、それらしくない話やスケールになってしまったという…；…次は、ちゃんとできる…はず。

どうしてこうなった？

5話「宇宙へいざなう者」

入学してから、どれくらい経過したのだろうか？
カイトもミリアも、すっかり学園に慣れていて、今ではもう学園で楽しくやるのが日課になっていた。

そんなまたある日のこと。

……

寮にて

カイト「す…すげぇ…！」
ミリア「うん…本当によくできてる…！」
ネプギア「えへへ…（笑）」
ネプテューヌ「でしょでしょ？私達、頑張って作ったんだよ♪」

今は夜。
カイトとミリアは、ネプ姉妹が昨日完成したてでアップロードしたＰＶを見せてもらっている。
その出来は予想をはるかに超えるほどに素晴らしく、カイト達も見とれてしまっていた。

ミリア「しかも、再生数もコメントもいっぱいある…しかも批判なしで、まだまだ伸び続いてるよ！」
カイト「納得の傑作だな。流石じゃん」
ネプテューヌ「ありがとっ♪」
ネプギア「あ、ありがとうございます」

ネプテューヌは満面の笑顔、ネプギアは照れ顔でありがとうと言った。

カイト「いい物を見せてもらった。また新しいＰＶとかできたら、見に来るよ」
ネプテューヌ「うんっ♪頑張って作るから、楽しみにしててね」

そんな会話の後、カイト達は「また明日」と言って部屋を出た。

ネプギア「よかったぁ…本当に頑張った甲斐があった」
ネプテューヌ「今度はどんなのにしようかなー？ネプギアは、何かやってみたいものとかある？」
ネプギア「んー…何がいいかなぁ…」

今も楽しげに会話する姉妹。
そんな時だった…

どおぉぉぉぉん！！！！

ネプ姉妹「？」
ネプテューヌ「何の音…？」
ネプギア「外からしたよね？行ってみようよ！」

……

寮にいる生徒達のほぼ全員は、音をたどって学園から離れた場所に行ってみた。すると、そこにはＵＦＯが墜落していた。

セレナ「これは…ＵＦＯ？」

銀時「なんか嫌な予感がするな……エイリアンとか出るんじゃね？」
零斗「そんなお約束が来るかねぇ。案外、バカ王子とかがいるんじゃねえか？」
ギルシア「いや……もしかしたら、幼女かもしれねえぜ！」
新八「いや、それはないんじゃ…」
ラム「犬とか出ないかな！？犬惑星からやって来た、宇宙犬とか！」
ロム「私は、猫がいい…」
レーティア「人間って可能性もあるんじゃない？」
ガーシェ「ドラゴンかもしれんぞ…」
ジャンヌ「触手な奴かも」
ネス「案外カービィだったりして」
リュカ「キュウベエとか？」
新八「いやいや、ネタになってるよ！？」
銀時「…もしや、長門か！？」
新八「言うと思ったよ！！！この平団員！！！」

とかいろいろ言っていると、ＵＦＯから何者かが出て来た。

カイト「何か来るぞ！」
ミリア「あれは…？」

現れたのは、長い赤髪のツインテールで、スカートの短いメイド衣装を着た少女だった。

銀時・近藤・ギルシア「ちょっ、メイド！！！？？」
はやて「ＵＦＯからメイドさんやて！！？どんな斬新なネタやねん！？」
ステラ「予想すらできないでしょ！？」
ミリア「…？待って、様子がおかしいよ！」

何かに気付き、警戒をうながすミリア。
そしてメイドは…

「…っ…う……」

どさっ（倒れる）

スバル「あ、倒れちゃったよ！？」
ネプテューヌ「えと、大丈夫！？」

そこにネプテューヌが近付いて、メイドへ気遣う。しかし、今にも気絶しそうだ。

カイト「まずは話をしなきゃ始まらない。誰か手当てしてやってくれ！」
コンパ「私がするです！」

コンパが名乗り出て、メイドの治療にあたった。
しばらく待つと、メイドは無事回復したようだ。

コンパ「はい、もう大丈夫ですよ」
「…あ、ありがとうございます……」

メイドは弱々しく礼を言った。

アイエフ「…さて…どうするの？話を聞くにしても、何を話すのかしら？」
カイト「まあその前に……ミリア」
ミリア「うん、わかった」

ミリアはメイドに近付き、じっとメイドの瞳を見た。メイドは、少しミリアに警戒か戸惑いどちらかわからないような表情をしている。

ミリア「……うん、大丈夫だよ。殺気はないし、目論みの様子もないよ」

カイト「そっか、じゃあ普通に話せるな」

「…貴方達は、一体…？」

銀時「俺達は、超次元学園の生徒だ。いきなりＵＦＯが墜落してきたんで、何なのか見にきただけだ」

「超次元学園…？？」

ネプギア「んー…やっぱり、わかりませんよね。とにかく、私達は敵じゃないですよ」

ネプテューヌ「だから、貴方も何者なのか話してくれるかな？もしかしたら、助けになれるかもしれないよ」

「……信じても、よさそうですわね…」

メイドは深呼吸をして、カイト達にお辞儀をしながら話し始めた。

「私は宇宙からやって来たエネルギー生命体。名はアイリと申しますわ」

ミリア「アイリちゃん…だね？」

桂「宇宙からやって来たとな…？」

アイリ「はい。私は、とあるお方の召使いとして生み出されたエネルギー生命体で、様々な活動をしていますの」

カイト「具体的には？」

アイリ「全てお話しすることはできませんが、様々な惑星へ赴いてエネルギーとなる物の補充、または未知のエネルギーの採取が主ですわ」

マリオ「ふーん…」

アイリと名乗ったメイドは、どうやらエネルギー生命体…カイト達からすれば宇宙人であるらしい。
活動を聞くあたり、極悪というわけではないようだ。

カイト「で、そこのＵＦＯは自分用ってわけか。けど、何で墜落したんだ？」
アイリ「それが…惑星へ降りる時に、何者かによる不意打ちを受けてしまい、この有様ですの…」
レオン「ふむ…そして、ここに墜落したということか」
アイリ「はい……ですから、一刻も早くＵＦＯを修理して帰らなければいけません。もし、ご主人様に何かあったら…！」

アイリは不安な表情で言った。
話を聞く限りだと、カイト達と敵対はしないだろう。

カイト「……話はわかった。じゃあ早く帰りたいってことなら、修理を手伝うよ」
ネプテューヌ「うんっ、悪い人じゃないんだし、助けてもいいよね」
ミリア「ボクも賛成♪」
銀時「おいおい、いいのかカイト？修理が終わった後に、裏切りとか襲撃ってパターンも考えられるぞ。よくあるだろ？」
カイト「確かに否定はできないけど、もしそうなら瞳から少しくらい殺意や目論みを感じれるはず。でもそれがなかったんだから、信じてみようや」
ネプギア「そうですね。カイトさん達がそう言うのなら…」
アイリ「……皆さん…」

アイリは少し唖然としながらカイト達を見ていたが、話がまとまった所で我に返り、嬉しそうに礼をした。

アイリ「…ありがとうございます。そこまで言ってくださるのでしたら、どうぞこのメイドのお手伝いをしてください」
ミリア「うんっ、任せて！」

これで、やるべきことは決まった。

銀時「はぁ…やっぱいつも通りか」
アイエフ「全く…まあいいわ。それで、私達は何をすればいいのかしら？」
アイリ「皆様には、ＵＦＯの部分の調達をお願いいたしますわ。詳しくは、ＵＦＯの欠陥部分を見せてからになりますけど」
なのは「じゃあ、私達がＵＦＯの修理にあたろうか。こっちには専門もいるから、すぐに事を運べるかも」
ネプテューヌ「私達は調達だね？任されたー！」

……

フェイト「ところで、ビビは？」
はやて「部屋で寝込んでるみたいんよ。風邪引いちゃったのかもしれへん」
なのは「そっか。でも珍しいね？あんなに元気な娘なのに」
はやて「ま、大丈夫やろ」

……

そんなこんなで、カイト達はＵＦＯ修理のために材料を調達するのであった。
いろいろ必要だったのだが、中でも…
銀時「だぁーーーー！！！いい加減、さっさとレアメタル出て来い

いいーーーー！！！」

どばばばば！！！

ライドアーマー軍団「んぅわぁあっ！！！」

メットール軍団「たぁぁっ！！！」

メカドラゴン「べぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！」

ずどがががががーーん！！！

モルボル「グオォォン…」

にゅるにゅる…

ジャンヌ「ひゃあぁぁんっv癖になっちゃうぅぅぅ…v」

レーティア「あんっ…もっと、そこおぉぉぉぉv」

ギルシア「ハァハァハァハァ…w」

スネーク「……まとめてロケットランチャー弾のえじきにしていいか？」

マリオ「燃やすなら俺もやるぞ？」

ヴェイグ「随分とおしゃべりだな、お前の拳は…！…うおぉぉぁあ

ああああ！！！」
ザック「いや、俺はただ鎮魂錠って奴を聞きに来ただけで……ぶはぁっ！！？」

これらの材料については、時間がかかったらしい。
というか、ヴェイグさんおつー。

……

そして材料も揃い、何事も問題なく修理できた。
ＵＦＯはすっかり元通りだ。

はやて「ふぅー。やっと終わったなぁ」
アイリ「これでやっと帰ることができますわ。皆様には何とお礼を申せばいいのか…」
カイト「いいって。好きでやっただけなんだからさ。それより、主人に連絡しときなよ」
アイリ「ええ、そうしますわ」

アイリはＵＦＯのコンピュータを操作し、通信をしてみた。

アイリ「ご主人様、聞こえますか？アイリです」

繋がったのを確認し、アイリがしゃべる。
しかし、返答がない。

アイリ「…あら…？ご主人様？聞こえますか？」

『主人はもういない』

全員「！！？」

突然、謎の声と共にモニターが映る。
黒い影が現れた。

『すでに私が滅ぼしたばかりでな…もはや、帰っても意味はない』
アイリ「なっ…！？」
カイト「殺しただと！？」

影は、アイリの主人はもういないこと、そして自分が殺したことを告げた。

アイリ「そんな…嘘ですわっ！！ご主人様が死んだなんて…っ！」
『嘘ではない。奴は我々の邪魔をしたからな…徹底的に滅ぼしてやった。…話にならん強さだったがな。よほど、つまらんご主人だったな？』
アイリ「…そ、そんな……」
アイリはショックのあまり、膝をついて座りこんでしまった。

カイト「てめえ…！！」
ミリア「何てことを…！」
銀時「…てめえ、何者だ？」
『…デニー、とだけ言っておこう』

プツン！（モニター切）

全員「……」

アイリ「…そんな……どうして…っ」
ミリア「アイリちゃん…」
アイリ「……もう…おしまいですわ……私も、何もかも…っ！」

涙をぽろぽろ流しながら、悲嘆するアイリ。
ようやく帰れるようになったのに、アイリの主人がデニーと名乗った男に殺されてしまった。
悲嘆せずにはいられないだろう。

カイト「……デニー……許せねえ…！！」
ミリア「うん…目的や理由はわからないけど、許しちゃいけないよ…！」
ベール「…それで、これからどうしましょう…？」
ネプギア「……アイリさん」

ネプギアが、アイリにそっと声をかけてあげた。

ネプギア「もし、行くあてがないのでしたら、私達と一緒にいませんか？」
アイリ「……いいえ…無理ですわ……ひぐっ……私は、魔力に近いエネルギーで生み出された存在……エネルギーがなくなれば、私はこの世から消えてしまう……うぅ…っ……もう、どうしようもありませんわ…っ」

絶望するアイリは、涙を止められない。
しかし、カイト達はアイリを見捨てはしない。

レーティア「…確かに、ご主人さんが殺されたことは、どうしようもないけど…生きることはできるわ」

アイリ「…え…？」
レーティア「これから、ビビっていう娘のメイドになりなさい？あの子なら、貴方に必要なエネルギーを永続的に与えてくれるわ。ビビは特殊だからね」
ネプテューヌ「なるほど…よくわからないけど、助かるんだね？」
レーティア「えぇ。後は…アイリ次第ね」
アイリ「……」

その後、ミリアはアイリのそばに座ってこんな言葉をかけてあげた。

ミリア「アイリちゃんの心にできた傷は、ボク達が治してあげられるかはわからない……でも、絶対にアイリちゃんを見捨てないよ。ご主人のことも、このままで終わらせはしない……だから、一緒に生きよう…ね？」
カイト「大丈夫、デニーとやらもたたきのめして、絶対土下座させる。アイリ…俺達はお前の味方になるぜ」
アイリ「…ミリアさん……カイトさん…っ」

アイリは、自分を気遣うカイト達を見て、別の意味をこめた涙を流しながらミリアの右肩に顔をやって泣くのだった。

カイト「……デニー…絶対に見つけ出してやるからな…！！」

こうして、悲しみの時間を過ごしたアイリは、ビビを新しいご主人として暮らすことにした。

5話「宇宙へいざなう者」（後書き）

というわけで、オリジナル設定のアイリちゃん追加です。
ご主人は、百合好きのビビがピッタリかなと。

ちなみにアナザーですから、本家がどうするのかはお任せいたします。
もし使うのでしたら、エロティックな活躍と出番を期待してます（ぇ）

6話「触手は消し飛ばす」（前書き）

本家からリク、触手エイリアンネタです。普通にバトルっぽい話です。

6話「触手は消し飛ばす」

またまたある日のこと。

……パターン化してまする。

……

銀八「突然だが、理事長公認の特別テストを行う」
新八「いきなりだなおい！！！」

いきなりテストだそうだ。

銀八「新聞とか読んだ奴ならわかるだろうが、今日の7時に触手モンスター共がどっからか出て来たらしい」
ザック「つまり、そいつを退治しろと？」
銀八「その通り。だが、そいつは変態らしいから手強いぞ」
ノワール「…何？フラグとでも言いたいの？；」
カイト「そんなにやばいのか？」
銀八「でかいって聞いてるからな。まあとにかく、そいつを退治し、かつ活躍した奴には理事長から報酬があるから頑張れよー」

というわけで、カイト達は触手モンスター退治をすることになった。

……

カイト「…とは言われたものの…」
ユニ「どこにいるのかわかんないわよ…」

しかし、居場所は聞かされてないので、どこにいるのかわからない。

ミリア「テストだから、自分で探せっていうことだろうね」
スネーク「けどよ、でかいんだろ？ならすぐに見つかるんじゃねえのか？」
マリオ「だと思うんだがなぁ…」
カイト「…まあ仕方ないか」
ネプテューヌ「むー…こういう探索は面倒くさいなぁ。どうせならパッていきなり現れれば、すっごく楽なのに」
ベール「わからなくはないですけど、テストなんですから文句は言えませんわよ？それに、そう簡単に出て来られたら苦労がないというか…」

しゅるしゅる……ばしっ！

ステラ「きゃあぁぁっ！？」
全員「！？」

叫ぶステラの声を頼りに向くと……

女達「で、出たあぁぁぁーーーー！！？」

ターゲットがいた。
特徴は赤色で、触手がたくさんあるのはもちろん、その内3本には牙がついてる口があった。
見れば、その3本が本体のようだ。

フウ「あわわわわ！？」
クッパ「ほ、本当に出て来やがったぞ！？」
ノワール「ちょっと、ネプテューヌが言ったこと実現したわよ！？」
ブラン「…フラグだった…」
ネプテューヌ「わ、私は悪くないよっ！」
カイト「言ってる場合かよ！！大丈夫かステラーー！！？」

ステラは触手につかまってしまい、動けない。

ステラ「は、離してよー！嫌ぁ！」
ミリア「待ってて！今助けに行くから！！」

だっ！（カイトとミリア突撃）

スネーク「急いで片付けるぞ！！（グレネードランチャー）」
レーティア「ええ！」
ギルシア「いくぜえぇーーーー！！！」

全員が攻撃開始しようとした時…

しゅるるるる、ばしっ！！

ジャンヌ「きゃあっ！？」
レーティア「やんっ！？」
ノワール「きゃあぁっ！？」
ユニ「お姉ちゃん！？きゃあっ！！」
アリス「なっ、うあっ！？しまった！？」
アリア「このっ…ひゃあぁっ！？」

なんと、女の半分近くが触手につかまってしまった。

レオン「くそっ、やはりこの展開か！」
なのは「早く助けなきゃ！」
フェイト「うんっ！」

すぐに助けなければ、１８禁まがいの展開になってしまう。
仲間のため、そして話や表現の都合のためにも全力で奮闘する。

ざしゅっ、ばしゅっ、ばばばばばば！！！

カイト「くそっ、こいつらいくら斬ってもすぐに再生しやがる！！」
ミリア「長引かせてたら不利になってしまう！早く弱点をたたかなきゃ！」
銀時「つっても、どこにあるってんだよ！？」
フェイト「あの3本の頭はどうかな！？そこを攻撃していけば…！」
カイト「よし、考える時間もない！行くぞ！！」

特に奮闘してるカイト達は、頭らしき部分へ向かって斬りこんで行く。
その頃…

アリア「らめぇっ…私を犯していいのはネプテューヌさんだけなのぉおっ！ｖ」
ジャンヌ「んあっ…ｖいいっ、そこがいいのおぉｖ」
レーティア「もう…よほど好きなのね…あんっｖ」
シャリアローゼ「あはあぁぁぁぁっｖ」
その他サキュバスなどの変態女
「あぁん…ｖ」
ギルシア・ザック・近藤・その他変態男
「ハァハァハァ…ｗ」

サボってる奴と楽しんでる奴がいた。

まあそれはおいてといて……

エイリアン「ガアァァァァァ！！！」

スドオォォォン！！！（ヒートビーム）

カイト（よけ）「見切った！そこだあぁぁぁぁ！！！」

ずばあぁぁぁっ！！！

頭らしき1本の触手を、バスタードソードでぶった斬ったカイト。

ミリア「やった！？」

しかし……

ぐにゅぐにゅ…ぐにゅあぁっ！

エイリアン「ガオォォォッ！！！」

カイト・銀時「何っ！？」

ネプギア「そんな…再生しちゃった！？」

なのは「…！もしかして、まとめてたたかないと駄目なのかも！」

フェイト「とにかく、やってみよう！」

ネプテューヌ「ミリア、なのはさん！私達でやってみようよ！！」

ミリア・なのは「うんっ！！」

3人は触手をよけながら、遠くへ離れた。

そして、大攻撃の準備またはチャージに入った。

カイト「よし、俺達はミリア達に触手が行かないように死守!!あと、俺は奴の守りを少しでも崩しやすいように攻撃してみる!!」

銀時「わかった、ヘマすんなよ!!」

カイトはエイリアンの頭へ突っこみ、残りのメンバーはミリア、なのは、ネプテューヌの死守にまわった。

ちなみに…

ヤルオ「ちょっ、僕は男なのにくそみそは嫌だおーーー!!ｗｗｗ」

こいつもつかまっていた。

ずばばばばっ!!!

銀時「おらあぁぁぁぁっ!!!（殺陣）」

ネプギア「えぇいっ!!!（スラッシュウェーブ）」

フェイト「トライデントスマッシャー!!!」

レオン・ガレーナ「でやあぁぁぁぁぁ!!!（突撃型の剣技）」

ヴィヴィオ「やあぁぁぁっ!!!（無双乱舞）」

どばばばばばばばばあぁぁぁぁぁん!!!!!

激戦を背に、カイトは3頭の攻撃をかわし反撃ながら弱点を探す。

カイト「!そうかっ、こいつは……そこか!!うりゃあぁぁぁぁ

ぁっ！！（気功爆裂波）」

ずだだだだぁぁぁぁん！！！

エイリアン「ガアァァァ！！！？？」

カイトは3頭の根本を見抜き、そこに無数の気の斬撃をたたきこんだ。
すると、命中して剥げた部分から黒いオーブらしきものが見えた。

カイト「やっぱりだ！あのコアが再生能力の核だな！！」

カイトは急いでその場から離れ、ミリア達に大声で伝える。

カイト「3人共！！3頭の首根にコアがあった！！！首根を狙うんだ！！！」

ミリア「首根だね！？了解っ！！」
なのは「よし…ミリア、ネプちゃん、いくよ！！」
ネプテューヌ「私の新技、どーんっておみまいするよ！！」

3人の攻撃準備が終わり、勝負の決着に出た。

キュピン！！（カットイン・必殺の光）

なのは「フルバースト・ストライクスタぁぁーーーズ！！！！！」
ミリア「切りさけ風よっ、修羅強風波！！！！！（サイクロンに匹敵する風の波動を撃つ槍技）」
ネプテューヌ「いっけぇっ！！ブレイドバスタぁぁぁぁーーーー！！！！！（力をこめ、すさまじい闘気の剣風を、ディバインバスタ

ーのごとく飛ばす一振りの技）」

どおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！！！！！！！

３人それぞれの技が炸裂。
とてつもなく強力な波動、かまいたち、そして剣風がエイリアンの首根へと飛んでいく。
そして……クリーンヒットした。

ずどがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！

エイリアン「ギギャアアアアアアアアアア…！！！！！」

コアは木っ端みじんになり、それによって触手が次々と朽ち果てていく。
やがて、エイリアンは完全に消滅した。

ネプギア「やった…！！」
ネプテューヌ「わーい！ばっちり決まったよー！♪」
ミリア「ふぅ…これでもう安心だね」
なのは「うん、皆も無事でよかった」
フェイト「３人共、すごくかっこよかったよ」
銀時「お手柄だな。カイトも、よくやりやがったじゃねえか」
カイト「へへ、ありがとう」

がしっ！（手をつかみ合う）

かくして、無事エイリアンは討伐されたのであった。
変態共をよそにして…

ジャンヌ「はあぁ…快・感…ｖ」
レーティア「あーあ…もっと楽しみたかったのに…ｖ」
シャリアローゼ「ほんと、ねぇ…ｖ」
ヤルオ「と、トラウマ…だお…ｗｗ」

……

あの後、エイリアンについての情報が入った。
あのエイリアンは、どうやらハタ王子がペットとしてドーンに作ってもらったものだったのだ。本来なら、かなり小さくして世話するつもりだったらしいのだが、ドーンからの注意をよく聞かずに与えてはいけないエサを与えたために、ハタ王子が不注意で逃がしてしまった後、巨大化してしまったらしい。

で……あとはもう想像できるであろう。
ハタ王子には、またもや厳罰がくだされたのは言うまでもない。内容は理事長に聞くといいだろう。

テストについては、真面目に戦っていたカイト達ＭＶＰメンバーと他多数が合格だそうだ。

ここで、アイリから一言。

アイリ「ペットの不始末は、時として大惨事につながります。皆様も、よく注意しましょう。では、ごきげんよう」

6話「触手は消し飛ばす」（後書き）

バトルを書くのいつぶりかな？
今じゃすっかり、触手・イコール・ムフフ…なんだよね。

次のリク話は、ソラさんからのリクを書きます。

7話「食事の時間」（前書き）

鳴神ソラさんからのリクで、ほんの昼食の話です。特に、マリオについてネタがあります。

7話「食事の時間」

キーンコーンカーンコーン！

昼食の時間

生徒達は食堂に行き、昼食を取る。中には弁当を食べる者もいるため、ここも自由である。
カイトとミリアは、前の学園ではいつも二人だけて食事をしていたが、今はネプテューヌ達をはじめとする皆とも食事をするようになった。二人共、皆で食べるのはとても楽しくて、気がつけば本当に笑顔になることが多くなっていた。
今日も、楽しい時間になるだろう。

……

カイト「もぐもぐ……うん、これもおいしいな！」
ミリア「ほんとだねっ。どれもこれも豪華料理みたいで、すごくおいしいよ♪」
ベール「ふふふ、二人共すっかり気に入ったみたいですわね」
ネプテューヌ「よかったね二人共。これからも、ここで豪華料理をいっぱい食べられるよ」
カイト「あぁ、ほんとに嬉しい限りだよ」
ネプギア「ふふふっ」

やはり今日も、カイト達は楽しそうに食事をしている。
ちなみに、食べているメニューはとんかつ定食。

定食は日変わりで、種類もたくさんある。

ベール「それで、お二人にとってどんなメニューが1番なのかしら？」

カイト「どれもすごく美味しいからなぁ…選びにくいけど、俺はやっぱサーロインステーキ定食が1番かな。デザートならバナナケーキ」

ミリア「ボクはクリームスパゲティだね。デザートの方はフルーツパフェ。特に、ここの特製パフェは1番気入ってるよ。あの味が、とても癖になっちゃって」

ネプテューヌ「でしょでしょ？私もネプギアも、あのパフェが大好きだよ♪」

ネプギア「うんっ」

ベール「確かに、絶対になくてはならないメニューですわね。けど、ティラミスプリンも捨て難いですわよ」

ノワール「あぁ、3日前にあった奴でしょ？あれも悪くないわね」

ユニ「うん、私も同意見ね」

ブラン「…オレンジパイも、イチ押し…」

ラム「あと、ストロベリージュースも♪」

ロム「こくこく…」

わいわいがやがやと話しながら、食べる一同。

そんな時だ。

「んぬぐおぉおあぁぁぁぁぁぁっ！！？」

カイト達「？」

謎の絶叫があがった方を見てみると、新八が顔を真っ青にして倒れ

ていた。
何事だろうか？

銀時「新八いいいいいい！！！」
ザック「おいおいおい！？やっぱやべえじゃねえのかよ、この料理は！？」
ドーン「問題ないのであーる！まずいものほど、栄養もいいものであーる！」
ディケイト「…もはや料理の概念から離れてるな…；」

カイト「何だ？ドーンの奴もいるが…」
ノワール「…またなのね；…この学園に入ってからだけど、ああやってドーンが料理に開発した栄養剤や調味料を入れて、味見させてくるのよ；」
ミリア「え、そうなんだ…？…；」
ユニ「まず自分がしろって話よ…全く」

ドーン「さあ、遠慮はいらないのであーる！味見してみるといいのであーる！」
銀時「誰がんなの食うかあぁぁぁぁぁぁ！！！」
レオン「そもそも、食えそうな外見ですらないと思うが…；」

ドーンが味つけしたであろうコーンポタージュスープは、青色に変色していた。
おいしくなったとは、思い難いはずだ。近くにいる誰もが、青コーンポタージュから引いている中……

マリオ「どうした？いらないんなら俺にくれよ」
銀時・ザック・レオン
「マリオ！！？」
ドーン「おぉ、ぜひ食べてほしいのであーる。あと、ライスもあるのであーる」
マリオ「おぅ、どうも」

なんと、マリオが味つけした２つの料理を受け取ったのだ。

銀時「よせマリオ！！死ぬぞ！！？」
レオン「考え直すのだ！！」
マリオ「？よくわかんねうけど、問題ないだろ？さてと…」
ザック「あああああぁぁぁ！？また犠牲者が…！」

３人の警告を聞かず、マリオは躊躇いなく青いライスと青いコーンポタージュを口にした。
すると…

ぱくっ

マリオ「んぐんぐ…少し苦味がある気がするけど、ちゃんと食えるじゃん」
レオン「何いぃぃーーーーー！！！？？」

信じられないことに、マリオは平気だった。けろっ、とした顔で料理を食べていく。

銀時「おいマリオっ、マジで大丈夫なのか！？後から来るんじゃねえのかよ！？」

マリオ「何言ってんだ？普通に食えるぞ」
ザック「何…だと…？」
マリオ「んぐんぐ…それより、なんか力がみなぎってきたんだけど…どんな味つけしたんだろう？」

ラム「……へ、平気に食べてる…；」
ロム「……；」
カイト「マリオって…実はとんでもなくすごい奴なのか…？それとも、鈍感なだけ？；」
スネーク「気にしない方がいいぞ。あいつはそういう奴らしい」
ミリア「そ、そうなんですか…；」

マリオの胃袋はどうなっているのだろうか？それは謎でしかなかった。

とにかく、昼食もこんな感じで楽しい時間なのだ。

7話「食事の時間」（後書き）

ここのマリオは、テイルズオブエターニアのリッドみたいな気がしますね。

短いですが、これでよかったでしょうか？

カイトとミリア紹介（前書き）

主人公とヒロインについて

カイトとミリア紹介

カイト・ネイラード　　１６歳

グラニデ生まれの少年で、自称不良。
熱血で表情豊かな性格で仲間想いであり、剣技を得意とする。他にも優れた洞察力と読心術を持ち、さまざまな人々の心理を読みとることができる。神や王などの身分も関係なく、いつも私語で話す。ただ、仲間を大切にしようとする気持ちが強いがゆえに、たまに深く考えてしまうことがある。
『力であって力じゃない』という能力があるためなのか、無双できるほどの実力を持つ。カイトとミリアは『心』が根本であると説明しているが、現在ではまだ謎が多い。
ちなみに、ミリアとは双子で恋人同士。

ミリア・ネイラード　　１６歳

カイトと同じ生まれで、よく一緒にいる少女。
明るくて大胆だが心優しい性格で、槍の使い手。魔法も使える。また、カイトと同じく読心術も持ち合わせており、洞察力もかなりのもの。育ちによるものなのか、自分のことをボクと呼び、味方を呼び捨てしない。胸は中クラス。
カイトと同じ能力を持つらしいが、カイトと同じく詳しいことはまだ明らかにされていない。とはいえ、カイトと実力は互角のようだ。
カイトとは双子で恋人同士。
むふふな話をすると、たまにカイトとＨする時があるが、その時は性格が一変して性欲が強すぎるドＭとなる。その淫乱さはサキュバ

スの様らしいが、冷静さはいつでも戻すことができるようだ。
かつて一度だけスケベな男達にレイプされそうになったことがあったが、男達がミリアに触れた瞬間たちまち全身の骨が勝手に折れて動けなくなったらしい。後に、助けに来たカイトに木刀で滅多打ちにされて再起不能になったとか。（死んではいない）
百合についても例外じゃないらしく、『ミリアを抱くことができるのはカイトだけ』のようだ。

8話「模擬戦1（前）」（前書き）

今回はソラさんのリクからで、ソロ対リュウケンドー。
次にミリア対レーティアをやります。

8話「模擬戦1（前）」

キーンコーンカーンコーン！

昼休みの時間

この日、カイトとミリアは運動場に複数の仲間を呼び集めた。模擬戦をやるためで、多くの仲間達が集った。
ちなみに、この日からカイトは鉢巻をつけるようになった。わかりやすく言うと、ＲＰＧツクール２０００～のデフォキャラ・アレックスの黒髪バージョンのように。今後、顔とかをイメージするならば、黒髪アレックスでイメージするといいかもしれない（何の話だ）

さて、そろそろ模擬戦を見るとしよう。

……

１回戦

ソロＶＳリュウケンドー

ソロ「せっかくの機会だ。全力でいくぜ？」
リュウケンドー「手加減はなしだ！」

のら猫『戦闘開始ぃぃぃぃぃ！！！』

ソロ・リュウケンドー「変身！！！」

ぴかぁーーん!!

ソロ・リュウケンドー「いくぜ!!」

……

レオン「早速変身か」
ガレーナ「さて、どんな姿を見れるかな?じっくり見るとしよう」
カイト「変身能力か…」

……

（ここからは実況も入ります）

現在、ソロはライダーゼロイドに、リュウケンドーはゴッドリュウケンドーに変身し、互いに剣をもってぶつかり合っている。

ガンッギンッガッ!!

ソロ「ちぃ…前よりも動きが速くなってやがるな…!!」
リュウケンドー「おらおらあぁぁぁっ!!」
ソロ「だが!!」

がきぃぃん!!（弾く）

ソロ「こっちも負けてねえぜ!!!」

ずがぁぁぁっ!!!（薙ぎ）

リュウケンドー「ぐっ！！」

のら猫『ソロが落ち着いて先制を取ったぁぁ！そのままリュウケンドーへ連続攻撃を仕掛けていくぅぅ！！』

リュウケンドー「負けるかっ！！」

がきぃぃんっ！！（出だしを相殺）

ソロ「止めたか…！」

リュウケンド「俺も伊達に戦ってきたわけじゃないぞ！！！」

ぶんっ、ずがぁぁっ！！（剣を投げる）

ソロ「ぐはっ！！？な、何を…」

ずだぁぁ！！（後ろから戻る）

ソロ「いてっ！！」

のら猫『これはぁぁっ！！？リュウケンドー、まさかのリベンジレイド！！剣を投げ、２連撃を当てたぁぁっ！！』

リュウケンドー「まだまだ！！！ソニックレイヴ！！！」

ずだだだだだだ！！！

ソロ「ぐおぉぉぉっ！！！」

のら猫『さらに連続ダッシュ突きだぁぁ！！これは効いてるぞぉぉっ！！』

ソロ「くそおぉぉっ！！！」

ギンッガンッガンッガッ！！！

……

レオン「負けじと相殺するか。互角だな」
ガレーナ「どちらも引かずに攻撃…うむ、悪くない」
マリオ「あいつら、ほんとよくやるよなぁ」
ルイージ「あ、二人同時に後ずさったよ！」

……

ずざざざーーー！！

ソロ「やるな…っ！」
リュウケンドー「そっちこそ…！」
ソロ「そろそろ本気でいこうか！！」
リュウケンドー「望むところだ！！」
ソロ・リュウケンドー「変身！！！」

キュピーーン！！

リュウケンドー「インペリアル・リュウケンドー！！！」
ソロ「ライダーゼロ・ウルトラフォーム！！！」
ソロ・リュウケンドー「勝負！！！」

……

カイト「また変わった…？しかも強さが変化したぞ！」
ミリア「あれが、ソロ君とソラ君の本気…」
銀時「模擬戦であそこまでやるかぁ…？」
桂「たまにはこういうのもよかろう」

ちなみに銀さん、スイーツにつられました。言ったのはなのはさん。

……

ずがががががががが！！！！
のら猫『これは熱いぃぃぃっ！！！お互いに後ずさることなくラッシュラッシュラッシーーー！！！止まりませーーーーん！！！』

そして25秒後…

ソロ「これで決める！！！」
リュウケンドー「必殺！！！」

だっ！！（リュウケンドー突撃）

ソロ「ワイドゼロショットおぉぉぉ！！！！」
リュウケンドー「超帝王斬りぃぃぃぃ！！！！」

ずどがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！（技同士のぶつかり合い）

……

はやて「うわぁっ！？こっちにまで爆風が…！」

ガレーナ「互いの全力がぶつかり合ったのだ。当然のこと」
ネプギア「勝敗は！？」
ミリア「…！見えた！」

……

爆風がおさまり、そこにあったのは……

ソロ「うげぁ～……（ピヨり）」
リュウケンドー「ふぁぁ～……（ピヨり）」

ピヨってる二人だった。

のら猫『勝負引き分けぇぇぇぇ！！！！』

……

カイト「引き分けだったか…でも、どっちもすごかったな」
マリオ「あぁ、後でキノコ奢ってやるか」
ミリア「変身…か」
シグナム「…さて、次に行こうか」
シャマル「じゃ、治療しに行って来るわね」

……

2回戦

ミリアＶＳレーティア

レーティア「さてと…貴方の戦いぶり、じっくり見せてもらおうかしら」
ミリア「レーティアさん、よろしくお願いします！」

……

ギルシア「レーティアは強いぜ？あの少女に倒せるかな？」
カイト「ミリアは、今までずっと一緒に戦ってきたパートナー。きっと勝ってくれるさ」
ビビ「ミリアちゃん頑張ってー！」

……

構えるミリアとレーティア。

レーティア「ファスシニムとハートローズ、どちらがお好みになるか…大丈夫、たっぷりサービスして、あ・げ・るv」
ミリア「ボクも是非知りたいですね。ならボクは…」

ひゅんひゅん…ばっ！（構え）

ミリア「この木槍で…全力でいきます！」
レーティア「うふふ、燃やしちゃったらごめんなさいね」
ミリア「大丈夫です、これを燃やすことはできませんから！」

のら猫『いくぜ！！戦闘開始ぃぃぃぃぃ！！！！』

だっ！！（ミリア突撃）

レーティア（ミリアちゃんの実力はどれほどかしら？キラーマシン軍団を、カイト君と二人で全滅させたそうだし…楽しみね）

ミリア「やあぁぁぁぁぁっ！！！！」

ぶぅんっ！！！（風牙突が腕をかする）

レーティア（速い…！）

しゅばばばばばばばばばば！！！

のら猫『勢いよくミリアが連続攻撃の嵐いぃぃぃ！！！対するレーティアは、余裕持ってよけまくる！！様子をうかがっているようだぁぁ！！！』

レーティア「そこね！」

ファスシニムでミリアの隙を狙い、ファスシニムでカウンターをはなつ。

ぶんっ！きぃぃん！！（先端を止める）

ミリア「旋風昇竜！！！」

レーティア「！？」

どばぁぁぁん！！！

のら猫『なんとぉぉぉ！！？カウンター返しだぁぁぁぁぁっ！！！』

レーティア（カウンターを読まれてた…？けど、確実に命中するは

ずだったのに…！）
ミリア「逃がさない！！！（瞬連刃、風牙突）」
どばばばばばっ！！！
レーティア「ぐうぅぅっ、あぁぁっ！（逃げられない…カウンターもできない…！！）」
ミリア「流星竜撃！！（気の槍を左手に作る）」
ずがぁぁっ！！（ぶん投げ）
レーティア「きゃあっ！！？」
ひゅうぅんっ、どがあぁぁぁぁぁん！！！！
のら猫『おぉぉぉぉっ！！？気の槍をレーティアにぶつけ、そのまま地面へ落下！！そして爆発したぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！』
……
銀時・桂「！？」
レオン「カウンターをさらに返しただと…？」
ジャンヌ「う、嘘…！？」
ギルシア「へえ…？ちょっとびっくりしたぜ。まさか、接近戦でレーティアが不利だとはな…」
カイト「……」
……
すたっ！（着地）

ミリア「……（構え）」

ひどくダメージを受けたようだが、何とか立ち上がるレーティア。

レーティア「…ちょっと油断したわね……やるじゃない？」

ミリア「…まだ、本気を出してはいませんね？ボクにはわかります。こんなものじゃない…」

レーティア「くすっ、真面目な子ね……ぇぇ、これなら遠慮はいらないみたいね！」

ばっ！（ハートローズ装備）

レーティア「次はどうかしら？ハートローズ、セットアップ！！」

キュピィィーーン！！

……

ビビ「キターーーーー！！！（☆▽☆）（鼻血）」

ギルシア「さあ、ミリアは勝てるかな？」

カイト「……（頼むぜ、ミリア…！）」

……

ミリア「それが…ハートローズの姿…！」

レーティア「さあ、いくわよ！！」

ずだだだだだだだだ！！！！（銃連射）

のら猫『出たあぁぁぁぁ！！！レーティアのハートローズが火を吹くうぅぅぅ！！！ミリア、全速力でよけて突撃いくぅぅぅ！！！』

ミリア（スピードが速くなった…！そして、この弾幕攻撃…！！）

ミリアは銃弾の雨をよけながら、レーティアのまわりを回りながら近付こうとする。下手に攻撃せず、隙をうかがうように。
しばらくそうしていると、一旦攻撃が止んだ。ミリアはその直後に突撃。

レーティア「んもう…ミリアちゃんも、おませちゃんね」
ミリア「風牙突！！！」

ぶぅぅんっ！！！（かわす）

レーティア「今度は見切ったわよ！」
ミリア「と、思う！？」

ずざざっ！！（急ブレーキして返り風牙突）

ずがぁぁっ！！！（右胸の下あたりが破ける）

レーティア「やんっ！？」
ミリア「そこっ！！（火炎槍）」

ごおぉぉぉぉっ！！！（炎の円閃牙）

レーティア「危ない危ない…！（バックステップ後、胸から弾丸をリロード）」

ミリア「行って！！（火炎を飛ばす）」

ぴしゅんっ、どおぉぉぉぉん！！！（クイックジャンプでよける）

レーティア「随分過激なのね…ミリアちゃんったら、いけない子♪」

ミリア「いけない子で結構、否定はしません！」

レーティア「そう……いけない子には、お・し・お・き！！」

ビリリッ！！（胸部分の服を破る）

……

カイト「なっ、何をする気だ！？」

他男達「ブフゥッ！！！（鼻血）」

ビビ「きききききキタァァァーーーー！！！！！」

ネプテューヌ「あれって確か、必殺の奴だよね！？」

ネプギア「ミリアさん、危ない！！」

……

ミリア「弾丸を宙にばらまいた…？」

レーティア「イッツ・ショータイム！！！」

ズダダダダダダダダダダダダダ！！！！！（弾丸の雨）

ミリア「っ！！（さっきよりも激しいっ！）」

ひゅんっ、ひゅんひゅんっ！（かすれていく）

のら猫『ミリア、全速力で走るもよけきれなぁぁぃ！！！このままでは体力を削られる一方だぞぉぉぉ！！！』

ミリア「くっ…受けてたらまずい…！！（１８０度反対の方へワンステップ）」

レーティア「…見えた！もらうわよ！！」

ビシュンッ、ズダッ！！（ピンクの閃光の弾が命中）

ミリア「きゃあっ！！？（しまった…動きを読まれた！？）」

レーティア「サービスよ、受け取りなさい！（さらに2発」

ズダダッ！！！（命中）

ミリア「きゃうぅっ！！？」

レーティア「フィニッシュ・相愛の十字砲！！！」

ずがががあぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！（爆発と同時、ピンクの十字が三重で具現）

ミリア「きゃあぁぁぁぁぁぁぁーーーっ！！！！！」

のら猫『決まったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！ハートローズの象徴が、ミリアに炸裂ううううううう！！！！』

……

カイト「ミリアぁぁぁっ！！！！」

ギルシア「ひゅうっ！クリーンヒット！こりゃ勝ったな」

ネプギア「よけられなかった…！」

ネプテューヌ「…ん？あれ…！？」

……

レーティア「いかがだったかしら？私の…愛の舞は…♪」

爆風が止んでいき、ミリアの姿が見えた。

レーティア「……あら…？」

ミリア「っ……まだ、やれる…！」

なんと、ミリアは大ダメージを受け、姿もあられのないようになってきているのに、立ち上がったのだ。

のら猫『なんとおぉぉーーーーー！！？まだミリアはやられていなかったぁぁーーーー！！！』

レーティア「…嘘…貴方…？」

ミリア「あきらめない…絶対にっ！！！」

槍を回しながら、全速力でレーティアへ突撃するミリア。

レーティア「ま…まずい！？切り札なしじゃ、あの子を止められない！！」

ミリア「修羅風神破ぁぁぁっ！！！！」

強大な風をまとい、牙となりてレーティアへダッシュ突きをはなった。

その速さと風牙の大きさは別格で、逃げようがない。

レーティア「ごめんなさいね、ミリアちゃん！（ある弾をリロード）」

ミリア「やあぁぁぁぁぁぁぁぁあああああっ！！！！！」

レーティア「ローズストリーム！！！！！」

ずどおおおおおおおおん！！！！！（ピンクで宇宙戦艦ヤマト並の波動砲）

……

カイト「！！！！」

ギルシア「どうなった！？」

ガレーナ「ミリアは波動に飲まれたようだが…！？」

……

レーティア「はぁ……はぁ……」

急ぎで撃ったため、息遣いが荒いレーティア。

その目前には、波動に流されはしなかったものの、体力とダメージの限界がきたために倒れたミリアの姿があった。

のら猫『し、勝負ありぃぃぃぃぃぃ！！！！！』

レーティアの勝ちだ。

たったったっ！

カイト「ミリアぁーーー！！」

ギルシア「大丈夫かレーティアぁーー！」

勝負がついたことを確信し、恋人の元へかけつけたカイトとギルシア。
すぐにカイトは、治癒功でミリアを回復して意識を取り戻させた。

ミリア「…あ……カイト君…」
カイト「ミリア…」
ミリア「えへへ…ごめんね、負けちゃった……」
カイト「…いいって、気にすんな。いい戦いぶりだったぜ、よく頑張ったよ」

そう言いながら、カイトはミリアを抱き起こしてあげた。

ミリア「ありがとう、カイト君……そう言ってくれて嬉しい…ボク、また頑張るよ」
カイト「ミリア……」

そして、二人は微笑み合うのだった。
レーティアはというと…

レーティア「ギルシアぁ～！私ぃ、怖かったぁぁ～！」

甘えた声で、ギルシアに抱き着いていた。

ギルシア「よしよし、もう大丈夫だからな。後でいっぱい慰めてやるから」
レーティア「嬉しい…ギルシア…」
ギルシア「レーティア…」

こちらはこちらで、愛モードに突入していた。

銀時「うがあぁぁぁぁぁぁ！！！！お前ら４人共爆発しろおぉぉぉぉーーーー！！！！」

ルイージ「やっぱりカイト君とミリアちゃん、レーティアさんとギルシアさんの後輩にぴったりなんじゃ…；」

模擬戦は、後編へ続く！

8話「模擬戦1（前）」（後書き）

ミリアとレーティアがメインすぎたかも；

後編では、カイト対レオンをやる予定です。

8話「模擬戦1（後）」（前書き）

ノワールＶＳ冥王
カイトＶＳレオン
以上をやります。

8話「模擬戦1（後）」

前回の結果

ソロ対リュウケンドー
（引き分け）

ミリア対レーティア
（勝者レーティア）

……

3回戦

ノワールVS冥王

冥王「私の実力、目に焼きつけるがいいなの！」
ノワール「好きに言ってなさい？私がその自信をくじいてあげる」

……

ネプギア「冥王ちゃんが相手みたいだけど、どうなるかな？」
ユニ「ふんっ、お姉ちゃんが勝つに決まってるわ！」
ベール「えぇ、ここで負けるようじゃ女神の名が廃るというものですわ」
ブラン「…ライバルとして張り合うんだから、勝って当然…」
ネプテューヌ「ノワール頑張ってー！あと、ポロリ期待してるよー

♪」

……

ノワール「みっ、見せないわよっ！！」

のら猫『戦闘開始ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！』

冥王「いくなのっ！！アクセルシュート！！！」

どばばばば！！！（魔力弾）

ノワール「その攻撃はすでに把握してるわ。追尾能力のある魔力弾でしょ？」
冥王「逃げられはしないなの！」
ノワール「ふうん？だったら…」

ずばばばばばっ！！

のら猫『おぉーっと！！？魔力弾を全て斬り捨てたあぁぁぁぁぁぁっ！！！』

ノワール「こうするまでよ（カリバーン装備）」
冥王「まだまだこれからなのっ！！」
ノワール「悪いけど、すぐに終わらせてあげるわ！（突撃）」
のら猫『ノワールが勇ましく突っこんで行く！！短期で決着をつける気だぁぁぁっ！！！』
冥王「だったらこれはどうなの！！！」

ずがががががががががががががががが！！！！（マシンガンのごとく連射）

ノワール「ふふん、まだ甘いわよ！（斬って相殺しながら突っこむ）」

冥王「っ！」

ノワール「今度はこっちの番よ！そらそらそら！！」

しゅばばばばばばばがががががが！！！（攻防）

のら猫『これは激しいぃぃぃぃ！！！ノワールがどんどん攻めるぅぅぅ！！！』

冥王「くっ…調子に乗るな、なのっ！！」

ばしっ！！

ノワール「！！」

なんと、冥王がノワールにバインドをかけ、身動きできないようにした。

冥王「これで、ジ・エンドなの！」

のら猫『これはあぁぁぁぁ！！冥王の定番が来るかぁぁぁぁ！！？』

ノワール（この後に来る攻撃といえば…あれしかない！）

バインドをかけられ、動きを止められているノワールだが、何やら

冷静だ。

冥王「冥王の力、受けるがいいなのっ！ディバイン……」
ノワール（……まだよ。まだ…）
冥王「バズーカぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
ノワール（今っ！！）

どおぉぉぉおーーーーん！！！！！

……

カイト「ん！？」
ミリア「あれ、ノワールちゃん…！？」
ベール「…フラグ、ですわね」

……

ディバインバスーカは、ノワールをあっという間に飲みこんだ。しかし、ノワールは微動もしなかった。

冥王「ふぅ、勝ったなの」
「……私がね」
冥王「え…？」

ずだあぁぁぁぁぁん！！！！！

冥王「きゃっ！！？」

それは一瞬のことだった。
波動は何かに真っ二つに裂され、しかもその何かは冥王に直撃した。

その正体は、ノワールのある斬撃だった。
しかも、ノーマルのノワールではない。

「どうかしら?私のトルネレイドソードの斬れ味は」

……

カイト・ミリア「えっ!?」
ネプテューヌ「勝利フラグきたーーー!」
カイト「あれは、ノワールなのか!?」
ミリア「姿が変わった!?」
ネプギア「はい、あれは女神化した姿です。もちろん、あれはノワールさんですよ」
カイト「まじ、かよ…!?」

……

そう、女神化したノワール・ブラックハートが波動を斬ったのだ。

冥王「うっ…か、体が…っ!」
ブラックハート「さあ、覚悟はいいかしら?必殺、いくわよっ!!」
冥王「!?」

しゅばっ!!(突撃)

ブラックハートは瞬速をもって剣を振るい、冥王に無数の斬撃をたたきこむ。

ずばばばばばばばばば!!!!!!

冥王は逃げることもよけることもできず、ダメージによってひどく重く感じる体で斬撃を受けるしかなかった。

ブラックハート「これが、ハードの剣よ！！！」

ざしゅ、ずばあぁぁぁぁぁぁっ！！！（斬り上げ）

冥王「きゃあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

のら猫『決まったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

どさっ（落下）

ブラックハート「はい、終わりね」

ブラックハートは、倒れている冥王を背にして勝利したと確信した。すると…

冥王「……ま…まだ負けてないの！！」

ブラックハート「あら？立てたのね」

ふらふらと立ち上がる冥王を見て、ほんの少しびっくりするブラックハート。

冥王「私を怒らせたなの…！！全力全開で、そのキレイな顔をぶっとばしてやるなのっ！！冥王をなめるななの！！！」

冥王は魔力をチャージし、フルパワーで波動を撃とうとする。プライドが強いのだろうか。

ブラックハート「あら、それは嫌だわ。……でも、忘れ物があるのよねー」
冥王「そんなの関係ないの！！」
ブラックハート「それが……関係あるのよ」
パチン、と指を鳴らした。
スバッ！！（斬）
冥王「！？」
ズバババババババッ！！！
すると、どういうことなのか無数の見えない斬撃が発生した。それは冥王の攻撃を阻止し、冥王にとどめのダメージを与えた。
冥王「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」
ブラックハート「これが、インフィニットスラッシュよ。堪能したかしら？」
どさっ（倒れた）
のら猫『勝負ありぃぃぃーーーー！！！』
結果、ノワールの勝利は絶対のものとなった。
ブラックハートは元の姿に戻り、自信ありげに冥王に言う。
ノワール「侮ったわね冥王ちゃん。昔から最強みたいだけど、時代は進化してるのよ。もちろん私もまだまだ、こ・れ・か・ら♪（笑顔）」

……

ミリア「す、すごい…！」

ベール「ふふ、そうでなくては面白くありませんわ」

ユニ「ま、当然よね」

ネプテューヌ「さっすがノワール！かっこいいーっ！あと、ナイスパンチラー！」

ネプギア「…え？」

……

ノワール「くすっ、これくらい当然……え？パンチラ？？何言って……」

ふと言葉につられて、下半身を見てみると…

ノワール「……っ！！！？？ちちょ、きゃあぁぁぁっ！！？」

スカートがひどく破けていた。当然、下着も見えているので、慌ててしゃがんで隠そうとする。しかし、それでもギリギリにしかならない。

……

カイト「……；（目をそらす）」

ミリア「あちゃぁ…さっきの波動で破けちゃったんだね…；」

ビビ「ナイスパンチラ…（＊´▽`＊）」

ユニ「あーあ…；」

変態男達「ハアハアハアハア…ｗ」

アイリ「……皆様、鼻血の出しすぎで倒れますわよ？（ジト目）」
ネプテューヌ「大丈夫ー！これでノワールの人気も上がるよー！」

……

ノワール「こんなんで人気者になりたくないわよっ！！もう嫌あぁぁぁーーー！！！（涙目）」

どんまい、ノワール……

……

４戦目

カイトＶＳレオン

今度は、カイトが今日一番にやりたがっていた模擬戦だ。レオンは学園屈指の強者で、カイトはその強者と戦って力をつけようと考えたのだ。
レオンも、その意思を聞いて喜んで受けてくれた。

レオン「いよいよ出番だな…」
カイト「……」
レオン「緊張してるな？」
カイト「…お見通し、か」
レオン「顔にもそう書いてあるぞ。そんな様子で、私に勝てるつもりか？」
カイト「…勝ち負けは気にする所じゃないさ」

落ち着くように言うカイト。

レオン「…妙なことを言うものだな？勝つことが、１つの目標とも言えるのだぞ。あきらめているのか？」

カイト「いや、あきらめてない」

レオン「なら何だ？」

その答えとして、カイトは構えた。

カイト「誰であろうと本気でやる…それだけだよ」

レオン「……そうか」

対して、レオンも構えた。

……

ガレーナ「それにしても、カイトも思いきった奴だな。レオンとタイマンでやり合うなど」

シグナム「ふむ…若いから、か？」

ギルシア「かもな。挑戦したいお年頃か」

レーティア「ふふっ」

ミリア「カイト君…頑張って…」

……

のら猫『戦闘開始いぃぃぃーーーーー！！！！！』

ばっ！

がんっぎんっがんっがんっ！！！ががががががが！！！

始まると同時、カイトとレオンが剣劇を繰り広げる。
見る人からだと、カイトがレオンへどんどん攻撃していき、レオンがうまくかわし続けては反撃するという感じに見える。

カイト「そこか！！（至近距離から魔神剣）」
レオン「甘い！（カウンター）」

きぃぃぃん！！！（ガード）

カイト「くっ！！（攻撃が止まる）」
レオン「はあぁぁっ！！！（無影衝）」

ずがががっ！！！（多段命中）

カイト「がっ！！？」
レオン「まだまだ攻撃も守りもぬるいな！獅子戦吼！！」

どおぉぉん！！！

カイト「ぐあぁぁっ！！！（ふっとぶ）」

ずざざざーーー！！（後ずさりながら立て直す）

カイト「くっ…強い…！」
レオン「そんなものか？それで私とやり合うとは……物足りないぞ！」

今度はレオンが突撃して来る。すぐにまた剣劇になるだろう。

カイト（まだ本気になってない…なのにあの強さ、やっぱただ者じゃない…！）

ががががががが！！！（剣劇）

レオン「どうしたカイトぉ！！！そんなものかあぁぁっ！！！（攻撃）」

カイト（守り）「ちぃっ…！（こんな奴は久しぶりだ…あのバウンサーよりも強い。ただ攻撃するだけじゃ、すぐにやられる…！！）」

がきぃぃん！！！

剣撃の衝撃で、カイトが後ずさった。レオンはもらったと言わんばかりに、大技を繰り出す。

レオン「弱者と長く戦うつもりはない！これで頭を冷やすのだな！」

剣に冷気を宿し、全長５０ｍほほどの大きな氷の刃を作り出した。

カイト「！（力のチャージも早い…！）」

レオンの実力は予想以上。今のままじゃ、勝ち目はない。

カイト（……仕方ない、どれくらい持つか…耐えられるか、博打に出るしかない！！！）

レオン「奥義っ、絶氷巨人斬！！！！！」

ずがしゃあぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！（振り降ろす）

カイト「ぐわあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

……

ミリア「!?カイト君!!!」
ガレーナ「直撃か…終わったな」
ギルシア「まあ、相手が悪すぎたんだ。仕方ないさ」
ネプテューヌ「ううん…違うと思うよ」
レーティア「?」
ネプテューヌ「まだカイトは負けてない…そんな気がするよ」

……

レオン「……まあ、壁を知れてよかったな。強くなったら、またいつでも……ん?」

ぐらっ…(立ち上がる)

カイト「……ぐっ…まだ、いけるな…!」
レオン「何…だと?」

カイトが再び立ち上がり、構えてレオンを睨む。まだ戦えるようだ。

カイト「レオン…俺はまだやれる…!!まだ戦うぞっ!!」
レオン「…ふっ、体力はあるようだな。間違いなく雑魚ではないと言おうか。だが、容赦はしない!!!(突撃)」
カイト「うおぉぉぉぉっ!!!!(攻撃)」

がんがんがががががががかっ!!!!!(剣劇)

レオン(こいつ…少し強くなったか…?力が上がっているような気

がするな…だが！）

きぃぃんっ！！（カイトが弾かれる）

カイト「うあっ！？」

レオン「天地属性乱舞！！！」

レオンは闘気とオーラを7割展開し、属性技をたたきこむ。

レオン「紅蓮！！！烈風！！！地裂！！！氷牙！！！閃光！！！暗黒！！！」

炎の薙ぎ、風の斬り上げ、地のメテオ攻撃、氷の斬り、光の払い、闇の突きが、全てカイトにクリーンヒットする。そして…

レオン「これで終わりだ！！！神雷斬！！！！！」

ずぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！（神の雷をまとうジャンプ斬り）

カイト「ぐあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーー！！！！！」

……

レーティア「また直撃…しかもクリティカル…」

ガレーナ「連続で奥義をまともに受けては…な」

ミリア「…！（これは…まさか…？）」

……

レオン「…この技は本気の時に使うつもりだったが、少し熱くなってしまってな……これなら、無事では…」

ざすっ！（剣を大地に刺す）

カイト「…はぁ…はぁ……ぐっ…まだ、だ…！！」

レオン「なっ！？」

なんと、カイトがまた立ち上がったのだ。すでに体力もわずかしかないのに、まだ戦おうとしている。

……

ギルシア・ユニ「はあぁっ！！？」

ノワール「まだ立ち上がれたの！？」

ネプテューヌ「やっぱり…！カイトはただ者じゃない、絶対にそうだよっ！」

ネプギア「でも、このままじゃ…」

……

レオン「馬鹿な…まだ倒れないだと！？」

カイト「…言っただろ……本気で、戦うって…！俺は…諦めが悪いからさ……最後の最後まで……やらなきゃ、気が済まないんだ…！」

不屈で立ち上がるカイトに、レオンは驚きと呆れが混じった表情で言う。

レオン「愚かな…まだわからないのか！？すでに実力はの差は一目瞭然、勝ちも見えたのにまだやるというのか！？」

カイト「…そりゃ、実力もはっきり…わかってるさ……」
レオン「なら、いい加減あきらめて眠れ！！！」
全速力でとどめをさしに行くレオン。カイトは、それでもまっすぐにレオンを見る。
レオン「抜刀・獣破斬！！！」
カイト「…でもな……」
がきぃぃん！！！（弾く）
レオン「なっ！？」
カイト「全力で戦うことぐらい…できるだろうがっ！！！」
ずどがぁぁぁっ！！！（ぶん殴る）
レオン「ぶほっ！！？（ふっとぶ）」
ずざざざーーーっ！！！（後ずさる）
レオン「ぐっ…何だ…見うなかっ…！？」
言葉の終わりを言わせる前に、カイトが全速力で近付いてレオンに必殺技をはなった。
カイト「でりあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
ずどがあぁぁっ！！！！（薙ぎ）
レオン「がっ…！！？」

ざしゅうっ！！！ばぎぃぃっ！！！どしゅうっ！！！ずどおぉぉ！！！ずばあぁぁぁっ！！！！

薙ぎから払い、振り上げ、振り降ろし、横払い、振り上げと、全力で一撃一撃をレオンに重くたたこみ……

ずどばぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！

レオン「ぐおぉぉあああっ！！！？？」
カイト「魔王七連衝…っ！！！！！」

ひゅぅぅーー、どがあぁぁぁぁぁぁん！！！！

とどめの大振りの斬撃で、レオンを思いっきりふっとばし、壁に張りつけた。

レオン「がっ…はぁ…っ！！私と、したことが……」

どさっ（倒）

のら猫『勝負ありぃぃぃーーーーー！！！！！』

カイト「はぁ…はぁ……ぐっ！……よく、耐れきれたよな…俺……」

くたっ（力が抜けて倒れる）
たったったっ！

ミリア「カイトくぅーーーーんっ！！！」

そこに、ミリアが駆け付けてきて、カイトの回復にあたるのだった。

……

ガレーナ「れ、レオンが……敗れただと…！？」
ユニ「嘘…！？」
ギルシア「まじ、かよ…？」
ネプテューヌ「やったー！カイトが勝ったーー！」
ネプギア「すごい…カイトさん、すごいです！」
銀時「カイトが勝ちやがった…？でも、どうなってんだこりゃ…」
桂「……肉を斬らせて骨を断つ……それで勝ったというのか」
ソロ「？どういうことだ？」
桂「あの実戦的戦法、どこかで聞いたことがある。あえて攻撃を受けて痛みを溜めることで能力を高め、そして相手に攻撃を当てて倒す。痛撃剣という剣技だったか…」
銀時「じゃああれか？レオンの攻撃をあえてくらって、倍返しで反撃したってのか？」
桂「間違いあるまい。さらに、カイトやミリアには心の力なる素質があると聞いている。カイトの場合、痛みだけでなく闘気も高めたのではなかろうか」
銀時「…妙な力だなぁおい」
桂「カイト達には謎が多い……我々とは違う所を見ている上、何かがまだあるのだろうな」

かくして、カイト達や観客達はそれぞれの感想を持ち、模擬戦は終わったのだった。

戦いに終わりはない。

8話「模擬戦1（後）」（後書き）

カイトはレオン達よりも実力は平均的に下、されど絶対に勝てないわけじゃない。
そんな感じに書いてしまいました。

もちろん、これで終わりはしないでしょう。

9話「ホラーケーキ騒動」（前書き）

本家からリク、サチコ達のホラーネタです。またやらかしました。

9話「ホラーケーキ騒動」

時刻はすでに２２：００。
もうすぐ寝る時間だ。
普通ならば休まる時間になることが多いが、時として恐怖の時間にもなりえる時がある。

そう、ホラーもその１つだ。

で、今夜はそのホラーが待っているのだった……。

……

銀時の部屋にて

銀時「……Ｚｚｚ」

ぐぐっ…

銀時「ん……うーん……重てぇ…」

寝ている銀時に、重みか加わった。

銀時「……ん……何だぁ…？寝かせろよ……」

そう言いながら、目を開くと……

サチコ「…ぁぁぁぁぁ……」

血涙のサチコの顔が、顔面から１０ｃｍ離れた所にあった。

銀時『ギャアアッ！！！！！！』

………

サチコ「キャハハハハ！今日もやっちゃったー♪」
雪「あのパーマなおじさん、ほんっとからかいがいがあるね♪」
時子・遼「ねー♪」

そう、さっき銀時が絶叫した原因はこの子達だ。サチコ達は幽霊でありながら、学園の生徒として生きている。
だが、たまにサチコ達はイタズラする癖があるらしく、よくこうして他の皆に恐怖あるいはトラウマを与えているのだ。
今夜もまた、また誰かが恐怖する…

………

廊下

はやて「んー…なのはちゃんどこ行ったんかな？ラムちゃんとロムちゃんを探しに行ってから、なんや時間かかりよるみたいやけど…」
フェイト「また、お話ししてるんじゃないかな？またほとんどがイタズラされたわけだし…」
はやて「せやなぁ…」

なのはを探し歩いているフェイトとはやて。すると…

『ふふふ…』

フェイト「!?」

はやて「フェイトちゃん?どないしたん?」

フェイト「い、今…あの声が……」

『あはは…』

はやて「っ!?……こ、これはまさか…!?」

フェイト「ど、どこにいるの…!?」

かつて、声の主によって恐怖したことがあるフェイトとはやては、あたりを見回す。どこを見ても主らしき姿は見えない、と思っていると……

ぽんっ

フェイト・はやて「ひっ!!?」

肩に誰かの手が乗る。フェイトとはやての顔が青ざめた。

恐る恐る振り向くと…

時子・雪「うぅぅぅなぁぁぁ……」

血とホラーとややグロな顔があった。

フェイト・はやて『嫌あああああああああああああああああああああ
ああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！』

彼女達は、またもや恐怖に屈したのだった。

………そしてその後も……

新八『ギィヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアア！！！！！』

ザック『シギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア！！！？？』

ムッソリーニ『ウギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア！！！！！』

スバル・ティアナ『いぃぃやあぁぁぁあああああああああああああ
ああああああああ！！！！！』

近藤『お妙さあああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああん！！！！！！』

恐怖はどんどん広がり、トラウマとなる…

………

なのはの部屋前

ミリア「あれ？ヴィヴィオちゃんが入口にいる…でも、何で震えて…？」

サチコ「あ、あそこにいるのって……ミリアお姉ちゃん？」
雪「…ねえねえ、ミリアお姉ちゃんにもやってみようよ！」
遼「いいねいいね！どんな風に怖がるのか楽しみ♪」
時子「じゃあ早速…」

サチコ達は、後ろからゆっくりミリアに近付く。ある程度近付き、不気味な笑い声をかけ……

ヴィヴィオ「なのはママなんかっ、大っ嫌い！！！！！」
サチコ達「え？」
ミリア「あ、ヴィヴィオちゃん待って！」

…ようとしたら、いきなり部屋の入口にいたヴィヴィオが叫び、泣きながら走り去って行った。
一体何事だろうか？
ミリアが心配しながらも部屋に入ったので、サチコ達も入口に行ってみた。
そこには、ヴィヴィオから突然嫌われたであろう言葉をかけられてショックを受けたなのはと、悪戯をしていたからか何なのか、なのはにお話をされてガクブルしているラムとロムの姿があった。

サチコ「え…何？何何？？」

なのは「あ…ぁ……！？」
ミリア「な、なのはさん…？」

がくっ（膝ついて座りこむ）

なのは「……私…間違ってたんだ……私、どうして…こんな…っ」

ミリアの呼びかけは耳に入らず、なのははただ自分を責めることばかり言い続けている。混乱しているのだろうか。

ミリア「なのはさん、落ち着いてください！自分を責める前に、まず落ち着かないと！」

壊れたレコードのようにつぶやくなのはと、とにかく落ち着かせようと必死になっているミリア。
何この突然なシリアスは？

たったったっ！

ネプギア「ミリアさん！どうかしましたか！？さっきヴィヴィオちゃんが、泣きながら走ってましたよ！？」

ミリア「ネプギアちゃんっ、なのはさんが混乱してるの！ちょっと落ち着かせてあげて！ボクはネプちゃんと一緒に、ヴィヴィオちゃんに話を聞いてくるから！」
ネプギア「はい、わかりました！」

たったったっ…！（行）

ミリアは行ってしまい、サチコ達は影のように残されたのだった。

サチコ「……ど、どうしよう…？」

雪「…空気読んで、別の人の所に行こっか」

何だか怖がらせてはまずいとも思い、部屋を後にした。

……

あれからも、サチコ達は獲物を探し続けているが、さっきの場面を見たせいか気乗りしない。

雪「ねえ…今日はもうやめにする？なんかやる気出ないよ…」

サチコ「……なんか、私達…悪いことしたのかな…」

時子「わかんない…ただ、からかってるだけだし…」

そう言いながら歩いてると…

「おい、そこの４人！」

サチコ達「！？」

なんと、カイトと出会ってしまった。

カイト「やっと見つけたぜ…お前達だろ？皆に迷惑かけてるのは」

カイトは怒った顔で、サチコ達に言った。反射的にホラーの顔もしたのだが、カイトには通じない。

サチコ「な、何のこと？私達は何も…」

カイト「嘘言うな！さっきフェイトさん達からも聞いたぞ。サチコ達がそうやって皆を怖がらせて、トラウマを植え付けてるって。あちこちで絶叫がして眠れない人達もいるんだぞ」

雪「うぅっ…」

カイト「まさかとは思うが、さっきヴィヴィオを泣かすきっかけを作ったのもお前達じゃないだろうな…？」

怒りをさらにこめたように言うカイトに、サチコ達は必死で自分達の無実を訴えた。

サチコ「ち、違うよっ！私達は何もしてないよ！」

雪「確かにからかってたけど、ヴィヴィオちゃんには何もしてないよっ！」

カイトはその言葉を聞き、少し考えた。

カイト「…なるほど、本当らしいな。良心はあるか」

だが、と言いながら表情を戻す。

カイト「サチコ達が迷惑をかけてることに変わりはない。もしそうやってからかって、冗談抜きで立ち直れなくなったり、変貌しきってしまう人が出たらどうするんだ！ほっとくのか？」

サチコ「そ、それは…！」

そんなことしたくない、と言いかけるが、カイトが言葉つないだ。

カイト「嫌だろ？俺だって嫌だよ。そんな悲劇は起きてほしくない」

片膝を突いて座り、少し怒り顔をゆるめて言う。

カイト「二度とするなとは言わない。けど、皆心を持ってるんだ。だから……困らせたり、いじめるようなことはしないであげてくれ……頼む」

まるでお願いするように言うカイトは、サチコ達を思って言ってることを感じた。
あとは、素直な言葉を言うだけだ。

サチコ達「…ごめんなさい…」
カイト「……うん、わかってくれればいいんだ」

心からの謝罪を受け止め、カイトは微笑んでサチコ達の頭を撫でてあげた後、立ち上がった。

カイト「それじゃあヴィヴィオのことについては無関係だし、もう行っていいぞ」
サチコ「あの…何があったの？」
カイト「さっきミリア達から聞いたばかりだけど、何でもヴィヴィオがおやつにとっておいたケーキを食べられたんだと。で、犯人がなのはさんじゃないかって所まで話が進んで、詳しく話を聞き回ってたんだ」
サチコ「おやつ…？……あ、そういえば…」
カイト「ん？何か知ってるのか？」
サチコ「さっき、パーマのおじさんをからかう前に、なんかラムちゃんとロムちゃんが皿とフォークをおじさんから取ったのを見たような……」
カイト「銀さんから…？？」

詳しく聞こうとしたら、ミリアとネプテューヌがやって来た。

ミリア「カイトくーん！真相がわかったよー！」
カイト「ミリア、ネプテューヌ！それは本当か？」
ネプテューヌ「うん、ラムちゃんとロムちゃんが言うにはね、銀さ

んがヴィヴィオのケーキを勝手に食べようとしてたのを見て、二人は取り返そうとしたんだって」
ミリア「でも、ケーキは取り返し際にこっそり食べられて、皿とフォークしかなかったらしいの。その後なのはさんに連れて行かれて…」
カイト「…つまり、なのはさんは濡れ衣を着せられたってことか…」
たったったっ…！（来）
ネプギア「ミリアさん！監視カメラの映像を携帯映像機に入れて持って来ました！」
ビビ「証拠もばっちり映ってたよ！」
ミリア「ありがとう、早速見せて！」
ビビ「了解、スイッチＯＮ！」
カチッ
映像には食堂が映し出され、そこには皆で利用している冷蔵庫から、ケーキを取り出している銀時の姿があった。で、聞いてしまったのだ。
『ん？そういやヴィヴィオのおやつがあったらしいが……まあいいや、別に食っちまっても後からどうにでもなるし。よし、このケーキは絶対に食うぞーっ』
と。
後はもう話の通りである。

カイト達「……」
サチコ達「……」

黒幕は、間違いなく銀さんだ。

カイト「……サチコ達、これからやるべきこと…わかるよな？それで今回はきっちり水に流そう。いいな？」
サチコ達「（しゅばっ）イエッサー！！」
ビビ「私も行くであります！」
ネプテューヌ「よーし、皆行くよー！」
ビビ・サチコ達「おぉーー！！！」

ざっざっざっざっ…！（行）

カイト「…さて、あとはなのはさんとヴィヴィオ、ラムとロムを仲直りさせるだけだな」
ミリア「そうだね、行こっ」

……

銀時の部屋

銀時はさっきまでビクビクしていたが、今はまたぐっすり眠ろうとしていた。

だが、それを許しはしなかった。

ぐぐ……

銀時「ん……ん…何だ？体が動か……」

ざすっ！！（顔の横にナイフが刺さる）

銀時「んのおぉぉぉぉ！！？ななな、何だこりゃ！！？」

何事かびっくりしていると、前に騎乗してる少女がいた。顔を血で少しメイクして、病んだような目をしている少女が。

ビビ「アハ、アハハハハハハハハ………ヨクモ…ヨクモナノハチャンとヴィヴィオチャンヲ泣カセタナ…？許サナイ…許サナイ、許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイ許サナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイユルサナイ…」

銀時「ぬおあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？ててて、てめっ、何やって…ひぃぃぃぃぃぃぃぃーーーーー！！！？？」

左にはグロテスクな顔の雪、右には首が回りまくる遼、布団から7つ目の時子、そして……

サチコ「アァァァァ……」

顔面には血まみれのサチコ。

ここでアイリからお言葉。

アイリ「皆さん、何であろうと悪いことばかりしてはいけませんわよ？でないと、幽霊が貴方の心を恐怖と絶望でいっぱいにしに来ることになりますわ。……あ、なのは様達については、ちゃんと仲直りしましたわ。では、よい夜をお過ごしくださいませ……」

ビビ達『くけけけ！！！！！』

銀時『ギイィィィイイイヤアァァァァァアアア！！！！！！！！！』

9話「ホラーケーキ騒動」（後書き）

どうしてこうなった？
銀さん…すまぬ！（キリッ）

１０話「罪悪感と後悔・次戦に向けて」（前書き）

なのはの苦悩と、おまけとしてレオンの意気込みのシリアス話です。

本家につなげようか、それともうちで続きを書こうか悩んでたらこれを書いてました。

１０話「罪悪感と後悔・次戦に向けて」

それは、ホラーケーキ騒動後の翌日のことだった。

銀時ラバーズ「銀さ（時）ーーーーーん！！」
銀時「ぎやぁぁぁぁぁぁ！！！！」

また銀さんを追いかけ回している銀時ラバース。しかし、今日は１人だけラバースにいない者がいた。

屋上で銀時達を見ているなのはだ。
その表情は、ひどく暗かった。

原因は、あの騒動だ。
あの騒動で、自分の勘違いでラムとロムを脅し、その後ヴィヴィオにも一時の間だが嫌われてしまった。

大嫌いという言葉はトゲとなり、なのはの心に深く突き刺さった。
なのはは、これによって嫌な気持ちが残っているのだ。
さらに、あれからなのはは考えた。学園で仲間達と過ごしてきた日常を振り返って、これまでの自分の行いが思い浮かんでくる。
考えてみれば、自分はあの騒動に限らずいろんな場面でこんなことをしてきた気がする。
前にもラムやロム、他にもいろんな人達にも脅しをかけていたことがあった。ほとんどが些細なことで怒り、すぐに魔力をもって脅し

ていた。
小さい頃はそんなことはあまりなかったのに、１９歳あたりになってきてから、そうすることが多くなった。特に、変わってきたのが銀時達と出会ってから。

思えば、いつからこうなったのだろうか？
いつから沸点がこんなにも低くなり、大人げない人間になったのだろうか？
いつから自分は、こんなに醜くなったのだろうか？
魔王や冥王と呼ばれることは、別に構わない。だが、そんなことなど関係なく、自分は悪い意味で我が儘になって迷惑をかけるようになったことが、罪悪感を大きくする。

もう、自分は手遅れなのかもしれない。本当の意味で、悪い魔王に成り果てているのかもしれない。
このままいけば、間違いなくどうしようもなく救いようのない人間になってしまいそうで…恐れている。

ビビ「なのはちゃん？こんな所で何してんの？」

そんな時、なのはの元にビビがやって来た。

なのは「…ビビちゃん…」
ビビ「どうしたの？あのパーマおっさんを追いかけないの？」
なのは「……追いかける気にならないよ……」

首を振り、暗い表情でそう返した。そんななのはに、ビビは様子がおかしいと思った。ここにいる普段のなのはなら、明るく元気にいて、たまに銀さんに夢中になったりするはず。
それなのに、今日のなのははは違う。それはビビにもはっきりとわか

った。

ビビ「なのはちゃん、本当にどうかしたの？いくら何でも暗すぎだよ」

なのは「……ちょっと、考え事してて…」

ビビ「…こないだのヴィヴィオちゃん、ラムちゃん、ロムちゃんとのこと？あれはもう仲直りしたんでしょ？謝罪までして…」

なのは「確かに仲直りはしたよ。でも……だめだよ…」

ビビ「え？」

騒動のことはそこまで気にしてはいないようだが、それでもなのは暗かった。

なのは「私…あれから考えたんだ。今まで皆と過ごしてきて、私はどんな風に振るまってきたのか……本当、今更かって話だよ…」

ビビ「なのはちゃん……」

なのは「ビビちゃんも見てきたでしょ…？いつも些細なことで怒って、すぐ魔力で脅して……私が、我が儘に振るまってきた所、全部…」

ビビ「そ、それは…ただ皆と楽しく馬鹿騒ぎする一環でしょ？」

なのは「…ううん…そんなんじゃなかった……私は、誰もが例える暴君同然なんだよ…」

ビビ「っ！」

暴君、その言葉にビビは心から否定した。

ビビ「そんなことないよっ！！なのはちゃんは、あのエリート学園のくそ男共やダヌのような奴らとは全然違うっ！！なのはちゃんは優しいんだよっ！！」

なのは「…その優しいって、どういうことなの？」

ビビ「え…？」

優しいということに、なのはは深く聞いてきた。ビビは、答えることができなかった。

なのは「……ごめん、嫌なこと聞いちゃったね。……私、もう少し頭を冷やして来るね…」

そう言い、ビビの横を通り過ぎて学内へ戻っていった。

ビビ「……なのはちゃん…」

ビビは振り返り、ただ見送ることしかできなかった。

……

15：30

教室

カイト「え？なのはさんの様子が暗かった？」

ビビ「うん…何だか、いつものなのはちゃんじゃなかったの。励ましてあげても、ネガティブなままで…」

ミリア「…そういえば、今日はなのはさんが目立とうとしてなかったね」

ネプテューヌ「何か嫌なことでもあったのかな？」

ビビ「嫌なことがあった…というより、自分を責めてるみたいだった」

ネプギア「どうしてですか？」

ビビは先ほど聞いたことを、ありのままに話した。

ビビ「なんかね、今まで私達と過ごしてきて、自分はまるで暴君だって…」

ネプテューヌ「暴君って…それはいくら何でも大げさだよ？」

ビビ「うん、私もそんなことないって言ってあげたんだ。でも…自分は醜いみたいに言ってばっかりだったよ…」

カイト達「……」

カイト達は少し沈黙した。なのはが、急にそんなことを言うなんて信じられなかったのだ。

ネプギア「なのはさん……まさか、昨晩のことをきっかけに悩んで…」

ビビ「……してない…って言っても、嘘なんだろうね……なのはちゃんを魔王のように見る人が多いのは現実だし…」

馬鹿騒ぎのためにあるつもりだった魔王要素が、よもやこんなことになるのは誰も思ってはいなかっただろう。

カイトとミリアも、ビビ達の気持ちを痛いほどに感じていた。

カイト「……何にしても、なのはさんは自分を見つめ直してるんだな…きっと」

ヴィヴィオ「…ママ…」

今にも泣きそうな表情で心配するヴィヴィオ。

ミリアは、ヴィヴィオを悲しませないように撫で撫でしてあげた。

ミリア「大丈夫だよヴィヴィオちゃん。なのはさんを放っておかない…ちゃんと助けてあげるから、ね？」

ヴィヴィオ「…うん…」
カイト「とにかく、今はなのはさんの様子をしっかり見ていよう。できるだけ相談もしてあげるようにな」
ビビ「うん、わかった」
ネプギア「他の皆にも伝えましょうか？」
カイト「あぁ、それがいい。理事長には、ネプテューヌが伝えてくれ」
ネプテューヌ「了解、任せて！」

話がまとまり、ネプ姉妹はすぐに行動に出た。

カイト「あとはフェイトには……ビビから伝えた方がいいな」
ミリア「頼めるかな？なのはさんの心を癒してあげられるのは、もしかしたら…ヴィヴィオちゃんとフェイトさんだけかもしれないから」
ビビ「わかった、任せといて！…で、銀時も必要？」
カイト「いるとずっといいだろうけど…かえって逆効果になる可能性も否定できない。伝えたいなら伝えてもいいけど、できるなら最終手段にしよう。今回は、銀さんを夢中に追いかける自分についても責めてるだろうからな…」
ビビ「そう…わかった」
ミリア「…あ、言い忘れたけど、ビビちゃんもきっと鍵であるはずだから、お願いね」
ビビ「…うんっ、絶対に元気にしてみせるよ！」

ビビはそう意気込み、ヴィヴィオを連れてカイト達から離れた。

カイト「…俺達にできることは、これくらいしかない…」
ミリア「あとは、皆を信じるしかない……皆、お願いね…」

なのはを救えるのはフェイト達だけ。
カイト達は、信じるのみであった…

……

その日の夕方…

レオンはいつも以上に厳しい修行をしていた。
カイトにまぐれであっても負けたことから、さらなる強さを求めているのだろう。

レオン（…カイト……私はお前を侮っていた……だが、このまま終わるつもりはない……次は、勝つ！！！）

次なる戦いは、すでに約束されている。

１０話「罪悪感と後悔・次戦に向けて」（後書き）

というわけで、これまじでどうしよう；；
なのはの魔王ネタについて考える答えはここで出すか、真王さんに出してもらうか、それともどちらでもやるべきか……

11話「赤ちゃんの世話」（前書き）

本家より、赤ちゃんネタです。どう書けばいいのか、よくわかってません；

11話「赤ちゃんの世話」

キーンコーンカーンコーーーン！

１０：００

銀八「さて、今日はお前達に頼みたいことがある」
ネプギア「頼みたいこと？」
銀八「今日一日、リルの面倒を見てほしい」
カイト「何で？」
銀八「実は、理事長がまた転校生への挨拶のために出張されてる。そこで、帰って来るまでお前達に面倒を見てもらいたいってわけだ」
ザック「そうなのか。けどリルは…」
銀時「冗談じゃねえ…何でガキンチョの面倒を見なきゃいけねえんだよ。ギルシアとレーティアに頼めばいいだろ？」
ブラン「二人は有休取って夫婦旅行に行ってる…」
ベール「赤ちゃんは預けておいて、二人っきりで羽をのばしたいらしいですわ」
一部「えええぇ～…；」

いつも面倒を見てる理事長も、夫婦もいない。赤ちゃんを二の次にしてないか、気になる者が何人かいたそうな。

銀八「まあとにかく、任せたぞ」
ネプテューヌ「ちょっと、まだ先生達がいるじゃん？」
ネプギア「そうですよ、手伝ってくれないんですか？」
銀八「先生達は事務で忙しいので、手は離せません！」
ネプテューヌ「のんびりしてる先生達も見かけるけど？特に銀八先生」

銀八「先生にだって、休みは必要です！ゆとりの時間は取るべきです！」
ネプギア「その時間を少しでも世話に使ってくれないんですか？」
銀八「……」
しばらく沈黙する銀八。
銀八「……とにかく、リルの世話は頼んたぞ！以上っ！」
全員「逃げた！！？」
銀八はリルを置いて逃げました。
ここでネプ姉妹は言うのだ。
ネプテューヌ「…大人って、汚いよね…」
ネプギア「うん…私も、あんな汚い大人にはなりたくないよ…」
……
銀八「大人はね、ずるいんだよ…（黒）」
……
というわけで、リルの世話をすることになったのだ。
リル「あう～」
ミリア「結局、世話することになっちゃったね（だっこしてる）」
ノワール「仕方ないわよ、大人は汚いんだし」
カイト「そうだな……こうなったら、しっかり面倒見るしかねえよ」
アイエフ「はぁ…汚い大人には困ったものね」
銀時「…お前ら、汚い大人言うのやめようや」

銀時も一応は大人である。聞いてると嫌に聞こえるのだろう

コンパ「とにかく、リルちゃんもいい子ですから、優しくしてあげるだけでもきっと大丈夫です」

ミリア「そうだね。リルちゃんはいい子だから」

銀時「へっ、どうだか。とにかく、俺は関わらねえからな。ガキンチョの世話はお前らに任せ……」

ドフォォッ！！！（サイコパンチ）

銀時「ぶっ！！？（殴られた）」

ずざざざーーーっ！！！（地をはいながらふっとぶ）

ミリア「あ……」

リル「きゃは～♪」

カイト「…頭いいんかな。ガキンチョって呼ばれたのが嫌なんだな」

銀時「…ぜ、ぜってー関わらねえ…ぞ…がくっ」

銀さん、どんまい。

……

昼食の時間

リルにはミリアが常につくことになり、食事もミリアに任された。

ビンに入れたミルクを用意し、リルに飲ませていた。

ちゅく、ちゅう、んぐ、んぐ…

リル「あうー♪」
ミリア「ふふっ、おいしいんだね♪」
リル「わうー♪」
ネプギア「なんか、すっかり懐いてますね」
カイト「あぁ、ミリアも楽しそうにしてるよ」
ネプテューヌ「まるでお母さんみたい」

ネプ姉妹も、見ていて和んでいる感じだ。

カイト「ミリアが母さん…か。確かに、ミリアは俺達の母さんによく似てるからなぁ」
ラム「そうなの？」
カイト「あぁ…今度また話すさ」
ロム「…楽しみ…」

楽しく話しながら食事をするカイト達。ところが…

リル「～？」
ミリア「？どうかしたのリルちゃん？」

リルが銀時達がいる方へ向き、指をさした。

ぶわっ！

銀時「ぬおあぁぁぁぁぁっ！！？俺の箸に花が咲いただとぉぉぉぉぉ！！？」
ザック「げえぇぇーーーー！！？キノコ箸になりやがったあぁぁぁーーーー！！？」
近藤「バナナ箸ぃぃーーーー！！？」

なんと、銀時やそのまわりにいる人達の箸に超能力が働き、変なものが生えたり変化した。

リル「あう～♪」

それをやったであろうリルは、とても面白そうに笑っていた。

カイト「…なんという悪戯…；」

ミリア「か、変わった悪戯するんだね…；」

これは怒るんじゃないかと思った二人。

銀時「…か、関わらねえ…関わらねえぞ…っ（プルプル震えてる）」

犯人が誰なのかはすぐにわかり、怒りが一気に込み上げてくる銀時だが、耐えているようだ。

……

１４：００

休み時間

リル「あう～」

リルは元気そうに笑っている。ミリアも、リルのご機嫌に合わせて会話している。

銀時「あーーーったく、イライラする！」

カイト「まあまあ、落ち着きなよ銀さん。関わらないなら攻撃とかそんなにして来ないんだからさ」
銀時「…さっき思いっきりガキンチョからして来やがったわけだが？つーか、俺にばっか悪戯して来やがる…」
ビビ「日頃の行いが悪いからでしょ？最近、追試とか受けてるらしいし」
マリオ「あと、掃除さぼってるらしいな？」
アイエフ「言ったらきりがないからやめときましょう。汚い大人なんだし」
ブラン「汚い大人はそういうもの…」
銀時「だから汚い大人言ってんじゃねえぇぇぇ！！！」

銀さんは汚い大人で決定か。

銀時「ったく…さっさ授業終わんねえかな…」

イライラしながら寝ようとする銀時。ところが…

ビビビビビビ…

銀時「ん？」

ぶばあぁっ！！！

またもやサイコパワーが発動したようだ。銀時の服が脱げ、上半身裸になった。

銀時「ぬおおぉぉおおおあああああ！！？」
ミリア「あ、また…；」
リル「キャッキャ！」

ビビ「ぷっ…うわっ、何やってんのおっさーんｗｗ」
神楽「何やってるアルか。銀ちゃんいつから裸好きになったアルね？」

ビビと神楽は銀時の姿を見て、銀時を変に見た。さらに、それにつられてまわりの何人かも変に見て引いたり笑ったりした。

ぷつん、と切れた音がした。

銀時「うがあああぁぁぁあああああっ！！！！俺が何したってんだごるあぁぁあああああああああっ！！！！」
カイト「あ、流石にキレた…；」
新八「ちょっ、銀さん落ち着いてください！悪気はないんですから…」
銀時「うるせえええぇえっ！！！！悪気ありまくりだろうがぁぁぁぁぁぁっ！！！！あのクソガキアァァァァ！！！！」
ミリア「ちょっ、銀さん！？」

だっ！！（近付きだす）

銀時「そいつをよこせミリアあぁぁっ！！！！クソガキにお話をしてやらあぁぁぁぁぁっ！！！！」

銀時は暴走をし出してしまったようだ。リルからの悪戯に我慢できず、ついに激怒した銀時はミリアからリルを取ろうと近付く。
その怒り顔を見たリルは…

リル「……ぁ…あぅ…あ…」
カイト「ん！？」
ミリア「いけない！？銀さんそれくらいにしてあげて！このままじ

や…！」

銀時「いいからよこせえええええええええええ！！！！！」

くわっ！！（鬼顔）

リル「びえぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーーー！！！！！」

ごおぉぉぉぉおおおーーーーー！！！！！（騒音）

ほぼ全員「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

ついにリルは泣き出し、地獄をもたらす泣き声が全員に襲いかかった。

……

１５：１０

結局、リルの泣き声騒動を未然に防ぐことはできなかった。

泣き続けるリルを止めるために先生を呼ぶはめになり、イストワールの子守唄のおかげでやっと泣き止んだのだった。ちなみに、それまで２０分もかかったらしい。

ミリア「うん、ぐっすり眠ってる…（だっこ）」

ネプテューヌ「ありがとういーすん。おかげで助かったよ」

ネプギア「ごめんなさい…授業の時間まで削ってしまって…」

イストワール「いえ、気にしないでください。慣れてない皆さんに押し付けてしまった私達がいけなかったんですから。ようやく急ぎの仕事が終わりましたので、後は私達に任せてください」

ネプギア「はい…ありがとうございます」
ミリア「それにしても、さっきの子守唄はすごかったですね。あっという間に泣き止んじゃいましたよ」
イストワール「プラネテューヌの誰もが使うほどですからね。ネプテューヌさん達が今よりも小さい頃に、よく歌って寝かせてたんです」
ミリア「へぇー…そうなんですか」

ミリアは子守唄の話を聞いて、不思議な子守唄なんだなと思った。

カイト「それにしても、リルはいろんな意味ですごい子だよなぁ…」
…さしずめ、パワフルベビーみたいだよ」
イストワール「くすっ、確かにそうですね。でも、どんなにすごい能力があるとしてもリルちゃんの心はまだまだ可愛い赤ちゃんそのもの…これからの将来は、もっとすごいかもしれませんよ」
ミリア「そうかもしれませんね。…ふふ、楽しみだなぁ」

わくわくするようにミリアは言う。何だかんだで、リルの人生はまだまだこれからだ。

……

イストワール「ところで、銀時さん？以前の追試、また不合格でしたよ。今日は補習をしますので、逃げないでくださいね」
銀時「……ｏｒｚ」

11話「赤ちゃんの世話」（後書き）

リルは本家で大人化できるようになってますが、今回はなしにしてみました。というか赤ちゃんキャラの方が通しやすいので、あまりやらないかもしれません。

１２話「平和。転校生もあるよ」（前書き）

普通の日常話です。あと、こちらのメインキャラ追加いたします。

12話「平和。転校生もあるよ」

10：00

キーンコーンカーンコーーーン！

時は、なのはの苦悩が起こしたハートレス事件から2日後。
かつて、復活したエリート学園への殴り込みでカイトとミリアがネプテューヌ達に心から受け入れられた時のように、なのはもより心を開くようになった。

今日もまた、平和な1日が始まる…

……

銀時「てめえらあぁぁぁぁああああ！！！！」
ラム「わーっ、銀さんが怒ったー！♪」
ロム「くすくす…（笑）」

ラムとロムに、顔に落書きをされてムッカムカの銀時。
もちろん、他の人もこの通り。

ブラン「またやりやがったなてめえらあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」
ギルシア「また真っ黒か！」

新八「せっかく手に入れたお通ちゃんの消しゴムがあぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

ザック「お前いつから眉毛こゆくなったんだ？」

マリオ「お前こそ、ヒゲあるぞ」

カイト「うわぁ…またやっちゃってるなぁ；」

もちろん、カイトもびっくりしていた。

そこに、なのはが二人に声をかけた。

なのは「こらっ、二人共皆を困らせちゃだめじゃない。後が大変なんだから、やめてあげようよ」

ラム「えー、やだよ。こんなに楽しいんだもーん♪」

ロム「こくこく…♪」

悪戯っ子のように笑顔で言うラムとロム。これを見た何人かは、またお話されるんじゃないかとビビる。

で、なのはは…

なのは「…ふーん、そっかぁ……じゃあミナさんに言わなきゃいけないなぁ。悪戯してるから、おやつ抜きにしてくださいって」

ラム・ロム「…え？」

なのは「ミナさんがね、二人はいい子だから今日はあの有名なバナナケーキをご馳走させるつもりだって言ってたよ。でも、このことを言ったらがっかりするだろうなあー…きっと、おやつもなしにされるんじゃないかなぁ？」

ギクゥゥッ！

ラム「わあぁ～っ！？待って、待ってえぇ～っ！お願いだから言わ

ないでぇ～っ！」
ロム「い…言わないで…（震）」
なのは「どうしよっかなー？ごめんなさいって言ってないしなぁー？」
ラム「ごご、ごめんなさいごめんなさいーっ！反省するから許してぇぇ～っ！」
ロム「ごめんなさい…（ぶるぶる）」

意地悪そうに言うなのはに勝てず、ラムとロムは涙目になって大慌て、タジタジだ。

銀時「ふふーん、ざまあねえなぁ！悪戯なんてするから、そんな展開になるんだぜぇ？」

で、銀時は勝ったといわんばかりに威張るのだった。

カイト「銀さん大人気ねえなおい；」
なのは「ほんと、子供相手にムキになりすぎ。恥ずかしくないの？」
フェイト「確かに…」
銀時「え…何？俺明らかに被害者なんだけど！？；」
なのは「被害者だからって、そんな風にするのはよくないんだよ。あんまり乱暴に接してたら、いくら銀さんでも怒るからね？」
銀時「うっ…；」

銀さん言い返せませぬ。
で、ラムとロムはまだ震えてる。

ラム「ごめんなさぃぃ…」
ロム「うぅ…」

そんな二人になのははは……

ぽんっ（撫で撫で）

ラム・ロム「…？」

なのは「冗談、許してあげる♪」

ラム・ロム「！」

にっこりして言うなのは。ラムとロムは嬉しさのあまり、なのはに抱き着いた。

ラム「わぁーいっ！ありがとうなのはさんっ！」

ロム「ありがと…」

なのは「二人ったら、にゃはは♪」

なのは達は仲良しのようだ。この様子を見ていた人達は、ほっと安心した。

ベール「ふふ…あの様子だと、なのはは変わられたようですわね」

ノワール「いいんなんじゃないかしら。これで」

なのはの変わり様に、ほとんどが微笑むのだった。

……

１３：００

運動場にて（休み時間）

いつも通りの風景、いつも通りの活気、いつも通りの時間……そ

う…

マリオ「２９６、２９７、２９８…」

いつも通り。

カイト「…マリオってさ、すげえトレーニングしてるよな」

ミリア「うん、ほんとすごいよね」

カイト達はマリオの修行を見ているが、その内容というのが、でかい岩を背中に乗せて腕立て伏せをしているのだ。

マリオ「なに、慣れればそうでもねえよ。３１０、３１１…」

カイト「じゃあさ、他にはどんな修行をしてるんだ？」

マリオ「よくやるのは、逆さ吊り１時間だな。しかも、全方位から攻撃用の弾が飛んで来るメニューつき」

カイト「そんなこともしてるのか？すげえや」

ミリア「流石にボク達はそこまでしないなぁ」

マリオ「何なら今度やらせようか？他にも、綱１本の上で弾丸の雨しのいだり、いろいろあるぞ。３５２、３５３…」

カイト「そうだなぁ……ぜひ、やってみたいな」

ミリア「うん、楽しみにしてるね」

マリオ「おうっ！」

……普通に話してるカイト達やマリオって、何だろうか？ねぇ、皆さん。

……

13：50

銀八「えー、午後で遅くなってしまったが、恒例の転校を紹介する」
ネプギア「恒例言いますか…」
ユニ「別にいいんじゃない？」
銀八「んじゃ、入って来い」

転校生が呼ばれて入って来た。その人達は…

カイト「ん！？お、お前達は！！？」
「ん？…って、カイト…？カイトなのか！？」
「ミリアちゃん…？」
ミリア「…！レナちゃん…レナちゃーーん！！」

急にミリアが席を立ち、オレンジの茶色の間にあるような音をした髪で、白い帽子と服を着た少女に抱き着いた。
さらに、茶髪で学生服を着ている少年にもカイトが名を言った。

カイト「圭一！圭一じゃないか！」
全員「えっ！？」

他の人達がびっくりしているのを他所に、会話が進む。

圭一「やっぱりカイトだったか！久しぶりじゃねえか！」
レナ「はう～っ、ミリアちゃん久しぶりーっ♪」
ミリア「よかった…また会えたね！圭一君も、元気にしてた？」
圭一「おう、この通り元気ありまくりだぜ！な、レナ？」
レナ「うんっ、レナもいつも通りだよ。カイト君とミリアちゃんも元気そうで嬉しいかな、かなっ♪」
カイト「あぁ、俺達もだよ！」

カイト達４人は再会でもしたのか、とても嬉しそうに会話をしていた。

銀八「何だ、お前ら知り合いなのか？」
カイト「ん？あぁ、エリート学園を離反して放浪をするようになったばかりの頃に、雛見沢で知り合ったんだ」

ミリアがレナから離れたのを確認し、改めて自己紹介に入った。

圭一「というわけで、雛見沢の学校を卒業してやって来ました！俺は前原圭一。皆よろしくな！」
レナ「同じく竜宮レナです。よろしくお願いします♪」

元気に挨拶をする圭一とレナを見て、他の生徒達にとって感じよさそうだ。

銀八「あー、それともう二人いるんだ。入って来ーい」

まだいるらしく、今度は青い長髪の少女と紫髪のツインテールの少女が入って来た。こちらはセーラー服だ。

「まさか圭一達の知り合いがいたとはね～」
「そうね。コミュニケーション能力がいいのかしら？」

カイト達の様子を見た感想を話すように会話する二人。

カイト「？友達か…？」
レナ「うん、入学前に会って知り合ったんだよ」

どうやら圭一達の新しい友達らしい。

「どもども、泉こなたです。皆よろしく～」
「私は柊かがみっていいます。よろしくお願いします」

こなたはのほほんと、かがみはハキハキと挨拶をした。こちらもフレンドリーみたいだ。

銀八「えー、というわけで仲良くするようにー」

ネプテューヌ「なんか、今度もすぐに仲良くなれそうだね」
ネプギア「うんっ」

姉妹の言葉は、少しフラグっぽい気がしなくもない。まだ来るのではないか、というような。

何にしろ今日も平和な時間が続くのだ。

12話「平和。転校生もあるよ」（後書き）

というわけで、レギュラーとして圭一、レナ、こなた、かがみが入ります。

強いですよ？

13話「スパイダー！！！！」（前書き）

ハートレスであるらしい、スパイダー共の討伐です。

13話「スパイダー!!!!」

キーンコーンカーンコーーーン！

圭一「…でな、そいつはあの後心を入れ変えてバイトをするようになったんだってさ」

カイト「へえー、そんなことがあったのか」

こなた「難儀だよねえ、あの子も」

圭一、レナ、こなた、かがみが転校してきてから、カイトとミリアやなのは達、ネプ姉妹はすぐに仲良しになっていた。

圭一「で、話は変わるんだけどよ、こないださ……」

ごとごと…

カイト「ん？」

ネプギア「どうかしたんですか？」

カイト「今何か音しなかったか？」

かがみ「音？」

ごとごと…

なのは「…あ、本当だ。何だろう？」

フェイト「侵入者…？」

ネプテューヌ「それとも乱入者…？」

カイト達はあたりを見回してみた。すると…

ごとごとごとごと！

近付いて来る奴は、ツボだった。

カイト達「！！？」

ただし、クモの足がついてます。

かがみ「な、何よこいつ！？」

こなた「これは…モンスターか！」

ばばっ！（武器装備）

カイト「！？おい何だその武器は！？なんか強武器っぽいが！？」

こなた「ん？何って…聖剣ファーウェルですが何か？」

かがみ「いや、その言い方じゃわからんから…」

ネプギア「そう言うかがみさんの武器もすごそうなんですけど！？」

かがみ「これ？いろいろあって、雷槍ゼウスを使ってるわ」

ネプテューヌ「どうやって手に入れたんだろう……」

気にしたら負けか？

言ってると、ツボが動きを見せた。

圭一「ん！？こいつ、まさか爆弾生物か！？」

なのは「突進しようとしてるよ！」

レナ「みんな、下がって！！」

レナが前に出て、手投げ用の鉈を1本取り出した。

レナ「はうぅーーーっ！！」

ぶんっ、ざくっ！！
ちゅどがぁぁぁぁん！！！

レナはその鉈を取り出してツボに投げつけ、命中したツボは爆発を起こしながら消滅した。

ミリア「爆発した……圭一君が言った通りみたいだね」
カイト「でも何なんだ？どうしてあんなツボが…」

ごとごとごと…

圭一「ん？…げっ、何だあのタル軍団は！？」

圭一が指をさした方を見ると、今回はタルからクモの足が生えた軍団がいた。
しかも１００体以上はいそうだ。

フェイト「さっきのツボの仲間…？でもどこから現れたの！？」
こなた「まさか、こいつら実はロリコンで私を誘拐しようと！？」
かがみ「んなわけあるかっ！」

ボケてる場合じゃないんだぜこなたん。

ピンポンパンポーン！（アナウンス）

ヴィヴィオ「？」

『えー、私エッチ・ザ・ハードがお知らせいたしまぁす。擬態蜘蛛のハートレスが、あそこ…倉庫から溢れ出してますぅぅ！生徒の皆

さんは、早くハートレスを全部退治してくださぁぁい！このままじゃ…あぁんらめえ！学園が爆破されちゃうぅぅぅっ！あっ、あっ…アナウンス終わりイクーー！！』

プツン。

カイト達「……」

何あのふざけた放送？

そう思わずにはいられまい。もちろん寒気もするというものだ。

カイト「……とりあえず、殴りに行っていいか？」

圭一「カイト、俺にも殴らせろ」

こなた「私も、ちょっちターボスマッシャーパンチかましたいよ」

かがみ「もうぶっ刺していいんじゃない？」

４人はボコる気満々だ。が、それは後にしたいのでミリアが話を戻す。

ミリア「と、とにかく！ハートレスが出たのなら、退治しなきゃいけないね！」

なのは「そ、そうだね！」

カイト「あぁ、早いとここいつら全員つぶして、殴り行くぞ！！」

レナ「それは絶対やるんだね…；」

まあとにかく、カイト達は武器を手にしてタル軍団へ突撃した。

……

どばばばぁーーーん！！

銀時「だぁーーーくそっ!!まじで何なんだこいつらはぁぁぁぁっ!!」

ノワール「ていうか、何でタルに蜘蛛の足が生えてるのよ!?」

学園のあちこちでは、すでに戦闘が繰り広げられていた。主に、タル蜘蛛が無数近くいる。

ビビ「こいつら倒してもきりがない…!アイリちゃん、情報は入った?」

アイリ「はいっ、ちょうど低級霊が調べて戻って来ましたわ!」

ずばぁぁんっ!!

鎌でタル蜘蛛を斬り捨てながら、アイリは伝える。

アイリ「このハートレス達のマザーは、学園のどこかに複数いるそうですの。そいつらを始末しなければ、タルの蜘蛛がどんどん発生し続けますわ!」

銀時「マザーをつぶせって…どうやって探すんだよ!?」

アイリ「低級霊達に案内させます!低級霊が向かう先にマザーの反応があるはずですから、探して退治してください!」

ユニ「わかったわ!行こうっ、お姉ちゃん!」

ノワール「えぇ!」

アイリ「低級霊達、いいですわね?しっかり案内して差し上げなさい!」

低級霊達はそれぞれに飛んでいき、仲間達をマザー討伐させに向かわせた。

……

倉庫

ギルシア「すでにマザーも動いてるらしいが…ここにとどまってる奴がいるのか？」

レオン「箱にも紛れてるかもしれん。調べるぞ」

ザック「どうやって？」

ガレーナ「決まってるであろう…」

ずばばばばばーー！！！（箱の破壊）

レオン「片っ端から壊すまでだ！！」

ガレーナ「うむ！」

ザック「ちょっ、何やってんだーーーー！！？」

ユウカ「あら面白そう♪」

ザック「いやいやいやいや！？後で先生達にどやされるぞーーー！！？」

レオン達はザックのツッコミを聞かず、箱を無差別に破壊しまくった。

レオン「む？これは伝説の剣ばかり入ってたのか！」

ガレーナ「なんと！後で堪能しようではないか！」

ザック「やめとけえぇーーー！！無事では済まねえぞぉぉーーー！！？」

ぼかんぼかんぼかぁーーーん！！！

宝箱・箱の蜘蛛「！！？」

で、知らない内にマザーの蜘蛛達は退治されていた。夢中になって気付かなかったのだろうか？

ザック「あーあ…俺知らねえからな……ん？」

ふと、散らばる物々の中からある物を見つけた。それは、写真集セットだった。それを一冊取り出し、読んでみた。

ザック「これは……アダルティックサキュバス！？しかも無修正！！こいつはレアなんじゃねえか！？」

ギルシア「何！？幼女はあるか！？」

ザック「…！うほぉぉーーっ！ありますぜ旦那ぁ！こりゃレアもんだぜギルシア！」

ギルシア「でかしたぜザック！！よし、俺も混ぜろぉ！！」

ヤルオ「ちょっ、僕もｗｗｗｗ」

変態男共は、事態そっちのけで写真集を読み出した。

ちなみに…

ジャンヌ「やんっ…そんなに絡みつくなんてぇぇ…ｖ」

レーティア「おませさんねぇ…あんっｖ」

シャリアローゼ「あぁんっ、そこおぉ…ｖ」

変態女達もサボっている。

……

美術室

ステラ「！あそこあたり、タル蜘蛛がわらわらしてる！」
フウ「あのあたりにマザーがいるのかな？」
ステラ「だと思うけど……」

ちょんちょん

フウ「ん？」

後ろから右肩をちょんちょんされ、ふと横を見ると…

セレナ・ベル「！！？」
ステラ「へ！？」

なんと、ムキムキマッチョの銅像がそこにあり、足もあるため本物だった。
しかもその姿は……

『魔法少女になったつもりのジジイ』

フウ「！？きゃあぁぁぁぁぁーーーーーっ！！！！」

ずだだだだだだだだだだだだだだ！！！！

フウは驚きと気持ち悪さのあまり、拒絶するままにナイフを投げまくったりゴボウで斬りまくってすぐさま破壊または撃破した。

フウ「はぁ…はぁ…何なのよぉ…もぅっ！とりあえず八つ当たりしなきゃやってられないよぉぉーーー！！」

言い出した直後、フウはタル蜘蛛の群れへ突撃し、デストロイに洒

落込むのだった。

ステラ「うわぁ…かなりキレちゃってる…；」
ベル「てゆか、何よあのマザーは…；」
セレナ「意図がわかりませんね…；」

……

屋上

アイリ「！あそこにマザーがいましたわ！」
ビビ「あれは…爆弾！？」

ビビ達の目の前にいるマザーは、爆弾の姿をしている。屋上には防衛のために爆薬の倉庫がある。そこから出て来たのだろう。

神楽「さっさとつぶすアル！行くアルぁぁーーー！！（突撃）」
銀時「おい神楽、待て！？爆弾だぞ！！」

突撃する神楽に気付いた爆弾蜘蛛は、１つ口を開いて何かしようとした。

神楽「！」

どんな攻撃なのか…

爆弾蜘蛛「フトンガフットンダ」
一同「……」

しかし、ただのダジャレでした。

神楽「つまんねえんじゃボケぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！（鉄拳）」

ちゅどごおぉぉぉぉぉーーーん！！！

神楽がぶん殴り、まわりにいるタル蜘蛛もろとも大爆発した。

銀時「……何今のつまらんダジャレ？」

アイリ「って、神楽様は無事なんでしょうか！？」

はっと気付き、心配して見ると…

神楽「全く、つまらねえギャグ言うなアル」

無傷だ。

銀時・ビビ「…ですよねー」

……

運動場

ここにもタル蜘蛛が大量に出て来ているが、カイト達がそれぞれ奮戦している。

蜘蛛を次々に倒しながら、カイトから話し出す。

カイト「ふう…ラチがあかねえな。なかなか減らねえぞ」

こなた「こりゃ1匹1匹倒してもしょうがないね」

圭一「うおらぁぁぁぁぁっ！！！（気の玉によるバスターショット）

」

レナ「そぉおれっ！！！（広範囲一閃）」

どばばばばばばばばば！！！！

ミリア「けど、こなたちゃん達もまだ全然疲れてないみたい。鍛えてるんだね。えいっ！！（火炎槍）」

こなた「まあね～。こっちもいろいろ経験してるからね（魔神剣）」

かがみ「でもどうすんのよ？このままじゃいつまで経っても全滅しないわよ！（天雷槍）」

こなた「んー…ちょっと使うの早いけど、あれを使ってみるよ。巻き込んじゃうから、皆は空に逃げといて」

カイト「空へ？わかった！」

こなたは聖剣ファーウェルを構え直し、あたりに冷気を呼ぶ。

かがみ「よし、皆飛ぶわよ！（ハイジャンプ）」

カイト「あぁ！（飛翔）」

なのは達とこなたを除くカイト達は、全員空へ避難した。

それを確認したこなたは、奥義をはなとうと気を高めた。

こなた「燃えさかる業火であろうと、砕き散らすのみ……なんてね」

こなたは聖剣を天にかざし、一気に冷気を広げていった。冷気はタル蜘蛛を次々と閉じこめるように凍らせ、やがて運動場を氷と冷気の海に変えてしまった。

こなた「奥義・冥醒剣！！！！」

ざすっ！！

剣を大地に突き刺すと、氷の海全体に衝撃が走る。
理が、崩け散る。

ビキキッ、ずがしゃあああああああああああん！！！！！！

氷の海が割れ、そこから冷気が大爆発した。運動場を埋めるほどの数のタコ蜘蛛軍団は巻き込まれ、１匹残らず全滅した。

すたっ（着地）

カイト「これは…！！」
ミリア「すごい…！？あの剣帝が使っていたという奥義を、この目で見れるなんて…！」
ネプテューヌ「すっごーいっ！今の技かっこよすぎっ！私も使ってみたいよーっ！」
ネプギア「まさか、こんなに強かったなんて…びっくりです！」
こなた「ふっふっふっ、惚れちゃヤケドするぜ？」
かがみ「はいはい、いつまでもなりきるんじゃないの」
圭一「にしても、一気に全滅したな…これでもう安心か？」
レナ「んー…どうかな？もしかしたら、まだ親玉がこのあたりにいるかもしれないよ？」

どすん、どすん…

ヴィヴィオ「？」
フェイト「どうかしたの？」
ヴィヴィオ「何かが、こっちに来る…？」

どすん、どすん、どすん！

なのは「！何、あれ…！？」

圭一「な、何だあいつは！？」

レナ「はう！？」

カイト「新手か！？」

入口から何かがカイト達に近付く。その正体は…猛虎だ。

「グァアアアアアオォォォォォォォっ！！！」

ミリア「虎！？」

かがみ「にしちゃ、なんかかなりでかくない！？」

こなた「うわお、ここでボス戦かぁ…」

ネプギア「これは……（Ｎギア検索）…！？皆さんっ、あれはガーギルタイガーです！！」

フェイト「ガーギルタイガー！？それってまさか、次元獣って呼ばれているあの…！？」

ネプテューヌ「え、やばいの？殺る気満々なの！？敗北戦とかじゃないよね！？」

「ガアアアオオオォッ！！！！」

このガーギルタイガーは何なのか？蜘蛛達との関係はあるのだろうか？

後編へ続く！

13話「スパイダー！！！！」（後書き）

次回は、アミナさんと本家からのリクをごちゃまぜにし、ストーリー作ります。さて、ガーギルタイガーは強いかな？

１４話「次元獣ガーギルタイガー」（前書き）

ガーギルタイガー戦です。手強くできた…はず。

14話「次元獣ガーギルタイガー」

あらすじ

超次元学園にハートレスの蜘蛛が大量発生。すぐにカイト達はこれを全滅させた。ひとまず安心するカイト達だったが、学園にガーギルタイガーという猛虎が侵入してきたのだった。

……

ガーギルタイガー「ぐるるるるる…」

ガーギルタイガーと対峙したカイト達に、逃げるという選択はない。倒さねば危害を与えるだろうし、どの道逃げられない。

こなた「こいつは…ちょっち手強いかも?」
カイト「次元獣…聞いたことぐらいはあるが、まさかここに現れるとは…」
圭一「よくわからねえが、そこらの雑魚とかじゃないって考えるべきか…」
なのは「…それにしても、どうしてこんな獣が…?」
ネプギア「確かに…普通は見つけることすらまれなのに」

レアモンスターとも言えるらしいことも加え、疑問は浮かび上がる。と、その時タイガーの上からモニターが現れたそこに映る人物は黒い影で正体がつかめず、ただ偉そうな雰囲気があった。

『やれやれ…この獣を出さざるを得ないか』
ミリア「!?この声は…!」

圭一「知ってるのか？」
ネプテューヌ「アイリの主人を殺した人！」
カイト「デニーっ！！」

だが、カイト達にはわかった。声に聞き覚えがあったのだ。そして、その正体はデニー…アイリを絶望させたあの男だ。

『また貴様達か……やはり、スパイダー共では無駄だったようだな』
カイト「あのハートレス軍団を仕向けたのもてめえか！よくもアイリの主人を殺しやがって…今度は誰を殺すつもりだ！！」

カイトにとって、デニーは許せない存在。怒りをあらわにして、デニーに叫ぶ。

『私をそこらの殺人鬼のように言わないでもらおうか。ガキである貴様に話しても無駄だろうがな』
カイト「答えろっ！！何を企んでやがる！！！」
『ふん…まあいい。今日はそこの学園にいるセレナとやらを渡してもらおうと、こいつらをけしかけた』
ネプギア「セレナさんを…？」
『いるのだろう？すぐに出られるよう、入口で待機しているな』

……

学校入口

フウ「何あの虎！？何であんなのがいるの！？」
ベル「あのモニターの奴、確か…？」
セレナ「…まさか、あの人の狙いは…」
グローリア「…デニー…っ！」

錬金術士グローリアは、デニーに何かを思っていた。

……

フェイト「誘拐する気…！」

『違うな。渡してもらうと言っているのだ。学園と貴様らを生かしてやるかわりにな』

ネプテューヌ「どっちでも同じじゃん！こんな騒動起こして、しかもこんな虎をけしかけてる状態で言ったって、脅してるようなものだよ！」

こなた「誘拐するってんなら抵抗させてもらうよ。なんか理想を目指してるような気がするけど、そういう奴って独裁者に落ちぶれやすいしね」

かがみ「そうね…しかもあいつ、ちょっと変態そうな気もするし」

『…貴様ら…』

ミリア「退いて。ボク達は絶対に貴方の好きにはさせない」

『…死にたいらしいな……行け、ガーギルタイガー。こいつらを殺せ』

ぷつん（消える）

カイト「待ちやがれデニーっ！！」

ガーギルタイガー「グルアァァァァァッ！！！」

圭一「うおっ、また一段と凶暴になりやがったぞ！」

なのは「まずはこの獣をどうにかしないといけないね。放っておいたら、他の人達までもが殺されるかもしれない」

カイト「だな…さっさとつぶすぞ！！」

レナ「来るよっ、皆気をつけて！」

ガーギルタイガーがカイト達へと襲いかかる。カイト達は構え、戦闘に入った。

ガーギルタイガー「ガアァァァッ！！！（ツメ攻撃連打）」

ぎんっ、ぎんっ、がきぃぃっ！！！（ガード）

圭一「ぐっ…こいつ、なんか動きが早すぎやしねえか！？」

レナ「圭一君！！（突撃）」

ぶぅんっ！！（鉈一閃）

レナは圭一とガーギルタイガーを離そうと、鉈による大きな一閃でタイガーを斬ろうとした。

しかし、斬られる前にタイガーは後ろへ飛び上がり、攻撃を素早くよけた。

レナ「はぅっ！？動きが速い！？」

体格から裏切られるほどの素早さに驚くカイト達だが、タイガーはすぐに次の攻撃をしようと、ツメから炎を発生させた。

ネプギア「炎！？」

かがみ「何かして来るわよ！」

ガーギルタイガー「ガアァァァァァッ！！！」

ぶんっ、ごおぉぉぉぉぉおっ！！！

ツメを大きく振り降ろすと、その炎が飛ぶ大きな斬撃となって地面を走る。

カイト「遠距離攻撃か！？よけろ！！」

どがあぁぁぁぁん！！！

全員は急いでその炎をよけた。炎は最後、壁に命中して爆発を起こして粉砕した。

こなた「ちょっ、攻撃力ありすぎじゃん！？」

ガーギルタイガー「ガアァァァァァ！！！（突進）」

ミリア「！」

ぶうぅぅぅん！！（よけ）

ミリア「そこおぉっ！！（風牙突）」

かがみ「もらったっ！！（裂駆槍）」

ずがあぁぁぁぁぁっ！！！

ミリアとかがみが動きを見切って反撃。タイガーにしっかり攻撃が命中した。

しかし、命中しただけだったのだ。

ミリア「…！！効いてない！？」

かがみ「嘘っ！？」

ガーギルタイガー「グルアァァァァァッ！！！」

ズガガガガッ！！！

ミリア「！？しまっ…きゃあぁっ！！！」

かがみ「うあっ、きゃあぁぁぁぁっ！！！」
こなた「かがみ！！？」
カイト「ミリア！！！」

ガーギルタイガーは体を横に回転し、ツメとしっぽを合わせた回転撃でミリアとかがみをふっとばした。これはカウンターにも相応しいようで、全方位攻撃だった。

なのは「気をつけて！また攻撃して来るよ！！」
圭一「今度は何をしやがる気だ！？（バスターショット連発）」
レナ「攻撃を止めなきゃ！！（手投げ鉈を投げまくる）」
フェイト「させないっ！！（プラズマランサー）」

攻撃される前に止めようと、それぞれが遠距離攻撃でタイガーを止めにかかる。しかし、ガーギルタイガーはあまり動じず、まるで無視するかのように口に何かを集中する。

カイト「効いてないか…くそっ！（突撃）」
こなた「なら私がっ！（突撃）」
ネプギア「私も行きます！（突撃）」

どさっ、ずざざざざーー！！（ミリア達が着地失敗しながらも、どうにか立て直す）

ミリア「くっ…3人共！！」
かがみ「もう攻撃して来るわよ！？下がりなさいっ！！」
こなた「ううん、下がってらんないよ！とあっ！！（ジャンプ）」
ネプギア「覚悟してください！！（剣構え）」
こなた「通常技がだめなら大技しかない！！」
ガーギルタイガー「ガアァァァァァ！！！（こなたにクロー）」

びしゅん！！（瞬間移動でよける）

カイト「隙を見せた！今だ！！！（チャージ）」

ネプギア「行きます！！ライトニングブレイバー！！！」

ズバァッ、ズバァッ、ズバァッ、ズバァッ、ズダァァァァァン！！！！

ネプギアは雷のごとき瞬速で払い抜けによる４連斬をはなった。そして後の５発目、上からのたたき斬りで決めた。

これぞ、ネプギアの新技だ。

こなた「続くよっ！奥義・鬼炎斬！！！！」

ごぶぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！

続くようにこなたは紅蓮の炎を剣に込め、力強く薙ぎ払う。それは炎のツメのように、タイガーへ引っかきついた。

だが、２つの奥義を受けても口へのパワー集中はまだ止まらない。

カイト「とっとと、大人しくしやがれえぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！（気功波動砲）」

ずどおぉぉおおおおおん！！！！！

カイトは剣にためた気を振りはなち、ディバインバスターのごとくすさまじい威力を持つ波動を撃つ。

波動はガーギルタイガーに直撃し、ついにタイガーをぐらつかせた。

ガーギルタイガー「グギアァァァァァァッ！！！？？ガアァァァァッ！！！！」

だが、それでも口から何かを放射しようとしている。
そこに…

だだだだ…ばっ！（突撃）

銀時「させるかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
神楽「くたばれトラぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ずどごおぉぉぉん！！！！

なのは「！銀さん！！」
ミリア「神楽ちゃんも！！」

なんと、銀時と神楽が助太刀しに突撃してきて、タイガーに木刀と鉄拳をぶちかました。

カイト「…何！？」

しかし、これだけ強攻撃を当ててもタイガーは止まらない。

こなた「嘘ぉ！？」
ネプギア「に、逃げられない！！」
ガーギルタイガー「ガオアアァァァァァァッ！！！！」

どおおぉぉぉぉおおおん！！！！！

ネプギア「きゃあぁぁぁぁぁーーっ！！！」
こなた・神楽「うぎゃあぁぁぁぁぁぁぁーーーっ！！？」
カイト・銀時「ぐわあぁぁぁぁぁぁーーっ！！！」
ミリア「皆ぁぁぁーっ！！！」

ガーギルタイガーは口から波動を放射し、突撃したカイト達全員を飲みこんで焼きつけた。波動はカイトが撃ったものよりも大きく、逃げようがなかった。

どさ、ずざざざざーーーっ！！

カイト「っ……ぐっ…なんて威力だ…っ！」
こなた「洒落に、ならないって…」
銀時「野郎ぉ…暴れすぎだろ…っ」
ミリア「皆大丈夫！？すぐに回復するから！」

ミリアはすぐに回復の魔力を使い、リザレクションを発動。癒しの魔法陣によって、カイト達を回復させる。

かがみ「全く、いつも無茶をして…」
こなた「しょうがないじゃん…相手がやばすぎるんだから…」
銀時「で…どうすんだよ？ありゃかなり強い攻撃をしまくらなきゃ、ちっとも倒れやしねえぞ」
カイト「あぁ…こりゃ、奥の手を使っていかなきゃまともにやってられねえだろうな。だが、問題は何をするか…」

強攻撃でしか怯まないことはわかった。だが、何が効果的でかつフラグ的にも無難で済むか。
それを出さなければ、勝ちにくい。

ガーギルタイガー「グルルルル…！」

一方、ガーギルタイガーは攻撃の反動で動けず、じっとこちらを睨んでいる。
打開するにはどうすればいいだろうか？
考えるカイト達だが…

ネプテューヌ「……私にいい考えがあるよ」
カイト「何…？」

ネプテューヌが話を進めた。何か作戦があるのだろうか？

ネプテューヌ「今から私が、ありったけのパワーを溜めるから、皆はあいつの足止めをお願い。チャージには時間かかっちゃうけど、この作戦なら1発でいけるはず」
ミリア「何をするつもりなの…？」
ネプテューヌ「私のあの奥義をあいつにぶつけるの。チャージした分は維持できないから、1発限りだけどね」
銀時「……よくわかんねえが、いけるんだな？」
ネプテューヌ「うんっ、任せて！」
ネプギア「お姉ちゃん…！」

ネプテューヌは自信を表す笑顔で答えた。カイト達、彼女を信じないわけがなかった。

カイト「わかった、任せたぜネプテューヌ！」
銀時「よし、だったら壁役は引き受けてやるぜ。お前ら、絶対に死守するぞ！」
圭一「あぁ、わかってる！」
こなた「んじゃ、もうひと頑張りしますか！」

ガーギルタイガー「グガアァァァァァ！！！」
ネプギア「動き出しました！」
レナ「皆、頑張ろうっ！」

タイガーが再び暴れ出し、カイト達はネプテューヌに近付かせないために防衛に入った。

ネプテューヌ「よーしっ……はあぁぁぁぁぁ……！！」

ネプテューヌは少しでも早く奥義を実行するため、力の集中に入った。

どばばばばばばばばばばーーーーー！！！！！

チャージに入ってから、しばらく激戦が続く。ガーギルタイガーの攻撃はすさまじいが、カイト達は負けじと対抗する。

ミリア「っ…まだまだ！強風波！！！」
なのは「ストライクスタぁぁぁぁーズ！！！」
フェイト「トライデントスマッシャぁぁぁーー！！！」
ネプギア「いっけえぇぇぇーーー！！！（スラッシュウェーブ）」
銀時・神楽「なめてんじゃねえぞゴルアぁぁぁぁぁぁっ！！！！（連打）」
ヴィヴィオ「たあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！（フルパワー波動拳）」
レナ「はぅっ！！やあぁぁぁぁーーーっ！！！（斧をぶん投げ、さらに鉈の一閃で追撃）」
かがみ「落ちろっ、神天雷！！！！（神雷を落とす）」
こなた「ファイナリティブラストォォォォォ！！！（爆炎の剣技）」

圭一「くらいやがれえぇぇぇぇぇぇぇ！！！！（最大気力によるバスターショット）」
カイト「うおりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！（魔神剣・竜牙）」

どがあぁぁぁぁぁん！！！

猛攻撃を受けるガーギルタイガーは、たまらんと思ったのか再び波動を放射する構えに入った。今度は、ネプテューヌも範囲に入っている。止めなければ、やられてしまう。

カイト「まずい！また来るぞ！！」
なのは「くっ…今度は絶対に止めなきゃ！」
銀時「止めきれりゃいいんだかなっ！」
カイト「やるしかねえんだ！！皆、気張れっ！！！」

カイト達は奮起し、さらに猛攻撃を続けた。
そんな時……

……

屋上のてっぺん

ごごごごごご…

フォックス「さあ…行くぞ…！！！」

フォックスが炎を限界まで強め、全身をまとう炎はフェニックスの姿へと変化してきた。

フォックス「出撃！！」

そして、そのままガーギルタイガーへ向けて飛んで突攻した。

フォックス「ファイヤぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！」

……

ごおぉぉーーーー！！！！！

圭一「ん？何だありゃ！？」

ネプギア「あれは…フォックスさん！？」

フォックス「うおおおぉぉぉーーーーーー！！！！」

どごおぉぉぉおおーーっ！！！！！

ガーギルタイガー「グゴオォォォォッ！！？」

ファイアフォックスがタイガーの頭に激突し、タイガーが集めた力は気が散ったために分散され、タイガーは地面におさえつけられた。

カイト「フォックスッ！！！」

フォックス「皆、俺に構うな！！この状態ならどんな攻撃でも耐えれる！さあ、俺ごとタイガーにとどめを刺せえぇぇぇーーー！！！」

フェイト「そんなっ！？」

こなた「無茶しやがって…！」

その時、時は来た。

ネプテューヌ「お待たせーっ！フォックスの覚悟も、無駄にはしないよ！！とうっ！！（ジャンプ）」

ついにネプテューヌがチャージを終わらせ、とどめの攻撃をはなつために空高く飛んだ。

ネプテューヌ「全力でいくからねっ、変身！！！」

ぴしゅあぁぁぁぁっ！！（光につつまれる）

カイト「ネプテューヌ！？」
ミリア「あれは、何…！？」

光はすぐに消えた。だが、それはネプテューヌを変えたのだ。

「…変身完了……女神の全力、見せてあげるわ」

紫の女神、パープルハートへ。

カイト「なっ！？別人になっただと！！？」
こなた「ちょっ、あれ誰！！？」
銀時「うろたえんなよっ、あれはネプテューヌだ！」
レナ「えっ、あれネプちゃんなの！？」

カイト達にとって、驚愕をせざるを得ないことだろう。しかし、彼女はれっきとしたネプテューヌなのだ。

パープルハート「さあ…決着の時よ」

パープルハートは右手を天にかざし、力を発動した。
すると、空にとてつもなく巨大な剣が召喚された。
そう、この剣は…
パープルハート「次元獣…その身をもって受けなさい！」
敵へ投げ落とすためにある。
パープルハート「ヴァルキリー式、グランスセイバぁぁぁぁっ！！！！！」
だぁんっ！！！（落下）
カイト「あれは…！！？全員避難しろおぉぉーーー！！！」
ざすっ！！！（タイガーに突き刺さる）
ガーギルタイガー「ガアァァァァァァァァァッ！！！？？」
ちゅどがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！
ガーギルタイガー「グギャアァァァァァァァァァァァァッ！！！！！」
そして力は爆発し、ガーギルタイガーは巻き込まれ、ついに倒されたのだった。
………

かくして、ガーギルタイガーは撃破され、後に理事長の意向によって捕縛されたのだった。その後、デニーの通信がないか調べたが、すでにその様子はなかったようだ。
それと、あのハートレスの真のマザーがまだいたらしいが、こちらはマリオ達に倒されたらしい。
何にしろ、これでもう安心だ。

カイト「ふぅ…やっとおさまったな」
レナ「はぅ、皆無事でよかった♪」
ミリア「…それにしても……」

ミリアは、帰って来たパープルハートの姿を見て言う。

ミリア「本当に…ネプちゃんなの…？」
パープルハート「えぇ…びっくりさせてごめんなさい。これが私、ネプテューヌのもう1つの姿なの」
圭一「…なんか、結構別人っぽいな…」
レナ「はぅー…しかもすっごく美人…」

ネプテューヌの変わりぶりに、ミリア達はとても驚いている。なんせ、他の女神よりも変身した時の変化が大きいのだ。無理もあるまい。

カイト「……またデニーだったんだな。何でセレナを誘拐しようとしたんだろうか…」

カイトは、デニーのことで考えていた。だが、答えはなかなか出ないものである。

パープルハート「…まだわからないことばかりだけど、1つわかる

ことがあるわ」
カイト「？」
パープルハート「デニーは、私達や人々の日常を壊そうとしている敵ということよ。この平和は…絶対に壊させないわ」
カイト「…そうだな……そのネプテューヌらしさは変わらないあたり、お前は俺達が知ってるネプテューヌなんだな」
ミリア「みたいだね…（微笑）」
パープルハート「ふふ……守り抜きましょう。私達、皆の日常を」
カイト「あぁっ！」
ミリア「うんっ！」

カイト達は改めて、守るべきものを守ることを誓うのであった。

……

セレナ「……奴ら、私の力が目的だったようですね。でも、何のために…？」

物語は、すでに動いている。

ちなみに…

フォックス「ふっ……燃えつきかけたぜ……」

真っ白になってたけど、ちゃんと無事でした。

１４話「次元獣ガーギルタイガー」（後書き）

やっぱどうしてもカイト達メインになりますなぁ；

さて、フラグ回収とかもしっかりやらねば

15話「強くなりたい」（前書き）

カイト、レオン、ガレーナの修行です。バウンサーを倒しまくります。

15話「強くなりたい」

キーンコーンカーンコーーーン！

カイト「じゃ、また後でな」
ミリア「うんっ、また後でね」

この日、カイトとミリアは別行動を取ることにしていた。

理由は、カイトがショートミッションという一種のテストを受けるためである。これは、理事長が用意する依頼や訓練を自主的に受けるもので、クリアすることで何らかの報酬をもらうこともできるのである。また、スペシャルミッションをクリアすれば、称号をもらうこともできる。そのため、学園で大人気でもある修行なのだ。

今日カイトが行くショートミッションは、カイトとあと2人が受ける内容であるため、ミリアには先に帰ってもらったのである。

ミリアと別れた後、カイトは集合場所へ向かうのであった。

……

ミッションルーム

チフユ「…来たか、カイト」
カイト「あぁ…」
チフユ「今日で初めてだったな。自信のほどは？」
カイト「…言葉にし難いけど、全力でやれる。行ける所まで…いや、最後までやり抜いてみせる」

チフユ「…ふっ、お前らしいな」

たったったっ…

レオン「む…？」

ガレーナ「もう1人とはカイトであったのか。意外だな…」

カイト「あ、レオンさんにガレーナさん」

チフユ「よし、これで揃ったな」

カイトの他に受けるメンバーは、レオンとガレーナだった。

レオン「まさかお前もいたとはな…高みを目指すのか？」

カイト「そんな所かな？」

カイトとレオンは模擬戦で1度やり合っているため、お互いに少しずつわかる所をわかってきている。

チフユ「さて、そろそろミッションを始めるとしよう」

揃った所で、チフユからミッションの確認と説明を話す。

チフユ「内容については確認したと思うが、今回はバウンサー軍団を相手に30分間戦ってもらう。ミッションのクリア条件は、1度も倒れずに生き残っていることと、バウンサーを1人につき100体以上撃破することだ。ちなみに、バウンサーについてはエリート学園いた奴をベースにしているが、もちろん強さは尋常ではないぞ。いいな？」

カイト「あぁ」

レオン・ガレーナ「はっ！」

チフユ「では、フィールドを展開する」

チフユはリモコンらしき機械を取り出し、バーチャル空間を展開した。

……

バーチャル空間（学園庭園）

カイト、レオン、ガレーナは庭園の中央に立っており、まわりにはデータから次々と具現されるバウンサー軍団がいる。

レオン「無数に現れるのならば、大暴れしてもよさそうだな」

ガレーナ「うむ、余もそうするとしよう」

レオン達は意気込みながら、楽しみな表情をしている。

カイト「…今度は…越えてみせる」

対して、カイトはエリート学園でバウンサーに追いつめられたことを思い出していた。あの時、バウンサーの能力の高さに圧倒され、エリート学園の生徒達によってミリアを恐怖させてしまった。実際、奴らがミリアを犯すことなどできはしない。そうしようとすれば、能力など関係なく問答無用で体に激痛を与え、さらに全身の骨を折るからだ。

だが、それよりも…ミリアを怖がらせてしまったことが問題だ。

もしカウンターが発動してなかったり、もしくは通じなかったら…？そう思うと、やはりされかけるだけでも嫌すぎるもの。

カイトにとっても、ミリアが嫌な思いや体験をするのは辛い。だから、もっと強くならなければ、ミリアの心をも守れない。

それが、カイトの意思だった。

チフユ『ミッション開始！！！』

チフユのかけ声と共に、カイト達はバウンサーへ突撃して行った。

……

その頃、ミリアは…

レナ「あ、そろそろかな。ミリアちゃん、そっちの鍋の火を止めて」

ミリア「うん、わかった」

ミリアはレナと料理を作っていた。レナと一緒に料理を作るのは久しぶりらしく、レナ達が入学して来たので再会を祝って料理を作ることにしたのだ。ミリアも料理の腕はなかなか良いため、レナとの料理はとても楽しめるようだ。

ミリア「あとは…あ、レンジもちょうど鳴ったよ」

レナ「うん、ちょうどよかった。それじゃ、一気に仕上げちゃおっか」

料理は順調で、次々と完成品が用意されていく。そんな中、ミリアはふと思う。

ミリア（カイト君、頑張ってね…おいしい料理を作って待ってるから）

頑張ってミッションをクリアすることを願い、彼氏の帰りを待つミリアであった。

……

戻って、バーチャル空間

レオン「はあぁぁぁぁっ！！！（一閃）」

ガレーナ「斬っ！！！（薙ぎ払い）」

２０分後、レオンとガレーナはすでに１００体以上撃破しており、後は時間まで生き残るのみ。

レオン「バウンサーなど話にならん。次はどいつだ！」

二人共、まだまだ余裕であるようだ。やはり最強の者は伊達じゃない。

ガレーナ「して、カイトはどうかな？」

ガレーナは気になってカイトの方を見てみた。

ざしゅっ、がきぃぃんっ！！！

カイト「っ…だあぁぁぁっ！！！」

ずばあぁっ！！

カイトは呼吸が荒れており、明らかに苦戦しているようだ。撃破数は３０体前後。バウンサーの攻撃力と素早さは、カイトを苦しめ続

けている。

カイト「はぁ…はぁ…（もう２０分過ぎてる…早くしねえと、このままじゃクリアできねえ…！）」

このままではまずい、そう考えている。だが、受けてきたダメージは大きく、体も重くなりつつある。

そこに、バウンサーの攻撃は容赦なく続く。正面にいるバウンサーが波動拳を撃ってきた。

カイト「っ！」

カイトはすぐさま飛んでかわした。だが、バウンサー達はカイトよりも早く飛んでいて、カイトを追撃する。波動拳を全方位から撃ち、カイトは逃げ場をなくす。

カイト（あの時はここでやられかけた…けど、打開しなきゃ俺は…！！）

カイトは剣を構え、打開するための技をはなつ。

カイト「突風撃！！！」

ずどおぉぉぉっ！！！

カイトは前方へ体を回転させながら、バウンサーへ突進して剣の刃を当ててふっとばす。ひとまず、同じパターンは避けられた。

カイトはすぐに地面へ急落して着地し、次の攻撃へ備える。

しかし、状況は変わったわけではない。遅かれ早かれ、このままではタイムアップ。

カイト（どうする？このままじゃまずい…考えろっ、考えるんだ…！）

ガレーナ「あやつ…苦戦しておるのか……無理もあるまい。奴はバウンサーよりも能力が低い。部が悪すぎたな」

ガレーナはカイトの戦いを見て、そう分析した。ただ、レオンは何も言葉にせず、バウンサーを次々と撃破していく。

バウンサー「烈風拳」

ぶぅぅん！！

カイト「なっ、しまっ…ぐはぁぁっ！！？」

攻防を続けるカイトだが、この時に隙を突かれてしまった。しかも、このままバウンサー達からの一斉攻撃がカイトを襲った。

バウンサー達「追撃連打」

どがばごどがががががが！！！！

カイト「がはぁぁぁぁぁっ！！？」

次々とたこ殴りにされるカイトに、この状況は沼のようだった。

カイト（くそおぉっ…！！強すぎる…っ！？このままじゃやられる…どうすりゃいいんだ！？こいつらの能力はどうなってやがる！？ちくしょおっ、考えろ俺っ…どうにかするんだ！！どうにか…！）

やられながら考えるカイト。
どうすればいいのか、それともどうしようもないのか？
答えが出ないままだったが、ある言葉がカイトの頭をよぎった。

『考えすぎるな。相手の能力を知ろうとするあまり、能力にこだわってしまっては意味がない。ある程度知った後は、もう能力やステータスにこだわらなくていい。あとは心のままに戦うんだ。だから…大丈夫だ。心があれば可能性は必ずある。あきらめるな、カイト…』

カイト（…！！父さん…！）

がしっ！（拳を掴む）

バウンサー「！？」

カイト（…何やってんだ俺は…！父さんからいつも言い聞かせられてることを忘れるなんて、らしくねえよ…！俺は…これくらいでびびってちゃ…あきらめてちゃだめなんだ…！！）

力がみなぎり、体が軽くなっていくカイト。
闘志が、カイトを動かす。

カイト「っ…！！うおおぉぉぉぁあああああああああああああっ！！！！！」

バウンサー達「！！？」

どごぉぉぉぉぉん！！！！！

カイトは絶叫と共に気でバウンサー達をふっとばし、カイトの猛攻撃が始まる。

さっきまでとは別格のごとく、バウンサーを次々と1撃で薙ぎ払っていく。しかも、いくらバウンサーの攻撃を受けてもダメージはあまりなく、逆にカイトにやられるのが早まるだけだった。

時間はあと5分になる頃には、すでに１００体斬りをしていた。

ガレーナ「何…？あやつ、またいきなり強くなったぞ！？」

レオン「痛撃剣…？いや、それだけではない…闘志か！？」

カイトの変貌ぶりに、レオンとガレーナはまた考えさせられた。

カイトのバトルスタイルについては、ほぼはっきりわかってきていた。それに、レオン達は間違いなくカイトよりも強いと確信している。

それなのに、今のカイトを見ていると別の思いが浮かんでくる。それは、少なくともレオン達に考えさせるほどのものだ。

そうして、タイムアップとなった。

……

結果

レオン　３２６体

ガレーナ　３１９体

カイト　１６２体

越えることはできなかったが、カイトも無事ミッションクリアとなった。

チフユ「よし、全員クリアだ。特にカイト、よくやったな」
カイト「ありがとう。無事クリアできてよかったよ」
チフユ「うむ、その調子でこれからもしっかり頑張るがいい。次も楽しみにしているぞ」
カイト「あぁ、精進するよ」

カイトは嬉しそうであり、かつ次へ意気込むような表情をしている。

レオン「……不屈…か」
カイト「ん？」
レオン「いや、何でもない。カイト…次の模擬戦では必ず私が勝つ。覚悟しておくのだな」

レオンはカイトに強く言った。

カイト「そっか。何にしろ、楽しみにしてるよ」

対して、カイトは笑顔でそう返した。
カイトも、またレオンと模擬戦をしたいという感じだ。

……

１８：００

寮の食堂

ミッションの後、トレーニングをしてから帰ったカイトがここに来ると、何やらとてもにぎやかだった。

カイト「ん？なんか賑やかだな…？…あれは、ミリアとレナか？」

そこに、近藤がカイトに近付いて話をしてきた。

近藤「ようカイトっ、ちょうどよかったな！今夜はミリアとレナが晩飯を作ったんだけどよ、これがもう絶品すぎのなんのってな！すっげえうめえぜ！」

カイト「え、ミリアとレナが？…そうか、それで…」

近藤「お前も早くもらわねえとなくなっちまうぜ。んじゃ！」

たったったっ…

カイト「…ミリアとレナの料理はすごくおいしいんだよな。この賑やかさも当然か」

どうやら、ミリアとレナの料理は皆に大評判らしい。納得したカイトは、トレイを手にして窓口に向かう。

たったったっ…

ミリア「！カイト君っ、お帰り♪」

カイト「ただいま、ミリア（笑顔）」

ミリア「ミッションはどうだった？」

カイト「あぁ、クリアできたぜ。やっとバウンサーも倒せるようになれてよかったよ」

ミリア「本当？すごいカイト君っ！頑張ったんだね」
カイト「へへ、ありがとな。さあて、すっかり腹ぺこになっちまった」
ミリア「ふふっ、まだたくさんあるから、いっぱい食べてね♪」
カイト「あぁ、そうするよ」

カイトとミリアは、お互いに笑顔でそう会話した。
当然、料理もカイトにとって超豪華料理を食べてるような気分になるほど、すごくおいしかった。

15話「強くなりたい」（後書き）

レオン達とのコミュニケーションも、書いてて楽しくなってきましたね。
カイトはまだまだ強くなるべく、いろいろ頑張ります。

１６話「ギターはどこだ」（前書き）

本家より、５ｐｂのギターを探す話です。後半、またガチのシリアス話になるんで分けてます。

16話「ギターはどこだ」

キーンコーンカーンコーン！

15：20

カイト「ガルデモライブ？」
ネプテューヌ「うん、今日の放課後にそのライブを見に行くつもりだよ」
圭一「へえー、ファンなのか？」
ネプテューヌ「それもあるんだけど、それよりも5pbちゃんが出るからかな」
ミリア「5pbって、確かあの人気アイドルだっけ？」
ネプギア「はい、今夜のゲストとして参加するんですよ。あの人の友達としても、応援してあげたくて」
レナ「そうなんだ。レナも、その娘の歌を聴いてみたいかな、かな」
こなた「私も興味あるから行ってみたいよ」
かがみ「そうね、私も行ってみようかしら」
圭一「だな」
カイト「じゃあ俺達も行くとするか」
ミリア「うん。というわけでネプちゃん、私達もご一緒していい？」
ネプテューヌ「うん、もちろんいいよー♪」
ネプギア「それじゃあ、放課後5pbさんと一緒に行くので、部屋まで向かえに行きましょう」

……

16：20

寮（５ｐｂの部屋にて）

ネプテューヌ「おーい、５ｐｂちゃーん！来たよー」

ネプテューヌは明るく声をかけた。しかし…

５ｐｂ「ない……ここにもない…！」

ネプギア「？どうかしたんですか？」

５ｐｂは何やら困り果てている様子だったため、ネプギアは聞いてみた。

５ｐｂ「あ、二人共！それが、大変なの……私のギターが、なくなっちゃったの！」

ネプ姉妹「えぇっ！？」

５ｐｂ「さっき、シャワーを浴びる前まではちゃんとここにあったのに、戻ったらどこにもなくて……どうしよう…今日は大事な本番なのにぃ…っ」

ギターがなくなり、焦りと困惑の表情で言う５ｐｂ。涙目にもなっていた。

ネプテューヌ「５ｐｂちゃんがギターをなくすことなんてないし…まさか…」

圭一「泥棒か？」

かがみ「ありえるわね…でも、どうしてギターを？」

カイト「…わからないが、やるべきことができたな。５ｐｂ、俺達もギター探しを手伝うぜ」

５ｐｂ「え…いいの…？」

ミリア「もちろん。困ってる人をほっとけないもん」

こなた「だよねー」
カイト「で、場所はわかるからいいとして…ライブは何時からだ？」
５ｐｂ「７時からなんだけど、僕も打ち合わせがあるから６時にはここを出ないと…」
カイト「６時……まあ、向こうでばれるのも面倒だよな。わかった、それまでには見つけて来る！」
ミリア「待っててね、必ずギターを見つけて来るからっ！」

カイトとミリアは先に部屋を出て、ギター探しに向かった。

圭一「俺達も行くぞ！」
レナ「うんっ！」
ネプギア「私達は、ここを探してから行きますね！」
こなた「ｏｋ、んじゃ行こうかがみ！」
かがみ「えぇ！」

たったったっ…

……

カイト達は急いで学園のあちこちを探し回った。学園と寮には、監視カメラをはじめとする高度なセキュリティが整備されている。いかに泥棒が入る、あるいは泥棒を働いたとしても、そのセキュリティから逃れることは余程の者でなければ不可能。ましてや、理事長が率いるハード達もいることを考えれば、なおさら泥棒できないだろう。
それなのに、泥棒事件が発生した。馬鹿騒ぎならあまり問題にはならないが、今回はリアルで問題になるほどの事態。
カイトはおかしいと思った。
５ｐｂがドジるはずもなければ、他の誰かがマジで泥棒することも

ありえない。だから、泥棒は外の者であるとしか考えられない。なのに、セキュリティは起動していない。

カイト（…まさか、何かあるのか…？）

嫌な予感が、カイトの頭をよぎる。

……

17：30

カイト「見つかったか！？」

かがみ「全然見つからないわ…そっちは？」

レナ「はぅ…こっちも見つからないよ」

こなた「うーん…参ったねぇ。誰も見つけてないってことは、もう泥棒は学園にいないのかな？」

ネプギア「そんな…このままじゃ、ライブに間に合わないです…！」

ネプテューヌ「うーん…困ったなぁ…どこかで見落としとかあるのかな？」

圭一「ていうか、どこを探しても見つからないってのは流石におかしくねえか？セキュリティも働いてねえんだろ？」

カイト「あぁ…いくら何でもおかしすぎる。嫌な予感がするな…」

たったったっ…

銀時「おい、見つかったのか！？」

カイト「だめだ…見つからねえ。そっちは？」

銀時「学園の外も探してみたが、どこにもありゃしねえ。怪しい奴も見かけなかった」

新八「まずいですね…もうすぐライブの集合時間になってしまいま

すよ」
ミリア「そっちでも見つからないなんて…」
カイト「くっ…！」
銀時「…悔しいだろうが、もうお手上げだ。どうしようもねえ…」
ネプギア「そんな…！」

落胆する一同。だが、カイトとミリアは違う。

カイト「あきらめるなっ、まだ時間はある！まだ探し回ることぐらいならできる！」
ミリア「そうだよ！このまま何もしないわけにはいかない！」
ネプギア「カイトさん…ミリアさん…」
銀時「とは言うけどよ、どうやって探すんだよ？あてはあるのか？」
カイト「…あてはない…でも、何かできることが……」

その時だった。

カイト「…ん？」

ふと、カイトは窓から運動場や学園入口を見渡した。すると、運動場にある生物を見つけた。
それは、ピッピだった。
他の仲間達も、それを確認した。

ネプギア「あれは…ポケモンのピッピ？」
銀時「んだぁ？あいつ何でここにいやがんだ…」
ネプテューヌ「あ！あれ見てっ、５ｐｂのギターを持ってる！！」
一同「えっ！？」

なんと、ピッピは５ｐｂのギターを持ち上げたまま、学園を出よう

としていた。
また、その付近の空にはＵＦＯがあった。

カイト「……まさか、あいつは…！！」

ばっ！！！（窓から飛び降りる）

カイト「逃がさねえっ！！！」
ネプテューヌ「あいつ、こらしめてやるっ！」

カイトとネプテューヌが飛び降り、着地と同時に全速力でピッピを追いかけた。

ミリア「！カイト君っ、ネプちゃん！！」
銀時「追うぞ！！」

……

ピッピ「ぴっ、ぴっ、ぴっ♪」

だだだだだだだだだ…！！！

ピッピ「？」
カイト「てめえぇぇぇえええああああっ！！！（怒涛の突風撃）」

ずどごおぉぉぉっ！！！（クリーンヒット）

ピッピ「ピィーーーッ！？（ふっとぶ）」

ひゅーー、ばしっ！（キャッチ）

カイトはピッピを技でふっとばし、ギターを取り戻した。

ぷあぁーーー…

すると、ピッピの頭上にあるＵＦＯから光が降り、傷付いたピッピは光によってＵＦＯに吸い込まれていく。

ネプテューヌ「逃げる気!?絶対に逃がさないよっ!!」

ネプテューヌは光に飛び込み、ピッピを追って行った。

カイト「!ネプテューヌ!!!」

カイトが叫ぶが、ネプテューヌはすでに光に吸い込まれ、ＵＦＯの中に入ってしまった。
ＵＦＯはその後、速く動き出して学園から離れて行った。

カイト「くそっ…!」

たったったっ!（来）

ネプギア「お姉ちゃんが…!」
ミリア「カイト君、追いかけよう!」
カイト「あぁ、ネプギアも皆も来るだろ?」
ネプギア「はいっ!」
かがみ「いちいち聞かないでよ!行くに決まってるじゃない!」
こなた「んじゃ、銀さんギターを５ｐｂちゃんに返しといて!（渡す）」
銀時「うおっ!?（受け取る）」

こなた「さあ出撃じゃーー！！（行）」

こなたの言葉と共に、カイト達はＵＦＯの追跡を始めた。

銀時「お、おいお前らっ！」

カイト「銀さん達は学園に残っていてくれ！何か嫌な予感がするんだ！外にいる皆を呼び戻して、学園の守備をすぐに固めていた方がいい！！」

たったったっ…！

銀時「ったく、あいつら…全員で行った方が早いだろうに……はぁ」

やれやれとぼやきながら、銀時達は５ｐｂのギターを返しに戻って行った。

ひとまず、ギターは守られた。

だが、カイト達とネプテューヌは大丈夫なのだろうか？そして、カイトが言う嫌な予感とは？

16話「ギターはどこだ」（後書き）

ピッピにはいろいろ考えてることがあるので、次回はそれもかねて話を書きます。銀さん達の話は、後から本家にお願いしようと思います。

17話「破られる詐欺」（前書き）

16話の続きです。またいつも通りでする。

17話「破られる詐欺」

あらすじ

５ｐｂのギターを盗んだ犯人であるピッピを目撃したカイト達は、速攻でギターを取り戻した。しかし、逃げようとするピッピを追ったネプテューヌが、ＵＦＯの中へ突入してカイト達から離れてしまう。すぐにカイト達は、ネプテューヌを助けるために追跡したのだった。

今回は、カイト達側の話である。

……

カイト達はＵＦＯを追い、ミリアの魔法による移動補助を受けて山を越え野を走り、どこまでも追いかけている。

カイト「当たれえぇぇぇぇっ！！！（気功波動砲）」

どおぉぉぉん！！！

走り続けながらカイトが気の波動を撃ち振るった。

それはＵＦＯに命中するが、ＵＦＯに張られたバリアのせいでダメージがあまりない。

ある程度追いついた所で、カイト達は遠距離攻撃を連発しているのだが、なかなかＵＦＯに損傷を与えられずにいる。

ミリア「まだ効果がいまひとつ…バリアが強すぎるよ！」

カイト「くそっ！何てＵＦＯなんだ！」

場が変わり、次は岩山を走っている。

かがみ「これじゃラチが開かないわ！何かもっといい攻撃はないの！？」

圭一「ないわけじゃねえが、距離がありすぎる！」

レナ「レナももっと近くに行かなきゃ、バリアを壊せないよ！」

ネプギア「お姉ちゃん…！」

こなた「んー…あの手のバリアを壊すには……あれしかないか」

かがみ「何かあるの！？」

こなた「うん、正直あまりやらない方がいいけどね」

かがみ「何よそれ？とにかく、何でもいいから言いなさい！」

こなた「ほーい。で、その方法はね……」

……

UFO内部

たったったっ…（来）

ピッピ達「ぴーーーっ！ぴぴっ、ぴーーーっ！」

「…止められませんか。やれやれ…私達の邪魔をするとは…」

操縦部屋らしき場所で、肌色髪で赤と紫のローブを着た女性が、慌てて入って来たピッピ達の言葉を聞いていた。

たったったっ！

ネプテューヌ「こらーーっ！！早くボス出て来ーーい！！」

そこにネプテューヌが到着。ボスであるその女性に叫んだ。

「…ほう…貴方はあの有名な女神…」
ネプテューヌ「貴方が５ｐｂちゃんのギターを盗もうとした黒幕だね？絶対に逃がさないよ！」
太刀を向けてそう言った。
「…隠しても無駄ですね。いかにも…この私、ピルスがこの子達に仕向けました」
まわりにいるピッピ達は、すでにピルスと名乗る女性のそばにいる。
ピルス「まさかここに乗り込むとは思いませんでしたが…まあいいでしょう」
ネプテューヌ「何でギターを盗もうとしたの？おかげで、５ｐｂちゃんのライブに迷惑がかかる所だったよ！」
ピルス「盗む…？集収って言ってくれませんか？あのギターには、素晴らしいエネルギーがたくさん込められている…あのギターがあれば、私達は宇宙へ帰ることができる。それなのに、貴方達に邪魔をされるとは…」
ネプテューヌ「エネルギー？宇宙？…何の話？」
ピルスの話がよくわからない様子のネプテューヌ。
ピルス「この世界には、ありとあらゆるエネルギーが存在している…宇宙を旅してきた私達ピッピ族にとって、どれも貴重なものばかりです。それらのエネルギーがたくさんあれば、全宇宙をあるべき姿に戻すことも可能なのです」
ネプテューヌ「…？？」
ピルス「しかし、この世界に生きる人間達は皆、そのエネルギーを

無駄に浪費してばかり…このままでは、いずれこの世界…いえ、下手をすれば宇宙を脅かしかねません。それに、技術も文化も廃れてきてしまっているとなれば、時は一刻を争います。滅びてしまう前に、エネルギーをありったけ集収して、私達の技術を進化させなければいけません」

ピルスは、我々の悲願と言いたいように話し、ピッピ達も頷く。

ネプテューヌ「だから5pbちゃんのギターを…？……なんか、いろいろ事情があって、世界平和のために活動してるっぽいね。でも、だからってライヴの邪魔をしたり迷惑をかけていいってことにはならないよ。ファンもたくさんいるんだし、皆がっかりするんだよ？」

しかし、ネプテューヌはそれでも悪いことはしちゃだめだと言う。

ピルス「全宇宙の存亡がかかってるのです。そんな小さなこと1つ1つを優先していては、手遅れになってしまいます。悪いですが…邪魔をしたこと、詫びていただきます」

ネプテューヌ「むぅ…っ。どうしても謝らないのなら、私にも考えがあるよ！」

ネプテューヌはピルスの言葉に少し怒り、太刀を抜いて戦う姿勢を見せる。

その時…

『うろたえるな小娘共ぉぉぉぉぉ！！！！』

全員「？」

ずどがあぁぁぁぁぁん！！！

ピッピ達「ピィーーーー！！？」

なんと、ネプテューヌとピルスの間の右から巨大な手が、壁を破壊して突き出た。さらに、それに乗ってカイト達が入って来たのだ。

カイト「ネプテューヌ！無事か！？」

ネプギア「お姉ちゃーんっ！」

ネプテューヌ「あ、皆！来てくれたんだね！」

かがみ「全く、心配かけて。勝手に先走っちゃだめでしょ！」

ネプテューヌ「たははー、ごめんごめん」

怒るかがみに、軽く笑顔で謝るネプテューヌ。反省してるかどうか、気になるようにも見える。

話をしていると、謎の手は消えていた。

ピルス「くっ…強力なバリアが破られたというのですか！？そんなことが…」

こなた「ふっふっふっ、私の召喚に死角はない」

かがみ「ていうか、何で巨人になった高橋社長を召喚したのよ…；」

こなた「シリアスっぽかったからね。たまにはこういうのが効果的なのだよ」

正体は、アニメイトの巨人になった高橋社長だったようだ。

ピルス「…！まさか……貴方達は、ネットアイドルの王女ペア…！？」

こなた「そだよ～。かがみとペアで全世界ネットアイドル大会優勝者だよ」

ミリア「ネットアイドル？」
かがみ「まあ、アニメイトの特殊アイドルってやつよ。いろいろあって、私達はアイドルやってるの。学生もやってるけど」
ネプテューヌ「そうなんだ！？なんかすごーいっ！」
圭一「え…じゃあ、その特殊なアイドルをやってたから、こうやって戦えるようになったってのか！？」
カイト「ま、まじかよ…」
レナ「はぅー…」

こなたとかがみが、ネットアイドルという特殊アイドル、しかも全世界大会の優勝者であることが判明して驚くカイト達。
だが、詳しい話は後にすることにした。

ピルス「…まさか、ネットアイドルのトップまでいたなんて…」
カイト「さあて…ピッピをけしかけて、ギター泥棒をやろうとしたのはお前だな。何でギターを盗もうとした？答えろっ！」
ピルス「集収と言ってください。世界のために、あのギターのエネルギーが必要なのです」
ネプギア「世界のため？」
ネプテューヌ「それがね、なんか世界滅亡の危機を回避するために、ギターとかを盗んでエネルギーを集めようとしてるんだって」
カイト「世界のため…？」

気になったカイトは、ピルスの正面に立って彼女やピッピ達の目を見る。少し様子を見て、カイトは口を開く。

カイト「聞こうか。世界はどうやって滅ぶ？」
ピルス「？」
カイト「答えろ。世界はどうやって滅ぶ？」
ピルス「…ずばり、エネルギー浪費による衰弱です」

カイト「何で衰弱する？具体的には？」
ピルス「え…？…それは、エネルギーが作られなくなり、そのまま世界が腐敗することです」
カイト「なら、あとどれくらいでエネルギーが尽きる？」
ピルス「…近い未来、です」
カイトはその後少し考え、目を見て言った。
カイト「……わかりやすいな。ネプテューヌ、こいつの言ってることは嘘だ。世界平和なんて少しも考えてねえ」
ピルス達「！！？」
カイトの言葉に怯むピルス。
ネプテューヌ「え？そうなの？」
カイト「あぁ…こいつの言ってることは建前に過ぎない。本当の狙いは、自分達の繁栄だ」
ネプギア「どういうことですか…？」
カイト「簡単な話だ。こいつらが言う世界滅亡ってのはどういうものか、具体的な理論を持ってない上、答えがあまりにも曖昧すぎる。そもそも、エネルギーとはどういうものかについても例を挙げてない。それで世界滅亡を信じるなんて無理な話だろ」
ピルス「っ…！」
カイト「まあ、これだけじゃ奴が悪いって決めることはできない。だが、お前のような奴は別だ」
剣を向け、言葉を続ける。
カイト「お前の目には、別の目的が渦巻いている。それが答えだ！」
かがみ「それが、自分達の繁栄ってことね？」

カイト「その通りだ。世界を守るためとか綺麗事を言って、いろんな世界でエネルギーを騙し取り、たまに誰にもばれないようにエネルギーとなる物も盗んでる。今こうやって追いつめられても、すぐああやって正義面をしてやがる。そうやってこいつらは、奪ったエネルギーを全て自分達の繁栄に使ってるんだ」

ピルス「！！」

カイト「早い話……こいつは詐欺野郎だ！」

カイトはすぐに見抜いたのだ。ある人物の元で身につけた、読心術で。

ピルスは言い返せず、黙っている様子がそれを物語っている。

ピルス「…許せません……気が変わりました。貴様達はここで死になさい！！！」

ピルスの怒号を合図に、まわりのピッピ達が指を振り始めた。さらに、カイト達を閉じこめるようにバリアも展開した。

ピルス「これより９０秒後、その場は天雷で満ちる！逃げられはしない！」

ミリア「本性をあらわにしたね。そうやって自分の力で戦おうとしないあたり、詐欺師らしいよ」

ピルス「ふんっ、貴様達の低俗な文化や技術に触れるなど汚らわしい！私達の文化や技術は、エネルギーを上手く力にできる！エネルギーのあり方は、私が誰よりも知っている！貴様達のような浪費者などとは違うのです！」

レナ「……うるさい…」

ピルス「あと５０秒！もはやどうすることも…」

だっ！（突撃）

レナ「うるさいよっ！！！！」

ずがあぁぁぁぁぁっ！！！！！（鉈でバリアをぶった斬る）

ピルス「っ！！？」

レナの斬撃はバリアに傷を入れ、あっさりと破ってしまった。

さらに…

ネプテューヌ「……言ったね…？５ｐｂちゃんのライブを、汚らわしいって言ったね？」

ピルスの言葉は、怒りに油を注いでしまった。

ぶんっ！（太刀を振る）

ネプテューヌ「私、本気で怒ったからね！！！絶対許さないんだからっ！！！！」

ネプギア「覚悟…してくださいっ！！！！」

ネプ姉妹はピルスへ突撃し、奥義をたたき込みに行った。

怒りが、力を生む。

ネプギア「パープル姉妹流！！！」

ネプテューヌ「超奥義！！！」

ピルス「ひぃっ！！？」

ネプ姉妹「ヴィオレットシュヴェスタぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

ずばぁぁぁぁぁぁっ！！！！

姉妹の斬撃がダブルクロスし、ピルスにクリティカルヒットした。

ピルス「そ…んな……この私があぁぁぁぁぁぁぁ…！！？」

ちゅどがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！

そして、爆発した。

……

１８：４０

爆発によってＵＦＯは墜落し、ピッピ達も爆発によって倒れた。ピルスにいたっては、もうボロボロになっていた。

こなた「…とりあえず、これで全部解決したね」

圭一「…ネプテューヌ…」

ネプテューヌ「…皆の技術を馬鹿にするなんて、酷いことなんだ。…それを、こいつは…」

カイト「……そうだな」

ネプテューヌの気持ちに、カイト達も同情している。

ミリア「…で、このピッピ達はどうするの？野放しにしていたら、また迷惑行為を働くかもしれないよ」

ネプテューヌ「…理事長に預けようよ」

かがみ「どうして？」

ネプテューヌ「何だか、この子達はピルスに洗脳されてるだけのよ

うな気がするの。だとしたら…この子達も被害者だよ、きっと」
ミリア「ネプちゃん…」

ピッピ達は、あくまでポケモンという子のような動物。その動物達に罪はないと思ったのだろう。

レナ「…いいよ、レナは賛成」
圭一「あぁ、俺もだ」
ミリア「うん、決まりだね」

話がまとまった所だが、後は…

カイト「…で、問題はどうやって帰るかだな。だいぶ遠くまで来てしまった」
こなた「こりゃ、ライブをはじめから見に行けないね」
ネプテューヌ「…ごめん、私も迷惑かけちゃったね」
レナ「ううん、気にしないで。ネプちゃんは悪くないよ」
圭一「んじゃ、とりあえず歩こうぜ」
カイト「だな」

ァァアアアアア！

そんな時、空からウルトラマンの姿が現れた。

カイト「ん？あれは……ソロか！？」

降り立つと姿が変わり、カイトの言った通り、ソロだった。

ソロ「やっと見つけたぜ。お向かえに来てやったよ」
圭一「ソロ！来てくれたのか！」

ソロ「全く、心配したぜ。こっちはいきなりデニーの仲間っていう奴から襲撃を受けて、大変だったぞ」
カイト「え!?大丈夫だったのか?」
ソロ「あぁ、皆の奮闘のおかげでな。逃げられちまったけど」
ミリア「ほっ…よかった…」
ソロ「特に、レオンはすっげえ頑張ってたぜ?カイト達にも見せてやりてえくらいによ」
カイト「!レオンさんが…?」

そう言うと、ソロはすぐに言う。

ソロ「さ、もうすぐライブだよな?皆も見に行ってるし、送ってやるぜ!」
こなた「おー助かるよー!」
ミリア「じゃあお願いしようかな。行こっ♪」
カイト「おぅ!」

こうして、今日も無事平和は守られたのであった。

ちなみに、ピルスはデニーの部下であったことが判明し、ピッピ達をそそのかしていたこともはっきりした。

後に、カイト達は思う。
まだまだ何かが来るはずだと。

17話「破られる詐欺」（後書き）

何故いつもシリアスになるんだろうな、俺；

次は劇場とかもやってみようかな。

18話「良心があるから」（前書き）

散歩してたカイトとミリアが、あの誠と言葉と話をします。きれいな誠仕様、誠×言葉でいきます。

18話「良心があるから」

13：00

カイトは、道路の下にある川近くの傾斜の草村に倒れて話をしている。
その相手は、自分と同じ学生の者だ。

「そうか……カイトも、いろいろ大変だったんだな」
カイト「まあな。けど、今はこうして超次元学園の生徒として生きてる。皆は、俺とミリアを受け入れてくれたんだ」
「…それはよかった。やっぱり、カイトは俺なんかと全然違うよな」
カイト「何でそう思うんだ?誠だって、改心して変わったんだ。全然はないんじゃないか?」

誠…伊藤誠。カイトと話している相手はその人物た。誠もカイトと同じように、草村の傾斜で横になっている。

誠「…いや、全然違いすぎるよ。カイトもミリアも、まっすぐだし」
カイト「まっすぐ…か。けど、誠もそうなってきたんじゃないか?」
誠「そうかな…」
カイト「あぁ、きっとそうさ。だって、今はもう言葉だけを見るようにして、浮気だって二度としなくなったんだ。これを変わってないなんて言えないだろ」
誠「……そうだといいな」

二人は空を見上げて思う。

誠「…俺と言葉があの学園を出て行った後、カイト達は襲撃したん

だよな？言葉をいじめてた奴らもこらしめたのか？」
カイト「俺とミリアは見てねえけど、ビビがそいつらを見つけて半殺しにしたそうだ。トラウマも植えつけられたことだし、もう悪さやいじめなんてできないだろう」
誠「そうか…」
カイト「にしても、何であんな学園が復活したんだか…襲撃前はそう思ったもんだよ」
誠「……」
カイト「…で、世界は見てないのか？襲撃時には、ヤンナと同じくどこにもいなかったんだが…」
誠「それが、あれから全然見ないんだよ。もしかしたらって不安になって警戒してたけど、言葉も見てないらしい」
カイト「そうか……ま、あいつのことだ。このまま終わろうとはしないって考えて行動するのが妥当だな」

カイトは深く読んでいるような、誠は不安気味な表情で話す。

誠「……俺さ、1度エリートがつぶれる前に入学してたら、カイトにぶっ倒されてたんだよな…」
カイト「……昔のお前だったら、つぶしてたかもな」
誠「……」
カイト「自己嫌悪か？昔のことを悔やんだりしてさ」
誠「…あぁ」

誠は昔、どうしようもなく救えない男だった。優柔不断で男気もなく、女に弱いダメ人間だった。
当時、ある日に誠は学園帰りにカイトとミリアの噂を聞いた。あまり聞いてはいないが、ただ弱い者いじめを許せないということだけはっきりと耳にしていた。
だが、この時の誠はまだ醜いままで、世界の友人達の工作もあって

世界に浮気していたため興味を持ってなかった。ところがある日、言葉が公園で1人で黄昏れ泣いていた所を目撃した。知らずに少し罪悪感を持ち、泣いている所を見て放っておけなくなった誠は、言葉と話をして友達からやり直そうと決めた。その翌日、誠は言葉を気遣いながら生活をした。

するとその日、世界の裏切り、友人達のいじめ、さらに誰かに言葉をレイプするよう先生達もグルになって仕向けようと話していたことを聞いたのだ。

後に誠の心は目を覚まし、世界達を見限った。そして、言葉がこれ以上辛い思いをしないために、共に学園を退学した。

その後、言葉の前で自分を責めていた所をカイト達が通りかかったのだ。

誠はカイト達の噂を思い出し、全てを暴露してカイトに自分を痛めつけてほしいと頼んだ。しかし、カイトはそれをせずに言うべきことを言い、励まし、あの学園をつぶすことを約束した。そして二人は、言葉をいつまでも守ってあげてほしいと告げて去った。

これが誠達の、エリート学園復活を知ったばかりのカイト達との出会いだ。

カイト「……大丈夫だよ」

誠「…？」

カイトは暗くなる誠に言う。

カイト「言ったろ？お前はもう昔とは違う…大切なのはこれからだって。そう思うのなら、これからの行動で体現すればいいんだ」

誠「カイト…」

カイト「それに、もし誠が人として悪いことをしようとしたら、ちゃんと俺がぶん殴ってでも止めてやるから安心しなよ」

笑顔でカイトはそう言った。その言葉に、誠は少しずつ元気になるのだった。

「「わっ！」」

カイト・誠「うわっ！？」

と、その時カイトと誠の顔近くに、ミリアと桂言葉がびっくりさせるように顔をひょこっと出してきた。

誠「び、びっくりしたなぁ…」

カイト「二人共、おどかさないでくれよ…」

ミリア「えへへ…♪」

言葉「ふふっ…ごめんなさい。ちょっとやってみたかったんです」

びっくりしたが、まんざらでもないように微笑んでカイト達は起き上がった。

カイト「そっちも話は終わったみたいだな」

ミリア「うん、ちょうどよかったね」

今、散歩の途中に４人が再会したので、男と女に分かれて少し話をしていたのだ。

言葉「誠君、これからのことなんですけど、超次元学園に入学しませんか？」

誠「え？」

言葉「私、超次元学園に通えばいろいろとやり直せる気がするんで

す。改めて、誠君とも付き合っていたいから…」

言葉は、誠と共に1からやり直すために入学しようと言った。前の暗い思い出を埋めて、明るい思い出でいっぱいにしたい。それが願いだ。

誠「…うん、言葉がそうしたいなら、俺も賛成するよ。でも、俺が入学できるかどうか…」

カイト「大丈夫だってっ。俺が理事長に土下座してでも頼むし、皆にもちゃんと話すよ。きっとわかってくれるさ。お前達の良心が生き続ける限り、俺達は味方だ」

ミリア「そうだよ。だから、これからは皆と一緒に生きようよ。ね？」

そう言うカイトとミリアは、喜んで受け入れる様子だ。

誠「…ありがとう二人共。なら、俺も入学しようかな。その方が、言葉も幸せになれるだろうし」

言葉「誠君…（笑顔）」

カイト「よし、決まりだな。んじゃ、理事長んとこに行くとしようか！」

カイト達は立ち上がり、超次元学園へと歩き出すのであった。

良心がある誠と、明るさを取り戻している言葉。

きっと二人も受け入れてくれる場所へ、二人は歩く…

18話「良心があるから」（後書き）

ルートによっては、誠は本当はいい人なんです。俺はそんな誠も好きですよ。

予告

マジカルハートフラグ

世界もやっつけろ！？

19話「魔法少女だって」（前書き）

マジカルハート編いきます。まずはプロローグから

19話「魔法少女だって」

キーンコーンカーンコーン！

13：00

ネプ姉妹は、学園に毎日置かれている新聞を読んでおり、ある記事に目を向けている。

ネプギア「これって…」

ネプテューヌ「うーん…なんか大変なことが起きるのかな」

それを見かけたカイト達は、気になって声をかけた。

カイト「どうした？何か気になる記事でもあったか？」

ネプギア「あ、はい。これなんですけど…」

新聞の表紙を見てみると、こんな記事が載せられている。

『いよいよ来る！魔法少女大戦！』

かがみ「魔法少女大戦？」

レナ「何かのバトル大会かな？かな？」

はじめ、カイト達はこれが何なのかよくわからなかった。わかって、大会みたいなものかということぐらいだ。

ネプテューヌ「何でも、たくさんの魔法少女達が戦って、勝った人は願いを叶えることができるんだって」

誠「どんな願いでもか？」
言葉「まあ…そんなにすごい大会なんでしょうか？」
ネプギア「優勝すれば、どんな願いも叶うっていう程ですからね…きっとすごいんでしょう」

大会優勝者への報酬は、あらゆる願いを1つ叶える。それを聞くと、普通はすごく思える。

カイト「でも、これ本当なんだろうか？主催者は誰なんだ？」
こなた「んー…ドクターSっ載ってるね」
ミリア「聞かない名前だね…もしかして、罠？」
圭一「わかんねえな…」

ドクターSという名前を聞いたことがないカイト達。

かがみ「で、うちの学園から出る人っているのかしら？ここにはいろんな人がいるんだし、誰か興味を持ってるんじゃない？」
言葉「多分、いるかもしれませんね」
カイト「魔法少女なぁ……ネプテューヌは、魔法少女をやってみたいって気はないのか？」
ネプテューヌ「はじめはやってみたいなーって思ってたけど、なのはさん達と出会ってからはそこまで思わなくなったかな」
ミリア「あ…なのはさん達も魔法少女だったっけ」
こなた「というより、魔導士で定着してきてるけどね」

なのは、フェイトは魔法少女の代表格というイメージがあるが、今の本人達にとって恥ずかしがるだろう。

カイト「魔法少女大会か……調べてみるか？」
こなた「別にいいけど、それならまずどうすんの？」

圭一「今から調べても微妙な所だ…というか、今知ったばかりだからな。しかも、開催日が明日だ」
カイト「明日まで待つしかないか…」

今からだと流石に厳しい上に、情報が少なすぎる。カイト達は、ひとまず明日まで待つことにしたのだった。

……

１５：００

銀時「魔法少女大戦？」

カイト達は、この話を他の仲間達にも話すことにした。

カイト「俺達もさっき知ったばかりで、よくわからないんだ。何か心当たりはないか？」
新八「うーん…あまり聞かないね」
誠「そっか……やっぱり、なのはさん達に聞いた方がいいんじゃないか？」
圭一「そうだな…それがいいかもな。やっぱり、なのはさん達のように魔法特化の人中心に聞いていくか」
銀時「何だ？話して参加させるのか？」
カイト「いや、それはしないけど…なんか気になってさ」
銀時「まあそういうのは好きにすりゃいいさ。俺には無縁な話だ」
神楽「何アルか？魔法少女同士で殴り合いでもするアルか？」
銀時「そうなんじゃねえか？最近の魔法少女は、わけわからねえ奴が増えてきてるしな。なんせババアでも魔法少女って呼ばれるこのご時世だ。なのはとフェイトだっていい年してるのに魔法少女って「いい年して…何？」……！！？（青）」

後ろには、なのはさん達本人がいました。

なのは「いい年…かぁ……いい年……ふふふ、ふふふふふふふ…」

フェイト「…ふふふふふ…」

カイト達「っ！！？（震）」

さっきの発言を聞いたのか、ものすごい怒気を放射している。怒りを、笑顔に込めて。

なのは「…カイト君？話なら後で聞いてあげるから、今は離れていてくれないかな？ちょっと3人きりになりたいの」

カイト「わ…わかった、じゃあ後で…；」

言う通りにしよう。そう即断したカイト達は、すぐにその場から離れた。

銀時「……あ、あのー…何か…？；」

なのは「大したことじゃないよ？ただ、いい年って何なのかなぁーって気になってね……」

フェイト「私にも、詳しくいいかな…？」

こつ…こつ…（ゆっくり近付く）

銀時「い、いっい…いや…べ、別に悪い意味じゃあないですぜ…？つつ、つまり…お、大人だってことをだな…；」

なのは「大人…かぁ……」

銀時「そ、そうそうそうそうっ！だから、ほら…だから、べべ、別に…」

フェイト「…じゃあ、大人が魔法少女やって…何が問題なのかな…？」

こつ、こつ…

銀時「え、ええと…そんなこと、言いましたっけ…？」
なのは「くすくす…銀さん、嘘をかないでほしいなぁ～…にゃはは…♪」
銀時「ひ、ひぃぃぃぃぃ…！？」

こつ、こつ…

なのは「ねえ…私達、少女じゃないなら…何なのかな？」
フェイト「いっそ、はっきり言ってほしいなぁ…」
銀時「あ…ぁぁ…！？」

そして二人は耳元で、こうささやきました。

なのは「ねえ…」
フェイト「はっきりと……」
なのはフェイ『お・し・え・て v』

銀時「ギィヤアアア！！！！！！！」

今日のアイリからのお言葉

アイリ「皆様、女性の年齢をお聞ききするとはもちろん、それに嫌に触れることを言うことはＮＧですので、ご注意くださいませ。どうしても触れるのでしたら、せめて若く見てあげたりするようにしましょう。では、続きもごゆっくりしてください」

……

ビビ「魔法少女大戦？それってつまり、魔法少女だらけってこと？」
ミリア「そういうことになるね。何かありそうな気がするけど」
ビビ「……魔法少女大戦……」

ビビマインド

1．魔法少女大戦に出る

2．魔法少女とたくさん出会う

3．魔法少女達に快楽を与える

4．魔法少女達が自分を愛するようになる

ラスト．百合ハーレムうはうは

ビビ「……キターーーーーーーー！！！！（＊　☆▽☆　＊）」
カイト「うおっ、どうしたおい！？」
ビビ「行く！絶対出場する！！私の求めるものが、そこにあるわ！！」

ビビはすっかり出場する気になったようだ。というか、魔法少女と聞いて黙っていられるビビではあるまい。

レナ「ビビちゃん、目が輝いてるね…」
圭一「百合ハーレムに生きる奴なんだ。わかりやすいぜ…」
カイト「なるほどな…」

とりあえず、ビビも協力することにはなった。しばらく話をして、カイト達は次へ向かった。
ただ、その前に…

レナ「…あ、ところでビビちゃん？わかってるとは思うけど…」
ビビ「ん？なあにレナちゃん？」

レナは、ビビの耳元でこう言う。

レナ「…強姦やってたら…レナ、怒っちゃうからね…v」
ビビ「っ！！！？？」

魅惑の声でささやいた後、レナはにこにことカイト達の所へ戻った。
顔色が青く、ガクブルするビビを残して。

……

で、戻って…

なのフェイ「魔法少女大戦？」

ちょっとした時間を終えた頃に、なのは達にも話をしてみた。

ミリア「はい、それで何か心当たりはありませんか？」
なのは「うーん…ないなぁ。私も初めて聞いたよ」
フェイト「私も、そういう話はあまり聞いてないね」
レナ「そうですか…」

どうやら、なのは達もこの手の話については聞いてないようだ。

なのは「…あ、ドクターSって言えば、ある魔法少女の話は聞いたことがあるよ」
こなた「何ですかそれ？」
なのは「ドクターSは、何でもどこかで街全体を巻き込むほどの悪さをしてるらしくて、その魔法少女…マジカルハートっていう娘がそれを阻止しながら、ドクターSと戦ってるって噂だよ。どんな娘なのかはわからないけど…」
圭一「ドクターSが悪さ？じゃあ魔法少女大戦って、罠かもしれないんじゃ…？」
誠「言われてみれば……確かに、怪しい気がするな」
フェイト「もし調べるつもりなら、私達も手伝うよ。私達も、それについて確めたいことがあるから」
なのは「うん、そうしよっか」
カイト「わかった、助かるよ」

なのは達も協力してくれることになった。これで、カイト達のパーティーは固まってきた。
そうして、カイト達は当日を待つのであった。

……

その日の夜遅く…

こつ…こつ…

長い黒髪にリボンをつけ、セーラーに近い服を着ている少女が、月明かりに照らされる港で月を見ていた。

その少女はある人物を想い、口にした。

何かを心に秘めて。

「…まどか……」

.

19話「魔法少女だって」（後書き）

ここで話をしておきますが、うちではなのは・フェイトを銀時ラバーズから外し、いずれノクターンノベルズで

『なのは×フェイト』
『ネプテューヌ×ネプギア』

の、百合を書くことにしました。
書いたらまた伝えます。

20話「ドクターSを追え」（前書き）

ドクターS現る。あと邪王さんごめんなさい！なんかもうそっくりなネタだったんで！

20話「ドクターSを追え」

翌日

ピンポンパンポーン

『マゾチック・ザ・ハードが、臨時ニュースをお伝えいたしまぁす。学園近くで何者かが民間人を巻き込む騒動を起こしてるそうで、しかも民間人の多くはガスらしきものによって、まるで邪王様が考えたHーウイルスに感染したようになってます。このままでは18禁モード全開の展開になってしまいますので、生徒全員で犯人をぶちのめしてください。あ、それと…誰か私をおk』

ぷつん。

全員「……」

カイト「……なあ、まじで殴りに行っていいか？」

銀時「おい、俺にも殴らせろ」

かがみ「だからさ、もうぶっ刺してもいいんじゃない？」

ノワール「突きじゃ卑猥になるだけだから、斬るにしましょう」

ユニ「ていうか燃やしていいでしょ？」

カイト達はやる気失せるこの放送に、クレームする気満々だ。

ネプギア「そ、それより！また街で事件が起きたのなら、すぐに行かないと！」

ミリア「民間人がウイルスに感染して変貌…？何をさせるつもりなの？」

こなた「なんか、Hーウイルスとか言ってたよね。とにかくやばい

ってことなんじゃない？」
かがみ「とにかく言ってる場合じゃないわ！すぐに出るわよ！」

事件を食い止めるために、カイト達はすぐに外へ出ようとする。
その時…

圭一「ん！？おい、何だありゃ！？」
誠「向こうから何か飛んで来るぞ！？」
ミリア「あれは…特大ミサイル！？しかもあれって…！」
カイト「学園全体にいくか…っ！ミリア！！」
ミリア「うんっ、みんな窓からすぐに逃げて！！」

ちゅどがあぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！

……

超次元学園にミサイルが直撃し、大爆発を起こした。爆風は汚れたような緑色をしており、まるでガスのようだった。
学園全体はガスに包まれ、もくもくと広がる。

ガスから何とか逃げ出すように外出したのは、まずはカイト達だけだった。

※メンバー
カイト・ミリア
圭一・レナ
こなた・かがみ
誠・言葉
ネプテューヌ・ネプギア
なのは・フェイト

アイエフ・コンパ

学園入口

ずざざざーーーっ！

カイト「皆、大丈夫か！？」
言葉「はい、何とか…」
ネプテューヌ「ネプギア、あいちゃん、コンパ、体は何ともない！？」
ネプギア「う、うん！」
コンパ「私も平気ですっ」
アイエフ「けほっ、けほっ…何なのよ、もうっ！」
フェイト「いるのは私達だけ……他の皆は？」
ミリア「まだ中にいるのかもしれません…」
なのは「そんな…！じゃあ、あのガスがウイルスのものだとしたら、皆は…！？」

緑のガスをHーウイルスだと判断した皆は、中にまだ仲間がいたために不安になる。

カイト「それなら大丈夫だ。脱出する直後に、加護を皆に与えといた。学園全体にいったかはわからないし、即座に展開したものだから、すぐに効果が出ないかもしれないが…」
こなた「どゆこと？」
ミリア「話すと長くなるけど、今はあのウイルス感染を受けつけなくしたよ。全体に付加されたかはわからないから、感染してしまった人が何人かいるかもしれないけど、加護が宿った人が感染者に何

か行動をすれば、ウイルスはすぐに消滅するはずだよ」
コンパ「そうなんですか?じゃあ、あいちゃんが少しガスを吸ってしまったんですけど…」
その事実に、全体はアイエフを見る。しかし、アイエフ本人に変化は見られない。
アイエフ「あ……ほんと、何ともないわ。これは、私にも加護が宿ってるってこと?」
カイト「間違いない。これならアイエフも大丈夫だ」
圭一「そうか。じゃあ、俺達にガスは通用しなくなったってことだな?」
カイト「あぁ、皆の心が生きてる限り、勝手に破られることはない」
カイトとミリアの説明に、全員はひとまず安心した。カイト達の加護について詳しくはわからないが、今は知らなくていい話だ。
誠「で、これからどうする?皆を助けに行った方がよくないか?」
カイト「そうしたい所だが、事態が事態だ。すぐにガスを何とかしに行った方がいい」
かがみ「…そうね、あんなガスに目茶苦茶にされる皆じゃないし、このまま行きましょう。加護もあるんだから、心配はいらないわよ」
なのは「なら急ごう!これ以上被害が出る前に、何としても止めに行かなきゃ!」
ミリア「はいっ!」
カイト「皆、行くぜ!」
話がまとまった所で、カイト達は元凶を探しに走って行った。
……

たったったっ…！

感染者を避けるように、街を疾走するカイト達。やはり、感染者は非常に多いため、対策が面倒だ。しかも、すぐにウイルスを滅菌した所で、Ｈ－ウイルスによる効果で犯されてしまい、また感染するはめになる。これではかえって心に大きな傷を負うだけである。それならば、ガスを止めてから滅菌していった方がいいだろう。

カイト「こいつはひでえな…まだレイプされた人がいないが、このままじゃいずれ出てしまうぞ！」
圭一「くそっ、犯人はどこにいやがるんだ！？」
かがみ「ていうか、さっきのミサイルといい、ガスをばらまいてる奴もどこにいるのよ！」
こなた「ガスをばらまくから目立つと思うけど、ううむ…」

その時、あちこちを探すカイト達に、何者かが襲撃してきた。

「見ーつけた！」
「獲物がいたー！」

フェイト「！誰！？」
ネプテューヌ「上から来るよっ、気をつけて！！」
カイト「そこかあぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

どばばばばっ！！！！

カイトは、すぐに上から奇襲して来る者達を木刀で薙き払ってふっとばした。

どささっ！

攻撃を受けて落ちた者達を見ると、不思議っぽくて可愛い姿をしていた。

圭一「何なんだこいつらは？」
こなた「んー……これって魔法少女じゃない？それっぽい姿をしてるもん」
ミリア「どうして魔法少女が…？」「邪魔、そこにいた」
カイト達「！？」

上からの声を聞いたカイト達。
そこには黒いマントっぽい大きな服を着て、口から上しか顔を出してない少女がいた。

「ガスが効かず、魔法少女の奇襲を避け、さらに1撃でたたき伏せるとは…やる」
カイト「てめえ、何者だ！！」
「私はドクターS。世界を支配する者だ。しるぶぷれー」
ミリア「ドクターS！？」
圭一「どういうことだ！？何で、魔法少女大戦主催者がここにいるんだ！？」
こなた「…！なるほど、昨日の話はフラグだったか」
レナ「どういうこと？」
こなた「まず魔法少女大戦はフェイク…つまり、魔法少女を集めるための罠だったんだよ」
誠「何だって！？」
こなた「で、集まった魔法少女を洗脳して、戦力をつけた所でこの騒動を起こしたって所だね。まあ早い話、あいつが黒幕だよ」
かがみ「そういうことだったのね。予感はしてたけど…」

ドクターS「いかにも。よくわかったな」
こなた「ま、ゲームやりまくってますから」
かがみ「いやいや…；」

ゲームで養ったといわんばかりのこなたであった。

カイト「魔法少女を洗脳しやがるとは…目的は何だ！！」
ドクターS「知れたこと。魔法少女の潜在能力を引き出し、我が部下として変化させる。そしてこの街を足がかりとし、全世界を我が理想郷とすること」
ネプテューヌ「ありきたりな目的だね。でも、世界征服なんてやらせないよ！」
ミリア「今すぐに魔法少女達の洗脳を解いて！」
ドクターS「そうはいかない」

しゅばばば！

ドクターSの後ろから、別の魔法少女が二人現れた。

ドクターS「この私の邪魔はさせない。お前達、やれ」

そう言った後、ドクターSはテレポートで逃げて行った。

カイト「待ちやがれ！！」

すぐに追おうとするが、二人の魔法少女が阻む。

「逃がさない……」
「ふふっ、いい男…」
ミリア「…？この娘達、様子がおかしいよ！」

誠「！おいっ、さっき殴った魔法少女達が起き上がったぞ！？しかもこっちも様子がおかしい！」

なんと、カイトが薙ぎ払った魔法少女達が立ち上がった。誠が言うように、こちらも異様な目をしている。

レナ「ねえ、これってまさか…この魔法少女達も感染してるんじゃないかな、かな！？」

その様子が民間人達のものと似ており、感染してるのではないかとレナは言う。

カイト「…どうやらそう見て間違いないかもな。しかも、ただ殴るとかするだけじゃ解けねえらしい。魔法少女の潜在能力を引き出すって言ってたが、こんなことして何になるってんだよ！」

ネプギア「わかりません…けど、このままにはできません！」

ミリア「でもすぐに治療しても、また感染してしまう可能性が高いよ…」

アイエフ「だったら、こいつらに構ってられないわ。無視して追いかけるわよ！」

コンパ「でも、この人達はこのまま通してくれそうにないですぅっ」

なのは「だったら…」

ビシュウゥゥ…！（チャージ）

なのは「ちょっとの攻撃じゃ治らないことだし、動けなくするしかないね！」

なのはが攻撃の準備に入る。魔力を高め、レイジングハートを地面に向ける。

フェイト「なのは、倒さないように気を配って！」
なのは「わかってる、ちゃんと手加減はするよ！」

チャージし終わり、それと同時にいくつものビットがなのはのまわりに現れる。

なのは「バインドワイヤー・マルチプル！！！」

どおぉぉぉぉん！！！

地面に魔力を発射すると、ビットはバインドするワイヤー役となって、ビームや追尾弾を撃って牽制しながら魔法少女達に絡みついて拘束していく。さらに、他の位置からもワイヤービットが飛び出し、そうしてまわりに近付くことをさせない蛇達の布陣を作った。

ネプテューヌ「おぉー！何この魔法！？すっごーいっ！」
なのは「よし…うまくいってるね。レーティアさん達からアドバイスもらってよかった」
こなた「え…それってどんなアドバイスで…？；」
かがみ「しかもレーティアさん達から…？；」

この魔誠、レーティア達のアドバイスを元に編み出したらしい。

圭一「話は後だ！このまま追いかけるぞ！」
レナ「うんっ！」

ドクターSを追うべく、カイト達はそのままつっ走って行く。

……

その頃

たったったっ…！

「…どこかに必ずいる…！キュウベエ……今度こそ…！」

黒い長髪の少女が走る。

何かのために。

「まどか…！」

20話「ドクターSを追え」（後書き）

ネタが少し足りない…；

本家であった、あの魔法少女のふりしたばーさんを殴るネタならあるんですが…

理事長お助けー！

カイト「こいつは…；」

21話「マジカルハート乱入」（前書き）

マジカルハート編中編。本家リクでダマグモ要塞戦、そしてマジカルハート出現。

21話「マジカルハート乱入」

あらすじ

学園に謎のミサイルが直撃し、人を欲に狂わせるウイルスがばらまかれた。だが、カイトとミリアの対策により、感染の危機は回避はされた。後にカイト達は、ドクターSの野望を阻止するために走っていた。

……

たったったっ…！

圭一「くそっ、どこに逃げやがった！」
カイト「まだ遠くには逃げてないはずだ！」

現在、なのはのバインドワイヤーによる布陣で、追跡してくる魔法少女を拘束して追えないようにしながら走っているが、まだドクターSの姿が見当たらない。

誠「ん？あれ、言葉は！？」
ミリア「え、いない！？」
カイト「何！？はぐれたのか！？」

ところが、ふと気がつくと言葉の姿がない。どうしたのだろうか？

ネプギア「まさか、魔法少女達に捕まってしまったんじゃ…！？」
レナ「探しに行かなきゃ！」

ごごごごごご……

こなた「ん？また上から何か来るよ！」
かがみ「え！？こんな時に…もうっ、何なのよ！」

何かの影が上からでき、空を見ると要塞らしき物が浮いている。
よく見ると、その要塞にはボールっぽいような生き物がたくさんくっついている。

カイト「要塞か！？」
圭一「何なんだ一体！？」
こなた「あれは…ダマグモか！」
ミリア「知ってるの？」
こなた「知ってるも何も、あれはピクミンに出る敵だよ。普通、ダマグモは両端に弱点があるから、そこをたたけばＯＫなんだけど、なんか新種の奴もいるっぽいね」

生き物はダマグモというらしく、ピクミンというゲームに出ているとこなたは言った。
ただ、新種らしき奴もいるようで、軍人っぽい外見をしたダマグモのダマグモアーミー、さらにツメが生えているダマグモが3体。きっと後者がボスだろう。

かがみ「あのゲームの奴らが…？これも、ドクターＳが用意したのかしら？」
こなた「そう考えてもいいかもね」
カイト「何でもいい！そろそろ攻撃して来るぞ！」
圭一「なのはさんとフェイトさんは魔法少女を食い止め続けてる！あまり長引かせるわけにはいかねえ！」
誠「くっ…言葉を探さなきゃいけないのに！（ロケットランチャー

用意）」
ミリア「わかってる！だからこそ、速攻で倒すよ！」

カイト達が構える頃には、要塞からダマグモが急降下して来た。
カイト達はこれをよけた後、こなたから攻撃を仕掛ける。

こなた「特徴、弱点はすでに把握済みだからね。あっさり斬らせてもらいやす！！」

しゅばばばばはっ！！！

ピクミンをクリア済みのこなたに、ゲームに出ていたダマグモだけは瞬殺される。
ダマグモキャノンやおまけのヒョイグモ、ゾウノアシも、こなたのアドバイスや知識があればたやすく倒される。さらに、カイト達の強攻撃などで足にもダメージを与えるおかげで、動きも止めやすかった。

かがみ「さて、問題はこいつらだけど…」
こなた「まずは普通に攻撃してみるべし！うりゃあぁぁっ！！」

まず、こなたがダマグモアーミーに弱点めがけて攻撃しようとしてみる。

ギャキ！！

こなた「なぬっ！？」
レナ「はぅっ！？」

ズダダダダダダ！！！

しかし、アーミーは弱点の両端からガトリングガンを出し、さらにミサイルも追加で撃ってきた。
対してこなたは巧みに聖剣の刃で弾き、ミサイルはレナが斬って破壊する。

アイエフ「弱点にガトリングガン装備！？対策してるってわけね」
ミリア「軍人らしさの表れみたいなものだね……でも！（突撃）」
ネプテューヌ「それごと斬っちゃえば問題ないよね！（突撃）」

ミリアとネプテューヌが突撃し、ガトリングをよけながらアーミーに接近する。

ミリア「旋風昇竜！！！」
ネプテューヌ「そおぉーれっ！！！（回転斬り）」

ずばばばばばばば！！！

二人の範囲技がダマグモアーミー達を巻き込み、ガトリングガンもろとも斬り捨てた。いかに武器で弱点をカバーしても、武器が弱くてはだめなのだ。

ズガアァァッ！！！

ネプギア「きゃっ！？（よけ）」
カイト「！地面に綺麗な傷が入った…ツメの攻撃力は高いか！」

残ったツメのあるダマグモ、ダマグモキラーが、ツメ攻撃をしてきた。ネプギアがよけた後、地面に突き立てられたことで綺麗な傷ができた。

ツメには、威力を1点に集中させているのだろう。
そして要塞からは、次々と新しいダマグモが現れ続けている。中にはアーミーもおり、きりがないことがわかった。

圭一「くっ、あの要塞をぶっつぶさなきゃ、こいつらは増え続けるのか！（スマッシュしまくり）」
ズガアァァ！！！（ツメ）

レナ（よけ）「時間もないし……よし！誰か、レナを要塞の所まで飛ばせる！？」
ミリア「要塞へ？なら、誠君が撃つ弾丸に乗ればいけるかもしれない。誠君、頼める！？」
誠「え！？わ、わかった！」

レナとミリアの指示を受け、誠はすぐに要塞へ狙いをさだめる。

誠「いくぞ、発射っ！！！」

どおおぉぉぉん！！！

ロケット弾を撃つと、レナがその弾に乗って要塞へ向かって行った。
要塞へ直撃する直前、レナはさらに空高く飛んだ。鉈を振り上げた後…

レナ「てやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ズガアァァァァァッ！！！

要塞を真っ二つにたたき斬った。結果、中や要塞の裏にいるダマグモもろとも大爆発と共に壊滅した。

かがみ「やった！1発でつぶせたわ！」
こなた「流石レナ…鉈に斬れぬものはなし、か」
ネプギア「……あ！？けど、このままじゃレナさんが落下でケガしてしまいます！」
コンパ「た、大変です！助こに行かないと！」

だっ！（突撃しながら攻撃）

圭一「レナあぁぁぁぁぁぁぁ！！」
カイト「って、圭一！？」

レナが落下でケガをする。それを耳にした圭一は、残されたダマグモ達をバットで殴って押し退けて、レナの元まで走る。この時の圭一は、何かのスイッチが入ってるのか、気追がある表情で目が少し光っている。

圭一「女神は傷付けさせねえぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
レナ「！」

しゅばっ！

そして、圭一は大ジャンプをして、レナをキャッチしたのだ。

すたっ。（着地）」

レナ「け、圭一君…？」
圭一「大丈夫か、レナ」
レナ「うん…ありがと……、！？」

お姫様抱っこで。

レナ「あわっ、けけ…圭一く…！？／／／／／」
圭一「へへ、これぞレナをお持ち帰りってか？」
レナ「は、はうぅ…ぎ、逆だよっ。レナが圭一君をお持ち帰りするんだよっ、だよっ／／／／／」
圭一「嫌なのか？」

にやにやしながら意地悪を言う圭一に、レナは赤くなるしかなかった。

レナ「はぅ…圭一君のいじわる…／／／／／」
圭一「はは、褒め言葉さ」

なんかすっかりいちゃいちゃしてる圭一とレナ。空気も甘くなっていく気もする。

こなた「むふふふ～、お熱いのぅこいつらめ～♪」
ネプテューヌ「おぉー…ここにも愛の二人組がいましたかぁ」
ネプギア「すごく…熱いです…」
かがみ「こらそこ！そういうのは後にしなさいよ！」

かがみはまじめに引き戻すようつっこんだ。
あと、ネプギアの台詞…少しひｙ。

カイト「で、あのツメの奴はどうする？」
アイエフ「ツメが大きな特徴なんでしょ？だったら、ツメさえどうにかすればいいわ」
ミリア「どうやって？」
アイエフ「見ればわかるわよ。コンパ、あれを用意して！」

コンパ「はいっ！」

コンパから、ある薬が入ったグラスを複数本受け取る。そしてアイエフが突撃。
それに応じて、ダマグモキラーがツメでアイエフを切ろうとするが、アイエフは全て華麗によける。ダマグモキラー達が一カ所に集ってきた所で…

アイエフ「いくわよっ、受け取りなさい！！」

ぶん、ずばばばばばはっ！！！

アイエフはグラスを全体にばらまき、ダガーで全部割りながら退いた。

じゅうぅぅぅぅ！

液体がツメにつくと、なんとツメが溶けだしたのだ。固い皮膚も、これで意味を成さなくなった。

カイト「これは…酸か！」
アイエフ「そうよ。ご自慢のツメも、溶けてしまったら使い物にならないわ。力で割るなり折りに行くより、こっちの方が楽でしょ？」
ミリア「成る程、その手があったね！」
ネプテューヌ「ナイスあいちゃんっ、こんぱ！」
ネプギア「後はやっつけるだけです！」

だっ！（突撃）

ネプギア「これでおしまいです！！」

ネプテューヌ「斬り捨て、ごめーん！！」

ずばばばばばばばばばばばばーーーっ！！！！！

ただのダマグモ同然になったダマグモキラー達は、他のダマグモもろとも斬り捨てられたのだった。

圭一「よっしゃあ！」

カイト「よし、片付いたな！」

レナを降ろした圭一が腕をビシッと前に出し、カイトも一息ついた。

ちょうど、なのはとフェイトも戻って来た。

なのは「皆ー、こっちも魔法少女達を食い止めきったよー！」

ミリア「本当ですか！？よかった…！」

どうやら、なのは達も追手が来なくなるようにしてくれたようだ。

ひとまず、事態は少し良くなっただろう。

フェイト「これで魔法少女達の追撃はできなくなったはず。後は、ドクターSを探すだけなんだけど…」

こなた「どこにいるか、ですよね」

ミリア「…！近い…向こうにいるよ！」

カイト「気配を察知したか！行くぞ！」

カイト達はすぐに走り出した。

……

カイト「ドクターSーーーー！！！」

ドクターS「！」

建物の上にいるドクターSを発見、さらに近くに巨大な人らしき奴もいた。姿は何やら誠っぽい感じがするが、顔はよく見えないのでよくわからない。その巨人は、ガスをばらまく機械を手にしている。

誠「あれは！？」

圭一「ガスをばらまいてる奴は、あいつだったんだな！」

ネプテューヌ「ドクターS！もう逃がさないよ！」

ネプギア「ガスも私達には通じません！貴方の野望もここまでです！」

ドクターS「…魔法少女をも止めるとは……おのれ…」

追いつめられたように愚痴るドクターS。だが、まだあきらめてはいない。

ドクターS「…だが、まだウイルス感染者達がいる」

カイト「！」

ふとまわりを見ると、八方からウイルス感染者の住民達が遠くから接近して来ていた。おそらく全員いると見て間違いない。

ミリア「やっぱり逃げられないってわけだね…」

なのは「だったらバインドワイヤーで拘束すればいいけど、魔力が持つかどうか…」

カイト「それならミリアにサポートさせるから、心配はいらない。俺もできることをやる」

圭一「だが、難しいんだろうな…1発殴っただけで元に戻るんだ。まとめてやらなきゃ、後がまずいことになりかねない」

誠「言葉…！」

カイト「皆、抜かるなよ！」

構えるカイト達だったが、その時だった。

「マジカル脳洗浄ーー！」

ぱぁぁーーーー！

全員「！？」

突然、街全体に広がる魔力のオーラが発生。すると、感染者達からウイルスが浄化されていき、次々と倒れて行った。

ミリア「何…？」

なのは「魔力…？」

カイト「これは一体…？」

「ドクターS、そこまでだよ！」

全員「！！」

声がした方へ向くと、別の建物の上にある少女がいた。ピンクのリボンやドレスを着ている。

「目、肩、お尻っ、マジカル注入！マジカルハートこころちゃん、ここに参上！☆」

可愛いポーズで名乗り、登場したことを伝えた。

こなた「あれが…」

誠「マジカルハート…？」
レナ「こころちゃん…？」

カイト達は少し唖然としていたが、彼女がマジカルハートであることをすぐに認識した。

ドクターS「やはり来たか…マジカルハート」
マジカルハート「また悪さをしてたんだね！皆迷惑してるんだから、もうやめてよ！」
ドクターS「悪さ…？いいえ、これは未来のために必要なこと」

話の途中、ドクターSの部下であろう黒マントの男達が互いの後ろに現れた。

ドクターS「この世界は愛に飢え、そして愛は尽きかけている。その証拠に、人々の恋愛は2人によるものしか存在が多くない。それではいずれ滅亡する……愛を増大させるには、一夫多婦をはじめとする複数にするしかない」
マジカルハート「…？？」
ドクターS「一夫多婦を主流にすれば、愛は今よりも大きく広がる。百合も充分。世界は救われる。だからこそ、私はそれを実現するために世界を手にする」
マジカルハート「……あーーーもうっ、わけのわからないこと言って煙にまこうとしてる！とりあえず攻撃！」
こなた・かがみ「アッパー派か！！？」

わからないことは気にしないらしい。

マジカルハート「マジカル引力光線！！」

ビビビビビビビビ！！

ドガァァァーーーン！！！！

かざした杖から雷鳴をとどろかせ、黒マントの男達をやっつけた。

ネプテューヌ「ねぷっ！？こっちにまで攻撃が来たぁーー！！？」

圭一「うおわあぁぁぁっ！！？」

カイト「無差別攻撃かよ！？」

しかし、カイト達にも攻撃が行っている。よけてるが、いきなりなので焦っている。

ドクターS「相変わらず過ぎる…」

マジカルハート「さあ、降参しなさい！さもないと、マジカル脳洗浄だよ！」

ドクターS「脳みそはちょっと……田中、こうなったらイカインダー田中に変身だ」

田中「！？」

ドクターSは空気を入れるっぽい道具を取り出し、田中と呼ばれた巨人の尻にカンチョーした。

カイト達「ちょっ！！？」

なのは「何をする気なの！？」

こなた「まさか、だっｐ「言うなぁぁぁぁっ！！！」」」

かがみ、こなたのNGワードを阻止。

ぱふ、ぱふ、ぱふ（何かを注入）

ごおぉーーーーー！

すると、田中はさらに巨大化して３０ｍほどの大きさになった。

レナ「はうっ！？大きくなったよ！？」

田中「ゼアッ！！」

圭一「しかもウルトラマン化！！？」

マジカルハート「わぁぁ、すっごく大きくなった！？」

ドクターＳ「さあ、覚悟するがいい。しるぶぷれー」

果たしてどんな戦いになるのか？

続くったら続く

21話「マジカルハート乱入」（後書き）

次で終わりにしますが、心ちゃんを仲間に入れてもいいかな？

向こうでもネタになるかはわかりませんが…

22話「ドクターSの野望」（前書き）

マジカルハート編決着です。で、いつものシリアスもあります。

22話「ドクターSの野望」

あらすじ

ついにドクターSに追いついたカイト達。さらに、マジカルハートこころも登場。ドクターSは、巨大化した巨人田中で対抗する。戦いはクライマックスへ入る。

……

田中「ゼアッ!!」

先制攻撃をしたのは田中だった。両腕をL字にクロスさせて、光線を出してきた。

こなた「って、戦法もウルトラマン!!?」

田中はウルトラマンが好きなのだろうか?

ちゅどがあああああん!!!

誠「うおわっ!?」

カイト「威力がでかすぎる!?これじゃ街を数分で破壊しかねないぞ!」

ミリア「でも、相手の身体が大きすぎるよ。とにかく、ボク達も上に登らなきゃ!」

圭一「!?また攻撃してくるぞ!!」

田中「ゼアっ!!!」

ずぎゅううううん！！！

田中はあちこちに光線を撃ち、街の建物を破壊していく。このままでは被害は拡大し、住民達も危険にさらされる。

カイト「時間がねえ！ミリア！！」
ミリア「うんっ！レビテトフィールド！！」

ミリアは魔法で陣を展開し、全員の体を軽くした。

レナ「はう…？体が軽くなったよ」
ミリア「そのまま建物の上へ飛んで行って！できるだけ巨人に近づけるように！」
ネプギア「はい！」

ミリアの魔法によって体が軽くなり、ミリアの指示通りジャンプや壁走りを駆使しながら、全員建物の上へ昇っていく。
一方、マジカルハートも苦戦していた。

マジカルハート「やめて！街を壊さないで！！」

光線と崩れた建物の瓦礫をよけながら、ビームなどの魔法を駆使して止めにかかるが、なかなか状況はよくならない。田中はひたすら攻撃と破壊を繰り返す。
だが、それもいつまでも続かなかった。

ミリア「！？マジカルハートちゃん、危ない！！」
マジカルハート「え…！？」
田中「ゼアっ！！！」

ちゅどがあああああん！！！

マジカルハート「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
カイト「しまった！？」
誠「まずい！落ちるぞ！！」
圭一「誠！！」

カイト達が気づくも、遅かった。
光線が直撃し、撃ち落とされたマジカルハートが道路へ落下していく。それを見た誠は、すぐに助けに降りて行った。全速力で、受け止めに走る。

誠「マジカルハートおぉぉっ！！！」

がばっ！

結果、何とか地面へ落下することは避けられた。誠はマジカルハートを受け止め、無事に助けられた。

マジカルハート「ん…あ、お兄ちゃん！」
誠「え？」

しかし、その直後に瓦礫が誠とマジカルハートの頭上が落ちてきていた。

誠・マジカルハート「！？」
カイト「させるかぁぁぁぁぁ！！！」

カイトが瓦礫を斬って助けようと、全速力で二人の元に駆ける。
間に合うか、間に合わないか、緊迫するその時……

どがあああああん！！！

圭一「誠ぉぉぉぉっ！！！」

瓦礫が落下したのが見えて、圭一が叫ぶ。だが、それで全ては決まってない。

ぱぁぁぁぁぁ…ずがあああん！！！

なんと、瓦礫が光と共に破壊され、そこには無事だった誠とマジカルハート、そしてもう一人の少女の姿があった。

ミリア「あれは…！？」

ネプテューヌ「誰！？」

その少女は、黒色の魔女らしき服装をしていて、しかもグラマラスな体格をしている。特に、スカートあたり（特にパンチラ）と胸を強調している。

え？どんな風にかって？原作を参照すべし。

「…間に合ってよかった…」

すたっ！（着地）

カイト「お前は…？」

「…仮・マジカルワード♪」

誠「マジカルワード…？」

ネプテューヌ「ていうか、仮なんだ…」

マジカルワード、そう名乗った魔法少女は立ち上がる。

マジカルワード「マジカルハート、助けに来ました」
マジカルハート「あ、ありがとう！」
マジカルワード「街を混乱に陥れ、さらにマジカルハートをいじめる貴方の暴挙を許すわけにはいきません。覚悟していただきます」
ドクターS「…なるほど、新手の敵というわけね。いいわ、相手になってあげる」
田中「ゼアっ！！！」

田中がマジカルワードに光線を発射する。

ずどおおおおおん！！！

しかし、マジカルワードは右手を前にかざしてバリアを展開し、光線をたやすく防御した。

コンパ「わぁー！あの人、すごいです！」
なのは「あの光線をいとも簡単に防御した…！？」
フェイト「あの娘も、魔法少女…？」

バリアと光線が消え、おさまった後にマジカルワードが声をかける。

マジカルワード「大丈夫ですか？伊藤誠、カイト・ネイラード」
カイト「え、俺達を知ってるのか？」
マジカルワード「ワードは何でも知っている♪」
カイト・誠「は、はぁ…；」

左手の指を1本立てながら言うワードに、カイト達は少し唖然とす

る。

マジカルワード「貴方達が街を守ろうと戦い、さらにマジカルハートを助けてくれたおかげで、ここに来ることができました」
カイト「俺達が…？」
マジカルワード「マジカルハートを助けてくれて、ありがとう」
誠「あ、いえ…」

まだ話を把握しきれてないカイト達だったが、ひとまずこれまでの戦いのおかげでここに参上できたそうだ。いずれにしても、マジカルハートを助けたので結果オーライか。

マジカルワード「さあ、マジカルハート、合体しましょう！」
マジカルハート「え？そんなことできるの？」
マジカルワード「私達が二人揃えば、できないことはないんです」
マジカルハート「…！うんっ！」

ここでハートとワードが浮遊し、田中とドクターSの前に来る。そして、ワードは日本刀を、ハートは杖を天にかざし、呪文を唱え始めた。

……

その頃、他の仲間達は…

たたたたたたたた…！（走）

銀時「ったく…余計に時間を取られちまったぜ！」
新八「またこの騒動にデニーが絡んでいたなんて！」
神楽「しかも理事長が、ドクターSって奴も部下だって言ってたア

ル！」
ビビ「あんのクソ男が…ドクターSって娘からじっくり聞きださなきゃいけないね！」
ギルシア「ていうか、カイト達は今どこにいんだ！？さっきぼこった部下は逃げられちまったし、あいつらんとこに行ってんじゃねえのか？」
銀時「さあな！けど、あいつらのことだ。どうせ行ったって返り討ちにしてるだろうさ！」
マリオ「かもな！」

ミサイルが学園に直撃してから、銀時をはじめとする仲間達はしばらく出撃できずにいたが、カイトとミリアが張って行った加護のおかげもあってガスを完全に浄化および駆除し、後から全員出撃していた。感染者の対応に面倒かけられながらも急ぐその途中、彼らが言うデニーの部下と遭遇したらしい。銀時達は部下をあと1歩まで追い詰めたが、部下は命からがら逃げてしまった。今、その戦いで得た情報を整理しながら、カイト達を探しているのだ。

ユニ「それにしても、さっきの波動は何だったのかしら？ウイルスに感染した人達が一斉に元に戻っていったけど…」
ラム「これも、カイトさん達が？」
ベール「いいえ、それとは違う感じでしたわ。まるで、魔法少女らしい感じの波動でしたから」

びゅううううん！

ノワール「ん？何、あの光の玉は！？」

走っている銀時達が上を見ると、南の方角から光がものすごい勢いで北へ飛んで行った。

セレナ「あれは、何でしょうか？」
フウ「どこに行ってるんだろう？」
レーティア「…なるほど、あの光の行き先に、もしかしたらミリアちゃん達がいるかもしれないわ」
スネーク「ありえるな。急ぐぞ！」
ビビ「待っててね、ミリアちゃん達ーー！（、・ω・´）」

……

マジカルハート&ワード「合体！！！」

空から二つの光が魔法少女達を包み込み、そして1つの光となって合体した。

びかぁぁーーーーー！！

閃光の後、その光から現れたのは、巨大化したマスコットの姿をした生命体だった。

ネプギア「あれは何ですか！？」
こなた「あれは…まさか、ミニーマウス！？」
かがみ「はあ！？何で夢の国のネズミの女の子なのよ！？原作だとマヨちゃんっていうマスコットになるはずでしょ！？」
こなた「かがみ、気持ちはわかるけどメタっちゃおしまいだよ…」

所詮、何でもありなのだ。

そして、ワードとハートは操縦席で二人一緒に操作するよう、すでに準備できていた。ちなみに何故か裸。原作に忠実だ。

マジカルワード「いきます！」
マジカルハート「おー！」

夢の国の女ネズミの姿をしたマスコットは、田中に攻撃を仕掛けていく。

マジカルハート・ワード「マジカルパーーーンチ！！！」

すどがああっ！！！

田中「ゼアっ！！？」

マジカルという名の鉄拳を田中にお見舞いした。田中は負けじと反撃にパンチするが、逆によけられてカウンターパンチを喰らう。

田中「ぜ、ゼアっ！！！」

奥の手として光線を撃つ田中。

マジカルハート・ワード「マジカルショーーーット！！！」

どおおおおおん！！！

田中「ゼアぁぁぁぁぁっ！！！？」

しかし、ネズミのマスコットはマジカルという名の波動拳を撃って光線を相殺し、残った波動が田中に直撃する。まともにくらった田中は、ついに後ろへ転がりうつ伏せになった。

アイエフ「嘘！？あのマスコット、見かけによらず強いじゃない！」
レナ「しかも光線まで相殺しちゃったよ！？」
こなた「こりゃもう勝ちフラグだね」

マジカルハート・ワード「いでよ、マジカルセイバー！！」

ぴかぁーーーー！

とどめを刺すために、ネズミのマスコットは右手にキーブレードっぽい棒を召喚した。
そして……

マジカルハート・ワード「必殺・天国へご案内！！！！」

ずがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！

ネズミのマスコットは飛び上がり、棒を突き刺した。

お尻に。

こなた・かがみ・アイエフ・圭一「ちょっ、えええええええええええぇぇぇ！！！？？」
ミリア「お尻に刺しちゃった！！？」
レナ「これって…あわわわわわ…！？」
コンパ「い、いくら何でもやりすぎだと思いますですぅっ！？」
なのは・フェイト「い、痛そう…；／／／／」
ネプ姉妹「これは…ひどい；」
誠「た、確かに…；」

田中「ぜ…ぜ…ゼアぎゃあああああああああああああああああ

ああああああああああああああ！！！！！」

ちゅどがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！

いろんな意味でクリティカルダメージを受けた田中は、耐えることかなわず大爆発とともに消え去ったのだった。

マジカルワード「やりましたね、マジカルハート♪」
マジカルハート「うんっ♪」

で、まあハートとワードは勝利を喜んでいるのだった。

ドクターS「…マジカルハート、そしてマジカルワード」
マジカルハート・ワード「！」
ドクターS「この借りは必ず返す。次に会う時に、雌雄を決しようぞ」

ちゃきっ（刃を向ける）

カイト「待てや」
ドクターS「！！」

後ろを向くと、いつの間にかカイトがドクターSの首に刃を向けていた。

カイト「お前には聞きたいことがある。特に…お前の目を見て真っ先に聞くべきこともできた」
ドクターS「…何？」
カイト「…西園寺世界はどこにいる」
ドクターS「！？」

カイト「正体は完全にわかってねえが、今わかることはお前が世界の友人であるということだ。知らないとは言わせないぜ…誠と言葉から話は聞いている。お前らの関係のことも全部な」
ドクターS「……」
カイト「答えろ！西園寺世界はどこにいやがる！！」

さっきまでのギャグな空気を壊すような瞳で、ドクターSを睨むカイト。大してドクターSは、冷静に答えた。

ドクターS「…いいわ、少しだけ話してあげる。西園寺世界は、エリート学園残党組織にいる」
カイト「！残党だと？」
ドクターS「ほんのわずかだけどね…今はヤンナと一緒に副指揮官を務めている」
カイト「ヤンナ…？あいつまで生きてやがったのか」
ドクターS「最も…さっき超次元学園の他の奴らに敗走した後だけどね…今頃、組織の拠点に帰りついた頃よ」
カイト「…それはどこだ？」
ドクターS「…それ以上は話さない。デニー様からそう念を押されてるから」
カイト「！！」
ドクターS「カイト・ネイラード…貴方では絶対に私達の理想を止められない。デニー様…そして、私達の理想を……」

ぶぅぅぅん！

ドクターSはその言葉を最後に、テレポートで逃げて行った。
もう追っても無駄だろう。

カイト「……デニーの部下になったっていうのか？何が目的で…」

すたっ

「己の欲望のため…最後に行きつく結論はそこよ」
カイト「！」

カイトが振り向くと、そこには黒い長髪の少女が立っていた。

「…1つ聞くわ。キュウべえという宇宙生物を見たことはない？」
カイト「お前は…魔法少女か？」
「……」

少女は答えない。聞いても無駄かもしれない。

カイト「…いや、聞いたこともない」
「…そう……結局、今回もまた外れだったということね…」
カイト「……」

少女は後ろを向いて少し歩き、こう言った。

「1つ伝えておくわ。さっきデニーっていう名前を聞いたようだけど…奴は、力で倒すことはできない。覚えてて」
カイト「…？力で、倒せない…？」
「……縁があったら、また会いましょう」

ばっ…

カイト「！？」

一度目を瞬きすると、その少女はすでにそこにはいなかった。

カイト「今のは…一体…？」

たったったっ…！（ミリア達がかけつける）

ミリア「カイト君、今の娘は…？」

カイト「わからない。ただの少女じゃなかったみたいだったが…」

圭一「…ん？」

たったったっ…！（銀時達がやってくる）

ステラ「おーーーい！皆ーーーー！」

ネプギア「あ、皆さん！」

ベール「ふう…探しましたわよ。私達を差し置いて、ずるいですわ」

ネプテューヌ「あはは、ごめんごめん」

銀時「…どうやら、全部終わった後みてえだな」

カイト「そっちは大丈夫だったか？」

ガノン「うむ、お前達の加護のおかげですぐに対処できたぞ」

レオン「全く、面倒なことをしてくれたものだ」

仲間達と合流したカイト達は話しこむが、ちょうど同行していた理事長らの内の一人、チート・ザ・ハードが区切りをつけた。

チート・ザ・ハード「話は学園に戻ってからにしてください。カイト、戻った後すぐに報告をしてもらいますが、よろしいですね？」

カイト「あぁ、俺も伝えたいところだよ」

チート・ザ・ハード「よろしい。では、帰りましょう」

こうして、平和的に後始末はいい意味で何事もなく行われ、魔法少女騒動は幕引きとなった。

……

報告されたこと

・ドクターSやヤンナ、そして西園寺世界がデニーの部下として活動している

・エリート学園の少数残党組織が存在している

・ガスによる制圧は、エリート学園復興の足がかりのためだったらしい

・謎の少女と遭遇したこと

・少女いわく、デニーは力で勝つことはできないとのこと

これらの情報は、後に来るであろうデニーとの戦いで役に立つだろう。

少しずつではあるが、戦いは近づいてきている。

ちなみに…

心「桂心っていいます！皆さん、よろしくお願いしまーす♪」

かがみ「…何で、唐突にこうなったのかしら？」

こなた「まあ、別にいいんじゃない？マジカルハートとして登場した時から、そんなフラグが立ってたっぽいし」

カイト「ていうか、見たときから言葉も含めて正体ばればれでもあったしな…」

言葉「もう…心ったら」

誠「まあまあ、心ちゃんがそうしたいって決めたんだから、好きにさせてあげようよ」

言葉「そうですね。心、ここの皆さんにひどい迷惑はかけちゃダメよ」

心「はーい♪」
圭一「で、本家は心ちゃんを果たして使うんだろうかって話だが…」
レナ「それもだけど、使うとしたらまたマジカルハートとワードで活躍の話を書く可能性もあるんじゃないかな、かな」
ミリア「なくはないね…作者もリクエストしそうだし」
カイト「てか、今回はメタな終わり方だな…」
ネプテューヌ「たまにはこういう終わり方もいいと思うな、私は♪」
ネプギア「あははは…（苦笑い）」

桂心ちゃん、入学しましたとさ。

心「次回のマジカルハートこころちゃんも、皆見てねー♪」
銀時「え、またやんの？；」

ちゃんちゃんっ

22話「ドクターSの野望」（後書き）

今回はいつもよりもやりたい放題、そしてつっこみ所ありまくりな話だった気がします。

まあ、うちもカオスだからかな。

ネプＭＫ２バトン（前書き）

真王さんから受け取ったバトンです。カイトとミリアを書いてみました。

ネプＭＫ２バトン

カイト・ネイラード

戦闘開始：容赦はしねえ！行くぞ！

先制攻撃：隙だらけだ！

バックアタック：不意をつかれたか…！

自ターン：よし、行くぜ！

敵撃破：撃破！

勝利：まだまだ、これからさ

戦闘不能：ミリア…ごめん…

戦闘不能復帰：ありがとう、同じ過ちは繰り返さねえ！

アイテム使用：使うぜ！

変身：（なし）

変身完了：（なし）

自己紹介：俺はカイト・ネイラード。よろしくな！

誕生日を祝う：お誕生日おめでとう！これからもよろしくな

メール着信：お、メールか。何かな？

電話着信：電話来てるぞー

褒める：すげえな！これからも信じてるぜ

罵る：お前…らしくないぜ

その他１：あきらめねえ…！俺は最後までやりつくす！

その他２：ミリアは…皆は、俺が守る。だからこそ、俺は強くなりたいんだ。

ミリア・ネイラード

戦闘開始：よし、頑張らなきゃ！

先制攻撃：先手はもらったよ！

バックアタック：しまった！？

自ターン：行くよ！

敵撃破：撃破したよ！

勝利：ボクは、まだまだ頑張れるよ

戦闘不能：カイト…君……ごめんね…

戦闘不能復帰：ありがとう、助かったよ

アイテム使用：使うね

変身：（なし）

変身完了：（なし）

自己紹介：ボクはミリア・ネイラードっていうの。よろしくね♪

誕生日を祝う：お誕生日おめでとう♪

メール着信：メールが来てるよ。何かな？

電話着信：電話だよ？誰からだろう？

褒める：わぁー…すごいね！本当にすごいよ♪

罵る：ごめん…それじゃ良く思えないよ

その他1：ボクも、カイト君のように強くありたい…そんな心を持ち続けたいよ。

その他2：皆の笑顔も、幸せも、日常も…ボクは守りたい。それが、ボクの喜びでもあるから！

ネプMK2バトン（後書き）

これでよかったんかな…？

23話「解放女神姉妹」（前書き）

ネプ姉妹が大変なことになる話です。今回は自重すべきネタがあるんですが、それでもいろいろやばいんで、ネプ姉妹好きの人はご注意ください。

23話「解放女神姉妹」

10:00

キーンコーンカーンコーン！

『イギャアアアァァァァ！！！！！』

ミリア「な、何!?」

カイト「向こうからだ！行ってみよう！」

平和を満喫していたカイト達は、突如聞こえてきた叫び声の主を確かめるために走る。

……

場所は運動場付近。

二人がそこに行くと、何故か新八やリンクなどたくさんの面々が倒れていた。

カイト「お、おいどうした!?」

ミリア「何かあったの!?」

フォックス「…お、お登勢…がが…」

カイト「お登勢…?」

ミリア「誰…?」

カイトとミリアには聞いたことのない人なので、首をかしげるのみ。

「おや、カイト君とミリア君ではないか！いやー、ちょうどよかったのである！」

そこに、ドーンが声をかけてきた。

カイト「あれ、何やってんだドーン？」
ドーン「実は、私が作った新しいクローンの出来を見てもらっていたのである」
ミリア「クローン？誰のクローンなの？」
ドーン「ずばり、こちらであーる！」

ドーンが右腕を広げる方を見ると、二人の変わった顔の女性がいた。

カイト「…？この二人か？（おばさんの方が、お登勢とやらか？）」
ドーン「その通りであーる」
クローン2「何だー、そこのガキンチョ達はー？」
お登勢「こらキャサリン、失礼だろ」
ミリア「あの…貴方達は…？」
お登勢「ふ、よーく聞くんだよ？あたしは…」
キャサリン「あたしらはー！」

チャラーン（リリカルなのはコス＆リリカルフェイトコスに変身）

お登勢「リリカルお登勢よっｖ」
キャサリン「リリカルキャサリンだっｖ」

……。

ミリア「……」

カイト「……うん、こりゃ迷惑かかるな」
キャサリン「殺すぞコラ」

カイトとミリアには通じないが、嫌な気持ちにはなるらしい。

ミリア「なるほどね…さっきの絶叫にも頷けるよ…」
ドーン「うむ、絶叫するほど素晴らしいのであるな！流岩私であーる♪次もこの調子で、カイト君達のシリーズも…」

ばきぃぃぃっ！！！（殴）

ドーン「ぶぅぅっ！！？」
お登勢「おや、やるねえ」

どごーん！！（壁にめり込む）

カイト「絶対作るなよ？あと、次また皆をこんな状態にしたら、まじでつぶす…（怒）」

カイトは殴るほどに嫌な様子だ。お登勢とキャサリンを悪く言うつもりはないようだが、ドーンには連帯責任でむかついたらしい。

ミリア「あー…カイト君とドーンさんの相性はよくないのかも」

それがミリアのコメントだった。

……

教室

カイト「ったく…クローンばっか作りそうで嫌になるぜ」
ミリア「まあまあ、きっとドーンさんもそこまで身勝手じゃないと思うよ。やりすぎたら止めればいいんだから、機嫌直そうよ。ね？」
カイト「…そうだな。今は様子を見ていよう」

こんな時もあるが、今日も平和である。

そう、『平和』であるのだ…

カイト「…ん？あれ、ネプテューヌ達は？」
圭一「さっきまで近く長くにいたんだけど、どこ行ったんだ？」
こなた「トイレかな？」

たったったっ…

ミリア「あ、言ってたら戻って来たよ」
かがみ「おーいネプギアー、何してた……のっ！？」
こなた「かがみ？どしたの……うおっ！？」
カイト・圭一「なっ！！？」
ミリア・レナ「えぇっ！！？」
ネプギア「はぁ…はぁ…ちょっと、お手洗いに…」

例え、ネプギアがレオタード、しかもセクシー度がやばい奴の上に半袖の上着を着ただけの姿で、していても。

ミリア「ぎ、ギアちゃんその姿どうしたの！？」
ネプギア「はぁ…はぁ……じ、実は…今日は何だか肌を露出してないと落ち着かなくて……はぁ…はぁ……そ、それでさっき着替えてきました…／／／」
なのは「しかもはぁはぁしちゃってる！？」

カイト「なんかネプギアらしくねえぞ！？昨晩何があったんだ！？」
ネプギア「そ、それが…シャリアローゼさんに……」

……

シャリアローゼ「貴方達にこれをプレゼントするわ。はまりやすいから、長く楽しめるわよ♪」

……

ネプギア「それで、もらったビデオを見てたんですけど……今日になっても、内容が頭に残ったままで…」
カイト「Σあの淫乱女王サキュバスのせいかぁぁーーーっ！！！」
ミリア「Σアダルトビデオ見ちゃったっていうの！！？」

どうやらノクターンのヒロインが黒幕らしい。

レナ「え、ええと…それで、そんな風になっちゃったの？大丈夫なのかな、かな？；」
ネプギア「だ、大丈夫です…ただ、体が熱いだけで…」
こなた「いやいや、それ大丈夫じゃないって答えになるよ；」
かがみ「にしたって、ビデオ見ただけでここまでなるものなのか？ちょっと変じゃない？；」
カイト「確かに気になるが…」
ビビ「ハァハァハァハァ……（＊´Д`＊）」
ミリア「……次の休み時間に、ビビちゃんと一緒に見てみようよ；」

……

11：00
ビデオルーム

ネプギアにビデオテープを持って来てもらい、ビデオの中身を確かめるために準備をした。なお、見るのはミリアとビビとアイリのみで、他は外で待つ。

アイリ「ご主人様、ビデオ再生の準備ができましたわ」
ビビ「ありがとー」
ミリア「それじゃ、早速見てみよっか」

ミリアはリモコンのボタンを押し、ビデオを流した。

……

10分後

部屋からミリアだけ出て来た。

カイト「どうだった？」
ミリア「うん…あれ、特殊な作りのアダルトビデオだったよ／／／」
言葉「やっぱり…；」

ミリアも恥ずかしがってるあたり、間違いなくアダルトビデオだったらしい。

ミリア「…ふぅ……で…ネプギアちゃんは、催眠術にかかってるよ」
ネプギア「さ、催眠…？」
ミリア「ビデオの内容に見てる人へ催眠をかけるシーンがあってね、

ネプギアちゃんはそのシーンを見たせいで今の状態になってるみたいだよ」
かがみ「催眠？どんな催眠なのよ？」
ミリア「…えと、台詞がひどくアレだから言えない…しかも露骨な淫語…／／／」
カイト「ノクターンノベルズ向けか…；」

言えばアウトな言葉であるようだ。どんな内容かは、シャリアローゼに聞くことをオススメする。

圭一「で、ビビとアイリは？」
ミリア「催眠術を受けたせいで、ヤっちゃってるよ…；／／／」
カイト「あいつら…；」

ビビ達エロティック戦士には効果抜群だったようだ。

カイト「で、ネプギアの状態なんだが、加護ですぐに治せるか？」
ミリア「今回は性質じゃなくて、精神異常だからすぐには無理だね…時間をかけないといけないから、治るのはせいぜい夜の８時ぐらいかな」
レナ「じゃあ、今日１日我慢するしかないね」
カイト「そうなるな。ネプギア、それで大丈夫か？」
ネプギア「はい…我慢してみます…」
ミリア「ごめんね。とにかく、無理はしちゃだめだよ」

「ネプギアーーっ、皆ーーっ！」

ネプギアの治療についてまとまった所に、ネプテューヌが走って来た。

フェイト「あ、ネプテューヌ……って…！？」
カイト「おい、ネプテューヌ…！？」
ネプテューヌ「はぁ…はぁ……どうしよう…なんか露出してなきゃ落ち着かないよぉ～っ！」

なんと、ネプテューヌは水着という場違いな姿をしていた。しかもセクシーな奴。

ミリア「ね、ネプちゃんも催眠術にかかっちゃってたんだ…；」
なのは「ある意味大変なことになっちゃったね…；」

ネプ姉妹が催眠術にかかってしまったこのトラブルに、カイト達はまた振り回されることになるのであった。

……

13：55

授業前

イストワール「お二人の様子はどうですか？」
カイト「保健室で安静にさせてるよ。ドクターにも刺激しないように言ってるから、大丈夫だと思う」
ミリア「加護を与えてますから、最悪の事態にはならないはずです」
イストワール「そうですか……お二人に迷惑かけてごめんなさい」
カイト「いいよ。ネプテューヌもネプギアも、友達なんだからさ」
ミリア「そうですよ、気にしないでください。友達が元気でいてくれるなら、ボク達は喜んで助けるだけですから」

カイトとミリアは、微笑んでそう言った。

イストワール「ふふ…優しいんですね。ネプテューヌさんもネプギアさんも、いい友達を持ちました」
カイト「はは、お互いにな」
ミリア「くすっ…♪」

互いに微笑み合うカイト達。今では、すっかりイストワールともいい仲になっている。

カイト「さてと、そろそろ授業……」

『ガアァァァァァッ！！！！！』

3人「！！？」
ミリア「な、何！？」
カイト「待てよ…？あの咆哮、聞き覚えがある気がするぞ！？」
イストワール「まさか…ガーギルタイガーですか！？」
カイト「くっ！」

だっ！（出）

……

運動場

「ガオォォアアアアッ！！！！」

カイト達の予想は当たってしまった。運動場に、あのガーギルタイガーがいたのだ。

こなた「ちょっ!?ガーギルタイガー!!?」
圭一「何だと!?何でガーギルタイガーがいやがるんだ!?前に俺達が倒したはずだろ!?」
ガーギルタイガー「ガアァァァオォォォオオッ!!!!」
ごおぉぉぉぉっ!!!(風圧)
レナ「はうっ!?」
ミリア「あのガーギルタイガー、前の奴とは違う…!?以前よりも強そうだよ!?」
銀時「おいおい!前回あれだけ苦戦したんだぞ!?前の奴は弱い部類だったっていうのかよ!?」
目の前にいるガーギルタイガの威圧が以前と違う。それはすなわち、以前よりも苦戦することが約束されるに同じ。しかも、以前のガーギルタイガーを倒したネプテューヌとネプギアは、催眠術を受けているために戦うことはほぼ不可能であることを考えると、非常にまずいパターンである。
圭一「くっ、ネプテューヌ達が動けない時に出て来やがって!」
誠「勝ち目はあるのか!?」
言葉「流石に、相手が悪すぎる気が…っ!」
カイト「言ったってしょうがないんだ!何にしてもこいつを放っておくわけにもいかねえ!!」
かがみ「どうせ逃げることもできないんでしょ!?だったら戦うしかないじゃない!」
こなた「どう考えても倒さなきゃいけないボスだよね…はぁ、嫌なもんだよ」
だが、引くことは許されない。カイト達は戦う構えを取る。

ミリア「皆、気をつけてね！」
カイト「絶対に生き残るぞ！！」
ガーギルタイガー「ガアァァァァァァァッ！！！！」

……

その頃、保健室では…

ネプギア「はぁ…はぁ……み、皆の所に行かなきゃ…でも、今動いたら…！」

ネプ姉妹は、未だ催眠効果による発情熱に苦しんでいた。そのため、もしもの場合に備えてネプ姉妹には防衛に回ってくれるメンバーが何人かいる。
しかし、二人はこのまま何もせずにはいられないらしく、この疼きが暴走しないように出れないものか考えていた。そうしていると、ネプテューヌがあることを思いついた。

ネプテューヌ「…やっぱり…あれを解放するしか、ないんだね…」
ネプギア「え…まさか…？」
ネプテューヌ「うん…やりたくないことだけど…この熱を冷ましながら戦うには……やるしかないよ…」
ネプギア「…お姉ちゃん…」
ネプテューヌ「大丈夫だよ…私も一緒だから…ね？」
ネプギア「……うん…っ」

……

戻り、カイト達は…

ズガアァァッ！！！

カイト「ぐあぁぁぁぁぁっ！！？」

ミリア「！？カイト君！！！」

やはり苦戦していたようで、今カイトがツメによる突きをまともにくらってしまい、壁へふっとばされた。しかも、カイトだけでなく圭一やこなたなども攻撃を受けて傷付いている。

圭一「大丈夫かカイト！？」

こなた「カイトまでこのあり様とは…やっぱりやばいじゃん…；」

かがみ「こっちの攻撃はちっとも当たらないのに、何であいつの攻撃はほいほい当たるのよ！？能力チートすぎるだろ！」

ミリア「素早さ、攻撃力、防御力…どれも前の奴とは比べ物にならない…っ」

がららっ…（壁から抜ける）

カイト「ぐっ…強すぎる……何なんだこいつ…っ！（立）」

ガーギルタイガー「ガアァァァァァァッ！！！！」

ボロボロになっていくカイト達だが、ガーギルタイガーは容赦しない。カイトを仕留めようと襲いかかった。

レナ「はぅっ！？カイト君危ない！！」

言葉「逃げてください！！」

誠「だめだっ、間に合わない！！」

ミリア「カイト君ーーーっ！！！（走）」

カイト「っ…こんな所で、やられてたまるか…！！」

再び構えるカイトだが、ダメージが大きすぎる。危機そのものだ。

しかし…

「一撃必倒ーっ！！！」

「決めるっ！！！」

ズバアァァァァッ！！！（クロス斬撃）

ガーギルタイガー「グガアァァァァ！！！」

カイト「な、何…！？」

ずざざざざーーーーっ！！

カイトに攻撃が行く寸前、ある二人によってそれは阻止された。そして、その正体もはっきりわかった。

カイト「ね、ネプテューヌ…ネプギア…！？」

ネプギア「カイトさん…大丈夫ですか？」

カイト「あ、あぁ……でも、二人と…も……！？」

ネプギア（パープルシスター）、そしてパープルハートが助けに来たのだ。

ただし、姿は別だった。

ザック「うおぉぉぉぉ！！？」

銀時達「オイィィィィィ！！？」
他男達「ぶふぅーーーーっ！！？」

学内に待機している男達が、鼻血を吹き出した。何故なら、ネプ姉妹が原因だからだ。

答えは、二人のプロセッサがいつもものではなく、絆創膏だったからだ。
つまり、大事な部分を絆創膏で隠しただけの、ほぼ全裸姿である。

圭一・誠「ぶふぅっ！！？」
こなかが「ちょっ、おま！！？」
ミリア・レナ・言葉「え、えええぇーーーーーーーー！！！？？」

まさに、サプライズ。

カイト「お、お前らそそそ、その姿は何だぁっ！！？」
パープルシスター「その…き、気にしないでください」
ミリア「いやいや、気にせざるを得ないんだけど！！？」
パープルハート「催眠の効果をおさえるには、こうするしかなかったの。大丈夫、奴を倒したらすぐに戻るわ」
カイト「け、けどその姿やばくねえか！？どう見ても過激な姿以外何物でもねえし！！下手すりゃノクターン行きだぞ！？」
パープルハート「表でも15禁向けがデフォよ。問題ないわ」
こなた「つーか、恥ずかしくないの？ほぼ全裸だし；」
パープルハート「……ふふ…ネプギアと一緒なら、これくらい耐えられるわ」
かがみ「いやいやいやいや…；」

ガーギルタイガー「…グ、グルルル……」

どこまでつっこむか続けていると、さっきの攻撃でようやくダメージを受けたガーギルタイガーが、ネプ姉妹を見て警戒している様子だ。

ミリア「あれ…タイガーの様子がおかしい…？」

パープルハート「さあ、すぐに終わらせるわ」

パープルシスター「いきます！！」

ばっ！（突撃）

こなた「って、そのまま行っちゃったーーー！！？」

レナ「あ、危ないよ二人共！そんな姿で攻撃を受けたら……」

ザシュッ！！！ズガァァッ！！！

ガーギルタイガー「キャイィィィーーン！！！」

カイト「って！？」

そのまま戦闘に入ったネプ姉妹が、ガーギルタイガーを圧倒しだした。カイト達全員て戦ってひどく苦戦していたのに、ネプ姉妹はその現実をぶち壊していく。タイガーにいたっては、まるでびびっている犬のようになってしまっていた。

言葉「つ、強い！？」

かがみ「嘘ぉっ！？」

ミリア「な、何で！？なんかネプちゃん達が強くなってる！？」

パープルシスター「体が軽い…こんなに爽快な気分、感じたことない…！」

パープルハート「このプロセッサなら…もう、何も怖くない！」
こなた「それどういう意味！！？しかも死亡フラグ立てちゃだめだってば！！；」

解放された気分というやつだろうか？

ビビ「ふ、ふふふふ……へブン、だわ……（＊´Д｀＊）」
ザック「へ、へへへへ……」
アリエス「はぁはぁ…はぁ……」
はやて「うわぁっ！？鼻血で倒れてる人むっちゃおるやないかい！？」
なのは「み、皆しっかりしてぇーっ！」

やはりほぼ全裸で戦う姿を見て、ぶしゃーになる人は数知れないらしい。

ガーギルタイガー「キャイィィィーン！！」
パープルハート「皆のために、私達は負けられないの！！！」

だっ！（ヴィオレットシュヴェスター）

パープルシスター「お姉ちゃん…私、皆を守るために…！」
パープルハート「らしくなってきたわね、ネプギア」

ズバババババババシュッ！！！

パープルシスター「これで、終わりです！」

ちゅどおぉぉぉぉぉん！！！

（爆発）

ガーギルタイガー「キャウゥゥーーーン！！！」

どしーん！（倒）

なんと、倒してしまいました。

カイト「た、倒しやがった…！？」

こなかが「ま、まじっすか…；」

言葉「ど…どういうことなんでしょうか…？；」

ネプ姉妹のみでガーギルタイガーを倒したことに、カイト達はただ唖然とするしかなかった。

キュイィーン！（戻）

ミリア「あ…」

ネプテューヌ「ふうー…うまくいったけど…／／／」

ネプギア「あぅぅ…すっごく恥ずかしいよぉ…／／／」

ネプテューヌ「やっぱり、意欲的にやるものじゃないね…／／／」

カイト「そりゃそうだ；」

最な話である。

……

かくして、ガーギルタイガーの危機は去り、ネプ姉妹の催眠も無事解けたのであった。ちなみに、ネプ姉妹がガーギルタイガーを圧倒したことについては、あの絆創膏プロセッサによる効果のおかげらしい。効果については、防御力を引き換えに攻撃力を莫大に上げるのだとか。きっと、特殊なことをして付加されたのだろう。

後日、ネプ姉妹はあの出来事を黒歴史として、心に恥ずかしさと共に濃く残したそうな。

ちなみに、シャリアローゼには一応催眠をかけるようなことをしないよう、カイトとミリアがきつく念を押した。

ビデオはというと…

アリエス「ふふふ…これがあればきっと…」

なんか別の人んとこに行ってた。

23話「解放女神姉妹」（後書き）

本当なら痴女になってらめぇなことをたくさんやるつもりでしたが、本家に悪いんで自重しました。
でも、やばいことしたよな…；

ごめんなさい！m（＿＿；）m

２４話「カイトとミリアと空の板」（前書き）

本家よりスライダー競争です。空はいいよね

24話「カイトとミリアと空の板」

きぃぃぃ、い、いいんっvここ、ぉぉおおおんっv、かぁぁぁ、
あああんvこぉぉ、おおおおんv

全員「……」
カイト「…なあ、本気で殴りに行っていいか？」
銀時「カイト、俺にも殴らせろ」
土方「おい、俺も混ぜろ」
かがみ「ていうか、前回抗議してマゾチックとエッチ・ザ・ハードには放送やらせないって決まったんじゃなかったのか？；」
こなた「理事長がちょっと留守の間に、悪戯心が騒いでチャイムの真似でもしたんじゃない…？；」
ちなみに、今のチャイムはエッチ・ザ・ハードである。放送やりたくてたまらなかったのだろうか？

誠「それにしても、ここ最近暇だなぁ…」
カイト「そうだな…あの騒動があってから、何も起きてないしな」

前回のネプ姉妹の催眠騒動の後、一週間以上経過してもハプニングどころか面白い馬鹿騒ぎネタもないため、ほぼ全員が暇を持て余している。デニーに関する情報を集めに行くにしても、現状では微妙なところだからますますやることがない。
まじで暇なのだ。

銀時「別にいいだろ？何もないのも平和な証拠さ。こんな時は下手に刺激を求めてねえで、のんびししてりゃいいのさ」

カイト「まあ、わからなくねえ話だけどな…」
ネプテューヌ「むうぅ～…退屈だよぉ。誰か面白いことやってよぉー」
ネプギア「お、お姉ちゃんっ、そんな抱きつかないでよっ／／／」
退屈だと愚痴るネプテューヌは、ネプギアに抱きついて猫のようにくたりと力を抜いている。
沖田「おーい、俺に1つリクエストありやすぜー」
圭一「ん？聞こうか」
沖田「土方さんが全裸で土壌すくいすりゃ一気に爆笑もんだぜー」
土方「てめえがやってろドアホ」
アリエス「はいはーい！ネプテューヌさんと私の愛の劇場を…「却下」しょぼーん（´・ω・`）」
言葉「あの、皆で映画を見るというのはどうでしょうか？」
ラム「あ、それいいね！見たい見たい！」
ロム「私も、見たい…」
なのは「私も賛成。それで、何か候補はある？」
言葉「はい、最近店で借りたＤＶＤを今持ってますよ。題名は『着信アリ2』というのが…」
アイエフ・銀時・ビビ・その他「嫌あああああああああっ！！！それ嫌あああああああっ！！！！」
言葉「え…もしかして、苦手でしたか？私は、結構気に入ってるんですけど…」
こなた「そういえば、ホラー好きだったんだっけ…」
アイエフ「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない……（ガクブル・涙目）」
コンパ「ほらほら、あいちゃん大丈夫ですよ。あれはフィクションですから、何も起きたりしないですよ（なでなで）」
アイエフ「うりゅぅぅ…（；＿；）」

銀時「…ケータイ壊れてねえのに、なんか幼児退行してるぞ？」
ミリア「携帯電話から幽霊や呪いが出るお話だからね…きっとそれで関連して怖いんだと思うよ」
カイト「お気に入りから嫌なものが出るとなるとなぁ…・；」
アイエフは携帯電話がらみになると、案外もろいのかもしれない。
圭一「にしても、確かに暇だよなぁ。何か面白いことねえかなぁ…」
暇で暇でどうしようもない一同。
がららっ（ドア開く）
そこに、理事長が入ってきた。
真王「お前達、そんなに暇なら面白いゲームでもしないか？」
カイト「あれ、理事長？」
ノワール「面白いゲームって何よ？」
真王「知りたいなら、全員運動場に集合すること。別空間でやるから、それなりに準備はするように。以上」
たったったっ…（去）
ミリア「どんなゲームなのかな？」
ネプテューヌ「面白いって言ってたし、やってみようよ！」
圭一「そうだな、そうするか」
……
運動場

というわけで、全員運動場に集合するのだった。

真王「よし、時間もちょうどいい。始めるとするか。空の空間、オン！」

全員いることを確認し、理事長真王は力を発動して別空間を開いた。

……

特殊空間　空

いくつかの足場があるだけで、下も周りも空一面の場所に到着した。
目立ってるのは、いくつもの板が斜め下へ向けて並んでるということだ。
あとは、大きな観客席があるだけ。

カイト「あれは、スライダーか？」
ミリア「向こうに何か光ってるものがあるみたいだけど…」
真王「今回のゲームは、空のアスレチック・スライダーバージョンだ。ルールはいたって単純。スライダーを滑って、あそこにあるサンシャインの紋章をゲットすることが目的だ。一応ランク付けのためにゴールラインも用意するが、一番を取りたいのならばサンシャインも取ることだ。ちなみに、今回は相手への妨害もありだ」
新八「滑るって…これ、結構ジャンプとかしないと無理ですよね？」
真王「まあな。そして、今回の優勝者には景品も用意している。ぜひ頑張ってほしい」
近藤「景品付きか…よし、いっちょやるか！」
銀時「で、今回の出場メンバーは？」
真王「全員でやりたいところだが、今回はサンプルステージでな。

すまないが１０人に限定させてもらおう」
こなた「ふむふむ。まあ仕方ないよね」
真王「さて、選出方法はご指名でいく。日ごろの成績も見て、俺が選ぶとしよう」

そういうことで、今回真王が選んだメンバー（理由つき）は…

カイト　（総合的に頑張ってる）
ミリア　（総合的に頑張ってる）
ネプテューヌ（運動系は優秀）
ネプギア　（成績優秀）
ノワール　（成績優秀）
ユニ　（成績優秀）
こなた　（新人だがよくやってる）
圭一　（新人だがよくやってる）
近藤　（理由は後ほど言う）
マリオ　（スライダー名人）

以上のメンバーとなった。
他のメンバーは観客として見ることになる。

真王「では、スタート位置についたところで始めるとしよう」

カイト達がスタート位置に立ち、それぞれ意気込む。

ネプテューヌ「ふふーん、一位は私がもらうからねー！」
ノワール「それはどうかしら？私が勝つんじゃないかしら？（余裕）」
ネプギア「頑張ります！」
ユニ「負けられないわ！」

こなた「近藤さん、ゴリラパワーとやらを見せてもらいますぜ？」
近藤「ゴリラではない！愛のパワーと言え！」
こなた「え…？；」
圭一「ふっふっふっ…俺が勝っちゃうもんね」
マリオ「この勝負、いただくぜ」
カイト「いかに妨害をしのいでいくかどうか…だな」
ミリア「何にしても、頑張らなきゃ！」

真王「それではスタートだ」

3，2，1…GO！！！

合図とともに、全員は勢いよくスライダーに乗り出した。そして、最初の斜面からいい滑りで進みだす。最初に先頭を滑るの、近藤だ。しかも、距離もいい感じで開いている。

近藤「ひゃっほおーーう！このまま一気にゴールまで…」

ぱかっ（開）

近藤「ん？」

真ん中を滑っていたのだが、その途中に四角っぽい部分に乗ると木の床が一部分開いた。
下は空、すなわち…

近藤「な、何だとぉぉぉぉぉぉぉ！！？」

ひゅうぅぅぅぅぅ……

近藤「お妙さあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ………！！！！」

………

かがみ「ちょ、落とし穴！！？」
真王「スライダーにはトラップもあるから気をつけろ」
土方「……ちなみに、近藤さんが選ばれた理由は？」
真王「チュートリアル役として必要だったから」
銀時「踏み台かよ…；」

………

残り９人

カイト達は順調に滑っているが、後ろの方にいる。今目立っているのは、圭一、こなた、マリオだ。３人が先頭を滑っている。
ちょうど、第２関門に差し掛かるように、落とし穴多めのジグザグ道に入った。

圭一「落とし穴か…なら…！」
マリオ「ん？（なんか仕掛けてくるか？警戒しとこう）」

圭一が何かを目論んでるのを見たマリオは、距離を取るように離れて滑るようにした。こなたは普通にうまく滑ってるが、圭一はそのこなたに狙いを定めた。

こなた「ん？」
圭一「こなた覚悟ぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」

圭一がキックの構えをして、こなたを落とそうと攻撃滑りをしてき

た。今回は妨害あり、故に圭一は容赦することなく落としにかかった。

こなた「あー…やめといた方がいいのにねぇ」

ひょい（外れ）

圭一「え？」

ぱかっ、ひゅうううぅぅぅ……

圭一「ＮＯーーーーーーーーーーーー……！！！？？」

しかし考えが甘かった。キックを外した後のことを考えてなかったのか、外れた先の落とし穴にはまり、無残に落ちて行った。

最も、こなたがちょっと前に行ってよけたわけだが。

こなた「このゲームじゃ妨害はあまり意味ないんだよねー。妨害ばかり考えてると、距離を離されるのがおちだよ。これマリオカートと違うんだし」

……

レオン「…妨害よりも進むのが目的だろうに…」

レナ「…圭一君、かっこ悪いよ；」

……

圭一、近藤が落ち、残るは８人。

ちょうどカイト達８人は、傾斜からややＵ字の床に差し掛かり、全

員一気にジャンプ。彼らの着地を狙う場所は、下にあるトランポリン。そこから次の床へと飛び移る必要があるのだ。

こなた「ひゃっほう！私が一番に跳ねるよー！」
マリオ「悪いが、一番はもらうぜ！」

先にこなたとマリオがトランポリンに着地し、同時に次の床へ向かって大ジャンプした。
ところが…

ごんっ、ちゃりーん（ブロックに当たり、コイン1枚ゲット）

こなた「え？」
マリオ「え？」

ひゅうううぅぅぅぅぅぅ……

こなた「ちょっ、孔明の罠だとおおおおおおおおおお…！！？」
マリオ「しまったあぁぁぁぁぁぁ！！？その可能性を忘れてたあぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！」

……

ルイージ「に、兄さあぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！？？」
真王「よかったな。勝敗関係なくコインを手に入れて」
銀時「いやいやいやいや、いくら何でもあのトラップは鬼畜すぎるだろおおおお！！？」
真王「言ったらつまらないだろ？」
土方「いやわからなくねえけど、一応注意ぐらいは言ってもよかっただろ！？」

ビビ「やっぱり鬼畜ねあんた…；」

……

ユニ「な、何て嫌な構成なのよ…；」
ノワール「全くね…とにかく、注意して進みましょう」
ネプテューヌ「とりゃー！一番は私がいっただきー♪」
ネプギア「ま、待ってよお姉ちゃーーんっ！」
カイト「皆早いなぁ。俺も負けてられねえ！」
ミリア「くすっ、ボクも負けてないよ♪」

孔明の罠がありそうな空を抜け次のスライダーへ滑って行く6人。
その後もらせん状に回る地帯、続いて上にジャンプしながら登っていくトランポリンコース、カービィのエアライドによくある線を自動的につたって華麗に進んでいくコースなど、6人は順調に進む。
しかも、気がつけば6人共感覚に慣れてきたために、自ら立って滑る姿勢になっていた。

カイト「よっ、はっ！…よし、いい感じだな！」
ミリア「うんっ、それに風も気持ちいいし、楽しいなぁ♪」
ユニ「ちょっと！私を置いていくなんて、いい度胸じゃない！」
ネプテューヌ「ふふーん、一番は渡さないよー♪」

特に、カイトとミリアは他の4人以上に楽しんでいる様子だった。
空でこんなに飛び続けているのは、二人にとっても気分がいいらしい。

カイト「ははっ、こんなに楽しい気分になるのは久しぶりだぜ。やっぱ、空っていいもんだよな！」
ミリア「うんっ♪」

ノワール「ふふっ、確かに悪くないわね。こんな風にうまく飛び続けてれば、いい気分になるもの」
ユニ「孔明の罠とかがなければ、もっといい気分になれるんだけどね…；」

その後も続く難関を次々と楽しく突破していき、ついに6人はゴールラインを突破した。
後は、向こう側にある小さな床にあるサンシャインを取るだけである。

カイト「あのジャンプ台から滑って飛べばいいな！行くぜ！！」
ネプテューヌ「一番はもらったー！！」
ネプギア「私も行きます！」
ノワール「そうはいかないわよ！」
ユニ「私だって！」

ばっ！

ミリア「チャンス到来！このままいく！！」

5人が意気込む中、なんとミリアが5人よりも先に飛び出した。順位的に真ん中あたりの距離から、一歩ステップしてギリギリ手前の位置で着地し、そこからうまく滑り飛んだのだ。

カイト「な、しまった！？」
ネプテューヌ「ねぷっ！？」

5人が追うように飛んでも、時すでに遅し。先にミリアが床に到達して、サンシャインを華麗にゲットした。

ミリア「サンシャインゲット！この勝負、もらったよ♪」

すたっ、すたっ！
がしっ、がしっ、がしっ！

その後の結果は、ネプテューヌとネプギアが床に着地。カイト、ノワール、ユニは床の隅に捕まった状態で終わった。

ネプテューヌ「うぅ～、もう少しだったのにぃ！悔しい～っ！」
ネプギア「負けちゃった…でも、お姉ちゃんと並んだからいいかな♪」
カイト「何てこった、またミリアに一本取られちまったか（微笑）」
ユニ「うぅ…こ、今回はちょっと調子が悪かっただけよっ！本当なんだからね！」
ノワール「はぁ…いい感じだったのになぁ」

……

結果発表

一位　ミリア
二位　ネプテューヌ、ネプギア
三位　カイト、ノワール、ユニ
アウト　マリオ、こなた、近藤、圭一

……

運動場

真王「一位おめでとう、ミリア。いい身軽な動きを見せてもらった」

ミリア「そう褒めてもらえるなんて…ありがとうございます」
真王「さて、それでは景品を渡すとしよう。チート、例の物を」
チート・ザ・ハード「はっ」

チート・ザ・ハードはある物を取り出し、ミリアに渡した。その景品なのだが…

ミリア「…え?何ですか、これ…?」
エッチ・ザ・ハード「私から教えましょう!それはずばり、『丸一日精力無限!淫らに乱れたい貴方へ一本!サキュバスドリンク』!!夢魔の間でも重宝されてる特性媚薬よ♪」

……。

全員「えええぇぇぇーーーーーーー!!!??」

なんと、媚薬だったのだ。

ミリア「びび、媚薬!?ど、どうしてこれを!?」
カイト「じゃあ、俺達はその媚薬のために競い合ったっていうのか!?」
ネプテューヌ「うっわぁ…なんか騙されてた気分;」
ネプギア「同じく…;」
ユニ「…負けて正解だったのかもしれないわね…;」
近藤「何を言うか!?めっちゃレアな景品じゃないか!くっそーっ、欲しかったぞぉー!」
圭一「くぅー…せっかくのチャンスを逃すとは!」
ノワール「…あんた達のような変態にとってはね;」
マリオ「何に使えっていうんだ?つか、媚薬ってどんな薬なんだ?」

こなた「マリオ、ちょっと鈍感過ぎない？；」
ヴィータ「やっぱ理事長の考えはわかんねえ…；」

各々がそれぞれの気持ちを抱き、暇つぶしはこれで終わりとなったのであった。

ミリア（……媚薬かぁ…これを使えば、いつもよりはいい感じになるのかな…？だったら…）
カイト「？ミリア、何媚薬を見つめてぼーっとしてるんだ？」
ミリア「え！？う、ううんっ、何でもないよ」
カイト「そうか？ならいいけど…」
ミリア（……もらえて、よかったかな？）

ミリアは心の中でそう思った。

ノクターンノベルズイベントフラグたちましたｗ

２４話「カイトとミリアと空の板」（後書き）

というわけで、ここからノクターンにてカイミリを手始めに裏のアナザーストーリーを書くことにします。媚薬にするかは未定です。

25話「自惚れた襲撃者」（前書き）

ヴァーラガルザさんの敵キャラが襲撃してきます。前・中・後に分け、今回は2人と戦います。

25話「自惚れた襲撃者」

22：00

運動場

ぶん、ばっ、しゅばあああ！

夜空の下、カイトが素振りを主とした修行をしていた。今夜は風が気持ちよく、カイトにとってこういう環境で木刀を振るうことは好きなのだ。

カイト「……よし、この分ならそろそろ見えてきそうだな。そろそろ次に行ってみようかな」

たっ…たっ…

「熱心だな、お前」

カイト「あれ、お前は確か…雄大？」

そこにやって来たのは、ＯＳＧを束ねる者の雄大だった。彼は、１人で修行するカイトを見かけたのだろう。

雄大「いかにも。お前はカイトだろ？噂はよく聞いてるぜ。最近、学園でよく目立ってるそうじゃないか」

カイト「目立つつもりはねえんだけど…まあ、いろいろやってるからかな」

雄大はカイトのことを知っていたようで、少し意外な気持ちになる

カイト。

雄大「それになかなか強そうだ。どうだ、ＯＳＧに加わらないか？お前なら、奴らをぎゃふんって言わせられそうだ。俺達全員歓迎するぜ」

雄大はカイトの素質を買い、ＯＳＧへ勧誘してきた。どうやら、雄大達からも注目されているのだろう。
だが、カイトは丁寧に断ることにした。

カイト「気持ちはありがたいけど、お前達の競争に加わるような柄じゃないよ」
雄大「そうか？見た所、お前ってなんか正義のヒーローって感じしてるからさ、きっと俺達の苦しみがわかるはずだと思うんだが」
カイト「全然わからないわけじゃない。けど、俺は正義が嫌いでね…俺からしたら、どっちでもない者だと思うよ」

少し悲しげに言うカイト。

カイト「その後のことを思うと…どうしても、正義に身を委ねたくないんだ。俺が、俺でなくなりそうだから」
雄大「……？」
カイト「…って、そういう話じゃなかったな。ごめん、話がそれたな」

はっ、と気付いて苦笑する。雄大にいたっては、そんなカイトを妙に感じている。

雄大「…変なことを言うんだな」
カイト「はは…反論はしねえよ」

雄大「にしても、そこまで考えることなのか？ただ、正しいか悪いかの違いだろ？何でそんな正義を嫌って……お前、強いらしいし」
カイト「強い…か。本当にそうなのかな」
雄大「？？」

カイトは少し歩きながら喋る。

カイト「確かに強くなっていく感じはしてる。けど、まだまだだめなんだ…まだ頑張っていかなきゃ、皆の力になれない」
雄大「…まじめだなぁ」
カイト「まじめとかそれ以前に、わかりやすい話なんだよ」
雄大「え…？」
カイト「チート…この学園にもそんな能力を持つ者がたくさんいる。チート・ザ・ハード、レオンさん達3人、他にもビビなど…あらゆるチート能力を持っている。…けど、俺はどうだ？何の証もなけりゃ称号もない……ただの異端な者でしかない」
雄大「……」
カイト「まだ、だめなんだ…」

目を閉じ、カイトは自分に言い聞かせるように言う。それは、カイトの心の表れでもあった。

雄大「…よくわかんねえけど、そこまで弱くはないんじゃねえか？」
カイト「どうしてそう言える？」
雄大「だってよ、カイトはそう言いながら高難易度のショートミッションをクリアしたり、バウンサーとかいう強者達に次々と勝ってきたんだろ？それなのに弱いなんて、ありえねえよ」

雄大は、カイトが模擬戦でマスタービーを倒したり、他にもガーギルタイガーを相手に勇敢に立ち向かう姿を見たことがある。

それだけではあるが、カイトは強いと思うには十分だ。

雄大「カイトなら絶対大丈夫だって。俺達の組織でなら、副隊長にだってなれる！だから…」

カイト「くどいよ。俺はそんな柄じゃないし、そっちの競争に加わる気もない。嫌な戦いじゃないんだし、俺が参加する必要だってないはずだ」

雄大「カイト…」

目を開き、カイトは顔を上げて言う。

カイト「俺はただ…皆と一緒に生きていたい。そのために強くなりたい…それだけだよ」

その目は、純粋なものだった。

カイト「それに…ミリアを悲しませたくないしな」

雄大「…お前…」

そこまで…、の続きの言葉を出しかけた時だ。

「下らん男だ、お前は」

カイト「！！」

カイト達の前に、青い服を着た１６歳程の青年がどこからともなく現れた。

「相変わらずだな。その子供ぶりは」

カイト「お前は…イオド！！生きていやがったのか！？」

雄大「イオド…？」

イオド、そう呼ばれた青年は雄大に応える。

イオド「ディプクロシス・イオドだ。覚えておけ、弱者」
雄大「じゃ、弱者だと!?」
カイト「見下す癖もそのままか。どこかでバチが当たってるかと予想してたんだが…」
イオド「バチ?違うな、報われたんだ。あの方に俺の実力を買われてな」
カイト「あの方…?」

イオドが言う人物を連想するカイト。少しの時間だけで、答えは出た。

カイト「まさか、デニーか!」
イオド「いかにも」
雄大「…お、おい?あいつのこと知ってるのか?」

話についていけない雄大は、イオドについてカイトに訪ねた。

カイト「奴は、元エリート学園代表の剣士…そして両親を幼い頃に権力争いで亡くしたために主君となった、ディプクロシス貴族の一人息子だ。俺とミリアがエリート学園にいた頃、一度だけ模擬戦で戦ったことがある」
雄大「エリート学園の人間だって!?あの腐れ外道の学園のか!?」
カイト「あぁ…剣の腕で有名だったのも覚えてる」
イオド「そう…本来なら、あのまま全世界最強の剣士へと昇格していくはずだった。だが…カイト、貴様がその最強伝説に泥を塗った」

拳を握りしめ、少し震えさせて理由を話す。

イオド「貴様と初めて模擬戦を交わしたあの日……」

……

回想～カイト対イオドの模擬戦～

イオド「勝負は見えたな、弱者カイト。所詮お前はBクラスの人間…Aクラスの俺に勝つことなど夢のまた夢でしかないんだ」

カイト「がはっ…ぐ…っ！！」

勝負ははじめ、俺が優位に立っていた。カイト剣技を見切り、一方的に追い詰めていたのだ。誰もが俺の勝利を確実なものだと見ていた。だが…

イオド「弱者はこの世に必要ない…カイト、貴様はここで死ね」

カイト「…！！」

イオド「これで終わりだ！！（構え）」

だっ！（突撃）

カイト「…弱者はこの世に必要ない…だと…？」

イオド「最高奥義・天空覇王剣！！！（全霊のダッシュ突き）」

がきいぃぃぃぃん！！！（弾く）

イオド「なっ！！？」

カイト「…下のクラスの人間は皆、死ねって言うのか…！！！」

イオド「馬鹿な！？俺の最高奥義が…！？」

カイト「……ふざけるな…」

だんっ！！（力強く踏み込む）

カイト「ふざけるなあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！（フルスイング）」

すどばあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！（クリティカル）

イオド「ぐばあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？？」

〜回想終わり〜

…………

イオド「…俺の最高奥義を止め、挙句たった一撃で俺を地にひれ伏させた。あれだけ追い詰めていたのにだ」

雄大「…カイトが、勝ったのか？」

イオド「そうだ…忌々しい思い出だ。あの敗北を機に、俺は学園評議会から段位下落をくらい、さらには俺の最強伝説が格下に見られ続けるという屈辱を味わうはめになった。しかも、カイトがエリート学園を一度壊滅させたあの日を境に、世間からの評価も落ちていたために居場所を失いさまよい続けたんだ…！」

徐々に怒りをあらわにしていくイオド。

イオド「あの時の苦痛と屈辱…俺は忘れはしない…！壊滅当日にも、貴様から受けた打撃の痛みもな！！」

最終的には、カイトに己の不幸を語りぶつけるに至った。だが、カイトは真剣かつ鋭い表情でイオドを見ている。

カイト「模擬戦での敗北をきっかけに堕落してしまったという話は聞いていた。だが、俺がお前をたたきつぶした理由はその復讐に関係することじゃない。お前が、奴らと同様に性交の秩序を築こうとしていたからだ」

イオド「…！！」

カイト「知らないとは言わせないぜ。俺達が学園を離れた後、イオドのことについても念を押して調べさせてもらった。評議会や他の連中ほどではなかったが、ある1人の女性を己の秩序に組み込もうとしていたことはすでにわかっている。確か、貧困層の住民達に慕われている心やさしきグランドール貴族の一人娘、シルフィを汚い手口で自分の物にしていたんだったな」

雄大「シルフィ…？それってあの、格闘術や細剣術をもたしなんでいたっていう…？」

カイト「そうだ。そしてシルフィには彼氏ができていたんだ。名はカルフといって、同じく貧困層で慕われていた、格闘武術を重んじるチオウ貴族の一人息子だ。だが…イオドはそのカルフを自分の独善で殺害してシルフィを奪い、後に二つの貴族を金と権力で滅ぼした。もちろんカルフとシルフィの両親も謀殺してな。だから俺は、1回目のエリート学園襲撃の時にイオドもたたきつぶしたんだ。…ぎりぎりだった…あと少し襲撃が遅かったら、シルフィは間違いなくこいつに犯られていただろうな…」

深く思いだし、ありのままに話すカイト。カイトにとって、イオドもまた許せない存在なのだ。

雄大「な、何て奴だ…！」

カイト「イオドをたたきつぶしてからシルフィを安全な環境へ返した後、彼女がそれからどうしているのか…その情報はまだ入ってない。立ち直ったか、それとも落ちたままか……いずれにしても、シ

ルフィの人生は一度滅茶苦茶にされた事実は消えない。イオド…てめえのせいでな」

カイトはイオドを睨み、あの時の怒りを再び呼び起こした。イオドは冷静な表情に戻し、話をつなげた。

イオド「…ふん、さも俺が元凶のように言うのだなカイト。俺は、シルフィの人生を想ってやっただけだ。あのような弱者がシルフィを幸せにできるとは思えん…だから、俺がその役目を変わろうと思ったんだ。シルフィ…身体と精神共に強く、そして美しい…彼女は俺の妻にふさわしい存在。だが…その彼女が今どこにいるのかはわかっていない」

カイト「そこで、超次元学園から情報を頂くために来たってわけか。にしても…あれだけ叩きのめしたってのに、まだあきらめてなかったのか。しかもデニーの部下になるとは…」

雄大「まじかよ…外道が他にもいやがったとは…！」

カイト「どこにでもいやがるのが今の現実さ…だから、野放しにしちゃいけない」

話を聞いて憤る雄大と、イオドのような外道はまだたくさんいることを告げるカイト。

イオド「話はもういいだろう。デニー様の命令により、ダヌ理事長の奪還及び学園に存在する魔導書全てをもらいうける。それと、セレナやステラとその他仲間全員にも来てもらう」

雄大「何だと！？」

イオド「そこをどけカイト。俺はもう昔の俺ではない…すでに貴様など俺の敵ではない」

カイト「…自惚れるな、イオド」

しゃきんっ！（木刀をしまい、バスタードソードを抜く）

カイト「そう言われてどくわけねえだろ。てめえは、今度こそここで止めてやる！！」

イオド「愚かな…いいだろう」

しゃきんっ！（ある剣を抜く）

イオド「今までの恨み…ここで返させてもらおうか、カイト」

カイトとイオドは対峙し合い、戦いが始まろうとしている。

カイト「雄大、こいつは俺が相手する！お前は皆に知らせてきてくれ！他にも襲撃者がいるかもしれないから、理事長達にもすぐに探知をさせてほしい！」

雄大「わ、わかった！気をつけろよ！」

たったったっ！（学校内へ戻る）

イオド「今の俺は、昔のようなヘマはしない。今度こそ、貴様の血を浴びさせてもらう」

カイト「させるかよ。てめえの野望もろとも、たたきつぶす！！」

かつて、エリート学園で剣を交えたカイトとイオド。今、再びぶつかる。

だっ！（どちらも突撃）

イオド「行くぞカイト！！」

カイト「覚悟しやがれ外道があぁぁぁぁぁぁっ！！！」

続く

25話「自惚れた襲撃者」（後書き）

またもやセレナ達関連も入りました。
ダヌについては…そんな構えなくてもいいです。いいネタありますしw

26話「冷酷な魔導士」（前書き）

ミリア達視点の話になります。もう1人はここで登場です。

26話「冷酷な魔導士」

あらすじ

月明かりが綺麗な夜に、超次元学園への襲撃者が現れた。
イオドと名乗るその襲撃者は、かつてカイトが一度倒した因縁の相手。
カイトはイオドを止めるために、一人で立ち向かう。
しかし、襲撃者はイオドだけではなかったのだ…

……

学内

チート『緊急報告です。超次元学園にデニーの部下と見られる襲撃者が現れました。戦える生徒は全員出撃してください。なお、他にも襲撃者がもう1人いるようですので、注意するように。繰り返します。超次元学園に……』

たったったっ…！（走）

アイエフ「またデニーの部下ね…今度は何をしでかす気なのやら」
ネプテューヌ「も～、せっかくネプギアとこなた達とレースゲームで白熱してたのに～！」
こなた「いやあ、これで邪魔されちゃあ敵にちょっち怒りが湧くね～」
かがみ「ちょっとどころかすっげえむかついてるけどな！」

どがあぁぁぁぁぁん！！！

なのは「！？爆発音…どこから！？」

ミリア「…！体育館からです！そこに誰かの気配があります！」

圭一「体育館だと！？」

……

体育館

ネプテューヌ「ここだね！？こらーっ、出て来なさーい！！」

セレナ「！？皆、伏せて！！」

レナ「え！？」

ずがしゃあああああん！！！

セレナが叫ぶと同時、ネプテューヌ達の目の前には氷塊が飛んできていた。セレナとステラはすぐに前へ出てバリアを展開し、氷塊を防いだ。氷塊は豪快に砕け散り、あたりに破片が突き刺さる。

「おやおや…用のある人達が自ら来てくれましたか。手間が省けて助かりましたよ」

そして撃ってきた方を見ると、そこには緑のスーツを着て杖を突いた老紳士がいた。彼の手には金色の魔道書がある。

ネプギア「貴方が襲撃者ですね？一体何者ですか！」

「お初目にかかります。私はゾディアック・ランドルフ・カーターと申します。デニー様の命により、ここに参上いたしました」

ミリア「デニーの部下…！」
銀時「またデニーの犬かよ…めんどくせえ、とっとと出て行けよじじい」
ゾディアック「その前に、セレナやステラにはこちらに来て頂きたいのです。もちろん、お仲間もご一緒してほしい所ですが」
アイエフ「どうせ碌でもないことに利用するんでしょう？はいどうぞって言うわけないじゃない」
ネプテューヌ「こっちはせっかくの時間を邪魔されて迷惑してるんだよ！まだ邪魔する気なら、ぼっこぼこにしちゃうよ！」

突然襲撃してきたゾディアックに対して、ネプテューヌ達は敵意むき出しで睨んでいる。

ゾディアック「穏やかでありませんねぇ。あまり手荒にしてほしくないのですが…」
銀時「てめえが言うんじゃねえよ、じじい」
ゾディアック「おやおや…まあいいでしょう。貴方達を始末しても問題はないことですし、すぐに片付けましょう」

そう言うと、彼は本を開いて魔法陣を展開。攻撃態勢に入った。

アイエフ「結局やる気満々じゃない！ま、どうせこうなるとは思ってたけどね！」
ゾディアック「そうですか。では受けなさい！テオルゼオルド！」

ぐおわあああああ…！

呪文を唱えると、本から雲がもくもくと出てきて上空に大きなそれとなる。すると…

しゅばばばばばばばばばばばばばばば！！！

ネプギア「な、ナイフの雨！？」
ネプテューヌ「ねぷ！！？」
ミリア「まずい！？修羅烈風波！！！」

ごおおおおおおお！！！

ナイフの雨を防御するために、ミリアは槍を神速で回して風を起こした。ナイフを次々と弾いていくが、雨は止む様子は全然ない。

ゾディアック「ほおー、誰一人として雨を浴びさせはしないおつもりですか。健気ですねぇ」
かがみ「ミリアっ！！」
ミリア「くっ…ボクに構わないで、早く反撃して！！」

ミリアは必死にナイフの雨を防ぎ続けながら、皆に反撃するよう言った。その間、ゾディアックは次の攻撃をしようとしていた。

なのは「すぐに決める！ターゲット補足！！」

ごおぉぉぉ……！（魔力チャージ）

ゾディアック「いただきます、ヴァスゴルド！」

ゾディアックは魔導書から暗黒の追尾弾を１００発撃ってきた。ナイフの雨は降り続けているため、恐らく回避は不可能だろう。ならば、相殺するしかない。

フェイト「追尾弾…？数が多すぎる！？」

こなた「うわっ、弾くなり相殺するしかないじゃん！？」
なのは「くっ…すぐには決められないけど、アクセルシューター・シュート！！！」
フェイト「プラズマランサー！！！」
どばばばばばばばばばばば！！！
なのはとフェイトが弾丸を相殺するために、対抗して追尾弾を撃った。次々と弾丸を撃つが、相手の追尾弾は数があまりにも多いためにどうしても自分達の所へ来てしまう。
ざしゅ！！ばしゅ！！
こなた「うおとととととっ！？速度も速いって！」
かがみ「うっとおしいわね…！ミリアにも攻撃が行かないように気を配るのよ！」
銀時「ちぃ！なんてじじいだっつーの！」
がすっ！！（弾丸がかする）
神楽「っ！！」
ヴィヴィオ「神楽さん！？」
神楽「何これ…かすっただけで、力が抜けていく感じがしたアル…っ！」
相殺しそこねた追尾弾の1つが神楽の腕あたりをかすり、すると神楽は当たった部分から力が少し入りづらくなったようだ。暗黒追尾弾による効果だ。
銀時「ただの追尾弾じゃねえのかよ！くそっ、面倒な攻撃しやがっ

て！」
こなた「これ以上撃たれたらたまらないね…なら、私が速攻でいくしかないっしょ！（突撃）」

このままでは不利になると見たこなたは、ゾディアックへ斬りかかった。しかし、ゾディアックはにやりと笑っていた。

ゾディアック「若いですねぇ」
こなた「なぬ！？」
ゾディアック「イグナート・ヴァルガンザルド！」

ちゅどがががががががあああぁぁぁん！！！

こなた「んぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」
かがみ「なっ！？こなたあぁぁ！！」

こなたがゾディアックへ技を放つ前に、自分のまわりから大爆発が次々と発生した。こなたはその大爆発へ巻き込まれ、最後にはふっとばされた。
かがみがこなたが落下してくる所を受け止めるが、すでにこなたはボロボロの状態だ。

こなた「う…きつ、すぎ……反則だよ、これ…っ」
圭一「こなたを瀕死にしただと！？野郎、魔術のエキスパートだっていうのかよ！？」
ゾディアック「まだまだいきますよ。イグ・ノアド！」

ずびゅうううぅぅぅ！！！

光の玉を複数召喚し、その玉から幾多のレーザーを発射させた。

銀時「次はレーザーかよ!!（よけ）」
ネプギア「きゃっ!!レーザーが速すぎて、よけづらい…っ!」
ネプテューヌ「だったらガードして…うわっ!?ガードできそうにないよこれ!」
ベル「くっ…嫌な奴だわ!」
ステラ「セレナ!あれをやるよ!!」
セレナ「了解!」

ステラとセレナは状況を打開するべく、二人がけの魔法を唱え始めた。

ステラ「月の光、天地に降り注ぐは涙…」
セレナ「涙に宿るは、月の悲しみと慈悲…」
ゾディアック「のんきに詠唱してていいんですかね?ほら、そこにいるお譲さんにもレーザーが行きましよ!」

ずぎゅーーーん!!（ミリアへレーザーが発射される）

ミリア「っ!!逃げられない…!」
ネプテューヌ「ミリアあぁぁぁ!!!」
レナ「させないっ!!!」

ずばあぁぁぁぁぁん!!!

レナがミリアを庇い、鉈でレーザーを真っ二つに切り裂いて事なきを得る。レナはそのままレーザーをいくつも切り裂きながら、ゾディアックへ突撃していく。

ゾディアック「おや、おかしな人がいますね?ライブラで見たとこ

ろ、学園で目立つようなチート能力をお持ちではないはずですが…」
レナ「早くここからっ、出て行ってよっ！！！（一閃）」

ぶんっ、ずがきいいいいいいん！！！

レナ「！？」

レナの鉈による一閃がゾディアックに命中はした。しかし、それがゾディアックにダメージを与える一撃にはならなかった。何故ならゾディアックにはあるバリアが張られていたからだ。

ゾディアック「まあ…この反転魔法陣の前では無力であることに変わりはないのですから、気にしなくてもいいでしょう」
レナ「反転…！？」
ゾディアック「そう、反転です」

その言葉と共に、ゾディアックのバリアから何かが弾けた。それは、レナを激痛と共に吹き飛ばす。

ばきぃいいいいい！！！

レナ「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
圭一「レナぁぁぁぁぁっ！！！」

どさっ、どざざざ…！（吹っ飛んで倒れて転がる）

レナ「っ…うぅ…！」
かがみ「嘘…！？」
ネプテューヌ「要塞をたたき斬るほど強いレナがやられた…！？」

学園に入学してから、恐るべき実力を見せていたレナがいともたやすくあしらわれたことに、ネプテューヌ達は驚愕せざるを得なかった。

ゾディアック「反転魔法陣といいましてね。この魔法陣またはバリアがある限り、全てのダメージをそのまま返すことができるのです。今の吹っ飛びぶりからすると、さぞ強力な攻撃力だったようですね」
圭一「な、何だと!?それじゃ、今のはカウンターだったのかよ!?」
セレナ「物理がだめなら、魔法で!!」
ステラ「皆、どいて!でっかい魔法をかますよ!!」

その頃、セレナとステラの詠唱はちょうど終わっていたようで、二人は魔力をありったけこめてゾディアックへ魔術を放つ。

セレナ・ステラ「月光波動(ルナライトバースト)!!!!」

ズドおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん!!!!!

二人の魔力は月光となり、波動のごとくゾディアックへ発射された。それはゾディアックに命中し、大爆発を起こした。

かがみ「やった!?」
フウ「今度はちゃんとダメージが通ったはずだよ!」
ベル「あれだけ強力な波動を撃ったんですもの。これで無傷でいられるわけが…、!?」
圭一「なん…だと…!?」

煙が止んでゾディアックが見えた時、その結果はわかりやすく知ることになった。今の魔法を受けても傷一つ負っておらず、それどこ

ろかバリアに光が吸収されていく様子だった。またもや通らなかったのだ。

ゾディアック「がっかりしましたかね？魔法も例外ではないのですよ」

セレナ「そんな…！？」

ステラ「魔法も、返す…！？」

ゾディアック「はい、この通り…」

きゅいぃぃぃ…ずどおおおおおおおん！！！！！

圭一達「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

レナ達「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

バリアから吸収した月光が放射され、そのまま全員へと跳ね返った。なのは達が防御魔法を使っても、焼け石に水だった。その威力はとても大きく、たちまちネプテューヌ達はその場に倒れてしまった。

ミリア「皆！！？そんな…！」

ゾディアック「残念でしたねぇ…貴方の仲間達による反撃は全て無駄だったようです」

ミリア「くっ…！」

残ったミリアは歯を食いしばるも、今はナイフの雨を防ぐことで手いっぱい。今ここで修羅烈風波を中断してしまったら、全員ナイフの雨にさらされることになる。皆を傷つけたくないミリアに、反撃に出ることは許されなかった。

ゾディアック「さあて、このままでは貴方が先に死ぬことになるかもしれませんね。どうします？今なら逃がしてあげますよ」

ミリア「…冗談言わないでよ。ボクは皆を見捨てない…絶対に逃げない！」

ゾディアック「何故です？貴方が死ぬかもしれないのに…」

ミリア「皆はボクとカイト君を受け入れて、そして救ってくれた仲間達だから、守りたいの。今度は、ボクが皆を守るの！！」

ミリアの決意は固く、その場から逃げる気など毛頭もなかった。その様子を見て、ゾディアックはにやりと不気味な笑顔でこう言った。

ゾディアック「なるほど…でしたら、もう少しじっくり教えて差し上げましょう。恐怖と絶望というものを…」

魔導書から闇が噴出し、そして言葉と共にミリアへ飛んで行った。

ゾディアック「絶望がプレゼントです。ダークネス・ナイトメアアビス」

ごおぉぉぉぉぉぉぉん！

ミリア「うっ…！？」

闇はミリアをたやすく包み込み、それと同時にミリアの頭に嫌なものが走る。

ミリア「！？何…これ…！？幻影…それとも、夢…？」

変な感覚が体中をめぐり、そして今自分がどうなっているのか状況判断を急ぐミリア。しかし、この後ミリアはさらに困惑することになる。

『ぐわあああぁぁぁぁぁぁ！！！』
『し、死にたくないよぉぉぉぉ！！！』
『嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

ミリア「！？」

突然、ミリアの耳に誰かの絶叫が聞こえてきた。何かに命を奪われるような悲鳴。
そしてまた…

『嫌ぁぁぁぁ！！もう許してえええぇぇぇ！！！』
『助けてぇぇぇぇぇ！！！』

ミリアはそこで知ってしまった。これは仲間達の悲鳴であることを。

ミリア「皆の悲鳴…！？でも、まだ殺されたり捕まったりしてないはずなのに、まさが幻聴…？」

何なのかいろいろ考え、何とか冷静に整理しようとするミリアの前に、ある幻影が目に入ってきた。

ミリア「え…っ！！？」

それは、絶対にあってほしくない光景だった。
仲間達がエリート学園の人間に、欲に溺れた人間達に殺される光景。
あるいは男女共にその連中に強姦され、堕落する光景。

ミリア「！！！嫌…何、これ…！？こんなの…あ、あぁぁ…！」

ミリアは動揺してしまう。幻だとわかっているはずなのに、それが

あたかも現実になるような感じがしてしまい、ミリアの恐怖心がどんどん湧きあがってくる。さっきからそのせいで、意識や思考がまともに働かない。
動揺し始めたことで、ミリアの技が少しずつ弱まり始めた。

圭一「っ…！ミリア…！？」
レナ「これは…！？」
ゾディアック「おやおや…やはり怖いようですねぇ？当然ですよ…怖くない人間なんているはずがないのですから」
銀時「てめぇ…っ…ミリアに、何をしやがった…！」
ゾディアック「ダークネス・ナイトメアアビスは、相手に永遠の悪夢と絶望、恐怖、憎悪、呪い、無を与える魔術。ミリアというお譲さんには、永遠に苦しんでいただくようにしました。これでじっくりわかることでしょう。どんなに心を強く持っても、神…秩序…運命…そして力に抗うことなどできはしないということを」
ネプギア「そんな…！？」
ネプテューヌ「ミリアっ、しっかりして！！幻に惑わされないで！！」
ゾディアック「無駄ですよ。今のミリアさんには、貴方達の声は届きはしない…闇が遮断しますからね」
こなた「こ、こいつ…鬼畜すぎ…」
ゾディアック「鬼畜？いえいえそんな、私はいたって紳士ですよ。野蛮で下等な貴方達とは違って…ふふふふふ」

ゾディアックはほくそ笑みながら、ネプテューヌ達を見下す。
気がつけば、もうミリアの風がなくなりつつある。このままでは、ナイフの雨が自分たちに降りかかることになる。

ゾディアック「ほら…もうすぐお別れの時間ですねぇ。困りましたねぇ」

かがみ「あんた…最低よ…っ！絶対、ただでは済まさない…！！」
ステラ「全くだよ…そうやって、他人を苦しめて…いじめるなんて、許さない…！！」
ネプギア「酷い…こんなことを平気でするなんて…！」

ネプテューヌ達は、ゾディアックの性格を卑下する。

ゾディアック「所詮…貴方達が信じるものなんて、力のない者の甘さが生み出す幻だということですよ。全てを決めるのは、知恵と力だけなのです。貴方達の学園を守護するハード達や代表の猛者達も、同じようなものでしょう？どんなに正義や綺麗事を述べても、実際に戦いで示す実力の形は、力と知恵だけ…貴方達だって、力と知恵だけで戦ってなどいないと言い切れるのですか？」
ネプギア「…そ、それは…」
セレナ「違う…私達は、力と知恵に溺れたりなんかしない…！」
ゾディアック「いいえ…そう言ってる貴方達も同じですよ。そう…この世は力のある者こそが絶対であるのが節理なのですよ。ミリアさんがああやって苦しんでいるのも、それを認めなかったことも関係しているのです」
銀時「…頭イってんじゃねえのかよ……てめえなんかに、俺達の全てがわかってたまるかってんだ…！」
ゾディアック「いえいえ、わかりますとも、どんなに飾っても、決めるのは力と知恵だけなのですよ。ミリアさんには、力と知恵がない弱者…これは仕方のないことです。もし彼氏がいるのでしたら、彼氏もさぞ下等なんでしょうね」
圭一・レナ「！！！」
ゾディアック「さて…そろそろいいでしょう。では、仕上げといきましょう」

ゾディアックはそう言うと、ぱちんと指を鳴らした。

すると…

ミリア「嫌…嫌…っ！だめ、こんなの…！！」

『ミリア…ミリアあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

ミリア「！！？カイト…君…！？」

ミリアは見てしまった。

自分が誰よりも愛する者である、カイトの堕落…血祭り…死を。

ミリア「あ…あぁぁぁ……！！」

ミリアの精神が、音を立てるように崩れていく。

ミリア「いや…いや…嫌あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ネプテューヌ「ミリアぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！」

ミリアの悲鳴と共に風が止んでしまった。そしてついに、ナイフの雨が改めて降り注ぎ始める。

ゾディアック「さようなら…セレナさんとステラさん達以外は、ここでお別れです」

こなた「…このっ…外道…！！」

新八「くそっ…もう、僕達じゃだめなのか…！」

ネプギア「っ…！！」

もはやこれまでか……そう思われた。

あの少女が、現れるまでは。

きいいいいいいっ！

ゾディアック「むっ！？」

その直前、ナイフの雨が動きを止めた。その場にいるネプテューヌ達も、まるで時が止まったかのように…

「力と知恵だけが全て…そう思い込む人間ほど、落ちぶれるものよね…事実だとしても」

かちっ…ちゅどがあぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！

大爆発が起き、ナイフの雨とその雲は形を残さず消えていった。

ネプテューヌ「え…？」

ネプギア「貴方は…！？」

ゾディアック「…まさか……時の魔法少女、暁美ほむら…！？」

こなた「え、嘘…！？」

そう…

ほむら「……貴方達を死なせはしない…この自惚れ者は、後は私が相手するわ」

現れたのは、あの黒い長髪の少女だ。

続く

26話「冷酷な魔導士」（後書き）

暁美ほむら参戦です。もうここらで仲間に入れることにします。
次でこの話は終わりにする予定です。

27話「怒りが呼び起こすもの」（前書き）

イオド&ゾディアック戦後半です。

27話「怒りが呼び起こすもの」

あらすじ
カイトがイオドと戦う中、ミリア達は体育館にて同じ襲撃者ゾディアックと対峙。勇敢に立ち向かうが、ゾディアックの圧倒的な実力の前に敗北寸前まで追い詰められる。さらに、ミリアがゾディアックの悪夢の魔術を受け、精神崩壊してしまう。ところが、絶体絶命の時にある少女が危機を救いに参上した。それは、マジカルハート騒動終結直後に出会った魔法少女。
名は、暁美ほむらという……

……

運動場では、カイトとイオドが激戦を繰り広げていた。どちらも攻撃の手をゆるめようとはせず、ただひたすらに剣劇を続けるだけ。これを見る限りだと、互角といった所だ。

がきぃぃんっ!!!（相殺）

イオド「剣の腕は上がってるようだな…これだけやって1撃も当たらんとは」
カイト「あの時と同じようになるわけねえだろ!!（払いから魔神剣）」

魔神剣をよけ、一旦カイトから離れて構えたイオド。

イオド「…そろそろ、俺の本気を見せてやろう」

そう言うと、剣から異様な力が開放される。

カイト「！（あの剣…ただの剣じゃない！しかもこれは…）」
イオド「俺の力と剣技、その身に受けるがいい」

カイトは構え、じっとイオドの出方を伺う。だがしかし、瞬くとイオドの姿がない。どうやら不意打ちを仕掛けるつもりだ。

カイト（どこから来る気だ…）

ざしゅっ！！（左から斬撃）

カイト「ぐっ！？そっちか！！」

突然斬撃を受け、剣を振り返しながら見るが、イオドはいない。

ずばっ！！（右から斬撃）

カイト「がっ！？」

ずばっ、ざすっ！！

不意を突くかのごとく、見えない斬撃がカイトを切り刻む。

カイト「ぐあっ！！…くっ、やっぱりこれは…姿を消してない…うぐっ！！…つまり…っ！」

ずばあぁぁぁっ！！！（後ろから斬られる）

カイト「うあぁぁっ！！！」
イオド「よくわかったな…その通りだ」

斬られてのけ反るが、現れたイオドから何とか倒れずに離れた。

イオド「俺はあの日から剣の腕を磨き続け、それによってデニー様からこの剣技を授かったんだ。俺にふさわしい剣技だ」

カイト「っ…てめえ…時空剣技を使えるようになったのか！」

イオド「いかにも。これぞ、俺流時空剣技。この剣技に死角はない…」

ばっ！

再びイオドの姿が消え、カイトだけがその場に残される。しかし、様子が違う。

カイト「気配が消えた…？」

イオド『受けよ…五月雨！！』

ズバババババババッ！！！！

カイト「ぐあぁぁぁぁぁっ！！！」

また見えない斬撃がカイトを斬る。しかもさっきよりも多く発生した。

カイト（何だこれは…！？気配はないはずなのに、どこからこんな斬撃が！？）

ざすっ！！！

カイト「うぐぁぁっ…！！？」

考える暇は与えられず、後ろからカイトが突き刺された。

イオド「勝負あったなカイト。もはや、お前など敵ではない」

カイト「がっ…ぐ…！！」

体に力が入らないカイトと、どや顔でほくそ笑むイオド。これはまさに、今の状況をそのまま再現されてるかのようだった。

イオド「さて、後は今までの恨みを晴らすだけだな。俺にたてついたことをじっくり後悔させてから、時空の狭間へ追放してやろう」

カイト「うぐっ…まだ、終わらねえ…ぞ…！」

イオド「頭が高いぞ」

ずうぅ、ずばっ！！ざすぅ！！

カイト「ぐぅぅ…！！」

剣を抜き、痛めつけるように切り刻んでくる。ダメージから立ち直れないカイトは、よけることもままならないまま斬られていく。

イオド「そういえば…お前には双子の彼女がいたようだな？ミリアといったか…あの娘もなかなかいい娘だった気がするな……お前のような奴にはもったいないだろうな？」

カイト「てめぇ…っ！ミリアに、手を出すんじゃねえ…！！」

イオド「いつまでも口は減らないか…ならば、まずはその口から使いものにならないようにするとしよう」

剣を振り上げ、狙いを定める。このまま、斬られ続けるのかと思っ

ていたその時……

『嫌あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！』

カイト「！！？…ミリア…！？」

カイトの耳に、ミリアの悲鳴が入ってきた。イオドには一切聞こえず、しかしカイトには聞こえ…感じたのだ。ミリアに何かあったに違いないと、カイトの思考が瞬時に働く。

イオド「しゃべるな。もはや言葉を必要としな……」

がしっ（脚をつかむ）

カイト「邪魔だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

ずどがあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！

イオド「ぐおおおっ！！？」

突然、カイトは立ち上がりながらイオドを地面にたたきつけた。

どごっ、どごどごどごっ！！！

イオド「ぐぼはぁぁっ！！？き、貴様…がべあぁぁっ！！？」

さらに、イオドが自分を追いかけて来ないようにしたくて、何度もイオドを力強く踏みつける。踏みつける度に、雷が落ちて威力を倍増させる。ありったけ踏みつけた後、カイトはイオドの脚をつかんで遠くへ投げ捨て、ものすごい勢いで学内へ突っ走って行った。

カイト「ミリア…無事でいてくれ！！」

……

ミリアサイド

ミリアが悪夢の闇を受けて精神崩壊したこの現状に、暁美ほむらが危機を救って参上した。ほむらはゾディアックを冷たい瞳で見つめている。

ゾディアック「…これはこれは……まさか、こんな所であの有名な魔法少女をお目にかかれるとは…」

対して、ゾディアックは余裕であることを見せるような態度で話す。

ゾディアック「意外な話です…確か、貴方はたった一人で戦い続けていると聞いていましたが
…どういうおつもりですか？しかも、力と知恵のあまりの高さに自惚れてるこの学園にどうして…」

ほむら「自惚れてる人に、自惚れてるなんて言われたくないわ。私はただ、自分の道を進んでいるだけ」

ほむらは動じることなく、ゾディアックを見ている。

ゾディアック「自分の道…ですか。それは、やはり自らの力で欲しいものを全て手に入れることですか？それとも、そこに転がってる弱者のように綺麗振ることですかね？」

ほむら「教えても無駄なこと。ここで倒れてる皆についても、貴方のような人間には一生理解することのできない道よ」

左手に付けている円盤らしき装備から拳銃を取り出し、銃口をゾディアックに向ける。

ほむら「それに…貴方は欲に溺れているもの。デニーに加担しているのも、全ては己の欲望のため…貴方の場合、４割が興味本位、そして6割は自分が全てを支配すること」

ゾディアック「！」

ほむら「力と知恵を第一に考える貴方は、恐らく最大の力を持つデニーに近づいて力を蓄えながら野望に加担し、いずれは己が全てを取って替わろうと目論んでいる……デニーよりも力のある存在に近づくために」

ほむらは、ゾディアックの様子をほぼ気にせず話続ける。

ほむら「その存在の力を得ることを足がかりに全てを手に入れ自分だけ都合のいい世界へと変える……わかりやすいわ。貴方は過去にも自分の故郷や家族・仲間を犠牲にして力を…そう、その魔導書『黄衣の王』を手に入れたように、今回もあらゆるものを犠牲にして力を手に入れようとしている。たとえ裏切りを繰り返してでも…ね」

ゾディアック「……心外ですね。どこで私の情報を手に入れたのですか？プライバシーの侵害ですよ…しかも目的のことにまで口出ししてくるなどと…」

ほむら「貴方が言える立場なのかしら？いずれにしても、貴方がやろうとしてることなんて欲深い人間の誰もが企むことなのよ。それを認めないで上から目線なんて…痛々しい人ね、貴方」

冷たい瞳で、冷たく言い放つほむら。ゾディアックは少し笑いながら、その言葉に返事をする。

ゾディアック「ほっほっほっほっ…つれない人ですね。自分の力量をわきまえずにそう堂々と言われては、どう答えてあげれば正しい答え方なのか悩みます」
ほむら「そっくりそのまま返すわ」
ゾディアック「…ふむ…これ以上話しても時間がなくなるだけですね。貴方もここで死んでいただきます。貴方の能力も予習済みですよ?時を操るのが主力…なので私の時を止めることができないように対策をさせて頂きました。まず、貴方に勝ち目はありませんよ」

どや顔で言うゾディアック。しかし、ほむらはそれでも表情を崩さない。

ほむら「そう…なら、試してあげる」
ゾディアック「いいですよ。さあ、どこからでもよろしいですよ?私を止めることは不可能だということが、すぐに……」

きぃぃぃぃぃん!!

ゾディアック(!!?な、何…?)

ゾディアックの言葉に甘えて、ほむらは円盤を起動させて時を止めた。すると、ゾディアックは自分の予測や計算が外れたことに驚いて、考える暇もなく時を止められた。それをしっかり見たほむらは、ゾディアックに近づいて魔導書に拳銃を向ける。

ほむら「貴方には、本当にわからないようね…」

だぁん!!だぁん!!だぁん!!

銃弾を撃ち込み、そして元の場所へ戻り…

かちっ…ずぎゅううんっ！！！

時は動き出し、ゾディアックの魔導書に3つの大穴が開いた。しかも、それはただの弾丸ではなかった。

ぼうぅぅぅぅ！！！

ゾディアック「な、黄衣の王が！！？」

ほむら「いくら力があっても、根元を断たれればそれまで…貴方の場合、その本さえなくなってしまえば、ただの魔導士になり下がる。今撃ち込んだ弾丸は、魔力を食べ、魔力を停止させ、魔力を燃料として蒸発させる3つの魔弾…それにより、魔導書にかけられた障壁を剥がし、さらに魔力の流れを一時的に止め、そして魔力が油となって本を消滅させる」

ゾディアック「ば、馬鹿な！？こんなことが…くっ、うおおっ！」

ごおおおおぉぉぉぉぉ！！

激しく紫色に燃え盛り、ゾディアックは魔導書を手放した。それは暴発する暇もなく、灰も残さず消滅した。それによって、ゾディアックにかけられていた反転魔法陣も消滅した。

ほむら「本格的に動く前に、魔弾を学び用意しておいて正解だったわ。これなら、あの宇宙生物の息の根も確実に止めることができる」

ゾディアック「…おのれ…！！何故だ…何故、私の時が止められたのだ！？対策はしてあったはずなのに…」

ほむら「一歩足りなかったようね。対策するのは、貴方だけじゃないの。話すことはもうないけれど」

長い髪を手で後ろに払い直しながら、ゾディアックにそう言った。
ゾディアックが冷静さを崩して取り乱す中、他の動きも見えた。

フウ「ありがとう…これで、ようやく仕返しができるよ」
ゾディアック「!?」

ゾディアックの後ろにフウとセレナ、ベルが立っていた。
彼女達からは、先ほどまで感じることのなかった魔力をびりびりとちらつかせている。

セレナ「…もう容赦しない…殺す…絶対に殺す…」
ベル「さんざんやってくれたわね…?」
フウ「保険入ってても…無駄だよ」

フウが指を鳴らすと、ゾディアックの周りに幾つもの凶器が浮かぶ。
そして、すぐにそれらはゾディアックへと降り注いだ。セレナとベルの最大級の属性魔法と共に。

ずがががががががぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!!

ゾディアック「ぐぬおおおおぉぉぉぉぉぉぉ!!?」

だっ!

こなた「爺さんには悪いけど…あばら骨、へし折らせてもらうよ!!!」
かがみ「絶対に許さない…地獄へ堕ちろ!!!」

次に、こなたとかがみが反撃に出た。

こなた「奥義、鬼炎斬!!!（剣に闘志を宿し、鬼炎のごとく斬りはなつ）」
かがみ「白虎天雷牙!!!（神の雷が白虎の牙を形作る）」
ずどばぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!!
ゾディアック「ぎゃあああああぁぁぁぁぁ!!!!!」
怒涛の反撃をまともに受けて、ゾディアックは膝を突く。このままではやられると判断した彼は、懐からある黒い石を手にした。
ゾディアック「ぐうぅ…ま、まだ終わりはせんぞ!!デニー様、私にお力を!!」
ばきぃぃぃん!!（石を割る）
割れた石から黒い煙が噴出し、それはゾディアックの身体へと入りこんでいく。すると、彼から魔力があふれるように生まれてくる。やがて、ゾディアックは黒い魔力と共に立ち上がり、宙に浮いてオーラを全開して威圧をかける。
ゾディアック「ここまで追い詰められるとは予想外だ。だが、それももう終わりだ!!今の私には永久反転魔法陣が張られ、さらに黄衣の王なしでも魔術が使えるようになった!!今度は貴様達全員に悪夢を植え付けてくれるわあぁぁぁぁぁっ!!!」
両手を上にあげ、どす黒い球弾を作り始めた。大きくなるそれで、全員を跡形もなく消し去るつもりでもあるのかもしれない。
最も…黙ってさせるわけなどないのだが。

圭一「…おい、ミリアのことを見下しやがったよな…？俺達の大切な仲間を、けなしやがったよな…！？」

ゾディアック「それがどうした！？事実を述べたまでのことだ！！どの道、貴様達下等人間共には私のことを理解でき…」

レナ「うるさいなぁっ！！！いい加減に黙れよぉぉぉぉっ！！！！」

ぞくぅっ！！！

ゾディアック「ぬぅっ！！？」

普段の温厚さを裏返したかのように、恐ろしい表情でレナが怒鳴った。あまりの迫力に、ゾディアックは身がすくんだ。

レナ「黙って聞いていれば、力ちからちから…それに下等下等って……正直、耳障りだよ……」

圭一「あぁ…もう聞きたくねえよ……ただで帰れると思うなよ…！？」

レナ「よくもミリアちゃんをいじめたな…？許さない……許さない…許さない、許さない、許さないっ、許さないっ！！！！！」

激怒の叫びと共に二人はゾディアックへ突撃し、攻撃しようと武器を振りかぶる。

ゾディアック「ふ、ふん…いくらそう吠えたところで、私に攻撃を加えることなど不可能！！反転魔法陣がある限り、絶対無敵なのだ！！！！最強なのだ！！！！私は神同然…」

圭一・レナ「黙れえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！！！！」

ずどばぁぁぁぁっ！！！！

ゾディアック「ぐぼあぁぁぁぁぁっ！！？」

魔法陣など役に立たなかった。何かが働いて実力が変貌した圭一とレナの攻撃は、反転魔法陣の効果を一切無視してしまい、バットと鉈がゾディアックの身体に強打したのだ。魔法陣は砕け散り、さらに暗黒の球弾も魔力の集中が途切れて消え去った。

どざぁっ！！（落下）

ゾディアック「ば、馬鹿なぁぁ…！！？ただの餓鬼共の攻撃ごときに、反転魔法陣が全て破られただとぉぉぉぉ…！！？」

こなた「覚悟を決めなよ。私、今すっごく機嫌が悪いんだから」

ほむら「…ゾディアック・ランドルフ・カーター。貴方は怒らせてはいけない者達を怒らせてしまったわね……貴方にこの一言を送るわ。……『消えなさい』」

ゾディアック「ぐうぅぅ…おのれぇぇぇ…！！！」

すでに全員の実力は未知数の状態。ゾディアックのパワーアップなど無意味であり、もはや勝ち目などない。

ひゅん！

その時、全身ボロボロの状態であるイオドが駆け付けてきた。

イオド「ゾディアック殿！！」

全員「！！」

セレナ「あいつは、まさか仲間！？」

ゾディアック「…イオドさん、ここは一時撤退する！！仕切り直し

だ！！」
イオド「了解！すぐに時空移動で脱出する！」
かがみ「逃がしゃしないわよ！！！」
ベル「このまま帰さないって言ったはずよ！！」
ゾディアック「黙れ！！この愚か者共め…この借りは、必ず返してくれようぞ！！！」
圭一「待ちやがれえぇえぇえぇえぇ！！！（フルパワーバスターショット）」

ごおおおおぉぉぉん！！（浮遊してよける）

イオド「次はこうはいかんぞ！！次こそ、デニー様の礎に…」

どごおぉぉぉぉぉぉぉっ！！！

イオド・ゾディアック「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？」

しかし、何者かに殴られて二人は床へ叩きつけられた。すぐに起き上がって確かめると、その正体はすぐにわかった。

イオド「ぐうぅ…、！？き、貴様…！！？」
カイト「許さねえ……てめえら…絶対に許さねえっ！！！！」

ミリアを…そして仲間を傷つけた二人への怒りによって変貌したカイトは、バスタードソードの刃に業火をまとい振り上げて落下した。

イオド「なっ、まだそれほどの力を隠していただと！！？」
ゾディアック「こんな…こんなはずではぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

カイト「怒龍割殺撃いいいいいいいいいいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃぃいっ！！！！！！」

どばあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！

イオド・ゾディアック「ぎにゃああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

怒りの炎による大爆発の一撃は、二人の自惚れ者をことごとく倒してしまったのであった。

………

後に、イオドとゾディアックは理事長の元へ引き渡され、学園へ受け入れられることなどなく地獄の罰で裁かれるにいたった。かくして、ひとまず事態は解決されたのであった。

かがみ「カイト…ミリアの様子は…」
カイト「……ひとまず、永遠の悪夢とやらは完全に消した。でも、精神的にひどくやられた後だったからな…回復にはしばらく時間がかかりそうだ」
銀時「そうか…とりあえず、命の面では無事なんだな？」
カイト「あぁ…」

ある技術をもって、ミリアから悪夢を取り払ったカイトだったが、表情はとても暗かった。

圭一「…カイト、お前ももう休んだ方がいい。後始末は俺達が全部やるからさ」
レナ「無理しちゃだめだよ？カイト君も、いろんな意味ですごく傷

ついてるんだから」
カイト「うん…そうするよ…」

カイトは皆に休むように勧められ、言葉に甘えてミリアがいる部屋へ戻って行った。

ステラ「カイト君…すごく悲しそうだったね…」
言葉「無理もないですよ。大切な人が酷く傷ついてしまってショックを受けてますし、あの人のことです…きっと自分を責めてるかもしれません…」
誠「…そうだな…」
ネプテューヌ「…ネプギア、後でカイト達の部屋に行ってあげようよ」
ネプギア「うん、私もお見舞いに行きたい」

他の仲間達も気分が暗い中、助けに来てくれた者への話も進める。

なのは「…それで、ほむらちゃんって言ったっけ?後でいろいろ話をしたいんだけど、いいかな?」
ほむら「はい、私も貴方達に話すべきことがありますから」
フェイト「うん、ありがとう…」
なのは「助けに来てくれて、本当にありがとうね。何てお礼を言えばいいのか…」
ほむら「気にしないでください。私はただ、私のやるべきことをしただけです」
はやて「やるべきこと…か。それも、わけありのこととかかな?」
ほむら「…それについても、ちゃんと話します」
はやて「そっか。じゃあ後でゆっくり聞かせてくれな」

会話の後、一旦ほむらは外へ出る。

入口付近から夜空を見上げ、ほむらは想う。

ほむら（……私は決めた。貴方のためにも…私は彼らと共にいる。
そして…必ず…）

今日の星空は、綺麗だった。

ほむら（…まどか…）

27話「怒りが呼び起こすもの」（後書き）

というわけで、ほむらも入学させました。
まどかについても仲間に入れる予定ですが、まだ先になりますのでファンはしばらくお待ちください。

で、カイトとミリアはしばらく立ち直るのに時間かかるかもしれません。ですから、シリアスが1～3話続く予定です。

28話「戦後1」（前書き）

イオド、ゾディアック戦後の話です

28話「戦後1」

あらすじ

ミリアが悪夢によって精神を破壊され、さらに侮辱したゾディアックや傲慢なイオドに激怒したカイト達は、相手の能力もろとも徹底的にたたきつぶした。
その後、助けに来た暁美ほむらから話を聞く、ミリアをカイトがつきっきりで看るなど、すぐにやることがある。
だが、近い内に彼らにはまた出撃してもらうことになるだろう…

……

0:20

イオド、ゾディアックとの戦いの後始末を終わらせた後、ネプテューヌ達はほむらから話を聞くために小会議部屋へ集まっていた。

なのは「さて、やっと落ち着いた所だけど、もう少し付き合ってもらうね」
イストワール「まずは、私達に加勢してくれたこと、改めて礼を言います。おかげで、ミリアさん達が殺されなくて助かりました」
ほむら「いえ…礼を言われる程ではありません。言った通り、私はやるべきことをしただけです」
ネプギア「それでも、ほむらさんは私達を助けてくれました」

ネプギアは笑顔でそう答えた。

銀時「んで、そのやるべきことについてだが…ここに何のために来

たんだ？」

挨拶の後、本題の話をしようと進めるのは銀時だ。
ほむらは隠すことなく、話を始めた。

ほむら「単刀直入に言います。私に力を貸してほしいんです」
ネプギア「どうしてですか？」
ほむら「ある人を救い、デニーの部下となったキュウベえを倒すため…」
フェイト「キュウベえ？」
ほむら「宇宙から来たインキュベーターで、私のような魔法少女にとって最大の敵…そして、私達を騙した存在です」
ネプギア「騙した…？」

キュウベえという存在が何なのか、ネプテューヌ達にはまだわからない。

ほむら「かつて、私はキュウベえと契約したことで魔法少女になった身…命を結晶化させて魔力の源であるソウルジェムを生み出し、私は魔女と戦うようになったの」
ベル「魔女…？確か、シャルロッテとかゲルトルートとかの…？」
ほむら「そう。魔女を倒すことが新しい日常だった。私も魔法少女として、世界を守るために戦い続けた……後に、ワルプルギスの夜とも」
セレナ「…！ワルプルギスの夜といえば、とある街に現れたっていうあの…？」
ほむら「えぇ…この学園でも有名な魔女、ワルプルギスの夜を倒すことが大きな目的だった……彼女を救うには、それが必要でもあったから」
ネプテューヌ「彼女？」

少しうつむき、これから暗い話に入るという印象を与える。

ほむら「…まず話しておくわ。私のような魔法少女は、他のタイプの魔法少女とは違ってイレギュラーな存在に近いの。強いて言うなら、本来ならなってはいけない魔法少女ということ」

銀時「どういうことだ？」

ほむら「ソウルジェムは、魔力の使用を続けると濁りが生じるの。また、濁りは苦しみ、悲しみ、絶望そのものでもある…完全に濁りきってしまうと、ソウルジェムはグリーフシードへと変化し、自分も死にいたる……変貌してね」

ネプギア「変貌…？」

顔を上げ直し、ほむらは言った。

ほむら「自分の魂が別物へと変わるのよ。ずばり……魔女となる」

一同「！！？」

魔女となる…その言葉を聞き、一同に衝撃が走った。

ネプギア「そ、それって…魔法少女が魔女になるってことですか！？そんな！？」

アイエフ「何よそれ…！？じゃあ、キュウベえって奴は…！」

ほむら「えぇ…その通り。私もキュウベえに騙されていたの。私達が魔女化するのを待ち、魔女になることで生まれるグリーフシードのエネルギーを回収することが本当の狙いなの。すなわち、絶望することで発生する強大なエネルギーを集め、己の欲望に使うつもりよ」

フェイト「酷い…っ！他人の絶望を利用するなんて…！」

キュウベえ…ほむらまでも騙して契約させて、絶望に追い詰めて魔女化させてエネルギーを横取りする悪行を働く生命体。その話を聞いた一同は、その存在に対して憤りを隠しきれずにいる。

なのは「…まさか、オクタヴィア騒動についても、キュウベえが黒幕なんじゃ…！」

ネプテューヌ「オクタヴィア騒動？」

はやて「別名・人魚の魔女っちゅう生命体が、ある晩に出現した時のことや。何でも、剣を持った大きなモンスターが現れたんやけど、ある魔法少女によって街の破壊は阻止されたらしいんよ。けど、その魔法少女はモンスターと共に行方不明になったそうで、事の詳細は謎のままなんやって」

ネプギア「その騒動が、キュウベえとどんな関係が…？」

なのは「実はね、その騒動が起きる前に一人の魔法少女が行方不明になる事件があったの。騒動の前日に、謎の魔力が発生したという報告があったから調査に向かったんだけど、事件があった場所にはその魔法少女と思われる品が一つだけ残っていただけだったんだ」

銀時「…つまり、それもキュウベえが仕組んだことだったと？」

ほむら「…全てではないけれど、貴方達の考えてる通りよ。品を残して行方不明になった魔法少女の名前は美樹さやかといって、オクタヴィアとは魔女になった美樹さやか本人よ」

ネプ姉妹「えぇっ！！？」

オクタヴィアの正体がさやかという魔法少女であることを聞かされて、ネプ姉妹は驚いた。

ほむら「そして、オクタヴィアとなったさやかを救うために立ち上がった魔法少女は佐倉杏子。彼女は玉砕覚悟でぶつかり、オクタヴィアと共にどこかへ姿を消したの…」

ネプギア「そんな…っ」

ネプテューヌ「……もしかして、さやかと杏子の二人は仲間だったの？」

暗い表情で話すほむらの様子を見て、ネプテューヌはさやかと杏子について尋ねてみた。

答えはその通りだったようで、ほむらはこくりと頷いた。

ほむら「…今思えば、救ってあげられなかったことで心が痛むわ……」

なのは「どうして？」

ほむら「私にも責任があるからです……さやか達から信頼を得られていなかったとはいえ、もっといい方法を取っていれば…騒動は起きなかったのかもしれないから…」

フェイト「ほむら……」

ほむら「……話を戻すわ。キュウベえはさやかの絶望から生まれたエネルギーも回収したのだけど、重要な狙いは別の人だったの…その人こそ私の大切な人であり、私がここに来た目的…」

セレナ「そう…名前は？」

ほむら「…鹿目まどか。私を変え…救ってくれた、誰よりも大切な人…」

鹿目まどか…ほむらが学園に来た理由はその人物に関することだった。

ほむら「まどかは、他の魔法少女よりも魔力を秘めていたために、キュウベえはまどかに契約させて絶望のエネルギーを得ようとした。シナリオは、ちょうどやってくるワルプルギスの夜と戦わせることで魔女に変わらせ、そして最悪の魔女となったまどかからエネルギーを手に入れる……当然、その戦いで私達の街だけでなく、全ての世界は滅亡する……それを止めるために、私はまどかをキュウベえ

から守ろうと行動し続けた。けど…結局、まどかが契約することは阻止できなかった……」

フェイト「…そんなことが……」

セレナ「でも、ワルプルギスの夜は倒されたし、世界滅亡にもいたるようなことは聞いてないけど…」

ほむら「まどかがあることを願ったからよ。過去…未来全てに存在する魔女を、生まれる前に消し去る…その願いは自分の中にある闇もまとめて消し去り、そして魔女は存在を抹消された……まどかも、概念となったために…存在をなかったことにされてしまったの……」

大切な人をなくしてしまったほむらの表情は、知らず知らず悲痛なものに変っていた。ネプテューヌ達はそんな彼女を見て、とても辛い過去があったことに悲しくも驚いている。

ほむら「…その後、残った私は1人で平和維持のために世界中を回っていた。今まで駆使していた技術も別物に変わり、濁りが生じてもただ体に悪影響が出るだけとなり、呪いの類と言える束縛もなくなり安全なものに変化した…私は今でもその技術を使っているわ。……でも、ある日を境に異変を感じたの。突然、いたる所で少数の魔女が出現して、さらにとある団体の中に私達と同じ旧式タイプの魔法少女も確認されるようになってきたの」

ネプギア「魔女は存在しなくなったのに…？」

ほむら「キュウベえはワルプルギスの夜との戦いの後、行方をくらましていた…けど、いかにキュウベえでも概念を捻じ曲げることはできないからほぼ無力化されているはずだった。でも、奴がデニーが率いる組織にキュウベえが入ったことが発覚して、さらにキュウベえの力も何かを得ていたの。さらに、その組織の誰かがまどかの概念をないものにしてしまい、キュウベえの活動を再開させていたこともわかった。私はキュウベえによって犠牲となっていく魔法少女を出さないため…そしてまどかのためにキュウベえを探しまわっ

ているの」
銀時「何だと?てことは…お前の技術とやらも前のタイプに戻ったってことにならねえか?」
ネプギア「つまり、また魔女になる可能性が…!?」
ほむら「…はじめは、そう構えていたわ。でも、デニーのある部下との戦いで私が追い詰められて、一度ソウルジェムが濁りきってしまった経験があったけれど、魔女になることはなかったの。何とか部下と引き分けに持ち込んだ後に確信したわ。概念で変わった魔法少女の技術が変えられてはいないって」
銀時「そうなのか…?…なら、いいか」
なのは「…うん、大体話はわかったよ。つまり、キュウベえを止めるためにこの学園へ来たというわけだね?」
ネプテューヌ「そして…まどかっていう子のためにも、ほむらは戦い続けていたんだね」
ほむら「ええ…今までは一人で戦い続けていたけど……流石に相手が大き過ぎた。悔しいけど…私一人では勝つことができないわ…」
銀時「無理もねえよ。奴らはチートじみた連中ばかりらしいからな…ここにもそれ以上のチートな強者はいるが、そいつだけでも絶対に勝ち目はないだろうな…」

ほむらは一旦姿勢を綺麗にし直し、改めて言う。

ほむら「勝手なのはわかってる……でも、私はこれ以上悲劇を増やしたくないし、このままではまどかが報われない…だから、どうか私に力を貸してください…お願いします!」

深く頭を下げてネプテューヌ達にお願いをしたほむら。心から本気で助けを借りたがっているほむらを前に、やはりネプテューヌ達はいつも通りの答えを出すのだった。
断る理由など、ない。

ネプテューヌ「うんっ、いいよ♪私、人助けなら喜んで強力するよ！」

ネプギア「私も、ほむらさんの力になりますっ」

銀時「ここまで話を聞いちまった以上、そんなにお願いしなくたって助けてやるさ」

はやて「その通りや。私達でよければ、どんと任せてくれな♪」

セレナ「それに、貴方とは何だか他人のような気がしないしね。これからは、共に頑張りましょう！」

ほむら「…！」

その答えを聞き、ほむらは表情を少しやわらげるように微笑んで返事をした。

ほむら「…ありがとうございます…これから、よろしくお願いしますっ」

なのは「うんっ、よろしくね♪」

銀時「さてと、そうと決まれば早速理事長に報告しに行くか。お前達、ほむらを新しい部屋に案内してやりな」

ネプテューヌ「はーい」

話はまとまったところで、それぞれ次の行動に移る。

こうして、ほむらも学園の生徒として仲間に迎え入れられたのだった。

……

その途中、ネプテューヌとネプギアとほむらが廊下を歩いていると、カイトとミリアの部屋の前近くまで来て思いだした。

ネプテューヌ「そういえば、カイトとミリアはどうしてるのかな？」
ネプギア「ミリアさんから悪夢も取り払ったって言ってたけど、大丈夫なのかな…」
気になったので立ち寄ろうとすると、イストワールが部屋から出てきたのを見かけた。
ネプテューヌ「あれ、いーすん？」
イストワール「あら、ネプテューヌさんとネプギアさんもお見舞いに来るところでしたか」
ネプテューヌ「二人はどうしてた？」
イストワール「それが…今ミリアさんが気がついたところです。でも、今はそっとしてあげてください」
ネプギア「どうしてですか？」
理由を尋ねた時、部屋の中からミリアの泣き声が聞こえてきた。
……
中では、カイトがミリアを抱きしめていた。
ミリアはゾディアックから受けた魔法によって幾多の悪夢を見せられ、ひどく恐怖している。いろんな悲劇が来るのではないかと怯えていて、カイトはそんなミリアを案じて二人っきりになっているところで好きなだけ泣かせてあげているのだ。
精神的にも傷ついて、疲れきって、嫌なことが頭の中であふれて自分がどうにかなってしまいそうで、体は震えている。相当あの悪夢の魔法が効いていた証拠にもなるだろう。
カイト「ごめんな…俺が未熟なばかりに、すぐに助けに来てやれなくて……辛かったよな…苦しかったよな……でも、大丈夫。俺は

絶対にお前を置いて行かない…一緒にいるからな…」
ミリア「うぅぅ…っ！…カイト君……怖い…怖いよぉぉ…ひぐっ…！」
カイト「あぁ…わかってるよ……とにかく、今は泣きたいだけ泣けばいい。無理しなくていいんだ…」
ミリア「…っ…うん……ふえぇぇぇぇぇん…！！」

泣きじゃくるミリアを抱きしめているカイトは、そう語りかけてじっとしている。だが、それと同時に心の中では考えていた。

カイト（俺が弱いせいで、またミリアを苦しませてしまった……駄目だよな、俺ってよ…レオン達やチート・ザ・ハード達のような強さを持ってなくて……やっぱり俺はまだ弱すぎるんだ…）

カイトは自分の未熟さが、ミリアをこんな風にしてしまったのだと自分を責めている。また、それは自分は強くないって思いこんでるようにもとらえられる。カイトは、自責心が強いのだ。

カイト（……力…か……やっぱり、全ては力なのかな……くそっ…！だとしたら、俺はどれだけ駄目なんだよ…！）

心を痛めているのはミリアだけでなく、カイトも同じであるようだ。

……

ネプテューヌ「…そっか…なら邪魔しちゃ悪いよね」
ネプギア「うん…」

イストワールが言おうともしていた、その理由を知った姉妹は納得して部屋に入らないことにした。

ほむら「…カイト・ネイラード…ミリア・ネイラード……二人の噂は聞いていたけど、いろいろ背負ってる感じがするわね…」
イストワール「二人共、よく考える人ですからね。過去も辛いことばかりあったようですし、今でも背負う物がたくさんある印象が伺えます。きっと、それが二人らしさでもあるでしょうけど…」

カイトとミリアとの付き合いを始めてから、それなりに時間を経てきている。イストワールにも、カイトとミリアのことがおおよそわかるようになってきているようだ。もちろん、誰よりも早く友達になったネプ姉妹にも、心が少しずつ見え始めている。

ネプテューヌ「でも、二人は弱くなんかないよ。きっとまた明日から、元気に顔を見せてくれると思うよ」
イストワール「そうですね…あの二人なら大丈夫でしょう」
ネプギア「はい…」

明るく見ようとして、４人は部屋の前から離れて行った。カイトとミリアが、また明日からいつも通りに振る舞うことを願って……

28話「戦後1」（後書き）

ひとまず、これで次の話へ行く準備はできました。
またいつも通りにいきますが、次もカイト達関連のシリアス話を書こうか考え中です。

29話「秘められしもの」（前書き）

カイトとミリアについて複数のキャラが語ります。

29話「秘められしもの」

キーンコーンカーンコーン！

１３：００

翌日、カイトとミリアはひとまず立ち直って元の学生生活に戻った。
デニー関連の情報収集をハード達が行っている間、力を付けるなり回復するなり、今できることはそれだけだ。
いずれにしても、いつも通りの日常がまた続くことになる。
次の戦いが来るまでは…

……

教室

レオンとガレーナは、運動場で修行として模擬戦をしているカイトとミリアを見て、ふと思っていた。

レオン「…ガレーナ、気にならないか？」
ガレーナ「うむ、どうしても気になる」
レオン「…カイトとミリアの能力には謎な部分が多すぎる。今まで奴らの戦いを見てきたが、どうしてもわからん所がある」
ガレーナ「そうだな……聞こうか」

二人について思うことを、ありのままに話した。

レオン「まず言いたいのは、奴らの実力が突然変貌すること。これについてはどんな力が働いたのか、今でもあまりわからん…私と模

擬戦をした時、カイトはあれだけの攻撃を受けたのに倒れず、それだけでなく攻撃力も上がっていた。痛撃剣によるものだと気付いたが、どうもそればかりではなかったらしい…」
ガレーナ「ふむ…」

カイト達の戦いを思い出すと、主に模擬戦でのことがわかりやすかった。あの時はカイトがまぐれ勝ちし、レオンが山にこもるきっかけにもなった。

レオン「バウンサーのサバイバルでも、時間があとわずかになった頃に突然カイトが強くなった。あれだけ苦戦していたバウンサー達を、いとも簡単に倒すほどにな…」
ガレーナ「あれは驚いたな…」
レオン「今までチート能力者とも戦ってきた我らだが…カイト達のような強さは、今まで見たことがない」

学園で最強とみなされる強者の二人だが、カイトとミリアの強さについて理解が追いつかない。

レオン「…チート殺し……いや、それすらも越えるのか…？」
ガレーナ「それはないのではないか？カイトにしろ、そのような強さならばガーギルタイガーすらも余裕で倒してるはずだ。二人もチートであることに違いはないが、まだそこまで強くはなってないと見えるぞ…」
レオン「あぁ…それには違いない。奴らはまだ未熟だ。だが…」

レオンは複雑な表情で言う。

レオン「…妙な気がするのだ。カイト達は未熟…そのはずなのに、何か…とてつもない何かを秘めているような気がしてならない」

ガレーナ「とてつもない何か…？カイト達には、まだ何か力があると…」
レオン「…力…そう言っていいのだろうか？」
ガレーナ「何？」
レオン「……まさかとは思うが、奴らの強さは…」
先を言わなかったが、ガレーナはそれが何なのかわかっていた。
ガレーナ「馬鹿な…いくら何でもそれはありえないのではないか？実力はごまかせないのだ。そんなことで強さにそのまま変わるなど…」
レオン「私もそう思うのだが、ここまで感じるとその可能性も捨てられなくなってきたのだ…」
ガレーナ「レオン……」
レオン「…少なくとも、カイトとミリアは我らにとって異質な存在だ。修練型チートの…そう、それ以上の何かを奴らは秘めている。そんな気がしてならない…」
……
学校入口
セレナ「ミリアは立ち直ったみたいだね…いつも通りの振る舞いをしている…」
フウ「でも、隠してるってことはないのかな？堪えてるのかもしれないし…」
ベル「そこまではわからないわ。けど、あの様子なら普通にしてても大丈夫でしょう」
こちらもカイトとミリアが戦う姿を見ている。ちなみに、互角だ。

ステラ「それにしても…二人共強いね」
フウ「けど、二人の能力についてはまだわからないままだよね……圭一君とレナちゃんもだけど、あの二人は何だか特別な気がする」
ベル「そうね……ただ、昨晩の戦いで気になることがあるの」
セレナ「何が？」
ベル「ゾディアックの魔法陣よ。圭一とレナはあれを自力で破った……けど、圭一とレナにはそのために必要な要素…つまり力は持っていなかったわ」
ステラ「言われてみれば…レナちゃんは要塞ぶった斬ったりしてるけど、能力的に見れば圭一君もレナちゃんも反転魔法陣を破壊することはできないはずだよね」

ゾディアックを相手にして、反転魔法陣は自分達を一番苦しめた要素。今冷静に考えれば、あれをただの物理で破ることはできないし、能力で破ろうとしてもたやすくないという事実が頭に浮かんだ。だがあの時、破るために必要な能力や要素を持たないはずの圭一とレナは、それを物理攻撃1発で破った。考えてみれば、どう考えてもおかしな話である。

フウ「でも、それがどうかしたの？」
ベル「圭一とレナの能力は、全体的に超人並であること以外は普通…だから、圭一達に原因はないわ。けど、もし誰かによる影響があったとしたらどうかしら？例えば、ミリアとか…」
ほむら「…それは、カイトとミリアが持つ加護が原因だっていうこと？」
セレナ・ステラ・フウ「あ…！」

加護という言葉に、セレナ達ははっとした。

フウ「そうか…！確か、カイト君とミリアちゃんの加護について、まだ詳しくわかってないんだった！」
ベル「以前あったマジカルハート騒動の時、私達はウイルス駆除をしてる間に二人の加護を受けたわ。あれのおかげで、ウイルスに一切感染することはなくなった。けど、どんな作用が働いていたのかは不明。なのはさん達と一緒に調べてみたけど、全然わからなかったわ」
ほむら「きっと、私達が知らない特別な能力であることに間違いはないでしょうね」

カイトとミリアから与えられた加護が、まだどういうものなのかはっきりしていない。だが、それが特殊すぎるものであるという予想はできた。いや、そう考えるしかないのだ。

ベル「…となれば、カイト達が関係してることになるわね」
セレナ「…一体、何者なのかしらね…」

……

屋上

レーティア「あの子達……強がってるわね」
ギルシア「強がらなきゃやってけねえんだろうさ。難儀なこった。」
ジャンヌ「エリート学園のことについては、もう全部決着はついたはずなのに…」
レーティア「ゾディアックのせいで、また悩んでるというわけね。あるいは、別のことで悩んでるのか…」
ビビ「ミリアちゃん、あんなに傷付けられても強がるなんて……もっと甘えちゃえばいいのになぁ」
百華「強がる…か。だが裏では泣いておるのではないか…？」

ジャンヌ「……」

レーティア達も、カイトを見ながら話をしている。どうやら偶然にもカイト達の話をする者が多いようだ。

百華「ミリア君も可愛いものじゃが、手を出せばカイトが黙っておるまい…」

ビビ「あら、貴方がそう言うなんて。てっきりカイトから力づくで奪ってでもって言うかなと思ってたけど」

百華「私をそこらのチンピラや愚者と一緒にしないでおくれ。私は紳士だぞ」

ギルシア「その紳士は無差別に襲ってるわけだが？ビッチみたいにとは言わんがな」

百華「…ビッチとは失礼にも程があるぞ…斬られたいのか！！！…って、言ってる空気じゃないな。とにかく、カイトとミリア君には闇が感じられる…故に、変なことをしたら闇が噛み付き…喰らうだろう」

レーティア「闇？」

百華は真剣な表情で語る。

百華「レオン達も気付いてるかはわからんが、カイトとミリア君はどちらも脆い部分があるようだ。闇はその部分に秘められており、変に刺激すればたちまち暴発する。例えば…ミリア君が誰かに強姦されるか、殺されるとか…」

ビビ「ちょっ…シャレにならないから言わないでよ…；」

百華「例えばだよ。もしそんなことになってしまえば、カイトの心は狂い出す可能性が高い。二人の能力は私にとっても未知な部分が多い以上、そんなことは絶対に阻止しなくてはいかん。私の直感であるが、二人共…下手すれば学園絶対最強であるチート・ザ・ハー

ド程の者ですらも殺しかねんだろうな…」
ジャンヌ・ビビ「はぁっ!!?」

カイトとミリアがチート・ザ・ハード程の者までも殺しかねない。
それを聞いた者のほとんどがありえないだろって顔をした。

ギルシア「おいおいっ、それは絶対にありえねえだろ!?チート・ザ・ハードはチート中のチート能力を持つ絶対最強者だぜ!?カイトですら0．1%の実力でちゃちゃってあしらうくらいだ。あのハードにゃ、1発すらくらわせることすらできねえよ。それを殺すなんざ絶対にありえねえと思うぜ、俺は」
百華「実力ではな。だが、能力はどうだろうか?理事長なら答えられるだろうが、その絶対はどこから来て保証されているのだ?理事長達こそ全て正しく絶対であると認めているわけではあるまい?」
ギルシア「え?そ、それは…」

百華からの問いに、ギルシアは言葉がつまる。他の者も答えられない。

百華「…全員ではないが、歴然な実力の差を見せられれば誰でも消沈するのが普通。だが、カイトとミリア君はそれがわかっても立ち向かうだろう。だからこそ、今言ったような危険性もあるのではないかということだ」
レーティア「どういうこと?」
百華「二人の闇は、私達が定義している能力、実力、果てにはチートなどで止めることができるものではない気がするのだ……カイトとミリア君を絶望させ尽くしてしまったら、それが私達全員の『終末』になりかねない程、危険なことになるかもしれん…」
ギルシア「…それ、マジだったら笑えねえぞ…」
百華「もちろん二人自身もそうならないように対策をしてるだろう

が、それでも限界がある…」

うつむき、悔しくもそう考えなければいけない気がしている百華は本気である。

百華「…まさか、あのような未知すぎる者が学園に来ようとはな…」

レーティア「……けど、そんなことになれば、カイト君やミリアちゃんも無事では済まないでしょうね。きっと、二人もすごく…いいえ、永遠に癒されない程傷付くに違いないわ」

ビビ「うん…二人は優しいから…」

レーティア「大切な人達を巻き込むなんて、二人にとって絶対にしたくないこと……過去に、カイト君が1度エリート学園やそれの味方である全てを破壊し尽くしたけど、後に悲しんでいたってレポートにも書いてあったわ。カイト君達も、きっとわかってるんじゃないかしら…」

百華「そうだな…だからこそ、絶対に守ってあげなければいかんのだ…」

カイト達を守る…それは、全員同じ意志であった。

その頃、カイトとミリアは模擬戦を終わらせた所だった…

29話「秘められしもの」（後書き）

フラグ立てました。ひとまず、シリアスはここで止めておいてリク消化しようかな？
ただ、カイトとミリアの出番は少し減るかもしれません。

あと、新オリキャラも出すかな。

３０話「立てられ続けるフラグ」（前書き）

またシリアスになってしまいました；
なお、今回はソラさんと十六夜さんのリクエストネタを入れてます。

30話「立てられ続けるフラグ」

きーんこーんかーんこーーーん！

１２：３０

チルノ「とあああーーーーっ！！」

ずばあぁぁぁーーーん！！！

カイト「ぐあああぁぁぁぁっ！！？」

ミリア「カイト君！？」

いつも通りの日常に復帰したカイトは、現在チルノと模擬戦をしていた。一時は暗く落ち込んでいた二人だが、いつまでも意気消沈していては前に進めない。カイトとミリアは嫌な気持ちを心に閉じ込め、いつもの振る舞いに戻った。

……だが、完璧には戻れていない。

ずざざーーっ！！（後ずさる）

カイト「ぐっ…しまった…！！」

チルノ「決まった！あと少しで勝てるね！」

カイト（…おかしい…いくらチルノが強いからとはいえ、いい動きができてねえ……いつも通りにしてるはずなのに、何故だ…？）

カイトはチルノを相手に苦戦していた。

チルノとは初めて模擬戦を組み、そしてお互いに全力で戦い続けて

いる。氷を駆使する剣、魔法、それらはカイトにとってどれも申し分は特にない戦術で、十分戦えると見ている。だが、自分は強くなるためにチルノの強さも越えなければいけない。もちろんチルノにとっても同じであろう。
それはさておき、カイトはチルノの戦術に押されている。自分の戦術は変わらず、ただ相手を超える気持ちで本気で戦っている。そのはずなのにだ…

カイト（まだ、迷ってるのか…？この前気持ちを整理したはずだろ俺！？何やってんだよ…！）

心の中で自分に言い聞かせ、もやもやした気分を振り払う。そうしてる間にも、チルノが突撃して来る。

チルノ「一気に決める！！（剣を構える）」
カイト「くっ…！」

無理にでも自分を立ち上がらせ、攻撃に備える。

チルノ「くらえ！！氷符ブレードフリーザー！！！」

剣を氷で包み、大きな氷の大剣を生み出した。チルノはそれをしっかり握りしめ、飛び上がってカイトを狙い定めて斬りかかる。

カイト（あの攻撃…振り下ろした後にも氷の刃が全方位に飛び散る破片にもなるのか！なら…！！）
チルノ「でえぇぇぇぇいっ！！！！」

ずがしゃあああああんっ！！！！

カイトはその場から氷の刃を避けて、大きくバックステップを取った。予測した通り、氷の刃は砕けてそのまま飛び散る刃となってあちこちに飛ばされる。カイトはこれを見切って回避し、全身してチルノの目の前へと接近した。即座に力を溜めてたたきこむ、それがカイトの次の攻撃だ。
しかし…

チルノ「もらった！！氷龍符アイシクルドラゴン！！！！」
カイト「何！？」

ずがぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！

カイト「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

チルノはそれを読み、氷の竜を召喚してカイトにぶつけた。零距離から撃たれたため、威力は絶大だろう。

どさっ！（ふっとんで倒れる）

カイト「っ…う…！力が、入らねえ…！」
ミリア「カイト君…っ！！」

離れた場所で見守っているミリアが、心配そうにカイトを見ている。彼女から見ても、カイトは明らかに不利であることはわかっている。カイトはあきらめず、何とか体を起き上がらせて立ち上がる。しかし、ダメージは相当大きい。

チルノ「すごいね…まだ立ち上がれるなんて。流石、頑張り屋なカイト君だね。面白いよ！」

対して、チルノは何だか面白そうに笑顔で構え、カイトを見つめている。チルノとはまだそこまでこコミュニケーションは進んでないが、マリオ達からチルノの話を何回か聞いてどういう人物なのかは少しまでだがわかっている。

カイト（…純粋無垢で、自分に対して自信を強く持っている…マリオ達が言ってた通りだ。確か、チルノが一部の人達からも溺愛されてるらしいからな……そしてこの実力、レギュラーってところか…　…けど…）

チルノのいい部分を曇りなき眼で見つめ、カイトは知っていく。だがその途中、少し引っ掛かる。それは…

チルノ「なら、この大技を見せてあげる！！」

チルノの周りの大気が冷えていき、チルノ自身からも青いオーラが発生する。周りに粉雪が集まっていき、気が高まったところで剣を空にかざした。

カイト「！！？（あれは…冥醒剣か！？もしや、こなたが使ってた所を見て覚えたのか！？）」

ミリア「いけない！？カイト君、危ない！！」

ごおおぉぉぉぉぉぉっ！！！

戦場全体に冷気が走り、一瞬にしてカイトもよけられずに氷の棺のごとく閉じ込められた。当然、体も動かない。カイト達の記憶では、この後は氷の海に剣を突き刺して全体に衝撃を走らせ、氷の海が崩壊すると共に敵を倒す流れである。だが、チルノの場合はその通りにはならなかった。

チルノ「まだいくよ！！陣符、氷・龍・水の陣！！！」

チルノは札を使って、フリーザー、スイクン、ディアルガの3体のポケモンを召喚した。

カイト（違う…！？）

チルノ「いっけぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

どおおおぉぉぉぉぉぉぉぉんっ！！！！！

冷凍ビーム、ハイドロポンプ、流星群をそれぞれが一斉に繰り出し、動けないカイトに全て命中して大爆発を起こした。

ミリア「っ！！？」

氷の海が消えた頃に爆風もおさまり、その場にはカイトが力尽きて倒れていた。

ミリア「あ……決着…ついちゃった…！？」

カイト（負けた…か……はは、やっぱ迷いが動きを鈍らせたか…迷ってるから、こうなるんだってのに。何やってんだろ…）

今回はカイトが敗北した。負けた理由はすでに理解できている。実力よりも気持ちが大きく勝負を動かしたのだ。チルノは純粋に、カイトは迷っていた。歴然な差である。

チルノ「やった…！新技決まった上に、カイト君にも勝てた！」

チルノは、今まで学園で怒涛の勢いで努力を実らせて、学園の主力

に近づいてきているカイトに勝てたことを大喜びしている。多くの強敵を相手に奮戦してきたカイトに勝てて嬉しいのは、当然なのかもしれない。体が自然と動き、いつもの決め台詞を言った。

チルノ「うんっ、やっぱあたいってばサイキョーね！！☆」

ずきぃぃっ！！

カイト「ぐ…っ！！？」

最強…カイトはその言葉を耳にした時、心に何かが突き刺さる感覚が走った。それは、カイトが永きに渡って考え続けているテーマに関係することで、胸が少し苦しくなる。そこへミリアが傍にかけつけて、カイトの治療をした

ミリア「カイト君、大丈夫…？」
カイト「……あ、あぁ…」
ミリア「何だか、苦しそうだよ？」
カイト「…大丈夫、すぐに治るさ…」

幸い、チルノに自分が最強という言葉で胸が軋む所を見られてはおらず、気付かれてもいない。その内にカイトは回復しながら立ち上がり、チルノに言葉をかけた。

カイト「チルノ、いい勝負だったぜ。次も楽しみにしてるよ」
チルノ「うんっ、いつでもいいからね♪」

そして、お互いに別かれたのだった。ひとまず、ばれなくて済んだ。

カイト（…最強……か。……）

思い出される者達がいる。イオドやゾディアックがその中で新しい敵だが、最近はこの二人を先に思いだしてしまう。あの時やられた出来事も、ミリアを守れなかった悔しさも…

カイト「……ミリア」
ミリア「ん？」
カイト「…最強って、何なんだろうな…」
ミリア「…そうだね…ボクも、わからないよ」
カイト「だよな…」

……

相談室

セレナ「私に眠る力…？」
イストワール「はい、前日頼まれていたことについて調べていたら、貴方に例のものと関係があることも判明しました」

セレナはイストワールに調べ物を頼んでいたようで、今はイストワールからその報告を聞いているところだ。

イストワール「大昔、チート能力を持って世界を恐怖に陥れた組織が壊滅した理由は、チートである者を問答無用で消滅させる力を持ったある人物の怒りを買ったからだそうです。何でも、組織はチート殺しを封殺するために対策をして、チート殺しの部下も何名か用意していたのですが、ある者の前ではそれら逆に封殺してしまい、組織は何もできずに滅ぼされたといいます」
セレナ「そんなことが……ある者の能力は、どんなものだったの？」
イストワール「調べ始めたころは、チート殺しの類かと思いました。

しかし、調べていくうちにチート殺しに近いけど違うものであるということがわかりました。詳しくはわかりませんが、その人物は政府といった管理する組織への憎しみが誰よりも強かったらしく、その憎しみを大きくする要因を持つ相手には絶対的な強さを誇り、いかなる能力も何の役にも立たなかったそうです。例えるなら、最近襲撃して来たゾディアックの反転魔法陣を圭一さんやレナさんが物理攻撃で簡単に破ったように…」

セレナ「……」

イストワール「組織を跡形もなく滅ぼした後、その人物はどこかへ姿を消してしまったので、その能力について確認のしようがありません。ですが、先ほど言ったようにセレナさんにはその人に近い能力がありそうなのです。もし、その能力を得たいのでしたら、場所を教えますが…どうしますか？」

セレナはイストワールの話を聞いて、しばらく考え込んだ。

今後も、デニーが学園を狙ってどんどん部下達が襲撃して来るだろう。そうすると、中にはチートにも程があるくらいの強さの敵が現れないとも限らない。ミリアのように傷ついてしまう人もたくさん出てしまうかもしれない。

セレナの答えは、自然に出てきた。

セレナ「…場所を教えて？私、その能力で皆を守りたい」

イストワール「…わかりました。では、場所についてですが…」

……

食堂

フウ「うーん…；」

ステラ「なんか今日の朝からずっと悩んでるっぽいね」

フウ「…やっぱり、このままじゃいけないと思う。戦術をそろそろもう一段階上げなきゃ」

フウは仲間達の活躍を見て聞いて、最近自分の戦術はこのままでいいのかどうか悩んでいるようだった。今出た結論は、このままではいけないという答えだ。

フウ「よしっ、今度誰かと模擬戦の相手をしてもらって鍛えよう！」
ステラ「別にいいけど、相手はどうするの？レオンさん達にでも挑む？」
フウ「…それはちょっと強すぎるからパス；相手がチートじゃ自分を鍛える前にやられるから…」

レオン達は却下されたようだ。二人はうーん、と考え込むが、ちょっとすれば候補がまた上げられる。

ステラ「じゃあさ、カイト君達はどうかな？」
フウ「うーん…あの二人でもいいけど、最近まだきつそうにしてるっぽい所が見られるから、あまり戦わせたくないなぁ」
ステラ「なら、あの人達ならどうかな？フェイトさんとか」
フウ「あ、それならちょうどいいかも！じゃあなのはさん達の誰かにお願いしよう！」

こうして、フウはなのは達の誰かに模擬戦を申し込むことに決めた。自分の実力となのは達の実力の差はちょうどいいくらいであるので、なのは達と戦えば鍛え上げられるだろうと考えたのだ。ようやく決まったところで、二人は食事を再開させるのだった。
ちなみに、二人が食べているメニューはレナが広めた特性チャーハンである。

……

その頃…

船

「さて…明日には超次元学園へ着けるかな」
「うん、二人とも元気にしてるかなぁ」

ある男女二人組が、学園のパンフレットや案内状を見ながら会話をしている。書類の中には、お誘いの書状もあった。

「…けど、今はデニーっていう人物が率いる組織が学園を目の敵にしてるらしいな。奴らに関する情報からして、いずれカイトとミリアにも触れてきている可能性が高いだろう」
「いろんな手段で苦しめていそうだよね。特に、二人共精神面ではまだ未熟な所があるから、心配せずにはいられないよ」
「そうだな。けど、デニー達の思う通りには絶対ならないだろうな。大抵、ああいう奴らの末路はわかりやすい。それよりも、デニー達との戦いがあいつらを引き寄せなければいいんだが…」
「…あの人達が来たら、大変な事になっちゃうよ」
「あぁ……明日から当分、大変な日々が続くぜ。しっかりやっていこう」
「うん…っ」

男女は見ていた。これから先に待ち受けるものを、先読みするかのように見ている…

３０話「立てられ続けるフラグ」（後書き）

次もシリアスになってしまいそうですが、次は真王さんのリクエストも入れるつもりです。

31話「巨大虫騒動」（前書き）

真王さんからのリクで、巨大虫による騒動です。
人類の敵も出ます。

31話「巨大虫騒動」

きーんこーんかーんこーーーーん！

１３：００

ネプテューヌ「でね、近藤さんがお妙さんへ走って行ったんだけど、勢い余ってお妙さんにチョップかましちゃって怒らせちゃったんだって！近藤さんもドジだよねー」

ネプギア「そういえば、３０年も振られ続けてたんだよね？何というか、あきらめが悪い人って漢字がするね」

今日も平和で、ネプ姉妹が会話をしながら廊下を歩いている。他で動きがある所はあれど、表では平和であることに変わりはない。例え…

がさがさがさがさ…

ネプ姉妹「？」

がさがさがさがさがさ！

二人の目の前を、腰から足くらいの大きさのゴキブリが通り過ぎても。

ネプ姉妹「……」

ネプギア「…お姉ちゃん、今の…幻だよね？幻覚だよね？」

ネプテューヌ「うん、幻だよ。きっとそうだよ、そうに違いないよあははははは…」

二人は少しずつ顔色が青くなっていき、これは幻である夢であると自分達に言い聞かせようとする。だが、現実は非情だったりするわけで。

がさがさがさがさがさ…

目の前を同じ大きさのクモが通り過ぎるくらいに。

ネプ姉妹「きゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

……

１３：５０

職員室

スバル「先生！！これは一体どういうことですか！？」
キャロ「さっき大きすぎる毛虫がいたんですけど！？」
銀時「こっちはゴキブリを大量に発見したぞおい！！？」

他の生徒達も大きな虫達を見たようで、先生に生徒全員が問い詰めるという形になった。

銀八「どういうって……別に、理事長達が『しばらく虫達を外に出して、空気を吸って太陽の光を浴びてもらおう』って言ってたから」
ティアナ「外どころが学校内にまで虫達がいるじゃないの！！」

銀八「別に問題ないだろ?平和なんだし、それによくあることさ」
新八・ティアナ「全然問題ありだあぁぁぁぁっ!!!」

そりゃそうだ。でかい虫達が学園のあちこちを回りまくるのは、流石に問題がある。

銀八「とにかく、文句があるなら理事長に言いな。俺は全然関係ねえからなー」
新八「いやいや、少しくらいは抗議しろよ!!!大人なんだろ!?」
銀八「面倒なことはしない主義なんですー。俺は知りませーん」

ぐうたらにジャンプを読む銀八。やる気など0だ。

ネプギア「……お姉ちゃん、大人って酷いよね…」
ネプテューヌ「うん、本当に酷いよ…大人なんて…」
アイエフ「この世も末ね…汚い大人が多すぎるわ…」
こなた「大人なんてそんなもんだよ…」
銀時「お前らそう呼ぶのやめてくんね?;」

……

『カインの脳内』

チフユ「ふっふっふっ…ありがとう、最高の褒め言葉だ」

……

廊下

圭一「ったく…理事長は何考えてんのかわかんねえぜ…世話ならち

ゃんとした場所もあるだろうに」
こなた「何か理由があるんだろうけど、まあ期待しないでいた方がいいかな。それよりも…」

しゅるしゅるしゅるぐにゅぐにゅ…

フウ・ステラ「け、毛虫いいいいいい！！！？？」
セレナ・ベル「蛇いいいいいいいいいい！！！？？」
こなた「…この現状をどう凌ぐかだよね；」
かがみ「ていうか、こいつら寮にもうろついてるんじゃないのか？；」
銀時「まじで勘弁してくれよ…；」

今日一日が終わるまでは、まともに生活できないのは目に見えている。あきらめる者もいれば、虫達をこらしめてでも平穏を維持しようとする者など様々である。こなた達もまた、どうしたものか悩んでいるのだ。
ところが、その時…

ぴょこぴょこぴょこ！

ネプギア「？」

歩いていると、ネプギア達の目の前を紳士服を着た小さな兎が2本脚で走って通り過ぎた。右手には、手帳が握られている。

ノワール「兎…？」
ベール「あの姿…もしかして、不思議の国の○リスでお決まりの兎…？」
エリオ「でも、持ってたのは時計じゃなくて手帳でしたけど？」

有名なあのア○スによく出てくる兎そっくりで、今現れたのもそれではないかとほとんどが思った。ただ一人を除いて。

レナ「……ぃぃ…（震）」
ベル「どうかしたの、レナ？」
銀時「兎が怖いのを隠してんのか？別にそうこらえなくても…」
レナ「はうぅぅ～～～！！あの兎さんかぁいいよぉ～！！お持ち帰りぃ～～～！！！（目がきらきら）」
一同「へ！！？」
圭一「レナ！！？」

だだだだだだだだだだだだ！！！！（兎へ猛ダッシュ）

兎「！？ひえええぇぇぇーーーーー！！！！？？」
ティアナ「兎がしゃべった！？」

なんと兎はしゃべれたのだ。だがそれよりも、目を輝かせながら捕まえようとダッシュして来るレナに危機感を抱き、びびって全速力で逃げだした。

銀時「おいいいいいぃぃぃ！！？あいつ急にキャラ変わったぞおい！！？」
新八「何あれ！？なんかサイヤ人っぽく猛スピードで走りだしたんだけど！？」
圭一「レナは可愛い物を見ると、暴走する癖があるんだよ…；」
こなた「流石ひぐらしヒロイン…恐るべし；やはりかぁいいモードになったレナは、今作でも健在ということか…」
かがみ「メタってる場合か！！どうすんのよ！？」
ネプギア「と、とにかく追いかけましょう！」

一応緊急事態ということにして、レナと兎を追いかけることにした。
だが、かなり速いスピードで走っているため、銀時達も全速力で追いかけなければいけない。

たたたたたたたたたた！

……

レナ「待て待て待て待てえぇぇ～～～！！兎さんは、レナがお持ち帰りぃ～～～！！」
兎「やばいやばいやばいやばい！！？巨大化生物達、助けとくれーーー！！！」

ぴーーーっ！（ホイッスルを吹く）

銀時「何だと！？」

かさかさかさかさかさかさかさ！（後ろから迫る音）

なのは「ふえっ！？後ろから迫って来てるのって…！？」
ビビ「…嫌な予感しかしないんだけど…！（（（（（（。Д。；））））））」

がさがさがさがさがさがさ！！
ぐにゅにゅにゅにゅにゅにゅにゅ！！
どどどどどどどどどどどどど！！！

なんと、巨大ゴキブリ、毛虫、カエル、ハチ、クモ等の虫大群が迫って来た。きっと、兎を助けるためにやって来たのだろう。

女性陣7割「嫌あああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？」
男性陣9割「何じゃこりゃああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？？」

兎を追いかけていた自分達もまた、大ピンチに陥ってしまったようだ。

ザック「やべえよこれ！？こいつら俺達から兎を守るためにやって来たのか！？それとも兎を食べに来たのかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」
ギルシア「知るかよ！それよりどうする！？全部まとめてやっちまうか！？」
銀時「馬鹿野郎！！こいつら全部理事長が集めて飼育してるってのを忘れたのかよ！？こいつらに傷でも入れて取り返しのつかないことになったら、今度は俺達がハード達からお仕置きくらうはめになるぞ！！」
フウ「で、でも気持ち悪いよぉぉーーーー！！！」
ラム「同じくぅーーー！！！」
ロム「ひぐっ…怖いよぉ…」

いざとなれば倒すことはできるが、理事長達の元で管理されているとなれば手出しはできない。それを思うと、理事長達管理者にストレスがたまってしまうのは無理もない話だ。
話していると、兎より先の方からもゴキブリの大群がやって来てしまった。

チルノ「う、うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？前からも来たあぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

はやて「ちょっ、んなあほな！！？」
アイエフ「どうすんのよ！？このままじゃ逃げ道はどんどんなくなっていくわよ！！」
コンパ「こ、怖いです～！！」
ジャンヌ「うぅ…いっそ奴らの精気を……うあぁぁぁやっぱだめ！！気持ち悪すぎる！！」
レーティア「そうね…これだけの数だと、まずい後味が当分残りそうだものね…」
ビビ「ああもうっ、相手がメスで私達の十八番でもどうしようもないじゃないのぉぉー！！」
アイリ「ていうか、あの生物達から精気を吸うなんて正気の沙汰ではありませんわよ！？」

そりゃそうだ。ましてやゴキブリ達の精気を吸うなど、自ら腐った食材を口にしようとするも同然である。ていうか、吸うという発想どころか触る発想すらない。恐るべし人類の敵。
とか言ってる間に、先陣を切って兎を追いかけるレナに巨大生物達が襲いかかって来ていた。

かがみ「ちょっ、レナが犠牲者第一号になるつつあるうぅぅぅ！！？」
言葉「竜宮さん危ない！！！」

しかし…

レナ「はうはうはうはう～～！！レナのお持ち帰りを邪魔しないでほしいかなっ、かなあぁぁぁっ！！！」

どがばきずどばごずだだだだだだだだだだだ！！！！

全員「ちょっ、えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？？」

その生物達でも、かぁいいモードのレナを止めることなどできはしなかった。レナ独特の体術、レナパンの前ではどいつもこいつも一発で落ちるのみ。
あ、一応手加減はしてるようなのでご安心を。

銀時「おいいいいいいいいいい！！？あいつ恐れるどころか平然と虫達を蹴散らしやがったんですけどおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！？」
ネプテューヌ「しかも素手で…」
ユニ「怖くないの！？」
神楽「まさか、レナはゴキブリを愛してて怖くないって設定持ちでアルか！？」
ノワール「いやありえないでしょそれ！！？」

もはやカオスな状況になりつつあるようだ。いや、もうなっているのだろう。
そうこうしてしばらく時間が経つが、状況はなかなか変わらないしおさまらない。

セレナ「い、いつになったらこの事態がおさまるのーー！！？」
ネプギア「この状況はもう嫌…；」
ほむら「埒があかないわ…こうなったらいちかばちか…」
フウ「どうするの！？」
ほむら「この巨大生物達はあの兎が操ってる。なら、あの兎さえ捕まえれば事態は収まる」

かちゃっ、きいいいいいん！！

業を煮やしたほむらは、左右に道が分かれている所で円盤の機械を起動させて周り全ての時を止めた。そして一人で動くほむらは兎を片腕で抱えて、右に走ってある程度距離をあけてから時を動かした。

かちっっ、ぶぅぅん！（時は動き出す）

レナ「はうっ？あれ、兎さんは！？」

どどどどどどどどどど！！！

すると、巨大生物達は全てほむらの方へと向きを変えて走っていく。他の生徒達は全員置き去りにされて、何が起こったのか理解を急ぐ一同はひとまず無事で済んだ。

兎「なななっ、捕まったーーー！！？」

ほむら「貴方には話すことがあるわ。今すぐあの生物達を大人しくさせなさい。さもないと…貴方を葬るわよ（拳銃を突きつける）」

兎「ひいぃーーー！！？わわ、わかった！止めるからお助けをぉぉぉーーーー！！！」

……

運動場

こうして、ある意味絶体絶命の危機は回避され、兎を捕まえた所で話を聞くことにした。

ネプテューヌ「ふうー……もう疲れたよ～；」

ベール「ほんと…くたくたですわ…；」

兎「いやあ悪かったねぇ。オイラの虫達がいろいろ迷惑かけたようで…でも、いきなり捕まえようとするのは勘弁してほしいよ；」
圭一「全く…一時はどうなるかと思ったぜ（レナの頭を押して下げる）」
レナ「はぅぅ…ごめんなさい…；」
ほむら「それで、貴方は何者なのかしら？」
兎「はい、オイラは超次元学園の飼育係を任されてるチャピーっだよ。王魔時動物園のシナさんから、バイトとして派遣されたんだ」
銀時「王魔時動物園の奴だったのかよ？」
チャピー「ええ、実は理事長が受け取った動物や虫達の世話で少し困ってたんで、オイラが理事長と結託して動物と虫達の世話の整理をするために、一旦虫達を学園の運動場とかに出してもらったんだけど…どうも学校内にも行ってしまったみたいだね」
ザック「ほんと、もうこれっきりにしてほしいぜ…；」
チャピー「いやはや、面目ない。あと３０分くらい経ったらすぐに虫達を飼育部屋に入れ直すから、もう少し我慢してね」
ユニ「早めに頼むわよ？」

話もまとまり、ひとまずこれで騒動になることはなくなった。全員一安心だ。

チャピー「さてと、そろそろ仕事に戻るからまた後で……あっ、そうだ今さっき予言を聞いたんだった！」
ほむら「予言？」
チャピー「実は、趣味の範囲だけど予言を聞いたり占いもやってるんだ。それで、たまに理事長達からも頼まれることがあるんだよ」
ネプテューヌ「そうなんだ。じゃあ、今さっき聞いた予言って何なのかな？」
ネプギア「お、お姉ちゃんそれは無理に聞かなくても…」
チャピー「うーん…別に言ってもいいんだけど、今度の予言はあま

りにも信じられないから、嘘の予言である可能性が高いんだよなぁ。話しても何の得もないよ？」

ラム「何か引っかかるわね…だったら聞かせてよ。嘘なら聞いても問題はなんだし」

ロム「こくこく…」

チャピー「そうかい？…じゃあ、一つ話すよ。今回受けた予言は…」

『超次元学園の絶対なる力、大きな災いをもたらさん。その災い、力に溺れし者共までも巻き込むであろう…』

ネプギア「災い…何のことなんでしょう？」

チャピー「さあ？オイラにも全く意味がわからないよ。今までたくさんの予言を聞いたり占ってきたりしたけど、今回の予言は今までよりも難しくてね…」

ネプテューヌ「ふーん？」

生徒達も、この予言の意味がわからなくて首をかしげた。何が災いで、何が起きることを暗示してるのか、わかる要素がない。

チャピー「まあ、そんな考え込まなくていいよ。予言だって不完全なものだから、必ず予言通りに当たるものじゃない。災いなんてのも嘘で、本当は逆にいいことが起きる可能性が高いこともある。軽く聞き流す程度でいた方が、きっと気楽だよ。未来は自分達の手で切り開く…でしょ？」

チャピーは無理に考えさせまいと、笑顔で全員にそう言った。言われた生徒達も、言葉の最後の部分に同感してそれもそうだと思った。

チャピー「んじゃ、そろそろ戻らなきゃ。じゃあまた、占って欲しかったらいつでも受け付けるからねー！」

そう言い残して、チャピーは学校内へ戻って行った。

ブラン「…私達も戻りましょう。これ以上ここにいても無駄」
ベール「そうですわね。そろそろ授業が始まりますわ」

生徒達も教室へ戻って行く。
しかし、そんな中二人だけまだ考えてる者達がいた。

圭一「絶対なる力が災い……てことは…」
レナ「…予言通りにならないにしても、予言に沿った壁が来るってことなのかな…かな？」
圭一「かもしれないな。この学園にいる皆なら、どんな未来の壁でも乗り越えるって信じてるが……」
レナ「一応、ちょっとは構えてた方がいいね。敵はデニー達だけじゃないかもしれないから」
圭一「あぁ、もしかしたらカイト達が関係することでもある可能性も捨てきれないしな…」

圭一とレナはそう会話して、後に続いて教室へと戻って行った。
二人はまるで、何かを感じてるようでもあった…

……

チャピー「んー……何であんな予言が…まあ考えても仕方ないか。どうせ理事長達も信じないし、来てもどうということはないって言い切るだろうし。さて、仕事と報告っと！」

31話「巨大虫騒動」（後書き）

女性達にとって、あんな巨大な虫達に追いかけられるのは地獄かもしれません。平気な人もいるでしょうけど…

ちなみに、俺も虫は苦手な方です。

32話「裏人格発動」（前書き）

フウとフェイトの模擬戦です。ところが、後半から急展開が2回続きます。多分ね

32話「裏人格発動」

きーんこーんかーんこーーーん！（お約束）

16：50

運動場

フェイト「それじゃ、希望通り全力でいくからね」

フウ「はい、お願いします！」

なのは「二人とも準備はいい？じゃあ、いくよ！」

前回の巨大虫騒動が解決してから数時間後、放課後の時間帯だ。この時、フウは自分を鍛えるためになのは達に模擬戦を申し込んでいた。今から相手になるのはフェイトで、なのはとはやては審判として見守る。他にもステラをはじめとする複数の生徒達が見物するために集まっていた。

なのは「では…戦闘、始め！！」

だっ！！

先に動き出したのはフェイト。フェイトは瞬速でフウに突撃していく。対してフウは術式を展開し、氷の刃を幾多も召喚する。

フウ「いっけえっ、全方位発射！！！」

どばばばばばばばばばばばばば！！！

フウの掛け声とともに氷の刃が一斉に発射され、フェイトへ狙いを定めて飛んでいく。しかし、フェイトも熟練の魔導士。それらが自分に一点集中で当たる前に飛翔し、真上の氷刃複数を鎌状のバルディッシュで斬り砕いて回避。残りの氷刃は空を切って一点に乱暴に集まった。

フウ「まだまだ！！」

しかしフウは怯まず、杖を回して突き立てて次の魔法を唱える。左右に別の青い魔法陣が展開され、そこから氷の龍が出現してフェイトへ飛んでいく。さらに、集った氷刃の塊も一旦砕けて、その中から一瞬で再生して具現し直すかのように氷の龍がもう1匹現れた。3頭の氷の龍がフェイトへ牙を立てようと、防御を省みることなく突進する。フェイトはバルディッシュをバットの構えで振る体制になる。

フェイト「3ウェイ・ハーケンセイバー！！！」

びしゅううっ、ずばばばばばばば！！！

バルディッシュを振ることで飛ばされる雷の刃が3つ飛び、氷の龍を3匹共簡単に切り裂いた。一気にまた氷の破片が全体に飛び散り、その中で3つの刃がフウへと追尾して迫ってくる。

フウ「これも駄目なの…くっ！」

フウはすぐに自分を包む氷の壁を地面から作り出し、刃を全て防御する。壁にはひびが入り、あと1～2発の攻撃で簡単に割れそうだ。壁をすぐに地面へ潜らせてしまい、壁の回復を優先することにしたフウは、また突撃してくるフェイトを前に次の攻撃に出る。

フウ「ウェポンファンネル！！」

術式が書かれた札を複数出し、それを使ってナイフや槍といった武器の数々を召喚して一斉にフェイトへ飛ばした。攻撃方法は同じように見えるが、それは見せかけ。

きききききききききききん！！

フェイトは持ち前の素早さと回避力で、迫る武器を回避しては弾いたりうまく捌く。そのままフウの近距離まで迫った時…

フウ「フリーズエッジ！！！」
フェイト「！」

ずがぁぁぁぁぁぁぁん！！！

自分の目の前に巨大な氷の剣を地面から突き出した。先ほどの攻撃でこちらにあえて接近させるように仕向けて、近づいて来た所で大攻撃をたたきこむ。これも一般的な戦法だろう。

びききっ！

フウ「え！？」
フェイト「はぁぁぁぁっ！！！」

ずばばばばっ、ずがぁぁぁっ！！！

フウ「きゃあぁぁぁっ！！！」

しかし、フェイトは氷の剣とぶつかる直前で少し後ろに引いていたために当たっておらず、フェイトは剣を斬り裂いてフウに5連撃を当てて、もう1発振って彼女を後ろへふっとばした。

……

マリオ「この勝負…明らかにフウが不利だな」
レオン「しかも、相手の素早さに攻撃が追い付いていない。これで勝つのは難しすぎる」
ノワール「修行のために挑んだそうだけど…ちょっと相手が悪すぎたんじゃないかしら？」
ギルシア「違うとは言いきれないだろうな」
ステラ「フウちゃん…」

……

その後もフウはフェイトの攻撃を受け続けている。近距離攻撃を1つもかわせず、フェイトのコンボはどんどんつながっていく。ある程度連撃を与え、ふっ飛ばしてはハーケンセイバーやプラズマランサー等で追撃して、その隙にまた連撃で絡め取る。俗に言う永久コンボを目指した攻撃だ。

フウ「うあぁっ、ぐっ…きゃあぁっ！！（駄目…抜けだせない…！）」
フェイト「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」
ばしゅうぅぅぅ！！！どがぁぁぁぁぁん！！！！
コンボの限界を感じたフェイトは、コンボの締めとして零距離でハーケンセイバーを撃ち、フウもろとも刃を飛ばし、そして壁へ激突

させた。

フウ「うっ…ぅ……！」

フウの体力はまだ尽きていない。だが、風前の灯であるのが丸わかりである。

フェイト「…最初の戦法が仇になったね」

フウ「っ…（確かに…最初の攻防でこっちが不利であるのは見えていた…そもそも、相性が悪いのもわかりきってた……ちょっと、のぼせちゃったかな…っ）」

フェイト「このまま、決めさせてもらうよ！」

フェイトはバルディッシュを構え、ハーケンセイバーでとどめを決める体勢になる。

フウ（負ける…！）

だが…フウが認めようとした、その時だった。

『変わりなさい…』

フウ「え…！？」

ずぎゅうぅぅぅぅぅっ！！！

フェイト「！？これは…闇属性の魔力！？」

なのは「え！？」

はやて「な、何や！？」

……

レオン「む？覚醒か！」

こなた「ここでまさかの変貌とは！？」

百華「おぉ！？」

……

突然、フウから闇属性の魔力が吹き出し、それがおさまるとフウの姿が異様な形で確認された。フウは第ダメージを受けていたのに立っていたのだ。

「…私の可愛い分身の修行に付き合ってくれてありがとう…おかげで、私も久しぶりに外へ出られるようになったよ」

フェイト「！」

様子がおかしい。フェイトだけでなく、なのはやはやて、そして見物してる者達全員がそう思った。

フェイト「…フウであってフウじゃないね…？君は何者なの！？」

「初めまして、私はフウの半身…名前はフウカ」

なのは「フウカ…？」

はやて「別人格のフウってことかいな！？」

フウカと名乗ったフウは、右手に闇を集めてある剣を召喚した。

……

ベール「!?あの剣は…見たことがありますわ!」
ユニ「えっ!?」
ネプテューヌ「何それ!?どんな剣なの!?」
ベール「図書室で見たばかりですけれど…あれは、魔剣のようですわ」
ノワール「魔剣?」
ブラン「…私も見たことがある。あれは…魔剣ダーインスレイヴ」
ネプギア「魔剣ダーインスレイヴ…?」
ベール「言い伝えによれば、一度鞘から抜くと生き血を浴びて完全に吸うまで鞘に納まらないといわれる、恐ろしい魔剣だそうですわ…」
ラム「生き血って…!?」
ロム「うぅ…怖い…(震)」
ベール「本来、あの剣はあまりにも危険であるため闇の世界に封印されているはず…それを、どうしてあの娘が…?」
ステラ「あちゃあ…やっちゃった…;」

……

フウカ「さてと…挨拶代わりに、この魔剣の威力…存分に披露してあげる」

ごおぉぉぉぉ!!

全身から闇と炎のオーラが放出される。それは、地面にひびを入れるほど大きい。

フェイト(さっきまでのフウとは違うなら、実力もきっと別物になってるはず…)
フウカ「さあ、いくよ」

フウカはそう口にした後、魔剣を手に握り、フェイトへ突撃して来た。接近すると同時、連撃をはなってきた。

ギンガンガンギンガキィィッ！！

フェイト「くっ！？（攻撃力が倍増してる！？しかも、速い！？）」

フウカ「もっと激しくっ、ほらほらほらほら！」

さっきまでのフウとは思えぬ能力、太刀筋でフェイトと剣劇を繰り広げる。はじめは互角に見えていたが、少しずつフェイトが押されていく。このまま続ければ隙を作ってしまうと読んだフェイトは、一旦攻撃をよけてフウカから離れ、遠距離攻撃で攻めることにした。

フェイト「プラズマランサー！！！」

どばばばばば！！！

無数の雷光弾がフウカに飛んでいくが、それでもフウカの余裕の表情は崩れない。

フウカ「あらあら、遠距離でも全然いけるんだけど？」

フェイト「え！？」

フウカ「今度の武器弾幕…激しいわよ」

ばばばばばばば！！！

今度は札を使わずに先ほどの武器の数々を召喚した。しかも武器はどれも攻撃力が上がっているのがわかるように鋭くなっている。それらを指で指揮して一斉に飛ばした。

これもやはり先程と比べてバージョンアップしており、スピードも速い。
良く見れば、弾丸も全て相殺されている。

フェイト「っ！」

フェイトは何とかうまく捌いて回避を続けるが、今度は攻める所がなかなか見えて来なくて突撃できない。さらに、そうこうしてると…

フウカ「隙だらけ（後ろから）」
フェイト「な！？」
フウカ「受けてみなさい。紅蓮の剣を！！」

どごおぉぉぉぉぉぉぉん！！！！

はやて「直撃！？逃げられなかった…！」
なのは「フェイトちゃんっ！！！」

どがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！

フウカがフェイトの背後を取り、魔剣に炎を宿してフェイトを薙ぎ払った。さらに、強力な炎もフェイトに直撃して地面にたたきつけた。落下すると同時に大爆発も起こした。

……

かがみ「ちょっ！？」
こなた「フェイトさんがスピードで負けた！？何あれ、新しいチート！？」
ネプギア「しかも、フウちゃんの攻撃の威力が大きすぎる…！？」

ステラ「当然ね…別人格のフウちゃんは、はっきり言って化け物級の強さよ」
ユニ「何よそれ…！」
ステラ「いろいろあってね…フウちゃんもただ者じゃないってことだよ。けど…まずいね。このままじゃ、フェイトさんを殺そうとするかも…」
ノワール「ちょっ！！？」

……

フウカ「もうおしまい？つまんないなあ」
フェイト「っ…強い…ぐっ！」
フウカ「それとも、ちょっと張り切り過ぎたのかしら？…まあいいや」

フウカは魔剣を構え直し、フェイトに刃を向ける。

フウカ「せっかく表に出られたんだし、手始めに…貴方の生き血を思いっきり吸わせようかしら♪」
フェイト「！？」

フウカの言葉の意味が、殺害予告であることを直感したフェイトへ突撃して来るフウカ。このままでは、あらゆる意味でまずい。

はやて「あかん！？なのはちゃん、止めるで！！」
なのは「うんっ！」

ネプテューヌ「駄目ー！！殺すなんてことしちゃ駄目だよ！！（走）」
ネプギア「フウちゃんを止めないと！！」

観客全員そしてなのは達も、フウカを止めるために戦闘準備をしながらフェイトを守ろうと走る。フェイトもバルディッシュを構え、迎え撃とうとする。
危機一髪の状況が、一気に…

びーー、びーー、びーー!!

チート『緊急事態発生、緊急事態発生!生徒のセレナが失踪した模様。さらにデニーの部下らしき者達の反応も確認。生徒達はすぐに出動して、セレナの無事を確保してください。繰り返します。生徒のセレナが失踪…』

決着に向かうことにはならなかった。突然、緊急の知らせが全員に入ったのだ。内容は、セレナの失踪とデニーの部下が出現したこと。

フウカ「……やれやれ…邪魔が入ったわね」
フェイト「…セレナが…失踪…?」
なのは「そんな、いつの間に…!?」

知らせを聞いた生徒達は、全員驚愕した。やることは1つ、すぐに行かないとセレナに危険が迫りかねない。邪魔が入って少し不機嫌になったフウカは、学園入口へ歩く。

フウカ「…命拾いしたね。魔剣の餌は、デニーの部下の血にすることにしたよ」
フェイト「……フウカ…」
フウカ「…先に行くわよ。早くしないと、セレナをやっちゃうかもよ?」

ばっ！！（飛んで行く）

はやて「全く…困った子やなぁ。私達も追いかけたい所だけど…」
なのは「フェイトちゃん、立てる？」
フェイト「大丈夫…でも、今の状態じゃ足手まといになるかもしれない…」
なのは「そっか…じゃあ、私達は守備にまわろうか」
はやて「せやな。皆、頼んだよ」
ベール「えぇ、任せてくださいな」
ネプテューヌ「ほんと突然だね…でも行かないわけないよね！」
ネプギア「お姉ちゃん、私達も追いかけよう！」
ベール「皆さん、行きますわよ！」

かくして、突然セレナの失踪が発覚して模擬戦は中止となり、ネプテューヌ達はフウカと共に保護をしに出動したのだった。

……

32話「裏人格発動」（後書き）

フウカのままモンスター討伐も考えましたが、相手はデニーの部下にしてセレナ保護戦を同時にすることにしました。激戦書ければいいけど…

33話「ヴォルフレイム・ハート」（前書き）

前回の続きです。セレナがリクエスト通りにパワーアップします。

追記

前回なのは達も出動するよう書いてましたが、都合により今回出ません。もちろん話も修正いたしました。

33話「ヴォルフレイム・ハート」

あらすじ

フウとフェイトの模擬戦の最中、セレナが失踪するという事態が発生した。さらに、デニーの部下の反応もあったそうだ。すぐに中止し、性格が変貌したフウことフウカと共に、セレナの保護のために出動するのだった。

……

セレナの反応を辿りながら、彼女を追跡するネプテューヌ達。フウカは先に飛んでいるため、ネプテューヌ達は彼女を頼りに走っている状況だ。

なお、今回のセレナ保護優先メンバーは以下の通りである。

ネプテューヌ・ネプギア
ノワール・ユニ・ベール
ブラン・ラム・ロム
こなた・かがみ
ギルシア・レーティア
ステラ・ベル・フウカ
チルノ・ほむら

……

17：30

セレナ「……ここが…例の場所…」

セレナが到着した場所は、遺跡と思われる大きな祭壇だった。周りには全部で１０本の柱が立っており、中心には何らかの術式が描かれている。

セレナ「…ここに、ヴォルフレイムの魂が封印されているのね…」

どうやらセレナは、ある物を手に入れるためにここに来たようだ。

証拠として、右手には昨日イストワールから受け取った資料が握られている。

セレナ「…後は、ここで自分が善人として生きている証となる水を地面に濡らす…これは、涙のことかしら…？」

資料を確認して、言った事の意味を考えるセレナ。

善人として生きている証となる水…それが何のことなのか、セレナにはまだわからなかった。ただ、特別なアイテムなどは書かれてないあたり、必要な道具はないらしい。

セレナ「…考えてもわからないし、いろいろ確かめよう」

「お嬢さん？もうすぐ夜になるんだから、早く帰らないとだめよ～？」

セレナ「！？」

まずは何からしてみようか考えるセレナに、何者かが声をかけて来た。振り返ると、黒に少し近い藍色のポニーテールで、白いレオタードの上に薄い上着、白いグローブとブーツ、そして尻尾を装備しているスタイル美貌の女が柱の上に立っていた。

セレナ「貴方は…誰！？」
「うふふ…子猫ちゃんを捕まえる猫よ？私達が欲しくてたまらない、可愛い子猫ちゃんを…ねv」
セレナ「…！まさか、デニーの部下！？」
「ぴんぽーん♪私はデニー様の猫、ルッシャンっていうの。ちなみに、こないだエリート学園残党とヴァーラ様の傭兵団が合併して、新しく組織された運命粛清軍の４将軍の１人…その人が私の飼い主よ♪」

ルッシャンと名乗る女は、Ｇカップ程の巨乳をたゆんと揺らしながら、セレナにウインクをして自己紹介をした。身分をばらすあたり、余裕なのだろう。

セレナ「ヴァーラ！？最強最悪と名高い傭兵団のリーダー、ヴァーラガルザのこと！？」
ルッシャン「その通り♪そして、運命粛清軍の総司令閣下になったばかりのお方よ」

ヴァーラという言葉に反応したセレナ。セレナは、ヴァーラガルザという人物の噂を聞いているらしい。

ルッシャン「いやあ、それにしてもまさかセレナちゃんが１人で学園から出て来てくれるなんてねぇ。おかげで手間が省けたわ♪」
セレナ「くっ…！」
ルッシャン「本当なら人質に取って、ステラちゃんにフウちゃんにベルちゃんも捕まえたいんだけど…まあステラちゃんとベルちゃんはおまけだし、フウちゃんも次の機会にゲッチュしちゃえば問題ないのよね。というわけで、今日は貴方だけ連れて行くから、大人しくしてね？」

ルッシャンは猫撫で声でセレナに投降を呼びかける。しかし、ここまで来て逃げる気も投降する気もない。引くわけにはいかないのだ。

セレナ「…そう言われて、大人しくするわけないじゃない！」

セレナは戦う構えを見せ、ルッシャンに対して敵意をあらわにする。

ルッシャン「あらやだ…抵抗する気なんだ？困ったな…そんな風にされちゃ…」

じゃきんっ！！（両手に爪を出す）

ルッシャン「私、過激になっちゃうじゃない！♪」

ルッシャンの目つきが猫の鋭い目になり、セレナに襲いかかった。

……

その頃…

ラム「何…？あの遺跡？」

ベール「見たことのない遺跡のようですが…？」

フウカ「あそこに餌がいるようね。いいわ…たっぷり吸わせてあげる」

ばっ！

ベル「ちょっとっ、待ちなさいよ！」

ステラ「早く行こう！」

……

しゅばばばばば！！

セレナ「くっ…！（よけ）」

セレナとルッシャンの戦いは、早くも戦局が見え始めている。ルッシャンは爪による体術と、恐るべき素早さを駆使してセレナを追いつめていた。

ルッシャン「ニャオーン！！（前から突撃）」

セレナ「ホーリーランス！！！」

どおぉぉぉん！！！

左手に光の槍を作り、ルッシャンがエアダッシュで襲いかかる所を狙って槍を投げて当てた。

命中すると同時に閃光が発生し、セレナは攻撃が当たったと確信した。

ズバァッ！！

セレナ「がっ…！？」

ルッシャン「もらった♪」

ズバババババババッ！！！

セレナ「きゃあぁぁぁぁぁーーーーっ！！！！」

しかし、その直後にセレナの体に傷が入った。それはルッシャンの

爪が与えたもので、ルッシャンはそのまま一気にセレナをがむしゃらに切り裂いていく。セレナは、一瞬にして大量出血しながらその場に倒れた。彼女の血が、地面を広がるように濡らす。

ルッシャン「あらら?やりすぎたかしら?」

セレナ「っ…う…そん、な…」

ルッシャン「参ったなあ。これじゃご主人様に怒られちゃいそう…でも、最悪死体にして連れて来てもいいって言われてるから、気にしなくていいかな♪」

ホーリーランスは命中したのに、ルッシャンには傷が一切ついていない。おかしいと思うセレナだが、意識がまともに働かない。

ルッシャン「とりあえず、手足が動かないようにしとこっと」

爪を尖らせ、振り上げて狙いをさだめる。

セレナ（殺される…っ！）

そう思った時…

ガキィィィン！！！

ルッシャンの攻撃は、突然現れたフウカによって止められた。

ルッシャン「あらら?助っ人が来ちゃった」

フウカ「もったいないことするじゃない…せっかく楽に血を吸える所だったのに」

後から続いて、ネプテューヌ達がやって来た。

ネプギア「あれは…！？」
ネプテューヌ「セレナっ！！」
セレナ「っ…みん、な……」

全員は瀕死のセレナを見て、ネプテューヌが驚愕の表情で叫んだ。
そして、ルッシャンの姿を見て理解し、怒りを向ける。

ベル「…貴方がやったんでしょ…？よくもセレナをズダボロにしてくれたわね…」
ルッシャン「うふふふ、セレナちゃんったら、あまりにも脆いみたいでね～。やりすぎちゃった、てへっv」
ノワール「舐めたことしてくれたじゃない…」
ベール「わかってますよね…？次は、貴方が血塗れになる番ですわ」

全員武器を出し、ルッシャンに向ける。対して、ルッシャンは余裕の姿勢を変えずに言う。

ルッシャン「まぁ怖～い。猫ちゃんがくぶるしちゃうわぁ」
ブラン「ふざけやがって…覚悟しやがれえぇぇぇっ！！！！」

ブランが挑発にキレて突撃。それに続くようにノワールもルッシャンへ攻撃を仕掛けに行く。

ひゅんっ！

しかしルッシャンは先に動き出したため、ブランの横払いは空を切った。上に逃げたのを確認したノワールは飛翔し、ルッシャンを狙ってトルネレイドソードを振った。

ルッシャン「遅い遅い♪」

びしゅん！（瞬間移動）

ノワール「速い！？くっ！」

がきぃぃんっ！！

しかし、この攻撃も当たらなかった。ルッシャンは後ろに回って引っかいてきたので、ノワールは何とか防御した。受けた攻撃の衝撃でノワールが落下する所で、変わるようにユニが大銃で射撃するが、ルッシャンはまたもやよける。

ルッシャン「こっちよ～ん♪」

ユニ「こいつ…！！（連射）」

ラム「うっとおしい奴ね！あんたなんか凍っちゃえ！！」

ロム「ノーザンクロス…！」

ギィィィン！！！

着地した所を狙ったサザンクロスを飛んでよけ、続くように撃ってきたノーザンクロスをエアダッシュで回避するルッシャン。

ベール「ネプテューヌ、ネプギア！早くセレナを助けなさい！（突撃）」

ネプテューヌ「わかった！」

ルッシャンが攻撃の嵐を動き回っている間に、ネプ姉妹は倒れているセレナを助けに走る。

ルッシャン「あ、ちょっとだめよ?子猫を泥棒しちゃ♪」

しかし、ルッシャンの素早さはその動きも逃がさない。

ネプギア「させません!!（スラッシュウェーブ）」

ルッシャン「させてよー♪そおれっ!!」

どばばばばばばばばばっ!!!!

ネプギア「きゃあぁぁっ!!?」

ネプテューヌ「うわあぁぁぁっ!!?」

真空の斬撃が姉妹に何度も降り注ぎ、セレナの元へ行くことを阻んだ。

ベール「暴れすぎですわよ!!大人しくなさい!!」

ギルシア「ちったあ黙れやこらあぁぁぁ!!!!」

チルノ「このっ!!」

どばばばばばばばばばばっ!!!!

ベール「くっ!?」

チルノ「わわっ!?激しすぎるよこの斬撃!!?」

ギルシア「ぐっ、うざってえ!!」

3人一斉に攻撃を仕掛けてルッシャンの攻撃の手を止めようとするが、真空の斬撃の激しさに弾かれてしまう。攻撃範囲が広い上に斬撃の数も多いため、破るのは難しい。

こなた「何という物理弾幕…これじゃ近付けないじゃん!」

かがみ「でもこのままじゃ、セレナが危険だわ！何としても早く助けに行かないと！（槍を回して雷を集める）」
ルッシャン「無理無理♪私の素早さをなめちゃいやんv」
ベル「うるさい泥棒猫ね…すぐにしつけてあげるわ！！（魔力全開）」
ステラ「合わせるよ！！（魔力全開）」
ステラ・ベル「プリズミックスターズ！！！！」

合体魔法を発動した二人の掛け声と共に、全方位から無数の光の弾丸が飛んできてルッシャンに次々と襲いかかった。

ルッシャン「たくさん来ちゃった？逃げないと！」

相殺はできないと見たルッシャンは、ひとまず攻撃を止めて地上へ逃げる。

ごおぉぉぉぉ……びきびきびき！

ルッシャン「って、あらら！？」
こなた「とったどぉー！！」
ネプギア「よし、セレナさんを保護しました！」

着地したルッシャンは、こなたが放った冥醒剣の冷気によって足が凍りつき、さらにセレナも保護できた。
かがみ「ようやく捕まえたわねっ！覚悟しなさいよ、この猫女！！！（召雷）」
フウカ「チェックメイト、くらいなさい！！（紅蓮の斬撃）」
レーティア「飛んでいきなさい！！！（ビームショット）」

こなた「滅っ！！！（剣を突き立てる）」」

どばばばばぁぁぁぁぁん！！！

動きが止まった所を狙い、一斉に攻撃することでルッシャンに今度こそダメージを与えた。

……はずだった。

しゅっ、ひゅばばばばばばばっ！！！

こなた・かがみ「うわわっ！！？」

ノワール「なっ！？」

突然、また真空の斬撃が全員に飛んで来て、多少のダメージを受けてしまった。爆風が止むと、そこには無傷のルッシャンがいたのだ。

ルッシャン「あはっ、残念でした♪」

こなた「ちょっ、そんな馬鹿な！？確かに当たったはずなのに！？」

かがみ「何なのよこいつ！？」

フウカ「…！まさか…チート能力！？」

ルッシャン「ばれちゃった？てへっ♪」

フウカの勘が働き、その原因を見抜いた。

ルッシャン「私の素肌には、どんな攻撃によるダメージも１０００分の１にしてしまう力があるの。さらに防御力も薬で強化してるから、これのおかげで無傷でいられるのよ♪」

ベル「何ですって…！」

レーティア「まずいわね…これじゃ、私達の攻撃は通らないわ」

ルッシャン「その通り♪しかも、この能力は私程のクラスやそれ以

上の人達全員にもついてまーす♪」
ネプテューヌ「嘘っ!?何それっ、そんなの反則だよーっ!」
ルッシャン「私達はいいのっ♪」

衝撃の事実を知り、ネプテューヌ達は自分達が不利であることを認識した。チート能力となれば、カイトやミリアやマリオといった者がいる必要があるだろうが、彼らは別の場所に出動しているためすぐには来れない。

ルッシャン「さてと、それじゃそろそろ死んでもらわないと、ねV」
ブラン「てめえ…っ!!」

このままではまずい。それは、瀕死のセレナにもわかっていた。

セレナ（だめ……このままじゃ、皆やられてしまう…私のせいでそうなるなんて…嫌…!）

どくん…どくん…

セレナ（皆を守りたい…皆を救いたい……そのためなら、この命を犠牲にしてでも…私は……私は!!!）

ごごごごご…

その時、変化が起きた。

ルッシャン「ん?」
かがみ「え、今度は何!?」
フウカ「これは…遺跡が動いている…?」
レーティア「!見てっ、セレナの様子が…」

ギルシア「おい、柱から炎と雷が出てるぞ！？」
こなた「ちょっ、なんか来る！？」

ごおぉぉぉぉ！！！

全ての柱から炎と雷が宿ったかのように噴出していて、それらは微動に光をはなっているセレナに全て飛んで包みこんだ。
雷と炎が包む大きなボールとなり、空に浮かんでセレナの傷を癒して姿を変えていく。
まず、赤髪で蛍光色のV字レオタードを着た姿になり、腕には炎をモチーフにした篭手、足には雷がモチーフの義足、背中には水色透明な雷の羽が４つを装着。そして、右手に柄と刃の長さが同じの薙刀を持つ。

『ソナタノ意志…コノ雷炎ヲモッテミトドケヨウ』

炎と雷がセレナへ吸い込まれた後、降臨した。

ノワール「あれは…？」
ベール「女神…かしら？でも、あれは初めて見る姿…」

何がどうなったのか、驚きながら考えるネプテューヌ達。だが、ほむらは違った。

ほむら「…炎と雷…女神……！わかった…あれは、ヴォルフレイムハートね」
ネプテューヌ「ヴォルフレイムハート？」
ほむら「聞いたことがあるわ。昔、どこかの世界でデニー達やエリート学園の人間達のような大組織、極悪の存在達と戦い続け、最期は全ての元凶と共に自己犠牲で滅びた女神がいたという。その女神

の炎と雷は、神から授かった絶対の力としてあらゆる悪を倒したとも聞いてるわ」
ネプギア「神の炎と雷…！？」
ラム「そんな女神が…でも、どうしてセレナちゃんがその女神になったの！？」
ほむら「詳しくはわからないわ。ただ…セレナの素質や力と何かが反応したことは間違いなさそうね。まさか、ここがその女神の魂が眠る場所とは思わなかったけど…」
ロム「…セレナちゃん…？」

話をしていると、セレナが口を開いた。

ヴォルフレイム「…ルッシャン、これ以上好きにはさせないわ」
ルッシャン「やだ…とんでもないことになっちゃった…？けど、私を捕まえることはできないのっｖもう１度血まみれにしてあげる！」

だっ！！（突撃）

ヴォルフレイム「もうその素早さなんて怖くないわ。だって…」

びしゅんっ！！（横へ）

ルッシャン「え！？」
ヴォルフレイム「私、雷のように動けるんだからね！」

ズゴオォォォォン！！！

ルッシャン「うにゃあぁぁぁぁっ！！！？」
全員「！？」

ヴォルフレイムハートは、ルッシャンの横から雷の速さで奇襲し、刃を炎刃に変えた薙刀で思いっきり斬った。それは、なんとルッシャンに大きな傷を入れた。

ルッシャン「いっ、痛い…！そんな、私の防御力が破られた！？」
ユニ「嘘！？さっきまで全然手ごたえがなかったのに！？」
ほむら「これは…まさか、相手のチート能力を無視している…？」
ヴォルフレイム「まだまだ！！」

ズバババババババッ！！！

さらに、雷速で乱れ斬りをはなち、ルッシャンを次々と追いつめていく。

ヴォルフレイム「とどめよ！！焦がしつくせ、雷炎！！！！」

ズドオォォォォォォォンッ！！！！

ルッシャン「いぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

黄色の炎はルッシャンを喰らい、すさまじい熱で燃焼しつくした。
体力を全て削りきれてはいないが、戦えなくするには十分だ。

ルッシャン「っつ……ひっどぉい…！これは、ご主人様に言いつけなきゃ…！（ある石を出す）」
ベル「！逃げる気よ！」
ルッシャン「今度はこういかないからね！絶対に仕返ししちゃうんだからっ！ぷんぷんっ！（石を握って割る）」

びしゅん！！（テレポート発動）

ステラ「！消えた…？」
チルノ「あの石のせい？でも壊すだけで消えて逃げられるなんて…！」
レーティア「あれがテレポストーンってやつね…初めて見たわ」
ギルシア「ちっ…めんどくせえぜ。あとは…」
ベル「…全く、無茶なことをして…セレナ、貴方一体何を考えたのよ？あれでもし捕まったらどうするのよ？皆に心配かけて」

ベルはヴォルフレイムハートに怒る。他の者たちも、やれやれ顔や心配顔で見ている。

ヴォルフレイム「…力が欲しかったの。デニーの部下達と戦って、私は思ったの。今後皆を守るには、チート能力を封殺できるほどの力が必要なんだって。それでイストワールに相談して、デニー達に動かれる前に手に入れたかったの」
ネプテューヌ「だからって、私達に一言なしで出て行っちゃうのは駄目だよ。私達、皆セレナを心配してたんだからね」
ヴォルフレイム「…ごめんなさい」

罰が悪い顔で謝るセレナ。今回はセレナも悪いのだ。

ほむら「…とにかく、これで任務完了ね。帰りましょう」
ネプギア「そうですね。このことを理事長達にも報告しないと」

いろいろあったが、こうしてセレナは新しい力に目覚めて強化されたのであった。
詳しい能力が何なのかについては、後から知ることになるだろう。

現在わかること
・炎と雷を操る
・チート能力を無視できる
・レオタードがセクシー

33話「ヴォルフレイム・ハート」（後書き）

セレナとフウカはこれでレギュラー入りになりそうです。
それにしても、姿はあれでよかったのかな？

ヴァーラガルザについては、本人が出してくれって以前リクエストしてきたんで傭兵団のリーダーって形で出すことにしました。

３４話「メールパニック」（前書き）

銀魂２３０話をこの長編でパロった話です。

今回は卑猥表現があるため、ノクターン行きになるかならないかわからんぐらい；

エッチする表現はありませんが、言葉だけでも過激に感じそうなので以下のキーワードにご注意ください。

「チンコ」

34話「メールパニック」

きーんこーんかーんこーーーん！

8：20

アイエフ「誰かー、ちょっといいかしら？」

カイト「ん？どうしたアイエフ？」

朝のホームルーム前、突然アイエフに呼ばれたカイト達。何か用事があるようだ。

アイエフ「実は、ちょっと2人に持っていてほしいケータイがあるの」

ネプテューヌ「ケータイ？」

そういった後、アイエフは3つの変わった形をしたケータイを取り出して、その内2つをネプテューヌ、銀時に渡した。

アイエフ「昨日故障したケータイを拾って修理したばかりなんだけど、元の持ち主が誰なのか個人情報が全て消えていて一切のことが不明なの。だから、私達が使っていようかなって考えたのよ」

カイト「ケータイの再利用か？」

アイエフ「そんな所ね。一応、持ち主については調べてみるけど、とりあえず好きに使っちゃって大丈夫だから」

銀時「ケータイねえ…」

ネプテューヌ「本当にいいの？あいちゃんありがとー！」

そういうわけで、銀時とネプテューヌはケータイを受け取ってしば

らく使うようになった。使用してみて、特にウイルスといった怪しい機能はないらしく、主にネプテューヌはそのケータイを意欲的に使い続けていた。
ところが…

……

翌日

１４：００

今日は理事長達の職員会議のため、授業は早く終わった。
ネプテューヌは珍しく1人で遊びに出かけ、銀時もビビやリルとガミガミ騒いで苛々してるので外出している。
カイトとミリアは気分転換に、アイエフ、コンパ、新八、セレナ、圭一、レナ、こなた、かがみ、誠、言葉と一緒に散歩していた。

ぴっ、ぴっ…

アイエフ「…今どこにいるの…っと。送信」

ぴっ（メール送信）

アイエフ「さて、すぐに来るかどうか…」
コンパ「…？あれ、全員に一斉送信になってますけど、いいんですか？」
アイエフ「え？…あ、いっけない！間違えちゃった…」
カイト「あらら、じゃあ皆から返事がどばって来ちまうか」
アイエフ「はぁ…めんどくさいわ」

誤操作してしまい、バツが悪そうに言うアイエフ。

アイエフ「…あら？一斉送信の設定が外れない…？さっきまで普通の設定だったのに」

レナ「はう？」

～♪（着信『嘘（シド）』）

ミリア「あ、早速メールが来たよ」

アイエフ「みたいね…誰からかしら」

メールを確認してみるアイエフ。すると…

……

送信者：？

『今どこにいる？』

お前達が昨日拾ったケータイを、全て私に返せ。

返さねば、この私デスキャンサーが命をもらう。

……

アイエフ「え、誰…！？」

知らない者からメールが来たのだ。

カイト「デスキャンサー？」

セレナ「知り合いの人なの？アイエフちゃん」

アイエフ「いや、知らないって！ていうか、この人にまでメールを

送った覚えすらないわよ」
ミリア「そっか…じゃあ、迷惑メールかな?」
コンパ「どうなんでしょう?もしかしたら、このケータイの持ち主かもしれない気がするです」

デスキャンサーという人物について、カイト達は誰も知らない。だが、普通の人ではない気がしていた。

新八「アイエフちゃん、これは銀さん達にも伝えた方が…」

～♪（メール）

アイエフ「これは…銀さんからだわ。まさか、もう巻き込まれたとか…?」

……

送信者：銀さん
『うるせえ!!今俺パ』

チンコいってんだよ!!

……

アイエフ「ぶっ!!?」
カイト・圭一・誠「おいいいいいいいいいいいいい!!!!??」
新八「とんでもない所で分割してるぅぅぅぅぅ!!?」

パチンコに行ってる銀さんから文面がひｙなメールが来ました。

アイエフ「何変な文面でメールしてんのよあの馬鹿パーマ！？しかも自分の居場所を一斉送信してるじゃない！？」
言葉「で、でもこれなら相手は気付かないんじゃありませんか？文章だけ見れば…」
新八「どう見ても無理だろおぉぉぉ！！！！」
しかも、さりげなく自分を省みないことを銀さんはやっている。
アイエフ「？またメールが…」
……
送信者：レーティア
『あら奇遇ね』
私も今イった所よ♪
……
こなかが「レーティアさんまで銀さんに続いたあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？？」
ミリア「しかも貴方女ですよ！！？サキュバスだから平気だっていうの！！？」
アイエフ「あの駄夫婦…；」
レナ「あ、次々とメールが来てるよ」
……
送信者：スバル
『ちょっと！！』

何やってるるんですか！

……

カイト「やっぱ批難来ないわけねえよな…」

……

銀さん1人でイくなんて許さないですよ！
イかせるのは私なんだから！！

……

カイト・圭一・誠「Σ何言ってんだこの馬鹿あぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
こなた「もはやキャラ崩壊から救えないというのか…；」

……

送信者：ティアナ
『こらっ、スバル！！』
兄さんに手を出すんじゃないわよ！！それは私の役目よ！！

……

送信者：シグナム
『待っていろ』

私がすぐに受け止めに行くからな。ただし、他の奴らは斬り捨てる！

……

カイト「メールでも銀時ラバーズ争うのかこの馬鹿共はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！（怒）」

アイエフ「他所でやりなさいよ！！！（怒）」

ここまで来ると、いろんな意味で痛いと言わざるを得ない。というか、なのはのように目を覚ました方がいいのではなかろうかと、誰かは語る。

かがみ「あー…とりあえずこの馬鹿共はほっとこう；…それより、どうするの？」

セレナ「持ち主がわかったのはいいけど、どこに行けばいいのかしら…」

考えるなり話し合うなりしていると…

～♪（メール）

アイエフ「…ん？ネプテューヌから……なっ！？」

ミリア「どうしたの？」

アイエフ「ね、ネプ子が…！」

……

送信者：ネプ子

『困ってる人いたよ』

今ね、自分の落とし物を拾った人がいないか探してるんだって。あいちゃん、ちょっと調べてー。

写真「歩く私と、後ろにいるおじさん（黒マントにスーツ、右手にはアイアンクロー）」

……

カイト「何!?こいつがデスキャンサーか!?」
コンパ「ね、ねぷねぷ～っ!」

なんと、ネプテューヌと一緒にいる人物こそがデスキャンサーだった。これはつまり…

誠「人質に取られたのか!?」
言葉「そんな…!」
アイエフ「…!デスキャンサーからだわ」

……

送信者：デスキャンサー
『なし』

お前達の仲間は我が手中だ。１０分以内にケータイを全て揃えてファミレス「クラモア」の前に来い。
１０分だ。
我がデスキャンサーの前で１０分立っていられた者はいない。
１秒でも遅ればどうなるかわかっているだろうな（殺）

……

圭一「野郎…っ！」

予想は的中してしまった。このままでは、ネプテューヌが危ない。

セレナ「ネプテューヌちゃんを助けないと！」
カイト「わかってる！すぐに銀さんを呼んで、デスキャンサーからネプテューヌを助けに急ごう！」
アイエフ「じゃ、さっさと銀時にメールを…」

～♪（メール）

新八「あ、銀さんからだ！流石に今のメールで黙ってられないんだ！」

……

送信者：銀さん
『すいません。今俺パ』

チンコいい感じなんで出られません。１０分延ばしてもらえますか？

……

カイト・圭一「Σまた同じ分割で送信してきやがったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？？」
誠「しかもパチンコって、仲間何だと思ってんだよあの人！？」

銀時は自重する気ないのだろうか。

……

送信者：デスキャンサー

『なし』

いい感じってどんな感じなんだ（殺）

……

かがみ「やばいわよこれ！？絶対怒ってるわよあのおじさん！」

こなた「つか『（殺）』って…」

……

送信者：銀さん

『ハンパないです♪パ』

チンコの女神が降臨しました。

玉がフィーバーしてます。

やめられない止まらなーい♪

……

アイエフ「だからその分割やめなさいよ馬鹿パーマ！！さっきから卑猥なメールになってるじゃない！！（怒）」

セレナ「ちょっ、やめて！これ以上挑発しちゃ駄目っ！」

……

送信者：デスキャンサー

『なし』
我がデスキャンサーの前で１０分立っていられた者はいない。１０分以内で着く場所か（必）

……

レナ「乗り込んで来る気だよ！？これ本当に怒っちゃってるよ！」
ミリア「しかも銀さんまで危なくなってきてるよ！？」

……

送信者：銀さん
『来てくれますか。パ』

チンコの店の名前はフィーバーでーす。

……

カイト・圭一・誠「だからその分割やめろ馬鹿あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！（怒）」
言葉「お、教えちゃ駄目ですよ！」
新八「逃げて！銀さん超逃げて！！」

……

送信者：ネプ子
『待ち合わせするって』

なんかね、フィーバーって店で待ち合わせすることにしたんだって。
私は外で待ってるから、あいちゃん達も早く来てー

写真：背景の店は『サキュバスフィーバー』

……

ミリア・レナ「それ違う店なんだけどおおおおおおおおおおおおお！！？」

アイエフ「まさか勘違いしてるのこのおっさん！？」

セレナ「しかもサキュバスって、デスキャンサーさんをとんでもない所に送っちゃってるよ！？」

……

送信者：デスキャンサー

『なし』

話が違うじゃないか。

……

言葉「怒ってメールして来ましたよ！？」

コンパ「すれ違っちゃったですぅ…」

……

３０分コースと６０分コースしかないぞ。

１０分コースなんかないではないか（殺）

……

かがみ「怒るとこそこなのか！！？」
こなた「どんだけ１０分が好きなの！！？」

……

送信者：ティアナ
『兄さん……』

私じゃ不満なの…違うわよね？そこで待ってて？すぐにそっちに行って悪い女達追い払ってあげるから…

……

送信者：シグナム
『銀時…まさか…』

少し話をしようじゃないか…すぐに来るからな…

……

送信者：スバル
『ずるい！』

私がいるのに、銀さん酷いですよー！

……

送信者：フェイト
『そんな…』

銀時にそんな趣味があったなんて…

……

送信者：なのは

『……』

……銀さん…少し、お話しよっか…？

……

カイト「まだやってんのかこいつらはあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！（怒）」

ミリア「予想はしてたけど、流石になのはさんとフェイトさんも黙ってなかったよ！！；」

アイエフ「ていうかいい加減自重しなさいよ！！！（怒）」

コンパ「ぎ、銀さん逃げてくださいです～！！」

銀時ラバーズの自重のなさに、怒りを抱く人も増えそうだ。

……

送信者：デスキャンサー

『なし』

仕方ない、私は３０分で済ますから待ち合わせは４０分後で

……

新八「結局お前もフィーバーするんかいいいいいいいいい！！！」
カイト「何やってんだよこいつ！？ケータイ取り返すんじゃねえのかよ！！」
もはや状況や展開がカオス過ぎる。
誠「ど、どうする…？とりあえず行ってみるか…？；」
ミリア「行くしかないんだろうね…；」
アイエフ「…ん？ネプ子からだわ」
……
送信者：ネプ子
『変更なし』
予定変更で、ファミレスに行くって。何があったんだろうね？
写真：顔がほこほこしてて、デレデレをこらえてるデスキャンサー
……
カイト・圭一・誠「Σ１０分どころか１０秒も持たなかったあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？？」
新八「どんだけ早えんだよこのおっさんんーーーっ！！！！」
……
送信者：デスキャンサー
『なし』

我がデスキャンサーの前で、１０分立っていられた者はいない…（瀕死）

……

かがみ「立っていられなかったのはあんたの方だろ！！？；」

こなた「何このおっさん…ますますキャラが台無しになってる気がするんだけど；」

……

送信者：銀さん

『そこじゃないですパ』

チンコ店ですよ？金ぴかの飾りとかが目立つ店です。ネプテューヌ案内してやりなよ。

……

カイト・圭一・誠・アイエフ「もうこいつまじでリンチにしてえぇえええええええええええええええええ！！！！！！！！（怒）」

言葉「だから教えなくていいですってばっ！；」

……

送信者：ネプ子

『あ、ビビが…』

突然乱入しておじさんを攻撃しちゃったよ！？どうしよう！？

（状況一部再現）

ビビ「ネプテューヌちゃんに何してんだクソ男おおおおぉぉぉぉっ！！！！」

ぐしゃっ！！（大事な所がやられる音）

……

ミリア・レナ「乱入して大切な所攻撃しちゃってるうぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！？？」

セレナ「ちょっとぃ！！？デスキャンサーさん大丈夫ですかあぁぁぁぁ！！？」

アイエフ「ああもう…わけがわからなくなって……ん？」

……

送信者：ホーリーキャンサー

『なし』

私はまるで長い間、悪い夢でも見ていたようだ…

すまない、私はただケータイを返してほしかったんです…

……

男全員＋アイエフ「Σいや誰だあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？？」

ミリア「デスキャンサーから変わったの！？まるで別人だよ！！？」

カイト「玉つぶされて悟り開いたのかよ！！？」

こなた「もう何が何だか頭が追い付かないよ…;」
かがみ「だあぁぁぁぁぁもうっ、しゃらくせえっ!!さっさとケータイ返してこのイベント終わらせるわよ!!」
言葉「それが一番ですね…;」

瞬く間に変化しまくるこのイベント。果たして結末は?

都合により続く

３４話「メールパニック」（後書き）

うん、前半だけでも力尽きるわこれ…；
原作＆アニメだと声優さんが仕事するから、きっと腹筋壊しかねません。
皆さんもよければ探してみてみるといいでしょう。

35話「ケータイに込めた願い」（前書き）

前回の続きですが、割とあっさり終わったような気がします

35話「ケータイに込めた願い」

あらすじ
アイエフが拾って修理したケータイ3つを使ってると、以前の持ち主がネプテューヌを人質にして取り返そうとメールを送信して来た。危機……のはずだったが、銀時やラバーズ達のカオスなメール会話、そしてビビの乱入によってシリアスはたやすく消えた。犯人のデスキャンサーも、玉攻撃されてホーリーキャンサーへ早変わり?とことんカオスな状況の中、カイト達はかろうじて理性を保っているままキャンサーの元へ向かうのであった。

……

街中を疾走中

カイト「あれ?セレナの姿が見えないぞ?」
コンパ「それが、何か気が変わったみたいで、銀さんやラバーズの所に行くって言ってたです」
アイエフ「大方、堪忍袋の緒が切れたんでしょうね…まあ当然だけど」
こなた「そもそも卑猥単語が多すぎたのも問題なんだよ;」
圭一「…ん?ホーリーキャンサーからまたメールが来たぞ!」
アイエフ「さて、今度は何なのかしら…」

……

送信者:ホーリーキャンサー
『なし』

さっきからすみませんでした。
その3つのケータイには、それぞれ忘れられない…いえ…忘れてはいけない思い出が詰まっているんです。それで、どうしても返してほしくて、あんなことに…

……

どうやらさっきの攻撃によって、穏やかになったのだろう。ひとまず、ネプテューヌの危機は去ったようだ。

カイト「…まあ、何だ?話は会ってからにしようや;」

……

送信者:ホーリーキャンサー
『なし』

私はメールでこそこうして口達者ですが、実は人と面をむかって話すことも顔を合わせることもできない小心者なんです。当然、無口でいることも多かったです。私は床屋を営んでいるんですが、口下手なせいで客は遠のくばかり…そんな私に、今は亡きおしゃべりな女房がくれたもの…それがケータイでした。ケータイなら、少しは話せるようになるのではないかと言われまして……ただ、私はいつも通りたわいのない言葉で話して、感謝の言葉も言わずにいました。ですが、私の女房はケータイを受け取って数日後に急病で突然亡くなってしまいました…

……

話が進み、大体の真相が判明される頃にはカイト達とキャンサーは

対面していた。キャンサーは本当に悪人でなく、一人の普通の人であることもはっきりわかった。
カイトとミリアがキャンサーを読心して見抜いたものは、『伝えられなかった言葉』。
この男は、寡黙で口数が本当に少ないことが災いして、妻に伝えたいことをあまり伝えることができないまま一人になってしまったために、暗い気持ちでいたのだろう。そして、男は受け取ったケータイにメッセージを残すことで、妻への報告をし続けていたのだ。

カイト「そうか…だから、この3つのケータイをあんなメール送ってまで取り戻したかったんだな…」
圭一「じゃあ、このケータイには伝えたかったメッセージが…？」
キャンサー「はい…そのケータイには、あの時から伝えたかった言葉の数々が入っています……保護隠蔽設定は外しました。3つのどれでも見れるようになったはずです…」
アイエフ「ふーん？どれどれ…」

アイエフ、銀時、ネプテューヌはケータイのメール画面を操作して、解放されたメールを発見した。そろって一つずつ確かめてみると……

『今日キャバクラに行ってきたよー』

『今日はドンペリを10本飲んで来たよー』

『今日は思いきって、サキュバスを見に行ってみようかなー』

『今日はたくさん飲むぞー』

アイエフ・銀時「ロクなメールねえじゃねえかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

キャンサー「ぎゃふっ！！」

突っ込みのチョップ入りました。

銀時「天国に向けて何ちゅう報告してんだ！！もっとシリアスな報告しろよおいぃ！！」

キャンサー「ち、違うんです…天国の女房に近づきたくて、私も天国に…」

アイエフ「あんたはどう考えても冥界行きよ！！」

こなた「堕落っぷり半端ないね…；」

かがみ「ほんと…；」

圭一「ていうか、案外オープンな性格してんじゃねえのか？；」

レナ「寡黙ってイメージしにくいような…；」

呆れる人が大半であるが、ネプテューヌ、カイト、ミリアだけ別の感情をあらわにしている。

ネプテューヌ「…一日一日の思いでを、奥さんに伝えたくてたまらなくて、せめて忘れないようにケータイに残してたんだね」

カイト「あぁ、そのことに間違いないな」

ミリア「……でも、そのままだといけない気がする」

キャンサー「え…？」

3人の言葉は、さっきまでふざけていた空気を一変させた。

カイト「そうだな…確かにあんたや奥さんの絆は深いようだけど、もったいないことをずっとしてる気がしてならない。ケータイに固着するあまり、大切なことを忘れ続けてるようにも見える」

ミリア「キャンサーさん…貴方は過去に囚われていて、奥さんの願いを無駄にしてませんか？」

キャンサー「本当の、願い…？」
ネプテューヌ「奥さんは、貴方が他人と気軽に話せるようになってくれることを願って、ケータイを渡したんでしょ？だったら、どうしてそれに応えてあげないの？そうやって、一人でケータイに言葉を詰めるだけで、本当に奥さんのためになるの？…私は、そうは思わないよ」

そして、ネプテューヌは言う。

ネプテューヌ「だって、貴方は他人とは寡黙でいることに変わりがないもん。せっかく、ケータイをきっかけに前向きになって欲しいって願ってるのに…これじゃ奥さんが可哀そうだよ！貴方が、奥さんを悲しませることをずっとしてるんだもんっ！！」
キャンサー「…！！」
ネプテューヌ「…悲しいよ…願いと真逆のことをするのって……本当に悲しいよ…」

悲しい表情で、男が寡黙なままで殻に閉じこもってることを指摘した。それはまぎれもなく、男を縛りつける鎖。変わらずにいる大きな原因だ。

カイト「…もう一度、よく考えてみなよ？奥さんが何を願ってそのケータイを託し、そしてあんたは何をしてきたのか。じっくり考えて、整理するんだ」
キャンサー「……」

これ以上の目立った会話はなかった。カイト達はケータイを全て返して、一旦別れるのだった。

……

翌日１１：３０

墓地にて

キャンサー「…すみません、わざわざこんな遠くまで来てもらって…」

銀時「これも何かの縁だ。ま、ついてたのは運だけどな」

カイト達とキャンサーはこの日、妻の墓参りに来ていた。日曜日であるので、カイト達は全員休みなので問題もない。

アイエフ「それはそうと、故障してたとはいえ勝手に持って行ったのはいけなかったわね…ごめんなさい」

キャンサー「いいですよ、もうそのことについては。それに、貴方達に言われて気付きましたからね」

キャンサーは妻の墓の前でしゃがみながら、話を続ける。

キャンサー「私がしてきたことは、女房のためではない…ただ自分を慰める行為でしかなかったんです。女房が本当に望んでいたことは、こうして他人と面を向かって話をすること…私はそれを忘れていました。だから、最後に本当に伝えたいメッセージを送って決別しようと思います」

ケータイに最後のメールをうち、書き終わった後に送信ボタンを押す。送信完了の画面を確認した後、立ち上がってカイト達の元へと歩く。

キャンサー「これで儀式は終わりです。もう、これで決別できまし

たので、このケータイは貴方達が使ってください」
ミリア「え?でもそれは…」
キャンサー「もういいんですよ。こういうケータイも、本当に大切なことをわかってる貴方達が持つべきものなんです。だから…受け取ってください」

キャンサーはケータイを手放そうと、カイト達に譲る選択をしたのだろう。だが、カイトと銀時は首を振って丁寧に断った。

銀時「悪いが、そいつは受け取れねえよ」
キャンサー「え?」
カイト「俺のことまで言うのはあれだけど、俺達の感情はいろいろ深すぎてな…そのケータイじゃ器が小さすぎるよ」
銀時「あぁ、俺達みたいなのは圏外で騒いでる方がお似合いなのさ」
ネプテューヌ「それに、そのケータイにはまだ最後の役割が残ってるよ。まだ来てないでしょ?…奥さんからの返事が」

3人は微笑を含めながら、キャンサーに言葉。キャンサーは、そんなことはありえないと思って少し震えながら言った。

キャンサー「何をそんな…そんなもの、来るわげが…」

ぴぴぴぴぴぴっ!(メール受信)

キャンサー「…!?」
銀時「流石、ホーリーキャンサーがうったメールだ。1つや2つぐらい来るのは、当たり前ってやつだな」
カイト「それじゃ、俺達はもう行くよ。元気でな」

言いたいことを全て伝えたと確信したカイト達は、キャンサーをそ

の場に残して去って行った。
そして、キャンサーが確認したメールには、こう書かれていた。

キャンサー「…そうか……最後に…届いたのか…っ」

……

送信者：女房
『こちらこそありがとう』

これからも、皆と元気でやんな♪

……

真王「…こういうのも、たまにはいいだろう」

理事長は、離れた場所でケータイを手にしたままそうつぶやいた。

……

その頃…

「…カイト…ミリア……」

金色の長髪で、青と白の花をイメージしたベストと青いカボチャパンツを着た少女が、超次元学園の前に立っている。しかし、姿はボロボロだった。

「…どうか、私も貴方達を……っ」

どさっ…（倒れる）

……

事務室

イストワール「はい、これで全部終わりましたね。おかげで助かりました」

「いいよ、俺達も久しぶりにいい仕事ができたよ」

「うんっ、私も♪」

イストワール「くすっ…それは何よりです。ところで、カイトさんとミリアさんには顔を見せなくていいんですか？」

「あの二人にか？…いや、まだもう少しは内緒にしときたいんだ。びっくりさせたい気持ちもあるしな」

「ちょっとだけ二人の成長ぶりを影から見守ってから出た方が、何だかいい感じになるんじゃないかなって思うんです」

イストワール「なるほど…わかりました。ではもうしばらく内緒にしましょう。ぜひ、じっくり見守ってあげてください。クルトさん、カノンノさん」

「はいっ♪」

「ありがとな、イストワール」

この頃、学園には黒髪で緑色のラメラーレザー・グローブ・ブーツを着た少年、そして桃色髪で左にヤシの木を形作る髪飾りやリボン、水色と白の学生服にも見えるワンピースと白い手袋と靴を着ている少女が入っていた。

この二人が事務室で仕事をしているのは、生徒の器では収まらないほどの理由があるからだ。

それは、もうすぐ明かされることになるだろう…

35話「ケータイに込めた願い」（後書き）

キャラがまた増えます。
1人目は俺の小説仲間が作ったオリキャラ。
クルトは俺のオリキャラで、ネットにアップしてないリレー小説の主人公です。
カノンノについては、マイソロ2のイアハートを使います。
もちろん1と3の要素もありです。

外伝「惨劇の可能性」（前書き）

十六夜さんから、どうしても書いてほしいと強くリクエストされたので書いてみました。
本当ならメールで書くつもりでしたが、書いている内にフラグ等の役に立ちそうな感じになってしまったのでここに入れておきます。

パラレルとはいえ、鬱な話ですのでご注意ください。
どうしても受け付けられないと自身がなければ、この話は飛ばすことをお勧めします。

外伝「惨劇の可能性」

物語は無限に存在する。

今これから語ろうとする物語は、ヴォルフレイムハートのもう1つのルート。

それは、選択や行動次第ではそこに行きつく可能性があった物語。

付けくわえで言葉にすれば、それは…

1つの惨劇である……

……

（※33話の途中から始めます）

ルッシャン「さてと、それじゃそろそろ死んでもらわないと、ねv」

ブラン「てめえ…っ！！」

このままではまずい。それは、瀕死のセレナにもわかっていた。

セレナ（だめ……このままじゃ、皆やられてしまう…私のせいでそうなるなんて…嫌…！）

どくん…どくん…

セレナ（皆を守りたい…皆を救いたい……そのためなら、この命を犠牲にしてでも…私は……私は！！！）

だっ！！（突撃）

こなた「って。ちょっ、セレナ！？」

ルッシャン「おやおや？デッドがお望みなら、初めからそうすればよかったのにー♪」

ネプテューヌ「駄目だよセレナっ！！無理しちゃ駄目だってば！！」

セレナ「貴方は…私が倒す！！！」

セレナは魔力を両手に込めて、全てをぶつけて暴発させるためにルッシャンに突撃した。皆を守るために、自らを省みることすらせず。

ルッシャン「死ぬのは、貴方だよーん♪」

ベル「駄目えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！」

ずがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！！！

ネプテューヌ達「っ…！！？」

セレナ「がっ…！！」

勝敗は、始めから見えていたのかもしれない。

セレナの決死の攻撃はルッシャンに見切られたために横へよけられ、ルッシャンの２つの爪がセレナの体を貫いた。血がさらに流れ出て、セレナはもう全身の力が入らなくなって再び倒れた。

ベル「え…そん、な…？」

ネプテューヌ「セレナあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

もはや、セレナは虫の息同然となってしまった。

ルッシャン「あーあ…やっちゃったぁ。だから大人しくしてねって

言ったのに…けどま、私達の目的は貴方の能力なんだから、別に死んでもデニー様達が蘇生して生まれ変えるから気にしなくてもいいけどねー♪」

ルッシャンは先程から挑発するような余裕ぶりで、ふざけたようにしゃべっている。

ネプテューヌ達の目の前にいる彼女はまるで、人の痛みを知ろうとしない殺人鬼そのもの。この時、彼女へ対するある思いが一番強い者が前へ出た。

ベル「……やる…してやる……」

ルッシャン「んー？何、私にまだ何か言うことでもあるの？冥土のみやげでも…」

ごごごごごごごごごご…！！！！！

ベル「殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやるうぅうううううっ！！！！！！」

ベルが、殺意をむき出しにして全魔力を解放した。

彼女の周りから飲み込むように巨大な闇の渦が広がっていく。ネプテューヌ達は危機を感じてその場から離れ、二人の様子を見届ける

ルッシャン「うっわぁ…なんかやばい感じ？でもでも、私のチート防御力の前ではそんな攻撃もハチに刺されるくらいの痛み♪全然怖くな……」

がしっ

ルッシャン「え？」

がしがしがしがしがしがしぃっ！！！

ルッシャン「えええぇぇぇぇっ！！？何これ、離し…ぐがっ！？」

その闇の渦から、どす黒い魔力の手が無数に飛び出してきてルッシャンを次々に掴んでいく。無数の手はルッシャンの自由を完全に拘束し、闇の中へと引きずりこむ。

ルッシャン「ちょ…やだっ、あがっ！！…は、離れ…あぐぅぅ！！？」

ベル「あんたなんか…ここで無残に体をバラバラに引き裂かれて、精神もろとも闇に滅んでしまえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

ルッシャン「い…！？嫌あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ベルの怒りと憎しみの闇は、あまりにも未知なものであった。ルッシャンはなすすべなく闇に飲み込まれ、渦の中で体を全て闇の刃で引き裂かれて無惨な最期をむかえた。

遺跡も、何もかも全てを飲み込んでしまう闇の渦と共に……

……

あの後、ベルがセレナの元へ戻ったが…悲劇は止めようがなかった。ネプテューヌ達が手当をあらゆる手で行っているが、セレナの生命力が回復しない上にどんどん命が尽きかけているのだ。死んではいけないと、頑張ってと…どんな言葉をかけてあげても、止められない。

ベル「…どうして…どうして、一人であんな馬鹿なことをしたのよ…っ！」

涙を流しながら、そう嘆くように言うベル。
セレナは、微笑みながらありのままに話した。

セレナ「…力が、欲しかったの……皆を守れる、強さを…」
ネプギア「だからって、どうして一人で…っ！」
セレナ「だって……私、皆に頼ってばっかりで…一人で何も出来ないでいるのが……嫌だったの……だから、それも含めて……強くなりたかったの…」
ネプテューヌ「何も出来ないなんて言わないで！！セレナだって弱くない！！セレナも、すごく強いんだよ！！なのに、自分は弱いなんて…言っちゃ駄目だよ…っ！！」

ネプテューヌが全力で否定したが、セレナは首を左右に振ってそれを否定した。

セレナ「いいえ…私は、弱かったのよ……今こうして、力を得ようと頑張ったけど……結局、強くなれなかった……私なんか、どんなに頑張っても弱いまま…本当に……そう思う…」
ネプテューヌ「だから違うってば！！セレナは…セレナは…っ！！」
セレナ「……気持ちは嬉しいわ…でもね、実際そうなのよ……考えてみて…？超次元学園には…たくさんの、チート能力者がいる……どうしようもない程の差が…私の前にたくさん…見えるの……レオンさん達や…チフユさん……他にも…チート・ザ・ハードのように……どんなに頑張っても…越えることのできない……壁が存在している……デニー達に、対抗するには…あれくらいの実力が、なければ…足手まといにしかならない……でも、思いあがってたのよ…私は……努力すれば、頑張ればきっとああなれるって……馬鹿み

たいに…信じてた……」
ネプギア「っ…それは…違います…！！」
セレナ「違わないわ……だって、私は…何も能力がないもの……修練であなるにしても、才能がなさすぎたのよ……貴方達も、彼女達の強さは…わかるでしょう…？」
ベル「…それは…っ」

言い返せなかった。いや、どう慰めればいいのか言葉が見つからないのだ。セレナが言ってることが大半正しい気がして、どうしようもなかった。

セレナ「……弱さって……本当に罪なもの…ね…」
ベル「やめて…っ！もう何も言わなくていいから…！！」

手をしっかり握ってあげたまま、ベルはセレナに願うように声をかける。
セレナの瞳が、少しずつ閉じていく。

セレナ「……ネプテューヌちゃん…ネプギアちゃん……よく聞いて……そして、カイト君とミリアちゃんにも…伝えてあげて……」
ベル「駄目…セレナ…！！」
ネプテューヌ「セレナっ！！セレナぁぁっ！！」
ネプギア「死んじゃ駄目ですっ、セレナさんっ！！」

3人は涙を流しながら叫ぶが、セレナはただ微笑みながらこう言葉を残す…

セレナ「……貴方達は…私のように、ならないで……貴方達には、可能性が……無限の可能性が…あるから……どう…か……強く……生き……て……」

そして、セレナの生命力は完全に失われた。もはや、いかなる手段をもってしても蘇生されることなどない。仮に蘇生できても、魂はすでに体から離れてしまっては、蘇る者はセレナではないのだ。
完全なる死として、セレナの体はうっすらと消滅していった。

ネプテューヌ「あ……ぁ…っ」
ネプギア「…そん…な……」
ベル「セレナああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ベルの叫びは、月にまで届くほどに響き渡った…

…………

もし、どこかで選択を間違えていたら、こうなっていた可能性は大いにあった。
そして、今カイト達が進んでいる物語の中にも、いつどこでこのような未来が現れるかわからない。
今でも、カイト達は試されている。
物語は無限であるからこそ、ありとあらゆる可能性に目を向けておかなければならない。

さて、今後の物語はどうなっていくのか。

願わくば、惨劇の結末にならないことをただ祈るのみである。

ｂｙなめ猫

外伝「惨劇の可能性」（後書き）

読文お疲れ様でした。

ひぐらしのなく頃にを見ている人達ならわかっているのかもしれませんが、物語は1つではないものです。それを覚えていれば、リアルでもどこかで役に立つかもしれません。

なお、これは本編とはほぼ関わることはありませんが、会話の中でネタとして出るかもしれません。

36話「グランドールの少女」（前書き）

オリキャラ追加です。最後あたりでは、皆さんが大好きなあの人が出ます。

36話「グランドールの少女」

20：00

これは、前回のケータイイベント後の夜のことだった。
4時間前に学園の入り口で、金色の長髪で青と白の花をイメージしたベストと青いカボチャパンツを着た少女が倒れているのが目撃された。すぐに救助するために学園へ運び、少女を治療してあげた。
その後、少女はぐっすりと眠っている。
ところが、この少女の正体を知っている者達がいたのだ。
学園にいる者達の中でたった2人だけ…

……

保健室

セレナ「様子はどうですか？」
ドクター「大丈夫だ。命にも別状はない」
フウ「そう、よかった…」

少女は治療が終わってから、ベッドでぐっすり休んでいることを聞き、セレナ達は安心する。

ベル「それにしても、どうして学園の入り口に倒れてたのかしら？」
レナ「傷付いてたし、何かに追われてたのかな？かな？」
フェイト「考えられるね…少なくとも、この娘は事情を抱えていることに間違いはないはず」
圭一「でも今は待つしかないよな…」

少女から事情を聞くにしても、今は彼女が目を覚まさなければ何も出来ない。我慢して待つ一同である。しかし、しばらくするとその時はちゃんと来た。

「ん……ここは…？」

少女が目を覚ましたのだ。

ネプテューヌ「あ、起きたよ！」
ネプギア「気がつきましたか？」
「貴方達は…？」
ドクター「超次元学園の者だ。入口でお前が倒れていたから、保健室に運んで治療したよ」
「超次元学園……！そうだ、あの…カイトとミリアはいますか！？」

少女は学園の名前を聞いたとたん、表情を変えてネプテューヌ達に問いかけた。

ネプテューヌ「カイトとミリア？知り合いの人？」
ネプギア「もう少ししたら二人もここに…」

がららっ（ドアが開く）

ネプギアが答えていると、ちょうどカイトとミリアが保健室に入ってきた。

カイト「お待たせ。助けた人の様子はどうだ？」
ネプテューヌ「あ、カイト。実は…」
「！！」
ミリア「？どうかし……！？」

カイト「お、お前は…シルフィ！？」
一同「えっ！？」

その時、カイトとミリアは驚愕の表情で少女の名前を呼んだのだった。つまり、カイトとミリアは少女…シルフィのことを知っているのである。

シルフィ「カイトっ、ミリア！よかった…やっと会えた…！」

シルフィは心から安堵した表情で言った。

ネプテューヌ「ど、どういうこと？カイト達はこの子を知ってるの？」
カイト「知ってるも何も、俺達が以前助けた貴族の人間さ。正確に話すと、エリート学園襲撃1回目で俺がイオドをつぶして助けたんだけどな」
ミリア「彼女の名前はシルフィ。貴族グランドールの一人娘だよ」
ネプギア「グランドール！？それって、貧困層の人達を助けることに尽力していた優しい貴族で有名なあの！？」
セレナ「驚いたわ…まさか、そんな貴族の人だったなんて…」

カイト達から説明を聞いた仲間達は、驚くべき事実を知って唖然としている。

シルフィ「お久しぶりです…カイト、ミリア…」
ミリア「ほんとだよ。まさかシルフィちゃんがここに現れるなんて思わなかったよ」
カイト「あの時から元気にしてるか手紙も送ったけど、返事がなくて心配してたんだぜ？けどよかった、元気にしていたようで安心したよ」

シルフィ「以前は本当にご迷惑をおかけしてしまいましたわ…」
ミリア「いいよ、君を助けたくてやったことなんだから」

3人はまず再会を心から喜んだ。そして、すぐに本題へ入る。

カイト「でも、どうして俺達に会うためにここへ？傷を負ってたけど…何かわけありか？」
シルフィ「はい…その通りです。貴方達に会いに来たのは、わけがあるんですの…」

シルフィは俯いて事情を話す。

シルフィ「実は…貴方達が案内してくれた村で暮らしてたんですが、デニーという者が統括する組織から襲撃を受けてしまいましたの…」
カイト「何!?」
ミリア「そんな!?」
シルフィ「幸い、村の人達と一緒に安全な場所へ避難することはできましたけど…このままでは村の人達もいずれ殺されてしまいますわ…」

大体の話はこうだ。シルフィは第一エリート学園襲撃の際にイオドの独占から救出され、カイト達に案内された村で暮らすようになって生きる希望も取り戻しつつあった。ところが、その村にデニー達の組織が支配のために襲撃して来て、シルフィは死力を尽くして村人達全員を安全な場所へ避難させたのである。だが危機は未だ去ってはおらず、このままでは遅かれ早かれ村人達が殺されて居場所をまた失ってしまう。そこでシルフィが考えたのが…超次元学園だ。

シルフィ「私はもう、これ以上大切な物を失いたくありません…！ですから…」

カイト「そうか…つまり、俺達に助けを求めたってわけか」
シルフィ「勝手なのはわかってます。出来ることなら、私だけで人々を守りたい…でも…相手は強すぎて、良くて追い払うことしかできません……はじめは私の命を犠牲にしてでも止めようとしましたけど、人々の温かみを知って自分を簡単に犠牲できない…」
カイト達に心の底から悲願するように、彼女は彼らに頼った。

シルフィ「お願いします！何でもしますから、どうか私に力を貸してください！」

頭を下げてお願いするシルフィを前に、カイト達はすぐに答えを出さざるを得なくなった。だが、カイト達の答えはすでに出ている。

カイト「…愚問だぜ、シルフィ。そう頼まなくても、俺達から喜んで助けるって」
シルフィ「！」
ミリア「シルフィちゃんもボク達の大切な仲間だもん。力を貸さないわけにはいかないよ。最も、仲間じゃなくても勝手に助けるけどね」
シルフィ「カイト…ミリア…」
ネプテューヌ「私も協力するよ！あと、シルフィもここに入学するといいよ。きっと、理事長が村の人達も安全と生活を保障してくれるから！」
ネプギア「うん、それがいいよお姉ちゃんっ。シルフィさん、私達は貴方を歓迎しますよ」
シルフィ「…よろしいんですか？」
セレナ「えぇ、全然ＯＫよ♪」

カイト達は笑顔でシルフィに協力することを約束し、さらに学園の

入学も勧めた。シルフィが学園に入ることで、同じ家族同然の扱いとなって関係者もばっちり保護してくれると考えたからだ。シルフィは感動して、少しだけ涙を流すもぬぐいながら返事をした。

シルフィ「…ありがとう…ありがとうございますっ！これから、よろしくお願いします！」

ネプテューヌ「うんっ、よろしくね♪」

カイト「これで、シルフィのことも万事ＯＫだな」

こうして、シルフィ・グランドールも学園に入学することになり、仲間がまた増えるのであった。

……

一方その頃…

「ふん…これが、全世界最強とささやかれる時空管理局の訓練学校の信念か……話にならん」

辺り一面廃墟と化した大地に、青い長髪に青と緑と黒のタイツ諸々の服を着た大男が立つ。彼の手には大きな戦斧が握られていて、その斧の刃はまがまがしい。

「…奴らの子供達がこの世界に現れたと聞いて、再び蘇ってみれば…最強とほらを吹く者共で溢れておるではないか……何なのだ…これほどの世界は初めてだぞ」

男はゆっくり一歩一歩歩きながら、独り言をつぶやく。

「デニー…ヴァーラガルザ…マスターケイオス……最近、傭兵団と

エリート学園残党で編成された運命粛清軍……魔法少女の旧システムを利用して姑息な真似をする宇宙侵略者キュウベえ……世間では、この者共を知る者の誰もが絶対最強であるとうたう……そして、超次元学園…学園の形をした一種のギルド…ここには絶対最強と称する者共がいる……」

目をつむりながら、男はため息を漏らす。誰にも見せることのないため息を。

「…皮肉なものだ…あの二人との戦いを経て、俺ともあろう者が強さのみを追及しなくなってしまうとは……学んだ、ともいうべきだろうか。今となっては、俺の目は美学を追及するようにもなった…」

立ち止り、その前置きの後に話を戻す。彼しかいないその地で、男の本音が誰にも聞かれることなく外に出る。

「最強とうたう者…力のみにしか目のない者…自分を偽って強さでなく力で誇示する者……絶対に踊る者……強さとは何なのか、まるでわかってない者がこれほど多いとは……今の俺の記憶が示す人物は、奴らとその子供達…か」

目を開き、綺麗に照らす月を見上げて彼は言う。

「…さて、もうすぐ学園とデニー達の戦いがまた始まると俺の直感がささやく……その時、俺が探し求める者達が現れるといいのだがな……ふっふっふっ……無限の可能性を秘めた者達が、この世界に絡みつく絶対を破壊する戦い……じっくり見たいものよ…」

彼はそう言った後、廃墟を飛んで去って行った。

彼の本能が、『無限の可能性を秘めた者達を探せ』と彼に命令をし

て……

36話「グランドールの少女」（後書き）

フラグ立ててばっかりな気がするのは気のせいだろうか？
回収しきれるかな…
次からまたリクエスト消化しようと思います。

37話「悪霊退散」（前書き）

本家からのリクで、悪霊退治です。
元ネタは「コワイシャシン」とのことで、今回はそれを参考に話を書いてみました。いつも通りになりましたが；

37話「悪霊退散」

きーんこーんかーんこーーーん！

11：00

カイト「いやあ、一時はデニー関連の人物かと思ってたけど、そうじゃなくてよかったよ」

ミリア「そうだね。けど…何だかボクもだらしないなぁ。あの装置の変化を受けてしまうなんて…」

カイト「…まあ、気持ちはわからなくはないよ。俺もほぼ同じ気持ちだからな…けど、だんだんこの学園のチートも理解してきてるんだ。少しずつ影響を受けないように対策をしていけば、すぐにいつも通りに戻れるさ」

ミリア「そっか…じゃあ落ち込んでないで頑張らないとね」

学園に入学してからいろいろな騒動や出来事を経験してきているカイトとミリアは、今日も平和に会話をしながら廊下を歩いている。

そして今日も、何も起きなくても何か起きても平和に終わるだろうと安心していた。

最も、こんな時に何かが起きやすいのは、今に始まったことではないが。

……

教室

カイト「おーい、皆何して…」

「あぐあぁぁぁぁぁ！！？」
ミリア「？」

突然、誰かが苦しむ声がした。カイトとミリアが声がした方へ行くと、そこには息苦しそうに倒れて悶えている誠の姿があった。

言葉「大丈夫ですか！？しっかりしてください、誠君！」
誠「ぐっ…あ…！」
カイト「おい、どうした誠！？何があった！？」
言葉「それが、誠君が朝から少し息苦しそうにしてたんですけど、今さっきから急に苦しみだしてしまって…」
ミリア「病気…？」

どんな状態なのか確認するため、カイトは誠の右手を握って目をつむり、何かを感じ取ろうとしてみた。約１０秒程経った後、カイトは目を開いて手を離した。

カイト「これは…病気じゃないな。何かが誠を苦しめてるんだ！」
ミリア「正体は？」
カイト「まだ掴んでねえけど、邪気が少しだけ感じられる。呪いか、見えない何かからの攻撃か…」
言葉「またデニーからの敵…ですか！？」
カイト「わからない。とにかく、皆や先生達に報告を…」

たったったっ！

マリオ「大変だ！！チルノの様子がおかしい！！」
カイト「何！？」

ミリアを誠達の所に残して、カイトはマリオに案内されてチルノの

所へ向かう。マリオの言ったことが意味するものは、誠と同じものであった。

チルノ「うぅ…っ！あぅぅ…！」
文「しっかりっ、しっかりして！！」
カイト「まさか…チルノもか！？」
白蓮「チルノだけじゃなくて、実はルイージやリンクも同じように苦しんで…」
カイト「何だと！？くっ…ミリアっ、このあたりで苦しんでる奴の苦痛を中和してやってくれ！俺も他を回って悪化を食い止める！」
ミリア「わかった！」

カイトはチルノに目を閉じて加護を与えた後、教室を出て同じ症状で苦しんでいる仲間を探しに回った。

……

探し回った結果、ほぼ多数の仲間が苦しんでいることが発覚した。今回苦しんでいる者をはじめから言うと、誠、チルノ、ルイージ、リンク、シルフィ、エリオ、キャロ、フェイト、スバル、ティアナ、神楽、新八、ロム、ラム、ユニ、ノワール、ブラン、コンパ、アイエフ、冥王、銀次、明久、ムッツリーニ、カービィ、オリマー、ネス、リュカ、フォックス、ファルコ、ピット、オリマー、ルカリオ、ピーチ、クッパ、ステラ、ベル、レーティア、ジャンヌ、統夜、達哉、遊輔、相川、アリエス、ザックなどの生徒がほぼ同じ状態。さらに被害は先生側にも及んでいたのか、チカやミナ、お妙、ユーノ、クロノ、更にディケイト、フィリア、イシュタルなどの本来苦痛を受けるなどありえないはずの者までいたのだ。
カイトとミリアは加護によって症状悪化を食い止めておいたが、何故このような苦痛の症状が発覚したのか原因がまだわからないまま

である。である以上、二人の加護でも安心はできないだろう。

カイト「まさか、ここまで被害が大きいなんて…」

ネプテューヌ「どうしてこんなことに…？私、何かフラグ立てちゃったの？」

かがみ「フラグって……そんなんじゃなくて、どう考えても何かが学園に潜入してこんな状況にしてるってしか思えないわよ」

ベール「でも、一体何が…？」

こなた「昨日皆でキノコ狩りに行った時に、何か変わったことしたっけ…」

キノコ狩りとは、スマハツサイド１８話で語られた出来事で、あの時ではアイエフがマツタケと勘違いして特殊な毒キノコを食べてしまい、変貌してビーストハートの能力を得たことぐらいである。そう、大きな変わったことはそれだけである。

圭一「…ん？なあ、皆で記念写真を撮ったよな？あの写真複数枚を見てみようぜ！」

カイト「え？写真…？」

圭一の脳裏で何かが引っかかったようで、言われた通りに大急ぎで記念写真を数枚集めた。そして、カイト達は写真を見てみる。

ベール「んー…普通に見ると、私達が綺麗に全員写っているだけですわ。他にチームで分けた写真もほぼ同じようですし…」

圭一「……！おい、この写真の右端を見てみろ！」

ミリア「！？」

圭一が写真に指差した所を見ると、そこには青白い人の影が写っているのが見えた。俗に言う心霊写真という奴だ。念のため、他の写

真も一つ一つ丁寧に見てみると、なんと他の写真にも青白い人の影が写っていたのだ。

こなた「ちょ…嘘!?まさかこれが原因!?」
カイト「…!悪霊か!」
「その通りだホロ」

カイトが感じたものの正体を口に出した直後、ファントム・ザ・ハードが集合している教室に入ってきた。そして、ハードは話を続ける。

ファントム「気付くのが遅れてしまったホロ…この学園に悪霊が入り込み、写真に写った生徒たちにとりついたホロ。しかも、その写真から来てとりついた悪霊は、他の悪霊も呼び寄せてるホロ。これは超強いホロ……どんな攻撃も効かないホロ」
ミリア「そんなに厄介な悪霊が!?」
セレナ「何てこと…まさに非常事態じゃない!」
カイト「ファントム、俺達はどうすればいい!?どうすれば皆を助けることができる!?」
ファントム「どんな攻撃も効かないから、お前達ではすぐに助けることはできないホロ。だから、ある人を理事長が呼んだホロ」
フウ「ある人?」

がららっ

そこに、合わせたかのようにファントム・ザ・ハードが入ってきた入口から一人の女性が現れた。その女性は、赤い長髪で少し露出度のある服装をしていた。

ファントム「紹介するホロ。この人は表では除霊士、だが本当は霊

を喰らい力を得る霊喰一族の一人・緋織（ひおり）だホロ」
緋織「初めまして、緋織といいます。事情は真王理事長から聞かせていただきました」
カイト「緋織…？」
緋織「さて…早速本題に入りますが、今回皆さんが謎の苦痛にさらされている原因は、その写真に生息している悪霊です。写真の悪霊は、写った者に邪気を送って苦痛を味あわせ、後に死に至ることでその者から生気を吸って邪気をより高めるタイプのものです。ですので、この状況を解決するには写真の悪霊を直接除霊するしかありません」
ベール「写真の悪霊を除霊…？それで、皆を救うことができるんですか？」
緋織「はい、完全に除霊すれば苦痛もすぐに消えます。では…写真をこちらに渡してください。時間も惜しいので、すぐに除霊を始めます」
ミリア「は…はい、わかりました」

カイト達は理解に時間をかけながらも、言われる通りに写真を緋織に渡した。受け取った後、彼女はリングと鏡を取り出して机に座り、写真を前にして除霊という行動を始めた。
まず、リングを使って写真の怪しい個所を探しだし、そこを見つけたら精神を集中させてリングを動かす。リングの回転が速くなる所を中心にずっと動かしていると、そこからカイト達には見えない何か…つまり悪霊が緋織の目の前に姿を現す。緋織は悪霊の動きを読んで封じる力を打ち込み、動きを止めた所で印を唱えて悪霊から邪気を奪っていく。奪った邪気は自分の生気となり、やがて悪霊は消滅していった。
1つの悪霊を滅ぼした後、また同じ作業を繰り返して除霊を続ける。しばらくすると、まず1枚の写真を別の方へ移動させた。

緋織「一枚目が終わりました。これで、何人かの苦痛もなくなったはずです」
ネプギア「本当ですか？」

ネプギアが近くにいる苦痛の症状で悶えるチルノと誠を見てみると、二人の様子が戻っていた。

誠「…あれ？苦しくなくなった…？」
チルノ「あ…楽になっていく！」
言葉「誠君！よかった…本当によかった…っ」
マリオ「大丈夫かチルノ！」

近くにいる仲間達が安心したように喜んだ。どうやら、効果は出ているようだ。

ミリア「本当だ…まず二人が元気になってるよ！」
カイト「今の作業が除霊…なのか」
緋織「では、次の写真に移ります」

その後も除霊は続き、次々と悪霊が除霊されていく。作業開始から５０分後、全ての写真の除霊は終わった。すると、苦しんでいた生徒が全員回復したという報告が出て、カイト達はひとまず事態がおさまったことに心をほっとさせた。

セレナ「ようやく終わったのね…」
ネプテューヌ「よかったぁー。皆元気になったから、もう安心だね！」

ネプテューヌ達も嬉しそうに声をあげている。

緋織「…いいえ、まだ終わりではありません」
ミリア「え？」

しかし、緋織は表情を緩めずに言ったことにカイト達は何故かと疑う。

緋織「この学園には、まだ悪霊達を生む元凶がいます。写真に焼き付けた悪霊を除霊したことで、その元凶は新しい悪霊の根源を作ろうとさまよっているようです。ですから、すぐに元凶を退治しなければ何かを媒体にして同じ状況が発生してしまいます」
ネプギア「そんな…！」
ベール「その元凶は、どこにいるんですの？」
緋織「ここからだと、運動場から何かを感じます…しかも霊の感じ方が変化し続けているので、そこにいる可能性が高いでしょう」
カイト「運動場にいるんだな！」

カイト達はその情報を聞いて、すぐに緋織と共に運動場へ急いだ。

……

運動場

そこを見渡すと、表面上ではこれといった変化は見られない。しかし、緋織の話を聞いているカイト達は何かを感じている。

ベール「…何も見当たりませんが、何かいますわね…」
緋織「悪霊は本来姿は見えないものです。倒すには霊感を高めて、元凶を見つけて除霊する以外にありません。ですが、相手の動きが速い可能性もあるので、かなり難しくなりますが…」
カイト「…！なら、いちかばちか……緋織、俺とミリアの手を握っ

てくれ！」
緋織「え？…はい」

カイトはとっさに何かを思いつき、緋織に自分とミリアの手を握らせ、カイトとミリアは目を閉じて集中する。すると、二人から何かが宿るような感じがネプテューヌ達の目に入った。

ネプテューヌ「カイト…ミリア…？」
ネプギア「これは…気？」

変化の正体を考えてみるが、その暇を与えることはなかった。すぐにカイトとミリアは手を離してもらい、二人は運動場の中心に立つ。

カイト「うまくいってくれよ…！」
ミリア「いくよ、カイト君！」

二人は互いの片手を握って運動場全体に何かの力を広げた。それは、まるで温かい光が広がるような感じで、それは自然に近いエネルギーにも似ている気がした。
すると、ネプテューヌ達や目を開いて手を離すカイト達の視界にある姿が見えた。

ベール「！？」
ネプテューヌ「あれは！？」
カイト「！お前だったのか！！」

悪霊を生み出す元凶は、なんと本家サイド２９～３０話でカイト達が倒したはずのアップルマンだったのだ。しかも、姿もあの時と同じものだった。

アップルマン「クッ…オノレ…マタシテモキサマラクソガキドモカ！！」

ミリア「そんな…！貴方はあの時、確かに倒したはずじゃ！？」

アップルマン「アマカッタヨウダナ。オレハネクロサマノオカゲデ、フタタビコノヨニヨミガエルコトガデキタノダ。イマハマダレイタイデシカナイガナ」

カイト「蘇っただと！てことは、てめえまた大量殺戮をするつもりか！！」

アップルマン「カイト…キサマタチノセイデ、オレハアンナヒドイメニアッタ…コノウラミ、コンドコソオマエタチノシデハラシテヤル！！」

亡霊として蘇ったアップルマンは、右手から闇を集めてある鎌を召喚した。それは、回収したはずの破壊の大鎌だった。

ネプギア「破壊の大鎌！？」

カイト「馬鹿な！？あれも俺達が回収したはずだぞ！！」

アップルマン「フン！ネクロサマガイレバ、コンナカマナドイクラデモツクッテモラエルノダ！サア…コンドコソキサマヲコロシテヤル！！！」

アップルマンは大鎌を両手に持って、カイトとミリアへと突撃して来た。

緋織「カイトさん、下がってください！悪霊には貴方達の攻撃はほぼ通用しません！ここは私が…」

カイト「…いや、もうあんたが出る必要はない。あんたの霊感を少しコピーさせてもらったからな」

緋織「え！？」

ミリア「うん。緋織さんのおかげで、新しい加護を作れるようにな

った。この加護があれば、後は私達の好きにできるよ」

二人は武器を手に、恐れることなくアップルマンへ走る。

カイト「詳しいことはいろいろわからねえが、変わってるのはお前だけじゃねえんだよ！！」

アップルマン「ナニヲ！？キサマラニナニガデキル！！キサマラノコウゲキハオレニハツウジン！！ソノママホロベエェェェェェェ！！！」

ミリア「そう言われて…！！」

ぶんっ！！

カイト・ミリア「簡単に滅びてたまるもんかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

ずばあぁぁぁっ！！！！

アップルマン「アガァァァァッ！！？」

結果はシンプルすぎるものだった。カイトの剣とミリアの槍による斬撃が、アップルマンをクロスするように切り裂いた。すると、以前と同じように青い炎が発火してアップルマンを再び燃やしつくす。

アップルマン「バカナァァァァ！！？ナゼダ…キサマラクソガキゴトキデハ、オレヲキヅツケルコトナドデキナイハズナノニ！？ナゼダ、ナゼダアァァァァァァァァァァ……！！！！！」

絶叫するアップルマンには、もう手段など残っていない。青い炎と共に消滅するのみだった。

今度こそ、彼の魂もなくなっただろう。

カイト「今度こそ、これで終わりだ…大人しく眠ってくれ」

こうして、無事に悪霊騒動は解決されたのだった。

……

１３：２０

学園入口で緋織にお礼を言って帰りを見送った後、レオンとガレーナは騒動のことを脳内でまとめながら学校へと戻る。教室へ足を運ぶ途中、二人はふと気になったことを話す。

レオン「今回の騒動も無事に解決した。だが…」

ガレーナ「あの二人、また気になることを残してくれたな」

レオン「カイトとミリアは、何らかの加護を与えることができるのは知っているが、元凶を倒す時に二人がした行動…どうしても気になる。霊感を少しコピーしたと言っていたが…」

ガレーナ「あの時までは、悪霊が見えるようにすることはできなかった。だが、二人が緋織に手を握らせたことで、悪霊が目に見えるようになっただけでなく、悪霊に直接攻撃を当てることができるようにもなった…」

レオン「力の複製にしても、あれは何だか独特な感じがしてならない。緋織から力を取ってもいないし、どうなっているのだ…」

二人が話し合っても、答えはそう簡単に出るものではない。まだ謎が多いから、結論にはたどり着くにはまだ必要なものがある。

レオン「…せめて、二人の能力の源さえわかれば…」

ガレーナ「そうだな……ただはっきり言って、二人が敵であったら非常にまずかったであろうな」

カイトとミリアの加護の正体は、まだレオン達にもわからない。しかし、それのおかげもあって平和が保たれていることに変わりはないと思い、深く考えることはそこまでにしたのだった。

37話「悪霊退散」（後書き）

補足

カイトとミリアの加護は万能ではありませんが、今回手を握ることで新しい加護を生み出したように、少しずつ加護の効果の種類を増やすことができます。まだ根っこは秘密にしますが、近いうちにばらすことになるでしょう。

オリキャラ紹介2・セレナについて（前書き）

カイトとミリアの紹介を更新、シルフィの紹介、そしてセレナが返信可能になったヴォルフレイムハートについてです。

オリキャラ紹介2・セレナについて

カイト・ネイラード　１６歳

姿…黒髪で黒いシャツと小さなマントのように前を全てあけている緑色の上着・藍色のジーパンを着て、革のバトルブーツをはいている。

戦闘スタイル…剣術が主で、格闘もたまに使う。

グラニデ生まれの少年で、自称不良。ミリアとは双子で恋人同士。熱血で表情豊かな性格で仲間想いであり、剣技を得意とする。他にも優れた洞察力と読心術を持ち、さまざまな人々の心理を読みとることができる。神や王などの身分も関係なく、いつも私語で話す。ただ、仲間を大切にしようとする気持ちが強いがゆえに、たまに深く考えてしまうことがある。

『力であって力じゃない』という能力があるためなのか、無双できるほどの実力を持つ。カイトとミリアは『心』が根本であると説明しているが、現在ではまだ謎が多い。さらに、仲間に何らかの加護を与えることができ、その効果は様々である。これについてもいろんな考察がされているが、謎のままである。

学園に入学後、復活したエリート学園をミリアと二人で襲撃した際、危機に陥った所をネプテューヌ達に助けられて意志を示されたことをきっかけに、学園に溶け込みやすくなった。また、デニーの部下の襲撃を通してミリアや仲間が傷付き、失うことへの恐怖を強く持ち、守れなかった時には次も守れないと失意していたが、理事長からの特別訓練を受けることで恐怖に打ち勝ち、あらゆる恐怖に負けない心、大切なものを何が何でも守り通す信念を改めてを持った。

入学時から、ミリアと共に大きな活躍を見せており、現在も実力が

少しずつ強くなっている。

ミリア・ネイラード　１６歳

姿…雪のような白色の短髪で蛍光色のワンピース（スカートは短め）と下に黒いハーフパンツを着て、革のバトルブーツをはいている

戦闘スタイル…槍術が主で、魔法も使える。

カイトと同じ生まれで、よく一緒にいる少女。カイトとは双子で恋人同士。

明るくて大胆だが心優しい性格で、槍の使い手。魔法も使える。また、カイトと同じく読心術も持ち合わせており、洞察力もかなりのもの。育ちによるものなのか、自分のことをボクと呼び、味方を呼び捨てしない。胸は中クラス。

カイトと同じ能力を持つらしいが、カイトと同じく詳しいことはまだ明らかにされていない。とはいえ、カイトと実力は互角のようだ。

加護についてもカイト同様に、謎な部分が多い。

学園に入学後、復活したエリート学園をカイトと二人で襲撃した際、危機に陥った所をネプテューヌ達に助けられて意志を示されたことをきっかけに、学園に溶け込みやすくなった。また、ゾディアックの襲撃を受けた際に永遠の悪夢を植え付けられ、カイトや仲間達が傷付き、失うことへの恐怖を強く持っていたが、理事長からの特別訓練を受けることで、惨劇を回避するために自分が強くなってみんなを守る心を持った。現在も、カイトと共に少しずつ強くなっている所で、活躍も続いている。

むふふな話をすると、たまにカイトとＨする時があるが、その時は性格が一変して性欲が強すぎるドＭとなる。その淫乱さはサキュバスの様らしいが、冷静さはいつでも戻すことができるようだ。

かつて一度だけスケベな男達にレイプされそうになったことがあったが、男達がミリアに触れた瞬間たちまち全身の骨が勝手に折れて動けなくなったらしい。後に、助けに来たカイトに木刀で滅多打ちにされて再起不能になったとか。（死んではいない）
百合についても例外じゃないらしく、『ミリアを抱くことができるのはカイトだけ』のようだ。

シルフィ・グランドール（１５歳）

貧困層の人間達に慕われていた貴族、グランドールの１人娘。だが、エリート学園のイオドによってグランドールの家族や彼氏とその家族を権力と陰謀で殺されてしまい、イオドにさらわれていた。ところが、あと少しでイオドに強姦されそうになった時、怒りによって凶暴になったカイトがイオドを襲撃し、シルフィはカイトに助けられた。後に、安全な環境で暮らすようにされていたが、どうしているのかは不明。
いつも物静かで心優しく、お姫様口調で上品に振る舞う。しかし、キレると狂気を剥き出しにして暴走することがある。付き合っていた彼氏いわくヤンデレの才能があるとかないとか。

姿…金色の長髪で青と白の花をイメージしたベストと青いカボチャパンツ、青いブーツを着ている

武器…レイピアと短剣二刀流。体術も少しだが強い
・リングレイピア（指輪から魔力によって刃を出したもの。刃については自在にいろんなレイピアを作れる）
・パリーイングダガー（防御向けだが、攻撃力もあるダガー）

属性…風と闇

・グランドールの血と才能に恵まれ、覚醒の素質あり。

スタイル…Fカップで美尻、くびれもいい

エッチ要素…M強め

ヴォルフレイムハート

名前の由来
雷＋炎＝ヴォルフレイム（ヴォルトフレイム）

容姿

・赤髪で蛍光色のV字レオタードを着た姿に、腕には炎をモチーフにした篭手、足には雷がモチーフの義足、背中には水色透明な雷の羽が4つを装着している
・胸は巨乳（これ重要）
・瞳は右が赤、左が黄色
・背中のユニットはペタル（剣型の武装）として使用可能。

武器

柄と刃が同じ長さの薙刀で、これの刃を変えることで以下の武器となる

・雷斬刀
・炎蛇剣
銃火器も多数使用可能

能力

雷の素早さ、炎の攻撃力が強み

あらゆるチート、悪しき心を無力化出来る能力がある。ただし、それの元が何なのかは見設定（本家に任せます）

必殺技（現段階）

雷炎（雷と炎の熱で焦がしつくす強力な技。自由自在に発動できる）

炎雷舞踏（炎と雷の連続斬撃）

ノヴァ・ブレイブルー（ＢＬＡＺＢＬＵＥのキャラ「μ－１２」のアストラルヒート『カミゴロシノツルギ』と同一）

オリキャラ紹介2・セレナについて（後書き）

カイトとミリアについては、今後も更新して改めて出します。

38話「765プロのアイドル」（前書き）

アイドルマスターより、春香と千早が入学します。
もちろん、はるちは百合夫婦としてw

38話「765プロのアイドル」

きーんこーんかーんこーーーん！

9：00

今日、またまた新しい生徒が入って来た。今日はこれといって特に予定もないし、いつも通り平和な一日になるのだが…

銀八「えー、今日からまた入学生が増えるぞー」
ラム「もう定番ね」
ロム「こくこく…」

その通りだが言わないであげましょう。

銀八「んじゃ、お前達入ってこーい」

がららっ！

そこに、リボンをつけた茶髪、青い長髪の少女の二人が入ってきた。

こなた「ちょっ！？」
カイト「どうした？」
かがみ「嘘…！？」
「え…？…あ！？」
「貴方達は…泉さんに、柊さん！？」
こなた「春香っ、それに千早まで！！」
全員「え！？」

その二人は、こなたとかがみが知っている人物だった。こなたいわく、茶髪の少女が春香、青髪の少女が千早というらしい。

春香「こなたちゃんにかがみちゃん!?久しぶりーっ!」
こなた「おひさー!まさかここに入学して来るとは!」
銀時「何だぁ?お前ら知り合いなのか?百合仲間かー?」
カイト「銀さん何故いきなりそっちの予想に行きつくんだ…」

ちょっと予想が飛び過ぎたようだ。というかいきなり百合とはこれいかに。

銀八「あー、とりあえず自己紹介してくれー」
春香「あ、はい!初めまして、私は天海春香です!765プロでアイドルやってます!わけあって、今日からこの学園に通うことになりました!」
千早「同じく、765プロのアイドル・如月千早といいます」
雄大・理奈「何!!?」
雄大「765プロだと…!?まさかお前達、最近ものすごい勢いでAランクアイドルまで上り詰め、さらに近い内にSランクアイドルと勝負する予定という噂のデュオアイドルか!?」
千早「はい、確かに私達がそのデュオです。1ヶ月前後に、アイドルアリーナに出場することになってます。Sランクアイドルと勝負というのは、その大会で相手として当たることになる可能性があるって話です」
理奈「す…すごい……まさか、かの有名なアイドルを目にするなんて…!」
ミリア「そんなに有名なアイドルなんだ…?」

765プロという単語が最初に引っ掛かって質問してみると、春香と千早が最近有名になっているアイドル二人組であることが判明し、

生徒達のほとんどが驚いた。

カイト「それで、どうしてこなたとかがみが知り合ってるんだ？」
かがみ「私達ネットアイドルと765プロアイドルの交流が一度か二度あってね、その時に二人と知り合ったのよ。詳しく言うと、新しい種類のアイドルであるネットアイドルについて知るために765プロが交流を持ちかけてきて、アニメイトが喜んで乗ったってわけ」
こなた「あの頃は、まだお互いに中クラス同士だったけどね」
ミリア「ネットアイドル…そういえば、こなたちゃんとかがみちゃんもアイドルやってるんだったっけ」

こなたとかがみは、ネットアイドルをやっていて全世界ネットアイドル大会優勝者の称号持ちであることを思い出すミリア。（17話参照）

こなた「でもびっくりしたなぁ。まさかその二人が、ここに入学するなんて」
千早「プロデューサーに勧められたの。今後のアイドル活動において、様々な経験と知識を積むいい場所がないか考えたところ、この学園に入学するという結論に至ってね」
春香「それで、少しペースは落ちるけど着実に実力を付けるために、この学園に通いながらレッスンすることにしたの。もちろん理事長さんとプロデューサーさんで話し合って、学園とアイドルを両立できるように定期的なスケジュールも組んでもらったよ」
千早「それに、ここにはアイドルの自主練習もできる場所があるって聞いてるから、まさにうってつけってことよ」
かがみ「そうだったんだ。何にしても、二人もついにトップまであと少しって所まで来てたみたいね」
春香「えへへ、もう少しでこなたちゃん達に追い付けるよ」

こなた「いやいや、春香と千早だって良く頑張ってるって」

４人の会話からして、とても仲良しであるようだ。そして、春香と千早の人柄についても根も悪くなくて付き合いもよさそうだとほとんどが思った。

カイト「なるほどな…４人共よかったじゃん、またそうして話す機会が増えたんだから」

ミリア「うん、違いないよ」

こなた「そだね～」

春香「じゃ、そういうことで皆よろしくお願いしまーす♪」

千早「これからいろいろとお世話になりますので、皆さんよろしくお願いします」

かがみ「えぇ、こちらこそよろしく！」

こなた「よろしく～」

こうして、定番のパターンながらも春香と千早が生徒となった。その後、二人もまた学園にうまく溶け込んで大半の生徒とすぐに仲良くなったそうだ。また、二人がアイドルであることで、５ｐｂとも話が弾んだそうだ。

今日も平和である。

春香「あ、ちなみに防衛のために刀術とか剣術とかも習ってますので、そこのところもよろしく！」

千早「私も銃術とボウガンによる戦術も習得してるわ。あと、他の戦術も少しだけ」

銀時「え、まじで？アイドルなのに？」

こなた「今のご時世、戦うアイドルってのはデフォなんだよ」

圭一「つーか、一部では基本でもあるな」
レナ「そうだね」
かがみ「まあ、私達も戦ってるんだし、驚くことはないわね」
銀時・新八「そうですか…；」

戦うアイドルって美しくね？俺は今もそう思う。

38話「765プロのアイドル」（後書き）

はるちはの百合も今後書いていく予定です。
あと胸ネタも…

39話「セレナの珍対面」（前書き）

セレナがヴァーラガルザと出会う話です。短いです。

39話「セレナの珍対面」

午前10時のこと

今日は学園は休みで、セレナは一人買い物に出かけていた。ベルはステラと先に済ませる用事があるとのことで、今はセレナ以外は誰もいないのだ。セレナはご機嫌でるんるんと鼻歌を歌いながら、街を歩いている。

セレナ「今度はどこに行こうかしら～♪…あ、そうだ！ネプテューヌちゃん達が最近よく行ってるケーキカフェテリア！時間は…いいわね。じゃあれっつごー♪」

そんな彼女が次に立ち寄った店は、ケーキカフェテリア。うきうきしたまま、彼女はその店へと入った。

……

セレナは早速ケーキを4種類注文し、来たところで美味しく食べ始めた。

セレナ「んー…美味しい～♪癖になりそう…」

ネプテューヌ達がこの店を気に入り、最近よくここに食べに来ていると聞いているセレナは、今後もここに食べに来ようと思いながら食事している。それほど美味しいということなのだ。他にもまだケーキの種類はある。今目の前にあるケーキを全て食べたら、他に食べたいケーキも注文して食べようかなと思ったり、もうセレナはケーキに夢中である。

そんなセレナに、ちょっとした出来事が訪れる。

「ふつくしい…」
セレナ「ふえっ!?」

気がつくと、セレナの目の前の席に黒いフードをかぶるローブを着た男が、セレナが楽しく食べている所を見てむふふと笑いながら見つめている。ちなみに、彼はショートケーキを2つ食べている途中のようだ。

セレナ「いい、いつからそこに!?ていうか誰ですか!?」
「俺?俺はヴァーラガルザ…紳士さ。花のように美しい君を眺めたくなって、気がつけばついつい目の前に…」
セレナ「ナンパならお断りですよ!?どうせ私の体とか狙ってのことなんだろうし!」
ヴァーラガルザ「失礼だなぁ。俺はそこらのチンピラとなんか全然比較にもならないって。俺はただ君があまりにも美しいから見てるだけでも幸せなだけで、君の生まれた直後の姿を妄想なんてしたらもう…」
セレナ「やっぱり体目当てじゃないですか!!!この変態ぃぃぃーーっ!!!」
ヴァーラガルザ「だから変態じゃないってー。仮に変態だとしても、変態という名の紳士さ」
セレナ「どっち道変態じゃないですかぁぁぁぁぁぁ!!!!」

男は皆変態だと、確か本家が語っていた気がする。だが、実際女も変tセレナ「牙突零式!!!!!!」へぶあぁっ!!?

……失礼。
ナレーションに戻る。

セレナはヴァーラガルザと名乗る男につっこみ続け、警戒している。

セレナ「はぁ…せっかくの気分が台無しだわ……さっさと食べて、次の買い物に行こ」

ヴァーラガルザ「おいおいつれないなぁ。ぜひお話したいのに…」

セレナ「ナンパしてくる人と話すことはありませんっ！」

ヴァーラガルザ「そこまで言わなくてもいいのにぃ。これは、いきなり襲ってアッー！ってした方がよかったかも」

セレナ「今さらっと問題発言しましたよね！！？絶対しましたよね！！？」

ヴァーラガルザ「別にいいじゃん？なんか君を見てると、どこぞの悪キャラにれいーぽされるかチンピラに犯されそうな顔してるし。でも大丈夫、俺がそうなる前に抱いｔ…」

きゅぴーん！！

ヴォルフレイム「焦がしつくせっ、雷炎！！！」

ごおぉぉぉぉぉぉ！！！

ヴァーラガルザ「あぁぁーっ！ｖＶ」

はい、いきすぎたので制裁を喰らいました。

セレナ「失礼なことまで言って…もう行きます！さよならっ！」

即座に戻ったセレナは、ケーキを速やかに完食して会計を済ませて店を出て行った。もしこれが恋人同士とかだったら、大抵この後が大変になる証拠。最も、そのまま離婚やら絶交やらなってしまっては最悪ののパターンに違いないが。

ヴァーラガルザ「…行っちまった…可愛かったのになぁ」

だが、ヴァーラガルザは無傷だった。ほぼ全力の攻撃をまともに受けたのに、全然変化がなかったのだ。起き上がり、ぷんぷんと怒りながら去っていく様子をガラス越しに眺めながらつぶやく。

ヴァーラガルザ「にしても…あれがチート殺し候補かぁ。今の攻撃が大半なら、学園攻略も楽勝だな。あとは真王と喧嘩するだけで、万事めでたしめでたしってところか♪」

この男は何者なのだろうか?正体は、間もなく知ることになるだろう。

何故なら、カイト達の次の戦いが始まろうとしているからである…

39話「セレナの珍対面」（後書き）

だんだんセレナの扱いがわかってきた気がする今日この頃です。

ところで、ノクターンでセレナのあれをリクエストしてたようですが、まさか本当にれいーぽ話が

カイト「はいはい続きはノクターンで語れ」

俺「えー（´・ω・`）」

４０話「度が過ぎた罰」（前書き）

フンドシ仮面達の話の続きです。今回、カイトが…

４０話「度が過ぎた罰」

きーんこーんかーんこーーーん！

運動場

１０；５０

ロム「うぅぅ…もう嫌ぁ…」

フウ「またこんなことになるなんてぇ…」

ラム「大丈夫よ二人共！今度こそ、あの変態仮面夫婦はばっちりやっつけるからね！」

ギルシア「へっ！今度はばっちし捕まえてやらあ！」

セレナ「また恥かきそう…」

曇りの午前、この日は生徒全員が運動場で待機しながらそれぞれ話をしている。それは、変態仮面ことフンドシ仮面とフンドシ仮面レディを捕まえるためだ。この日、また生徒の大半が下着を盗まれたという報告が相次ぎ、こうして２度目の捕縛作戦を開始したのだ。前回同様、気合十分で二人を待ち続けている。しかし…カイトは別だった。

カイト「……」

カイトは何も言わず、顔を少し俯かせてじっとしている。

圭一「…カイト？どうかしたのか？」

カイト「……」
こなた「だんまり……なんかすっごく怖い気がするんだけど…」
かがみ「そりゃ、ミリアもあんなひどい目にあったんだもの。カイトも他の一部の人たちみたいに、怒りを隠しきれないんじゃないの？」

カイトもとうとう怒りをあらわにしてることを、かがみ達は話す。

カイト「……何故だ…」
レナ「え？」
ミリア「カイト君…？」

そんな時、カイトがぽつりとつぶやく。

カイト「…何故…あの2人はあんなことを続ける…？…皆、こうして苦しんでるってのに…！」
シルフィ「……カイト、本当にどうしたんですか…？様子が変ですよ？」

カイトが怒っていることは一目瞭然だ。そして、その対象もあの二人しかいないこともわかる。
しかし、異質なのだ。
カイトの怒る様子が、他の生徒達とは別物であり、それはまるで心から怒りをむき出しにしているようだった。間違いなく、普段の様子ではなかった。

ほむら「…重なってしまうのね？エリート学園にいた頃で体験してきた、嫌な思い出と」
春香「どういうこと？」
圭一「春香と千早は知らないんだったな。カイトとミリアは、お前

達も知っている最低の有名学園エリート学園に通っていた時期があるんだ。で、最後はそこの嫌な事情に耐えられず離脱してきたけどな。一度、エリート学園とそれ関連の全てをカイトがぶっ壊してな…」

春香「!?そんな事情があったなんて…」

千早「……噂はよく耳にしてるわ。つまり、カイトは今回の騒動と過去が重なって感じて嫌な気持ちになってるってこと?」

カイト「……そんな所だ」

カイトが肯定するあたり、間違いはないようだ。元々、カイトとミリアは真面目な所が多い性格で、特にカイトは精神的に繊細な所がミリア以上にある。カイトのことを知ってきた仲間達から見て、カイトは本気である。今度ここで捕まえなければ、また皆が不幸になってしまう。

今回の騒動は一種の馬鹿騒ぎではある。だが、カイトはそれを馬鹿騒ぎで片付けることができない。先述の事情で、深刻な気持ちであるようだ。

レナ「…大丈夫だよ。今度こそ二人を捕まえてしまえば、きっとこれ以上悪さをしなくなるはずだよ。今は頑張り所だから、元気出そうよ」

かがみ「レナの言う通りね。あんただけじゃないのよ?あの変態仮面二人に怒ってるのは、私達も一緒なんだから」

言葉「そうですよ。だから、そんなに張り詰めなくていいんですよ」

カイト「……そう、だな…」

ミリア「カイト君…」

はっきりと返事ができないあたり、鵜呑みするか否か迷ってるようだ。余程張り詰めていることに、ミリアは心配する表情でカイトを見ている。どう声をかけてあげようか、考えているその時…

「ふはははははははは！」
「おーっほっほっほっほ！」
全員「！！」

学校の時計台にあの2人が現れた。前回同様、二人はカッコつけて登場を宣言した。

フンドシ仮面「怪盗フンドシ仮面！」
フンドシレディ仮面「怪盗フンドシレディ仮面！」
怪盗コンビ「「参上！！」」

この声を聞いたカイトの拳が、震え始めた。怒りが一気に湧きあがり始めたのだ。

フンドシ仮面「今度も同じ手法で待ち構えていようとは…だが、滑稽だよ！」
フンドシレディ仮面「私達を捕まえることなんて出来ないの。前回はドジを踏んだけど、今度は本気で華麗に決めるわ♪」

前回と変わらぬ声がカイトの耳に入る。前と何も変わっていない様子、声、言葉…それらがはっきりとカイトの確信を手伝う。

フンドシ仮面「さて、このパンツも頂くとしよう。邪魔するのならば、前回俺達に与えてくれた脱衣地雷の技術…とくと倍返ししてやろう！」
ビビ「同じヘマを踏むかあぁぁぁっ！！！」
ユニ「今度こそとっ捕まえてやるわ！！」
男子生徒達「うおおおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！」

多くの女子生徒が、降りてきた仮面二人に突撃した。しかし、二人は怯えない。

フンドシ仮面「必殺！」
フンドシレディ仮面「愛と正義の！」
怪盗コンビ「パンティーフラッシュ！！！！」
生徒達「！！？」

ぴかぁぁぁーーーー！！！！

二人は仮面と来ている下着から謎の閃光を発した。突撃した者達は、その光にのまれる。

ラム「な…何今の…？」
ノワール「一体何を…」

そう言って自分の体を見てみると…

ネプ姉妹以外女神全員「きゃあああああああああああああああああああ！！？」

その閃光も依然にあったものと同じ効果だったようだ。下着姿にされて、羞恥心のあまり戦意喪失するしかなかた。

フンドシ仮面「ふはははははは！この技があれば、もはや俺達を止めることはいない！」
フンドシレディ仮面「さてと、それじゃそこに用意したパンツは全部もらっていきましょ」
他生徒達「させるかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

他の生徒達までも、二人を阻止するために突撃していく。だが、これでは同じことの繰り返し。それをわかり、仲間達が次々と下着姿に変えられて羞恥にさらすのを見ているのは…カイトだった。

（これが…馬鹿騒ぎでいいのか…？）

どくん…（心臓の音）

（こんな…皆の純正を…気持ちを…）

どくん……どくん…

（こんな酷いことを、馬鹿騒ぎという言葉で片付けていいのか…？）

どくん…どくん…どくん…

（こんな……こんな…！！）

フンドシ仮面「ふはははははは！やはり最後に笑うのは俺達のだ！」

フンドシレディ仮面「私達は無敵よ！」

ほぼ大半が下着姿に変えられ、劣勢になった時…カイトはついに動き出した。

たっ…たっ…（歩）

圭一「ん？カイト？」

ミリア「カイト君…？」

幸い、カイトのそばにいたために無事であるミリアや圭一達がカイトを見る。しかし、様子はさっきとなんら変わっていない。

フンドシ仮面「ん？またお前か。前回はよくもやってくれたな」

フンドシレディ仮面「今度は、貴方達も全員羞恥の渦に落としてあげる」

対する怪盗二人組は、カイトの様子を気にすることなく余裕の表情で言う。

フンドシ仮面「そうだな。まずは俺とお前の決闘としゃれこんで…」

カイト「……まただ……」

フンドシ仮面「何？」

カイト「…また、同じことを繰り返してる……皆が…苦しんでる…恥さらされて、心までボロボロにされて……」

拳の震えが少しずつ大きくしていくカイト。それは体全体まで及び、カイトの声も震えたものに変わっている。握りしめた木刀にも、力が込められていく。

フンドシ仮面「どうしたのかは知らないが、容赦はしないぞ！さあ行くぞ、前回の屈辱を…」

ずどがあぁぁぁっ！！！

フンドシ仮面「げぼあぁぁっ！！？」
フンドシレディ仮面「ぐぼっ！！？」

ついに、カイトの木刀による攻撃が、二人の腹に思いっきり入り込んだ。

カイト「許さねえ……」

ずがすっ！！！

怪盗二人組「あがあぁっ！！？」

痛みで倒れ込む二人の腹を思いっきり踏みつけ、

カイト「許さねえ……許さねえ…」

どごぉぉっ！！！

中距離の位置まで思いっきり蹴り飛ばす。
そして…

カイト「…！！」

カイトは二人へ突撃した。

カイト「うあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

咆哮が空を貫いた。

かがみ「ちょっ、カイト！！？」

こなた「何何！？カイトったらどうしたの！？」

誠「おい、これってまさか…！？」

ミリア「…カイト君の、堪忍袋の緒が…切れた…！」

ずどがぁぁっ！！！

フンドシレディ仮面「ひぎゃあぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

そう、とうとうカイトは怒りを抑えることができなくなったことをミリアが最初に悟った。その時でも、カイトは仮面の二人を猛攻で襲っている。

それぞれ均等に攻撃し、体全体にダメージが行くように木刀で全力を持って打ちのめし、倒れれば踏みつけて蹴り飛ばし、宙に浮けばつかんで地面にたたきつけ、たまに蹴りと殴りを混ぜて攻撃し、二人に慈悲など与えないといわんばかりに痛めつける。

フンドシ仮面「ぐぅぅ…！何だあの強さは！？…だがっ！！」

この時、運よく攻撃から離れることができたフンドシ仮面が持ち直して反撃に出る。

フンドシ仮面「羞恥心に勝てるものなどない！パンティーフラッシュ！！！！」

びかぁぁぁぁーーーー！！！

謎の閃光がカイトに直撃した。下着姿にしてしまえば、万事全て解決すると考えたフンドシ仮面。

ずどごぉぉっ！！！

フンドシ仮面「ぐほぉぉっ！！？あがあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

だが、直後に鳩尾を木刀で思いっきり殴られた感覚が走る。さらに、それはあばら骨を数本たたき折ってしまったのだ。何が起きたのか理解に遅れたフンドシ仮面が見たのは、最初から変わってない私服姿のカイトだった。

こなた「え、ちょっ！？あの変態閃光が一切効いてない！？」

カイト「そのやり方で…！！！」

げしっ！！（踏みつけ）

フンドシ仮面「がはぁっ！！？」

カイト「どれだけの人達が悲しみ、苦しんだのか…！！！」

ずどごぉぉっ！！！（木刀でフンドシレディ仮面の方へ殴り飛ばす）

カイト「考えたこと、あるのかあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

ぶつかりあった仮面の二人に、カイトは体から赤い気を発しながらさらに攻撃していく。

言葉「えっ！？あの赤いのは一体！？」

レナ「まさか、さっきの閃光でますます強くしてしまったんじゃ…！？」

百華「何だあの恐ろしい覇気は！？私ともあろう者が、背筋が凍りそうだ…！」

レオン「いや、それどころかこっちまで体が震える…！？」

今のカイトはあまりにも恐ろしい。無事であった百華やレオン達がわずかでも震えを見せるほど、誰もが危機感を強く抱いた。

ガレーナ「これが、前に言っていた『闇』か！？」

百華「そうとは言い切れんが、近いのは確実だろうな…！だが、あの様子はさらに発展することもありえる気がしてならん…」

ずどがっ！！！どごぉぉっ！！！ずがあぁぁっ！！！

赤い気を発したカイトの攻撃は威力を増しており、体の自由がままならなくなってきている二人にどんどんかみつく。

もはや、冗談や馬鹿騒ぎ所ではない。羞恥にさらされた生徒達も見てそう思った。

ずどがあぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！！

大爆発を起こす一撃を受け、仮面の二人は地面にひびを入れるほどに張り付けられた。意識はまだ少しあったのが不幸中の幸いだが、まだ安心なんて出来るわけがなかった。

フンドシ仮面「あ…ぐ……に、逃げ…ないと……っ」

フンドシレディ仮面「う…く……痛い…痛くて、動けな…っ」

二人が悶えてる間にも、カイトが赤い気をそのままに歩いて近づい

ていく。まだ痛めつけるつもりだ。

ミリア「…駄目…っ！カイト君を止めなきゃ！（槍を出す）」

圭一「あぁ…今のあいつを、そのままにしておけねえ！」

レオン「その通りだ。これ以上の戦いは無意味だ」

誠「けど、俺達で止められるのか！？（ロケットランチャーを出す）」

百華「こうなっては何もしないわけにはいくまい。全力でカイトを止めるんだ！」

生き残っているミリア達は武器を出して構えるその時、カイトが二人へ前進する速度を一気に上げた。これ以上攻撃が二人を更に痛めつける前に、ミリア達も全速力で走った。

圭一「やめろカイト！！もうそれ以上はよせ！！」

ガレーナ「冷静になれ！！決着はすでについているぞ！！！」

ミリア「もうそれ以上はやめてあげてっ！！！」

カイト「うあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

止まるか止まらないか、結果が見えないその刹那…

「そこまでだ」

がしっ！！

カイト「！！？」

なんと、カイトの動きはある者が木刀を持つ右腕を握っておさえることで、攻撃をぴたりと止めた。

その正体は、クラスの裏教師である勇斗だった。（魔王と聖王と不屈の魔法少女参照）

ミリア「貴方は…勇斗さん…！？」
勇斗「…もう十分だ。だから落ちつけ、カイト」
カイト「…勇斗さん…！？…だけど…！！」
勇斗「言わなくていい…お前の気持ちもちゃんとわかってる。まずは落ちついて武器をしまうんだ。頭に血が上りすぎて、冷静さをなくしてる…理事長も心配してたぞ？」
カイト「…！」
勇斗「お前もわかってるはずだ。これ以上怒り任せで攻撃すれば、憎しみに変わることを…」
カイト「……っ」

赤い気がおさまり、カイトは手を離された直後に力が抜けるように膝をついてしゃがみこんだ。これで、事態が悪化することだけは避けられたようだ。そんなカイトの様子を確認した後、勇斗はとことん叩きのめされた怪盗二人組を見る。いや…もう怪盗二人組と表現する必要はないだろう。二人の仮面はすでに使いものにならないくらいに壊れており、素顔が丸見えになっているからだ。

雄大「お前っ、洛斗！？」
理奈「恋奈まで！？」

正体が自分達の友達であることに驚く皆をよそに、勇斗は二人を少しだけ治療して持ち上げて、合わせるように、いつの間にか現れていた勇華に二人を渡した。

勇斗「理事長から宣告だ。お前達二人のおふざけは度が過ぎた……我が校のルールの一部を破った罰を受けるために、お前達はこれか

ら理事長室へ連行する。連れて行け」
勇華「えぇ」

たったったっ…（行）

カイト「……また、悪いことしちまった……俺は、馬鹿だ…」
勇斗「その気持ちがあるのなら、罰が終わった後にでも見舞いに行ってやれ。二人も、これに懲りてもう二度とこんな馬鹿げたことはするまい」
カイト「…うん…」
勇斗「…次の授業開始まで15分程引き延ばす。お前もゆっくり頭を冷やすんだぞ」
カイト「そうするよ…俺も、いろいろ反省したいから…」
勇斗「うむ…わかってるのなら、これ以上は言わん」

俯くカイトの言葉を聞き、勇斗はもう行っていいぞと首で合図をした。それを確認したミリアが、カイトの腕を持って立たせてあげた。

ミリア「戻ろう…？」
カイト「あぁ……ごめん、ミリア…」
ミリア「ううん、謝らなくていいよ…」

たったったっ…（学内へ戻る）

誠「カイト…」
レナ「…今回は、皆のいろんなことの度が過ぎちゃってたのが原因かもしれないね…」
圭一「そうだな……仮面二人の悪行は止められたけど、俺としてはもっと明るく解決したかったな…」
こなた「まあ、あとはカイト達の問題だから、もう気にしないでい

ようよ。深刻に悩むようなこともないし、明日ぐらいになればカイトもいつも通りに戻るだろうし」
千早「えぇ…これ以上あれこれ言うのはナンセンスでしょうね」
百華「……それにしても、カイトの怒りがまさかあそこまで変貌させてしまうとは…」
レオン「…私、何だかカイト達の能力の根源が確実にわかってきた気がする。間違いない…あの二人も言ってた通り、『力であって力じゃない』んだ…」

カイトとミリアを見届けながら、それぞれ話をする仲間達であった。

……

その頃、屋上から見てる者達がいた。現在、生徒達に知られることなく事務室でひそかに働いている、クルトとカノンノだ。（３５話参照）

クルト「…顔を出さなきゃいけないかって思ってたけど、その必要はなかったな」
カノンノ「まずは、丸く収まって安心したよ。あとはカイトが自分で立ち直るし、もう大丈夫だね」
クルト「そうだな。…けど、まさか俺達の希望に察して、他の先生たちが先に動いてくれたとはな」
カノンノ「うん……カイトもミリアも、本当にいい学園に入学したね」

カイト達を見守りながら、二人はそう言った。

明日になれば、きっといつも通りのにぎやかさに戻る。
楽しい日々もあれば、こんな風な日もある。

日常とは、そういうものなのだ。

４０話「度が過ぎた罰」（後書き）

いかなる冗談やギャグ、シリアスブレイクでも、やりすぎたりしたら誰だって心から嫌になるものです。
そんなわけで、ソラさんにも悪いですがこの方が考えさせることはできるかと。もちろん、ただこらしめればＯＫなんてことばかりでもいけません。

41話「イレギュラー表示」（前書き）

今回から、しばらく長編を書いていきます。
今回は、真王さんとソラさん3人でそれぞれの視点で書いていく話です。
今後もそんな長編を書いていきたいと思っています。

まずは、8ボスをそれぞれで倒す話です。

現在のカイトサイドメンバー
カイト・ミリア
ネプテューヌ・ネプギア
こなた・かがみ
圭一・レナ
春香・千早
シルフィ

41話「イレギュラー表示」

それは、ある日に送られた書状から始まったことだった。

『表では善意と自由をうたいながら、核を絶対なる力と秩序で固めている権力者とその学園に革命として宣戦布告する。理事長及び多くのハードも含め、その秩序を破壊し、貴殿達の絶対なる力と秩序によって自信と意志をなくした者達への希望を見出す。ただし、これは支配するための戦いではないことだけは伝えておく。覚悟されたし

革命組織ブレイベル総長　ダッシャー・ガルネイバル』

この書状を生徒達に公表した所、カイトとミリアがダッシャーと革命組織を知っていた。革命組織ブレイベルは、権力と力をふるって街や人々を食い物にして独裁を続けている者達や組織を倒す集団で、有名ではないがたくさんの人々を助けてきている組織だと言う。カイト達も以前両親と共に、ダッシャー達と知り合って一時期共に戦ったことがあるらしい。そのダッシャー達が、学園に対して革命を宣戦布告することが信じられず、噂を聞いてないはずがないとも言う。そんな時、革命組織の者達がいたる場所で騒ぎを起こして来たのだが、それに乗じてデニーの傭兵団とエリート学園が合併した運命粛清軍までも悪さをしているという情報が入った。カイト達は悩みながらも、それぞれ騒ぎの阻止に向かうのであった。

カイト達はまだ知らなかった。
かつての仲間であるダッシャーが革命を仕掛けてきた理由も、そしてこれから絡みついてくる事柄についても……

……

サイバリング・スペース

ここは、宇宙空間を主に様々な宇宙研究と技術開発を進めている場所。ここでは、サイバー・ハニワンという犯人がこの場を支配し、技術を奪おうと好き勝手してるとのこと。
カイト達は、まずここの事態を止めるために向かったのであった。

カイト「…ダッシャー…何であんな書状を…」
ミリア「何かわけがあってのことなのかな……何にしても、ダッシャー君が学園を攻めるなんて信じられないよ…」
圭一「二人共、気持ちはわかるけど、今は緊急事態だ。まずはこの事態を止めようぜ」
カイト「…そうだな」

かつての友であるダッシャーが革命を起こす真意が何なのか、カイトとミリアはずっと考えている。しかし、今はやるべきことをするべきだと圭一に言われ、ひとまず悩みを心の内にとどめて前を見ることにした。

春香「うわぁー…宇宙って言うから、てっきりロケットとかもあるかなって思ってたけど…すごい…」
千早「ここのどこかに、犯人がいるのね？」
カイト「あぁ、情報に間違いはない」
ミリア「ワープする所もあるみたいだから、はぐれないように進もう」

そう、ここはすでに敵陣の中。トラップなどが待ち構えていること

を予測し、カイト達は注意しながら進む。

……

用心して正解だったようで、道中にはたくさんのモンスターやトラップがあり、カイト達は時間を削られるが全て突破していく。それがしばらく続き、カイト達は太陽系をリアルな感覚でど真ん中から観察できる部屋に到着した。

圭一「ここまで来たが、ハニワンはどこにいるんだ?」
こなた「見た限りじゃ、ここにいそうなフラグを感じるね」
かがみ「フラグ言うか…;」
ミリア「…ん?」

ミリアが何かを感じ取った。

ミリア「……来る!」
カイト「何!」

どうやら敵の気配に間違いなく、カイト達は武器を構える。どこから来ても大丈夫なように、気を緩めない。

「あらあら、自分から来てくれるなんて助かったわ」
こなた「ん!?」

男なのに女らしいしゃべり方が耳に入り、その後にカイト達の前に人型の鳥をモチーフとしたロボットが現れた。

「待ってたわよ、チビちゃん達」
カイト「お前がサイバー・ハニワンか!」

こなた「うあ…オカマキャラと来たか；」
ネプテューヌ「銀さんが知り合ったっていうオカマって感じかな？」
ハニワン「んま、悪口はやめてほしいわねぇ。まあそれはとにかく…」

ハニワンと判明したそのロボットは、両手で目の前にデータ画面を展開。それをもってカイト達全員が画面に見えるようにずらし、分析を開始した。

ハニワン「ふうーん。なかなかの戦闘力を持つ人達ばかりねぇ。約2人は分析不可能って表示もあるわ。で、肝心のカイトとミリアは……はぁっ！？」

しかし、ハニワンはその画面を見ていていきなり驚愕した。カイトとミリアの画面を見て、驚いたようだ。

ハニワン「ぶ、分析不可能及びイレギュラー表示！！？信じられない…分析不可能ならまだしも、イレギュラーって…！？」
カイト「…？何のことか知らねえが…ここで悪さしてる以上、お前をここで止める！」
ハニワン「…そうはいかないわ。ある人からの命令ですもの、簡単に撤退するわけにはいかないの。それに…」

両手に雷を集めながら、冷静さをすぐに取り戻したハニワンは戦う姿勢を見せる。逃げる気はないようだ。

ハニワン「私の相手をするなんて、百年早いわ！」
カイト「それはどうかな！覚悟しやがれ！！（バスタードソードを抜く）」
ハニワン「行くわよ！！（尻尾と背中の羽を全て広げる）」

掛け声と同時、ハニワンは姿を消して不意打ちをしようと動き出した。対してカイト達は、先程からずっとそうしてきたように全方位どこから来られてもすぐに反撃できる体制で待ち構える。カイト達が動かないと見たハニワンは、まず北東近くに出現して奇襲を仕掛けてきた。

ハニワン「これでどう!?（地面をたたく）」

びゅおおぉぉぉぉん!!!!

尻尾の羽が電磁エネルギーを放出し、全方位を寄せ付けない剣の山の形になった。針を出すような攻撃をカイト達はかわし、反撃に出た。

こなた「なんのっ、魔神剣・蒼!!」

青い大きな魔神剣が高速でハニワンに向かい、ハニワンへ進んでいくが、命中寸前で消えてよける。すぐに次の不意打ちを仕掛けるために、カイト達が全方向体制に入る前に後ろから現れて突進。

ハニワン「そこよ!!」
圭一「させるかあぁぁぁぁっ!!!!（バスターショット）」

どおぉぉぉぉんっ!!!!

ハニワン「ぶはっ!?」
レナ「隙ありっ!!!!（突撃）」

ずばあぁぁぁっ!!!!

ハニワンにバスターショットが命中して怯んだ隙を逃さず、ダッシュして鉈のジャンプアッパーカットを当てて吹っ飛ばしたレナ。

ハニワン「ひ、酷いわっ！！」

そう愚痴を吐き、再び姿を消すハニワン。しかし、すでにカイト達は再び全方向体勢に入っているため、普通の奇襲ではどうしようもない。状況は、カイト達が優勢だ。

ハニワン（くっ…うまく長期戦に持ち込めるかと思ってたのに、これじゃまともにデータを集めることができないじゃない！…こうなったら、いちかばちか…）

あることを計画していたようだが、カイト達を相手に計画は成功しづらいと思い、次の攻撃で一気に逆転を狙うことにした。まず、カイト達の周りに雷の球を複数出現させていき、逃げられないように弾幕を固めていく。

ネプギア「弾幕…！お姉ちゃん！」
ネプテューヌ「よけることはできない…だったら！」
かがみ「ふん、一番に稼ぐのは私よ？」
ミリア「くすっ…負けないよ！」

だが、カイト達は焦ることなく余裕の表情で会話をする。何を考えてるのかとハニワンは思ったが、このまま攻撃をすることに躊躇いはない。

ハニワン「何を呑気にしてるのよ？この弾幕からは逃げられないわよ！！！」

上空に出現して、羽をも使って弾幕に指示を与える。

ハニワン「サイバリックスパーク！！！！」

どばばばばばばばばばばばばば！！！！！

弾幕の弾が次々とカイト達に突っ込み、爆発を起こしながら一斉攻撃を開始する。逃げられた様子も見られなかったあたり、ダメージは入ったと判断するハニワン。だが、それは甘かった。

しゅばばばばばばばばばばばばば！！！！

ハニワン「なっ！？」

カイト達はそれぞれの武器で弾を斬り、一発も受けることなく相殺し続けて回避しているのだ。先程かがみが言った稼ぎというのは、この弾丸を相殺する数のことだったのだろう。

こなた「よっしゃ！一気に１０個相殺！！」

圭一「げっ！？横取りされたああぁぁぁ！！」

かがみ「抜け駆けは許さないわよっ！」

こなた「ふふーん、悔しかったらもっと相殺してみなっ！」

カイト「言ってな！まだまだ数はある！」

カイト達が楽しんでる様子で弾の嵐を相殺していくのを見て、ハニワンは更に圧倒される。

ハニワン「こ、これでも駄目だっていうの…！？」

間違いなくカイト達は強い。そう思わずして何と思おうか。

ミリア「よそ見してていいのかな？」

ハニワン「何っ！？」

どばあぁっ！！

驚いている隙を逃がさず、左から突然現れたミリアがハニワンを上に払い上げた。宙に浮いたハニワンにエアダッシュで接近し、とどめの技を放った。

ミリア「風牙双撃！！！」

ずがあぁっ！！！ずだだだだだだっ！！！

ハニワン「嘘おおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！？」

ミリアが風牙突で攻撃した後、ミリアの後を追いかけるようにかまいたちが生じて、ハニワンをさらに切り刻む。ゲームで見れば、多段ヒットする技だ。

春香「あっ！？ミリアずるーいっ！」

千早「手柄は独り占めさせないわよ！」

千早はボウガンを取り出し、ハニワンに狙いを定める。春香も日本刀を手にハニワンの落下に合わせて走り出した。ちなみに、千早が持つボウガンは、キングダムハーツ2に出るある男のデザインそっくりだ。

千早「落ちなさい！！！」

びしゅんっ！！どすぅぅっ！！！

ハニワン「ぐはぁっ！！？か、体が…！？」

ボウガンの矢を受けたハニワンの動きを痛みで止め、回避できないようにした。

春香「チェストぉぉーーーーっ！！！」

ずがあぁぁぁぁぁっ！！！

ハニワン「ひぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

こなた「ちょっ、あれは牙突！！？」

そして、春香はどこぞの新撰組の必殺技を放ち、ハニワンに決定的なとどめの一撃を当てた。結果、ハニワンは力尽きて倒れた。

ハニワン「つ…強すぎ……まさか、他の奴らの強さも…カイト達…が……」

どかぁーーん！！

最後は爆発してブレイクダウンし、動かなくなった。

カイト「よし、終わった！」

こなた「あちゃあ～、手柄取られちゃったかぁ」

かがみ「でも弾を相殺した数なら、私が上よ♪」

ネプテューヌ「むぅ～、次は負けないんだから！」

ネプギア「あはは…とにかく、これでここの犯人は撃破しましたね」

ミリア「後はこのロボットを回収して、学園に送り届けようか」
圭一「了解。早速マッハ・ザ・ハードに連絡して、早く次のポイントに向かおうぜ」
レナ「うん、あと2人を懲らしめなきゃ！」

カイト（こいつは革命組織にはいなかった…となると、間違いなくデニー達のロボットだろうな。俺とミリアを調べるつもりだったのか？）

ちょっと疑問を抱き、デニー達の狙いが何なのか考えるカイト。しかし、それはすぐに考えつくしても仕方ないので、ひとまず次の目的地である火山へと足を運ぶのであった。

この戦いは、まだ始まったばかりである。

41話「イレギュラー表示」（後書き）

ロックマンX4のサイバークジャっカーは俺も好きだったりしてます。

次はドラグーンをパロった奴と戦います。

42話「熱血者の警告」（前書き）

8ボスの2人目、ドラゴン格闘家との戦いです。

現在のカイトサイドメンバー

カイト・ミリア
ネプテューヌ・ネプギア
こなた・かがみ
圭一・レナ
春香・千早
シルフィ

42話「熱血者の警告」

あらすじ

革命組織ブレイベルから宣戦布告を受け、同時に革命組織とデニー達の運命粛清軍が騒ぎをいたる所で起こし始めた。カイト達は疑問を持ちながらも、騒ぎの犯人を懲らしめに出動するのだった。カイト達のチームは、サイバリング・スペースにてサイバー・ハニワンを撃破。次は、バーニン・リザードンがいるマグマ・バーンという名の火山地帯へと向かう…

……

マグマ・バーン

ミリア「次はここだね。バーニン・リザードンが、ここで火山複数を噴火させるつもりらしいけど…どうして…？」

カイト「あいつとは一度だけ話したことがあるが、悪い奴なんかじゃないはず…」

こなた「そのリザードンってどんな人？ポケモン？」

かがみ「いや、それじゃボスにならんだろ…；」

ちなみに、リザードンも強い…と、俺は信じてる。初代では亀を選びまくってたが…

カイト「別名、烈火の拳闘士って呼ばれてるロボットだ。最近、ロボット技術でトップを誇っているレプリロイドで、革命組織でも目立つほど熱血で仲間想いな性格の奴だ。あの頃は、よく決闘を申し込んで次々と敵の代表を多く倒してたな」

ネプギア「それって、どこかの格闘家みたいですね」

どこかの格闘家は、最近殺意の波動に来るって強敵を倒しまくってるとか返り討ちにされてるとか。

カイト「少なくとも、あいつも悪巧みするような奴じゃない。なのにどうして革命に参加してるのか…今はさっぱりわからねえ」

圭一「何か理由でもあるんじゃねえのか？なんせお前達がそんな風に言うくらいなんだ。きっと、無理矢理命令を実行してるだけとかかもしれないぜ」

ミリア「だといいんだけど…」

かつての仲間を心配するカイトとミリア。何故革命に加わっているのか、結局は本人達に問い詰めなければ答えはわからないのだ。

ネプテューヌ「それにしても、ここすっごく暑いよー…水着持ってくればよかったなぁ」

カイト「確かに悪くない発想だけど、それ実際どうなんだ？；」

レナ「やけどしやすくなりそう…；」

千早「ていうか危険としか思えないわ；」

実際、ネプテューヌＭＫ２でも水着姿で火山を冒険してる光景を見かけるが、良い子は真似しないように。だが水着だから許せる（え）

春香「と、とにかく早く行かなきゃね！噴火されたら大変なことになっちゃうよ！」

ミリア「そうだね。ここも重要拠点の一つだから、しっかり守らなきゃ」

そんな会話をしながら、途中で行く手を阻むモンスター達を蹴散ら

しながら奥深くへ急ぐ。

……

進み続けていると、広々とした丸型の床があるエリアに到着した。
そこは一つの火山の最終到達地点だが、見る限りだと特に変わった様子はない。

カイト「ここにはいないのか？」
ミリア「わからない…溶岩の中から現れる可能性もあるけど、どこにいるのかな？」
圭一「他を探してみようぜ」

この火山にはいないと判断して、他の火山に行くことにしたカイト達。ところが…

「待っていたぞ、古い友…ネイラード兄妹よ！」

全員「！！」

その時、声がした後に天井から赤いドラゴンをモチーフとしたロボットが降りて来た。体から少しだが炎のオーラが発している。カイトとミリアは、一目でそのロボットが誰なのか判断できた。

カイト・ミリア「バーニン・リザードン！！」

彼こそが、次のターゲットだ。

バーニン「久しぶりだなカイト、ミリア。お前達とこうして話すのは2度目か」

カイト「…そうだな。こんな形で再会したくはなかったけどな…」
ミリア「バーニン・リザードン、一体どうしてこんなことをするの？どうして革命なんて過激なことをしようとしてるの！？」
バーニン「総長が出した書状の通りだ。最も、お前達に対しては別の意味だけどな」
カイト「何故だ！？お前までどうして超次元学園を目の敵にしてるんだ！」

再会してすぐに革命の理由を問い詰めるカイトとミリア。対して、バーニンは真面目な表情を変えずに質問に答える。

バーニン「お前達が通っている学園は、幾多の力…そしてチート能力を持っていると聞く。だが、それゆえにあまりにも強大すぎる」
カイト「危険だから…？いや、それだけじゃない！ダッシャーのことだ、他にも何か理由があるんだろ！？例えば、誰かに人質を取られたり強要されたりとか…」
バーニン「鋭いな。もちろんただ単に強大すぎて危険だからという理由だけではない。俺達が革命を起こした理由は、学園が生み出す秩序と力のあり方に非があると判断したからだ」
ミリア「どういうこと？」
バーニン「さっきも言った通りだ。そして、俺は総長を信じて従うだけ」

バーニンが革命に加わってる理由は、総長であるダッシャーを信じてのことで間違いはないらしい。だが、まだ超次元学園に敵意を向けることに納得がいかない。

バーニン「カイト、ミリア…お前達も今の政治の大半を知っているだろう？特に、次元政府についても」
カイト「あぁ、知ってるさ。表では綺麗事を抜かしながら、自分達

だけの繁栄のために非道かつ独善なことばかりする権力者ばっかりだとも思ってる。俺も…そんな奴らの正義なんて大嫌いさ。だけど、お前の話を聞いても納得がいかない！お前達は、まさか超次元学園もその権力に飢えた組織と同じだって言いたいのか！？」

バーニン「でなければ、革命など起こす必要もない」

ミリア「そんな…どうして！？少なくとも、そんなに酷いことなんてしてない！超次元学園が腐ってるなんて、ボク達は信じられないしわけがわからないよ！」

バーニン「今はな。だが、いずれそうなる可能性が高いと総長は申された。あの人はお前達と同じように先を見ているお方…その人が本気で申したのならば、それなりの理由があるということだ」

カイト「…ダッシャー…っ！」

ダッシャーが何を考えて革命を起こしたのか、まだカイト達には理解できない。まだ聞きたいことはあるが、バーニンは戦う構えを見せた。

バーニン「戦う前の話はこれくらいでいいだろう。お前達は俺を止めに来たのだろう？ならば、俺は総長の命によりお前達の相手となるのみ！カイト、俺と勝負しろ！！」

カイト「…っ」

こなた「どうするのカイト？相手は引くつもりなんて全然ないっぽいけど」

ネプギア「あのロボットは本気ですよ」

バーニンはカイトとの決闘を望んでいる。カイトはいろいろ疑問を持ったままだが、戦わないわけにはいかないと判断して答えた。

カイト「…わかった。これ以上の話し合いは時間を浪費するだけだ」

バーニン「やはり受けて立つか。どうやらお前の勇気は相変わらず

のようだな！安心したぞ！」
カイト「こっちはまだ安心できねえって。どうして超次元学園を腐った権力組織と同じように見てるのか…ダッシャーにじっくり話を聞くまではな」

バスタードソードを抜いて構えるカイトと、格闘の構えでじっと見ているバーニン。両者の決闘は決定づけられた。

カイト「バーニン・リザードン、悪いけど今のお前達を野放しにはできない！革命は、俺が阻止してみせる！！」
バーニン「その意気込みやよし！行くぞカイト！！」

二人は意志を胸に突撃し、戦闘開始した。

まずカイトがバーニンに斬撃を連発し、バーニンはそれを炎の拳で相殺しながらラッシュする。並の固さでは傷付くことのないその拳は、一発一発の打撃の威力が高いためにカイトの一撃一撃を相殺することが可能なのだ。

バーニン「てえやあぁぁぁっ！！！」
カイト「！」

カイトの横薙ぎを後ろへジャンプして回避し、そこからカウンターとして炎を待とう飛び蹴りをはなってきた。カイトはこれを見切って紙一重で回避。

バーニン「火炎波！！！」

ごおおおぉぉぉぉぉぉっ！！！！

だが、バーニンは両手を前に出して火炎の波動を撃って攻撃を続けてきた。バーニンの猛攻を前に、波動をまた紙一重でよけるカイトはうまく立ち回って隙を伺いつつ攻めながら迎え撃つ。

圭一「あいつ、なかなか出来るな…」
こなた「革命組織にもあんな実力者が他にもいるっぽいね」
シルフィ「戦い方も、二人が言った通り悪意が感じられませんわ」
春香「まるで本物の格闘家みたい…」

カイトとバーニンの戦いを見ていて、仲間達は少し見とれている。また、バーニンから悪意を感じられないことから、デニー達のような者達とは違うとも思った。だからこそ…今回の革命の意図が見えずにいる。

がんっぎんっ、がきぃぃっ!!

バーニン「どうしたカイト!!お前の力はこんなものかぁぁぁぁっ!!!!」
カイト「でやあぁぁぁぁぁぁっ!!!!（けさ斬り）」

どしゅっ!!

バーニン「ぐはっ!!!?」
カイト「そこだっ!!!獅子戦吼!!!!」

どごおぉぉぉぉぉんっ!!!!

バーニン「ぐおおぉぉぉぉっ!!!!」

互角なラッシュ戦を制したのはカイト。怯んだところを狙って技を

はなち、バーニンを遠くまで吹っ飛ばした。手痛いダメージを受けたバーニンは、何とか受け身を取って体勢を立て直す。有利な状況だが、カイトもラッシュ戦でのかすり傷が多く付いている。それほど激しいものだったのだ。

バーニン「やるな…腕は落ちてないどころか以前よりも強くなっている…」

カイト「強くなりたいのは、お前達だけじゃねえんだ！」

バーニン「いいだろう…ますます面白くなってきた。ならば！！」

大地を踏み、脚が休めの姿勢のようにどんと立ち、両手の拳を握りしめた腰に持ってくる。

バーニン「この全身全霊の鉄拳、受けてみよ！！！」

ごごごごごごごごごごごご…！

バーニンの全身から炎が溢れ出し、闘志が高まっていく。

カイト「だったら俺もやるしかねえよな…！」

カイトも迎え撃つために、全身の気を高めて剣に力を込めていく。お互い、大技で相手を倒す気でいる。圭一達は出来るだけ距離を保とうと、フィールドから離れて見守る。

カイト「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！！！」

バーニン「ぬおおおおおおおおおおおお……！！！」

二人が限界まで高めたのは同時。そして…

だっ！！！（突撃）

カイト「氷龍割殺撃ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！！！！」

バーニン「究極・バーニングブラストぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

ずどおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん！！！！！！

あたり全てを凍てつく程の冷気を爆発させる剣の一撃と、全力を込めた紅蓮の拳一発がぶつかり合う。それはたやすく大爆発を起こし、二人が立っていた広い足場は高さ半分が粉砕された。

こなた「うおぉぉぉっ！？相変わらずカイトの大技の火力高いなぁ…」

シルフィ「でも、バーニン・リザードンの威力も馬鹿には出来ませんわ！あれ程の威力…決して常人が出せるものではありません」

ミリア「勝敗は…！？」

爆風と煙がはれていき、決着を確認した。

勝者は、服が少しボロボロになっているが、ちゃんとまともに立っているカイトだった。

かがみ「！やったわ！！」

ネプテューヌ「おぉー！カイトすごーい！」

レナ「はぅっ、やっぱりカイト君は強いよ！」

ミリア「ほっ…よかった」

仲間達はカイトの勝利を喜んだ。

一方、バーニンは体のあちこちが大破してしまっており、人の形を

保っているがもはや動ける状態ではない。

カイト「…俺の勝ちだ、バーニン・リザードン」

バーニン「…見事だ…カイト……どうやら、ミリアも同じく染められてはいないようだ…」

カイト「染められるだと…？」

仲間達がカイトの元に集まって来るのを感知し、カイトはバーニンに問う。

バーニン「カイト…お前達が何故超次元学園に入学したのかは知らんが……学園の秩序と力の節理に飲まれるな……お前達の心が染まってしまったら……きっと…総長達も、悲しむだろう…」

カイト「だから何の話だよ！？どうしてそう超次元学園を悪い組織のように言うんだ！？理事長達が何をしてるっていうんだ！？」

バーニン「…お前達は、まだ知らないんだ……奴らが振りかざす正義…信念……秩序の裏を…」

ミリア「裏？」

カイト「馬鹿な！？理事長達は、皆他人を大事にできる人達ばかりだ！その皆が、エリート学園やデニー達のように私利私欲な悪行をするわけがない！！知らないのはお前達の方じゃないのかよ！？」

カイトは超次元学園と理事長達トップはいい人達だと、バーニンが語る悪論を否定して庇う。今までたくさんの経験の中で、理事長達の振る舞いなどいろんな面を見てきたカイト達は、彼らが裏切りなんかしないと信じている。

カイト「本当はもっと別の理由があるんだろ！？誰かに脅されてるんじゃないか！？」

バーニン「……デニー達やエリート学園のことは聞いている……

だが…奴らはまだ俺達に接触したことなどない……革命を起こそうと決意されたのは……自分の、意志だ…」

ミリア「そんな…！？」

少しずつバーニンの目の光が薄れていく。機能停止しかけているのだ。

バーニン「……すまないが…休ませてもらう……好きに回収するがいい……それと……カイト、ミリア……目に見える力と絶対…に……とらわれる…な……お前達は……弱いからこそ…強い……」

その言葉を最後に、バーニンは動かなくなってしまった。修理しなければ永遠に話が出来ないままだ。

カイト「…どういうことだってんだよ…！」

ミリア「本当に、自分の意志で革命を起こしたっていうの…？」

ネプテューヌ「…間違いなく、この革命には何か大きな裏がありそうだね。ていうか、絶対そうとしか考えられないよ」

カイト「あぁ……皆、最後のポイントへ向かうぞ。まだ情報も足りないんだ」

ネプギア「そうですね。まずは騒動を止めなきゃいけません」

かがみ「えぇ、急ぎましょう」

バーニンを回収してマッハ・ザ・ハードに連絡をした後、カイト達が任された最後の目的地へと急ぐのであった。

42話「熱血者の警告」（後書き）

次回は大地の者と戦います。そこでも、続いて革命についての話を混ぜたいです。

43話「絆への問い」（前書き）

鉱山でサルヴェスと戦います。

43話「絆への問い」

あらすじ
革命組織と運命粛清軍の騒動を阻止するために出撃にしたカイト達。サイバー・ハニワンに続いて、今度はマグマ・バーンで待ち構えていたバーニン・リザードンを倒したのだが、その中で語られた数々のは話を信じられずにいる。果たして何が本当で、本当の目的は何なのか、真意を知るためにもカイト達が最後に向かう場所、ガチゴチ鉱山へと急ぐのであった…

……

ガチゴチ鉱山

春香「今度は誰に会いに行くの？」
ミリア「サルヴェス…革命組織の副長を務めてる人だよ。特徴としては、よく他人を中心的に恋愛や絆を守るために行動してるって所かな」
カイト「あいつは人と人のつながりを重視するタイプだからな。もちろん彼が持つ部隊の部下達からの信頼も厚いし、結束力もある。当然、ダッシャーからもな」
こなた「愛を守る戦士…って感じかぁ」
カイト「サルヴェスも深く話ができる人間だ。今度こそ、革命の意図とかもしっかり聞ければいいんだが…」
圭一「何にしても戦いは避けられない。そうだろ？」
カイト「あぁ、その通りだ」
ネプギア「ここにもモンスター達が生息していますから、注意して進みましょう」
シルフィ「はいっ」

……

道中、トロッコに乗ったりモンスターの群れを強行突破したり、他にもモグラの巨大メカに追われたりといろいろあったが、無事最深部へ辿り着いた。そこは、たくさんの輝く鉱石や結晶が突き出ていて綺麗な場所だった。

カイト「…！」

そして、カイト達の前にある茶髪で鋼の鎧と革色のズボンを身につけている男がいた。

ミリア「サルヴェス君！！」
サルヴェス「…来たか、ネイラード兄妹よ」

男がこちらに振り向き、カイト達と向き合う。

サルヴェス「超次元学園に入学したと聞いて、お前達が来ると思っていたぞ」
カイト「サルヴェス…お前も革命に参加しているのか？」
サルヴェス「いかにも。私もダッシャーとは同意見なのでな。バーニン・リザードンからも話は聞いただろう？」
ミリア「うん…聞いたよ。やっぱり、君も超次元学園を認めないの？」
サルヴェス「そうだ。超次元学園に不満を持ってる者は、他にも多くいる」
カイト「…革命組織の人間全員か？」

お互いに真剣な表情で、一触即発のように相手をじっと見ている。

サルヴェス「それだけではない。革命組織に志願する者達の中にも、超次元学園の噂を聞いて自分の無力さに絶望する者…自分のちっぽけさに嘆く者も出るようになった」
カイト「……バーニン・リザードンも言ってた。超次元学園の力が強大すぎるって」
サルヴェス「ならば…言いたいことも大体はわかってるのではないか？」
カイト「いや、わからねえよ。あいつがどうして超次元学園を腐った組織と同じように見てるのか、今はそれが知りたい。それに、何が言いたいのかだってわからねえんだよ…」
サルヴェス「簡単な話だ。お前達が聞いてきたもの見てきたものが、本当は別のものが正体ではないのかってことだ。はっきり言えば、偽りだと」
ミリア「偽り…？そんな、超次元学園が酷い嘘をつくなんて信じられないよ！だって、あの人達は本気で語ってたのをはっきり見てきたんだもの！」

バーニン・リザードンと同じように、超次元学園を良く思ってない様子のサルヴェスの言葉に反論するミリア。カイトも、超次元学園を悪く言う様子に批判的だ。

カイト「お前…まさか超次元学園の皆の絆についても…！」
サルヴェス「恋愛も含めて、団結力がどうも自分達から結束したものと感じることができない。まるで、一個あるいは一部の思想で固められたものだ」
カイト「どういうことだ！」
サルヴェス「お前達はともかく、学園が誇示しているものと実際に誇示しているものが合っていないということだ。最も、そこにいるプラネテューヌの女神以外の仲間もカイト達同様に別だがな」

ミリア「誇示するものが合ってない…？」
ネプテューヌ「むぅ…！さっきのドラゴン格闘家といい、私達の何が不満なの？私達はそこまで酷くなんかないよ！」
サルヴェス「それはどうかな？お前達は違うというのならば、例え理事長を敵に回しても信念を貫けるか？」
ネプギア「！？そ、それは…！」

突然の質問だった。学園を裏切ってでも守るべきものを守る決意が出来るのかと問われ、ネプギアは言葉が出なくなる。

ネプテューヌ「理事長を裏切る？それって、理事長が独裁とかやるようになるって話？そんなことありえないよ！さっきから学園の悪口ばかり言わないでよ！」

しかし、ネプテューヌは構わずサルヴェスに敵意を向けて言う。迷ってはいけないと考えているようだ。

ネプテューヌ「どっちにしても、貴方達だって悪いことをしてる！だから、好き勝手にはさせないよ！」
サルヴェス「…あくまで今のあり方を貫くか、女神ネプテューヌ。だが…そのまっすぐさがもったいないな……信念を貫くためなら、妹も殺しそうで怖い。恋愛にしても、英雄とかを優先して捨てるか…そして学園の義に全て従って仲間であった誰かを殺すか……」
ネプテューヌ「…？」
ネプギア「捨てる…？」
サルヴェス「…ま、今はその話はしなくていいか。とにかく、大きな災いが生まれる前に壊す必要があることに変わりはない。カイト、お前も学園につくというのならば容赦はしない」
カイト「改めて言う必要はねえんじゃねえのか？俺とミリアが学園につくことぐらい、初めからわかってることだろ！」

カイト達に迷いはない。サルヴェスはそれを悟り、拳を構えてカイト達をにらむ。

サルヴェス「そうだったな。ネイラード兄妹よ、覚悟するがいい！！」

だっ！！

サルヴェスがカイト達に突撃し、拳のラッシュを仕掛けて来た。まず受けたのは圭一で、怒涛の猛攻をバッドでうまく捌いて対抗する。

圭一「速い！？こいつ、ただ者じゃねえぞ！！」
レナ「圭一君！フォローするよ！」
サルヴェス「そうはさせるか！！」

だんっ！！（大地を殴る）

レナ「！？何、地面が揺れる！？」
カイト「その場から離れろ二人共！！攻撃が来るぞ！！」
圭一「何！？」
サルヴェス「すでに遅い！！アースアッパー！！！」

どおぉぉぉぉぉん！！！

圭一「ぐぼはあぁっ！！？」
レナ「きゃあああぁぁぁぁっ！！！」
ミリア「圭一君！！レナちゃん！！」

突然圭一とレナの足元から拳の形をした巨大な岩塊が突き出て、二

人を上にふっとばした。強烈な威力と派手さにカイトとミリア以外の者達が驚愕する。

こなた「巨大な拳の岩!?何あれ、ＦＦ９にいた召喚獣っぽい奴の技と似てるけど!?」

カイト「あれがサルヴェスの戦術だ!あいつは大地の力をうまくコラボした格闘で戦い、その実力から組織内で岩手の武道神っていう異名を持ってるんだ!」

ミリア「地上戦では彼が有利だよ!皆、気を付けて!!」

ネプギア「わかりました!」

サルヴェス「次はどいつだあぁぁぁぁぁぁっ!!!」

ごぉぉぉぉぉっ!!!

腰に力を入れて正拳を前に突き出すと同時、今度は多数の岩石が浮いてカイト達に飛んで来た。カイト達はこれを武器で斬りながら回避し、その中でシルフィが先に突撃していった。

シルフィ「私が参ります!!」

シルフィの戦術を披露するのはこれが初めてだろうか。

シルフィは左手に防御に向いているパリーイングダガーという短剣を持ち、右手には人差し指にはめている水色の指輪から魔力を流して風のレイピアの刀身を生み出した。そして体に守りのバリアとして風の衣をまとってサルヴェスに接近戦を挑んだ。

ばばばばばばばばばばばばっ!!!

シルフィの接近術はこの二刀流による剣術で、レイピアを中心に次々と斬りかかる。動きは素早く、風のように身軽かつ鋭い戦法で立

ち向かう。サルヴェスの殴打の弾幕をうまく相殺し、押し合う。

サルヴェス「やるな…その動き、お前はグランドール家の娘だな！」

シルフィ「えぇ、私はその家のたった1人の生き残りですわ！！」

しゅばぁぁっ！！

真空波をレイピアの風圧で撃ち、サルヴェスはこれを紙一重で回避する。

サルヴェス「そうか…だが、その様子だとすでに立ち直ってるようだな。ならば遠慮はいらないな！！」

だんっ！！どごぉぉぉぉん！！！

シルフィ「っ！！」

シルフィの素早さをもってしても、突き出る岩の拳を回避できずにふっとばされてしまうが、ダメージはそんなになかった。なぜなら、シルフィの風の衣によって更に体重を軽くし、衝撃をクッションのように和らげる効果を得ているからだ。まず、打撃大半では彼女に決定的な効果は期待できないだろう。

サルヴェス「打撃の衝撃が効いてない…俺では相性が悪いか！」

シルフィ「嵐の刃よ…トルネードトライデント！！！」

ごおぉぉぉぉぉ！！！

岩の拳の衝撃で宙に浮んだシルフィは術を発動し、竜巻の波動が三つに並んで発射された。それはくねるように曲がることが可能で、

回避行動をするサルヴェスを惑わす。

サルヴェス「速いな…流石、風の武術に嗜んでいるのは伊達じゃないか！」

ずしゃっ！！

サルヴェス「ぐっ！！」

サルヴェスは波動をかすってしまい、少しダメージを負った。

こなた「ナイスシルフィ♪反撃行くよ！！（突撃）」

春香「行きます！！（牙突）」

ずどぉぉぉぉぉぉぉっ！！！

サルヴェス「がはぁっ！！！」

どばばばばばばばばばばばぁぁぁっ！！！

春香の強力な突き技で動きをほぼ止め、３つの竜巻の波動は喰らいつくようにサルヴェスにぶつかって爆発した。チャンスだ。

かがみ「雷は効かないけど、物理もなめるんじゃないわよ！！（ダッシュ突き）」

こなた「昇竜剣！！！（くるくる回るように斬撃を連続で浴びせるアッパー技）」

ミリア「風牙突！！！」

ずがががががっ！！！

サルヴェス「ぐぼぁぁぁっ！！！」

大ダメージを受けて後ろへ仰け反るサルヴェス。何とか体勢を保って構える。

サルヴェス「まだまだ！！アースヘルシェイク！！！！」

だだだだだだだだだだだっ！！！！

両手の拳で大地を我武者羅にたたきまくると、大地から次々と大地の拳が突き出るだけでなく、岩石がどんどん地面から出てカイト達に飛んでいく。岩の拳がそれを撃って速度と威力をプラスすることで、激しさは更に増す。

千早「くっ！？」

カイト「ぐあっ！！あいつ、以前よりも大技の威力が増してやがる！！」

春香「あわわわっ、うまく立ってられないよぉ！！」

圭一「意地でも攻撃するんだ！！」

その時、未だ宙に浮かされたままの圭一とレナが落下して来て、サルヴェスへ攻撃の狙いを定める。

サルヴェス「させると思うか！！！アースアッパー！！！」

レナ「はうぅぅーーーっ！！！！」

どごずばぁぁぁぁぁっ！！！（岩をたたき斬る）

サルヴェス「何！！？」

圭一「どおおぉぉぉおりゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！（振り下ろす）」

どごぉぉぉぉっ！！！！

サルヴェス「ぐはあぁぁぁぁぁっ！！！！」

岩の拳で追撃しようとしたら、レナが鉈で岩を真っ二つに切り裂いて粉砕し、それに続いて圭一がバッドでサルヴェスを強打した。それによって、アースヘルシェイクの激しさが急に弱まる。

カイト「今だ！！（突撃）双破斬！！！」

シルフィ「ビースラスト！！！（空中から襲いかかるダッシュ突き）」

ネプギア「フォーミュラーエッジ！！！」

千早「そこね！！（二丁の特殊ボウガンで連射）」

どばばばばばばばばばばばっ！！！！

サルヴェス「ぐぬおおおぉぉぉっ！！！」

ネプテューヌ「ぼっこぼこにしてやんよ！！クリティカルエッジ！！！」

ずばばばばばばっ！！！！

ネプテューヌの連撃がサルヴェスを浮かし、とどめの一撃をカイトの技に合わせる。

カイト「くらえ！！！次元衝ぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！」

ネプテューヌ「おしまいっ！！！！」

ずばあぁぁぁぁんっ！！！！

サルヴェス「があぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

二人の斬撃がクロスし、サルヴェスに決定的なダメージを与えた。
サルヴェスは大きく吹っ飛び、派手に地面へ落下した。これでもう戦うことはできないだろう。

千早「これで決着ね」
ネプギア「私達の勝ちです！」
サルヴェス「ぐ……私の負けか…っ！やはり、実力ではこちらが下だというのか……これでは、あいつらの気持ちもわかるというもの…」
カイト「サルヴェス…お前またそんなことを言って…！」
ネプテューヌ「私達は、あんな酷い組織とは違うよ！！私達の絆だって、貴方が考えてるほど悪くないんだよ！！」
サルヴェス「……信念は…な…」

サルヴェスはふらふらと立ち上がり、カイト達を見つめる。

サルヴェス「信念…理念については本物だってことは理解した……それは偽りではないようだ……だが、それだけだ…」
春香「それだけ…？一体どういうことですか！」
サルヴェス「…ふ……言ってもすぐには理解できんだろう……少し考えるといい…」

ネプギアが聞き返すが、サルヴェスは答えを教えず別の質問を投げかけた。

サルヴェス「…プラネテューヌの女神ネプテューヌに…個人的なことで問おう……お前の絆の…一番の要は誰だ…？」
ネプテューヌ「決まってるよ！皆誰一人欠けちゃいけないんだよ！だから、答えは全員！」
サルヴェス「……それくらい、聞かなくてもわかってる……それ前提で、お前が一番失いたくない者は…誰なのかと、聞いてるのだ…」
ネプテューヌ「どうしてそれを誰って決めなきゃいけないの？別にいいじゃん！まあ、憧れも含めて一番いなくなっちゃ困るなって思うのは銀さんだけど」

ネプテューヌはまっすぐな目で答えた。その様子を見て、急にサルヴェスの目が少し変化する。

サルヴェス「……本当に、あの英雄…銀時なのか…？」
ネプテューヌ「もちろん！一番の侍の魂を持っていて、皆からも頼りにされてる銀さんがいなくなるのは耐えられないもん！」
サルヴェス「……信念に浮かれた者ここにあり……か」
ネプテューヌ「え？」

サルヴェスは目を改めて開き直し、ネプテューヌの目を見つめて言う。

サルヴェス「戦いの中で…お前達の心に秘められた、愛も感じ取らせてもらったが……ネプテューヌ…お前だけ……どこかおかしく感じる……本当に、お前は銀時に恋愛感情を向けているのか…？…もし本当ならば……何が願望はあるんじゃないのか…？」
ネプテューヌ「願望？そりゃ相思相愛になることで……、……？」

そう言いかけた時、ネプテューヌの心に何かが引っ掛かって言葉が詰まった。

ネプテューヌ（あれ…？でも銀さんと結ばれたら、何だか私が私でなくなる気がする……あれれ？じゃあ、銀さんと相思相愛になりたいってのは…嘘…？）

サルヴェス「……やはりな…どうやら、銀時っていうのは嘘だと感じてるようだな……本当は、もっと身近な所にいるかもしれないぞ……最も、そのままでは……あの物語の通りに、なりそうだがな……せいぜい、惨劇のきっかけに……早めに気付くことだ…」

カイト「お前…！あの物語は関係ないだろう！？」

ネプギア「え…？」

サルヴェス「…すでに…女神達まで……溺れつつあるということだな……重い報告になるだろう……」

ごおぉぉぉぉっ！！！

圭一「な、何だ！？」

サルヴェス「今の個人的な質問も…偶然に重なったが……あえて言おう…我ら革命組織が批難してるのは、信念ではない……形なのだ…」

カイト「！待てサルヴェス！！お前にはまだ聞くことが…」

サルヴェス「カイト…ミリア……心配するな……我々とて、ただ1つ2つが悪いだけで…革命を起こしたわけではない…そこまで落ちぶれてなどいない……ダッシャーも…変わってないぞ…」

どごぉぉぉぉっ！！！

ミリア「きゃあっ！？」

サルヴェス「この場は引かせてもらう……また後で、会おう…」

サルヴェスは自分の足場を急に上昇させて高い位置まで逃げ、その

後ハイジャンプで飛んで撤退して行った。

カイト「…サルヴェス…」
圭一「また聞き出した話が曖昧なまま終わったな…さっきと情報量は変わらねえよ」
ネプギア「…あの人は何を言いたかったのかな…」
ネプテューヌ「……（悩んでる表情）」
ミリア「形を批難してるって言ってた……でも、何が…？」
千早「わからないわね。信念じゃないって言ってたから、考える幅は狭くなったけど…」
こなた「それでも本当の理由がまだわからないままだよ」

サルヴェスといいバーニン・リザードンといい、何を伝えたかったのだろうか？だが、いくら考えてもまだ情報や話が足りなさすぎる。これでは答えなんて出ない。

カイト「…これじゃ埒があかない。やっぱり、ダッシャー本人から聞き出すしかない」
ミリア「そうだね。でも、今はどこにいるんだろう…」
カイト「早めに居場所を突き止めないとな。とにかく、これで俺達のミッションは終わった。一旦学園に戻って報告しよう。こうしてる間にも、次の動きを見せるはずだ」

こうして、カイト達は3か所で起きている暴動を阻止したので、ひとまず学園に帰還することにした。
だが、これだけ戦っても目的や真意はまだ謎のまま。
カイトとミリアは、まだ覚醒組織に疑問を抱いている。

しかし、その答えはすぐに見えることになるだろう…

43話「絆への問い」（後書き）

ネプテューヌとネプギアの話のフラグは立てました。
これについては、基本はこちらで書きたいですね。

おまけ

かがみ「ところで、さっき奥へ向かう途中で飛行船の廃墟が見えたけど、あれ何だったのかしら？」
カイト「情報によれば、多分あれは敵のものらしい。多分、他のチームが戦った結果なんだろう」
こなた「でも何でここに墜落したんだろうね？」
シルフィ「他の人達は皆強者ばかりですから、やはり戦いが激しかったからではないでしょうか？」
カイト「激しい…ねえ」

頭に浮かびあがったのは……あの修練型チートの女戦士達だ。

カイト「…レオン達、またやらかしたのか；」

43．5話「総長の覚悟」（前書き）

革命組織の8ボス後の様子と、ダッシャーがどんな人物なのかを見る話です。

43．5話「総長の覚悟」

革命組織ブレイベルは、突然超次元学園に革命として宣戦布告をした。後に各地で騒動を起こし、まず学園の戦力を削る作戦に出た。しかし、出動したメンバーが超次元学園の生徒達に敗れたとの報告が逃げてきた副長サルヴェスから入り、総長ダッシャーは次の作戦について考えることにしたのだった。

……

戦闘開始から1日目・19：00

革命組織本部・中央広場

サルヴェス「…以上、報告時間はこれで終わりだ。30分後に作戦会議を行うので、代表者は後で集まるように。解散」

たったったった……（部下達が散らばる）

サルヴェスが一息ついたのを見ているのは、黒い学生ズボンと白いカッターシャツの上に黒いジャンパーを前開けで着ていて、少し荒れた金髪で17歳の少年。
彼こそが、革命組織ブレイベルの総長ダッシャー・ガルネイバルである。

ダッシャー「お疲れ。ボロボロで帰って来たばかりなのに、すまねえな」
サルヴェス「気にするなダッシャー。これくらい12時間程休めばすぐに完治するさ」

サルヴェスは私語でダッシャーと会話する。彼らは付き合いが長く、昔から共に背中を預け合える戦友同士である。サルヴェスは１つ年齢が上の１８歳だが、年齢の差など関係ない。

サルヴェス「それにしても、やはりうまくいかないものだな…流石に今回の相手は強すぎるようだ」

ダッシャー「そうだな。なんせチート集団の１つでもあるからな…考えなしに戦えばこっちが圧倒的に不利だ。けど、俺達の動きがすぐに止められるのも計画の内…すぐに次の作戦に移れる分、まだ余裕はあるぜ」

サルヴェス「問題はどう立ち回るかだ。何やら、デニーとやらが結成させた運命粛清軍の動きも同時にあったらしいが、味方と考えない方がいい。奴らにも気を配っておかねば」

ダッシャー「やっぱ守りの体勢でいるしかないかもなぁ。学園へ全軍突撃するにしても最終手段だから、逃げられないことも覚悟しておかないといけねぇ。かといって、守ってばかりでは突撃する機会すら失いかねない……さて、どうしたものか…」

サルヴェス「今夜の会議は長くなりそうだな…」

二人は好ましくない状況に頭を抱えているようだ。会議でじっくり話し合うことにして、他に話したいことを話す。

ダッシャー「…で、カイトとミリアはどうだった?」

サルヴェス「以前よりも強くなっていたぞ。それに、二人の心や勇気…絆もそのままだ」

ダッシャー「そっか、それを聞いて安心したよ。あの学園の形に染められてなくて本当によかった」

サルヴェス「そうだな。まずは素直に喜ぼう。…しかし、二人はあくまで学園側につくようだ。あっちに守りたいものがあるからだろ

う」
ダッシャー「あいつらは他人のいろんな部分を大切にしたがるからな。しょうがないことさ」
ダッシャーはなるべく暗くならないよう、気を落とさずに言った。
ダッシャー「けど、あの学園の手法に染められないとも限らない。あいつらを傷付けることにはなっちまうが、早めに学園に跡を入れておかねえと」
サルヴェス「そして…未来で超次元学園が危険組織となる前に、予防手段を取る…普通の人から見れば、助けなのかただの迷惑のどちらを思うのだろうな」
ダッシャー「考えなしなら後者が大多数だろうよ。いきなり間違いを突きつけても受け入れづらいってのもあるし…」
サルヴェス「いつもながら難しいものだな」
そう会話していると、部下の1人がダッシャー達の元にやって来た。
部下「総長、運命粛清軍から手紙が届きました」
ダッシャー「手紙？…嫌な予感がするな。見してみ」
部下から手紙を受け取り、それを開いて読む。

『革命組織ブレイベルへ
初めまして、超次元学園に革命を起こしている貴殿達に敬意を表する。都合により短く済ませるが、正しい秩序を作り直すために戦う我ら運命粛清軍は、ブレイベルと同盟を組みたい。敵が同じである

のならば、我らが協力して戦う方が理想的だろう。翌日の夕方5時に我らは学園を襲撃するので、よければそちらの援軍を大量に送ってほしい。我らも無駄な時間は使いたくないのでね。
では、いい返事を待つ

デニーより』

ダッシャー「……どう見ても外道な権力者とかがよく書くパターンじゃねえかよ…ったく、下心見え見えだっつーの」

ダッシャーは手紙を読んだだけで、奴らには別の狙いがあると判断した。見抜いたと言ってもいいだろう。
しかし、サルヴェスは重い表情でダッシャーに話をする。

サルヴェス「しかし、まずいことになったな……デニー達のやり方がどういうものか、わかってるか?」
ダッシャー「あぁ、奴らの噂もちゃんと聞いてる。人を騙し、絞りつくし、殺し捨てる……信用できるわけがねえ。だが…」
サルヴェス「断れば部下達の命を握られるか、消されるだろうな…」

理由は簡単だ。自分達にはチート能力者がいないため、まともにデニー達と戦うことはできないからだ。工作などをしても、逆に部下達が危険にさらされるだけ。奴らのやり方を考えると、断れば革命組織を滅ぼすに決まっている。
ダッシャー達は、追いつめられているということだ。

ダッシャー「……はぁ…全く、迷惑な連中だぜ。あんな奴らに限って、正義だの神だの絶対だのほざきやがる」

サルヴェス「どうする？」

しばらく考え、ダッシャーはある作戦に出ることにした。

ダッシャー「よし…サルヴェス、お前達はここに残れ。援軍は俺とあと3人で行く。運命粛清軍には了解って伝えといてくれよ」

サルヴェス「！！お前…まさか！」

ダッシャー「このままじゃ学園との戦いは満足にできないし、状況は不利すぎるんだ。こうなりゃ一か八か、俺が命をかけて博打に出る。選択する予想は、学園でまとめて俺らを殺す…だ」

まさに命がけの作戦だ。

サルヴェス「馬鹿な！犬死にする気か！？お前が死んでしまっては、候補生達の親にも合わせる顔がないぞ！？」

ダッシャー「大丈夫だって。俺が学園で暴れてる間に、お前達は奴らの魔の手が届かない所まで全力で逃げればいい。心配するなよ、俺だって簡単には死なないさ」

サルヴェス「しかし、仮にお前が死にはしなかったとしても、デニー達に改造やら拷問を永遠にされ続けるか、それか超次元学園に洗脳か調教をされるかもしれないぞ！？そうなっても俺達からしたら、俺達が知ってるダッシャーはいなくなるも同然だぞ！！」

ダッシャー「心配性だなぁ。俺は絶対に服従も屈服もしない。俺は俺のやりたいようにやるだけだ。それに…」

空を見上げて、ダッシャーは本音を言った。

ダッシャー「…早くカイトとミリアに会いたいんだ。この状況で、今会っておかないといつ会えるかわからねえ……はは、俺も心配性だな」

サルヴェス「ダッシャー……」

サルヴェスは心配と悲しみの目で、ダッシャーを見る。彼もまた、ダッシャーが心配で仕方ないのだ。

ダッシャー「…俺の覚悟に…付き合ってくれるか？副長サルヴェス」

サルヴェス「……承知」

革命組織の中で、ダッシャーは覚悟を決めた。

仲間達や人々、そしてカイトとミリアのために…

４３．５話「総長の覚悟」（後書き）

長編が終わった後に、ダッシャーの紹介をやることにします。

４４話「総長襲撃」（前書き）

革命組織総長ダッシャーとの戦闘と口論です。
しかし…

今回はいつもよりかなり長めになりました。

４４話「総長襲撃」

あらすじ
革命組織と運命粛清軍の騒ぎを阻止するために戦う超次元学園生徒達。カイト達は鉱山で待ち構えていた副長サルヴェスと遭遇し、戦いの末これを撃破。しかし、はっきりとした情報は得られず、特に批難してるのは信念ではないという言葉が更に謎を与えた。撤退したサルヴェスの追撃はせず、学園に戻って報告をすることにしたのだった…

……

１８：００

大会議室

今回の出動チームそれぞれの代表が会議に参加し、お互いに情報を交換した。カイトとミリア、マリオとチルノ、レオンと百華、そしてチートと真王の８人で話し合いを始めていた。
レオン達をはじめとする主力部隊の方では革命組織の者２人と運命粛清軍１人と遭遇、マリオ達は革命組織２名、そしてカイト達は革命組織と軍両方、そして革命組織の副長と遭遇したことを報告し合った。
革命組織の者達が言ったことも報告したが、批難に対して身勝手だとか悪いのはそちらだとかいろいろ怒り心頭の者達が大半だった。
カイトとミリアは、彼らだけが悪いと認識されないように話をしてみたが、結局仲間達の威圧に言い返せなくなった。

どうしたものかと悩むカイト達だったが、ひょんなことからその後

に理事長からある秘密を話された。そこで、カイト達は理事長が絶対に渡してはならないもの…アルティメット・ザ・ハードについての存在を知った。その過程で、カイト達は学園のいいところを改めて再認識し、自分達もそのいいところを心に刻んでひとまずの安心は得た。そして、勇斗の提案でダッシャー達を学園に受け入れる方針に決まった。

これで、わだかまりはカイト達以外しっかりなくなったと皆は思った。

だが……肝心なことを忘れていたのだ。

ダッシャー達が本当に言いたいこと…ネプテューヌに問いかけた理由を、大切にしようと思う根っこを、革命組織が超次元学園を嫌う本当の理由を、信念ではなく形を批難した理由を…様々な所があるが、ひとまとめでいえば、ただ信念の面のみだったのだ。

カイトとミリアの安心は、すぐに消えることになる…

……

16：55

超次元学園運動場にて

カイト「ダッシャー…どうしたってんだよ…っ！」

ミリア「まさか、運命粛清軍と手を組むだなんて…」

そう、革命組織と運命粛清軍が手を結び、次の動きを見せ始めたとの情報が入ってきたのだ。すぐに学園側も行動に移り、カイト達のチームは学園の守備に回された。連合軍を倒すには、まず1度で決着をつけることは不可能と判断したため、長期戦は避けられない。いつ何が起こるか分からない状況の中で、カイトとミリアはダッシャーのことに疑問を持ちながらも心配していた。

春香「もしかして、革命組織の人達がデニー達の軍に丸めこまれたんじゃ…」
カイト「馬鹿な！あいつらはまっすぐな組織なんだ！それに、腐った権力者達の闇についても長く見続けてきてるんだ。簡単に屈するはずがない！！」
こなた「となると、やっぱりデニー達が何かちょっかい出したんだろうね」
かがみ「あー…汚い手はいくらでも考えられるからね」
レナ「…二人共、大丈夫？無理そうなら…」

心配するレナに、二人は首を振って丁寧に断る。

カイト「いや…ますます大人しくしてられない。あいつから何が何でも話を聞きださなきゃ、この気分も晴れない」
ミリア「大丈夫…学園の魂も、理事長のことも知ったんだもの。折れないよ」
レナ「そっか。ならいいよ」

緊迫した空気の中で、お互いやわらかめに話して微笑みを見せた。
カイト達全員、迷いはない様子だった。

…だが、それだけだったのだ。

「緊急報告！緊急報告！学園に少数の敵が接近中！」
全員「！！」

学校からのアナウンサーが、敵が来たことをカイト達に知らせた。
武器を手にして待ち構えていると、すぐに敵が現れた。

カイト・ミリア「！！」

正体は、噂をすれば何とやら……彼だった。

カイト「ダッシャー！！」
ミリア「ダッシャー君！！」

手に柄が槍のように長い戦斧を手にしたダッシャーが、３人の部下達と共に歩いて来た。

ダッシャー「…ここにいたか…やっと会えたぜ」
カイト「……俺達は、こんな形で会いたくなかった…」

ミリアが他の仲間たちに下がるよう視線を送り、了解した圭一達は後ろへ下がる。

ダッシャー「…奇遇だな。俺も、出来るならこんな形だけは避けたかったよ。特に…この学園で、な」

ダッシャーも部下達を下がらせ、数歩前に出てカイトとミリアをじっと見て話を続ける。

ダッシャー「聞きたいことはいろいろあるって顔してるな。そりゃそうだ…俺はそれ程のことをしてきたんだ。特に悪い意味でもさ…

…憎いか？」
カイト「憎くなんかない。ただ、どうしてデニー達と手を組んだのか聞きたい」
ダッシャー「そうか……まず言っておくと、本心じゃない。奴らの力は強大過ぎてさ……悔しいけど、要求を飲まざるを得なかった。本当なら、いつものように絶対な存在にも逆らってやるつもりだったけど、部下達の未来を思うと、無謀な死に方をさせたくなかったんだよ。デニー達にでっかい牙を刺すために、今は部下達を安全な場所に批難させる時間を作ろうと思って、俺らだけ特攻して来たってわけだ」
カイト「本当なんだな？」
ダッシャー「あぁ、心変わりはしてないさ」
カイト「…でも、ちょっとらしくないな。以前のお前なら、俺よりもずっと勇敢に堂々としてたのに…」
ダッシャー「ははっ…いけないなぁ。俺ってばとうとうカイトにも言われる程変になってしまったのかな…」

何気ない無邪気そうな調子で話すダッシャーだが、その瞳の奥底には違うものが渦巻いているのが見える。表の平然さとは裏腹に、何か思いつめているようだ。

ミリア「全くその通りだよ。今のダッシャー君、何だかすごくおかしい感じがするもん…以前の覇気が、ちょっと弱々しいよ」
ダッシャー「たはは…見抜かれてるか」
カイト「……」

何だか、感じ心地が悪い空気だ。カイトとミリアは、その空気に耐えられなくて聞くことを聞くよう口に出すしかなかった。

カイト「…何故だ、ダッシャー…何故この学園を嫌がるんだ？ここ

の人間が、何をしたっていうんだ？」
ダッシャー「……別に、まだダイレクトな事は何もしてないさ」

ダッシャーは空気を読んで質問に答える。その時から、微笑みが少しずつ薄れ出していく。

ダッシャー「けどな…残念なことに、お前達が信じて入学した超次元学園の体勢が、俺達革命組織の人間や候補生達の意欲を削ってるんだよ。あんまりにも強すぎて、まさに越えられない壁だって多くがそう嘆いていた。どんなに頑張っても、どんなに努力しても、自分達は下等にしか見られないんだって…あきらめる人は増えるばかり。今は、ついに一般市民にもそんな人達が現れ始める始末」

右側を向いて、空を見上げるダッシャー。

ダッシャー「人は誰もが言うだろう。それは甘えだ、それは自分勝手な話だ、それはただの偏見だ……普通の人間ならまずこう思う。もちろん、俺もそれが間違いだとはあまり思わない。けど…最近、残酷に思えてしまう」
カイト「残酷？」
ダッシャー「見方はいろいろあるが、俺が言いたいのは…自分達が絶対の壁作って絶対越えられないようにしておいて、その壁を登れと強制する表現が多くなってきたって話。登っても自分達は下等のままで何も変化はないし報われもしないのに、それを登れって言われて好き好んで上る奴が大半だと思うか？」
カイト・ミリア「……」
ダッシャー「さらに…その壁に手を付けた者が離れられないように、考え方や思いを無理矢理いじくって壁の一部にしようとするものも多くなってきたよ。場合によっては、向上心を消してでも取り込もうとする奴も例外じゃない」

首を下側に落とし、目を少しだけ伏せる。話し方にも感情がこもるようになってきた。

ダッシャー「…正直言うと、この世界には絶対の壁が出来てしまってる。しかも、それについて考えもしない奴らも少なくない」

カイト「力が強すぎる、権力が大きい組織が多すぎる、そして正義面する外道が主流になった……それらも含むのか？」

ダッシャー「もちろん含むぜ。…そう、お前達と別れてから俺はその絶対について改めて考えてみたんだ。そしたらな、今言ったように絶対の壁…すなわちチート能力者が主流になったことで壁が出来てしまったことに気がついたんだ。今こうして話してる間にも、デニー達や次元政府、他にもたくさんの欲望に溺れる人間共によって逆らえない強制の秩序という名の壁を振るって、多くの人達に理不尽な苦痛と悪夢を与え、目指す幅や自由を奪われている所が数多くあるだろう……この超次元学園も、な」

ミリア「…何が、ダッシャー君達や人々を苦しめてるって言うの？信念のことが気に入らないから？それとも、正義面してるから？」

ダッシャー「いや、サルヴェスから言われた通り、信念については基本的に口出しするつもりはない。誰もが理想を語る自由を持ってるんだ。俺もお前らも、人の正義や信念は千差万別だってことはよく知っている。だが、重要なのはそこだけじゃない」

正面を向いて、ダッシャーは真剣な表情で言い続ける。この時点で、微笑みはもうない。

ダッシャー「…カイト、ミリア…よく聞くんだ。お前達がこの学園で生きてきて、学園生活の中で信念の矛盾を見つけなかったか？」

カイト「矛盾？」

ダッシャー「そう、俺が今回革命を起こした理由はそこにある」

戦斧を回して持ち直し、戦う構えになってカイト達に戦う意思を見せた。

ダッシャー「…前座のおしゃべりはここまでにしよう。今すぐに言いたいことが何なのか気付くってのは、流石に無理があるだろう？だから……来いよ」

カイト「…！ダッシャー、待ってくれよ！」

ダッシャー「どの道、俺達の激突は避けられない。いや…そうしてえんだ。お前ら二人にも、聞きたいことがあるからな」

ミリア「ダッシャー君…っ！」

カイト「どうしても、戦うしかないのか？」

ダッシャー「あぁ…悪いが、俺はやめねえよ」

ダッシャーの目つきに偽りなどなく、学園に革命を起こそうという気持ちも変わらない。

カイト「……こんなことだけは避けたかったのに…俺もミリアも、お前とこんな争いはしたくなかったのに！！（バスタードソードを抜く）」

ミリア「ボク達は…辛いよ！（ウイングスピアを出す）」

ダッシャー「俺もさ…けどよ、もうこうでもしなきゃいけなくなっちまったんだよ。このままじゃ、お前達が…お前達の心にある本音の気持ちが報われねえんだよっ！！！」

とうとう、戦いが始まってしまった。避けたかった戦いが、幕を開けた。

ネプテューヌ「カイト！！ミリア！！」

カイト「皆、手を出すな！！ダッシャーとは俺とミリアだけで戦う

！絶対に邪魔しないでくれ！！」

強く念を押した後、カイトとミリアは突撃してくるダッシャーへ向かっていく。３人の武器がぶつかり合いを始めた。

がんっ、ぎんっ、ががががっ！！

カイトとミリアが交互に斬撃を放つが、ダッシャーは数をものともせずに素早く捌いて相殺する。逆に、ダッシャーの戦斧の威力が大きく、カイトとミリアをより必死にさせていく。互角の勝負だが、ダッシャーの実力はまだ圭一達にはわからない。

ダッシャー「まずはくらえっ、噴出岩斧！！！」

どごおぉぉぉぉぉぉん！！！（岩の巨大な塊が突き出る）

カイト「ぐはぁっ！！？」

こなた「ちょっ、あれってサルヴェスが使ってたアースアッパーの斧バーションじゃん！！？しかもあいつよりも岩が大きい！？」

戦斧で地面をたたくと、瞬時に岩の塊が具現されて突き上げ、カイトを上空へ吹っ飛ばした。ダッシャーはすぐに飛翔し、カイトへ追撃をかける。

ダッシャー「雷鳴連斬！！！」

戦斧の刃に雷を宿し、一振りで雷を飛ばして当てた所をフルスイングで払い飛ばす技をカイトに放つ。

ミリア「させないっ！！！」

カイト「うおおおぉぉぉぉぉぉっ！！！」

ばしゅうぅっ！！！がきぃぃぃん！！！

ミリアが槍で雷を払い、追撃が来る所でカイトが即座に復帰してエアダッシュ斬りで止める。力を入れて強くぶつかり、お互いの武器が一瞬震える。ミリアが上へ飛んだ頃には、カイトとダッシャーがラッシュ戦を繰り広げている。カイトは次々と技を繰り出し、ダッシャーの怒涛の攻めに対抗する。

ダッシャー「やっぱ以前より強くなってるな！だが、それだけか！！」

ぶうぅぅんっ！！！（振り払い＆ａｍｐ；真空波を飛ばす）

ダッシャー「！」

カイト「そんなわけあってたまるかよっ！！！」

がきぃぃぃん！！！

ダッシャーの攻撃を瞬速で回避して右に回り込み、カウンター斬りをたたきこもうとするがこれも相殺される。だが、その時ミリアが急襲して来ることに気がつくのに少し遅れた。

ミリア「流星撃っ！！！」

ダッシャー「ちぃ！（回避）」

ミリア「まだまだ！！！」

びゅうぅぅん！！

ミリアの攻撃は紙一重で回避したダッシャーを通り過ぎるが、ミリアが行きっぱなしで終わることはそんなにない。急停止してエアダッシュで突撃し直し、ダッシュ突きを素早く放ったのだ。同時、カイトも刃に気を溜めて巨大な刃を作り出していた。

カイト「あたれえええぇぇぇぇっ！！！（次元衝）」

どがあぁぁぁぁっ！！！ずがあぁぁぁぁっ！！！

ダッシャー「ぐはあぁっ！！！」

カイトのフルスイングを防御するが弾き飛ばされ、そこにミリアの突きが直撃。ダッシャーは体勢をぐらつかせる。二人は隙を逃さんと突撃した。

ダッシャー「舐めるなあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

きぃぃんっ！！（弾く）

カイト「何っ！？」
ミリア「きゃっ！？」
ダッシャー「剛武乱斬っ！！！」

ずばっ、ずばっ、ずばっ、ずばぁぁぁっ！！！

二人「うあああぁぁぁぁぁっ！！！」

攻撃を弾いて逆に隙だらけの状態にしたダッシャーは、力強く3回斬りこんで4撃目で抜けるように斬り払った。少しまとまっていた二人が離れ、ダッシャーは次にミリアへ突撃。

ミリア「くっ、グロース！！」

ダッシャーが近付く前に魔法を唱え、一定時間の間だが自身の攻撃力を高めた。接近し終わった直後、ダッシャーの連撃の嵐に同じ連撃で対抗する。

ミリア「やあぁぁぁぁぁっ！！！」

ダッシャー「おらおらおらおらおらあああぁぁぁっ！！！」

ばばばばばばばばばっ！！！

今度はお互いに攻撃速度が少し早くなり、激しさのあまりに火花が飛び散る。通常、物理力ではミリアが不利であるが、グロースをかけたおかげでカイトと同じくらい強攻撃を相殺することが出来るようになっている。

カイト「ダッシャあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

ダッシャー「！！カイトおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！」

気の巨刃をそのままで突撃するカイトに、ダッシャーは吼え返して戦斧に同じく気を宿して刃を強化。カイトの攻撃をことごとく相殺しに攻める。ミリアもまた、ダッシャーを追いかける。

入り乱れがちな空中戦は、やがて3人共空を飛んで舞いながら通り過ぎる感じでぶつかり合う戦闘状態へと変わっていった。何度も武器と武器、気と気がぶつかり合う戦いは、決して常人がしょっちゅう展開できるものではない。

かがみ「何よあいつ！？カイトとミリアをいっぺんに相手してるのに、全然苦戦してないわよ！？」

シルフィ「まだ疲れすら見えませんわ！」
千早「伊達に革命組織のトップを務めてはいないってことね…」
ネプテューヌ「二人共、負けるなーーーっ！！！」

がきぃぃぃんっ！！！（3人の武器がぶつかる）

ここで、ようやく鍔迫り合いが発動した3人。この時でも、力の均衡が酷く不安定ながらも必死で保とうと3人を動かさない。

カイト「一体何が気に入らなかったんだ！！お前は、超次元学園の何が受け入れ難いんだ！！」
ミリア「そうだよ！！信念を批難してないって言うのなら、革命を起こす理由なんてどこにもないはずだよ！！」
ダッシャー「いいや、肝心な所が忘れられてるんだよ！信念と同じくらい大切な、当たり前だけどおろそかにしやすい大事な点がな！！」

武器が弾かれるように離れ、3人は連撃の嵐を引き起こしながら本気で会話をする。こんな大事な戦いでも、今は話さずにはいられないからだ。

ミリア「それは一体何！？はっきり答えて！！」
ダッシャー「いいぜ、はっきり言ってやるよ！！俺が一番受け入れ難いもの…それは、反省しないやり方そのものだ！！！」
カイト「反省！？どういうことだ！！」
ダッシャー「信念を正しく貫くには、ただまっすぐに進む覚悟任せに突き進めばいいなんて考えは愚！！その末路は信念の暴走だ！！今この世界には、正義や信念の注意点を省みずにはき違えて暴走している組織も多くいる！！そいつらは考える力、受け止める力、向き合う力をはじめとする大切なものを自ら次々と捨てていき、やが

て自己満足に陥るのみ！！！」
カイト「それが革命の理由！？馬鹿なっ、超次元学園の人間はそこまで愚かなんかじゃない！！現に俺は見たんだ！！困ってる人達を助け、困らせてる人達をこらしめる。そんな思いでたくさんの人々を助けてくている皆の姿を！！その過程で気持ちや心も確かに感じた！！お前が言う信念の暴走の心配なんてないはずだ！！！」

がきぃぃぃぃん！！！

ダッシャー「馬鹿野郎！！全員が完璧にそうだっていう証拠がないだろうが！！！本当にそうだったら、今頃俺だってこんな戦いなんかしてねえよ！！！」
ミリア「それなら、はじめからこんなことしなくても、学園に話を持ちかけるだけにすればよかったんじゃないの！？早まりすぎだよ！！」
カイト「確強大すぎる力を所持してるという事実はすでに受け入れてる！！けど、皆はそれに左右されることなく自由に生きているんだ！！」

互いの思いが荒い形で飛び交い、攻撃の嵐の中で戦いを続ける。カイトとミリアは、超次元学園を信じている意志とその理由をありのままに伝え、考え直すように説得と続ける。しかし、ダッシャーは頑なに信じようとはしない。

ダッシャー「生徒達が本気でそう言ったってんならまだ理解の予知はある！だが、トップの者共はどうなんだ！！強大な力に左右されないってんなら、何で絶対の壁となる力を持つハード達がごろごろいやがるんだよ！？信念から来る強さを示すなら、絶対の力なんて必要ないって話になるぞ！！」
カイト「理事長にだって考えがあるんだ！！ハード達が存在する理

由だって、ちゃんとあるはずだ！！！」
ダッシャー「だったら聞くが、ハード達を超える純粋な存在がいないのは何故だ！！？お前らは、ハード達に何かで立ち向かう者や場面を他に見たことがあるのか！！！」
カイト「何！！」
ミリア「どういうこと！！？」
ダッシャー「もしお前らが言う信念の強さが本物なら、喧嘩でも勝負でも何でも、ハード達に挑戦する者達ぐらいいくらでもいるはずだぞ！！！だが、超次元学園にはそれがいない！！何故か！！？それは、絶対に逆らえないって意味が無意識に示されてるからではないのか！！！」
カイト・ミリア「っ！！！？？」

ここで二人に一瞬の迷いが走った。考えたことも、見たことも、向いたことのない点を指摘されたからだ。そこで生じた隙を見られ、ダッシャーは二人の武器を押し返して追い詰めていく。

ダッシャー「広げるためにはまず自分、身の回り、近くの人へ！そうして影響の連鎖は大きくなるもの！！お前らのトップ共が絶対逆らえない壁を知らず知らずに作り、生徒達は一人も逆らえず…言い直せば挑戦する意欲を失わせている！！それが、学園の外へとどんどん広がって行って、結果として俺達の身近の人々までもが同じ影響を受けてしまっている！！！わかるか！！？学園のトップは、生徒達の挑戦心や己の向上心の成長を置き去りにして、自分達には立ち向かえないようにしている！！！前へ歩いていく信念を語りながら、自分達の部分ではそれに基づいた行動をしてねえんだよ！！！」
カイト「ぐっ！！…それがもし本当で正論だったってんなら、何故お前らからそれを高らかに叫ぶだけにしない！！？悪いことをしようとしてないんだし、別に遠慮することなんて！！！」
ダッシャー「したらどうだ！？あいつらが本当に冷静に耳を貸して

いたか!?否…それはありえなかった!!何故なら、過去からずっと自分達の意向に意義を唱える者や妬みによる葛藤を本気で訴えた者は、完全に反発する者が全て悪い、未熟で甘ったれなだけだとして罰則を与えるという選択をしてきたからだ!!!」

ミリア「嘘だよっ!!!そんな独裁じみた事実なんて聞いたことがない!!!」

ダッシャー「残念だが事実だ!!!不満を持つ住民のやや多くから、過去に2度か3度だけ大きな反乱があったが強引に鎮圧されたって話をこの耳で確かに聞いた!!!その時の新聞も呼んだ!!!力で精神的にもボロボロにされた元生徒数人からも、沸点が低い者達が多くて居心地が悪かったりもしたって話も聞いている!!!」

カイト「でたらめを言うな!!!あいつらがそんなことするわけがないだろっ!!!」

ダッシャー「この世に一切の反発がない組織なんて存在するものか!!!もちろん、過去であった出来事であれど無意識に理不尽なことをされた生徒がいない学園も存在しない!!!そして今、ここでお前達に聞く!!俺達が革命を起こして、俺達の不満をお前らがこう言っていたと伝えた際に、俺達の方が完全に全て悪い、甘ったれてるだけ、クソ餓鬼がとかの批難をした者達が大半ではなかったか!!!後から少し言い過ぎたと思って、どっちも悪いって改めた者は何人いたか覚えてるのか!!!!」

ミリア「っ!!?」

カイト「あ…!!?」

カイトとミリアはその言葉で、強い衝撃を感じた。

そういえば、会議から理事長や皆と秘密の話をする時間帯でダッシャーに対する意見は、向こうが完全に悪いという意見が大多数見られただけのままで止まっていて、自分達の意志を話す際にもその話の占めをしていなかったことを思い出した。

学園に受け入れると方針が決まっても、今回の騒ぎで誰はここが悪

くて誰はここが悪かったという部分の話はまだしていない。つまり、今後のことを考えると『反省』というものをちゃんとしていなかったということだ。だが、まだカイトはその受け入れる話を思い出して、ダッシャーに伝えることにした。

がきぃぃぃぃん！！！！

ダッシャー「どうした！！！まだ反論することがあるか！！！」
カイト「っ…ダッシャー！！今からでも遅くない！！俺達と一緒に学園で暮らそう！！そうすればきっとわかりあえる！！」
ダッシャー「！！！！……何だと…？」
ミリア「きっと心を静めて革命をやめれば、ちゃんと受け入れてくれるよ！だから…」
ダッシャー「…ふざけるな…」
カイト「え？」

しかし、ダッシャーはその言葉を聞いて様子が一変。その感情は、ありえないはずの感情だった。

ダッシャー「俺が今聞いたことに答えられなかったってことは、クソ餓鬼とののしる程革命組織への過激な批難が多かったってことだろ？俺達を精神的にも実力的にも下等に見た組織が、俺達を受け入れるだと…？…ようするに、俺らが全然未熟だから、上である俺らがしっかり教育してやるってとらえ方も可能なんだろう！！？」
カイト「え、いや！？それはいくらなんでも大げさじゃ…！」
ミリア「落ちついて！！決してそんなことを言ってるわけじゃ…！」
ダッシャー「大概にしやがれってんだ！！！！お前らもらしくねえ考え方してんじゃねえぞ、この大馬鹿野郎共がああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

ごごごごごごごごごっ！！！

激怒したダッシャーは、斧に大地のエネルギーを宿してガイアの岩巨人を具現化させ、巨拳でカイトとミリアを地面へ殴りつぶした。

どがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！

圭一「うおわあああっ！！？」

千早「やられた！！？」

ネプギア「カイトさん！！！ミリアさん！！！」

すたっ

巨人の具現化が解け、ダッシャーがようやく地面に降り立つ。その目の前には、服装がボロボロで傷だらけになっているカイトとミリアが倒れている。

ダッシャー「カイト…ミリア……何があったかは知らねえけどよ、学園の長所ばかり見ていて肝心なことを忘れかけてねえだろうな？ちょっと、浮かれてた気もするぜ」

カイト「っ……う…ぐっ……違う、違う……俺達は、ただ…っ！」

ミリア「救いたい…だけだよ…！見下して…なんか、ないよ…」

カイト「一体……何が、あったんだ……何を、経験して…こんな……」

ダッシャー「……もういい、しばらくそこで寝てな」

圭一「くっ、カイト…ミリア…っ！」

ダッシャーが学校に目線を向け、その間にいる圭一達がカイトに続こうと戦う姿勢を見せる。

だが、その時…

「寝るのは貴方です。永久に」
ダッシャー「ん!?」
どすぅぅぅっ!!!!
ダッシャー「がはぁぁぁっ!!?」
カイト・ミリア「え…!?」
ダッシャーが一歩から歩き始めた瞬間、何者かの鎌の刃がダッシャーの胸に深く刺さったのだ。
正体は、チート・ザ・ハードだったのだ。
こなた「チート・ザ・ハード!?」
チート「何も知らない餓鬼の分際で、どこまで我が主と学園を侮辱するのですか。ましてや、この程度の実力しかない甘ちゃんごときが」
鎌を引き抜くと、その瞬間に何かが走ったのかダッシャーの体全体に斬り傷が大量に刻まれて、出血しながらダッシャーがその場に倒れた。
カイト「ダッシャー!!?」
ダッシャー「が…っ!……き、貴様は……!」
チート「愚かな愚者ですね。あなたも愛や絆と言ってますが、ただの建前だけの言葉では意味がありません。それに嘆くとかはその方達が身勝手に比べてるからです。所詮、全ては力が証明するものです。身の程をわきまえなさい」
ミリア「!?だめ…っ!」
チート「さあ、今なら謝罪すれば軽い罪で済みます。そうしないの

であれば、一度生死の境を彷徨わせて、後からじっくり調教して差し上げましょう」

鎌の切っ先を首に向けて言うチート・ザ・ハード。しかし、ダッシャーはそれにびびらなかった。
それどころか…鋭い目つきで口元がつりあがってこう言った。

ダッシャー「……この、絶対にすがらずにはいられない…馬鹿野郎…」
チート「…何ですって…？」

チート・ザ・ハードはダッシャーのその返事に、苛立ちのサインを入れ始めた。

ダッシャー「世の中には…俺みたいに、批難する奴らが…ごろごろいるものさ……けど、お前らは…そうやって、自分達を悪く言う奴らを…力任せで…っ…たたきつぶしてきたんだろうな……結局……お前らも……自分の非を受け入れようともしない……愚者集団に、何ら変わり…ない…」

ダッシャーは怯えることなく、本音でそう聞こえるように言った。
結果は……いわなくてもいいのかもしれない。

チート「……餓鬼風情が…！！ならば地獄のごとく苦しみなさい！！！」

鎌を振り上げて、とどめを刺そうとした。

全員「！！？」
ミリア「だめ…やめて…っ！！」

カイト「やめろ…！！」

チート「我が学園と主を侮辱する者は…」

どくん…どくん…！！

カイト「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！」

どごおおおぉぉぉぉぉぉっ！！！！

それは、予想外の出来事だった。
まともに動ける状態でないはずのカイトが、ダッシャーを庇うために殴ったのだ。
チート・ザ・ハードの右の頬を、思いっきり。

チート「んごぉっ…！！？」

どさぁっ、ずざざざーーーーー、どがーん！！

結果、吹っ飛ばされて地面をスライドし、壁に激突した。

ダッシャー「…カイト…？」
カイト「はぁ…はぁ……」

カイトは意識を無理矢理保っている様子で、今にも倒れそうだ。一旦状況がおさまったと判断した仲間達が、カイトとミリア、そしてダッシャーの手当てをしようと駆け寄った。

ネプテューヌ「カイトっ、ミリアっ、大丈夫！？」
ネプギア「しっかりしてください！」

ミリア「っ…ありがとう……それより…っ」
ダッシャー「……」

カイトとミリアはダッシャーの方を見た。ダッシャーは横に倒れたままで、危険な状態だ。

春香「ひどい怪我…早く手当てしなきゃ！ナース・ザ・ハードさんを呼ぼう！」
千早「でも、カイトはチート・ザ・ハードを殴り飛ばして邪魔しちゃったのよ?その要請に答えてくれる可どうか…」
「心配はいりません」
ネプテューヌ「！いーすん…？」

そこに、イストワールが救急箱を持ってカイト達の前に現れた。どうしてか考える暇なしに、イストワールはダッシャーに箱から取り出したある小さな薬をそっと飲ませてあげた。

イストワール「ダッシャーさん、貴方にエリクサーを使っておきます。しばらくすればすぐに元の状態に戻れますから、安心してください」
ネプギア「いーすんさん、何を…？」
イストワール「話は後でします。これより、ダッシャーさんを本拠地へワープさせます。先程、居場所を突き止めたばかりですので、間違いはありません。そして、ネプテューヌさん達は一旦学園から遠く離れた浜辺にワープしてもらいます。詳しい話は、私がそこに到着してからしますので、先にワープする皆さんはゆっくり治療等をしていてください」

そう言った後、箱から別として入れていたテレポストーンを2つかざした。

すると、カイト達とダッシャーの足元に白い魔法陣が出現した。

カイト「イストワール……」

イストワール「複雑な気持ちのままでは、貴方達は満足に語り合えないでしょう……お互いのために、決着は後ほどにしてくださいね」

ぱあぁぁぁー……

魔法陣から光が発した後、カイト達は全員その場からいなくなった。

イストワールはそれを確認した後、安堵した表情になった。

チート「…貴方まで、何のおつもりですか…」

その時、壁から起き上がって復帰したチート・ザ・ハードが、イストワールを睨んで怖い声で話しかけてきた。

イストワール「お気持ちは察しますが、ネプテューヌさん達を追いかけるのはやめてあげてください。この戦いは、決して邪魔してはいけないものですから」

チート「プライドですか…？今はそんなものにこだわる必要などないのに……イストワール、貴方も命令違反として罰を受けてもらいますよ」

怒りがおさまらないチート・ザ・ハードは、鎌を迷いなくイストワールに向けた。

イストワール「チート・ザ・ハード…貴方にはまだわかりませんか？これは、誰が一番悪いとか一番正しいとか、そういう問題なんかではないのです。ダッシャーさんが伝えたかったこと…ようやく、私はわかりました」

チート「…何だというのですか？」
イストワール「その答えを言っては意味がありません。ただ…貴方は無敗を永く守ってきた、学園最強の座にふさわしい強さを持っていますが…はっきりとした欠点があります。貴方は、それを受け入れずにいる…」
チート「！！！」

欠点のことを言ったイストワールに、チートは鎌を振り上げた。

イストワール「この革命の真意、はっきりと教えてくださいましたね……ダッシャーさん…」

そして、鎌が動く。

続く

４４話「総長襲撃」（後書き）

予定では、このあたりでヴァーラさんがリクエストした部分を書くつもりでしたが、次かその次に書くことにします。

４５話「反省なくして進歩なし」（前書き）

ダッシャー１回戦後の、カイト達の様子です。
今回はイストワールのターンばかりです。

ちなみに今回、真王さんの許可をもらってあることを書いてます。

45話「反省なくして進歩なし」

あらすじ

学園の守備についていたカイト達の前に、革命組織総長ダッシャーが単独で襲撃して来た。カイトとミリアは、ダッシャーを説得しようと言葉を多く投げかけるが、ダッシャーが革命を起こした理由…反省をしない体勢と信念が許せないことを聞いて二人は揺らぐ。結局説得は失敗したが、その戦いの直後にチート・ザ・ハードが不意打ちを仕掛けてダッシャーを一撃で死にかけへと追い詰めてしまう。そのやり方こそが学園の本性だと非難するダッシャーにとどめを刺す直前、カイトの庇う一撃がチート・ザ・ハードを殴り飛ばすことで、最悪の事態は阻止された。その後、このままでは満足に語り合えないと判断したイストワールは、ダッシャーを治療して本拠地に送り届け、カイト達もまた学園から離れた浜辺へワープさせられる。彼女の真意は何なのか？

……

17：55

浜辺

カイト「ってて！（消毒液を塗られる）」

かがみ「こら、動かないの！あんた達はただでさえ無茶しやすいんだから、もっと力抜きなさいよね」

ミリア「ごめんね、迷惑かけちゃってるね…」

ネプギア「いえ、そんなことないですよ（包帯巻く）」

ネプテューヌ「迷惑なんかじゃないよ。ほらほら、笑っていいんだ

よ」

カイトとミリアは、先程の戦いで傷付いているので治療を受けている。決着つかずで終わったが、ダッシャーはすでに完治していてもカイトとミリアはまだなのだ。チート・ザ・ハードの乱入もあったが、ひとまず両方落ちついたことだろう。

春香「それにしても、イストワールさんはどうしてあの人も助けたんだろう…？」

シルフィ「お互いに満足に語れないって言ってましたね。どういう意図なのでしょう？」

圭一「…俺は、何となくわかる気がする」

かがみ「え？」

圭一の答えに疑問ができて、彼の話に耳を傾ける。

圭一「３人共、お互いを心配しながらも気持ちを伝えるために全力で戦った。つまり、これはカイトとミリア、ダッシャーだけの大事な戦いなんだ。けど、それはチート・ザ・ハードによって邪魔されてしまった。不快な思いもしちまって…あのままでは、どっちも満足できる終わり方は出来なかったんだ。だから、イストワールさんは仕切り直しができるようにしてくれたんじゃないか？」

千早「大事な戦いのために…？」

レナ「きっと、３人に気遣ってくれたんだと思うよ。さっき言ったことも、そう考えれば納得がいくんじゃないかな、かな？」

春香「…気遣い…」

圭一に続いて、レナの意見も聞いてふと考えてみる。確かに、あのまま戦いを続けていたら、場合によっては悲しい終わり方もありえただろう。

レナ「イストワールさんも、カイト君達とダッシャー君の戦いの後にあるものが何なのか、見守っていたいんだってレナは思うよ」
圭一「あぁ、きっとそうさ。それによ、カイトも決着を望んでたからチート・ザ・ハードを許せずぶん殴ったんだろ？例え、相手が絶対最強だって言われてる奴であっても…な」

圭一の信頼に満ちる目線に、カイトは照れ臭くなって微笑する。

カイト「父さんと母さんからずっとそう教えられてたけど、実際にチート能力者に対して逆らうってなると…はっきり言って圭一とレナに出会ってなかったら、全然できなかったと思う。圭一達と出会えたから、不屈になろうと頑張れるようになった…みたいな感じかな」
レナ「それでも、カイト君もミリアちゃんも本当に頑張って強くなったって思うよ。たくさん努力して、経験して…少しずつ自信もついてきてるのかもしれないね」
カイト「へへ、そうだといいな」
ミリア「ボク達はまだまだだって思ってるけど…そう見えるのなら、実感も持てて嬉しいよ」
こなた「ふーん…４人共、結構信頼関係が深いんだね」
かがみ「確かに、長く付き合ってきたって雰囲気もあるしね」

こなた達は、カイト達４人の会話から絆が深いことに感心を持ってそう言った。

カイト「そうだな。俺にとっても、今の俺がいるのは二人のおかげでもあるからさ…」

初めて圭一とレナに出会った頃から旅立つ頃までのことを思いだす

ように、カイトはそう言った。

「ふふ…本当に、少しずつ成長してますね」
ネプテューヌ「ねぷっ！？いーすんいつの間にいたの？」
イストワール「ついさっき、ここにワープしてきたばかりです。何だかいい話をされてましたから、少し何も言わずに聞いてました」
ネプギア「気付かなかった…」

そこにひっそりとイストワールが現れて、姉妹はびっくりした。

イストワール「ところで、ネプテューヌさんとネプギアさんにお願いがあります。もうすぐ銀時さん達主力部隊が、ここに集合して本格的に作戦を開始します。集合場所の案内を頼みたいんですけど、いいですか？」
ネプギア「はい、わかりました」
ネプテューヌ「いいよー。どこに行けばいいの？」
イストワール「向こうにある展望台に立っていて、銀時さん達が来たら呼びかけてここに案内してください。そんなに時間はかからないと思います」
ネプテューヌ「おっけー、じゃあ行って来るね！」

ネプ姉妹はそう遠くない距離の先にある展望台へ向かい始めた。

カイト「…イストワール、今回はあんたまで巻き込んでしまったな。ごめん…」
イストワール「いえ、気にしないでください。今回は、私も貴方達のことを心配してましたから、ほとんど自分から好きにしたようなものです」
ミリア「もしかして、会話も聞いてたんですか？」

目をつむって頷き、目を開いて話を始めた。

イストワール「革命組織の総長ダッシャー・ガルネイバル……彼の表情は、過去に何かを体験したかのような暗いものでした。そしてカイトさんとミリアさんと武器を交えた際にかけた言葉の数々…私は、彼の真意が見えたような気がします」

千早「それは何ですか？」

イストワール「反省という言葉から考えると…『悪い部分から目をそむけてるように受け取った』…それが、今回の革命の要因である可能性が高いでしょう」

春香「悪い部分から目をそむける…ですか？」

イストワール「はい。まず…ダッシャーさんが言った『超次元学園反乱の過去』……これは、3年前までに本当にあった出来事です。実を言うと、その頃は私達もまだ入学していなかったんです」

カイト「いつ入学したんだ？」

イストワール「2年前になります。メインクラスの人達に限定して話しましょう。当時、私やネプテューヌさんとネプギアさんが学園へ最初にはいり、それに続いてラステイション、ルウィー、リーンボックス、次に銀時さん達歌舞伎街の人達、次元政府下の組織となる管理局からなのはさん達…この流れの後からも、レオンさん達やビビさん達、マリオさん達…そうして半月程でたくさん入学しました」

ミリア「2年前に…」

イストワール「理事長は話してませんが、3年前までの学園環境はあまりいいものではなかったそうです。というのも、今の理事長が語る平和な学園生活ではなく、エリート学園のような環境とほぼ同じだったからです」

カイト「え!?エリート学園みたいだったっていうのか!?…信じられねえよ…今はこんなにいい学園なのに、まさか…」

一番驚愕したのはカイトだった。他の仲間達も驚いている様子だが、イストワールはそのまま続ける。

イストワール「今の9割程の生徒達は全くしなくなってますが、浮気…修羅場…殺人…歪んだ一夫多婦と多夫一婦…強姦…いじめ…窃盗…虐待…脅迫…寝取り……当時はこういった悪行が日常茶飯事で起きる程と聞きました。また、立場や権力問題も生徒内で絡んでいて、いろいろと大変だったといいます」

カイト「……そう、だったのか…」

イストワール「理事長のように、楽しい生活を語る人がまだ一握りしかいなかったのもあって、反乱鎮圧の時も平和的な解決は愚か、理想的な正義すらも語ることはできなかったそうです。理想が実現できず、絶望して悲憤した理事長は、腐ってると見た生徒達を問答無用で退学処分、悪行をした者には2度と社会に復帰できないように厳罰を与えました。これによって残った生徒はわずか30名…ある意味、学園崩壊の危機に自ら陥ったのです…」

圭一「まじかよ…!?」

千早「…無理もないわね…他に方法を探ったのかもしれないけど、それすらも叶わなくてそうするしかなかった……そういうことですね?」

イストワール「えぇ…私もそう思います」

イストワールから告げられた恐るべき過去…カイト達は驚き、その過去の重さに自分達も痛感している。イストワール本人も、暗い表情になっていた。

イストワール「もちろん、過去の傷と悪影響は今でもまだ残っています。ダッシャーさん達革命組織は、恐らくその悪い部分を多く見過ぎたために、今回の革命の対象にしたのでしょう。そう受け取られた原因は、超次元学園の力づくで物事を多く解決し、力こそが正

義と見られる振る舞いを無意識にしてきたことへの償いが足りなかったこと……辛いですが、これは受け入れるべき事実だと思います。きっと…理事長もそれを自覚してるはずです」

顔を上げて、元の真剣な表情で話すイストワール。

ミリア「…だから、ダッシャー君はあんなに学園を憎んでたんだ…」

カイト「じゃあ、これは俺達のせいでもあるな……この事実を知らずに綺麗事を語ってたんだ。ダッシャーが怒らないわけがない…」

イストワール「そうかもしれません……ですが、だからといって自分を責めないでください。貴方達若者は、そんなに悪いことなんてしていません」

カイト「けど…！」

イストワール「カイトさん、ミリアさん…貴方達は、両方を見つめようとしてるじゃないですか。それが私からの答えです」

カイト・ミリア「え？」

二人は疑問の表情を浮かべ、それを解いてあげるように微笑んで話す。

イストワール「貴方達は常に受け入れるべきことを受け入れ、そして次の行動につなげていく…いい所も悪い所も両方含めて、その上で気持ちや意見を語り、行動しています。ダッシャーさんもただ、不器用ですがそれをちゃんとしてほしいということを、必死で伝えたかったのではないでしょうか？」

カイト「…あいつ…」

イストワール「誰だって、いい所ばかり…または悪い所ばかり見てしまう時があります。超次元学園側はいい所ばかり見つめていたために何かを怠り、そして革命組織は悪い所ばかり見つめていて視野が狭くなっている…どちらにも傾きすぎてはいけないもの。長所と

短所は常に一緒であって、バランスでもあるのです」
かがみ「バランス…？」

人には誰だっていい部分も悪い部分もある。だが問題はその捉え方や向き合い方なのだと、イストワールは伝えている。それは、彼女自身のモットーでもある。

イストワール「この革命を平和的に終結させるには、お互いが今言った心構えを身につけて行動することです。カイトさん、ミリアさん、貴方達は今のそのあり方をダッシャーさんに伝え返してあげてください。そして、貴方達も忘れないでください。いい部分ばかり見ていたら過ちを犯してしまう…悪い部分ばかり見えてしまったら、その対象を…時には自分を嫌いになってしまうから…」
ミリア「イストワールさん…」

カイト達はその言葉を聞き、少し考える。そして、まずカイトが顔をまっすぐにして答えた。

カイト「…わかった。俺も、いい所も悪い所も見て受け入れて、そして語って行動する今のやり方をしっかり続けていくって誓う。きっと、父さんも母さんもそれを望んでるから」
ミリア「うん、ボクもカイト君と同じように誓うよ。そして、ダッシャー君にもその心を思い出させたい…それが終わったら、また笑い合いたいよ」
こなた「そだね～。これも私達だけじゃなくて皆の課題でもあるしね。もちろん、私も努力するよ」
かがみ「あら、珍しくまともじゃない？」
こなた「私だってそういう時ぐらいあるよ、かがみん」
かがみ「ふふっ…ちゃんと覚悟してなさいよ？私がしっかりあんたのことを見ていてあげるんだからね」

こなた「かがみこそ、暴走しちゃだめだよ。かがみんの凶暴さを監視するの、結構大変だから」
かがみ「……一発殴っていいか？（怒）」
こなた「わー、かがみんが怒ったー☆かがみん凶暴～」
かがみ「凶暴言うなこの悪狐がっ！！」

二人の笑えるやり取りを見て、カイト達はついつい面白くて笑ってしまう。

圭一「ははははっ、まあ俺達にはこうして仲間がたくさんいるんだから、真剣になりすぎずに済むだろうさ」
レナ「はうっ、皆がいるから安心だよ♪」
千早「そうね。何事も適度にしていくのがちょうどいいのよ」
春香「私もそう思うよ。そうやって受け入れ合って、どんどん仲良しになるんだもの」
シルフィ「そうして仲間は増えていく…いい言葉ですね」

カイト達には、すでに暗さなどなかった。今あるのは、明るさと次への意志なのだ。

イストワール「ふふっ…皆さんなら、きっと大丈夫でしょう。ネプテューヌさんもネプギアさんもいることですし、私は信じて見守りましょう」

イストワールもまた、笑顔でそう言った。
そして彼女は思いだす。さっきまでのカイト達と同じように、どうして自分はこんなに悪い人間になってたのかと悩むネプテューヌ、人助けで一度失敗して自分の無力さを嘆くネプギアが悪い部分ばかり見ていた時期を。その時、イストワールはちゃんといい部分もあること、そして二人は決して駄目な子なんかではないと励ましてあ

げた。いい所も悪い所もひっくるめて自分を愛し、他人を大切にすること…それが、プラネテューヌの女神2人への教育なのだ。また、その教育を通じて今のネプテューヌが一番大切にできる人物は、きっとネプギアなんだとも思っている。それはネプギアにとっても同じ。そう思えるのは、イストワールが二人のことを見てきた過程の中で目にしてきたからだ。

ネプテューヌが、ネプギアが、今まで何度も『いつまでもずっと一緒にいよう』と言いあってきた二人の絆を。

圭一「よし！カイト、これからどうするんだ？俺達はついていくぜ」

圭一が立ち上がり、やる気満々でカイトに聞く。

カイト「ワープする時に一緒に送られた地図によると、相当距離があるからな…今からそのままダッシャー達がいる本拠地へ向かう。時間もかかるから、早めに出発しておこうぜ」

かがみ「いいわ、早く革命を終わらせて楽しちゃいましょ！」

ミリア「うんっ！」

イストワール「わかりました。では、あと1つお願いがあるのですが、ネプテューヌさんとネプギアさんを銀時さん達のチームに異動させてもらっていいでしょうか？」

こなた「どして？」

イストワール「間もなく来る運命粛清軍を相手に、主力部隊にはネプテューヌさんとネプギアさんの力が必要になると理事長が判断されたんです。それに何より…カイトさんとミリアさんのことをよく知ってるネプテューヌさんとネプギアさんを、あえて主力部隊においておくと何か役に立つことがあるかもしれないそうです」

カイト「そっか。わかった、二人がそれでいいならそうしてくれ」

シルフィ「どうかお気をつけてください。ご武運を、お祈りしていますわ」

イストワール「はい、皆さんも無事に笑顔で帰って来てくださいね。理事長も、貴方達の帰りを待っています」
ミリア「はいっ、頑張って来ます！」
カイト「それじゃ、傷も治ったことだし…出発だ！」
圭一達「おーっ！」

治療もすでに終わり、元気よくその場を出発したカイト達。イストワールは右手を振って見送り、そして祈りを上げた。

イストワール（カイトさん達に、たくさんの人々からの加護があらんことを……どうか、彼らを見守ってください）

離れていくカイト達は、途中まで同じである道を歩きながらネプ姉妹に手を振って事情を伝え、姉妹はカイト達に頑張ってとエールをかけて笑顔で見送った。

カイト達の戦いは、決戦へと進む…

４５話「反省なくして進歩なし」（後書き）

ネプ姉妹はここで離脱しますが、カイト達はそのまま革命組織へ向かいます。
こちら側は最終局面に入ります。

え？さり気にネプ姉妹愛を押してるぞおいって？
はて、なんのことやらｗ

４６話「邪魔者の末路」（前書き）

ヴァーラさんからリクエストを受けた、デニーの仲間・部下との戦いです。
最も、決戦前なので長引きません。

46話「邪魔者の末路」

あらすじ
イストワールによって決着つかずで最悪の形になりかけた戦いを、一応元の形に戻された。その後イストワールの話を聞いた後、カイト達は大切なことを改めて認識し、作戦の都合でネプ姉妹と別れてそのままダッシャー達がいる本拠地へ歩き出した…

……

２０：００

カイト達が今歩いてる場所は荒野。
今この場にいるのは、カイト、ミリア、圭一、レナ、こなた、かがみ、シルフィのみ。７人はマントで体を隠し、やや強い風で巻き起こる砂煙から身を守りながら、今は会話することなく歩いている。やるべきことはただ１つ。怒りと憎しみに駆られてしまっているダッシャーを救うため、彼との決着をつけるのみ。ただ、彼の元へ行くことのみを考え、意志と気持ちをそのままに歩き続ける。

その途中、ふと妙な気配を感じる。誰かがここに来てるのだ。革命組織の人間でもロボットでもない。カイト達にとって、嫌な気配でしかない。
間違いない…全員がこう思った。

ごおぉぉぉぉぉぉっ！！！！

そして、カイト達全員を何かの力が包んだ。そして、カイト達の前に５人の男達が現れた。

「待っていたぞ、カイト・ネイラード」
カイト「……」
「我が名はベルフェクティオス・スネーカー」
「俺はマスターケイオス。お前達を探していた」
「デストロイアと申す」
「カオスだ」
「初めまして、ラグーシス・マルドゥークだ」

5人の男達が名乗り、カイトは思う。この空間は彼らの内誰かが作り出したものだ。
そして全員デニーの仲間あるいは部下だ。

ケイオス「デニーとヴァーラガルザから頼まれてな。お前達はここで死んでもらう。カイト以外…な」
ラグーシス「無駄な抵抗はしない方が楽だよ。この荒野全体は、すでに自分とスネーカーが支配したんでね」
スネーカー「カイト…ミリア…お前達には何やら不思議な力があるらしいが、我らの前では何の役にも立つまい。お前達ごときでは、何もできん」

カイト達は、空間や力が自分達を包んでる証としてピリピリする空気を感じている。精神にも何かの威圧が来るような、変な感覚。

カオス「我らの能力は、貴様達学園の人間共でも雑魚となる…」
デストロイア「悪いが、ここまでだぞ」
ケイオス「くくく…そろそろ言ってみたらどうだ？怖いとな…」

次々と脅すように声をかけてくる男達。圧倒的な実力が目の前にある。チートの中のチート能力者達を前にして、カイト達は……

たったったったっ…

カオス「…ん？」

気にせず5人を通り過ぎた。何も言わず、ただ歩くだけだ。

ラグーシス「…どこに行くんだい？この荒野は支配したと言ったはずだけど？」

たったったったっ…

デストロイア「…聞いてるのか？」

たったったったっ…

スネーカー「……怖くて勝てないから、相手にしないという考えか？無駄だ…逃げられはしない」

たったったったっ…

いくら声をかけられても、カイト達は相手にしない。

ケイオス「…俺達を無視するとはいい度胸だな。だが…」

ひゅん！（カイトの目の前にワープして、鎌を出して振り上げる）

ケイオス「俺達から逃げられるなんて思わないことだ。さあ、神の前でどこまであがける…」

どごおぉぉっ！！（殴打）

ケイオス「ぶっ！！？」

４人「！？」

無視するカイト達にちょっかいを出して無視できないようにしてやろうと考え、ケイオスは攻撃をした。

しかし、その前にカイトが右手で思いっきりケイオスの顔面をぶん殴ったのだ。しかも、顔にめり込むほどの力で殴られたため、ケイオスはふらつく。他の４人は、それを見てとても驚いた。

ケイオス「っ…！？（何だ？攻撃を受けた…？馬鹿な、俺には反転魔法陣が全体にかかっている上に、師匠以上に強度もあるはず…いかにチート殺しであっても、スキルレベル最大である俺の前では意味などない……なのに、何だ今のは…！？）」

カイト「邪魔だよ。威張るなら他所でやりな」

対して、拳を放したカイトはそう言いながら興味ないという顔で歩き続ける。

カオス「き、貴様！！」

カイト達のそっけない態度に段々いらつき、今度はカオスがカイトに襲いかかる。

がしっ（掴む）どざっ！！（自分の目の前の地面にたたきつける）

カオス「うおっ！！？」

どげしぃっ！！！どげしぃっ！！！（思いっきり胸と顔面を踏んづ

ける）

カオス「ぶぐぅぅっ！！？」

カイト「邪魔だってば。俺達は忙しいんだ」

掴んで投げられ、倒れたところをわざと思いっきり踏みつけられたカオス。その時、あばら骨が何本か折れた痛みが走る。

こなた「最近、迷惑な人が増えたもんだねぇ」

かがみ「ほっときなさい。ああいう奴らは、どこにでもいる構ってちゃんなのよ。いい大人のくせして恥ずかしいったらありゃしないわ」

ぶちっ！（怒りの沸点突破）

スネーカー「貴様らあぁぁぁっ！！！我らを愚弄するのか！！！」

ラグーシス「ちょっとマナーがなってないんじゃないかい？餓鬼共おおぉぉぉぉぉぉ！！！」

かがみの態度と言葉に、まずスネーカーとラグーシスがキレた。二人はカイト達の目の前に立ち、全力を出した。

ごおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！

二人は己の能力全てを全開し、質量、物理、環境、細胞も全てを支配する。これによって、自分達の思い通りに相手の精神も完全に捻じ曲げることができ、永久洗脳も可能だと思っている。

こなた「うわ、なんか勝手にキレちゃってるよ？何このおっさん達～」

千早「無視しましょう。相手する必要なんかないわ」
ミリア「同感だね」

だが、これでもカイト達は平然と無視するのだ。これだけ能力を解放しても、怖がるあるいは精神崩壊するどころか、全く変化なしに相手をしない感じで会話をしてるのだ。

スネーカー「ば、馬鹿な!?空間はちゃんと展開してるのに、全然恐怖してないだと!!!?」
ラグーシス「何故だ!?カイトとミリアはともかく、餓鬼共にはチート能力など一切ないはずなのに!?」

二人はありえない展開に焦り始めた。今まで、カイト達のように全く恐怖せず錯乱すらしない相手を見るのは生涯で誰一人として見たことがないのだから、焦らない方がおかしい。もっと惜しんでいる力を残さず出しつくせばと考える二人だが…

カイト「だから…」

どすうぅぅっ!!!

スネーカー・ラグーシス「がっ…!!?」
カイト「邪魔だって言ってるだろうが」

その前に、カイトが両手にある2本のバスタードソードが、二人の体を貫いた。貫通するように深く刺した後、剣から両手を離して歩くことを続ける。

カイト「…そういえば、理事長からこう頼まれていたな。絶対な空間で相手を恐怖に陥れる存在2名は、人間どころか生き物ですらな

いって話で、亡霊同然だって。しかも永遠に説得し続けても改心する見込みがない程、多くの人々や世界を滅ぼしてきた者達の2人でもある。本来なら人殺しはしたくないんだけど…これ以上たくさんの人達が犠牲にされるのはもっと嫌だから…」

半分しか開けてない目を、しっかりと目を見開いてカイトはこう言った。

カイト「せめて、力と心と魂と共に消してやれって…言われたんだった」

ぼおおぉぉぉぉぉぉぉっ！！！

カイトの言葉と共に、蒼い炎が二人から発火して飲み込み始めた。

スネーカー「！！？な、何だこれは！？ち、力が抜けて…か、感覚が失われていく…！？」

ラグーシス「そ、そんな…不老不死なのに、完全に滅びるだとぉぉぉぉ！！？」

スネーカー「ありえない…！！死を滅びを糧としている故に、我を滅ぼすことはできないはず……なのに、その死と滅びに…我が飲まれるなど…！？」

ラグーシス「い、嫌だ…こんな最期なんて……神である我らが、こんなクソ餓鬼ごときに…こんな、無様な滅び方をするなんて…嫌だあああああぁぁぁぁぁぁぁ……！！！！！」

スネーカー「…た、助けてくれ…！！このままでは、このままでは…！！」

カイト「……無理だよ。今突き刺した剣に、『永遠に改心しない殺戮者を心も魂も力もまとめて消す』って念じたんだから。最も…お前らに殺された人達の魂が、完全にそうなるように誘導したっぽい

けどな」
スネーカー「…こ、この……餓鬼があぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…！！！」

今、スネーカーとラグーシスは殺戮と破壊を繰り返したことで知らずに集めていた死者達の魂達に、カイトの剣に念じられたものへと誘導されて炎に飲まれ、完全にこの物語から消滅した。

ミリア「…これが、殺すってことなんだよね…」
カイト「あぁ…こんなに重いのって、他には絶対にねえよ」

振り向くことなく、カイト達はまた歩き出す。

カオス「何…だと…！？」
デストロイア「あっけなく、滅びただと…！？」
圭一「それはそうと、おっさん達の脚を見てみなよ」
レナ「何か刺さってるんじゃないかな、かな」
カオス・デストロイア「！？」

圭一とレナの言葉の真意を知りたくて脚を見ると、二人の両足に５本ずつナイフが刺さっていた。

シルフィ「そのナイフにも、同じものを念じました。さて…判決は…」

ぼおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！（発火）

カオス「ぐぬあああああああぁぁぁぁぁぁ！！？」
デストロイア「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁ！！？」
シルフィ「…有罪でしたか。貴方達に殺されたたくさんの人達の心

…そして貴方達を知る現在の人々は、相当厳しいみたいですわ」
カオス「な、何故…ぐぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！力が、力が消えていくううううう！！？」

カオスとデストロイアは蒼い炎に飲まれ始め、宿る能力を食べつくして容赦なく焼いていく。

デストロイア「おのれえええええええええっ！！！俺の信念の絶対破壊を舐めるなあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

滅ぼされる前に滅ぼせば助かると考えたデストロイアは、フルパワー解放してカイト達を道連れにしようと拳を振り上げる。ターゲットは、シルフィだ。しかし、彼女はよけようとはしない。

デストロイア「幕引きの一撃（デウス・エクス・マキナ）ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

どごおおおおおおおおっ！！！！！！

黒く染まった右拳はシルフィの背中に命中した。この拳は『その拳に触れたものが誕生して一秒でも時間を経ていたものならば、物質・非物質を問わず、例え概念であろうともあらゆるものの歴史に強制的に幕を引く（破壊する）』こと。どのような敵であれ、防御が不可能な文字通りの一撃必殺の力なのだ。これで、シルフィは過去や未来も含めて全て滅ぼし尽くされて存在しない者になる。
……そう、デストロイアはそう思っていた。

シルフィ「…ちょっと背中がかゆい気がしたような…虫に刺されたのでしょうか？」
デストロイア「なっ！！！？？」

だが、現実はシルフィには何も起きず、さらに炎によって攻撃力までも奪われて傷や衝撃を与えることすらできなかったのだ。

カイト「気にするなよ。ただのこけおどしさ」
カオス・デストロイア「ぐが…があああああああぁぁぁぁぁぁ……！！！！」

反撃むなしく、カオスとデストロイアも先に滅びた二人の跡を追いかけるのだった。

カイト「シルフィ、ご協力ありがとな」
シルフィ「いえ、ナイフ投げくらい軽いものですわ」

ナイフはシルフィが気付かれないように投げていた。これが原因だった。

ケイオス「ど、どういうことだ…！？まさか、こうも簡単に４人もやられるなどと…！？」

だっ！！（突撃）

予想外の出来事に唖然としているケイオスの周りに、マントを広げたカイト達が囲んで飛びかかっていた。

カイト「構ってほしいんだろ？だったら…（別のバスタードソード装備済み）」
圭一「ありったけの挨拶をプレゼントしてやるぜ！！」
ケイオス「！！？（お、落ち着け！！俺には最強の反転魔法陣が…！！）」

こなた「奥義・月華双斬破！！！（月を描くように薙ぎ、払いの2連斬で月光エネルギーを宿した斬撃を浴びせる）」
かがみ「朱雀雷神槍！！！（朱雀の形作る雷をまとい、急降下突きをお見舞いする超高火力の奥義）」
シルフィ「レインボーサイクロン！！！（炎、氷、雷の混合魔力を竜巻にして刻み付ける風魔法）」
千早「必殺・鳶嘴！！！（全てを貫く神速の矢を撃つ）」
春香「乱れ雪月花！！！（聖剣伝説レジェンドオブマナ式の3連奥義）」
圭一「バスターホオおおおおおおおおムラン！！！（全身全霊のフルスイングで、全てを吹っ飛ばす）」
レナ「一刀両断だよっ、だよっ！！！（斬鉄剣のごとき斬れ味を引き出す一閃と、衝撃波を放つ）」
ミリア「修羅風神破ぁぁぁぁっ！！！！」
カイト「次元爆裂波ぁぁぁぁぁぁ！！！！！（次元衝で剣の気を巨大化させ、そのまま気功の波動をたたきこむ気功爆裂波の昇華奥義）」

どばばばばばばばばばばばばばぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！！！！！！

ケイオス「ぎにゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？？？」

ケイオスの作戦もまた、カイト達の前で実現されることはなかった。
ケイオスの体にはチート能力やチート殺しでも問答無用で全ての攻撃と威力を跳ね返す反転魔法陣がまとわりついていたのに、それが発動せずに何の役にも立たなかったのだ。結果として、全員の必殺技が直撃して戦闘不能に追い込んだ。

ぼおおぉぉぉぉっ！！！！

そして、ケイオスにも蒼い炎が発火した。

ケイオス「ば、馬鹿なぁぁ！！？この俺まで、この有様だと！！？認めん…こんなの認めん！！ましして、エリート学園の頃でも俺に勝てる要素などなかった餓鬼共にいぃぃぃぃ！！？」

カイト「…お前のことは覚えてるぜ。エリート学園にいた頃、わずか3カ月で卒業した超優等生であるお前の存在を、俺とミリアは通り過ぎるのをきっかけに知った。当時、俺とミリアが束になっても勝てるわけがないって思ったよ。けどな…」

後ろ向きのカイトが、ようやくケイオスをはっきりと正面から見た。

カイト「俺達だって、いつまでも弱いままでいたくねえんだよ」

ケイオス「き、貴様ぁぁぁ…！！」

カイト「そう…一度エリート学園を滅ぼしたあの怒りなんかじゃなくて、純粋な気持ちで強くなりたいんだ。二度と繰り返さないって、まだ自身持って言えねえけどさ…俺はこれからも、皆を守る意志をいつまでも持ち続ける努力は惜しまない。ずっとずっと、強くなり続けて見せる」

まっすぐで純真な目で、焦り怒り狂うケイオスにはっきりと言った。

ケイオス「純粋な…だとぉぉ…！！」

カイト「…決着はついた。先を急ごう」

カイト達はケイオスをその場に残したまま、目的地へ向かって再び歩き出した。

何故、圧倒的な能力と才能を持っていたのに、カイト達に勝てなかったのか？
しかも、怒りのカイトでなく、純粋なるカイトに。
ケイオスには、いくら考えても理解不能だった。

ケイオス「おのれぇぇぇ……！！このままでは、終わらんぞ…！！！すぐに本体直々に、貴様達を絶望に突き落としてやるぞ…！！そして、カイトは俺の道具として手に入れて…」

ぞくぅぅっ！！！

ケイオス「！！？何だ、今の感覚は…！？…まさか、本体にまでこの炎の効果が少しずつ及び始めて…！！？……くそおおぉぉぉぉ！！！！俺をどこまでもこけにしやがって…許さんぞカイト・ネイラードおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！！」

負け犬にされたケイオスの叫びは、空にむなしく響き渡った。

今のカイト達の眼中に、ケイオス達は入っていないのだ。
今眼中にあるのは、ダッシャーとの決着のみ。

もはや、カイト達の決戦に横槍を入れることは、愚行でしかなくなっていた。

46話「邪魔者の末路」（後書き）

詳細
今回カイトとミリアが5人に与えた蒼い炎について

心の加護の一種で、これによる攻撃を受けると『二人が念じた心』の通りの効果を付加した炎が発火するもの。ただし、これだけでは効果は本格的に発揮せず、念じたものに関係する条件がそろって初めて真価を見せる。
今回念じたものは『永遠に改心しない殺戮者を心も魂も力もまとめて消す』で、次元を超えるものだろうが神様だろうが、世界中の人々の心が殺戮だと認識する行いをしてきた者は、心も力も魂も過去未来含めて完全に消し去る効果がある。条件の1つとして、ケイオス達は自分達の欲望のためにたくさんの世界と人々を犠牲にしえきたことを殺戮者の要因とみなし、消し去る対象として認識した。これによって、彼らはことごとく滅ぼされたということになります。
つまり、自分達の行いが災いしたとも言えるかもしれません。

また、カイトとミリアの心の加護によって、シルフィが滅ぼされることなどなく、空間の影響や圧力も全て無効にしてました。

ちょうど、カイト達は決意の心を燃やしてますので、加護もいつも以上に強いものへと変化してます。

以上。

47話「新しい日常のために」（前書き）

カイトとミリアの革命決戦前夜です。

47話「新しい日常のために」

あらすじ
ダッシャーの本拠地へ向かうカイト達の前に、デニーの仲間・部下であるマスターケイオス、デストロイア、カオス、ラグーシス、スネーカーが立ちはだかった。しかし、カイト達の心はいつも以上に強い状態であったために、5人の恐るべきチート能力が全て歯が立たず、逆にカイトとミリアの心の加護によって自分達が殺めてきた業が災いとなって滅ぼされるに至った。
そして本拠地まであと少しの所まで来て、決戦前の短い休息の時間を過ごすのだった…

……

1：00

荒野を越えて、広い岩山地帯へ入ったカイト達。
さらにその地帯を歩いていると、ついにダッシャーの本拠地である大きな基地が見える高い位置に到着した。結構高めの位置にあるその基地は、木と鉄の柵で回りの壁を作り、その内側は割と軍事基地らしい建物や物が少しだが視界に入った。それは岩山の1山全体を利用して作られたかのごとく、とても大きかった。カイト達は翌朝、あの基地へと突入することにして、コテージを用意してその場で休息を取ることにしたのだ。
そして現在、仲間達が全員寝入ってから20分後のこと、カイトとミリアが基地を座って眺めている。

ミリア「また、ここまで来ちゃったね」
カイト「あぁ…こうして革命組織本拠地を眺めるのは、3度目にな

るな…」

かつて、両親と共にあの革命組織の基地を訪れて、そこでダッシャーと出会って知り合った。次の旅立ちまでの一時期の間、カイト達はダッシャー達といろんなことを語り合い、何度か人々を救う戦いを乗り越えてきた。基地を見ていると、あの頃の思い出が蘇ってくる。

そして、今は革命とそれに絡む騒乱を終わらせるために、カイト達は再びここまで来た。もうすぐ、決戦が始まるのだ。

カイト「…あいつ、今どんな気持ちでいるんだろうか…」

ミリア「わからないね…過去に何かあって、それを思いつめてそうだけど…」

カイト「結局、ダッシャーから聞き出さなきゃ、全然わからねえよな」

今のダッシャーはどうしているのか、二人は今でも気になる。

ミリア「初めてボク達がダッシャー君と出会った頃は、とても明るくて自信に溢れてる振る舞いだったよね。部下からも皆に信頼されて、団結してて…優しかった」

カイト「俺も、あいつとはいろいろ語り合ったよ。戦いに参加した時も、俺とダッシャーが背中合わせで会話して、背中を預けて突撃してたっけな。ダッシャーもノリノリだったし」

ミリア「そうそう、ほとんどの戦いでカイト君とダッシャー君が活躍してばっかりで、敵側からも恐れられてたのも覚えてるよ。ほんと、意気もぴったりだった」

二人はダッシャーとの思い出話を語り合う。ダッシャーといろんなことを話したり戦ったり…とてもすぐに語りつくせるものではない。

だが、今はお互いに敵同士…そしてどちらも引けない状況にある。

カイト「あの頃と変わってない…俺達が知ってるダッシャーだった。今でもあいつは、苦しむ人々のために無茶をしてでも革命を起こして来た。自分達が悪党って言われても、そんなことよりも大事なものがあるって堂々として…」

ミリア「うん…まっすぐで居続けるあの心は、ボク達にとっても真似していたいくらいにすごいよね」

カイト「あいつの心を初めて実感した時は、俺達の他にも似たような意志を持ってる人がいるんだって思って、何だか嬉しい気もしたよ」

それでも、カイトとミリアにとってダッシャーは仲間。敵同士であってもその気持ちを捨てない二人だからこそ、思えるものがある。

カイト「複雑な気分だよな。あいつもきっと、そんな感じなのかもしれない」

ミリア「そうだね……でも、ボクは思うんだ。ダッシャー君も、ダッシャー君なりに学園のことを心配してるのかもしれない。まだ変わってくれる可能性があるって感じたから、あえて自分達から刺激を与えたんだって」

カイト「あいつなりに？」

詳しく聞いてみるカイトと、基地を見ながら答えるミリア。

ミリア「人って、ちょっとした刺激を受けないとわからないこと、気がつかないこと、覚えにくいことってよくあるでしょ？考え方次第では、今回の革命には何らかの価値があるって考えるのも悪くない気がするの。確かに、人々にも迷惑をかけたことは悪い…なんせ自分達も日常を揺るがしたからね。でも、もし革命を起こして来な

かったら、学園の皆は気付かないままだったかもしれない。きっとボク達も…」

カイト「刺激……」

ミリア「不器用でちょっと荒っぽいけど、根は優しい…長く付き合えば付き合う程、本当の形というものも見えてくる。誰だって、きっとそういうものだよ」

自分の気持ちを正直に語るミリアの微笑んでいる表情は、とても純粋で美しく見える。カイトは、そんなミリアにも惹かれているのだ。

カイト「成程な…考えてみれば、戦いだって内容や真意次第では未来のためにもなりえる。今回のような革命って、間違いを本気で教えて直させることそのものだもんな。そして戦いは必ずしも、一方的なものになるとも限らない」

ミリア「そう、戦いはある意味自分達にも悪い所がないか確かめる機会にもなる。だから…」

ミリアがカイトに顔を向け、笑顔で決意を示した。

ミリア「ボクはダッシャー君と戦う。戦ってダッシャー君の間違いも気付かせてあげることが、ボク達なりの最善なんだって思うよ」

カイト「そうだな。あいつは俺達に自分を見つめ直す機会を与えてくれたんだ。次は、俺達があいつと同じことをしてやる番。俺も、ダッシャーと戦うことを躊躇わない。むしろ望む所さ」

カイトもミリアと向き合い、同じ決意を示した。二人共、ダッシャーが仲間であるからこそ本気で戦うことが大事だと思っている。もはや、二人に迷いはない。

カイト「全部終わったら、またダッシャーと笑い合って仲良くしよ

うぜ。今度は、学園の皆とも一緒にな」
ミリア「うんっ、そのためにも頑張らなきゃ」

二人はその後のことを笑顔で話す。もしダッシャーを卑下して拒もうとするなら、自分達が身を張ってでもわからせるという気持ちもある。だが、そんな修羅場はきっと起こらないと信じている。二人に新しくできた仲間達は、仲間と言うことを大事にする人達ばかりだから。

その時、ミリアがもう一言言いたいことがあるのか、頬をちょっと赤くしてカイトの体に寄りかかってきた。

ミリア「あと、今回の戦いが終わったら…お互いにご褒美ってことで、カイト君と激しくエッチしたいな…ｖ」
カイト「！」

ミリアも人故に欲望はあって当たり前。いつものことながら、そんなミリアもカイトは好きなのだ。

カイト「ははははっ…ミリアったら、ほんと甘えたがりだよな。でも、俺もそうしようかなってちょっと思ったりして」
ミリア「ふふふっ、カイト君もエッチだね♪」
カイト「お前もな♪たっぷり可愛がってやるから、その分思いっきり戦うぞ！」
ミリア「うんっ、頑張ろうね！」

そうして、会話をしたい分した二人は立ち上がり、コテージに戻って睡眠を取るのだった。

翌朝、カイト達の戦いも、そして主力部隊として出撃した銀時達や

マリオ達の戦いも決戦となる。
それぞれのドラマの行方は、自分達が道を切り開くだろう。

カイトとミリアにとっても、新しい日常を見出すために負けられない。
二人の決意は、再び試される…

47話「新しい日常のために」（後書き）

他の二方に遅れる形になりましたが、こちら側も次の3話前後で決着をつけることにします。

ダッシャーとの戦いで何を語るのか…

48話「力への意志」（前書き）

カイトとミリアが、ついにダッシャー達と再び対峙します。
が、その前に今回はヴァーラガルザさんと戦います。

48話「力への意志」

翌日　9：00

いよいよ、カイト達はダッシャー達ブレイベルの本拠地へ到着した。
ここの奥に、ダッシャーが待ち構えている。カイトとミリアは決着のため、そして仲間達はバックアップのために突入を開始する。

……

基地入り口

「…カイト殿とミリア殿ですね？」
「貴方達が来るのをお待ちしておりました」
カイト・ミリア「？」

門番の兵士2人がカイト達が来たことを確認すると、こんなことを言ってきた。

「総長からの伝言です。昨晩中断された戦いの決着をつけるため、通行の許可をする。訓練場で待つ…」
「総長は貴方達と決着をつけたいとおっしゃったので、我々は貴方達を迎え入れます」
千早「決着のために…？」
シルフィ「意外ですね…てっきり、私達は超次元学園の者だから撃退する気でいるのかと…」
「カイト殿とミリア殿は、かつて共に戦ってくれた同士…今も敵対しているとはいえ、信じたい者達でもあるのです」
カイト「…そうか」

「訓練場までご案内します。他の皆様も、どうぞこちらへ」

兵士達から真意を聞き、言葉を受け入れて基地へと入って行った。

……

「カイトさん！ミリアさん！」

その途中、ある人物がカイト達を呼びとめた。金髪のツインテールで、両肩を露出した黒色のベストとハーフパンツの来ていて、同じく黒色のグローブと靴を付けた１０歳程の少女が声の主だった。

ミリア「！メレイちゃん？」

こなた「あれ、知り合い？」

カイト「メレイ・ガルネイバル。ダッシャーの妹で、革命組織小部隊の一隊長だよ」

かがみ「こんなに幼いのに隊長って…すごい妹なのね」

カイトの簡単な説明に、仲間たちは少し驚いた。メレイは悲しげな表情で、二人に話しかける。

メレイ「お兄ちゃんから聞いたよ？敵対しちゃったんだって…」

カイト「……あぁ、その通りだ」

メレイ「……私、怖いよ…お兄ちゃんと二人が、もう二度と会わなくなりそうで…」

今までこらえていたのか、メレイは涙を流し始めた。この妹は、カイトとミリアのことも心配でたまらないのだろう。絶縁してしまうんじゃないかと、不安で体が震えている。ミリアは、それを和らげてあげようと微笑んでメレイの頭を撫でてあげた。

ミリア「大丈夫だよ。ボク達は絶縁なんかしない…少しダッシャー君と戦いで真剣に語り合うだけだから。これが終わったら、また元通りになるから…泣かないで？」
カイト「俺達の絆はそこまでやわじゃないさ。だから、俺達を…ダッシャーを信じて見ていてくれ」
メレイ「ひぐっ……うん…」

メレイは泣きながらも頷いた。それを確認した後、カイト達は再び足を進める。メレイも、カイト達の後をついていく。

……

訓練場

そこは、壁に囲まれているが天井のない場所だった。地面は岩山の大地のままで、広さも超次元学園の運動場より少し狭いくらいだが十分だ。

「総長、カイト殿とミリア殿をお連れして来ました」

カイト達の目の前、フィールドの中央にダッシャーが背を向けた状態で空を見上げていた。

ダッシャー「…来たか」
カイト「あぁ、決着をつけるために来たぜ」
ミリア「…空を見ていたの？」
ダッシャー「まあな…昨晩のことを振り返るついでに、空を見てぼーっとしてた」

ダッシャーは空を見つめたまま、話を続ける。

ダッシャー「…今まで、俺達は力と権力と欲望に溺れてる外道を倒す革命を何度も起こし続けてきた。カイトとミリアも、それに一時期協力してくれた仲間。その俺達が、とうとうこういう形で決戦を迎えたか…」

カイト「……決意は、変わらないか？」

ダッシャー「愚問だぜ。俺はこの革命をやめるわけにはいかない…1年前、お前達がエリート学園に何も知らずに入学した頃に、ガレノス王国が引き起こした惨劇を連鎖させないために」

ミリア「？ガレノス王国って、確かクイーンズブレイドっていう国をかけた女王決定戦のための仕組みがあるっていう…」

カイトとミリアは聞いたことがあるようだ。

ダッシャー「…1年前、ヴァンス家の女戦士と前女王との決戦があり、女戦士が勝利したことであの王国は変わった。権力の問題が多く引き起こしてきたクイーンズブレイドは廃止され、新女王女戦士は正義と平和のために数々の善を尽くした。しかし…平和な秩序が形になり始めると、その本性が現れた。新女王は力に固着していたために、自分の意に逆らう者は力でねじ伏せる帝国を生み出してしまった。結果、クイーンズブレイド廃止前よりも世界は荒み、逆に力を軸にした新しい秩序の鎖ができただけ……その果て、力に溺れすぎて破滅を招き、ガレノス王国は跡形なく滅び去った…」

この話を聞いて、やはり過去のことが関係してダッシャーは革命を起こしたんだと確信した。経験はしてなくても、この歴史が事実として存在していたことが重大な衝撃を与えた。それを見て以来、ダッシャーは他の国や組織を見直すようになり、ほとんどが共通していたと判断したのだ。後は、先を見据えてどうすべきなのかを考え

るだけ。

ダッシャー「…見えてしまったのさ。力に固着していながら正義を語る野郎共が、まだまだたくさんいたってことにさ…こうして、腐っていくんだなって…理解したんだ」

カイト「…だから、お前は超次元学園にも牙を向けたのか…」

ミリア「でも、まだ超次元学園は腐ったって証明するようなことは一度もしてないよ?なのに、どうして革命を起こす必要が…」

ダッシャー「行動はしてなくても、思想がそうなりつつあった。つまり…腐敗の始まりってわけだ。今ここで革命を起こさなければ、手遅れになる。だから俺は、超次元学園を倒す…」

ダッシャーがカイト達の方に向いた。

ダッシャー「…そのためには、お前達二人も越えなければいけない。辛いのは俺もだが…譲れない」

ミリア「……そう…決意は固いみたいだね」

カイトとミリアは、フィールドに足を踏み入れて武器を出す。

カイト「皆、昨晩と同じように手を出さないでくれよ」

圭一「あぁ…カイト、ミリア…絶対に勝てよ」

レナ「二人とも、頑張って!」

こなた「頼んだよ2人共。かっこよく勝利を決めてね!」

かがみ「しっかり戦いなさいよ?負けたら招致しないんだから!」

シルフィ「最後は、頼みましたよ」

千早「私達も、しっかり見届けるわ」

春香「無茶はしないでね?」

ミリア「うん…ありがとう、皆」

カイトとミリアは仲間の応援を聞き、頑張って来ると返して歩きだす。

メレイ「…お兄ちゃん…」

メレイもまた、3人の戦いを見守るのみだ。

ダッシャー「…お前達も、覚悟は出来てるようだな。ならば今更、決意を聞く必要もねえな」

カイト「ダッシャー、お前の今回の革命はここまでにしてもらう。俺は学園の皆や人々の日常のために、お前を倒す」

ミリア「そして、ダッシャー君達のためにも…絶対に負けない」

カイトとミリア…ダッシャーが向かい合い、戦意をあらわにし始めた。互いに武器を構え、決戦に入ろうする。

ダッシャー「じゃ…決着をつけようぜ」

カイト「あぁ…」

この戦いで全てを決める。そして今、戦いの火蓋が切って落とされ…

「そうはいかないんだな、これが」

全員「!!?」

…ようとする直前、右の空から何者かが訓練場に降り立った。

「悪いが、決着はお預けのままにしてもらうぜ」

カイト「…また邪魔者かよ…何者だ?」

「俺はヴァーラガルザ、傭兵団の親玉だ。デニー達から依頼されてな。俺達側の要求を蹴った革命組織ブレイベルを滅ぼせっつーこと

で、お前らにはここで死んでもらう」
ダッシャー「よく言うぜ。本当は俺達も謀殺するつもりだったんだろ?下心丸出しな組織となんか、手を組むわけねえだろ」
ヴァーラガルザ「下心ねえ…それは、お前ら革命組織も同じじゃないのかい?」

ヴァーラガルザと名乗った男は、カイトとダッシャーを見ながら横に数歩歩く。

ヴァーラガルザ「どんなに綺麗事や理想を語ろうが、結局力がねえ奴にその資格なんかないのさ。力こそが正義…それが世の常じゃん?」
ダッシャー「…久しぶりにお前のようなゲスを見たぜ。力があれば、何やっても許されるし正しいとでもいうのか?」
ヴァーラガルザ「まあそういうことさ。歴史だって強者と勝者が築き上げて来たもの。弱者はこの世界に不要として捨てられる…お前ら革命組織も超次元学園も、力がなけりゃ何も語れない弱者同然。そこのカイトとミリアには不思議な力があるらしいが、それがなけりゃ雑魚…どいつもこいつも、力で語ってるってことは認めた方がいいぜ」

そう自分の考えを言葉にした後、2つの斧を両手に持って戦う構えを見せる。

ヴァーラガルザ「まあそんなことはいいとして…こっちも時間が惜しいんでな?すぐにちゃちゃっと終わらせてもらうぜ」
カイト「……」
ダッシャー「全く…何を言うかと思ったらそれか。もう聞き飽きた…金のために人を平気で殺す傭兵なんかに、全てわかってる気になられてもな……俺達からすれば、自分達が上だって威張る奴らにも

見えるぜ」
ヴァーラガルザ「言ってな?とにかく、俺はマスターケイオス達とは全然違うぜ?俺とタイマン張れるのは、真王だけだからな!」

ごおおおぉぉぉぉぉぉぉっ!!!

圭一「うおっ!!?」
こなた「ちょっ、飛ばされる飛ばされる!」
兵士達「うわあああぁぁぁぁっ!!?」

ヴァーラガルザがはなったオーラは、周りにいる者達を吹き飛ばしてしまう程の強風を発生させる。それは、言葉の通り昨日のチート能力者達とは別格である。
しかし、カイト達3人はそれでも動じずに彼を見ていた。

ミリア「…言ったね?理事長しか自分と戦えないって、自身持って言えるんだね?」
ダッシャー「ふぅ…カイト、あいつは邪魔だ。さっさと全員で追っ払おうぜ」
カイト「…いや、そこまで人数は必要ない。俺一人でやるよ」

カイトがたった1人でヴァーラガルザの前に立つ。バスタードソードを抜き、仁王立ちする。

ヴァーラガルザ「プライドかい?成程、それもありっちゃありだな。けど…判断ミスったぜお前!!」

だっ!!!

先に突撃して来たのはヴァーラガルザ。彼は2本の斧を振り上げて

攻撃を仕掛ける。

ヴァーラガルザ「この一撃を受け止められるか!!帝王の斧!!!」

ずどごあぁぁぁぁっ!!!!

ヴァーラガルザの攻撃が音を大きく立てた。フィールドには大きくひびが入っていき、軽い一撃なのに凄まじい威力であることを示した。間違いなく、ただ者ではないと誰もが思う。

しかし…

びきびきびき…ばりぃぃん!!

ヴァーラガルザ「ん!?」

2つの斧の刃が砕けた。

カイト「理事長しか倒せない程に自分は強い…そう言い続けて来たんだよな?なら、俺はこう返すよ」

どごぉぉっ!!!(獅子戦吼)

ヴァーラガルザ「ぐぼはぁぁっ!!?(馬鹿な、俺が最強じゃない奴から一撃を受けた!?無傷で済むはずなのに!?しかも見切れなかっただと!!?)」

カイト「…それがてめえの強さの限界だ」

ばしゅうぅっ!!!(アッパーカット)

ヴァーラガルザ「ぐはぁっ！！！」

攻撃の直後、刹那のごとくカイトはヴァーラガルザに獅子の闘気をたたきこみ、怯んだ隙に斬り上げてふっとばした。カイトはすかさずエアダッシュで突撃する。

ヴァーラガルザ「くそっ！！」

ヴァーラガルザは体勢を立て直し、右手に魔剣らしき巨大な剣を召喚してカイトの斬撃のラッシュに対抗する。

ずがががががががっ！！！！！

彼は最強最悪の傭兵とうたわれてきた男。いかにカイトが危険な存在だという噂を聞いても、その気になれば覚醒か何かをする前に力ごとたたきつぶせば問題ないとこの時までは思っていた。だが、今もカイトに押されていて考えを変えざるを得なくなった。

ヴァーラガルザ「お前…！！それだけの実力を持っていながら、やれ正義だの人のためだの綺麗事ばかりほざく甘ったれ学園の方につくのは何故だ！？力こそが正義だろ！！？」

カイト「力？力こそ正義…？…それがどうした？全てがそうだっていう証拠はどこにあるってんだよ」

ずばっ、どばばばばばばばっ！！！

ヴァーラガルザ「がはぁぁぁぁっ！！！」

カイト「力の考え方は１つじゃない。俺は、あの学園で改めてわかった！大切なのは力なんかじゃねえ！！」

ラッシュの末、カイトが競り勝ってヴァーラガルザに攻撃をどんどんたたきこむ。

カイト「力があるかないか…強いか弱いか…それだけで全てを決めつけるな！！！てめえは、何もわかってねえ！！！」

どごぉぉぉっ！！！（鳩尾を殴る）

カイト「大切なのは力との向き合い方、使い方、考え方…そして、力とは何なのか常に考え続けるその気持ちだろうがっ！！！！」

ずどしゅおおおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！

全力でアッパーカットを放ち、ヴァーラガルザを空高く吹っ飛ばした。だが、それでもカイトはまだ攻撃しようと攻めて来た。

ヴァーラガルザ「ぐっ…このっ、何も知らねえ青クソ餓鬼がああぁぁぁぁぁぁ！！！！俺をなめるなあああぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

対して、このまま何も出来ずにやられることが嫌であるヴァーラガルザは、右手に全能力の全てを込めて金色の光を集める。

ヴァーラガルザ「これが、絶対の壁だあああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

どごおおおぉぉぉぉぉぉっ！！！！

全身全霊の拳はカイトによけられることなくクリーンヒット。カイトの鳩尾に拳がめり込み、カイトも流石に耐えきれずに口から血を

漏らす。

勝った…これでカイトにある特殊な力とやらも全て根こそぎ滅ぼし、そして一撃必殺の威力の前に倒れると思った。

どごぉぉぉっ！！！！

ヴァーラガルザ「ぐふぅぅっ！！？」

だが、それは全て判断の間違いに終わった。カイトから気といった力が消滅することなどなく、ただダメージが少ししか入らなかったのだ。そして、顔面に鉄拳が入る。

カイト「お前らデニー達全員に、この一言を送る！！帰ったらちゃんと伝えろ！！！」

剣に気が集中。それは蒼く綺麗で大きな光の刃となる。

カイト「『力』を、なめてんじゃねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！」

ずどばあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！

ヴァーラガルザ「うごあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？」

両手で持ってフルスイングしたカイトの一撃をもろに受け、ヴァーラガルザは捨て台詞すら許されず遠くの果てまで吹っ飛ばされて行った。彼が言った最強伝説は、新しい者によって簡単に砕かれた。最強の異名や称号、それらを一切持たないたった１人の少年によっ

て。

すたっ。

カイト「…あんただって、少しであっても力に溺れる者だろうが。俺は、そんな人になりたくなんかない…」

着地した後、カイトは治癒功を使って受けたダメージをすぐに回復。そこまで酷く受けなかったので、完全回復できた。

ミリア「カイト君…（微笑み）」

ダッシャー「…ありがとな、おかげでせいせいしたよ」

カイト「俺は邪魔されたくなかっただけさ。俺達の戦いは、俺達が終わらせる」

今、三角の点を綺麗に示すように、カイト、ミリア、ダッシャーが立っている。

この戦いにもう邪魔は入らない。あとは、カイトとミリア、ダッシャーが戦いを持って語り合うのみ。

ダッシャー「さて…改めて、決着をつけるとしようか」

3人から気が少しずつ発せられる。そして…

ミリア「全力でいくからね！！」

ダッシャー「望む所だ。俺も全力でいかせてもらうぜ！！」

カイト「勝負だ…ダッシャー！！！」

だっ！！

3人がぶつかり合いを始めた。

48話「力への意志」（後書き）

次で決戦です。
結構長くなりそう…

４９話「決着、そして次の日常へ」（前書き）

今回の長編において、カイトサイド最終回です。
いよいよダッシャーと決着をつけます。

49話「決着、そして次の日常へ」

あらすじ
カイト達は革命組織ブレイベルに到着し、ダッシャーの意向で訓練場まで迎え入れられる。ところが、決戦の前に傭兵団のリーダーにして最強最悪の男、ヴァーラガルザが乱入。しかし、彼もまた今のカイト達を止めることなど叶いはしなかった。そして、ついに超次元学園と革命組織の最後の頂上決戦が始まる…

……

訓練場の、ひびがあるフィールドで、カイトとミリア、ダッシャーが武器と攻撃をぶつけ合っている。すでにフィールドは荒れており、たまに空中戦に突入して火花を散らす。
譲れない、互いの心をぶつけ合う激戦を見守るのは、カイト達の仲間…ダッシャーの同士達と兵士、そして妹だけだ。

だだだだっ！！（ダッシュ）

カイト「雷神剣！！！」
ダッシャー「爆炎斧！！！」

がきぃぃぃぃん！！！

雷の突きと爆炎のたたきが激突。ぶつかると同時、二人の間に閃光と爆風が発生。しかし、二人は動じることなく少し鍔迫り合い、すぐに離れてカイトがダッシャーに剣劇をはなつ。

ずがががががががががっ！！

ダッシャー「ちぃ…昨晩よりも激しくなってるな！！」
カイト「あの時、俺達は負ける寸前まで追い詰められたからな！その時の借りがあるんだよ！！！」
どおぉぉぉん！！！（獅子戦吼）
獅子の闘気をはなち、ダッシャーを退かせる。ダッシャーは何とか防御を崩されずに済んだが、隙が少し出来てしまう。カウンターは不可能だ。
ミリア「そこっ！！！」
その時を狙い、ミリアが空中から気の槍を投げつけてきた。流星竜撃だ。
どがあぁぁぁぁぁんっ！！！
ダッシャー「くっ！！」
反撃は出来ないと判断したダッシャーは、紙一重でその攻撃を飛んでかわす。すぐにミリアが攻めて来たので、ダッシャーはカイトがすぐにこちらへ来ることを予測して次の攻撃に出る。
ダッシャー「旋風車！！！」
ミリア「！風輪閃！！！」
ダッシャーが斧を手に高速で回転して突撃してきたのを見て、ミリアも同じようにコマのごとく回転して対抗。

だぁぁんっ、だぁぁんっ。がきぃぃぃん！！！

２つの回転撃が何度もぶつかり、それぞれ力比べで競り勝とうと攻める。しかし、物理攻撃力の面ではミリアがダッシャーよりも不利。長く続けばミリアの体力を消耗させられると見たカイトは、ダッシャーへ目掛けて攻撃を仕掛ける。

カイト「俺を忘れてんじゃねえぞ！！突風撃！！！」
ダッシャー「忘れるわけねえだろ！！！」

どおおおぉぉぉん！！！

カイトのダッシュ突きを予測していたダッシャーは、ミリアの回転撃の体当たりをかわして相殺。自身の回転は止められたが、まだ余裕はある。

カイト「双破斬！！！」
ダッシャー「遅い！！」

どごぉっ！！（掌底）

カイト「ぐはぁっ！！？」
ダッシャー「飛んで行きな！！」

ずがあぁぁぁっ！！！

カイトにカウンターを叩き込み、ミリアへ向けて戦斧で吹っ飛ばした。

ミリア「！！」

がばっ！！

ミリアはすぐに回転を止めてカイトを受け止める。しかし、そこがダッシャーの狙いだ。

ダッシャー「まとまったな！！おりゃあぁぁっ！！！」

カイト「何！？」

ダッシャーは戦斧をブーメランのように投げつけて、カイトとミリアにぶつけると戦斧は回転を続けるままカイト達を削るように位置を止める。

ずばばばばばばばばばっ！！！

カイト「があぁぁぁっ！！？」

ミリア「きゃあぁぁっ！！」

ダッシャー「そして！！」

どがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！（両手を1つに組み握り、そのまま殴り落とす）

ダッシャー「地面に這いつくばれ！！！」

どごおぉぉぉぉぉん！！！

戦斧の自動回転撃に動きを止められたカイトとミリアを殴り落とし、地面に急落下させたダッシャー。さらに追撃をかけようと、戦斧を手に自分もエアダッシュで落下する。

ミリア「っ…くっ！！」
カイト「まだまだあぁぁぁっ！！！」
ダッシャー「大地噴出斧！！！」
ずがあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！
ダッシャーが戦斧で大地を叩くと同時、そこから巨大な岩のトゲ山が具現される。カイトとミリアは痛みを堪えてすぐにバックステップで回避し、急ブレーキした後全速力で突撃。
ミリア「修羅風神破！！！」
がすうぅぅっ！！！
ダッシャー「ぐっ！！」
全速力の突きをかわしきれず、掠り傷を受けたダッシャー。
カイト「うおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」
がきいぃぃぃんっ！！！
ダッシャー「うぐっ！！？手が、痺れ…！！？」
カイト「そこだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」
攻撃の衝撃から来る一時的な痺れを感じたダッシャーの守りは崩れ、カイトは力一杯で怒涛の連撃を叩き込む。
ずがぁぁっ、どしゅっ、ばしゅっ、どばぁぁっ、ずばぁぁッ！！！！

先程の攻撃が始まりであって、防御を弾いてから5発。そしてカイトは思いっきり振り上げて、決めの一撃を当てた。

どしゅうぅぅぅっ！！！！

ダッシャー「あがあぁぁぁぁぁぁっ！！！」

カイト「魔王七連衝っ！！！」

強力な7連撃を受け、大きく仰け反らせて距離をあける。

ずざざざざーーーっ！！

痺れに加えて大ダメージを受けたダッシャーだが、まだ闘志は消えておらず退きながらしゃがむもすぐに動けるようになる。

ダッシャー「やるな…だったら、こいつはどうだ！！！」

戦斧を思いっきり地面に握ったまま突き立てて、大地のエネルギーを戦斧に溜める。

カイト「あれは、あの奥義か！」

ミリア「でも引かない！！」

二人はダッシャーが次にしようとしてることを知っているが、それでも恐れることなく走る。接近戦目前なる頃には、ダッシャーは戦斧を地面から離して迎え撃つ。

ダッシャー「爆撃の斧の嵐、お前ら二人に越えられるか！！！」

カイト「越えてやる！！！」

がきぃぃぃん！！！
ちゅどがあぁぁぁぁぁぁぁん！！！

ミリア「くっ！！（やっぱり威力が大きすぎる！カイト君でも、これを相手に相殺し続けるのはきつい！一筋縄ではいかないか…！）」
ダッシャー「そらそらそらそらあああぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ダッシャーが攻撃を当てると、斧の刃から大地エネルギーをもって大爆発を巻き起こす。これが先程地面から溜めた目的だ。ダッシャーは再び猛烈な攻めでカイト達を襲う。

どがががががががぁぁぁぁん！！！

ミリア「きゃあぁぁッ！！くっ…このまま好きにはさせない！！！（飛翔）」
カイト「負けるかあああぁぁぁぁぁっ！！！」

ミリアは被爆するが何とか耐えて、ダッシャーの攻撃の手を止めるため一度飛翔し、カイトは全力でダッシャーと相殺合戦に挑む。爆発が乱発する攻撃の嵐を、あらゆる動作や攻撃で互角に渡り合うカイトだが、これも長引いては不利だとカイトはわかっている。だからこそ、ミリアがそれを止めるのだ。

ミリア「剛流星落破！！！！」

ずがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！

ダッシャー「がはぁぁっ！！？何だと…！！」

気の爆発を起こす流星撃の最高技が、ダッシャーに直撃した。当然、

爆撃の斧の攻撃は止められた。

カイト「当たれえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！」

どばあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！

ダッシャー「ぐはあぁぁっ！！ちっ…！！！」

次元衝で強化した剣で払い飛ばしたカイト。ダッシャーは壁に張り付けられるが、食いしばって瞬時にカイトとミリアの前に飛翔。

ダッシャー「この大地もろともぶっ飛ばしてやらあぁっ！！！」

戦斧に残されたエネルギー全てを使い、思いっきり振り下ろして叩きつけた。

ダッシャー「ガイアクラッシャぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ずどがあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！

ここに来て、訓練場の大地がほぼ全て木端微塵に吹き飛んだ。爆風と衝撃が、周りにも大きく響き渡った。

兵士達「おわあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！？」

こなた「わとととととっ！！？」

レナ「はうっ！？戦場が崩れたよ！？」

春香「と、飛ばされちゃうよーっ！！」

千早「堪えなさい春香っ！！最後までこの戦いを見届けるのよ！！」

メレイ「お兄ちゃん…！！」

圭一「負けるなカイトおぉぉぉっ、ミリアあぁぁぁぁっ！！！」

大地が崩壊していき、フィールドに大きなクレーターが出来て滅茶苦茶になっていくが、そんな状況でもカイト達3人は激しく攻撃を続けている。戦場を気にする暇などもはやない。どちらかが勝つまで攻撃は止まらないのだ。

ダッシャー「そんなものかお前らの力はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

カイト「うおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」

ミリア「やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

互いに全力で攻撃を続けて、次第に3人は傷付いてボロボロになっていく。カイトとダッシャーの上着は破けて上半身がほぼ半裸状態。ミリアも例外でなく、ワンピースやスカート、ついにはハーフパンツまであちこち破れていき、段々あられもない半裸状態になっていく。これ以上続ければ、胸や尻まで丸出しにもなりかねないが、彼女はそんなことに気を配ってはいない。

3人共、闘志が最大に高まった状態で、どこまでも相手を負かすことだけを考えて怒涛に突撃する。

激しさに激しさを重ねる激戦の末…

ずどおおおぉぉぉぉぉぉぉっ！！！

ミリア「うあぁぁぁぁぁっ！！！」

カイト「ぐおおおおおぁぁぁぁぁっ！！！？」

ダッシャー「がはあぁぁぁぁぁっ！！！」

3人は一度弾き飛ばしあい、互いに壁へ激突した。

ずさっ！（倒れる）

とうとうお互いに体力の限界が見え始めたのか、起き上がりが遅くなってしまっている。だが、必死に体を鞭うって立ち上がる。限界突破してしまうのなら、出来て激戦はあと1回。しかし、これだけぶつかり合った3人は長引かせる気はあまりない。それは、目にもはっきり出ている。

カイト「ぜえ…ぜえ……まだ、だ…！」
ミリア「はぁ…はぁ……っ…負けない…！」

二人共ダメージを受け過ぎて、体のいくつかから血を流している。カイトとダッシャーの服は上を来ていないに等しいか等しくないか、その判断が難しい程には破れすぎて、ズボンも穴が1～2つ程開いたように破けている。ミリアに至っては、もう上は青い布で模様のないブラしか身につけてない状態で、ハーフパンツも左側が下着が少しだが見えるほどに大きく破れて、ワンピースはもう形を無くしている。本来なら、この姿でモブの男達が惹かれる流れだが、今はそんなことを考えさせる暇はない。なんせ、ミリアも頭や腰、腕から血を流しているからだ。

ダッシャー「ぜぇ…ぜぇ……へへっ、ここまでやるとは…」
カイト「…ダッシャー…！」
ダッシャー「…でも、わからねえよ……あの超次元学園も、思想がすでに力で溺れはじめ、俺の予想が合っているなら……カイトとミリアの…力も真似て、権力や絶対を固めようとする可能性も高まった……お前達の、努力も無駄にされる…頑張りや善意が…水の泡になるかもしれないのに……何故…！」

ダッシャーは、ようやく苦悩の一面を見せ始めている。自分の葛藤

や心配が顔に現れ、それがダッシャーの心理をわからせる。

ミリア「……確かに、ダッシャー君の言う通り…力に溺れはじめている人達が、今…学園にいるかもしれない……もちろん、理事長もハード達も…チート能力者達も含めて……でも、ボク達は信じてる…皆が皆、自分の愚かさに気付かず考えること…自分を見つめ続けることをやめる愚か者なんかじゃないって…」

ダッシャー「…何故、信じられる…！反省を怠っていたあの、学園の人間を…！

カイト「…変われるからさ……ダッシャー…お前のおかげもあって、な…」

ダッシャー「…何…！？」

その言葉に、ダッシャーの心に衝撃が走り始める。

カイト「昔、超次元学園は…エリート学園のように、荒れて腐り果てていた……でも、今は違う…たくさんの重い出来事…温かい日常……いろんな経験を経た学園は…変わり始めている……そして、今回お前が革命を起こしてくれたおかげで…ついに力に溺れないように、努力できるようになったんだ……」

ミリア「…それに…あの学園を変えてくれた、皆がいる……理事長やハード達の闇や力にも怯えることなく、自分を変えながらまっすぐでいられる仲間達が、あの学園にはたくさん集まっている……もちろん、今でも許せないこと、酷いことがあってしまうけど…それも、少しずつなくしていってる…しかも、ダッシャー君が刺激を与えてくれたから……自分のいい所…悪い所をより意識しやすくなって、改善できるようになったんだよ…」

ダッシャー「…馬鹿な…それも、一時期の間だけで終わるに決まってる…！あの、ガレノス王国のように、同じ変貌を遂げてしまう…！」

カイト「大丈夫さ……理事長達だって、そこまで馬鹿じゃない……それに、あいつらが力に溺れてるって感じたら…俺達が改善させればいいんだ……もう、あの学園の悪い秩序は壊れてきてる……だから、その気になれば喧嘩を売ることだってできる…お前のようにな…」

今回の革命騒動でいろんなことがあったが、カイトとミリアはそれがあったことを一部で感謝しているようだった。昨晩語り合った言葉が、またこの時でも自然に表れる。

カイト「学園は、これからもそうして変わっていく…だから……俺達はその可能性を、皆を守るんだ…！」

ミリア「そして…今度は、怒りと悲しみで暴走しかけているダッシャー君の痛みを受け止めて、お返しにボク達の気持ちをありったけぶつけて、君の暴走を止める……それが、今してあげられる…ボク達の恩返し、だよ…！」

二人は純粋でまっすぐな決意の目でダッシャーを見つめ、闘志を再び燃やし始める。ダッシャーは二人を見ていて、二人の言葉の意図とそれに通じて伝えたいことが理解できるようになった気がした。

ダッシャー「……はは、ははははは……そうか…それが、お前達が学園にいる理由…か……ようやく、納得がいく答えを聞けた気がしたぜ……そうだよな…お前達がいれば…腐敗をいつまでも予防してくれるかもな……けど、このまま終わりじゃ閉まらないだろ…？」

ダッシャーも闘志をむき出しにして、戦斧を構える。

ダッシャー「終わりにしようぜ…この戦い、どっちが勝っても、未

来はきっといい方向に動いてくれる……あとは…」
ミリア「どっちの可能性が、未来に選ばれるのか…」
カイト「次の一瞬で…全て決める…！」

3人の闘志、持てる力を全てかけて、革命に決着を付ける。
数秒程、風を…飛ぶ鳥の鳴き声を聞き、気持ちをぎりぎりまで高めたままじっとする。
そして…

3人「…勝負！！！」

だっ！！（突撃）

ダッシャー「これが俺の痛みだ！！受け取れえええええええええええええええ！！！！！」
カイト「ダッシャああああああああああああああああああああああああ！！！！！」
ミリア「はあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

ずがしゃあああああああああああん！！！！！

ダッシャー「がはっ……！！！」

カイトとミリアの武器が、ダッシャーの戦斧と闘志を砕いた。

今、決着がついた。

……

メレイ「お兄ちゃん!!しっかりしてっ、お兄ちゃんっ!!」
兵士「じっとしててください!すぐに治療します!!」
サルヴェス「動くなよ!傷に触るからな!」

ダッシャーは倒れ、メレイや同士、兵士達が力を合わせてダッシャーの治療を始めた。ダッシャーは、表情が安らいでいる。

ダッシャー「…負けたぜ、カイト…ミリア……お前達、超次元学園の勝ちだ…」
カイト「ダッシャー…」

カイトとミリアは、仲間達と一緒にそのままの姿でダッシャーを見ている。

ダッシャー「お前達二人の心…信念があれば……きっと、これからも超次元学園にいい刺激を与えるだろう……お前達がいれば、安心だ……うくっ!?」
サルヴェス「ほら、じっとしてろよ!お前達は3人共、相当無茶をしたんだからな!」
ダッシャー「…へへ…苦労かけるな…」

ダッシャーは苦笑いしながらそう言う。微笑みの表情で、カイト達に話を続ける。

ダッシャー「…後は、好きにしな……俺達革命組織は、お前達超次元学園のしたいようにするといい……何、どんな罰も受け入れるさ…」
カイト「……そうか…なら、俺達から革命組織へ要求しよう」

カイトはダッシャーの気持ちを受け止め、そして彼は代表してこう

言った。

カイト「ダッシャー・ガルネイバル、及びその仲間達に告ぐ。今後、超次元学園の戦友として、俺達と同盟を結んでほしい」

メレイ「え…！？」

カイトが下した宣告に、ダッシャーや仲間達が驚く。予想外だったのだろう。

カイト「これからの超次元学園には、お前達皆の存在が欠かせなくなる。今後、もしまた超次元学園が歪み始めたと見たら、再び革命とかで刺激してほしいし、平和な日常を守るためにも力を貸してほしい。そして…」

カイトは笑顔でこう言った。

カイト「俺達の仲間達は、お前達革命組織と一緒に歩みたがっているんだ。一部の人達いわく、仲直りしたいんだってさ」

ミリア「もちろん、理事長達もね。あと、昨晩学園に入れようって過小評価してしまったことへの謝罪として…どうかな？」

ダッシャー「…お前達……」

超次元学園はダッシャー達を必要としている。それは力があるからとかそんな理由ではなく、超次元学園を正し、正しいままでいるために必要なのだと。

ダッシャーはそれを聞いて少し考えるが、答えは微笑みを持って伝えられた。

ダッシャー「…いいだろう…そこまで言うのなら、喜んで同盟を結ぶぜ。なんせ、カイトとミリアが言うんだ…」

メレイ「お兄ちゃん…」
サルヴェス「ダッシャー…」

他の同士達もまた、自然と微笑んでいった。これで、もうお互いにわだかまりはなくなった。晴れ晴れとした気分で、だいぶ治療されたダッシャーは全員に言葉をかける。

ダッシャー「ブレイベルの戦士達全員に告ぐ。俺達の傷が完治し終わり次第、超次元学園へ謝罪と同盟を正式に結びに向かう。全員、それぞれ謝罪の言葉もしっかり考えておくこと。以上！」
ブレイベルメンバー全員「了解！！」

ブレイベルの人間全員が、元気よく返事をした。これで話はまとまった。

こなた「さて、これで解決だね。あとは…ほらほらミリア、いつまでそんな破廉恥姿のままでいるの？羞恥プレイでもしたいのかね？w」
ミリア「え？…あっ！？ここ、これは違っ…！」
カイト「こらこなた！今のミリアをじろじろ見るなよ！」
かがみ「あら何？見ていいのは俺だけだーって言うのかしら？」
カイト「ちょっ…！？／／／」
ミリア「あうぅぅ…／／／」
シルフィ「くすっ、うふふ…（笑）」
圭一「ははははっ、二人共顔が赤くなってるぜ？w」
春香「ふふふっ、何だか笑いたくなっちゃう！」
千早「春香ったら…でも、同感ね…ふふっ」
レナ「ほら、同じ着替えを用意したから着替えようよ」

カイト達もカイト達で、笑顔で終われたのだった。

……

そして、夕方の6時。
カイト達はダッシャー達と共に超次元学園に帰って来た。

そこで待っていたのは、それぞれ全て決着をつけた仲間達が、そして理事長達だった。彼ら皆、温かく迎える気満々で入口にずっといてくれたのだ。
カイトは明るく元気な表情で、声高らかに叫んだ。

カイト「カイト・ネイラード及びメンバー全員、革命組織を破って任務を果たし、そしてたった今帰還しました！」

その言葉に帰ってきたのは、彼らを祝福そして絶賛する仲間達の大きな観声だった。

カイト（そう…俺達はこれからも自分を見つめながら、前へ進んでいく…何があっても、きっと正しくいられる……そうだよな？ネプテューヌ…）

カイトは、かつて自分とミリアを最初に受け入れてくれた友達へそう想ったのだった。

さあ、また新しい日常が始まる。
物語は、まだまだこれからなのだから…

49話「決着、そして次の日常へ」（後書き）

ようやく終わりました。これからまたしばらくは、リクエストだったり日常編を満喫することにしましょう。

改めて、今回の長編に協力してくださった真王さんとソラさん、そして影から敵のデータを送ってくれたヴァーラガルザさんに感謝します。ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。

オリキャラ&新キャラ紹介3（前書き）

ダッシャー、メレイ、サルヴェス、そして本家でついに登場した、カイトとミリアの両親である、グラニデのディセンダーとおとぎ少女の紹介です。

オリキャラ&新キャラ紹介3

ダッシャー・ガルネイバル　１７歳
革命組織ブレイベルの総長である少年。正義感あふれてまっすぐで、熱血で面倒見のいい性格で、カイトやミリアとも仲がいい。超次元学園への革命で二人と衝突があったが、絆が壊れることはなかった。現在は、超次元学園と同盟を結んで支援活動や魔物討伐などに励んでいる。
日常面でも、たまにボケたり突っ込みしたりいろんな一面があるが、中でも妹であるメレイには恋愛感情を抱いている上に両想いであるため、よくメレイ絡みでボケたりキャラ崩壊することが多い。また、他の妹好きを支援するために『妹を愛で守ろうクラブ』なる部を作っていて、部下や同士達一部と共にいろいろやってるとか。

バトルスタイル
戦斧

メレイ・ガルネイバル　１０歳
革命組織ブレイベル小部隊隊長の一人として活動している、ダッシャーの妹。両親がいて親離れしているのだが、たまにダッシャーと二人で贈り物を作って手紙と一緒に送ったりしている。かつてカイト達と一時期共に戦ったこともあって、カイトとミリアのことも心配していた。
性格はヴィヴィオとほぼ同じだが、変わっているのは兄ダッシャーと恋愛の意味で両想いであること。そのため、ダッシャーにのみお兄ちゃんと呼んでいる。ちなみに、たまにダッシャーとムフフすることもｗ
格闘術をたしなんでおり、組織の中でもそれが目立って信頼も得て

いる。

バトルスタイル。
格闘術

サルヴェス・モンディーア　１７歳
革命組織ブレイベルの副長で、冷静ながらも熱い性格で多くの恋愛を見守り、見届けることを主に絆や人のつながりを大事にする男。別名、愛を守護する者。総長からも信頼が厚く、誰かの恋愛が悪かったり邪魔されたり寝取り奪われたりなど、本来あるべき恋愛の美しさを汚すものに対して誰であろうと許さない心の持ち主。大地の力を主にして戦う格闘家。カイト達とは知り合いで、一度恋愛について話し込んだことがある。ただ、ダッシャー達が妹絡みでボケをする際には結構突っ込みに回っている。それでもちゃんと見守るあたり、まんざらではないようだ。

バトルスタイル
格闘術＆大地の力を借りた戦法

クルト・ヒュージ　１６歳（外見）
グラニデのディセンダーであり、異例の生まれ方と試練によって、心の加護を誕生させた少年。そして、カイトとミリアは自分とカノンノの子供である。年齢がカイト達と一緒に見えるのは、ディセンダーの特質によるものだが、詳しくは後ほど。
性格は大人になったカイトそのもので、面倒見もいい。実は、カイミリ以上にカノンノとラブラブすぎて、純愛だけどノロケ好きなた

め、ギルレーみたいなオーラが出せたりする。
実力は心によって変動するが、今はカイト達より上で、心の加護もより未知数。普通の心理状態でもチート能力大半が通じない。

「バトルスタイル」
剣（大剣や二刀流も装備できる）

カノンノ・イアハート　１６歳（外見）
グラニデを生きていた人間で、クルトに案内されて受けた試練によって、人間としての生を全うした後に転生して異質な存在へと変わったおとぎ少女。カイトとミリアの母親であり、カイトとミリアを生んだのは転生後（心の加護もその時についた）。年齢については後ほど。
性格は明るくて心優しく、誰かのために頑張ること、頭をなでなでされるが好き。また、よく夢見ることもあったり、クルトと一緒に大きな仕事もこなしたり、大人な部分をしっかり持つ少女というイメージが強い。それもあってか、夫にあたるクルトとはよくイチャイチャすることがあり、オーラも出してしまうほど。ただ、度が過ぎた行いなどによってストレスが大きくなりすぎると、怒る表現の１つとしてヤンデレになることもしばしば。ギャグでもクルト絡みなどでヤンデレになったり、お化け屋敷などの仕事で、ずば抜けた表現力とアドリブ力とヤンデレでナンバーワンをもらったり、とにかく万能に近い。
今の所、実力と心の加護についてはカイトとミリアよりも上。

「バトルスタイル」
大剣・魔法・回復

オリキャラ&新キャラ紹介3（後書き）

今後、日常編でも革命組織側のキャラを出していきたいと思っている所です。

５０話「最強の意味」（前書き）

日常編スタートとして、ソラさんリクエスト消化します。
今回は、軽くカイトとレティの話です。

50話「最強の意味」

きーんこーんかーんこーーーん！

１３：００

レティ「それそれそれ！」
カイト「おわっ！？」

革命騒動から日にちは流れる。
この日、カイトはレティ達やチルノ達と一緒に修行を運動場でしている。ちなみに、カイトはチルノともリベンジとして手合わせをしたが、結果はカイトの圧勝。
以前は迷いがあったとはいえ、未熟な面が大きかったが、今ではいろいろと鍛えられたり経験してきたおかげで、カイトもミリアもすっかり強くなっている。その二人の実力は未だ不十分な部分が残っているが、それでも大きく成長したようだ。そのため、カイトはチルノ達をも一気に越えてしまったらしい。どの道、カイトもミリアも、今後もどこまでも強くなっていくことだろう。

話を戻して、現在は師匠格であるレティと戦闘をしている。状況は、なんとカイトがやや有利といったところ。カイトが知らないうちにここまで強くなっていることに、レティは興味を持ちながらも驚いている。

カイト「よし…！（さっきまで翻弄した弾幕を全て相殺した）」
レティ「流石に一筋縄にはいかなくなったかぁ…じゃ、これでいってみますか！」

業を煮やしたレティは、あるスペルカードを出して次の攻撃に出る。

レティ「氷光『アイスフラッシュ』！！！」
カイト「！！」

きゅいいいいいいいいいいん！！！

レティは氷の鏡を作り出して、鏡から氷の閃光を放つと同時に氷の強力な弾幕を撃った。瞬時に発動するものであるため、まず逃げにくいという利点がある。
しかし、閃光がやんだ時、カイトはその場にいなかった。

レティ「え！？」
カイト「ぎりぎり回避できたぜ…」
レティ「！？」

なんと、カイトは今の攻撃をよけて真横に急接近していたのだ。

カイト「必殺っ、蒼破飛翔斬！！！」

ずばばばばばばばばぁぁぁぁぁぁん！！！！！

蒼い気を剣にまとい、強烈な一撃となる飛翔斬（アッパーカット）を放った。威力は決めの技にふさわしいほど強力で、レティでさえも一発でＫＯした。

チルノ「う、嘘ぉ！！？」
空「か、カイト君が勝っちゃった！！？」
ソロ「まじかよ！！？」
ミリア「！！やったぁっ！カイト君すごーい！」

見物していたチルノ達は驚愕し、ミリアはカイトの勝利を心から喜んだ。

マリオ「何てこった…まさかカイトがここまで強くなってるとは…」
スネーク「すごいを通り越して、恐ろしく思えてくるな…」

無理もない。入学してきた頃のカイト達は、強くはあったが数に押されるなど未熟という一言に尽きた。しかし、今はそれが嘘のように強くなっていたことに、大半が驚いている。

カイト「ふぅ…新技編み出せてよかった」
レティ「ってて…派手にやってくれたわねぇ…もう、ちょっと強くなりすぎなんじゃない？」
カイト「はは、ごめんごめん」
レティ「…でも、本当に強くなったわね。顔つきも目もだいぶよくなってるし」
カイト「そうかな。俺にとってはまだまだだと思うけど、そう言ってもらえると嬉しいな」
マリオ「無限の可能性を秘めてるからだろうな。この調子だと、カイトも勇斗達などを相手にしても戦える日が来るのは近いな」
カイト「流石にそれはまだまだ先の話だよ。それに…最強ってとこまで来てないんだし」

大半から絶賛されるカイトだが、本人は謙虚に返す。空を見上げながら、カイトは今の言葉の理由を話す。

カイト「最強ってさ、そう簡単に近づけるものなんかじゃないだろ？実力、精神、心…まだまだ、俺には足りないものがたくさんあるんだ。けど…たまにわからなくなる時もある。最強ってどんなものなのか…ほら、チルノみたいになるのが最強なのか、それとも理事

長達のような存在になることが最強なのか…」
マリオ「カイト…」
レティ「なるほどねぇ…確かに、最強って何なのかって言われると、いろんな答えが出るわね」

レティは前からずっと長く考え続けているテーマに、レティなりに最強への認識を話してみた。

レティ「私にしたら最強は困ってる人を皆助けられるって事ね…」
カイト「人を助けられること？？」
レティ「最強って言うだけじゃあただのアビリティ紹介、大事なのはその在り方ね…まあ、これは私の意見。ようするに、最強っていうのは在り方1つでいくらでも変わるって話ね」
カイト「あり方…」
レティ「だから、カイト君はカイト君の最強を見つけなさい。きっと、これから先で見つけられると思うわ」

レティは大丈夫って感じで笑顔をカイトに向けた。カイトは、明るい表情でお礼を言う。

カイト「あぁ、ありがとう。参考にするよ」
ミリア「ボクも、頑張って見つけたいなぁ」
カイト「一緒に頑張って見つけような、ミリア」
ミリア「うんっ」

二人はいつものように笑顔で話す。その光景も今ではいつものことになったが、何度見ても微笑ましく見える。

レティ「ふふっ、あの様子だしきっと大丈夫ね」
チルノ「二人共幸せそうだなぁ」

マリオ「仲良しはいいことだ」

ルイージ（兄さんがラブラブ要素に染まることって未来にあるのかな…；）

カイト達だけでなく、誰もが強くなろうと頑張っている。この競争は、学園でもとても楽しいものなのだ。今後も、いい競争が続くことを願おう。

セレナ（最強…か。私もそのために、しばらく修行した後にミリアちゃんに挑戦してみようかな？）

そして、模擬戦フラグは立った。

50話「最強の意味」（後書き）

次は何かオリジナルのギャグ話、続いて幼女誘拐かちょっとしたシリアス長編、それか次の長編の伏線のための話か…

とにかく、今度の日常編は長くなりそうです。

51話「ブレイベルの普段」（前書き）

今回は、ブレイベルの人達の様子を描いてます。
今後、ダッシャー達をいつでも出せるように設定も考えてます。

51話「ブレイベルの普段」

きーんこーんかーんこーーーん！

１０：００

超次元学園・運動場

ダッシャー「よし！全員いるな！？」

ブレイベル員全員「はっ！！」

ダッシャー「では、今後の予定を伝える！超次元学園との連携を深めるために、まず今日から一週間ここで生活することになった！そして、今後お互いが5分いらずで簡単に本拠地を行き来出来るように、ワープ装置の開発も共同で進める！イーグル、バーニン、チャクラマ、装置開発については予定通り任せたぞ！」

イーグル・バーニン・チャクラマ「はっ！」

ダッシャー「また、一般兵士達は超次元学園の授業を全般的に受けることを命じる！もちろん、お前達も訓練に参加可能だ！ここでいつもとは違う訓練を受けることで、必ず何かを得るだろう！全員心して取り組め！」

一般兵士全員「了解！！」

ダッシャー「あとは普段言っている通りだ！何事においても迷惑をかけず、ちゃんと適度を守って行動すること！恋愛にしろ性交にしろ、愛のあって負の感情がない乱交エロが、お前らは大好きだろう！？」

変態紳士兵士達「愚問であります！！修羅場は嫌いであります！！」

ダッシャー「わかってるならよし！夜に内緒で多人数乱交でエロするなり、温厚にナンパするなり好きしやがれ！ただし、強姦や脅迫、寝取り、洗脳、他人のカップルに手出しすることだけは絶対にする

な！もし愛を壊すような真似しやがったら、俺とサルヴェスが地獄にたたき落とす！！やりやがったら冗談抜きで許さねえからな！！
いいなあぁぁぁっ！！？」
男兵士達全員「はっ！！」
ダッシャー「最後に一つ！メレイは俺の嫁だぁぁぁ！！！文句あるかあぁぁぁぁぁぁっ！！？」
ブレイベル員全員「皆無！！！」
メレイ「お兄ちゃんは私の旦那様です！！！文句あるうぅぅぅぅうっ！！？」
ブレイベル員全員「皆無ったら皆無！！！」
ダッシャー「よし！！これで朝礼は以上だ！全員、有意義な時間を過ごせよ！解散！！」

ぞろぞろぞろ…（散らばる）

ミリア「んー…以前よりも気合が入ってる朝礼になったね」
カイト「変態要素も相変わらずだがな；」
ダッシャー「ははっ、毎朝これがなきゃ締まらないってな」

この日、ダッシャー達ブレイベルは超次元学園との連携強化のために、しばらく学園で生活するためにやって来た。カイト達を除く生徒達は、初めてダッシャー達の普段の姿を目にすることになった。
ダッシャーはこうして、いつも全員に気合を入れるために朝礼を行い、常に自分が間違わないように見つめさせること、あとはぶっとんだ冗談や正直な気持ちも言い、団結力を高めている。ある意味、これも理想的な朝礼でもあるのかもしれない。

銀時「てか、エロ要素を朝っぱらから堂々と朝礼で話すリーダーなんて見た事ねえぞおい！；何？これも理事長の意向を受け入れた結果ってやつなのか！？あいつの変態癖が招いた結果なのか！？」

新八「そういえば、あの人も堂々と宣言してましたよね…；」

彼はむちむち美女&サキュバス好きの変態ですからね。

ユニ「…前回あれだけシリアスかましてた大ボスが、まさかあんな変態だったなんて…しかも妹好きとか…；」

ラム「ロムちゃん、狙われないように気を付けようね；」

ロム「こくこく…（震）」

流石に、ダッシャーが変態であることを知った者のほとんどは引いてるようだ。なんせあと少し思いきって進めばノクターン行きになる程のことを言ってるんだから、慣れない内に引かれないわけがない。

カイト「…ま、こんな変態ネタもエロも今に始まったことじゃねえけどな。こないだ知ったけど、フンドシ仮面達の騒動をきっかけにＯＳＧとＫＯＳの人間全員（モブ生徒）が乱交するようになったらしいな」

ジャンヌ「あと、セレナちゃんがチンピラ達に無理矢理犯されたせいで痴女になれるようになったとか」

セレナ「！！？ちょっ、そのことは言わないで～っ！！いろんな意味で恥ずかしいからぁ！！」

ベル「いいえ…言わなきゃ貴方、またどっかでこっそり変なことされ続けて、心変わりして貴方が裏切って対峙するパターンにもなりかねないわよ？」

こなた「よくある話だよね～。強姦されて心変わって裏切ったり、または狂って後戻りできなくなったり…んでもって惨劇や修羅場が発生しちゃうと」

何を話してるのかというと、３９話でセレナが一人で買い物に行っ

てケーキカフェテリアに行った後、強姦グループのチンピラ共に脅されて無理矢理犯されてしまったのだが、その時に何かが弾けて覚醒し、とある女神状態に変身するようになってしまったのである。詳しく知りたければ本家か十六夜さんに聞くなり、『裏超次元学園へようこそ！！』の7話を参照すべし。ちなみに、俺はこのことに一切関連してないのであしからず。

セレナ「うぅぅ…もう絶対お嫁に行けないぃ……十六夜と理事長の馬鹿あぁぁ～～～～っ！！！」

メタな意味で2名に悲痛を叫ぶセレナちゃんであった。

ダッシャー「あらら…そっちでもモブ達がフリーダムにゃんにゃんしてるのか」

カイト「あぁ…この学園にも変態が多いのさ；」

苦笑いしながら、カイトはそう答えた。

もしカイトが昔のままだったら、今以上に浮気や寝取りそして乱交によって恋愛がないがしろにされることを過剰に恐れて、暴走して超次元学園で大暴れする可能性があっただろう。しかし、今はそのあたりの考え方も柔軟に進歩したのか、寝取り・浮気・無理矢理などちゃんと恋愛を大事にするなら我慢あるいは見守ることにしたのである。結局自己責任なのだから、それをはき違えなければこれがいいのだろう。

サルヴェス「全く…一気に関係を見守る幅が増えそうだ。今後、監視も忙しくなる」

ダッシャー「けどま、今までずっと不義あれば討伐してきたんだ。今回もきっと大丈夫さ。案外、ほっといてもよさそうだ」

サルヴェス「だといいが、それで恋愛がないがしろにされる悪事が

起きては困る。今後もしっかり見ていくぞ」
ダッシャー「おーけーおーけー、もちろんそのつもりさ」

まあ、何だかんだいって、ちゃんと相手の気持ちや心を大切にしてその上でやれという話である。
ただし、だからといって変な考えは起こさないように。（リアルでも）

カイト「ところで、せっかく同盟を結んだんだから、例のサークルの活動もするのか？」
ダッシャー「もちろん、この後生徒全員に宣伝するぜ」
ミリア「どんな反応が来るのやら…まあ、きっと歓迎する人は歓迎してくれるよ」
メレイ「でも、ここって案外ムチムチな女が好きって人ばっかりらしいよ？」
サルヴェス「ちょっ、おま！？どこでそんな話を聞いた！！？」
メレイ「レーティアさんから」
カイト「またあの人妻かよ…；」
かがみ「ていうか、随分積極的な妹だな；」
こなた「お兄ちゃん大好きっ娘っぽいからねぇ」

メレイ・ガルネイバル、もしかしたら恐ろしい子かもしれない。

……

体育館

休み時間を借りて、超次元学園の生徒全員を呼び出してダッシャーの演説がされることになった。ほぼ全員が何の演説なのかわからない様子で、革命の話なのか日常の話なのか超次元学園への告白なの

か、予想は様々挙げられている。

ステージの机に立つダッシャーは、時間が来て全員静まった所でマイク越しに話を始めた。

ダッシャー「今回、超次元学園の生徒全員が来てくれたことにまずは感謝する。今日お前達全員に集まってもらったのは他でもない。超次元学園と革命組織ブレイベルの同盟と連携をより一層深めるために、個人的ではあるがあるサークルのことを宣伝しようと思う」

雄大（あるサークルだと？まさか、俺達ＯＳＧの敵になる団体か？）

ネプギア（何だろう…ロボットのサークルかな？？）

ベール（もしかすると…ＢＬ愛好会とか！？）

ダッシャー「何、そんなに難しいサークルではない。早速紹介していこう。その名も…」

ごくり…

ダッシャー「妹と幼女をこよなく愛し守ってあげるサークル、『ガーディアンオブガスター』だ！！」

ダッシャーが高らかに名乗ったことによる衝撃みたいなのが、全体に広がる。

全員「…え…？？」

当然、どういうことなのかさっぱりわからない。

ダッシャー「さっき俺がメレイを俺の嫁だと公言した通り、俺は妹・

または幼女好きである。そして同時に、他の幼女や妹好きの恋愛や困り事をサポートすることも趣味としている。ただし、己の幼女好き、妹好きの欲望を制御せずに勝手する奴は対象外だ！現代、こんなに明るい世界でも妹や幼女を泣かす外道があちらこちらに存在している。そこで、俺はメレイとたくさんの妹と幼女の幸せを同士と共に守ってあげるために、約2年前にこのサークルを始めたんだ。今回は、その妹と幼女のためのサークル『ガーディアンオブガスター』の入部を勧告する。ちなみに、ガスターの意味はガールとシスターの2つの言葉をごっちゃにしたものである」

ダッシャーの堂々さに圧倒されてるような感じ（ダッシャーの意外な趣味に驚いて）黙って見ている生徒大半に向けて、ダッシャーは続ける。

ダッシャー「活動内容は簡単。妹及び幼女の幸せと魅力は何なのか、俺達妹・幼女好きは何をすべきで何をしてあげられるのかを常に互いに確認し合いながら話をし、不義事や事件があらばこれを全力で解決する。もちろんそれだけではない。妹と兄の許可を得ていることを前提に、あらゆる萌えと可愛さを追求する活動もしている。主にやることはこれだけだ。もしこの中に妹・幼女好きがいるのなら、ぜひ俺達と共に活動してみないか？ちゃんと妹や幼女の気持ちを優先して、しっかり守って幸せにしてあげられる者は、俺達は大いに歓迎しよう！」

右手でガッツの合図をして、ダッシャーはどんっと言い放った。さながら、伊達に総長をやってないということか。

ダッシャー「以上だ。新たな同士が集うこと、心から待っている！」

こうして、ダッシャーの演説というかサークルの勧告は短く終わっ

たのだった。

……

サルヴェス「全く…毎度思うが、無理にサークル作らなくてもいいだろうに…；」

カイト「とか言いながら、お前も入ってるんだよな」

サルヴェス「監視だ監視。何か変なことしないか、心配でたまらないんだ」

ミリア「くすっ、サルヴェス君らしいね」

カイト「さて、これからサークルはどうなっていくのやら…暇あったら、俺も覗きに行くとするか」

こうして、ダッシャー達と共にいる機会がいろんな意味で増えたのであった。

今後も、2つの団体が仲良くしていけることを、カイト達は願うことだろう。

ちなみに、ダッシャーへの評価については本家や他の皆様に任せる方針なのであしからず。

51話「ブレイベルの普段」（後書き）

ダッシャーは元々、ボケキャラに設定してました。
あと1人、オリキャラでダッシャーと組んでボケる奴も考えてます。
後ほど、紹介しましょう。

52話「何も残らない失踪」（前書き）

本家リクエストより、2話構成のシリアス話です。
ある少女と出会い、学園に迎え入れるが…

52話「何も残らない失踪」

きーんこーんかーんこーーーん！

１３：２０

カイトとミリアは皆と話をするために学園のあちこちを散歩して、休憩時間を楽しく過ごしている。以前の悪霊騒動で、カイトとミリアが新しい加護を得て悪霊の主を倒したことが最近の話題にもなり、今では二人に対する信頼も大きくなって人気者になりつつあった。二人も自分達の実力がそれ程伸びてきているという実感があって、他の人から見ても嬉しそうだった。
そして今日も平和を満喫しているのだ。

そんな時だった。

カイト「ん？入口に誰かいるぞ？」
ミリア「あれは…？」

学園の入口に、緑色のドレスを着ていて、羽根つき帽子をかぶった緑髪の少女がいた。ミリアと同じ歳くらいの彼女は、パラソルを手に学校を見上げている。
気になった二人は、少女に声をかけてみた。

カイト「そこの君、こんにちは」
「あ…こんにちは」
ミリア「学校を見上げてたみたいだけど、どうかしたの？」
「うん…有名な学園があるって聞いて、ここかなーってちょっと来てみたの」

カイト「ここにか？」
「うん。何でも、個性豊かな人がたくさんいて、いろんな事件を解決してる学園があるって聞いて……超次元学園っていう名前らしいんだけど、ここ？」
カイト「あぁ、ここだよ。にしても、噂は絶えないらしいな」
ミリア「今でも有名なんだなぁ」
カイト「しかも、すごい人ばっかりだからな。インパクトも大きいんだろうさ」
ミリア「くすっ、違いないね」

そんな話をしながら、カイトとミリアは笑顔になる。一方、少女はミリアを見ていた。

「……（可愛い…それに、すごく優しそう…）」

少女はそう思った後、笑顔になってミリア達に話しかけた。

「ねえ貴方達、私と友達になろうよ！」
ミリア「え？」
「私、昔から友達がいなくて寂しくてたまらないの…だから、友達が欲しいよ」
カイト「家族はいないのか？」
「亡くなっちゃったよ…でも、友達がいれば私は大丈夫。だからお願い！」

少し寂しそうな表情で言った後、純粋に頼む少女。
まだいろいろ聞いてみたいことはあるが、カイトとミリアは少女を躊躇いなく受け入れることにした。

カイト「わかった、友達になっていいぜ」
ミリア「ボクも賛成だよ♪」
「！ありがとうっ♪」

二人が友達になると言われ、少女はとても嬉しそうにお礼を言った。

カイト「俺はカイト、こっちはミリアっていうんだ。君は？」
「タリスだよっ。よろしくね♪」
ミリア「タリスちゃんだね？こちらこそよろしく♪」
カイト「じゃあせっかくだし、皆にも紹介しようぜ」
ミリア「いいね！きっと皆も大歓迎してくれるよ」
タリス「本当！？嬉しいよ！」

……

運動場

カイトとミリアはタリスを案内し、仲間達にも紹介をすることにした。

カイト「というわけで、新しく友達になったタリスだ」
タリス「初めまして、私はタリス！私、皆と友達になりたいの。どうかよろしくね♪」

タリスは先程からご機嫌な笑顔のままで、皆に挨拶をした。

ネプテューヌ「うん、よろしくー♪」
ネプギア「またいい人が来ましたね。ここには、いい人がよく来る気がします」
銀時「いい人かどうかは別として、まあ適当によろしくな」

アイエフ「皆人が良すぎなんだから……ま、私も歓迎するけど」
百華「うむ！タリス君、よければこの後私と一緒に…」
ビビ「あ、ずるい！タリスちゃん、この人よりも私と…」
カイト「こらそこ、自重しろ」
百華・ビビ「チッ」

他の仲間達も、タリスを好意的に受け入れたようだ。お人好きが多いのも事実なのだろう。

雄大「んー…別にいいが、何か変な感じがするな」
土方「いきなり友達なぁ……なれるもんじゃねえぜ」

ただ、中にはいきなり友達になるっていう気にならない者もいるのもいるわけで。

ミリア「まあまあ、少しずつ慣れればいいと思うよ？」
雄大「少しずつねぇ…悪いが、それは難しい話だぜ」
カイン「熱意もあまりなさそうだしな」

一部の生徒達は、興味なしという感じで離れて戻って行った。

カイト「うーん…突然だったとはいえ、全員は厳しいか」
ミリア「仕方ないよ。少しずつ増えていくまで待とうよ」

二人はそう会話してる時、タリスは…

タリス「……気に入らない（ぼそっ）」

ぎろっ！（鋭い目で睨む）

百華「ん？」

突然、タリスの様子が変わったような気がした百華は、タリスを見た。しかし、タリスはカイト達と楽しく会話してるようにしか見えない。

百華「…気のせいか？」

……

その後、カイト達はタリスを迎え入れてから、仲良しな時間を過ごすようになった。

カイト達も、タリスとこうして楽しく会話している。

カイト「なるほどな…聞く限りだと、普通の貴族として生きてきたって感じだな」

ミリア「夢は何かあるの？」

タリス「うん、今はただの貴族だけど、いつか大きなお城に住んで女王様になりたいの！そして、楽しく暮らしたいなぁ」

カイト「でっかい夢だなぁ。けど、そのためにやることいっぱいあるだろ？」

タリス「まあね。両親もいなくなっちゃったし…でも、今はバイトとかもやって頑張ってるから、希望はあるよ」

ミリア「そっか、じゃあボク達も何か力になれそうなことがあったら言ってね」

タリスは、笑顔で言うミリアを見て思う。

タリス（あぁ…可愛い…それに優しい……この娘、本当に…）

……

ところが、翌日…

9：30

銀八「えー…今日は、非常に深刻な問題が発生した」

突然、深刻な話をしてきた銀八先生。

銀八「今日、一部の生徒が行方不明になった」

生徒全員「！！？」

銀八「メインクラスからは土方、カイン、イヴ、隣のクラスから雄大をはじめとするＯＳＧの男子大半、そして他所のクラスでも男子生徒や女子生徒の多くが行方不明になってしまっている。しかも…現在ハード達が捜索しているのだが、報告によれば気配も生命反応も感知されないそうだ…」

カイト「馬鹿な！？まさか…あのデニー達のような能力者に、歴史と未来含めて存在を滅殺されてしまったっていうのか！？」

銀八「それはわからん…俺も信じがたいさ、最近敵勢力が増大したとはいえ、いくら何でもそういう能力者が表にすぐにほいほい現れるとは限らないしな。ただ、ハード達が探してもなかなか見つからないってことは、お前が言った抹消か、それともどこかに閉じ込められたか…」

カイト「っ…！」

突然告げられた行方不明、しかも反応が一切ないという報告を受けて、カイトはショックで悔しそうな表情をする。

銀八「とにかく、お前らも十分気を付けるように。何か手掛かりが

見つかったら、すぐに知らせるんだぞ」

……

この日、生徒達の一部が行方不明となった。今も捜索しているが、報告の通りどこにいるのかはおろか、反応すらも見つからない有様。殺されたのかすらもわからないため、事態は深刻である。

カイトはミリアをネプテューヌ達の所に待機させ、それぞれで情報を集めることにした。カイトはもしものことに備えて、少数で調べ物を図書館でしている。夕方になっても、この情報収集はずっと続けられている。

カイト「どうだ？見つかったか？」
レオン「いや…見つからない。手掛かりどころかヒントすらもさっぱりだ」
ガレーナ「こっちもだ。困ったものだ…一体何があったというのか…」
カイト「証拠も痕跡もなし…あるのは失踪したっていう事実だけ。どうなってんだよ…」

カイトはそう言いながら、いなくなった生徒の名簿を改めて見る。メインクラスの中でいなくなった人物の、失踪前の様子や行動を思い起こそうとするが、カイトだっていつも全員を見ているわけではない。思い出そうとしても、何も手掛かりが…ないと思った。

カイト「…ん？」
レオン「どうした？」
カイト「……これ、まさか…？」

カイトはこの時気付いた。まず頭に浮んだのはタリス。次に思いだ

すのは、タリスが初めて皆に迎え入れられた時の全員それぞれの反応。名簿に載ってる失踪者は、タリスを良く思わなかった生徒。つまり、失踪者は全員タリスと友達になることを一度拒否した者。

カイト「…タリスが…やったのか…？」
ガレーナ「何？」
カイト「そういえば、昨日はタリスが初めて学園に迎えられた日で、いなくなったのは今日。もしかしたら、タリスが関係してるんじゃないのか？」
レオン「奴が？…成程、可能性がないわけじゃないな」

レオンとガレーナは、カイトが言いたいことを読んで理解する。犯人かどうかは定かではないにしても、無関係である可能性は極めて低い。その可能性に的中すれば『偶然』で済まされるが、そうでなければ何かあるはずだ。

ガレーナ「ひとまず、タリスについても絡めて調べるとしよう。カイト、我らが皆に伝えてくる。お主はタリスと話をしに行ってくれ」
カイト「わかった。それと…気をつけろよ」
レオン「あぁ、お互いにな…」

3人は話をまとめ、それぞれ行動を開始した。

……

寮・カイトとミリアの部屋

カイト「ミリア！そっちで何か見つかったか？」
ミリア「あ、カイト君。ううん、全然見つからないよ…そっちは？」
カイト「…たった今気付いたことを伝えに戻った」

ミリア「気付いたこと？」

部屋に戻ったカイトは、真剣で重い表情でミリアに告げた。

カイト「名簿を見て気付いたんだ。いなくなった人は全員、タリスと友達にならなかった人だ」

ミリア「え！？」

どういうことなのか、ミリアは即時疑問を抱く。

カイト「証拠や痕跡は全然見つかってないが、どうしても気にせずにはいられない部分があったんだ。昨日、俺達はタリスを迎え入れた。けど、一部はそれを良いと思わなかった。もちろんすぐに馴染むのは難しかっただろう。そしていなくなったのは…その翌日である今日」

ミリア「まさか…！？」

カイト「…タリスが、何かした可能性がある」

カイトははっきりとそう言った。当然、ミリアはすぐには信じられない。

ミリア「そんな！タリスちゃんが皆を消すなんて、信じられないよ！だって、タリスちゃんの瞳には悪意が感じられなかったんだし、何かを企む素振りもしてないはず！あの娘が黒幕だなんて…！」

カイト「俺もそう信じたくはない…けど、どう考えてもあいつが無関係とは…」

ミリア「だとしても、タリスちゃん自身がそう決断したとも限らない！きっと、タリスちゃんに何かがとりついている可能性も…！」

どうやら、タリスを信じる気持ちはミリアが大きいらしい。カイト

はそう思い、ミリアを安心させるように言葉をかける。

カイト「そう、その可能性だってある。だからそれを証明するために…タリスから話を聞きに行く。友達として」

背を向けて、タリスを探しに行くことを告げたカイト。ミリアは、カイトの気持ちを知って心を静める。

ミリア「…ごめん…熱くなりすぎちゃった…」

カイト「いいよ、それほどタリスを信じてるって証拠だろうさ。その気持ちも無駄にはさせない」

微笑みを見せて、カイトは部屋を出た。

タリスがこの出来事に関連している。カイトの意見を聞いたミリアは、タリスを信じることを貫いている。しかし、戸惑いが全くないわけではないのだ。

ミリア（…タリスちゃんは悪い人じゃない…でも、もし本当だったら…）

……

事態は、とんでもないことになった。

夜の9時になり、さらに行方不明者が出たのだ。今度は、信じられないことにレオンやガレーナ、他にもイシュタルやザックにブラン、更にマリオ達メンバーの大半、モブ生徒全員…多くが一斉に行方をくらましてしまった。ミリアはこの報告を聞き、酷くショックを受けてしまう。

だが、現実は更に残酷だった。

だんっ！（ドアが開く）

ダッシャー「ミリア！！」

ミリア「ダッシャー君…？どうしたの、そんなに血相変えて…？」

知らせに来たのはダッシャーだ。彼は、ひどく血相を変えて暗い表情でミリアに伝えた。

ダッシャー「…失踪…しちまった…っ！」

ミリア「え…？」

壁を拳でたたき、彼は受け入れ難い様子…震えて言う。

ダッシャー「…カイトが…いなくなった…」

ミリア「っ！！！？？」

カイトまでも失踪者となってしまった。

それは、ミリアには耐えがたい事実の突き付けだった。

ダッシャー「理事長から報告を聞いたばかりで…生命反応も、何も感じなかったらしい……他の奴ら同様、完全にどうなったのかわからねえ…！」

ミリア「そん…な…？」

ミリアはショックのあまりに立っていられなくなり、体全体と声が震える。

ミリア「…嘘だよね…？カイト君がいなくなったなんて……嘘だよね…？…だって…ボク達はずっと一緒だって…言い合ってたもん…　…いなくなったなんて…何かの、冗談だよね…？」

ダッシャー「……っ」

ダッシャーもまた、何かの冗談であってほしいと願っている。しかし、現実は容赦がない。

ミリア「…こんなのって……こんなのって……うぅ…うあぁぁ…！」

ミリアの目から涙が落ちる。たくさん流れ、ぽろぽろと落ちる。

ミリア「カイト君……カイト君…っ……あぁぁ……嫌ぁぁ…！」

『嫌あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！』

膝をつき腕を当て、ミリアは号泣した…

カイトまでもいなくなったという事実は、ミリアの強く保とうとする精神をずだずだにするのに十分すぎる程、辛いことである…

後半へ続く。

52話「何も残らない失踪」（後書き）

レオン達だけでなく、カイトまでも失踪してしまい、ちょっとした窮地に陥ってしまいました。
この失踪の真実は？そして、タリスは…？

次、意外なことが明らかになります。

53話「閉鎖の檻」（前書き）

タリス編2部です。後半と言ってましたが、またいつも以上に長くなったんで分割。次で話を本当に終わらせます。

53話「閉鎖の檻」

あらすじ
ある日、カイト達はタリスという少女と出会い、彼女を学園へと迎え入れた。ところがその翌日、生徒の一部が失踪するという事態が発生。すぐにカイト達は真相を探り始めるが、夜になると更に失踪者が増えた。その中には、カイトも含まれていた。ミリアはこのことで酷くショックを受け、号泣するのだった…

……

２２：１０
寮にて

その後も、事態は悪化していくばかり。なんと、銀時や桂、なのは達までもが失踪したという報告が入り、続くように次々と失踪者が続出。現在、残っているのはミリアやネプ姉妹、理事長達やダッシャーとメレイ、サルヴェスなど、気がつけば少数になってしまっていた。

クルト「カイトまで失踪した…だと…？」
ネプテューヌ「うん…カイトも皆を助けるために、真相を必死に探してたんだけど…」
ネプギア「学園全体を探しまわったんですが、どこにもいなくて…」

クルトとカノンノも、カイトがいなくなったことを後から知った。
ネプテューヌとネプギアは、とても辛そうな表情で現状とわかったことを全て話した。

カノンノ「…いなくなったのは、最初はタリスと友達にならなかった人達だけだったのに、今は友達になった子達もいなくなった…」
クルト「……それに並行して、敵が襲撃したという報告もなければ侵入者もいない……うん…間違いない。タリスが何かしたんだな」

クルトはカイトが失踪したことに耐えながら、冷静に何故こうなっているのかを分析する。クルトの予測では、タリスが黒幕だと言う。

ネプギア「でも、タリスさんはほとんど私達と一緒にいましたし、あの人が皆を消したなんてことは…」
カノンノ「そうかもしれない…でも、タリスが皆を何かしらの理由で消したということもあるかもしれないものだよ。その理由についても、私なりに予想してるよ」
ネプテューヌ「何？いろいろと真相がわかったの？」
カノンノ「そういうわけじゃないけど、こう考えたらいろいろ重なる部分があると思うの。それは…タリスの友達にならなかったから、友達だったのに自分を悪く見たから…だったらどうかな？」
ネプ姉妹「！？」

カノンノが話した予想に、ネプテューヌとネプギアの脳裏で何かがはっきりとした。

ネプテューヌ「そうか…！後からカイト達もタリスが何かしたんじゃないかって考えて、それで調べてたらタリスが事実をばらしたくなくて消したってことに！？」
クルト「その可能性が高いだろうな。現に、タリスへの疑いもどんどん強くなっていくにつれて、失踪者も増えてるんだ」
ネプギア「じゃあ、このままだと他の皆もいずれは…！」
クルト「二人共、ここからは俺とカノンノから離れないようにして

くれ！」
ネプテューヌ「え、大丈夫なの？私達まで消されたりしない？」
カノンノ「大丈夫だよ。事態に備えて、自分の意に沿わない移動を強制的なら一切できないようになる加護を展開するから、心配しないで」
クルト「急いで加護の構成をしたから、流石に学園全体までは無理だったけどな…状態異常防止の加護よりも高度なものだし」

二人の加護が失踪から守ると聞いて、姉妹はほっと安心する。クルトとカノンノの加護は、前回のミサイル阻止といい相当なものらしい。

クルト「まずはミリアと合流に向かう。彼女がどこにいるかわかるか？」
ネプギア「さっき、ミリアさんと話をしたばかりですから、まだいるはずです」
クルト「急ごう、何が起きるかわからない！それに、理事長達も今は捜索で外出してるが、戻った時にタリスと接触して後から消されたらとんでもない事態になってしまう！」
ネプギア「はいっ！」

こうして4人は、急いでミリアの元へ向かうことにした。

……

カイトとミリアの部屋

ミリアは、先程ダッシャーから告げられたカイト失踪のことで、ベッドに顔を埋めて両腕で隠して泣いていた。今までずっと一緒にいたカイトが、突然こんな形で離ればなれになってしまったこと、そ

して生命反応がなくなったことが、ミリアにとって受け入れ難い事実。そして、もう二度と会えないかもしれないという不安と悲しみ、寂しさミリアの心を覆い尽くしている。

ミリア「…どうして……こんな、こんな嫌なことに……っカイト君…ぅぅ…ぐすっ……嫌ぁ…こんなの、嫌ぁぁ…」

今のミリアは、普段しっかりしている自分とは思えない程に泣きじゃくっていて、自分の心にある希望も薄いものになってしまっている。弱々しく、生きる意欲もなくなってしまいそうだ。

がちゃ…

タリス「ミリアちゃん…？どうしたの？」

そこに、昨日友達になったばかりのタリスが、ミリアの元へやって来る。彼女はミリアのそばに座り、背中に手を置いて話を聞こうとした。

ミリア「…カイト君が……カイト君が、いなくなって……ぅぅ…ボク、もうどうしたらいいか…ひぐっ…！」

ミリアは見向きもせず、悲嘆にくれたままである。誰よりも大切な存在がいなくなってしまったのだ。ただで済むわけがない。

タリス「……大丈夫だよ」

そんなミリアに、タリスがそっと抱きしめて耳元で囁く。

タリス「ミリアちゃんは一人ぼっちにはならない…私がいつまでも

一緒にいるから。いなくなった人達の分、私が寂しさを埋めてあげる。大丈夫…あんな人達よりも、私が幸せにしてあげられるよ」

ミリア「…？」

この時、ミリアの中で何かが引っ掛かった。いや、耳を疑ったというべきか。ぼろぼろ出ていた涙が急に止まり、少し顔があがった。

ミリア「……今…何て言ったの…？」

震えた声で、タリスにもう一度聞いてみた。タリスは微笑みの表情で答えた。

タリス「ずっと一緒にいるって言ったんだよ。大丈夫…私がいればミリアちゃんは寂しくないよ。たった、私とミリアちゃんの2人だけになっても…ミリアちゃんは寂しくなくなるよ。私がいるんだから…」

ミリア「…たった…二人だけに、なっても……？」

タリス「そう…私達は友達だもん……だから、誰もいなくなっても、私がいれば…」

どばあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！

タリス「きゃあぁっ！？」

突然、槍の薙ぎ払いがタリスを離した。ミリアが槍を即座に風で召喚して立ち上がり、タリスを吹っ飛ばしたのだ。

タリス「み、ミリアちゃん…？」

ミリア「あんな人達が、いなくなっても…？たった2人だけになっても、寂しくない…？」

ここに来て、ようやくミリアは気付いたのだ。間違いない…タリスが何らかの方法で消したのだと。

ミリア「…タリスちゃんなんだね…？皆を…カイト君を消したのは…タリスちゃんでしょ…！？」

タリス「え…？な、何のこと？私は何も知らない…」

ミリア「嘘をつかないでっ！！！」

タリス「っ！？」

彼女の感情が、一気に怒りへと変わった。ミリアは涙がまだ少しだけ流れてることを気にせず、激怒の表情でタリスを睨んだ。

ミリア「タリスちゃんだけいればいいっていうの…？ふざけないでっ！！ボクはタリスちゃんだけ大事ってわけなんかじゃない！！カイト君も、皆も大事なんだよ！！！タリスちゃんだけいたって、ボクはすごく寂しいよ！！！皆、大切な仲間なのに…その皆を、あんな人達だなんて言わないでよっ！！！」

タリス「…な、何でそんなに怒るの…？何でそんなこと言うの？私達、友達でしょ…？」

ミリア「関係ないよっ！！！ボクは、皆を消した君を許さない！！！皆を…カイト君を返してよっ、タリス！！！！」

もはや許せない存在の証として呼び捨てにするほど、ミリアは本気で激怒してタリスに返せと迫った。タリスは、そんなミリアを前に俯いて感情を変化させていく。

タリス「…ひどい…私は、友達が欲しいだけなのに……何も、悪いことなんかしてないのに…ミリアちゃんが欲しいだけなのに……ひどい…」

そして彼女は、逆切れして鋭い目と怖い表情でミリアに怒鳴った。

タリス「もうお前なんか友達じゃない！！！お前なんかこの学校で、永遠に迷ってしまえ！！！！」

だんっ！（部屋を出てドアを思いっきり閉める）

ミリア「逃がさない！！皆を返してよっ！！！」

怒り心頭のミリアは、タリスを追いかけて部屋を出た。

……

それからしばらくして…

だんっ！（開）

ネプテューヌ「ミリア！！」

そこにネプテューヌ達４人が部屋に入って来た。しかし、すでにミリアはいない。

ネプギア「いない…？」

クルト「この感じは……くそっ、一足遅かったか！」

ネプテューヌ「どうしよう！？ミリアまでいなくなっちゃった！？」

カノンノ「…！待って、何か妙な力を感じる…ううん、さっきから学園のあちこちで変な物が存在してるような気がする…」

ネプギア「妙な力…？」

クルト「……成程…感じるものの正体は、『閉鎖の檻』……通りで

カイトまで姿を消したわけか！」

クルトは、仲間達が次々と失踪していった原因の一つが何か気付いたようだ。

ネプテューヌ「どういうこと？力ってことは、カイトとミリアの加護よりも強力なものなの？」

クルト「閉鎖の檻は、対象の人間を自分の異世界あるいは別の空間に閉じ込める力。その力の本質は拒否…デニーが自称していた完全拒否能力じゃなく、純粋な拒否だ。この拒否に目を向けられた者は、感情基準で檻に閉じ込められてしまう。ただ力でどうとでもなる能力じゃない！」

ネプギア「拒否…？ということは、皆はその能力に閉じ込められて！？」

クルト「あぁ、間違いない。しかも今回のはとても強力なものだ。今のカイトとミリアでも、これを無効にすることは出来ない。するにしても、能力の主を何とかしない限り解放されることはない！」

数滴の焦り汗を流しながら、クルトは深刻だと伝わるように言った。

ネプテューヌ「どうするの！？このままじゃ、皆が戻ってこられないよ！」

カノンノ「ちょっと強引なやり方だけど、解放の宝玉を急いで作って檻を無理矢理破壊するよ！理事長にもテレパシーを送って、応援も呼ぼう！」

クルト「檻の中で何が起きるかわからない。急いで取りかかるぞ！どの道時間はないって考えた方がいい！」

カノンノ「テレパシーを送るために二人の心から通話線を生み出すから、協力してね！」

ネプテューヌ「何でもいいよ！早く皆を助けなきゃ！」

ネプギア「うん、急ぎましょう！」

クルトとカノンノの提案に任せて、４人は皆を助けるための準備を始めた。

……

ミリア「…え…？ここは…？」

ちょうどその頃、ミリアは自分達の部屋を出たばかりだったのだが、いる場所が廊下ではなく教室に出たのだった。先程のタリスに怒り心頭だったミリアの頭が少しだけ冷えて、冷静さが出てくる。

ミリア「教室…？でも、寮にいたはずなのに……、…！？」

周りを見渡すと、窓に目を向けた時に驚くべき光景が見える。なんと、窓の先に見えるのは青空でなく紫と黒の歪んだ模様。いかにも時空間と言えるような光景だ。

ミリア「…ここ…異次元…！？」

そう考える以外に適当な要素がなかった。もちろん、タリスはどこにもいない。

ミリア「……あの子がやったの…？もしかして、どこかにカイト君や皆がいる…？」

可能性はゼロじゃない。ミリアは、それを予想してあたりを探してみることにした。しかし、教室には目立った物は見つからない。仕方ないので、教室から出ることにした。すると、出た瞬間にまた別

の場所に自分は移動していることがわかった。

ミリア「あれ…また場所が変わった…？」

今度出たのは保健室。しかし、ここも教室同様に目立ったものはなかった。

ミリア「…何がどうなってるの…？」

わけがわからず悩むが、今はそれよりもタリスを見つけること、仲間を見つけることが先。ひとまず先へ進むことにし、保健室を出ていく。すると、また別の場所に出る。

今度は調理室。しかし、ここも同じ。次はミリア達の部屋…

学園のいろんな場所に出ては移動して、それを繰り返し続けるミリアだが、いくら歩いて探しても仲間どころかタリスも見つからないまま。どこまで行けばいいのかすらわからず、疲労が溜まっていくだけで進展がない。

ミリア「…どこにもいない……誰も、いないんだ…」

そして、またミリア達の部屋に戻ってきたことで、ミリアは疲れ果てたという様子で床に座り込んでしまう。先程のショックからまだ立ち直れず、今は怒りと悲しみが作用して体が動いてるが、それでも身体と精神共にボロボロの状態だ。

ミリア「…あぁ…ボクも…閉じ込められてしまったんだ……ひとりぼっちに、なっちゃったんだ…」

怒りの勢いも失せたかのように、力なく独り言を言うミリア。カイ

トがいなくなったショックは、意志までもえぐったようだ。

ミリア「……どうして、こうなっちゃったんだろう……もう、どうにもできないのかな……カイト君…皆……」

もはや、自分には何も希望は残っていない。万事休す…そうあきらめかけた。
ところが…

ミリア「……？」

あるものがミリアの視界に入ってきた。それは、自分の目前の床に書かれている落書きらしきものだった。

ミリア「…これは…文章…？」

さっきここに来るまで全然なかったはずなのに、今ミリアの目前にある文章ははっきりと書かれている。どういうことかわからないミリアだが、自然にその文章の内容が気になって読んでみた。

『ミリア、あきらめないで！今、私達はクルトとカノンノと一緒に君達を探してるよ！それと、カイト達は皆まだ生きてるって言ってたよ！だから、あきらめないで！私もネプギアも、カイトも…いつもミリアを見守ってるからね！

ｂｙ　ネプテューヌ』

ミリア「…ネプ…ちゃん…？」

……

ネプテューヌ「よし！これでミリアが気付いてくれるかな？」
カノンノ「うん、十分だよ。永遠にループされる檻の中をさまよってるはずだから、きっと目を通してくれるよ」

その落書きは、クルトとカノンノが解放の宝玉という道具を半分完成させた所で、ネプテューヌがいろいろ考えて床に書き残したメッセージだった。解放の宝玉の力が、メッセージを檻の中にまで反映させたのだろう。

ネプギア「後は、宝玉を完成させるだけですね」
クルト「1個作り終われば、後は複製するだけで簡単に作れるようになる。そうなれば、後は理事長が大量に複製してくれれば準備完了だ」
真王「解放の宝玉か…完成させた宝玉を空間近くに囲むように配置することで、囲みの中に含まれる空間へ宝玉の存在を反映させ、後は空間の中で叩いて作動させれば空間を問答無用で破壊できる。面白い道具だな…」

そこには、応援で駆けつけてくれた理事長もいた。

クルト「宝玉さえ完成してしまえばこっちのものだ。宝玉1つ持っていれば閉鎖の檻に閉じ込められることはない」
真王「ならば、宝玉を配置しに行くにあたって、人数が固まっている必要もなさそうだ。後は俺達の仕事だな。消えた生徒がどの位置で閉じ込められたのか、データはこっちが管理している」
カノンノ「じゃあ、配置は理事長達にお任せしますね」
真王「あぁ、後のことは任せておきな」
ネプテューヌ「…あ、もう一行追加しよっと！ええと…」

またネプテューヌが、完成に向かう宝玉のそばに書き込んだ文章に、新しい文を追加した。

……

『ミリアだって立派なヒロイン。ヒロインは、最後まであきらめないものだよ！』

ミリア「…！…ネプちゃん…」

床に謎の原理で書き込まれた文章を読むミリア。その文章は、恐らく誰かによってここに現れるようにしたものだろう。その誰かについても、真っ先に浮かびあがる人物がいる。

ミリア「……そう、なんだ……お父さん…お母さん……」

ミリアの目から、涙がぽろぽろとこぼれおちる。しかし、今は涙を流している場合ではない。ミリアは涙を拭いて、ゆっくり立ち上がった。

ミリア「…そうだよ…まだ、全部終わってない…何も失ってないんだ…」

ミリアの心に勇気が宿って来る。そして、自分の中に蘇る思い出の数々。その中で、自分やカイトに教えてくれたこと、励まされたこと、たくさんの温かみが自分の疲れ切った心を癒してくれる。
そう、まだ希望はあるのだ。
たった数行の文章は、ミリアに勇気と希望を取り戻させた。

ミリア「…ネプちゃん…ギアちゃん…お父さん…お母さん……あ

りがとう…」

ついには、自分の微笑みも帰ってきた。まだ、自分は頑張れる。

ミリア「ボク…あきらめないで頑張るよ……皆を、カイト君を助けたい…そう強く願った以上、ボクの手で実行することが…最後まで貫き通すことに繋がるから…！」

前を向き直り、ミリアの表情は引き締まる。

ミリア「待っててね…ボクが必ず、助けに行くからね！」

そう独り言をはっきり言った後、ミリアは部屋を出て再び探索を始めたのだった。

果たして、その結末は？

完結編に続く。

53話「閉鎖の檻」（後書き）

ただ書くだけって感じのつもりでしたが、何だかミリアの頑張り記としてついリクエスト内容と資料を少しアレンジしちゃいました。
次はミリアを輝かせられたらいいなぁ。

５４話「真実のカギ」（前書き）

タリス編完結です。

グロ注意！！！

54話「真実のカギ」

あらすじ

失踪者が増える事態の中で、絶望するミリアにタリスは自分達だけいれば大丈夫だと言葉をかけた。その時、ミリアはタリスが全ての黒幕だと悟り、激怒してタリスに牙をむく。すると、タリスは逆切れしてミリアを閉鎖の檻という異次元に閉じ込めてしまう。それは、カイト達を閉じ込めたものの元凶だった。永遠にループする空間の中で、精神が限界になって心が折れかけたミリア。しかし、クルトとカノンノによって送られたネプテューヌのメッセージに励まされ、ミリアの心に希望が再び宿った。最後まで諦めず、自分の手で皆を助けると誓ったミリアは、再び探索を開始したのであった。果たして、彼女は仲間を助けだして閉鎖の檻から脱出できるのだろうか…真実は、道を照らす。

……

再び立ち上がって探索を続けるミリアは、現在理事長室にいた。ミリアは何度も場所を行き来しては隅々まで何か見つからないか探し続け、そして別のルートを見つけて初めて理事長室に到着したのだ。

ミリア「タリスはここにもいない…どこにいるんだろう…？」

そうぼやきながら、理事長の机に近づいて探そうとする。すると、机にはある新聞が置いてあった。

ミリア「？これは…新聞？いつのだろう…」

気になって新聞を開き、読み始めたミリア。少し読んでいると、ミ

リアは見覚えのある記事を見つけた。

ミリア「これは…アップルマンに関する事件が最後に載せられた記事…ということは、アップルマン討伐を依頼された日の新聞…？」

何故これほど以前の新聞が机に置いてあるのだろうか？恐らく、理事長が何か考えてこの新聞を読んでいたのではないかと予想するが、謎は多い。それを頭の片隅で考えながら、新聞を一通り目を通し続ける。すると、ある交通事故の記事を見つけた。

ミリア「…！これは…交通事故の記事…？でも、どうしてこんな幅を取って載せられたんだろう？」

早速その記事を読んでみた。

『お嬢様学園として有名な、聖嬢学園の近くの道路で車によるひき逃げ事故が発生した。被害者は聖嬢学園の女子生徒のタリス・フラワーヌ１６歳で、ひき逃げされて３分後に病院へ運ばれたが、１時間後に死亡が確認された。新撰組警察庁は、ひき逃げ殺人容疑で犯人を追跡し、逮捕した。容疑者はワクナという無職の女性で、最近会社と問題事を起こしたために失業し、パチンコやホストなどで遊び呆けていたと容疑者は語ったが、容疑を否認している。後日、裁判が行われる予定…』

ミリア「！！？タリス・フラワーヌって、あの子…！？」

そう、それはタリスがひき逃げされて亡くなった記事だった。つまり、昨日から自分達と一緒にいたタリスの正体は、別の学園に通っていた死人だったのだ。

生命力をなくした死人が蘇ることは普通ありえないし、チート能力

でも基本不可能に近い。だが、ミリア達はタリスを普通の人の姿でいる所を目にしている。

ミリア「まさか、何かによって蘇ったっていうの…？しかも、この空間を作るような存在に…！」

詳しいことはまだはっきりとわからない。だが、この新聞は持っていく必要があるかもしれないと判断できる。ミリアは新聞を自分の懐にしまい、他の道を探すことにした。

ミリア「真実を見せて問い詰めてみよう。そうすれば、あの子について詳しく知ることもできるはず！」

窓から出られると見たミリアは、そこから次の場所へと移動する。

……

次に出たのは体育館。窓から到着したミリアにとって、初めて訪れるフロアだ。

ミリア「体育館？まさか、こんな所まで…」

薄暗い体育館を歩き、探索をしようとすると…

「…おかしいなぁ。ミリアちゃんもあいつらと同じように閉じ込めたはずなのに、どうしてそうやって移動してるのかな」

ミリア「！」

ステージに、緑髪の少女の姿があった。正体は、一目瞭然だ。

ミリア「タリス！！」
タリス「…さっき別れた時に、私の結界をつき破っちゃったのかなぁ」

ステージから降りたタリスは、鋭い目でこちらを見ている。

タリス「不愉快だよ…皆そろって、私の気持ちをよそにこんなことして…挙句、私を退け者にしようとここまで入り込んで来たし」
ミリア「……どうして皆を消したの？皆は君を傷つけるような真似はしてないはず」
タリス「したよ。だって、友達にならなかったじゃない。私は友達が欲しくてたまらないのに、あいつらは友達になるどころか怪しい人のように見た。貴方達だって、友達になったのに今では悪いことしたって睨んでる…何もしてないのに」
ミリア「…してるからこんなことになってるんじゃないの？少なくとも、君は間違ってる。そして何より…君は友達っていうものが何なのかすらまるでわかってない」

タリスの言い分に耳を傾けるも、ミリアはタリスに遠慮などせずにはっきりと言う。

ミリア「自分の意に沿わない者は友達じゃない…その時点で、君は自分勝手な行動で皆に迷惑をかけてきたんだよ。友達はね、お互いの気持ちと気持ちのぶつかり合いができて、受け入れ合うことができるもの…そうして初めて、人は誰かと友達になれる。口先だけの友情に、何の意味があるの？」

今のミリアも、何であろうと絶対に引かないという覚悟と希望に満ちた目でタリスを見ている。さっきまでの弱々しい自分ではなく、いつものしっかりとした自分の瞳で。

ミリア「友達の絆は、ぬるいものじゃない。今いない皆も、きっとそう思ってるはずだよ」
タリス「…気に入らないよ…私は間違ってない……私はただ、友達が欲しいだけ。そしていつまでも友達と一緒に永遠に生きたいだけ…それだけなのに…！！」

タリスの本性ともいうべきだろうか。タリスの様子は、まるで自分の非を認めようとせずに独善を振る舞う子供のようだ。

ミリア「…なら、この真実も受け入れなきゃ駄目だよ」

ここで、ミリアは先程手に入れた新聞を取り出し、タリスが関係する記事を見せるように広げた。
タリスの真実を。

タリス「！？」
ミリア「永遠に生きたいなら、どうして自分は死人であることを隠すの？君は、一度死んでしまってるんだよ？このことを知られたくない理由は何？現実から目をそむけないで！」

タリスが事故で死んでしまったことをはっきりと告げた。すると、タリスの様子が変わり始めた。

タリス「やだ…違う…私は死んでない……嫌…壊される…！」
ミリア「…？」
タリス「私の…私の夢を、壊さないでえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！」

突如、タリスは何かに怯えながら焦るように発狂し、どこからか鋭

い刃を取り付け、たたまれたパラソルを取り出して襲いかかってきた。

ミリア「来る…！！」

ミリアは迎え撃とうと槍を取り出し、パラソルによる突きをかわしてカウンターをはなつ。

ばしゅっ！！

ミリア「！？攻撃が効かない…体の変化すらない！？」

タリス「やめてえぇぇぇぇぇっ！！！」

攻撃が一切通じないタリスの暴れる攻撃をまたかわし、どういうことなのか考え始めた。

ミリア「何かによって守られているの？とにかく、タリスもこの様子じゃ、あまり近付かない方がいい！」

ミリアはひとまず逃げることにし、体育館の入口からフロアを出た。

……

教室

ミリア「？あれ、何かある…？」

教室に逃げて来ると、ど真ん中に１ｍ半の長さの白い台座の上にある青いオーブがあった。

ミリア「オーブ…？いつからここに…」
タリス「ミリアあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
ミリア「！？」

考える暇はなく、タリスがミリアを追って殺しに来た。

がんっ、きぃぃぃん！

ミリア「！オーブが…？」

キュィィィン！！！（閃光）

タリス「きゃあああぁぁぁぁっ！！？」

タリスが追撃を仕掛けるが、ミリアはそれをよけたためにオーブに命中。すると、スイッチが入ったような音の後にオーブが光り出し、タリスはそれに怯む。さらに、タリスは光にあてられ苦しむ。

ミリア「え、今の光は…？」

ところが、教室に異変が発生。何かが崩れていく震れと音が、その意味を伝える。

ミリア「！これは…空間が崩れていく！？」

ここにいてはまずいと判断したミリアは、すぐに教室を出る。タリスも起き上がり、追いかける。後に、オーブは音を立てて割れ、破片が教室全体に広がる。
それは、そこにある檻が壊れたのだ。

……

教室（現実）

ネプテューヌ「わわっ！？割れちゃったよ！？」
クルト「どうやらミリアがやったみたいだな。今、わずかにミリアの気配がした！」
ネプギア「じゃあ、これで皆も助けに行けるんですね？」
カノンノ「理事長、お願いします！今ゲートを開きましたので、ここから助けに行ってください！」
真王「任せな。すぐに助けて来るぜ！」

クルト達の準備が功をなし、真王はカノンノが即座に開いた時空ゲートを通り、檻へと突入した。

クルト「頼んだぞ…！」

……

ミリアはタリスの攻撃をよけながら、保健室に移動していた。
そこにも、青いオーブがあった。

ミリア「また同じオーブ？……ということは…！」
タリス「だからやめてよぉぉぉぉぉぉっ！！！！（ダッシュ攻撃）」
ミリア「えいっ！！（よけて斬る）」

がんっ、きぃぃぃん！！
きゅいぃぃぃぃぃん！！！

タリス「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

今度はミリアからオーブを攻撃し、起動したオーブはまたもや閃光でタリスを照らす。
すると、またもや震れと異変を感じ取る。

ミリア「…！」

さらに、タリスにも変化があったのだ。彼女のドレスが破けて、全体が血濡られたような姿になっていた。

ミリア「あれは…？もしかして、タリスの本当の姿が表れている？…ううん、今はそれよりも他にオーブがないか探した方がいい！」

気になったミリアだが、そのことを置いて次の場所へ向かった。

……

ミリアはその後も調理室、理事長室、屋上でもオーブを見つけては攻撃して起動させ、次々と檻を壊していく。その度に、タリスの本当の姿があらわになっていき、この段階で帽子やパラソルまでも無惨にボロボロになっていることが見られた。タリスは何度も攻撃して来るが、ミリアの素早さに追いつくことはなかなかない。

そして、ミリアは体育館に再び戻って来ていた。そして、ステージにオーブがあった。

ミリア「あらかた全部のフロアは回って来た…きっと、あれで最後のはず！」

ミリアはすぐに槍を持ち直し、オーブを起動させるために走る。

タリス「ヤメテェェェェェェェェッ！！！ワタシノユメヲ、コワサナイデエエェェェェェェェッ！！！」

がばっ！！

ミリア「きゃあっ！！？」

ところが、ミリアより先に移動していたのか、上から騎乗するように乗しかかってきた。

俯せに押し倒されたミリアは、すぐにタリスをどかそうと振り向く。

ミリア「このっ…、…あ…！！？」

しかし、そこにいるタリスはもはや人らしい人の姿をしていなかった。

顔の左目から全体は皮膚がなく、肉の塊が丸見えで、目玉すらない。

髪もぼろぼろになりかけで、全身血まみれて、腰の左も肉がぐちゃぐちゃな部分があるなど、とてもグロテスクなゾンビ姿になっていたのだ。

ミリア「こ、これが…タリス…！？」

これがタリスの正体で、死者であることもこれではっきりした。ミリアはあまりにもグロテスクな姿に恐怖しそうになるが、何とかそれをこらえて表情を戻す。

タリス「オマエハニガサナイ！！ココデ、エイエンニイッショニイルノオォォォォォォォォッ！！！」

ゾンビと化したタリスは、パラソルを両手に持ってミリアを串刺しにしようと振り上げる。

ミリア「ううん…ボクはタリスに縛られない。ボクはカイト君と…皆と生きていきたいから！！！」

ぶんっ！（槍を振る）

タリス「！！？」

ミリア「届けえぇぇぇーーーーっ！！！！！」

びゅうぅぅぅんっ！！！

皆と生き続けるため、ミリアは俯せのままオーブを狙って槍を横投げした。

がんっ！！きぃぃぃぃん！！

そして、回転しながら瞬きのごとく飛ぶ槍は、オーブにしっかりと当たった。

タリス「ア…アァ…！！？」

キュィィィィン！！！

タリス「イヤアァァァァァァァァァァァッ！！！！」

閃光はタリスにとどめを刺した。光を受けたタリスはミリアから離れ、空間と共に足から消滅し始めた。ミリアも立ち上がり、タリス

の最期を見届ける。

タリス「イヤアァァ…シニタクナイィィ…！ドウシテ…ドウシテワタシハ、イキチャダメナノ…？ワタシダッテ、マダイキタイノニ…ムカシカラ、トモダチガホシカッタダケナノニィィ…！」

ミリア「……タリス…」

これで、タリスに消された者達は戻り、閉鎖の檻も崩れていくのみ。

ミリアも無事で済んだ。

だが、滅びゆくタリスを見ていると、心が痛む自分がいる。考えてみれば、タリスはいきなり轢き逃げで殺され、生きたがっていた。

友達もおらず、家族もいなくなってしまったタリスは、きっと孤独だったのだ。

ミリアは考えた。もしかしたら、この娘は人とのコミュニケーション不足で物事がわからず、いい事と悪いことの区別があまりできなかったのではないだろうか？

だとすれば、何だか可哀相なことをしてしまった気がしている。もちろん今を譲るつもりはないし、幸せを奪うことは許せない。けど、タリスもまた不幸の犠牲者であることを忘れてはいけないのだ。

タリス「イヤァァ…ヒトリボッチハイヤァァァ……シニタクナイィィ…ヒトリボッチイヤアァァァ…」

意識もなくしかけているのか、もはや滅んでいくことに恐怖するだけだった。

見ていられない…そう思ったミリアは…

がばっ、ぎゅっ…

タリス「……？」

タリスを抱きしめてあげた。

ミリア「…ごめんね…救ってあげられなくて……本当にごめんね…
……せめて、願わせて…？いつか、タリスちゃんが生まれ変わって、またボク達と会えるようにって……そしたら、今度は…ちゃんとした形で、友達って何なのか教えてあげる。カイト君と、皆と一緒に生きようね…」

目を閉じ、優しい声でタリスにそう言ってあげた。タリスとまた友達になりたいと願って。

タリス「……アァァ……コノカンジ……オカアサン……」

タリスの右目から涙が流れた。ミリアのぬくもりが、どうやらタリスの母親とそっくりなのだろう。さっきまで発狂していたタリスが、ようやく落ち着いた。

タリス「…アッタカイ…ヨ……」

そして、タリスは滅びて逝った…

……

気がつくと、ミリアは元の体育館にいた。現実に戻って来たミリアは立ち上がり、まわりを見ると…

ミリア「…あ…」

後ろに、両親であるクルトとカノンノがいた。

カノンノ「おかえり…ミリア（笑顔）」

クルト「お疲れ様。おかげで、皆は帰って来たよ」

そして…

カイトが、ミリアを抱きしめた。

カイト「…ありがとう、ミリア……よく頑張ったな」

ミリア「…カイト…君…！」

ミリアは帰って来たのだ。日常と仲間達の元に。

嬉し涙を流すミリアは、カイトと両親と…帰って来た仲間達に笑顔でこう返したのだった。

ミリア「ただいま…っ！」

～オマケ～

0：15

学園の屋上

「……ククク…！ようやく、復活できました……念のため、タリスを利用して正解でした…」

そこには、なんと廃人と化したはずのネクロがいた。ただ、体は普通ではないようだ。

ネクロ「タリスを交通事故で死なせ、そして私の切り札…『閉鎖の檻』を使うことができるゾンビとして蘇らせる……ククク…！おかげで絶望をこんなに吸収できて、魂のみですが復活できた…！」

そう、ネクロが黒幕だったのだ。

ネクロ「肉体は分離したままですが…むしろ、こちらがいいでしょう……さあ、これからさらなる存在になり、今度こそ奴らに絶望を……」

だが…

「…理事長が調べた通りだった……また、貴方が仕組んだことだったのね…」

「タリスちゃんが、可哀相です…！」

ネクロ「！！？」

いろんな意味で、小物であるネクロに舞台はもはや用意されていな

い。何故なら…

カイト達４人の心の加護を宿した、プラネテューヌの女神達に今度こそ成敗されるのだから。

パープルシスター「これ以上…悲しみと不幸を増やさないために…！！」

パープルハート「今こそ私とネプギアが…魂もろともネクロを滅ぼす！！！！」

詳しく知りたくば、理事長に聞かれよ。

おわり。

５４話「真実のカギ」（後書き）

というわけで、長かったけど書ききりました。

ラストについては、真王さんにお任せします。

ミリア、お疲れ様！

55話「旧の者」（前書き）

ネプテューヌ好きの人ならごそんじであろう、あの人が今回現れます。

今回、2話続けてソラさんのリクエストネタを含めることにしましたが…先に謝ります。
気分害する覚悟で見てください。そしてごめんなさい。

55話「旧の者」

『…何故だ…』

どくん…

『何故、私は捨てられる…？』

どくん…

『犯罪神と崇めておいて、何故私の捨てられた部分を見ない…？』

どくん…

『私は…全ての滅びを望んでいたわけではない…欲しいという野望であっただけだというのに…』

どくん…どくん…

『…許せぬ…犯罪組織も、私には必要ない…』

どくん…どくん…

『私の望みを邪魔する者は皆、犯罪神であろうと壊す…だが…』

どくん、どくん、どくん…！

『救世の悲剣…あれが具現されれば、私ですら危うい…急がねば…』

どくん、どくん、どくん、どくん！

『今来てやるぞ…ネプテューヌ！！』

……

１９：３５

寮・ネプ姉妹の部屋にて

カイト「ぬわっ！？またやられた…；」
ネプテューヌ「取ったどーっ！」
こなた「なぬぅ！？まさかネプテューヌにこうも圧勝されるとは…やるなお主！？」
ネプギア「あ、また２位が確定しちゃった♪」
かがみ「ちゃっかりネプギアまでやるわね…；」
ミリア「頑張ってー」

現在、カイト達はネプ姉妹の部屋でゲームを楽しんでいた。カイト、こなたがネプ姉妹に挑戦し、ミリア、かがみ、ほむら、シルフィがその様子を見守っている。

ネプテューヌ「ふふーん♪こなた、約束通り後でケーキおごりだからね？」
こなた「むぅ…もはや回避は無理かぁ。わかったよ、ネプギアにもケーキおごるよ」
ネプギア「いいんですか？ありがとうございます♪」
ミリア「今日はネプちゃんが一番強いね。勝率が絶好調だもん」
カイト「ハイレベルオタクであるこなたと互角に張り合ってるしな。手を組んだら、クリアできないものなんてほんの一砂程の数になる

んじゃねえか？」
かがみ「かもね。息も合いそうって雰囲気もあるもの」
こなた「んじゃ、そろそろ闇魂の攻略に入ろっか。データもちゃんと持ってきてるし、一緒に墓地を短時間でクリアしちゃおうよ」
ネプテューヌ「うん、やろうやろう！」

対戦ゲームではネプ姉妹が圧勝したようで、いろんな意味でご機嫌な調子になっている。次は、こなたとネプテューヌが最近発売されたアクションゲームをすることにして、早速準備に入った。

シルフィ「見てるだけでも楽しいものですね…ゲームって、面白いです」
ほむら「そうね…同感よ」

シルフィとほむらはジュースを飲みながら見てるだけだが、それでもゲームを楽しむ彼らやゲームの様子を見るのは楽しいようだ。そんな中、ちょっとだけ別の話もする。

シルフィ「ところで、あれからもキュウベえについて調べてるそうですけど、何か手掛かりは見つかりましたか？」
ほむら「…いいえ…有力な情報がない上に、最近増加している魔女を討伐しても何も得るものがないことが多いわね。グリーフシードすら落とさないし、魔女も強くなってきている…」
シルフィ「そうですか…魔女の脅威も捨ておけませんわね」
ほむら「えぇ、キュウベえも旧式のシステムを蘇らせようと、あの手この手を考えてるはず。構えておくべきよ」

ほむらは、いずれ来るであろうキュウベえとの戦いに備える意志を伝える。シルフィも、それに同意するように頷いた。
二人の目に見える楽しい時間。これがあと何度か訪れれば、また次

の戦いが来る。そう強く思っているのは、特にシルフィとほむらだった。

……

２３：２０

そして夜遅く…

カイト「ふあぁ～…いっけね、もうこんな時間になってら」
こなた「私はまだまだ平気だよ～」
かがみ「あんただけ夜更かし上等だからな…；」

この時間までカイト達はゲームを楽しんでいたが、そろそろ時間なだけに眠気が来る者もいる。

カイト「んじゃ、俺らそろそろ部屋に戻るわ。今夜は楽しかったぜ」
かがみ「ほら、こなたも帰るわよ」
こなた「仕方ないね。区切りもいいし、ここまでにしようかな」
ミリア「また明日ねー」
ネプテューヌ「うんっ、また明日～♪」
シルフィ「それじゃ、いい夢を…」
ほむら「お休みなさい」
ネプギア「はい、お休みなさーい」

区切りもちょうどいいので、カイト達は部屋から挨拶をして出て行った。ネプ姉妹は、笑顔で返して見送ったのだった。

……

ネプギア「ふぅ…今日は長く遊んだね」
ネプテューヌ「すっごく楽しかったぁ。また皆を呼んで遊ぼうね」
ネプギア「うんっ。それじゃ、そろそろ寝よっか」

そう話し、寝ることにした姉妹。ところが…

ぞくぅっ！！

ネプテューヌ「！！…何…この感じ…！？」
ネプギア「！…お姉ちゃん…これってもしかして…！？」
ネプテューヌ「運動場から感じる…行ってみよう！」

二人は何かの気配を感じ取った。気になった姉妹は、すぐに武器を手にして運動場へ向かった。

……

たったったっ…！

「アーッハッハッハッハッ！ついに見つけたぞ…まさか、ここにいようとはな！」
ネプテューヌ「誰！？この時代遅れな笑い声は…」
「時代遅れは余計だ」

姉妹が目にした人物は、魔女っぽい露出度高めの衣装と帽子を着ている、紫の髪と体の女性だった。

「変わらんな…この次元でも、ネプテューヌはネプテューヌか」
ネプテューヌ「何で私の名前を知ってるの！？一体誰、変な人！？」
「誰が変な人か！…まあいい、名乗っておくとしようか。我が名は、

マジェコンヌだ」
ネプ姉妹「えっ！！？」

マジェコンヌという名前に、二人は驚愕した。

ネプギア「マジェコンヌ…！？そんなっ、犯罪神マジェコンヌがどうしてここに！？」
ネプテューヌ「おかしいよ！マジェコンヌは私達がやっつけて、犯罪組織も壊滅寸前に追いつめたはずだよ！」
マジェコンヌ「ほう？流石に４女神の中でもずば抜けているようだな。犯罪組織のことなら私も耳にしている。最も、私が奴らの息の根を止めるつもりだがな」
ネプギア「…？」

何を言っているのか分からない姉妹は、ただマジェコンヌと名乗る女性を見ている。

マジェコンヌ「私は、お前達が知っているマジェコンヌではない…あんな犯罪組織と犯罪神などと一緒にするな」
ネプテューヌ「どういうこと？…もしかして、別の世界とか次元からやって来たマジェコンヌってこと！？」
マジェコンヌ「…本気で言ってるのかメタで言ってるのか……だがその通り。私は前世代のゲイム業界の精霊体。そこにはお前もいたぞ、ネプテューヌ。そっちの女神とはお初目だがな」
ネプギア「ぜ、前世代から！？」
マジェコンヌ「今でも覚えているぞ…ネプテューヌとは何度対峙したことか。そして今、次の世代を幾多も見てきたが……はっきり言って、虫図が走る。次の世代の私が、よもやあんな損な存在になり果てていようとは…」

マジェコンヌは少し表情を歪め、何か気に入らないような顔つきになって言葉を続ける。

マジェコンヌ「何なのだあの自滅的な存在は…そして、その土偶を崇める連中は……今まで見たこともない」
ネプテューヌ「…？犯罪組織が嫌いなの？」
マジェコンヌ「嫌い…？ふん、あんな醜い組織を好きになる理由がどこにある？悪の面汚しであるあの組織など、何の価値もない」
ネプギア「どういうことですか？あの犯罪神に何を憤っているんですか！？だって、あの犯罪神マジェコンヌはゲイム業界や全てを飲み込むことが目的だったはずです！それのどこが、自滅的だって言うんですか！？」
ネプテューヌ「貴方の目的は何？マジェコンヌなら、悪いことをして支配するとかが目的なんじゃないの？」
マジェコンヌ「…確かに、私の目的は全ての支配…それは犯罪神と共通している。お前達から見れば、私が悪であると否定はすまい。だが、気に入らないのはその先だ」
ネプテューヌ「先…？」

目的は同じ、しかし先が違うと彼女は言う。どういうことなのだろうか？

マジェコンヌ「犯罪神の望みが行きつく所は、文字通り全ての滅亡…犯罪神に集う者共もまた、どんな考えであれそれに従っていることに他ならない。その先の筋書きが、一切ない…そんな悪のどこが得なのだ？自分すらも滅ぼして、何の価値があるというのだ？私が望むのは、そんな己ではない」
ネプギア「…？」
マジェコンヌ「…本当、悪がここまで落ちぶれるとは…挙句、他にも悪を貫いておいて正義面をして、英雄や正義の味方を気取ろうと

する正義の面汚し…悪の生まれすら気付かずに我欲を認めようともしない者…己にある悪を認めようとしない阿呆が、私の周りにもごろごろといる……そして、ここ超次元学園とやらにもな」
ネプテューヌ「！！…超次元学園の皆に悪口でも言うつもり？だったら、私は貴方を許さないんだから！」

超次元学園までも見下すマジェコンヌに、ネプテューヌは剣を抜いて憤る。彼女の仲間達を馬鹿にされては、彼女が怒るのも当然だろう。

マジェコンヌ「ネプテューヌ…お前は少しだが正義と悪について理解があるというのに、何故こんな所に入学した？ましてや…ここには次元政府の下の組織である管理局の人間までいるというのに」
ネプギア「管理局…なのはさん達のことですか！？あの人達が何だって言うんですか！！」
マジェコンヌ「もうすぐ次元政府や犯罪組織…神だとぬかす阿呆共達が、この学園に対して動きを見せるようだ。…なのはと言ったか？その者達もまた、動きに合わせてお前達の意に反することをするかもしれんぞ？」
ネプテューヌ「そんなのありえない！なのはさん達は悪さなんてしないっ、私達の仲間だもん！！」
マジェコンヌ「信じるのは勝手だが、醜い部分を垣間見る時が来て同じことを言えるのか？」
「言えるさ」

その時、マジェコンヌの後ろの方から誰かの声が来ていた。彼女が振り向くと、そこにはマリオがいた。

ネプテューヌ「！マリオ！！」
マリオ「俺達は何があってもなのは達を信じる。それが、この学園

のルールでもあるからな」
マジェコンヌ「……来たか…」
マリオ「悪いが、話は最初から全て聞かせてもらった。俺達の仲間はお前が考えている程、醜くなんかない」
ネプギア「え、いつの間に…？」

どうやら、マリオは3人の会話を隠れて聞いていたようだ。マリオの神出鬼没に姉妹は驚くが、マジェコンヌは違った。

マジェコンヌ「……ネプテューヌ、お前も損な立ち位置にいるようだな。正義の面汚しよりも弱いとは、とても信じられん」
マリオ「…俺が正義の面汚しだと？何が言いたい」
マジェコンヌ「お前の噂も耳にしている。いかなるチート能力も無効化し、学園最強の座にいるそうだな？」
マリオ「俺はただ純粋に修行してきただけだ。それをチート能力と一緒にしないでもらおうか」
マジェコンヌ「ふん…修行してきたからチートではない…か。別にそう思いたいのならそうするがいい。別に構わん……最も、私が言ったのはそのあたりではないのだがな」
マリオ「どういうことだ？」
マジェコンヌ「知りたいか？ならば…来るがいい」

独特な形をした杖を右手に召喚し、マリオに来いと左手で逆さに手招く。

マリオ「言われなくてもそのつもりだ。お前の野望も、俺達が止める！」
マジェコンヌ「自信だけは立派だな」
マリオ「それ以外も立派にしてるぜ！」
ネプギア「マリオさん、私達も…」

マリオ「大丈夫だ！お前達は離れていていい。見たところ、特別にチート能力を持っているようには見えない。俺一人でいける！」
マジェコンヌ「…そう思うか、ならば…」

ごおおおぉぉっ！！！（黒いオーラ放出）

マリオ「ぐっ！！？」
マジェコンヌ「お前をはじめとする一部の者には、変身能力があるそうだな？私が恐るるに足らんと言うのであれば、その能力も必要あるまい」
マリオ（何だこれは…変身できなくなった？…ただ者ではないか）
マジェコンヌ「どうした？早くかかって来るがいい。答えが知りたいのだろう？」
マリオ「…！！」

だっ！！（突撃）

マリオは冷静さを保ち、マジェコンヌへと攻撃を開始した。マリオは神速の速さで鉄拳を繰り出し、マジェコンヌに何か変なペースに巻き込まれる前に決着をつけようとする。
しかし、マリオは今分析を誤ったと思っている。何故なら、マジェコンヌに攻撃の連打がことごとく回避されているからだ。

マジェコンヌ「どうした？そんなものか、ヒーローよ！！」

思いもよらぬ素早さで動き回るマジェコンヌは、杖で攻撃を捌きながら属性魔法で攻撃する。炎、氷、水、雷、風、闇が主体となっていて、炎のビームの後には氷のつぶて雨、続いて落雷にかまいたちと、次々に魔法を唱えてマリオを翻弄する。
マリオも修行で積み重ねてきた自身の能力で立ち回るが、はっきり

言って不利である。理由は、最初にされたことが響いてるからである。

ずばあぁぁ！！（氷の刃がかする）

マリオ「ぐっ！！」

ネプギア「マリオさん！！？」

ネプテューヌ「嘘…！？マリオが、押されてる！？」

姉妹が不安と驚きの表情でマリオを見ているが、どうしたことかマリオの強さが思わぬ形を見せられて心が焦っている。

マジェコンヌ「ふっ…つまらんな。これでは、本当の悪にすら足元に及びはするまい。例え、相手が弱くてもな」

マリオ「だから…何が言いたいのかって言ってんだっ！！！」

業を煮やしたマリオは、突然の展機を狙って突撃した。懐に飛び込んで攻撃し、何か反撃を誘ってそれを利用して逆転を狙う。基本的な戦法の1つだ。

マリオ「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

全力で右手の拳をまっすぐにマジェコンヌへ突きだす。最高速で放つそれは、回避することなど不可能。いかに妙な強さを持つマジェコンヌも、その判断はすぐにされる。

しかし、マジェコンヌは表情を変えない。

マジェコンヌ「では、はっきりと2つ言ってやろう」

どおおおおおおおおおんッ！！！

言葉の終わりと共に、マリオの拳が当たる音がした。
だが…

マリオ「…！！？」

それが当たったものは、マジェコンヌのバリアだった。

マジェコンヌ「1つ…お前にはかつての自分の面影が見えない…お前は強くなりすぎた代償に、弱さを捨てた。結果…お前にも見えるぞ。醜い部分を…弱い部分を受け入れようとしない1つの己が」
マリオ「な…！？」
マジェコンヌ「そしてもう1つ…」

ずどおおぉぉぉぉっ！！！

マリオ「ぐあああぁぁぁぁっ！！？」
ネプギア「！！？」
ネプテューヌ「マリオおおぉぉぉぉぉっ！！！！」

マジェコンヌはバリアを解除し、怯んだマリオの胸を自分の杖で貫いた。決定的な一撃を受けたマリオが、そう…学園最強の一角を担っているマリオが、マジェコンヌに敗れた瞬間だった。

マジェコンヌ「正義は必ず勝つ…そんな概念などどこにもない。はっきり言って、お前には危機感が足りないし、敗北の味も知らない…いや、忘れた様子だ。悪である私はこう言おう。……身の程を、己の正義の醜さを知れ」

どおおぉぉぉぉんっ！！！

杖から離すように、衝撃波をマリオに当ててふっ飛ばし、マリオは運動場の地面にたたき落とされた。

ネプテューヌ「マリオ！！」
ネプギア「マリオさん！！しっかりしてください！！」
マジェコンヌ「…1つ忘れていた。あまり神出鬼没でいるのも、関心せんな」

ネプ姉妹は倒れたマリオに駆けつけ、ネプギアはすぐに手当てを始めた。

マリオ「う…が…っ！」
ネプギア「動かないでください！治療が終わるまで、じっとしててください！」
マジェコンヌ「楽しくないな…真の正義とやらが、こんなものではあるまい？なあ、ネプテューヌ」
ネプテューヌ「……」

ネプテューヌは立ち上がり、地面に降りて不敵に笑うマジェコンヌの前に立ちあがった。

ぴかあぁぁぁぁ…！！

そして、姿を変えた。

マジェコンヌ「ほう…やはり、その姿もちゃんとあったか。今の様子は…仲間を倒されて許せないといった感じか？憎悪という野性的な感情になっている自分が、醜く見えても…な」
パープルハート「……否定はしないわ。現に、今の私は貴方に私念

の怒りを向けている……それも醜い部分だっていうのなら、私は受け入れるだけ」

目をつむったまま、女神パープルハートは今の自分の感情を伝える。

パープルハート「貴方が言っていることが何なのか…少しだけ理解してきたわ。貴方は、あくまで純粋に悪を貫こうとしている…故に、自分の悪のプライドが犯罪組織に牙を向いている。己自身であっても」

マジェコンヌ「そうか…それは光栄だ。ならば、お前はどうするのだ？女神パープルハートよ」

パープルハート「答えは2つ…あの人が与えてくれた、私自身の侍の魂を輝かせる…そして…」

ちゃきっ（顔を上げて剣を構える）

パープルハート「大切な仲間を、そして妹を守る…ただ、それだけよ」

決意と戦いの目をはっきりと開き、マジェコンヌを睨むパープルハート。その様子に、マジェコンヌは何が嬉しいのか笑った。

マジェコンヌ「ふっ…はっはっはっはっはっ！いいぞネプテューヌ…やはりお前はそうでなくてはな。このような醜い世代でも、お前は純粋だ」

パープルハート「言ってなさい？これ以上、仲間を傷つけさせはしない。私は…貴方を今ここで斬る！！」

マジェコンヌ「よかろう。ならば来るがいい、パープルハートよ。お前の正義、しっかり見せてもらおうか！」

ネプギア「お姉ちゃん！」

パープルハート「ネプギアはそこにいなさい。すぐに今の騒ぎは知られ、何人かがここに駆けつけるはず。貴方はその人達に説明するためにも、今はそこで待ってて」
ネプギア「…うん、気を付けてね。信じてるから…」
パープルハート「えぇ…ありがとう、ネプギア（微笑み）」

だっ！！（突撃）

マジェコンヌ「さあ来い！！本能と正義のままに、かかって来るがいい！！」
パープルハート「その口も、すぐに閉じっ切りにしてあげるわ！マジェコンヌっ、覚悟っ！！！！！」

世代が違う二人が戦いを始める瞬間。
ネプテューヌの正義と、マジェコンヌの悪が…激闘を繰り広げんとしている。

続く

55話「旧の者」（後書き）

というわけで、こんな話にしてすみません。
でも、敗北は誰にだってあると伝えたかった自分がいるのも事実です。

いずれ、カイト達も敗北の話を書く予定です。

56話「美化と醜態」（前書き）

マジェコンヌ戦の続きです。
あと、今回からマリオ関連の話も少しずつ入れます。

56話「美化と醜態」

あらすじ

超次元学園の夜に、突如前世代からやってきたというマジェコンヌが出現。ネプ姉妹が先に彼女と接触し、後から神出鬼没でマリオも現れた。先にマリオがマジェコンヌへ戦いを挑むが、変身する術を封じられて敗北。これにネプテューヌが立ち上がり、パープルハートとなってマジェコンヌへ攻撃を開始するのであった…

……

0：00

運動場

現在、パープルハートとマジェコンヌが戦闘中で、ネプギアはマリオの治療に専念している。

マジェコンヌ「そこか！！（つららの雨）」

パープルハート「遅いっ！！（回避しながら一閃）」

がきぃぃぃんっ！！（相殺）

マジェコンヌ「まだ見えるな！」

パープルハート「はあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

ががががががががきぃぃぃんっ！！

二人の武器が次々とぶつかり合う。速度はどんどん上がっていき、

気がつけば2つの閃光がぶつかり合う戦闘になっていた。
ちょうどその頃、援軍としてカイト、ミリア、銀時、桂、ノワール、ユニ、ラム、ロム、ブラン、ベールが駆けつけた。

銀時「おい、状況はどうだ!?」
ネプギア「あ、皆さん!」
桂「ん!?マリオ殿が倒れてる…だと?」
ネプギア「はい…今さっき、マジェコンヌにやられてしまって…」
ベール「!?マジェコンヌ…ですって!?」

他の女神達も見て疑う。今パープルハートと戦っている彼女こそが、かつて自分達が倒した犯罪神の前代の姿であることを、マジェコンヌであることを疑った。

ノワール「嘘…あれがマジェコンヌだっていうの!?」
ブラン「犯罪神は、ここに入学する前の頃に倒した…復活させるにしても、まだ時間はかかるはず…」
ユニ「またチート能力者とかが何かしたんじゃないの!?てか、そんな気がしてならないわよ!」
ネプギア「それが…あのマジェコンヌは、前世代からやって来たらしくて…」
ロム「前世代…?」
ラム「過去から来たってこと?」
ネプギア「うん…」

がきぃぃぃぃん!!!(鍔迫り合い発動)

マジェコンヌ「ふっ…流石だな。どうやらこの世代でも、お前の火力は異常らしいな」
パープルハート「お生憎様、私だって今までたくさんの敵と戦って

きたのよ。貴方こそ、その実力ははじめからあるって言うのかしら！」

パープルハートが杖を弾き、再び剣を構えて突撃。対するマジェコンヌも対抗して属性魔法の弾幕を展開。距離を時々確保しながら、パープルハートの攻撃を捌いている。

マジェコンヌ「いや、私もお前と同じようなものだ。あの世代で、私はお前と何度も武器を交えて来た。何度戦い、そして何度恥をかかされたことか…」

ばばばばばばばばばばばばばばばばっ！！（攻撃がぶつかり合う）

マジェコンヌ「今でも忘れてはおらんぞ？前世代にいるお前の言葉も、いろいろとな！」

パープルハート「気になる話ね。ぜひお聞きしたいわね！！」

言葉の投げ合いと戦い。両者共引く様子はない。

桂「どういうことだ…まさか、前世代の犯罪神とやらがまだ上だったと？」

カイト「話は聞いてる。あいつはその犯罪神とは別なのか？」

ネプギア「そう言ってますけど、私にもよくわからないんです…」

ミリア「一体どういうこと…？」

ずばあぁぁっ！！！

パープルハート「ぐっ！！」

カイト・ミリア「！！？」

ネプギア「お姉ちゃん！！？」

話をしてる最中、戦況がころりと変わってしまった。マジェコンヌの真空波がパープルハートの脇腹を斬り、出血する傷を負わせたのだ。

マジェコンヌ「ふむ、今はマリオよりは弱いか…伊達に最強の座にいるわけではないということか？」

パープルハート「…私の仲間には、チート同然の人達がいるのよ…私よりもずっとすごい人達がね…」

マジェコンヌ「…そうか……成程…今は虐げられて、後に化けそうだなパープルハートよ」

パープルハート「それは、どういう意味かしら？また仲間を侮辱するつもり！？」

まだダメージに耐えられるパープルハートが突撃し、マジェコンヌへと立ち向かう。マジェコンヌの言葉の真意を知るため、仲間を守るために。

マジェコンヌ「わからぬか…女神よ」

しゅばばばばばば！！！

今度は闇の槍を無数に降り注がせるマジェコンヌ。パープルハートはこれも相殺するも、数が数なだけに体力の消耗の面では彼女が激しい。

マジェコンヌ「お前のためにこんなことを言うつもりはないが…1つ言ってやろう」

マジェコンヌは、弾幕を放射しながらこっそり溜めていた魔力を解

き放ち、闇の球体を頭上に召喚した。

マジェコンヌ「せいぜい、お前も正義をはき違わないことだ。悪にしろ正義にしろ、単純な考えで定義されてはつまらん。まずは醜態をさらすといい」

パープルハート「！させないっ！！！はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

マジェコンヌ「無駄だ」

ずぎゅうううぅぅぅぅっ！！！

闇の球体から、黒い巨人らしきエネルギー生命体が生まれた。その誕生の瞬間、運動場全体に闇の電気とも言える波動が広がる。

カイト「うあああっ！！？」

ミリア「くうぅ…！何、このピリピリする程の波動は…！？」

銀時「ダークオーラか！？」

ノワール「いえ、それよりも強い闇の力じゃ…！」

パープルハート「ぐうぅっ！！？」

波動でダメージが行くカイト達だが、大きく影響を受けたのはパープルハートの方だった。近くにいたために、体に直接的なダメージが入って動きも止められた。その時、黒い巨人が剣を生み出して振り下ろした。

マジェコンヌ「魔王の剣…味わうがいい」

ずどおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉんっ！！！！

パープルハート「うあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」
ネプギア「お姉ちゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！」
カイト「直撃したぞ！！？」

剣と大地が接触した時に大爆発が発生し、叩きつけられたパープルハートは威力と闇の爆発両方によって、体のあちこちから出血の傷を付けられ、大きなダメージも受けて吹っ飛ばされた。

どざざざーーっ！！

ミリア「ネプちゃんっ！！」
ベール「そんな…ネプテューヌが、こうもあっさりとやられるなんて…！？」
ラム「何あの威力…！？」
ロム「びくびく…（おそろしさに震える）」

地面をすりながらカイト達の元で倒れてきたパープルハートのやられ様を目にしたカイト達は、あのマジェコンヌの強さがただものでない上に異常であると脳裏に刻まれた。気を失ってまではいないが、相当やられてしまったようだ。

ネプギア「お姉ちゃんっ！しっかりして、お姉ちゃん！」
パープルハート「っ…う……くっ…！」

すぐに治療にかかるネプギアだが、短時間で全回復できそうにないだろう。マジェコンヌは空から降り立ち、パープルハートを見ている。

マジェコンヌ「これが、今までの経験が私に与えた力だ。何度も醜

態をさらし、敗北を重ねてきた分、私の能力を高めてきた。そしてわかってきたのだ。正義と悪のなんたるか…私が悪を貫き、自分のためになるにはどうしていけばいいのか、どうすれば快適な人生になるのかを。…いつの間にか、私もまた変わってしまったのかもしれんな」

ブラン「…わけがわからない…何を言ってるの？」

カイト「悪を貫く……お前、ただの敵じゃねえな？あのデニー達や腐った権力者達までも憎むなんざ、何か深い考えや思いがありそうだが…？」

カイトがただ者ではないことを言葉にし、聞いたマジェコンヌはカイトとミリアを見て返答をした。

マジェコンヌ「…お前達か…この世代におけるチートとは異質な存在というのは。成程…その心には、正義と悪が混ざり合ってる部分が見える…」

カイト「正義だの悪だの知るかよ…そんなものにこだわって何になる？」

ミリア「ボク達は、ただ皆や一部の人々を守りたいだけだよ」

カイト「まあ最も…俺達も正義が嫌いだけどな」

二人はマジェコンヌを睨み、どちらでも関係ないと言葉にした。

マジェコンヌ「…ふっ…面白い人物だな。愉快だ…」

その時、パープルハートが起き上がってマジェコンヌを見た。

パープルハート「…醜態なら…とっくに、何度も晒して来てるわ…

…時に、自分を呪うこともあった…恥を晒した数は…数えたらどうなるかしらね…」

追い詰められているのに、彼女はどこか笑っている。何かの自信に支えられているような表情で、マジェコンヌをいっと見ていた。

パープルハート「…貴方に言われなくったって…もうとっくに、言われてるのよ……その私に、今度は何を言うつもりなの…」
マジェコンヌ「…何、お前やカイト達とやらが卵だなって言いたいだけだ。卵であるお前達が、この学園を孵化する場所にしたのは愚かではないかとな」
パープルハート「…また、悪い所を見ようとしないとでも…言うつもり…？…それも、すでに言われたし反省もしてるわ…」
マジェコンヌ「そうか…まあいい。どの道お前はこんなことで道を譲りはするまい？しつこく私の邪魔をしてきたネプテューヌだ」
パープルハート「そう…だったら、この世代の私も…そうするだけよ…！」

回復の途中だが、パープルハートは立ち上がってまた構えた。

ネプギア「お姉ちゃんっ、無理しちゃだめ！まだ傷は治りきってないよ！」
パープルハート「…ふふ…心配性ね……でも信じて…私はまだ、やれる…」
カイト「ネプテューヌ…」

仲間達は心配するが、パープルハートはまだ戦うつもりだ。しかし、傷はまだ治ってない。また激突するかと思われた…だが。

マジェコンヌ「…ん？」

突然、マジェコンヌが何かを感じ取ったようだ。

マジェコンヌ「…次元政府め…管理局から回収物を取り上げるとは…あの悲剣を…」
ユニ「？何…何を言ってるの？」
マジェコンヌ「……女神パープルハートよ、この戦いはお預けとしよう。予定が変わった」
パープルハート「何ですって…？」
マジェコンヌ「最近ここに具現したばかりでな…流石に、私も警戒せざるを得ないものがあるのだ。それが全て片付いた後に、決着をつけるとしよう……それと、ネプギア」

マジェコンヌは、ネプギアに目を向け呼ぶ。ネプギアは睨み、戦意を見せる。

マジェコンヌ「お前も別の次元で見てきたぞ。そして見つけたお前の闇…」
ネプギア「闇…？」
マジェコンヌ「…お前の場合、大きな悪になれるだろうな…」
ネプギア「！悪って…！？」
ミリア「惑わされないで！ギアちゃんはギアちゃんだよ！」
カイト「何が何だかわからねえが、このまま逃がしてたまるかよ！！！」

カイトが次の相手になろうとして、突風撃でマジェコンヌに突撃した。だが、マジェコンヌはテレポートで遠くまで逃げた。

マジェコンヌ「また会おう女神パープルハート。せいぜい、お前の正義を大事にするのだな。さもないと…妹を不幸にするだろうぞ」
パープルハート「！」
マジェコンヌ「さらばだ。あーっはっはっはっはっはっ！」

高笑いをしながら、マジェコンヌはカイト達の前から姿を消した。

パープルハート（ネプギアを不幸に…？何を言いたかったのかしら…）

ネプギア（私が…大きな悪に…？）

残されたのは、マジェコンヌがネプ姉妹にかけた言葉の重さと謎。

二人が決して避けては通れない謎に、向いて見らざるを得なかった。

カイト「…マジェコンヌ…か」

ベール「ひとまず、事態は収まった…とみてよさそうですわね」

ノワール「そうね…」

ひとまず事態は解決したと判断した。しかし、一番受けた傷が大きいマリオに関しては、2日かけないと順調に治療できないかもしれない。

……

保健室

後に、マリオはしばらく治療のために保健室で安静にすることになった。

ミリア「それにしても、まさかマリオさんがやられたなんて、今でも信じられないよ…」

銀時「特別にチート能力を持ってはいなかったんだよな？つまり、純粋な実力でやぶれたってのか？」

桂「そう見るべきだろうな。何にしても、マジェコンヌとやらの実

力は強大と見るしかあるまい」
カイト「…なあネプギア、マジェコンヌはマリオに何か言ってなかったか？」
パープルハートの状態のまま治療されている彼女とネプギアに聞くカイト。
ネプギア「あ、そのことなんですけど…マジェコンヌはこんなことを言ってました。弱さを捨てたとか、敗北の味を知らないとか…」
パープルハート「以前、ダッシャー達が言っていたことと少し似たような感じだったわね…悪い部分を見ようとしないとも言っていたけど、果たして本当にそうなのか気になるところね」
カイト「悪い部分を見ようとしない…か。ダッシャーが指摘して以来、少しずつ変わり始めてる人が増え始めてるけど、まだ言わなきゃいけないなんてことが…」
マリオ「…弱さは捨ててない」
その時、ベッドで安静にしているマリオが否定した。
カイト「マリオ…？」
マリオ「…ってか、俺は自分の歩んで来た道が全て正義と感じた事はない。時にはその世界に悪い事も与えた事だってあるからな…それに、俺は弱さを捨ててない。それがあるからこそ、俺は修行するんだ。弱さもアップさせてな…ってか、ライダーやウルトラマンの力は能力と考えるなんて浅はかしいんだよ…最近の転生者のせいかね…もしくは俺の力不足か…」
銀時・桂「……」
ミリア「マリオさん…」
マリオ「ちゃんとわかってるさ…あいつが言ってること全部。正義や悪に絶対って付けるのもダメだ…けどマジェコンヌ、お前のお陰

で俺はまだ強くなれる要因を手に入れたから感謝するぜ…これからまた、修行して力付けてリベンジして…」
桂「無駄だ。今のお主では、いくら修行してもマジェコンヌに及ぶことはない」
マリオ「…何？」

前向きかつ楽観的になろうと語るマリオの言葉を遮ったのは桂だった。

桂「何故お主が敗北したのか…その大きな理由が今わかった。お主が敗北した理由…それは、自分を飾りすぎたからだろう」
マリオ「飾りすぎ…？」
桂「マリオ殿、今全て分かっていると言ったな？それが本当ならば、マジェコンヌに敗北はしなかったはず。だが、お主は敗北した…」
マリオ「いや、それは俺が修行不足か変身する術を封じられたから…」
桂「実力不足と申すか。ではその原因はどこにある？」
マリオ「え…？」

何歩か歩きながら、桂は堂々と語る。

桂「わからぬのなら、俺が1つ意見を出そう。マリオ殿…お主は実力と修行というものに束縛されている。そして、マジェコンヌが言った通りお主は自分の弱い部分、醜い部分を受け入れられずにいる。後者は断言しよう」
マリオ「！…桂…あんたまで、俺の変身能力は力だってぬかすのか…？力じゃない…心が…」
桂「いや、今のお主は力に依存している。自信があるのは結構で大事なことだが、時にそれが傲慢となる」
マリオ「…！！！」

だあぁぁぁんっ！！！

桂の言葉は、マリオの語る言葉をことごとく批難した。そして傲慢という言葉を聞き、マリオは自分が怪我しているにも関わらずベッドから飛び出し、桂の顔の右側の壁ににパンチをめり込ませた。

ネプギア「ま、マリオさん！？今はちゃんと安静にしてなきゃ…」
マリオ「…桂まで俺の努力を踏みにじるのか…！！俺がいつ傲慢になったっていうんだ！？そんなことになった覚えはない！！」
桂「残念だが、今まさにお主は傲慢である。何故か？お前は今までそうやって美化し続けて、自分の完璧さを誇張しようと体現してるからだ。実力は確かなものだが、どうやら精神に関しては意外となってないようだな」

がばっ！！（胸倉つかむ）

マリオ「…変身することが悪いとも言いたいのか…？お前に俺の何がわかる！？俺だって醜い部分くらいちゃんと受け入れて…」
銀時「ヅラの言ってることは頓珍漢だが、今は俺も同意見だ」

桂の言い分に怒るマリオに、今度は銀時まで話に入り込んだ。

銀時「お前がどれだけ辛い修行してきたかは知らねえが、努力まで踏みにじる気はさらさらねえよ。だが…時にその努力と理解を盾にする奴がいる。全部わかってるって言ってるが、本当はわかってねえんじゃねえのか？」
マリオ「何！？」
銀時「多分、お前が負けた理由はそこにあるんじゃねえのか？修行してるなら、そういう所まで考えてることもしっかり体現できてる

はずだがな…わかってることと、体現することは全然違うもんだぜ」
マリオ「貴様ら…っ！！」
カイト「やめなよマリオ」

本気で殴り飛ばそうかと思ったマリオに、ついにカイトまで声をかけた。心配になったのだろう。

カイト「イストワールに言われたことを忘れたのか？いい部分も悪い部分もちゃんと見るべきだって。なのにそうやって、自分はわかってるわかってるって言って、それもダッシャーが言ってた『悪い部分を見ようとしない』ってことになるんじゃないのか？」
マリオ「カイト…！？」
カイト「あんたが最強って言われる程に強いのは俺も理解してる。けど、俺は時々思うんだ。マリオが言ういい心を持つ者が、いつ道を間違えて実力の根っこをはき違えないかって……マジェコンヌは、変身する術を駆使することが悪いとは言ってないんじゃないか？そうじゃなくて、力の見方とかそういうのが今は醜いって…」
マリオ「偉そうなことを語るな！！！お前だって何もわかってないし、まだまだ未熟なんだろうが！！！」
パープルハート「マリオ、落ちつきなさい！今ここで言い争うよりも、傷を回復させることに専念しないと…」
マリオ「ネプテューヌは黙っていなよ！！」

マリオは怒り心頭だ。余程、自分の努力と心構えを批難されて黙っていられない様子だ。無理もないことだが、かといってカイト達３人が心なしに言うとは思えないだろう。

マリオ「…カイト、お前後で俺と勝負しろ。その時に嫌という程に見せてやる。俺の努力と心構えを、二度と傲慢だなんて言わせないようにちゃんと教えてやる…！！」

カイト「そっか…なら好きにしなよ。俺は逃げない」
マリオ「よし…絶対に逃げるなよ？」

模擬戦の約束をした後、マリオは保健室を出て行った。

ネプギア「マリオさん！戻ってください！！」
パープルハート「……駄目ね…行ってしまったわ」
ミリア「た、大変…このままじゃまともな勝負すらできないよ！すぐに止めないと…」
銀時「よしなミリア、その心配はねえ」
ミリア「けど…！」
桂「マリオ殿が傷を少しでも負っているだけで弱くなるというのなら、器もそれまでというもの。もちろん傷のことも自分なりに我慢すると心に決めた以上、止めても無駄だろう」
ネプギア「そんな…でも…」
ミリア「…カイト君…」
カイト「…大丈夫だよミリア。俺も、受け止めるべきものはしっかり受け止めなきゃいけない。覚悟はすでにできてるさ」
桂「辛い模擬戦になるだろうな、カイトよ。実力の面ではマリオが圧倒的に上…打開策もろくに考えてはいないのだろう？」
カイト「当たり…今でもさっぱりわからねえ。けど、それでも俺は戦いを受け付けるよ」
銀時「そうかい。なら、お前もいつも通りにぶつかってやりな。どの道、喧嘩ぐらいしょっちゅう起きるもんだ。お互いにぶつかり合いができなきゃ、変われはしないだろうよ」
カイト「うん…俺も、まだ知らなきゃいけないことが山ほどある。マリオのことも、自分のことも…」

もはや激突は避けられない。しかし、引くことはお互いに出来ないし、引いちゃいけない。

それは、カイト達もよくわかっていた。

……

マリオ「くそっ…！！俺の何が傲慢だっていうんだ…！！俺だって、悪い所はしっかり見てるんだ。なのにあいつらは…っ！！」

次の戦いで勝つのはカイトか？それともマリオか？

答えは、あと数時間で出ることになるだろう。

続く

56話「美化と醜態」（後書き）

マリオを強くするには、どうしてもこうする必要があると判断しました。
次までシリアス続けて、その後は裏を1つ書いて日常編とリクに入ることにします。

57話「冷めた魂」（前書き）

カイトとマリオの模擬戦です。
今回、マリオはどうなるのか…ちょっとよくわからなくなった；

57話「冷めた魂」

あらすじ
マジェコンヌと激突したパープルハートだったが、時の運もあってかパープルハートが窮地へと追い詰められてしまう。しかし、その時にマジェコンヌは何かを感じ取ったのか、勝負は預けると言って学園から引き上げて行った。後にマリオ、パープルハートの治療を始め、マジェコンヌとの戦いの話をしていたのだが、マリオとカイトの意見の違いが亀裂を生み、両者は模擬戦で喧嘩することになってしまった。カイトは黙って受け付け、マリオは自分のことを否定されて怒る。勝負は、どちらが勝つのだろうか？

……

2；20

運動場

マリオから模擬戦を申し込まれ、カイトは運動場でマリオを待っていた。見物側のミリア達も、ただ見守るしかなかった。

桂「さて、そろそろマリオ殿が来るだろう…カイト、心の準備はできているか？」
カイト「あぁ、出来てるよ」
銀時「そうか…ならいい」

そして…マリオが到着した。

マリオ「…約束通り、逃げなかったな」

カイト「あんたがどうしても戦いたがってたんだ。逃げちゃ悪いだろ？」
マリオ「…ふん…」

マリオの様子は普通のように見えるが、まだ傷は癒えてない。我慢してるのかもしれないが、どうしても影響は抜けてないらしい。だが、マリオはそれしきのことで変わりはしないだろう。何より、今は怒りもマリオを動かす動力になっているのだから。

マリオ「言っておくが…今はむしゃくしゃしてるんだ。手加減は一切しねえぞ…」
カイト「構わねえよ。戦ってあんたが満足するんだったら、喜んで相手になるさ。こんな俺でいいんならな」
マリオ「気遣いありがとよ。だがな…お前はわかってるんだろうな？俺の努力を踏みにじったことを…」

ゆっくり構えて、カイトに殺意と闘志を宿す目をして睨む。カイトもバスタードソードを抜き、構えてマリオをまっすぐに見つめる。

カイト「確かに…踏みにじったな。それはちゃんと謝るよ。俺も偉そうなことが言える立場じゃないこともわかってる…おこがましいってやつだろ？」
マリオ「わかってるのなら…土下座で謝れ！！！」

マリオが闘争心をむき出しにしてカイトに襲いかかった。カイトも迎え撃とうと攻撃を開始した。

どばばばばばばばばばばばばっ！！！

カイトは剣幕、マリオは拳幕で相手を倒そうと連続で攻撃する。火

花が飛び、風圧が彼らの周りから発生する。それは、運動場全体に風を吹かせた。

マリオは己の修行で積み重ねてきた努力と経験を、そして心構えを批難されたという思いからくる怒りを宿して拳を打ち、カイトはただまっすぐに堂々と受け止めようと受け身になりかけながらも剣を振る。どちらにも互いの意志があり、単純にそれが喧嘩のようにぶつかり合っている。

マリオ「うおおおおおおぉぉぉぉぉぉっ！！！！」
カイト「でやあああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

だが、先程桂にも言われた通り、実力の差はカイトが不利。その証拠に、カイトの体にかすり傷が少しずつ付けられ、対してマリオは無傷。このラッシュでもカイトにとって相手が悪いことがはっきりしている。最も、カイト本人はそれでも立ち向かうが。

カイト「…！！」

どごおおぉぉぉっ！！！

カイト「がはあぁぁぁっ！！！」
マリオ「もらったあああぁぁぁぁぁっ！！！」

どごごごごごごごごご！！！！

一撃が胸に命中した後、マリオは怒涛の勢いでカイトに連撃を叩き込み、宙に浮かせた後もコンボを叩き込む。一撃も外さず、的確に当てていくことで、カイトは逃げられずただ無防備にダメージを受け続けるのみ。

ミリア「か、カイト君!?」
銀時「……」
桂「…カイトの奴…気付いたか?」
マリオ「そこだあああぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」
どがあああぁぁぁぁっ!!!
そして、とどめとして蹴りを入れて地面に落としたマリオと、無残に吹っ飛ばされて地面にたたきつけられたカイト。
ミリア「あ…!」
銀時「……カイト」
ダメージを受けたカイトは耐えて立ち上がり、マリオは次で勝利を確実にしようと変身を始めた。
マリオ「変身!!!」
きぃぴーん!!
マリオは仮面ライダーゼロに変身し、再びカイトへ突撃して攻撃を再開。ところが…
どごおおぉぉぉぉっ!!!
ミリア「え…!!?」
カイトは攻撃をよけなかった。カイトの様子がおかしかった。

また暴走仕掛けたのかと思えば、そうではなかった。何か変だ。

どごごごごごごごごごごごごごごごごごっ！！！！

だが、マリオはお構いなしにカイトを滅多打ちにし、拳で殴り続けた。

結果…

どさっ（倒）

ミリア「か、カイト君…？」

桂「…なるほどな」

勝負がついたと確信したマリオは変身を解き、カイトが倒れてるのを見ている。

マリオ「…どうした…？あれだけ偉そうなことを言っておいて、このざまか」

銀時「…勝負は、マリオの勝ちか」

桂「だが、負けでもあるな」

マリオ「何…？」

マリオが勝ったが負けでもある、その言葉にマリオは二人を疑った。

銀時「カイト…聞こうか。手を抜いたな？」

マリオ「！！？」

銀時はカイトに質問し、殴りのめされたカイトは意識を何とか保ちながら答えた。

カイト「…あぁ……マリオは…偽ってた……だから…戦う気に、なれなかった…」
桂「やはり気付いたのか…」
カイト「…うん……さっき怒ったのも、嘘だった…マリオは、本気じゃなかったんだ……」
銀時「…勝ちを譲ってもよかったのか？」
カイト「…この勝負に勝ち負けなんて…必要あるかよ……ましてや、本気でやらない奴となんて…」
マリオ「…何のことだ…？」

この時、マリオはカイト達が言ってることが理解できないこともあって、また新たな怒りが湧きあがって来る。

桂「マリオ殿…どうやら決定的な欠点が見えたな。しかも、今までずっと直そうとしていなかったものだな」
マリオ「どういうことだ…？」
桂「はっきり言おう…カイト」
カイト「うん……マリオ…あんたの感情は…薄れてる」
桂「つまり…お主は機械のように冷たい戦士になっているのだ。それはすなわち、お主の心には魂がないと同然」
マリオ「！！？」

わけがわからない。何故機械のようにと言うのだろうか？マリオにはわからなかった。

桂「熱意が感じられんのだ…まるで、自分はこんなにできる立派な戦士である、自分の心はこんなに大人なんだと見られるように振る舞ってるだけ。魂はどうかと見ると、薄っぺらな感情にしか見えん。大方、さっき激怒するふりをして皆に醜態を見せてると思わせ、そして修行でカイトと戦って教えてもらうことで成長したことになる

…」

マリオ「それの何がいけないってんだよ!?」

桂「考え方まで美化しようとして、嘘をつこうとしてること…そして本気の感情を出そうとしない心が、お主の感情を冷たいものにし、真なる精神を弱めるということだ。ついでに言えば、ただ恥をさらすことが醜態ではない。つまり、前向きすぎる心が強さの限界を縮めているのだ。弱さを捨ててな」

マリオ「俺は弱さを捨てた覚えはない!!」

桂「では、何故あの時堂々と自分の気持ちを告白しなかった?」

マリオ「それは…!」

桂「お主は弱さを捨ててないと言いながら、捨てているではないか。その証拠に、自分の醜さ…ずるさ、薄っぺらさを認めようとしておらんではないか。いつからだ?いつから、心まで機械のようになったのだ?」

マリオ「っ…!!!」

桂の言葉に、マリオは言い返せずにいる。

銀時「…いくら考え方が良くても、体は嘘つくってのは結構あるもんだぜ。認めちまいなよ…お前の魂は薄っぺらになりつつあるってよ」

マリオ「…っ、違う!!俺には信念が…!」

桂「初心に返れ。どの道、今の強さではお前は必ず道を踏み外す。心の中でこうすればよく見られると考えてる自分を認めない時点で、お主の心は冷たくなる」

マリオ「っ!!言わせておけば…!!!」

銀時「聞き分けな。お前の感情が段々薄っぺらくなっていくのは間違いねえ。本気で悲しみ、本気で怒って、本気で熱くなれず、本気で恥さらす表情を見せることも感じることもできねえんじゃ、信念なんて輝きはしねえよ」

マリオ「さっきから偉そうなことほざくんじゃねえぇぇぇぇっ！！！！」

説教たれる二人に我慢できなくなり、殴りかかろうとしたその時。

どすっ！！

マリオ「ぐはっ！！？」

勇斗「そこまでだマリオ。もう一度、自分を見つめ直せ。自分はこうなんかじゃない、全部わかってるんだとか…美化しすぎるのはやめろ。わかっていても、全然体現してない…それでも嘘をついてることになるんだ」

突如現れた勇斗がマリオの鳩尾を殴り、気絶させた。

カイト「…勇斗、さん…」

勇斗「全く…お前もお前だ。今のマリオを相手にしたくなくなった気持ちはわかるが、だからといって無抵抗などと…」

カイト「…はは…勝手すぎた、かな……なんかあのまま戦ったら、いけない気がして…」

勇斗「…まあいい、お前達の問題だ。さっさと保健室に運んで、今夜はもう大人しくしてるんだ」

ミリア「は、はい…」

こうして、ひとまず喧嘩は思わぬ形で終結した。

はたしてこの後、マリオはどうするのだろうか？答えは、スマハツサイドで知るといいだろう。

強くなりすぎた代償、それが感情とカイト達3人は言った。また、心の熱意は感じられないとも。

カイト（…醜いのは…俺も同じさ……）

そしえ、夜は明けていった。

57話「冷めた魂」（後書き）

何この肝心な時にこの乱文；

ひとまず、日常編に戻ります

58話「これももはや日常」（前書き）

十六夜さん、風見さんのリクエスト3つを混ぜた話です。
ミリア対セレナ、幼女誘拐＆amp;ツバキさんと夢見ツキの登場です。

でも見どころはダッシャー達だったり…w

58話「これももはや日常」

きーんこーんかーんこーーん！

１３：３０

運動場

ぎいぃぃぃんっ！！！

ミリア「くっ…！」

ヴォルフレイムハート「そこおぉぉぉっ！！！」

マジェコンヌ襲撃の後にマリオとの喧嘩があったが、ひとまず平和は日々は戻ってきた。変わったことといえば、今度圭一とレナの故郷である雛見沢から依頼が来て、魔法少女に関連する調査をしてほしいという内容だったので、カイト達数名のメンバーが雛見沢に出張することになったことぐらいか。そこで、主張に向けてカイト達は準備なり修行なりするようにした。

現在は、ミリアとセレナが模擬戦してる所だ。勝負はミリアがやや有利、ヴォルフレイムハートとなったセレナはあの手この手でミリアの素早さを上回ろうとしているが、素早さは勝っても攻撃はなかなか当たらない。捌いているからだ。

ミリア（流石に受け手に回らざるを得ないかぁ…ヴォルフレイムハートになられたら、どうしても戦法を変えなきゃいけなくなるとなると…考えないといけないね）

ヴォルフレイムハート（ミリアの戦法はどこまで奥が深いのかしら

…素早さはこっちが上なのに、それをかき消す程の捌きぶり…正直、有利になった気がしないわ…）

ミリア（…よし！）

お互いに様子をうかがっていると、先にミリアが構えを右片手持ちに変えて目をつむってじっとした。

ヴォルフレイムハート（カウンター狙い？…いいわ、どの道こっちが攻めざるを得ないんだし、相手のカウンターさえしのげば勝機はある！）

だっ！！

このまま攻めると判断したヴォルフレイムハートは、ミリアに突撃してカウンターを誘う行動に出た。

ヴォルフレイムハート「雷光閃！！」

すりぬけ突きの後に雷光が走る技をはなった彼女に反応し、ミリアは目を開けて右に回避した後に風牙突で彼女へカウンターをはなった。

ヴォルフレイムハート「見切った！！」

ヴォルフレイムハートはかかったと言わんばかりによけ、薙刀に溜めた雷炎を解き放つ。

ヴォルフレイムハート「雷炎波動・大砲！！！」

ごおおおぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！

薙刀を突き出し、雷炎の波動を撃ったヴォルフレイムハート。
ところが…

ミリア「甘いのは…君もだよ！！」
ヴォルフレイムハート「えっ！？」

なんと、ミリアは地面に張り付くように体全体でしゃがんで回避したのだ。そして、足元から斬り上げるように反撃に出た。

ミリア「旋風昇竜！！！」

どばぁぁぁぁぁっ！！！

ヴォルフレイムハート「きゃあぁぁぁっ！！？」
ミリア「剛流星落破！！！！」

ずどおおおおおおおおおっ！！！！

気の爆発を起こす流星撃の最高技でヴォルフレイムハートをとらえ、そのまま地面へ落下。決定的な一撃となった。

……

セレナ「あ～んもぉ、悔しいーっ！」
ミリア「えへへ…今回はボクの勝ちだね（笑顔）」
カイト「にしても、あの大きな波動をああやってよけるとはな…考えもしなかったぜ」

結果はミリアの勝利。セレナは大げさに悔しがり、ミリアは笑顔で

喜んだ。

桂「うむ、ミリアも強くなってきてるな。これからも精進するのだぞ」

ミリア「はいっ」

カイト「さてと、いい運動したことだし、そろそろ教室に…」

ぴんぽんぱんぽーん！

一同「ん？」

『えぇ…イストワールが緊急報告をいたします。たった今、突如何者かによって生徒のフウさん、ラムさん、ロムさんをはじめとする幼女の生徒大半が誘拐されたことが確認されました。緊急事態として、生徒の皆さんは至急救出に向かってください。繰り返します。たった今……』

セレナ「誘拐…ですって！？」

カイト「何だと！？」

ミリア「大変！？すぐに助けなきゃ！！」

突然、フウちゃん達が誘拐されたという放送が入り、カイト達はすぐに救出に向かうことにした。ところが、その時…

「何だとおおおおおおおおおお！！！！？？？」

なんと、ダッシャーがカイト達の近く現れ、今の報告を聞いて叫んだ。

カイト「だ、ダッシャー！？」

ダッシャー「幼女誘拐をしただと……許せぬ…！！」

ごごごごごごごごごご…！！！

ミリア「わっ、なんかすっごいオーラ出てるよ！？」

しかし驚くのはそれだけではない。ダッシャーの横と後ろには…

学園男子生徒一同「幼女を不幸にし…！！」

学園百合生徒一同「挙句、妹すらも誘拐なんて…！！」

ブレイベル部下一部全員「許すまじ…！！！」

カイト「うおおぉぉっ！！？何だこの大群は！！？」

なんと、幼女・妹好きの者達が集っていたのだ。さらに、メレイ、教師のイシュタル、入部してない者のギルシアまでいた。

イシュタル「おのれ…！！」

ギルシア「ダッシャーよぉ…俺もついていくぜ…嫌だって言われてもな」

メレイ「同じ妹としてほっとけない……お兄ちゃん…命令を」

ダッシャー「全軍、これより誘拐された幼女の救出に向かう！！！迅速に助けだす、行くぞおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

一同全員「おおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉーーーーー！！！！！！」

オーラを放つガオガー（ガーディアンオブガスターの略称）に入部した生徒や兵士全員が士気高らかに声を上げ、ダッシャーに続くように出撃して行った。

カイト「…なあ、あいつカリスマ性あるんかねえ；」

ミリア「いつの間にあんな数の同士を集めたんだろう…；」

セレナ「ダッシャー…本当にいろんな意味ですごい人ね…；」
サルヴェス「全く…ここで本気を出してどうする；」

カイトとミリアとセレナは唖然とし、サルヴェスはあまりの熱意と信念に呆れていた。

……

今回、カイト、ミリア、セレナ、ステラ、ブラン、粟井、ほむらの6人がダッシャー達を追うように出動した。現在は、最近魔物との戦いによって荒れ果てたスラム街跡地にいる。

カイト「さて、ダッシャー達を追いかけてたらここに到着したわけだが…」
ほむら「今入った情報によると、このあたりに誘拐犯の拠点があるらしいわ。どこかにその入り口があるはずよ」
粟井「すぐに見つかればいいのだけど…」
ステラ「あ、向こうでダッシャー達がどこかに入っていってるよ！」
ミリア「見つけたのかな？行ってみよう！」

……

スラム教会地下

そこには、多くのチンピラ達とスキンヘッドの大男がいた。

チンピラ1「ナブー様、今日は大量に捕まえやした！」
ナプー「くくくく…よくやった。いやぁ、次元政府の下組織の依頼を受けて正解だったなぁ。あのおっさん共からすっげえ闇のモンスターをもらったおかげで、こんなにうまくいくたぁなあ」

チンピラ2「フォールマスターとヘルハイエナがいれば、幼女はみんな俺らの物同然ですなぁ！」
ナプー「ふひゃはははは！」

チンピラ達の下品な笑いが、誘拐されたフウ達の耳に聞こえてくる。

ラム「むうぅぅ…このバインドさえ解ければ、こんな奴らなんかやっつけるのに！」
ロム「ふるふる…（震）」
フウ「うぅぅ…何でこんな目にぃぃぃ…」

フウ達は奴らの道具と痺れ薬によって動けなくされ、恐怖している。

チンピラ3「ナプー様、早くヤっちまいましょうよ！もう俺ら我慢できやせんよぉ」
ナプー「そうだな。そろそろパーティーとい…」

どごおぉぉぉん！！！

チンピラ多数「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！？」
ナプー「ん？」

ラム「な、何？」
ロム「誰…？」
フウ「もしかして、ステラ達が助けに…！」

突然の爆撃とふっとぶチンピラ達。そこに来てくれたのは…

ガオガー部員男子生徒軍「見つけたぞ…」
ガオガー部員女子生徒軍「犯人は貴様達か…」

ギルシア・イシュタル「貴様ら…覚悟はできてるか…！！！」

ごごごごごごごごごごごご…！！（オーラ放射）

ナプー達「ひいいいいいいいいいいい！！！？？」

ダッシャーをはじめとするガオガー一同だった。

フウ・ラム「…えええぇーーーー……」

幼女生徒達「お前らかよおおぉぉぉ……」

幼女生徒達とフウ達は予想が外れたことと、助けに来たのがダッシャー達であることにテンションガタ落ちになった。

ダッシャー「かかれえぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

ガオガー部員全員「うおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！！」

どがばきずがばごどごがががががっ！！！！

チンピラ達「いぎゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

それをよそに、ダッシャーの掛け声に合わせてチンピラ達を問答無用でぼこり始めたガオガー部員達。自分達を助けてようとしてるのだが、何故か喜べない自分達がいた。ほとんどじと目で見ている。

フウ「…どうしてステラ達じゃないのかなぁ…こちらのサイドって、シリアスがほとんどメインのはずでしょう…？」

ラム「なんか…嫌な感じがするんだけど…」

ロム「……」

すたっ！（着地して来る）

メレイ「まあまあ、そう言わないであげて。さ、今助けるからまずはこの万能薬を飲んで」

フウ「あ…メレイちゃん」

メレイ「マヒを直して、その間に縄や手錠をほどいて…はいっ、次ー」

助けに来てくれたメレイは、治療と解放を手際よく行って救出を開始した。

……

戦闘開始から3分後、チンピラ達は全員討伐された。後から追い付いたカイト達は、それを見ているだけだった。

カイト「…なんか、また一段と強い集団になってるよな…；」

ミリア「これも愛が成せる賜物だねー…；」

セレナ「私達、行く必要あったのかしら；」

ステラ「あるんじゃない？あの人達も何するかわからないんだし」

ほむら「…とにかく、これで救出は完了ね。引き上げましょう」

粟井「了解ー」

ブラン「……」

これで全て終わったと思ったその時…

ナプー「待ててめえらあぁぁぁぁぁっ！！！」

チンピラ達の親玉、ナプーが高い所から声をかけてきた。逃げのび

たのだろうか。

ナプー「よくも俺達の邪魔をしやがったなぁ…！！だが、俺に勝てる奴なんざいやしねえんだよ！！」

ナプーはホイッスルを取り出し…

ナプー「出てこいっ、ダークモンスター！！！」

ぴーーーーっ！！！

……しかし、ホイッスルを吹いたが何も起きない。

ナプー「…ん？おい、出てこい！どうした！？」

ぴーーーっ、ぴーーーっ！！！

「無駄だよ。汚染モンスターならもう出てこないよ」

ナプー「！！？」

ずばあぁぁっ！！！

ナプー「げはぁっ！！？（落下）」

すると、ナプーの後ろから2人の少女が現れて、ナプーを攻撃して落とした。

カイト「誰だ！？」

そこにいたのは…

ステラ「!?ツバキっ、ツキ!!?」
フウ「二人も来たの!?」
ツバキ「やっほー、久しぶりー」
ツキ「さっき、そこの不細工男が用意してたっぽい汚染モンスターがいたから、そいつら討伐しておいたわよー」
なんと、ステラとフウの知り合いだった。
……
その帰り、二人の紹介があった。
風見ツバキと夢見ツキはステラとフウの友達であるらしく、最近会ってないこととやりたいことのために二人に会いに来たそうだ。それと、今後は学園に入学することを決めたようで、特にこれといった変わった会話はなく受け入れられ、仲間に加わることになった。
カイト「それにしても、汚染モンスターを退治しておいたって言ってたよな?手強い相手だし、多数いたんじゃないのか?」
ツバキ「あぁ、問題ないよ。私一人でも一定時間の間無双するの余裕だから」
ミリア「え、そんなに君は強いの!?」
ツバキ「まあね」
カイト(また強者現る…か。間近で実力を見てみたいな)
……
おまけ
ブラン「このクズ野郎が……いい加減死ねやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ぁぁぁっ！！！！！」

ナプー・チンピラ全員「ぎゃあああああああああああああああああああ

ああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

58話「これももはや日常」（後書き）

そろそろ裏書かないとなぁ…

59話「旅行の後の話」（前書き）

なんか急に書きたくなった話で、本家の旅行話の後日談です。
カイトの悪い部分を意識して書いてみました。

59話「旅行の後の話」

きーんこーんかーんこーーん！

１０：５５

カイト「……なあ、ミリア」
ミリア「ん？」
カイト「こないだ、皆で旅行行ったよな」
ミリア「うん、行ったね」
カイト「あの時、シャマルだけ置いてけぼりにされたよな」
ミリア「後からマシンに乗って来たけど、過激なことをしたから結局相手にされなかったんだよね」
カイト「…そう、あれはシャマルだけが悪いってことで片づけられた……でも」
ミリア「？」
カイト「…考えてみれば、忘れてた俺らも、ひどくなかったか…？」
ミリア「あ…！」

今の話は、本家で語られた旅行での出来事だ。銀時が福引で旅行にいくチケットを当てて、それで学園の者達は全員そろって海で泳げる旅館へ行って来た。だが、シャマルだけ置いてけぼりにされてしまい、その主な理由が全員忘れていたということ。後に、普段温厚なシャマルは流石に激怒してマシンに乗って追いかけてきたが、冷静さを忘れて旅館を一部壊して迷惑をかけたため、結局シャマルは除け者として迎えられなかった。
この問題は、シャマルだけが悪いとしてまとめられて終わったのだった。そう、旅館にまで迷惑をかけてしまっては仕方ないことだろう。

しかし…きっかけはどうだろうか?そしてシャマル襲撃の前に学園がしたことはどうなのだろうか?
後からそれに気付いたカイトは、反省をしているのだ。

カイト「あの騒動は確かにシャマルが悪い…それは否定のしようがない。俺もそこまで反対はしない。けど…どうしてあんなことになったのかって思うと…」
ミリア「……そうだった…ボク達は、忘れてたんだよね…何で気にしてなかったんだろう…」
カイト「…置き去りにされたシャマルは、どんな気持ちだったんだろうか…」

俯き、悪いことをしたとうかがえる表情をして話す。

ミリア「…でも、シャマルさんだって悪いよね?旅館に迷惑をかけたんだし…」
カイト「そうだけど、忘れてた俺達はそうなる前に何かできたんじゃなかったのか?」
ミリア「…それは…」
カイト「忘れてたって気付いた時、俺は理事長達がちゃんと迎えに行くだろうから心配しなくてもいいかなって思ってた。けど、その矢先にあったのが襲撃だ…」

たったったっ…(来)

ベール「後悔してるのかしら?気持ちはわかりますけど、1人で迎えに行くにしても無理があったのも事実…カイトが1人気に病む必要はないと思いますわ」
ブラン「…自分で自分を責めるのは、よくない」

カイトが話してる途中、ベールとブランが話に入ってきた。二人は、カイトがそこまで気にする必要はないと言う。

カイト「…そうであっても、シャマルを置き去りにしたまま忘れてたんだ。しかも、気付いた後も何もしなかった。それを思い出すと…俺は一切何も悪くないで片づけるのは、俺には出来ない…」

ベール「カイト…」

またカイトの悪い癖が始まった。カイトは仲間想いで心が繊細であるが故に、たまにこうして余計なことまで考えてしまう事がある。仲間達から見て、どうも好ましくない癖だ。

ブラン「…でも、シャマルも迷惑をかけた。それは忘れちゃ駄目」

カイト「……うん…」

ベール「そんなに罪悪感を持っているのでしたら、後でシャマルに何か贈り物をあげてはどうかしら?きっと、それだけでも十分カイトなりの謝罪になりますわよ」

カイト「…贈り物、か…そうするよ」

カイトはベールの提案を受け、立ち上がった。

カイト「なんか変な空気にしちまったな…ごめん。頭冷やしてくるよ」

そう言って、カイトは教室を出て行った。通り過ぎる横にいた銀時と桂は、今のカイトの様子を見てミリア達の元に行きながらぼやいた。

銀時「ったく…何であいつはいつも考えこむんだか。自虐的でネガ

ティブだろうが…」
桂「カイトの悪い癖だ。ちょっと罪悪感を感じただけで、すぐにあれこれ考え込む…大袈裟だというのに」
ベール「そうですわね…ある意味、喜怒哀楽が激しい子なんでしょう。最も、ああして深く考える所がカイトの長所でもあるのだけれど」
ブラン「…でも、悪い所ばかり見てしまう癖もある。カイトは、もっと自分に自信を持つべき」
「そうだな…それが、あいつの大きな課題さ」

そこに、ちょうど掲示板のポスター張り替えの仕事をしているクルトとカノンノが来た。

クルト「あいつは謙虚なあまり、今でもああして自分に不動の自信を持てずにいる。俺も自信を持つように教育してるけど、どうしてかな…難しい子なんだよ」
ミリア「お父さん…」
銀時「難しすぎるってーの。ありゃあれだ、いかに理事長達大人でも簡単にびしっと出来る程の奴じゃねえ。ミリアも似たり寄ったりだが、特にカイトの奴は筋金入りだ」
カノンノ「否定はしないよ…けど、あれもカイトの優しさなんだって私は思うの。だから、あまり強く言わないであげて？」
ベール「…そうですわね、無理に厳しくなれとか言ったら、それはそれでカイトが余計に苦悩しそうですもの。程々にしておきますわ」
桂「あの優しさがカイトの強さの1つであり、同時に弱さでもある…か。まあ、カイト自身の問題だ。今はここまでにしておくとしよう」

カイトのことを無理に言っては酷というもの。自分達は思想や正義を強制する人間ではないのだ。カイトの話は、このあたりでやめる

ことに一致した。

桂「だが、今回の件は決して他人事や軽い事で片づけられるものではないのもまた事実。今後、生徒の誰かを置き去りにするといったことが何度も続けば、それはやがて大きな問題になろう。もしそれをマスコミや民衆に知られれば、たちまち批難や批評が大きくなる。カイトが余計に苦悩することを避けるためにも、注意せねばならん」

銀時「おいおい…そこまで固くならんでもいいだろ」

クルト「銀時の言う通りでもある。けど、たかが瑣末…されど瑣末。仲間一人だけでも置き去りにしたまま放置すれば、その仲間が牙をむくなんてのはよくある話だよ。今後、俺達も同じ事を繰り返さないように気を付けよう。シャマルのためにも」

ブラン「…努力はする」

銀時「はぁ…まあいっか。にしても、シャマルの奴はどうしてるんだろうな？」

カノンノ「私も、後で様子を見に行くことにするよ」

話はまとまり、これで今の話は全て終了した。彼らはまた授業に、クルトとカノンノは仕事に戻る。

時間はゆるりゆるりと過ぎていくのみ。

……

その夜

シャマル「……カイト君…まさか、こんな私に贈り物だなんてね」

シャマルは一人、部屋でカイトが夕方に送ってきたクッキーを見て、ぽつりとつぶやいた。

シャマル「…私、いつからこんなになっちゃったのかしら…」

罪悪感を後から抱くシャマルは、そうつぶやいた。

59話「旅行の後の話」（後書き）

カイトの一番悪い癖は、まさに深く考えすぎる所だと思ってます。
もう1つ、自分に不動の自信を持てないのも大きな課題ですが。

実を言うと、シャマルが大部分悪いにしても、シャマルだけに罪をかぶせるのは酷いかなって気持ちになったのが本音です。

自分で自分を責めるなって言われましたけど、どうしても…ね。

60話「ミニカイト」（前書き）

本家より、幼児になるカイトの話。

ただし短いです。

60話「ミニカイト」

こけこっこー！

カイト「ん…ふあぁぁ……朝か…」

いい朝を迎えたと頭で思うカイトは起き上がった。
しかし…

カイト「…？」

何だか体の感じが変だ。そこで、まず自分の体を見てみた。

カイト「……え…？」

異変は、それだけではっきりとわかった。
そして…

ミリア「ん……ふぁ～……カイト君、おはよー……あれ…？」
カイト「…？ミリア…？」
ミリア「…え…？……カイト君…？なんか、小さくなってるよ…！？」

起きたミリアの言葉で確信がついた。
幼児体型になったのだ。

カイト「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！？？？」

……

９：００

教室

ミリア「というわけで、カイト君が幼児になっちゃってたんだけど…；」

女子生徒達「きゃーーーーーーー！可愛いーーーー！！ｖｖ」

このことを仲間達に報告したところ、大半がそのカイトの姿にびっくりした。男達は度肝を抜かれるほどの変化ぶりに唖然とする者が９割。中でも、カイトの幼児姿が可愛らしいため、女子生徒達には大人気となった。鼻血を出す者もいれば、抱きしめたいと要求する者もちらほら。カイトはやめろよと言いながら、持って行かれるのを避けている様子。慣れていないからだろう。

最も、ビビやホーリアスは興味ナッシングだが。

ミリア「…一体、どうしてこうなったのやら；」

カイト「くっ…なんでこうなっちまったんだよ…；おれ、きのうなにかしたのか？」

カイト、幼児化との区分のために全てひらがな表示にしてみた。

レオン「ううむ…これはもしや、毒キノコの類の可能性が高いな」

カイト「どくきのこ？」

レオン「何度かこのような異常状態を見たことがあってな。確か、ミニマムマッシュっていう白いキノコを食べるとそのように幼児化すると聞いている。昨日は特に特別な様子はなかったことだし、恐らく食事で食べた可能性が高いと思うぞ」

カイト「しょくじ…そういえば、きのうのみそしるのきのこ、なん

かいつもとちがってたような…」
ガレーナ「…そういえば、私の見間違いかもしれないが…昨日、森野茸がいたずらに白いキノコを入れていたのを見た気がするぞ」
原因は食事。そして毒キノコを食べたせいで今の状態になったのではとレオンは言う。その正当性は、ガレーナの目撃情報と普段の森野茸の様子でばっちり重なって当てはまった。
カイト「あいつがくろまくか……」
ミリア「よく見るべきだったね…カイト君だけキノコが違うってことに気付くべきでもあったよ；」
ミリアはミスったというような表情で言う。たまには、食事のメニューをじーっと見てみるのもいいのかもしれない。
レオン「…とにかく、お前はいろいろと特殊な体質と性質持ちだから、今日一日我慢すればすぐに元に戻るだろう」
カイト「けっきょくがまんするしかないのか…」
ガレーナ「仕方あるまい…たまにはこういうこともあるものだ」
ミリア「大丈夫だよ、カイト君はボクがしっかり守ってあげるからね？」
カイト「ありがとうミリア…たすかるよ」
こうして、カイトはミリアにお守みたいに守られることとなったのであった。
今回は特にこれといったことはなかったので、普通に我慢して過ごしたとだけ伝えて短く終わることにしたいと思う。
ただ、変わったことがあったとすれば、以下のことがあったとだけ

伝えよう。

1．カイトのお守をするミリアの姿に、タリスが写真とるなり夢中になっていた。写真は後にミリアの手で処分されたが。

2．昼ごろにレナが耐えかねてカイトをお持ち帰りしかけた。大勢の仲間達と共に、レナからカイトを取り戻すのに数十分かかった。

3．学園にモンスターが侵入してきた時に、なんとカイトが幼児体型のまま戦いに挑んだ。戦力は落ちていたものの、それなりに3等身キャラのように頑張って活躍したとか。

4．女子生徒達が幼児カイトにチャームされて、一度追いかけまわされることがあった。

5．レーティアの遊びでコスプレさせられたりした。

6．ビビが森野苺からミニマムマッシュを分けてもらい、ミリアを幼女姿にしようと目論んだがクルトとカノンノに阻止された。

7．百華も上記に賛同的だった様子。

8．ビビは今日も胸とお尻がプリティー。らほーいって挨拶されると萌える。

9．ビビがふたなり化してアイリやいろはを襲っちゃえばいいと思った。

10．ビビｈｓｈｓ。ビビたんはぁはぁ。

そして翌日、カイトはこう語る。

カイト「…幼児体型じゃいろいろやりづらいなぁ…できればこれっきりにして欲しいぜ；」

以上、では最後にアイリからのお言葉を1つ頂いてさよならとする。

アイリ「皆様、幼児の可愛さに心を奪われてしまうのはよくある話ですけれど、ちゃんと幼児のご機嫌と気持ちに合わせることもお忘

れなく。…え?私ですか?一時期、別の惑星でとあるおチビちゃんの世話をしたことがありますわ。その時は、ちょっと不本意でしたけど…今はどうしてるのかしら……っと、失礼しました。詳しくお聞きしたければ、直接私に聞きに来てくださいませ。では、ごきげんよう」

60話「ミニカイト」（後書き）

カイトも大変です。

さて、ネプ姉妹の長編いくとしますか。

61話「次の序章」（前書き）

ネプ姉妹＋αの長編開始です。
あと、ようやく自分の中でもう一人の主人公達が加入します。

61話「次の序章」

2：20

月夜の下、明りがほとんどなくなった街をタワーの上から見下ろす者達が2人いた。
1人は、学園に襲撃した旧世代のマジェコンヌ。

マジェコンヌ「…この世代…何か嫌な混沌を感じるな…」
「おやおや？悪を貫く元女神様がそんなことを言うとは。ひょっとして、ツンデレかな？」
マジェコンヌ「誰がツンデレか！…気に入らん物が多く見えるだけだ。醜い正義というものがあちこちにあってな…おまけに、自滅を望む悪までいるときたものだ」

もう1人は、赤髪で黒い鎧と小手と義足を身にまとう女性である。

「まあ、わからないでもないよ。こんなご時世だもの」
マジェコンヌ「…で、お前はどうなのだ？日切」
日切「あたし？…あたしはただ、秩序を壊すだけだよ。それがやりがいってもんでね」

日切と呼ばれた女性は、床に座っていて両足を下におろした状態で答えた。

日切「元女神様も、あたし達に近い人間なんじゃないかって思うけど…そのあたりはどうなのかな？」
マジェコンヌ「…さあな。お前達は目的を持たんようだが、私は違う。いずれは敵対しそうだと答えよう」

日切「ちょっぴり残念だなぁ…マジェっちなら私達になじみやすそうだけど」
マジェコンヌ「マジェっち言うな。…だが、今は互いに敵は同じ。一時期の間だけ手を組むことにした以上、最低限のことはするべきだ」
日切「うん…あたしは6割自分の意志でマジェっちに興味持ってのことだけどね」
マジェコンヌ「…して、私はもうしばらくしたら犯罪組織にひびを入れてくる。お前はどうする？」
日切「今、雛見沢でインキュベーターが怪しい活動をしてるそうだし、何やら他の集団も集いつつある。ちょっと割り込んでみて、気に入らなかったら暴れてくるよ」
マジェコンヌ「わかった。だが、せいぜい救世の悲剣には気をつけろ」
日切「あぁ大丈夫。あたし達はああいう存在相手には慣れてるから」
2人はこれからどうするのかを話し、互いに意向を確認し合ったのだった。これからまた、大きく大事な戦いが始まる。これは、その序章であった…

……

9：00

超次元学園・教室

銀八「えー、今日から朝早くカイト達が出張したからタイミング悪いが、新しい入学生を紹介だ」

この日、カイトと一部のメンバーは任務として雛見沢に出張してい

た。そんな今日の朝、学園では左右に紙を束ねた赤髪で身長が低く、セーラー服を着た幼女らしき少女と、緑髪で身長が高く同じくセーラー服を着ている少女が新たにメインクラスへ迎えられていた。

「初めまして、こなたお姉ちゃんの従妹の小早川ゆたかです。お姉ちゃんに紹介されて、今日からここに通うことになりました。よろしくお願いしますっ」

「…岩崎みなみです。同じく、今日からここの生徒となりました。よろしくお願いします」

ちなみに、こなた達も出張している。

百華・ギルシア「おおぉ…可愛い幼女が来た…！」

はやて「もう一人の娘は物静かそうやな？でも、どっちも悪い人じゃなさそうなのは間違いないな」

ラム「二人共、仲良くなれそうー♪」

レオン「ゆたかとみなみだな？こちらこそ、よろしくな」

ゆたか「は、はいっ！（笑顔）」

みなみ「はい…（礼）」

銀八「ちなみにこなたから伝言を受け取ってるが、ゆたかはピュアだから汚した奴は聖剣の錆にするそうだ。変なことはしないようにー」

従妹のゆたかと同級生の親友みなみは、温かく超次元学園に迎え入れられた。

……

一時間目の授業の後

ラム「それにしても、こなたちゃんの従妹さんも入って来るなんてね。一度会ってみたかったんだ！」
ロム「私も…」
キュート「確か、家は一緒に住んでるんだっけ？」
ゆたか「うん、最近まではお姉ちゃんが先にここに入学してしばらく一緒にいなかったけど、普段は一緒に暮らしてるの」
ビビ「へえー、そうだったんだ」
ゆたか「お姉ちゃんがね、ここはすごく楽しいし良い学園だよって言ってたから、私も後からここに入学することにしたんだ」
ユニ「成程ね。みなみも同じ感じ？」
みなみ「うん…私は聖譲学園にいるみゆきさんに紹介されてここに来た…」

ゆたかは元気そうに、みなみは性格で口も静かだがちゃんと答えた。

スバル「まあとにかく、二人共これから仲良くしようね。私達、皆歓迎するから」
キュート「何かわからないことがあったら、気軽に聞いてね」
ゆたか「うん、ありがとうっ（笑顔）」
みなみ「ありがとう…（微笑み）」

こちらでは、こうしてゆたかとみなみを受け入れ、仲良くなり始めていた。学園では、今日も平和な時間が流れそうである。

……

一方、カイト達は…

カイト「ええと、このバスに乗ればいいんかな？」
こなた「それであってるよ」

かがみ「じゃ、早く乗りましょう」

こちらでは、雛見沢に行くためのバスに乗る所だった。

今回、カイト達のメンバーは以下の通り。

カイト、ミリア
圭一、レナ
こなた、かがみ
ネプテューヌ、ネプギア
ほむら、シルフィ
春香、千早
セレナ、ベル
フウ、ステラ
なのは、フェイト

ちなみに、フウ達についてはカイト達と一緒に戦えば、何か面白いことがありそうだと理事長が言ったとか何とか。

それはさておき、確認が終わったのでカイト達はバスに乗る。

「あれ、カイト…？」
カイト「…ん？」

その時、一番後ろの席に座っているある者に声をかけられた。

ミリア「…あ！」
「ミリアちゃん！」

それは2人の男女だった。

金髪で青い服と革色の長ズボンとブーツ・グローブを着ている少年と、長い金髪を2つに大きく分けるように結び（結び目は髪の先あたり）、生足を晒す程スカートが短くて袖口が広く、茶色の布に袖口とスカートの裾に黄緑と白の線の模様が入ったローブ、グローブとブーツを着ている少女だ。

カイト「ラムザ!?ラムザなのか!?」
ラムザ「やっぱり!久しぶりじゃないかカイト!」
ラルム「ミリアちゃんも久しぶりだねっ!」
ミリア「うんっ、二人共久しぶりー♪」

どうやら、ラムザという少年・ラルムという少女はカイトとミリアの知り合いだったようだ。

圭一「あれ、知り合いか?」
カイト「あぁ、二人旅をしてた時期に一度会ったんだ」
ラムザ「カイトの仲間かい?初めまして、僕はラムザ・ベオルブ」
ラルム「私はラルム・ライトハートっていうの。よろしくね」
シルフィ「ラムザにラルムですね?こちらこそ、初めまして」

カイト達の仲間という言葉を聞いた仲間達も、ラムザとラルムに対して好意的に挨拶と自己紹介をした。もちろん、ラムザ達も大歓迎の様子だった。
もう少し詳しく話すと、ラムザとラルムは二人旅をしながら人助けをしている仲間であるらしく、カイトとミリアは二人と会うのは今ので2回目。だが、1回目の出会いの時点でいろいろと話や気が合ったそうで、とても仲良しらしい。ちなみに、今回この雛見沢意行きのバスに乗っていたのも、旅の一環とのことだ。

……

しばらくした後、バスは雛見沢へ向けて出発。カイト達は到着までの間、それぞれ会話したり眠ったりしながら待つのだった。
そして、カイト達とラムザ達も…

ラムザ「そうか…超次元学園っていう所に入学して以来、ずっと生徒という形の一員として頑張ってたんだね」
カイト「今思えば、いろんなことがあったよ。皆と出会えたおかげで、俺もミリアも強くなり…知りたいことも、知るべきことも、たくさん学んできた」
ミリア「ラムザ君とラルムちゃんは、今でもずっと二人旅をしてるの？」
ラルム「うん、今も変わらずに旅を続けてるよ。たくさんの人達と出会いながら、私達のやりたいように生きる…相変わらずだよ」
ラムザ「異端者という汚名もそのままだけどね」
カイト「そっか…お互い、心はあの時のままってわけだな」

初めてで出会った頃から心は同じであることに、４人は嬉しく思って互いに笑顔あるいは微笑した。

ラムザ「けど、超次元学園の話を聞いてると興味が湧いてきたな。それに、革命組織ブレイベルのことも気になるよ」
ラルム「いろんな人達がいるんだよね？私も会ってみたいなぁ」
カイト「入学するなら大歓迎だぜ。俺達も、仲間達も皆温かく迎えるよ」

カイトは二人の興味を煽るように、入学するならば歓迎する意を伝えた。二人は教会の敵であるが、それも超次元学園ならば受け入れてくれる。かつて、自分達もそうであったように。

ラルム「…じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな。私も、超次元学園に入学するよ」
ラムザ「僕も、そうしようかな。超次元学園のこと、そこに集う者達のこと…いろんなことを知りたいし、学園が抱える問題があるのなら力になってあげたい。それに…旅の休憩所っていう場所も欲しい所だったんだ」
ラルム「世界中をだいぶ回ったから、そろそろ旅に一区切り入れたいって思ってたの。超次元学園なら、まさにうってつけかもしれない。今後はそこで生活しながら、空いた日に世界を回ることにするよ。それでもいいんだよね？」
ミリア「うんっ、きっと二人も気に入るよっ♪」

学園に入学すると言ったラムザとラルムに反応し、1つ前の席にいたネプテューヌが顔を出してきた。

ネプテューヌ「決まりだね！じゃあ出張が終わったら、理事長に二人の入学をお願いするよ！」
ラムザ「ありがとう、これからよろしく頼むよ」
ネプテューヌ「こちらこそよろしくね♪あと、もし二人に何か困ったこと、抱えてる問題があったら、遠慮なく私達に言ってね。私達は喜んで手伝うから！」
ラルム「えへへ、ありがとうネプちゃん」

ネプテューヌの言葉に、二人は笑顔で返した。ネプテューヌも、二人が入学するのがとても嬉しそうな様子だ。

ラムザ「じゃ、雛見沢の観光ついでに君達の任務の手伝いをしても問題なさそうだね」
カイト「お、本当か？」
ラムザ「あぁ、カイトとミリアは仲間だし、ネプテューヌ達も新し

く仲間になってくれたんだ。今後も、僕たちも君たちに喜んで協力するよ」

ネプテューヌ「わあ、ありがとうラムザ君、ミリアちゃん！」

ラムザ「いいって。僕達がそうしたいだけだから」

ネプテューヌ「あ、カイト君とミリアちゃんと同じようなこと言うんだね。なんか似た者が来たって感じ♪」

ラルム「ふふっ…そうかもしれないね」

最近、ネプテューヌはカイトとミリアについて呼び捨てだったが、今はどういうわけか君・ちゃんづけするようになったらしい。そっちの方が馴染みやすいからだろうか。

こうしてカイト達は楽しい一時を過ごしながら、雛見沢へ向かうのであった。

次の戦いまでの時間をじっくり堪能しながら…

61話「次の序章」（後書き）

ラムザ、ラルム、あとゆたかとみなみが加入しました。

今後、ラムザとラルムもカイト達に並ぶ活躍と出番を書けるよう頑張りたいです。

第一回メインキャラまとめ（前書き）

オリキャラ&半オリキャラ、そしてメインとなる版権物キャラのまとめです。
今後はこの形で紹介&追加していく予定。

第一回メインキャラまとめ

『オリキャラ&半オリキャラまとめ』

カイト・ネイラード

年齢…１６歳

性別…男

姿…黒髪で黒いシャツと小さなマントのように前を全てあけている緑色の上着・藍色のジーパンを着て、革のバトルブーツをはいている。

瞳…エメラルド色

戦闘スタイル…剣術が主で、格闘もたまに使う。

グラニデ生まれの少年で、自称不良。ミリアとは双子で恋人同士。アナザーストーリーの主人公。

熱血で表情豊かな性格で仲間想いであり、剣技を得意とする。他にも優れた洞察力と読心術を持ち、さまざまな人々の心理を読みとることができる。神や王などの身分も関係なく、いつも私語で話す。ただ、仲間を大切にしようとする気持ちが強いがゆえに、たまに深く考えてしまうことがある。

『力であって力じゃない』という能力があるためなのか、無双できるほどの実力を持つ。カイトとミリアは『心』が根本であると説明しているが、現在ではまだ謎が多い。さらに、仲間に何らかの加護を与えることができ、その効果は様々である。これについてもいろんな考察がされているが、謎のままである。

学園に入学後、復活したエリート学園をミリアと二人で襲撃した際、危機に陥った所をネプテューヌ達に助けられて意志を示されたことをきっかけに、学園に溶け込みやすくなった。また、デニーの部下

の襲撃を通してミリアや仲間が傷付き、失うことへの恐怖を強く持ち、守れなかった時には次も守れないと失意していたが、理事長からの特別訓練を受けることで恐怖に打ち勝ち、あらゆる恐怖に負けない心、大切なものを何が何でも守り通す信念を改めてを持った。入学時から、ミリアと共に大きな活躍を見せており、現在も実力が少しずつ強くなっている。

ミリア・ネイラード

年齢…16歳
性別…女（僕口調）
姿…雪のような白色の短髪で蛍光色のワンピース（スカートは短め）と下に黒いハーフパンツを着て、革のバトルブーツをはいている
瞳…エメラルド色
戦闘スタイル…槍術が主で、魔法も使える。
女体…中クラスの胸、少女らしい体つき

カイトと同じ生まれで、よく一緒にいる少女。カイトとは双子で恋人同士。アナザーストーリーのメインヒロイン。
明るくて大胆だが心優しい性格で、槍の使い手。魔法も使える。また、カイトと同じく読心術も持ち合わせており、洞察力もかなりのもの。育ちによるものなのか、自分のことをボクと呼び、味方を呼び捨てしない。胸は中クラス。
カイトと同じ能力を持つらしいが、カイトと同じく詳しいことはまだ明らかにされていない。とはいえ、カイトと実力は互角のようだ。
加護についてもカイト同様に、謎な部分が多い。
学園に入学後、復活したエリート学園をカイトと二人で襲撃した際、危機に陥った所をネプテューヌ達に助けられて意志を示されたこと

をきっかけに、学園に溶け込みやすくなった。また、ゾディアックの襲撃を受けた際に永遠の悪夢を植え付けられ、カイトや仲間達が傷付き、失うことへの恐怖を強く持っていたが、理事長からの特別訓練を受けることで、惨劇を回避するために自分が強くなってみんなを守る心を持った。現在も、カイトと共に少しずつ強くなっている所で、活躍も続いている。

むふふな話をすると、たまにカイトとHする時があるが、その時は性格が一変して性欲が強すぎるドMとなる。その淫乱さはサキュバスの様らしいが、冷静さはいつでも戻すことができるようだ。

かつて一度だけスケベな男達にレイプされそうになったことがあったが、男達がミリアに触れた瞬間たちまち全身の骨が勝手に折れて動けなくなったらしい。後に、助けに来たカイトに木刀で滅多打ちにされて再起不能になったとか。（死んではいない）

百合についても例外じゃないらしく、『ミリアを抱くことができるのはカイトだけ』のようだ。

ダッシャー・ガルネイバル

年齢…17歳

性別…男

姿…黒い学生ズボンと白いカッターシャツの上に黒いジャンパーを前開けで着ていて、少し荒れた金髪

瞳…青色

戦闘スタイル…戦斧

革命組織ブレイベルの総長である少年。正義感あふれてまっすぐで、熱血で面倒見のいい性格で、カイトやミリアとも仲がいい。超次元学園への革命で二人と衝突があったが、絆が壊れることはなかった。

現在は、超次元学園と同盟を結んで支援活動や魔物討伐などに励んでいる。
日常面でも、たまにボケたり突っ込みしたりいろんな一面があるが、中でも妹であるメレイには恋愛感情を抱いている上に両想いであるため、よくメレイ絡みでボケたりキャラ崩壊することが多い。また、他の妹好きを支援するために『妹を愛で守ろうクラブ』なる部を作っていて、部下や同士達一部と共にいろいろやってるとか。

メレイ・ガルネイバル
年齢…１０歳
性別…女
姿…金髪のツインテールで、両肩を露出した黒色のベストとハーフパンツの来ていて、同じく黒色のグローブと靴を付けている
瞳…青色
戦闘スタイル…格闘術
女体…ぺったんこ、幼女の体つき

革命組織ブレイベル小部隊隊長の一人として活動している、ダッシャーの妹。両親がいて親離れしているのだが、たまにダッシャーと二人で贈り物を作って手紙と一緒に送ったりしている。かつてカイト達と一時期共に戦ったこともあって、カイトとミリアのことも心配していた。
性格はヴィヴィオとほぼ同じだが、変わっているのは兄ダッシャーと恋愛の意味で両想いであること。そのため、ダッシャーにのみお兄ちゃんと呼んでいる。ちなみに、たまにダッシャーとムフフすることもｗ
格闘術をたしなんでおり、組織の中でもそれが目立って信頼も得て

いる。

サルヴェス・モンディーア

年齢…17歳
姿…茶髪で鋼の鎧と革色のズボンを身につけている
瞳…紫色
戦闘スタイル…格闘術&大地の力を借りた戦法

革命組織ブレイベルの副長で、冷静ながらも熱い性格で多くの恋愛を見守り、見届けることを主に絆や人のつながりを大事にする男。別名、愛を守護する者。総長からも信頼が厚く、誰かの恋愛が悪かったり邪魔されたり寝取り奪われたりなど、本来あるべき恋愛の美しさを汚すものに対して誰であろうと許さない心の持ち主。大地の力を主にして戦う格闘家。カイト達とは知り合いで、一度恋愛について話し込んだことがある。ただ、ダッシャー達が妹絡みでボケをする際には結構突っ込みに回っている。それでもちゃんと見守るあたり、まんざらではないようだ。

クルト・ヒュージ

年齢…16歳（外見）
姿…黒髪で緑色のラメラーレザー・グローブ・ブーツを着ている
瞳…エメラルド色
戦闘スタイル…剣術（大剣や二刀流も可能）

出演作品…テイルズオブレディアントマイソロジー２（自作主人公）

グラニデのディセンダーであり、異例の生まれ方と試練と経験によって、心の加護を誕生させた少年。そして、カイトとミリアは自分とカノンノの子供である。年齢がカイト達と一緒に見えるのは、ディセンダーの特質によるものだが、詳しくは後ほど。
性格は大人になったカイトそのもので、面倒見もいい。実は、カイミリ以上にカノンノとラブラブすぎて、純愛だけどノロケ好きなため、ギルレーみたいなオーラが出せたりする。ディセンダーとして生まれたばかりの頃は、ただ人やグラニデを救いたいという心のみだったが、様々な経験を経て『考えること』『自分の意志を持つこと』『自分から選択すること』を学び、人間らしさを得ていった。
結果、グラニデを救った後も世界中に帰らず、恋人となったカノンノや仲間達と共に生きる道を選んだ。今は、人の心について深く考えそして見ている。
実力は心によって変動するが、今はカイト達より上で、心の加護もより未知数。普通の心理状態でもチート能力大半が通じない。

カノンノ・イアハート

年齢…１６歳（外見）
姿…桃色髪で左にヤシの木を形作る髪飾りやリボン、水色と白の学生服にも見えるワンピースと白い手袋と靴を着ている
瞳…エメラルド色
戦闘スタイル…大剣・魔法・回復
女体…中クラスの胸、少女らしい体つき
出演作品…テイルズオブレディアントマイソロジー２

グラニデを生きていた人間で、マイソロ2のメインヒロイン。
憧れであり今では恋人であるクルトに案内されて受けた試練によって、人間としての生を全うした後に転生して異質な存在へと変わったおとぎ少女。カイトとミリアの母親であり、カイトとミリアを生んだのは転生後（心の加護もその時についた）。年齢については後ほど。
性格は明るくて心優しく、誰かのために頑張ること、頭をなでなでされるが好き。また、よく夢見ることもあったり、クルトと一緒に大きな仕事もこなしたり、大人な部分をしっかり持つ少女というイメージが強い。それもあってか、夫にあたるクルトとはよくイチャイチャすることがあり、オーラも出してしまうほど。ただ、度が過ぎた行いなどによってストレスが大きくなりすぎると、怒る表現の1つとしてヤンデレになることもしばしば。ギャグでもクルト絡みなどでヤンデレになったり、お化け屋敷などの仕事で、ずば抜けた表現力とアドリブ力とヤンデレでナンバーワンをもらったり、とにかく万能に近い。
今の所、実力と心の加護についてはカイトとミリアよりも上。
クルトと出会い、そして様々な経験をしてきたこともあって、原作から成長した感じを保ちながら、クルトと共に新たに人の心について深く考えそして見ている。

ラムザ・ベオルブ

年齢…18歳
姿…金髪で青い服と革色の長ズボンとブーツ・グローブを着ている
瞳…藍色
戦闘スタイル…剣術・格闘主体、他にも様々な物理戦術を使う。魔法もそこそこ使える

出演作品…ＦＦＴ（ファイナルファンタジータクティクス）

ＦＦＴの主人公で、イヴァリースで生きる貴族ベオルブ家の人間。正義感が強く、誰かが犠牲になるのを見過ごせない優しい性格。ベオルブの人間として盗賊討伐などをしていたが、あるきっかけで貴族と平民の身分差と差別の渦、そして『裏』を知った後に全てを捨てて流浪の身となる。

後に傭兵として生きるなどしていたが、自然に己の正義と理想、そして意志を見出したことで不屈の心を持ち、やがて教会や王族・そしてベオルブ家と対立するようになる。その果て、アルテマを倒した後はパートナーであり最愛の者であるラルムと共に人助けをしながら旅をしている。ちなみに、ラムザとラルムはイヴァリースで起きた獅子戦争での全面激突を一度阻止したという功績を持っている（もちろん異端者の烙印を押されていたため、世間に知られてないが）

僕口調で純粋な人柄で、プライベートではおちゃめな面を見せることも。今作では原作をアレンジして、熱血で信念を貫くオリジナリ本編以上にまっすぐなキャラとなっている。

ラルム・ライトハート

年齢…１８歳

姿…長い金髪を２つに大きく分けるように結び（結び目は髪の先あたり）、生足を晒す程スカートが短くて袖口が広く、茶色の布に袖口とスカートの裾に黄緑と白の線の模様が入ったローブ、グローブとブーツを着ている

瞳…藍色

戦闘スタイル…剣術・風水術・魔法全般をバランスよくこなす

女体…中クラスの胸、少女らしい体つき
出演作品…ＦＦＴ（汎用女ユニットより自作）

ＦＦＴの汎用ユニットである女風水士より、独自に設定した半オリジナルキャラ。
特殊な風水一族の長の１人娘で、過去に一族が滅びてたった１人だけ生き残った風水士の少女。落ちぶれて人助けの名目で、盗賊扱いされている反貴族団体に仲間入りしていたが、人を殺すなどの卑劣をつくしてでも生き延びようとするやり方に嫌疑感や罪悪感を抱き、貴族アカデミー襲撃の時に反貴族団体を裏切った。直後、反貴族団体に殺されかけたが、ラムザに助けられた。はじめはすぐに別れるも、夕方に再会。そしてラムザの人助けの心に共感し、ラムザと行動を共にするようになる。
後に、さまざまな出来事の中でラムザと同じ理想『誰かに優しくできる環境』のため、そしていつまでもラムザの力になって共に生きるために、共に歩き続ける。その果て、アルテマを倒した後はラムザと共に人助けをしながら旅している。
とても清らかで心優しい少女な性格（だわわよ口調ではない）で、淑女らしい振る舞いもする。ミリアとは性格や気持ちが似ているが、ミリアは明るさや大胆さが上で、ラルムは優しさや純心さが上。ただ、ラルムはラムザとＨする時は淫乱だったりする。

シルフィ・グランドール

年齢…１５歳
姿…金色の長髪で青と白の花をイメージしたベストと青いカボチャパンツ、青いブーツを着ている
瞳…藍色

戦闘スタイル…レイピアと短剣の二刀流、格闘少々、風と闇の属性も駆使
女体…Fカップで美尻、くびれもいい

貧困層の人間達に慕われていた貴族、グランドールの1人娘。だが、エリート学園のイオドによってグランドールの家族や彼氏とその家族を権力と陰謀で殺されてしまい、イオドにさらわれていた。ところが、あと少しでイオドに強姦されそうになった時、怒りによって凶暴になったカイトがイオドを襲撃し、シルフィはカイトに助けられた。後に、安全な環境で暮らすようにされていたが、どうしているのかは不明。
いつも物静かで心優しく、お姫様口調で上品に振る舞う。しかし、キレると狂気を剥き出しにして暴走することがある。付き合っていた彼氏いわくヤンデレの才能があるとかないとか。

『版権物レギュラーキャラまとめ』

ネプテューヌ

出演作品…超次元ゲイムネプテューヌ1・mk2
性別…女
年齢…14歳くらい（外見）
戦闘スタイル…剣術&格闘
女体…胸も含めまさに少女（女神の場合、やや巨乳でなかなかセクシー）

ゲイム業界の大陸プラネテューヌを守護する女神で、かつて犯罪組織マジェコンヌによる世界滅亡を阻止し、そして犯罪神を倒した者

の1人。その後の生活の過程で、自分達の世界の他にもいろんな世界があることを知り、また一度自分の存在と性格等について失意にあったがイストワールに励まされた立ち直った時期に、ネプギアとイストワール3人そろって超次元学園に最初に入学した。
とても活発で元気で正義感が強く、わがままだけど素直で人のために頑張れる性格。ただ、よくメタな発言をしたり、アッパーな一面も。妹であるネプギアは大変好きで、いつも一緒にいることが多い。変身すると女神パープルハートになり、抜けた所あれど冷静沈着で凛々しい性格になる。超人的な身軽さと合わせて素早さはトップクラスなため、無双級の強さを持っている。

ネプギア

出演作品…超次元ゲイムネプテューヌmk2
性別…女
年齢…13歳くらい（外見）
戦闘スタイル…剣術
女体…中クラスの胸、少女らしい体つき

ゲイム業界の大陸プラネテューヌを守護するネプテューヌの妹で、女神候補生でありながら犯罪組織マジェコンヌによる世界滅亡を阻止し、そして犯罪神を倒した者の1人。ネプテューヌとは性格が違って真面目でしっかり者だが、機械オタクだったり何かにはまりやすい一面もある。また、姉であるネプテューヌが大好きで姉想いであるため、ネプテューヌの世話焼きもまんざらではないようだ。
犯罪組織と犯罪神を倒した後、その後の生活の過程で、自分達の世界の他にもいろんな世界があることを知り、また一度自分の無力さと悪い部分について失意にあったがイストワールに励まされた立ち

直った時期に、ネプギアとイストワール3人そろって超次元学園に最初に入学した。
変身するとパープルシスターになり、銃による攻撃も可能になる。しなやかな剣捌きと、バランスの良い戦法で戦うネプギアだが、火力はネプテューヌと並んで異常にある。そのため、女神候補生の中でも優等生な立ち位置。

天海春香

出演作品…アイドルマスター
性別…女
年齢…１８歳
戦闘スタイル…刀・居合
女体…中クラスの胸（千早よりはある）

７６５プロのアイドルとして活躍している少女。明るく元気だが、毎日転ぶといったドジをしている。歌うことが大好きで、歌で人々を元気にすることが春香の願いである。また、千早には憧れを持っており、そこから進展していつしか百合関係になっていた。
同じアイドルでありパートナーである千早など、他にもたくさんの仲間がいる。ランクはＡクラスで、千早とデュオでどんどん上りつめている。ある意味、リーダーになりつつあるのかもしれない。
防衛の一環として、日本刀による居合を会得している。

如月千早

出演作品…アイドルマスター
性別…女
年齢…１７歳
戦闘スタイル…弓、ボウガン、拳銃など
女体…バスト７２の貧乳、しかし美しい

歌のために７６５プロのアイドルとなった少女。歌の才能がずば抜けてしっかりとしているが、胸のことでコンプレックスを抱いている。ランクは春香と同じくＡクラス。
過去に家庭問題で心は荒んでしまい、当初は歌や自分のことにしか眼中になく、春香や仲間達には冷たくて否定的だった。しかし、大事なオーディションに失敗した頃に過去を思い起こす出来事が起き、孤独を改めて感じた千早は絶望する。だがそんな時に、同情した春香に慰め励まされたことで、心を開くようになった。後に、春香との付き合いによって、心に余裕ができて好意的に接するようになった。
春香と同じく、防衛として弓術を身につけるが、やがてボウガンも使うようになる。

泉こなた

出演作品…らき☆すた
性別…女
年齢…１８歳
戦闘スタイル…剣術
女体…貧乳で幼女体系

埼玉で暮らしている、ちょっと毒舌でマイペースなオタク少女。趣

味の幅が広く、ゲームにいたってはほぼプロ級の腕を持つ。萌えに対する探求心や欲望は大きいため、様々な萌えを見抜き堪能することができる。基本的にボケ役がほとんどだが、つっこみもいける方。今作ではネットアイドルも経験しており、一応知らず知らずで戦闘術を会得しているが、メインは剣。身軽さとテクニックを軸にした戦い方をする。

かがみとは、ある出来事がきっかけで百合関係になった。ちなみに、かがみがデレることが多くなってから、たまに押されることがある。本人いわく、かがみはツンデレであってこそ理想的。

柊かがみ

出演作品…らき☆すた
性別…女
年齢…１８歳
戦闘スタイル…槍技、その他
女体…中クラスの胸、少女らしい体つき

埼玉で暮らす双子の姉で、こなたのパートナー。喜怒哀楽が激しいツンデレだが、こなたと百合関係になってから時たまこなたを愛するあまり、ヤンデレとなって暴走することがある。こなたほどではないが、ゲームや漫画の知識はなかなかである。ちなみに、こなたが受けになることもあるらしく、かがみが攻めてる時も珍しくない。ネットアイドルを経験しているため、一応戦術は持っていて、槍を主に扱う。正確さを保ったバランス型の戦術で、いろんな場面で活躍する。

超次元学園に入学した理由については、楽しそうだからといった簡

単な理由である。

前原圭一

出演作品…ひぐらしのなく頃に
性別…男
年齢…１６歳（？）
戦闘スタイル…バッド・気合いによる弾丸飛ばし

雛見沢で暮らしている少年。仲間想いの熱血漢で、前向きであきらめを知らない程の不屈の心の持ち主。また、カリスマ性も健在で、仲間の士気をも上げる口先の魔術師という異名も存在している。リーダーシップもあって仲間からの信頼が厚く、カイト達の主力メンバーに加えられている。
レナは最も信頼できる仲間であり、今では恋人同士となっている。
漆黒の魔王という変態モードも相変わらずだが、今作ではレナを最高＆最上として持ち上げるようになっている。
使用する武器はバットで、かろうじて戦力はいい方。戦法の根元はひぐらしデイブレイクを基にしており、ふっとばす力は強い。あと強いて言うと、「ウッディ！！」も存在している。

竜宮レナ

出演作品…ひぐらしのなく頃に
性別…女
年齢…１６歳

戦闘スタイル…鉈による斬術、格闘（主にレナパン）
女体…やや巨乳、少女らしさも兼ね備えた抜群の美貌

圭一と同じく、雛見沢で暮らす少女。「～かな、かな？」という可憐な口調、かぁいいモードは健在で、さらに半オリジナル要素として味方に無害（？）で安心できるオヤシロモードが搭載されている。これは怒った時に出ることが多く、大抵ターゲットは無事では済まない。このような性格の要素はもちろん、人並み以上の心優しさ、困難に立ち向かう勇気、仲間をどこまでも信じる強い気持ちも兼ね備えており、圭一と同じくカイト達の主力メンバーに入れられている。

圭一は最も信頼できる仲間であり、今では恋人同士になっている。もちろん、他の仲間達にも優しいレナは、圭一のように人気や人望もある。かぁいいモードになって圭一と一緒に暴走したり、たまに圭一と勝負したり、誘拐しまくったりするが、日常を大切にしているためにいろんなことを楽しむことができるようだ。
レナも圭一同様、ひぐらしデイブレイクの能力を基としている。

高町なのは

出演作品…リリカルなのは
性別…女
年齢…２３歳（ｖｉｖｉｄ）
戦闘スタイル…レイジングハート・魔術（波動や砲）・薙刀術習得
女体…やや巨乳、大人の体つき

今作では次元政府の下組織である管理局に所属している魔導士。超次元学園には、今後のための勉強と修行の一環として入学した。管

理局の中では一番の実力者であるらしく、エースオブエースという二つ名も持っている。
性格は優しくて面倒見がよく、誰かが困ってたり苦しんでたりするのを放っておけない優人。おちゃめな一面もありながら、上司や仲間達からも信頼されている。これが本来の性格なのだが、超次元学園に入学して銀時と出会って以来、どういうことか性格が変わったらしい。銀時の侍の魂に惚れ、それをきっかけに他の銀時に惚れた者達と露骨に対抗するようになり、さらに遠慮がなくなった感じで黒く怒ったりお話という名前の実力行使をすることが多くなったようだ。しかし、それと引き換えになのは自身からあるものが失われいってるようだが、本人も同じ所属の仲間達も正体に気が付いていない。ただ、今はなのはのみ自分を振り返り、人の心を自分のものにすることはできないと悟り、一部失われた物を取り戻しているようだ。また、現在はライバルとなったフェイトとの関係についても、銀時をどちらも狙っていながら性的関係を優先的に持ってたり、何かが二人の間にありそうである。
今作のアナザーストーリーでは、その失われた物をめぐる話を書いていく予定。

フェイト・T・ハラオウン

出演作品…リリカルなのは
性別…女
年齢…２３歳（ｖｉｖｉｄ）
戦闘スタイル…バルディッシュ・魔術（雷光）・剣術習得
女体…巨乳、大人の体つき

なのはと同じく、今作において次元政府の下組織である管理局に所

属している魔導士。超次元学園には、今後のための勉強と修行の一環として入学した。管理局の中ではなのはやシグナムと並ぶ程の実力者で、雷光の異名も持っている。

性格は優しく穏やかで、なのはと同じように放っておけないたち。年下の子達には、やや過保護気味に面倒を見る癖がある。これが本来の性格であるが、超次元学園に入学して銀時と出会って以来、銀時に惚れこんで銀時ラバーズとなる。性格も変化したらしく、あらゆる意味で銀時一途な所が大きくなり、負けず嫌いになったようだが、それと引き換えに何かを失いつつある。その正体は、本人も仲間達も気付いていない。なのはとの関係は、銀時の彼氏の座を巡るライバル同士であるのが現状。しかし、それよりもなのはと性的関係を築いている所がどこか優先的なのだが…

今作では、フェイトもなのはと同じく失われたものをめぐる話を書いていく予定。

第一回メインキャラまとめ（後書き）

補足

なのは達については、まじな感想ですのであしからず。

今後、長く例のテーマについて書けたらなと。

62話「雛見沢到着」（前書き）

雛見沢に到着、そして調査開始です。
今回から、ほむら関連の展開も入れていきます。

62話「雛見沢到着」

あらすじ
雛見沢からの依頼を受けたカイト達は、バスに乗って雛見沢へ出張することになった。その途中、カイトとミリアの友達であるラムザ・ラルムと出会い、皆で楽しく話ながら仲間に迎え入れるのであった。そして、雛見沢へ到着する…

……

12：30
雛見沢

カイト「着いた…俺とミリアがここに来るのは2回目だな」
ミリア「久しぶりに訪れたね。前と変わらず、自然が豊かで景色もいいなぁ」

かつて、二人旅をしていた頃に一度訪れたことがあるカイトとミリアは、雛見沢の風景を懐かしんでいる。自然が多く、田舎の良き静かさがカイト達の心を落ち着かせてくれる。

圭一「久しぶりに帰ってきたけど、変わらないな…こののどかな環境は」
レナ「そうだね。雛見沢は、やっぱりこうでなくちゃね」
こなた「いやあ、まさにドミナの街だねぇ～」
かがみ「何故に聖剣ネタ…；」
フウ「何それ?それって、精霊っぽいのが出るって言うあのゲーム?」

ほむら「元ネタなら知ってるから、後で教えるわ」

ちょっとメタな会話だが、わかる人はいるはず。ちなみに、ドミナの街の音楽はがちでいいので皆様も聴いてみなされ。

ラムザ「うん、いい場所だな……さて、今回はここの人から依頼が来たんだよね？これからどこに行けばいいんだい？」

圭一「園崎家っていう人からの依頼だから、そこに向かうつもりだ。でもその前に、まずは俺達が卒業した学校に行こうと思う」

ミリア「もしかして、あの子達に会いに行くの？」

レナ「うん、魅ぃちゃん達から話を聞いて情報を整理したいってのと、久しぶりに顔を出したいの。先に卒業した魅ぃちゃん達も、この時期はしばらく休みでここにいるって手紙に書いてあったよ」

ラルム「そう。じゃあ、まずはそうしよっか」

まずは圭一とレナの仲間達に会いたいということで、学校へ向かうことにした。

……

雛見沢の学校

圭一「到着だ。いやあ、学校も変わってないなぁ」

カイト「以前と同じ風景だ…懐かしいな」

シルフィ「超次元学園と比べると小さな学校ですね…でも、何だか楽しそうな気がしますわ」

レナ「楽しそうじゃなくて、すっごく楽しいんだよっ、だよっ♪」

ミリア「ここにいる生徒や先生達も皆いい人達だし、いい学校に違いないよ」

なのは「へぇ～、そうなんだ。楽しみだなぁ」

圭一「んじゃ、時間もちょうどよさそうだし、声かけるか」

カイト達は校舎に近づき、圭一とレナが呼びかけるように大声を出した。

圭一「おーーーい!!皆ぁーーーー!!」

「ん?」

「あれ、あの人達は…!」

「圭一さんとレナさん!?」

レナ「皆ーーっ!帰ってきたよーーっ!」

たったったっ!

すると、学校内にいた生徒である子供達がたくさん出て来た。子供達は圭一とレナが来たことを喜び、二人も温かく迎えた。

「圭一さん!レナさん!」

「お久しぶりなのです!」

「あうあうっ、久しぶりなのです!」

圭一「おう、沙都子に梨花ちゃんに羽入も久しぶりだな!」

レナ「はうっ♪3人共元気にしてたかな?かな?」

その中には、圭一とレナがよく知ってる仲間である、金髪の幼女・北条沙都子と青髪の幼女・古手梨花、紫の長髪で角をはやした古手羽入がいた。

沙都子「もちろん元気にしてましたわよ?お二人も元気そうで何よりですわ」

梨花「みー、相変わらずなのです」
羽入「カイトとミリアも来てくれたのです！嬉しいのです～♪」
カイト「はは、久しぶりだな皆。一度知り合ってから、もうどれくらい経ったかな」
梨花「もうだいぶ経ったと思いますのです。カイトとミリアも元気そうで何よりなのですよ、にぱー☆」

カイトとミリアも一度知り合った仲間として、再会を喜んでいる。
その時、どんな出会いをしたのかは後ほど語るとしよう。

「あら、前原君に竜宮さん！」
圭一「あ、知恵先生！」
レナ「魅ぃちゃんに詩ぃちゃん！」

ちょうど、そこに青髪の女性で学校の教師を務めている知恵先生と、緑髪の双子の魅音と詩音もやって来た。

詩音「お久しぶりですね圭ちゃん、レナさん」
圭一「おう、久しぶり！お前らも帰って来てたんだな」
魅音「せっかくの休みだからね。故郷でのんびりしたいもんじゃん？」
ミリア「確かに…わかるよ。それで、今はどうしてるの？」
知恵「今は、二人には一時期の間だけど副教師として手伝ってもらってます。二人共、よく働いてくれてますよ」
カイト「そうなんだ？以前出会ってから、いつの間に…」
魅音「ふっふーん、おじさんも進化してるんだよ？」

どや顔で胸を張る魅音。

沙都子「それで、そちらの方々はお友達かしら？」

レナ「そうだよ沙都子ちゃん、超次元学園で知り合った新しい仲間だよ、だよ」
ネプテューヌ「初めましてーっ♪私、ネプテューヌ！」
ネプギア「皆さん初めまして。ネプギアっていいます」
ほむら「暁美ほむらです」
シルフィ「シルフィ・グランドールっていいます」
こなた「ごきげんよう～、泉こなたっていいますわ。ちゃら～ん♪」
かがみ「何マリアさんみたいなしゃべり方してんだ；…えー、柊かがみです」
セレナ「セレナ・アーヴェンクルスっていいます。よろしく」
ステラ「どーも、ステラでーす♪」
ベル「ベルって呼んでください」
フウ「えと、こんにちは。フウっていいます」
春香「こんにちはっ、天海春香ですっ」
千早「如月千早っていいます。皆さんよろしく」
なのは「初めまして、高町なのはです♪」
フェイト「フェイト・T・ハラオウンっていいます」
ラムザ「僕はラムザ・ベオルブです」
ラルム「ラルム・ライトハートっていいます。よろしくお願いします」

全員それぞれが挨拶と自己紹介をした。対して、他の相手側も挨拶を返した。お互いに好意的にコミュニケーションを取った。再会を楽しみながら、あと少しいろんな話をするのであった。

詩音「…さて、もっといろいろ話していたいけど、そろそろ本題に入らないといけませんね」
圭一「あ、そういやまだだったな。依頼内容は大体目を通してきたけど、もっと詳しく聞けないだろうか？」
魅音「あぁ、そのことなんだけど…単刀直入に言うと、ちょっと厄

介なことになってるよ」
知恵「私も、園崎さん達から話を聞きました。今はいつも通りにしてますけど、被害が出ないように子供達には5人以上で下校するように呼び掛けてます。幸い、今はまだ被害者はいません」
詩音「でも、隣町では深刻な報告が相次いでます。子供の数人が行方不明、同時に非現実的な現象と化け物の発生など…今でもかなり酷いことになってるそうです」
魅音「大石さん達警察も動いてるけど、事態はなかなかおさまらないんだよね…」
圭一「魔法少女関連の調査っていうのは？」
魅音「梨花ちゃんと沙都子ちゃんが魔法少女を始めた頃に、今の事態が起きてるの。ばっちゃが言うにはね、魔法少女が何かと関係してるんじゃないかって気になるんだって」
カイト「成程な…つまり、それらを含めて正体を調べて対処してほしいってことだな？」

魔法少女、非現実的な現象と化け物の発生、子供達の失踪…つまり、今回はこれらの調査と対処のために呼ばれたということである。

なのは「ところで、白い獣のような生物は見てない？」
詩音「白い獣…？いえ、見てませんね」
ほむら「…キュウべえがここにいる可能性は高いはず。なのに、今はどこに…？」
知恵「…？何か関係があるんですか？」
圭一「まあ、そんな所ですね。まだ証拠はつかめてないけど、可能性は高いかなって」
レナ「一応、その白い獣っていうを見かけたら気を付けてください。特に、子供達には相手にしないように呼びかけてくれませんか？でないと、危険な目にあわされるから…」
知恵「…わかりました。警戒はしておきましょう。それに、貴方達

がここに来たら安全な場所にいるように、警察の人達からも言われてますからね」
ミリア「はい、ではこれから調査を始めますので、先生達は子供達と一緒に避難をしててくださいね」

調査を始めることにしたカイト達に、魅音達部活メンバーは同行。
知恵や生徒達は安全な場所に避難。
いよいよ、行動を始める。

……

後に、カイト達は園崎家に案内されて頭首と面談。話によれば、梨花と沙都子とは違う魔法少女が出現するようになった頃に、今の謎の現象と事態が起きているとのこと。そこで、今回の調査では次に発生しそうな場所に赴いて、元凶と真相を突き止めてほしいと頼まれた。
カイト達はこれを了解して、戦いが起きることを予測して戦力を持たない雛見沢の人達には、あらかじめ超次元学園側が用意した安全な場所へ批難してもらうことになった。

……

村から遠く離れた森林地帯

カイト「このあたりか？最近何かが起き続けてる場所ってのは？」
魅音「うん、ニュースでも報道されるほどだから、間違いないと思う」
ほむら「確かに…魔力に近い何かを感じるわ」
ミリア「どうする？」
ラムザ「複数に分かれて調査するのが理想的だけど、もしもの事態

に備えた方がいいかもしれない。ここはまとまって行動したい」
なのは「確かに、正体がわからない以上は慎重に行動した方がよさそうだね。私は賛成だよ」
圭一「俺もそうした方がいいって思うぜ」

全員一緒に調査する意見が多数だったため、まとまって移動することになった。それからカイト達は、早速調査を開始した。

……

約1時間後の時だった。

『しぎゃあああぁぁぁぁぁぁ…！！』

「はぁ…はぁ……きりがないわね…どうしたものかしら…」

カイト「ん？今何かが倒された音がしたような…」
ほむら「！？」

カイト達が来た場所には、金髪でロールのように左右に巻いた少女が、セーラーっぽい戦闘衣装を身にまとって息を整えていた。ほむらは、その人のことを知っていた。

ほむら「貴方は…マミさん！？」
ラムザ「知ってるのか！？」

マミ、そう呼ばれた少女がこちらに振り向いた。

マミ「！貴方…暁美さん？暁美さんなのね！？」
ほむら「生きて…たんですね…？」

マミ「えぇ…おかげさまで。また会えて嬉しいわ」
ほむら「…私も、また会えて安心しました」

ほむらは珍しく微笑み、マミも笑顔で喜んだ。

ラルム「あの、この人は？」
ほむら「巴マミ…私と同じタイプの魔法少女で、旧式が抹消される前の魔女との戦いで行方不明になった人よ」
フェイト「え!?魔女との戦いで失踪したっていう2人と同じく!？」
カイト「そうだったのか…」
マミ「初めまして、皆さん。私は暁美さんと同じ魔法少女の、巴マミです」

マミは初対面の面々に、ご丁寧に挨拶をする。

こなた「でも、確かニュースでは死亡した可能性が高いって言ってたような…」
マミ「私も、死んだかなってあきらめかけたわ。でも、運よく逆転できたことで何とか皮一枚でつながったの。ほんと…あとほんの少しでも間違ってたら、生きてなかったわね」
ほむら「けど、どうして今まで姿を見せなかったんですか？」
マミ「実はね、あの戦いの後にとある人に案内されて、二人で話をしたの。キュウベえは私達を騙して、魔女に変えようとはめているって知らされて、後にキュウベえの野望を阻止するためにあえて身を隠して行動してたのよ。ラインハルトっていうんだけど、その人のおかげで魔力ごと感づかれないようになって、裏でたくさんの魔女と戦いながら情報を探ってたというわけ。最も…雀の涙ほどの成果しか上げられなくて、結局いい活躍は出来なかったけどね…」
カイト「ラインハルト?あれ、そういや以前ブレイベル本拠地で殴

り飛ばしたヴァーラガルザっていう奴の部下に、その名前の人物がいたような…？」

ラインハルトという名前が頭で引っ掛かるが、以前のことや今の話を聞く限りだとすぐに考え込む必要はないので後回し。

ほむら「成程…それで、今は何をしてるんですか？」

マミ「鹿目さんがいなくなってから、私は身を隠したまま支援活動をしてたの。今は、急に現れた魔女や異常現象を調べながら、他にいなくなった美樹さんと佐倉さんを探してるところよ。もしかしたら、私のように無事である可能性があるかもしれないって思ったから」

ミリア「さっきの断末魔は、魔女のもの？」

マミ「えぇ、ちょうど退治した所よ。救える手だてを探ったけど、結局倒すしかなかったわ…」

ほむら「マミさん…」

マミは話をしながら、俯いて少し暗さをあらわにした。今でも、いろいろと辛く大変なのだろう。

マミ「それで、暁美さんや貴方達はここで何をしてるの？」

ほむら「実は…」

…少女説明中…

マミ「成程…そうだったのね。つまり、このあたりにキュウベえがいる可能性もあると…」

ラムザ「僕達もさっきいろいろ知ったばかりだけど、そのキュウベえにはいろいろと用があるんだ」

ラルム「主に、捕縛するためにね」

ほむら「マミさん、もしよければ私達と同行しませんか？目的は同じみたいですし」
マミ「そうね…私もご一緒させてもらおうかしら。それに…暁美さんにも、いろいろお世話になってることだし」

マミはにっこりと答えて、カイト達と同行することを伝えた。

ほむら「…ありがとうございます、助かります」
カイト「よし、今後はマミも仲間入りだな」
圭一「おう！」
なのは「で、例の反応があるかどうかだけど…」

「見ーつけた！」

カイト達「！？」

その時、カイト達の前に何者かの女声が聞こえてきた。
声がした方向にいたのは、赤髪の女剣士だった。

62話「雛見沢到着」（後書き）

赤髪の正体は、以前の話を読んだ人なら真っ先に思い浮かぶかと。

…おまけ…

予告式過去話
『ネプ姉妹の新たなはじまり』

それは…一つの出来事から始まった。

ネプギア「…私…やっぱり、女神になることなんてできないんだ…」

妹は無力さを痛感し、嘆き…

ネプテューヌ「…私のせいだよね…？ネプギアが傷付いたのも…私がしっかりしてなかったから…」

姉は己の悪所を痛感し、自分を責めた…

それは、姉が妹の疲れに気付かなかったが故に起きた出来事であり、姉は自分が妹を追い込んでいたことに気付き、妹は姉の期待に応えられなかったと思った。

この出来事が、二人を失意に追い詰めた。

イストワール「どうか、元気を取り戻してください。そして思い出してください…貴方達二人が人助けをする理由を…そして、貴方達はこの大陸に…いえ、世界中の人々が必要としていることを…」

そんな時、イストワールは二人に道を照らした。

イストワール「ネプテューヌさん、ネプギアさん、私達3人で超次元学園へ入学してみませんか？きっと、私達の理想をかなえ続けるためには、あの学園が一番適しているかもしれません」

照らされた道は、超次元学園。

ネプギア「…私、もっと強くなって…変わって、立派な女神になれるように頑張りたいんです！そして、皆を笑顔にしてあげたい…たくさんの人々を幸せにしてあげたい！お姉ちゃんと一緒に前へ歩き続けていきたいんです！！」

ネプテューヌ「私も、もっとたくさんの世界や人々のことを知って、皆を助けていきたい！世界中の皆と一緒に…そして、ネプギアといーすんと一緒に、いつまでも笑っていられるような楽しい日々を生きていきたいから！それが、私とネプギアの理想だから！！」

二人は決意し、そしてイストワールもその理想に尽くすことを決めた。

イストワール「では、行きましょう。超次元学園で、理想へ歩き続ける物語を始めましょう…」

超次元学園の本当の始まりは

二人の女神と教祖がもたらしたものだった…

（詳細は気長に待つべし）

63話「四つ巴の戦い」（前書き）

カイト達ＶＳ日切ＶＳおまけとの戦いです

63話「四つ巴の戦い」

あらすじ

雛見沢へやって来たカイト達は、地元の人や友達から話を聞いて早速調査を開始した。その途中、ほむらの戦友でもある魔法少女・巴マミと遭遇。彼女と目的と意志が一致して仲間となった直後、今度は赤髪の女剣士が現れた。彼女は何者なのか…

……

「やっと見つけた…クルトとカノンノの双子、カイトとミリアは君達のことだね？」

赤髪の女剣士が、カイトとミリアを見てそう言ってきた。知っているということは、ただ者ではない

カイト「誰だ、お前は？」

「あたしは師走日切。最近君達も知るようになった、マジェコンヌの友人だよ」

ネプギア「マジェコンヌ！？」

ネプテューヌ「旧式マザコングの仲間！？」

日切「そうそう、マジェんぬ。あたしもこないだ知り合ったばっかりでね。少しの間だけど、手を組んだんだよ」

フウ・ステラ（マザコング？？マジェんぬ？？）

ちゃんとフルネームで呼んであげましょう。

日切「で、そこにいるジェム式魔法少女は暁美ほむら、巴マミ…」

ほむら・マミ「…！」

日切「…でも、すでに新システムの方になってるから、探してる奴らとは違うっぽいね」
カイト「何の話だ？一体何が目的だ！」
日切「目的？あぁ、キュウベえと関連物を殺すこと」
こなた「ちょっ、あっさり言った…？」
セレナ「キュウベえを殺すですって？」

日切と名乗った剣士は、カイト達を見ながら言う。

日切「なんかさ、次元政府やらキュウベえやら…世界に不要な存在がどんどん増えてるじゃん？しかも、そいつらのせいで世界や宇宙はどんどん腐っていってる。あたしはね、その腐敗を斬るためにいるんだよ」
ラムザ「腐敗だと…？（こいつは、切り捨てのし上がる気か？）」
日切「そ、腐敗。あたしはそれだけのためにここにいる。他に何か必要かな？」
フェイト「…ここで何をしてるの？このあたりの現象に関連してないの？」
日切「関連どころか、つぶしに来てるんだよ。キュウベえをおびき出せるかもしれないし、腐敗の１つを斬れるからね」

キュウベえを殺す。それが目的だと言う日切。聞く限りだとカイト達の敵ではない気がするが、味方とも思えない。

日切「そういうわけだから、今日は戦うつもりはないよ。ただ…カイトとミリアがそっちにいるのは、少し悩ましいけどね。なんせ、あたしらの旦那さんが知り合った、クルトとカノンノの双子だから」
カイト・ミリア（知り合った…？）

カイト達や両親のことを知っていることに、カイトとミリアはそこ

まで驚きはしなかった。だが、日切の話しぶりからして、何かが引っかかる気がしている。

ラムザ「…一体何を言って、何を考えてるのかはわからない。けど…」

ちゃきっ（氷剣・アイスブランドを抜く）

ラムザ「何でだろうね。お前を野放しにしてはいけない…僕はそう思う」

ラルム「私も、ラムザ君と同じ意見だよ」

ちゃきっ（ルーンブレイドを抜く）

ラルム「腐敗を斬るって言われると、どうしても深く知りたがるの。貴方の真意が何なのかをね。答えによっては、私達は貴方を止めなきゃいけない」

日切「何故？」

ラルム「犠牲を平気で出しかねないから。何にしても、殺生だけで解決しようとすることだけは絶対にさせないよ」

ラムザとラルムは何かを見抜いたのか、日切を危険視している。

そんな二人の真意に、カイト達も続く。

カイト「…俺もそんな気がしてきた。日切、少し俺らにいろいろ吐いてもらおうか（妖刀・鎌鼬（かまいたち）を抜く）」

カイト達も武器を構え、日切を敵意を向けた。妖刀・鎌鼬については、風来のシレン2を参照されたし。

日切「…危険人物って認識されちゃったかぁ。ま…血は争えないってわけだね。いいよ、相手したげる」

日切もカイト達の様子を理解したように、剣を抜いた。日切の剣は、血のような赤色の刀身をしていて、カイトが抜いた妖刀と同じように光っている。

日切「もし、超次元学園がクルト達心一家の力を創造して我が物にしようとしてるなら、阻止しろって旦那達から命令されてるしね。確かめさせてもらうよ」

互いが構え、間もなく激突しようとしている。
ところが…

「待てえええーーーっ!!!」
カイト達・日切「?」

その時、また別の者が声を上げたのが聞こえた。声がした方向を向くと、そこには5人の少女の姿があった。

日切「……空気読まないね。何者?」

日切が名乗れと質問した。

「答えましょう…私達は、悪を滅ぼす」

まず言葉を発したのは、緑髪と緑の衣装を着たガンナー。

「私達は、強き者を尊重する」

次に、金髪と黄色の衣装を着た鎌使い。

「私達は、偉い者を持ち上げる」

次に、ピンク髪とピンクの衣装を着た鞭使い。

「私達は、省みらない」

次に、黒髪と黒の衣装を着た斧使い。

「我ら、魔法少女戦隊…」

そして、赤髪と赤の衣装を着た侍。

彼女達5人揃って。

『マジカルエリーター！！！』

魔法少女部隊であった。

ミリア「…？どこのチーム？」

魅音「！あいつらだよ！最近、あいつらがよく出現してる魔法少女なんだよ！」

魅音が言うには、その5人は最近ニュースで目撃されているらしい。

カイト「…聞こうか。俺達に何の用だ？」

「決まってるよ。貴方達、魔女の助けをしてる悪い連中をやっつけに来たの！」

かがみ「はぁ！？」

突然現れては、魔女の助けをしてる悪者ときたもんだ。当然、カイト達は驚く。

「悪の手先め…貴方達は、この私達がやっつけてやるんだから！」
こなた「うわ、これ定番パターンの相手じゃん；」
シルフィ「一体何者なのですか？名乗りなさい！」
「私はテク！（赤）」
「私はグマ！（黒）」
「私はエマ！（緑）」
「私はザル！（黄色）」
「私はプル！（ピンク）」
こなた「適当な名前だね」
５人「Σ適当言うなぁぁ！！！」

名前は大切にしましょう。

かがみ「そんなことより、私達が魔女の手助けをしてるってどういうことよ！」
テク「とぼけたって無駄よ。貴方達が裏で魔女の存在を保護して、自分達が世界を支配する気だって話を、キュウベえから聞いたの！」
ほむら「！…そういうことね」
レナ「え？何か気付いたの？」
ほむら「どうやら彼女達は、キュウベえに騙されて活動してる少女達で間違いないわ。その証拠に、今私達を魔女の仲間として見ている。誰もがわかりやすい嘘を言う者がいるとしたら、現状ではあの生物以外にいない」
春香「騙されてる！？」
ラムザ「利用されし者か…」

彼女達５人はキュウベえと契約し、そして魔女退治をしてきた旧ジ

ェム式魔法少女であることに間違いはないようだ。カイトとミリアから見ても、瞳に企みを秘めてる時に表れる黒いものが見えないあたり、騙されていると判断した。

日切「やれやれ、あたしらを悪者呼ばわりとはねえ。すぐに人を決めつけちゃだめだって教わらなかったのかな？」

エマ「悪者に言われたくないよ！」

グマ「騙されてる？何の話？キュウべえは世界を守るためのマスコットだよ！」

プル「それを悪者だなんて、貴方達酷過ぎ！」

こなた「何かすっごくあれな感じに言われてるんだけど；」

かがみ「反応しちゃだめよ。騙されてるんだから」

ラルム「精神年齢も幼い…まだ何も知らないって感じだね。だからこそ、躊躇いもない」

ラムザ「…そう、知らないから過ちを犯す時もあるんだ」

ラムザはふとそう言った。過去に、自分もそうだったといった感じで言い聞かせてるのだろうか。

なのは「できれば戦いたくないんだけどなぁ…」

フウ「どうするの？」

千早「戦いは避けられないわね。それに、日切っていう人も危険よ」

セレナ「となれば…三つ巴ね？」

圭一「そういうことだ！」

カイト達は構え、５人の魔法少女集団と日切を相手にすると決めた。どの道、両方を逃がすわけにもいかないのだ。

カイト「日切、魔法少女達、悪いがここで大人しくしてもらうぞ！！」

ラムザ「どっちも逃がしはしない！！」
テク「それはこっちの台詞！皆まとめてやっつけてやる！」
日切「いいよ、まとめてかかって来なよ。肩慣らしにはなるからね」
マミ「…！また何か来るわ！」

その時、また別の存在がこちらに現れるのをマミが先に察知した。
すると、その言葉の通り、地面から敵が現れた。
現れたのは大量のハートレスだった。

ベル「ハートレス！？ここにも現れてたの！？」
ステラ「もうっ、せっかくいい所だってのに！」
フェイト「言っても仕方ない！皆、気をつけて！」
テク「さあいくよ！！勝つのは私達よ！！」
だっ！！

全員が一斉に動き出した。
カイト達と、テク達と、ハートレス達と、日切りが、四つ巴となって攻撃を開始した。

……

一方、その頃…

「はぁ…ったく、ここはどこなんだよ…」
「はいはいぼやかないぼやかない！」

雛見沢の別の森林地帯を歩く者達がいた。赤髪のポニーテールでジャンパーと短パンを着ている少女と、水色髪の単発で学生服を着た少女だ。

「って、大体さやかが魔女になったりするから、あたしまでこんな目にあってるんじゃねえかっ！」
「しょうがないじゃん！あたしの心が限界だったのは杏子だってわかってたでしょ！？そもそも、あんな嫌なシステムに設定したキュウべえ達が悪いのよ！」
「ちったぁあたしの苦労も考えなよ！こっちも大変だったんだぞっ！」

痴話げんかをしながら歩いてるのは、行方不明となったさやかと杏子だ。さやかは魔女化したとのことだが、今ここにいるのは人間の姿をしたさやかだ。

杏子「ったく…本当に迷惑かけやがって。帰ったらいろいろ奢ってもらうからな？」
さやか「ふぅ……わかってるって。オススメの店でご馳走させるよ」
杏子「忘れんなよ？…にしても、この森いつまで続くんだ？こないだからずっと歩きっぱなしだってんのに」
さやか「まずあたし達の町じゃないのは間違いなさそうだね…」
杏子「それもだけど、魔女とかはまだまだ存在してやがる。状況はどうなってんだ？」

どがあぁぁぁんっ！！！

杏子・さやか「！？」

突然、爆発音が二人の耳に入ってきた。

さやか「爆発音…？」
杏子「また魔女か？」

さやか「行ってみよう！」
杏子「って、おい待てよ！」

……

カイト達の戦いは、すでに激化していた。
ハートレス軍団、魔法少女軍団、そして日切を1度に相手して奮闘
している。

千早「そこっ！！（ボウガン連射）」
春香「はあぁっ！！（居合）」

ばしゅしゅしゅ！！！（ハートレス撃破）

シルフィ「サイクロンファング！！！（連続斬り抜け）」
ヴォルフレイムハート「雷炎衝！！！」

どばばばばぁぁぁぁん！！！

こなた「むぅぅっ、やっぱハートレス軍団は数が多すぎるよっ！（
斬）」
かがみ「邪魔ったらありゃしないわねっ！（天雷槍）」
魅音「なら一気にふっとばした方がいい！（グレネードランチャー
）」
ヴォルフレイムハート「ベル！！」
ベル「ＯＫ！」
フウ・ステラ・ベル「光の雨よ降り注げ！！プリズムカリバー！！
！」

ばばばばばばばばばばばばどばぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！

こちらでは、押し寄せるハートレス軍団を撃破し続けている。多数なため、ほとんど攻撃範囲が広い技や術で攻撃することが有効だ。

グマ「このっ！！（兜割）」
ザル「スラッシュ！！（薙ぎ払い）」

すかっ！！（紙一重で回避）

ネプギア「見えたっ！！！（フォーミュラーエッジ）」

どばばばばっ！！！（二人まとめた）

グマ「うぎゃあぉっ！！？」
ザル「うぐっ！！？」
ネプテューヌ「とりゃあぁぁぁぁぁっ！！！（クリティカルエッジ）」

ずばあぁぁぁっ！！！

プル「よくもおぉぉぉぉっ！！！（鞭払い）」

ばしっ！！（根元を掴まれる）

プル「えっ！？」
ネプテューヌ「遅い遅い♪」
レナ「そおぁれっ！！！（レナパン）」

どごごごごごごっ！！！

プル「げほおおぉっ！！！」
圭一「ぶっとびやがれえぇえぇえっ！！！（フルスイング）」
かきいいいいいいいん！！！（プルを吹っ飛ばす）
エマ「ちょっ！！？このっ！！（拳銃によるガトリング）」
ラルム「プロテス！！！」
きぃいぃんっ！！！（物理バリアを張り、弾丸を全て弾く）
エマ・プル「何いいいいいいっ！！？」
ラルム「蔦よ！！（左手を振る）」
どしゅるるるるっ！！！
大地から大きな樹の蔦が複数突き出て、魔法少女達を縛りつける。
ラルムの戦闘術は、魔法と風水術と剣。風水術は自然の力を借りて起こす術だが、彼女は地面が土であるにも関わらず草関連の風水を使用している。さらに、その風水術には魔力を必要としない上に、魔力が徐々に回復する体質も持っているため、魔力の自家発電も可能。ラルムは、ただの風水士ではないのだ。
エマ・プル「わわっ！！？」
グマ「何！？今助け…」
ラムザ「させるかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！（斬）」
ずどばあぁぁぁぁぁぁっ！！！（クリティカルヒット）
グマ「いたぁぁぁっ！！？」

ラムザ「気功拳！！！」

どごおおおおおおおおっ！！！（殴りとばす）

連なって、ラムザは物理術のエキスパート。ラルム程器用ではないが、それに負けない程の力量と技を兼ね備え、剣と拳を中心として勢いよく戦う戦士である。また、ラムザにはイヴァリースで一般的に使用されていた戦技を備えており、他にも様々なスキルも持っている。

ラムザ「そこか！アルテマあああぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ちゅどごおおおぉぉぉぉんっ！！！

もちろん、魔法も中級までは使用可能。今のアルテマは、宇宙エネルギーを概体として打ち出す波動式魔法。イヴァリースではとある魔物しか使用できないものだが、ラムザはそれをラーニングしている。

テク「つ、強い…！？」

ラルム「業火よっ、ファイガバースト！！！」

エマ・プル「ひいいぃぃぃっ！！？」

ごおおおぉぉぉぉぉぉっ！！！！

そして、ラルムは左手から魔力を多く高めて業火を発生させ、巨大な火炎ビームを発射した。魔法少女に直撃し、蔦ごと吹っ飛ばした。

テク「くっ、負けるもんか！！」

しゅばっ！！（不意打ち）

フェイト「それは、こっちも同じ！！」
テク「だったら斬る！！（ガード）」

ががががががががががっ！！！（相殺合戦）

ザル「ぐっ…何この人達…！強すぎる…！？」
なのは「余所見してていいのかな！？」

ざしゅっ！！！

ザル「ぐはっ！！？」

今、なのはは本来の戦術ではなかった攻撃をした。それは、薙刀による一閃。
実は、なのはは出張前にレイジングハートを改良し、薙刀形態を追加したのだ。概要は対接近戦のためのモードで、魔法を組み合わせて斬撃術を放つもの。あとは己の修行によって術を編み出すのみだが、もちろん遠距離魔法も組み合わせて使用可能である。例えば…

ずばっ！！！（斬り上げ）

ザル「いぎゃっ！！？（浮）」
なのは「エアアッパーバースト！！！」

どおおおぉぉぉぉぉぉんっ！！！（ディバインバスター）

斬撃で相手の動きを止め、隙ができた所でレイジングハートの刃身からバスターを発射して追撃する。単発でディバインバスターをは

じめとする魔法の戦法も使用可能で、さらにこのようなコラボレーション技で戦う新しい戦法なのだ。
ちなみに、この戦術を編み出すと決めた理由は、銀時の侍の魂に惚れこんだ結果らしい。（レオン談）

ほむら「戦況は有勢…このまま押し切るべきね（デザートイーグルでハートレス撃破）」
マミ「相手の魔法少女達は、まだ未熟みたいね！でも、問題は日切の方…！（銃を踊りまわりながら乱射）」

ひゅううぅっ！！！

ほむら「！皆、上から来るわ！」
ラルム「速い…！ヘイストフィールド！！」

ずどおおぉぉぉぉぉぉんっ！！！

こなた「おわあぁぁっ！？」
圭一「危ねえ！？」
シルフィ「くっ！」

その時、戦場のど真ん中に日切が落下攻撃をしてきて、同時に凄まじい衝撃波が発生。全員安全に回避するためにラルムが時の範囲魔法で全員の素早さを上げ、おかげで全員攻撃を回避できた。

日切「仲間達もただ者じゃない、か。けどまだまだだね！」

日切にはカイトとミリアが挑んでいるが、カイトとミリアは日切を相手にやや苦戦している。

カイト「まだまだあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！（連斬）」

ががががががががっ！！！（相殺）

日切は剣術の腕が立っているようで、二人の猛攻を巧みに捌いている。隙を見ては反撃をしているが、その反撃の勢いも別格である。

日切「冬時雨！！！」

ずがしゃあぁぁぁっ！！！

斬り払いと共に、広範囲に氷の荒野を発生させる。カイト達はこれを飛んで回避し、ミリアが次の攻撃に出た。

ミリア「五月雨嵐！！！」

日切「動きはいいね！秋沙雨！！！」

ばばばばばばばばばばっ！！！

連続して攻撃同士がぶつかり合い、火花を散らす。しかし、ミリアが力量で不利である。

カイト「このっ！！鬼炎斬！！！」

こなたのラーニング技をさらにカイトがラーニングした、鬼の炎で払う大技で日切を攻撃する。ミリアの相殺競り負けを回避できたが、日切は飛んで回避していた。

ずざざーっ！（滑って着地）

日切「ふうん？流石心一家の子供達だね。筋はいいよ」
カイト（こいつ…強い…！俺達の動きを簡単に見切ってる上に、攻撃の勢いも半端じゃねえ。しかも、チート能力を凌駕する何かを秘めてる！）
ミリア（殺気…？ううん、違う…それよりももっと黒い何かが、剣を通して感じてくる…！）
日切「おや、びっくりしちゃってる？無理もないね。あたし、一応あの旦那達のチームの新入りだけど、この現状だからね」
カイト「ちっ…！」
日切「さあ、次はどうするかな！？」

だっ！！（突撃）

カイト「ミリア、次行くぞ！！」
ミリア「うんっ！！」

激戦はまだ続いていく。決着はどうなる？

……

その頃…

「…もう一人の私……あそこにいました…」

紫の刀身のまがまがしい剣を手にした、黒の長髪で赤い布生地を女の大事な部分を隠す以外、適当に体中巻き付けたスタイル抜群の美女が空に浮いてつぶやく。

「…さあ、私の不完全を正しましょう…」

そして、美女はとある森林地帯へ飛んでいく。

そこは、カイト達が戦っている地帯だった。

63話「四つ巴の戦い」（後書き）

次からネプ姉妹の展開入ります。

６４話「救世の悲愴降臨」（前書き）

前回の戦いの続きですが、思わぬ急展開へと変わります。

64話「救世の悲愴降臨」

あらすじ
カイト達は日切と名乗る女剣士と対峙。同時に、突如現れた旧ジェム式魔法少女軍団とハートレスが乱入してきて、戦いは四つ巴の戦いとなった。激戦を繰り広げる中、カイト達の所に謎の美女が空から接近していた。とある魔剣を手にして…

……

激戦を始めてから数十分後、戦いはまだ決着つかずにいる。

テク「はぁ…はぁ……何、この人達…！まさか、ここまで強いなんて…！？」
プル「でも…ほっといたら、魔女が…！」
こなた「いやあのさ、君達は勘違いしてるよ？」
かがみ「あのね、私達は魔女とは関係ないわよ。それと、あんた達はキュウベえに騙されてるの」
テク「は…？」
ほむら「今言うべきか迷ったけど…貴方達のシステムは魔女を生む。つまり、貴方達はいずれ魔女になりかねない存在になっているの」
5人「な！？」
ザル「嘘よ！？だって、キュウベえは魔女打倒のために…」
マミ「いいえ…残念だけど、それは嘘なの。キュウベえは旧ジェム式魔法少女を契約によって増やし、理不尽なシステムと時間によって絶望させてソウルジェムを真っ黒に染めさせ、そして魔女化させてエネルギーを奪うつもりなのよ。当然、貴方達もその対象になってしまったというわけよ」
ベル「わかってるとは思うけど、君達はそうなったら…死ぬわ」

ほむら達が話した真実を聞いた5人は、ショックで動揺し始めた。

グマ「まさか…そんな…！？」
テク「私達も、魔女になる…？そんな、そんなはずは！」
『気にすることはないよ』
ほむら「！」

そこに、テクにキュウベえのテレパシーが入るのを、ほむらは感じ取った。

『そいつらは君達をわざと動揺させてソウルジェムを濁らせ、グリーフシードに変えようとしてる。自分の命の守り方は説明しただろう？そいつらを倒して、奴らが持ってるグリーフシードを奪い取れば死ぬことなんてないよ』
テク「…そ、そうよね？あいつらが言ってることは嘘だよね？」
『うん、気にしないでいいんだよ。ほら、生きたかったら早くそいつらを…、！？』
5人「？」
『だ、誰だい君は…う、うわあああぁぁぁぁぁぁぁっ！！？』

突然の異変と断末魔と共に、通信がいきなり途絶えた。

テク「きゅ、キュウべえ！？どうしたのっ、キュウべえ！！」
プル「何何！？一体何がどうなってるの！？」
ほむら「…？今のは、何…？」

ぞくうっ！！

ネプギア「！？…何…急に寒気が…」

ネプテューヌ「ネプギア？どうかしたの！？」
ネプギア「何か…怖い何かが来る…！」
なのは「え？」

がきぃぃぃんっ！！！（武器が弾きあって、互いに後ずさる）

カイト「っ…？どうしたネプギア？」
日切「…あ、やば…もう来ちゃった？」
ミリア「え？」

ネプギアが突然寒気を感じ始め、日切も何かを感じ取ったようだ。
一体何がどうしたのか？カイト達は疑問になっていると、その正体が現れた。

ごおぉぉぉぉ…！！

千早「！？何…！？」
フェイト「空気が変わった！？肌が冷たい何かでぴりぴりする…！？」
ラムザ「新手か！？」
ラルム「！皆、見て！空から何か来る！！」

ラルムが指差した先、空からあの黒の長髪で赤い布生地を女の大事な部分を隠す以外、適当に体中巻き付けたスタイル抜群の美女が、紫のまがまがしい剣を手に降りてきたのだ。
空気一変の原因は、この美女だ。

「見つけました…私の、器…」
ネプテューヌ「誰！？まさか、旧マジェコンヌの仲間！？」
日切「いやいや、あいつは違うよ！あいつはあたし達が警戒してる

存在さ！」
ほむら「…まさか、今のキュウべえの断末魔は、あの人が…？」
「悲しみと絶望を飲み込もうと彷徨い続け…ようやく、器が見つかりました…」
ミリア「器？何のこと！？」
「でも…その前に、ここにもマギカなる悲しみの連鎖があった……今のインキュベーターを滅ぼせば、この悲しみは消える……あと一歩近ければ、完全に滅ぼせましたけど…」

ミリア達はその美女に声をかけるが、彼女はそれを後回しにしてるかのように独り言をつぶやく。ネプテューヌは日切に仲間かと問いかけたが、どうやら違うらしい。

「…さあ…魔法少女達よ……ゆだねてください。私…ゲハバーンの刃に」

ゲハバーン…美女は自分をそう名乗った。そして、魔法少女5人組に紫の剣を向けた。

フウ「え…げ、ゲハバーンって…？」
ステラ「ちょ…！？まさか、魔剣ゲハバーン！？」
カイト「知ってるのか！？」
ステラ「知ってるって言うか、どこかの文献でゲハバーンのことが小さく書かれてたんだよ！詳しく調べたことないから、いろいろわからないけど…確か、あの魔剣は別名『神殺し』の異名を持つ武器の1つらしいの」
ラムザ「神殺しだと！？」
圭一「でも、それだけなら他の文献とかにも乗ってたりするだろ？」
ステラ「…それが…あれはその中でも厄介な物なんだよ…何でもね、あの魔剣には意志があって、ゲハバーンが降り立った世界は全て剣

に壊され、飲み込まれていったらしいんだよ」
全員「！！？」
マミ「そんな…！？」

ステラから告げられた、魔剣ゲハバーンにまつわる話のごく一部。
それを聞いたカイト達は、あの美女がにぎっている魔剣がいかに危険なものなのかを自分なりに曖昧ながらも把握した。

日切「まいったなぁ…こっちはまだ、ゲハバーンをどうにかする準備ができてないってのに、何度もあたしらまで狙っちゃって…」
カイト「何…？」

日切はどうやら焦りを見せているようだ。しかし、何故ゲハバーンに対して警戒しているのだろうか？

プル「あーもうっ！！何が何だかもうわけがわかんないっ！とにかく、まずはあのお姉さんからやっつけちゃおう！もしかしたら魔女かもしれないし！」
ザル「だね！これ以上ややこしくなったら困る！」

緊迫する中、魔法少女は危機感足りずに美女へ突撃していった。

日切「あ、ちょっと！自殺行為になるって！そいつは魔女なんかじゃないんだよ！」

日切は気が向いたのか、引くように呼びかけるが遅い。

ゲハバーン「捧げてくれますか…では」

ちゃきっ！（魔剣を構える）

ゲハバーン「救いましょう…そして、安らぎを貴方達に…」
テク「っ！皆、いくよ！！」

びしゅん！！（飛翔）

ネプギア「駄目っ、逃げて！！」

しびれを切らした魔法少女達5人とゲハバーンは空へ飛び、戦闘を始めた。ネプギアも案じて声をかけたが、もはや届かない。

エマ「魔女めっ、覚悟！！」

だだだだだだだだだだだだだだっ！！！（銃連射）

グマ「たたき斬る！！」
ザル「それえええぇぇぇぇっ！！！」

じゅばあぁぁぁぁん！！！（クロス斬り）

少女達は勇気を出して攻撃を仕掛けたが、両方とも傷を負わせることができなかった。

エマ「効かない！？」
プル「だったらこれで！！タイフーンウィップ！！！」

びゅおおおおおおお！！！

プルは鞭を竜巻のように回し、そこから生じる真空波で攻撃。しかし、これも効果なし。

ゲハバーン「抗わなくていいのです…まずは、貴方から…」

びしゅんっ！！（急接近）

エマ「しまっ！！？」

ざすううぅっ！！！

ゲハバーンの動きに怯んだエマに、彼女は魔剣で体を貫いた。エマの体から、あからさまな出血が…

テク「エマあぁぁぁっ！！！」

ゲハバーン「魔女となって永遠に苦しむのならば…今ここで滅びを受け入れれば、後から嫌な思いをせずに済みます…」

エマ「あぁ…あ、あああぁぁぁぁぁぁぁ…！！！」

ばしゅううぅぅん！！

すると、エマの体が紫色のオーラらしきものに包み込まれ、そして体ごと消滅していった。後に、剣から発生したオーラは剣へ還っていく。

カイト達「なっ…！！？」

カイト達はその惨劇を目の当たりにし、信じられない目で生き残りを見守る。ショックのあまり、すぐに動き出せなかったのだ。

プル「よくも…よくもエマをおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！」

ザル「エマの仇いいいいいいいいっ！！！」

激怒した二人は我を忘れ、ゲハバーンの元へと突撃していく。

ゲハバーン「あぁ…わかってくれるんですね？では、すぐに救いましょう」

ずばあぁぁぁっ！！！（薙ぎ払い）

プル・ザル「きゃあああぁっ！！？」

ざすううぅっ！！！

二人を薙ぎ払いの斬撃と衝撃で吹き飛ばし、怯んだ所を横から二人まとめて串刺しにした。

テク「プル！！ザル！！！」

プル・ザル「あ…ぁぁ…！！？」

そして、二人も同じように紫のオーラにのまれて消滅してしまった。これで3人殺されてしまった。テクとグマは、ショックと殺された現実に動けなくなっていた。

ゲハバーン「怖がることなど、もう必要ありません……もう、これ以上悲しむ必要はないのです…」

ざすうぅぅっ！！！

テク「！？」

グマ「あがあああぁぁぁぁぁっ！！？」

その瞬間も逃さず、ゲハバーンは４人目も串刺しにして殺したのだった。グマもその事実を完全に理解する前に、オーラで滅びて行った。残されたテクもまた、把握するのに少し時間がかかった。

ゲハバーン「これであとは貴方だけ…待たせましたね？」
テク「み、皆…！？」

テクの心には、もう勇気は残されていなかった。先程旧ジェム式のシステムを知らされたこと、そして今仲間達が無惨に殺された事実が重なって、ソウルジェムは８割が濁りきってしまっている。

ゲハバーン「辛いでしょう？怖いでしょう？悲しいでしょう？…でも大丈夫。貴方の魂は、私の中で永遠に生き続けることでしょう。さあ、おいで…」
テク「…い、嫌…！…嫌あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ついに恐怖心に押されたテクは、ゲハバーンから全速力で逃げる手段を取った。このままでは自分も殺されてしまう、だがいずれ自分も魔女になっていく運命が待ち構えている。もはや、自分はどうしたらいいのか、どうしたいのかすらわからない状態になってしまっている。しかし、ゲハバーンはそれを逃しはしなかった。

がばっ！（後ろから抱き締める）

テク「ひいいぃぃぃっ！！？」
ゲハバーン「心を無にして…楽になって……今、貴方も他の４人と一緒に、夢の中へ……」

ざすううぅぅぅっ！！！

後ろからテクを抱きしめたゲハバーンは、その状態で背中からテクの体を貫いた。とうとう、彼女までもが血を晒した。

テク「あぁぁ…！！？嫌あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ…！！！！」

激痛に悶え、絶叫するテクにはもうチャンスは残ってなかった。紫のオーラは彼女の体全体を包み込み、燃やすように滅ぼしていく。彼女はなすすべもなく、そのオーラに食われていく。

今、魔法少女５人が全滅した事実が、カイト達と日切の頭に刻まれていった。

カイト「何…だと…！？」

ミリア「そんな…！？」

ラルム「な、何てことを…！」

ラムザ「くっ！」

ゲハバーンが行った恐怖の所業。これは、カイト達の気分を害するには十分すぎた。

日切「…なんか、新入りの私じゃ無茶かも…？」

しゅばっ（瞬間移動で樹の枝に乗る）

春香「え、どこへ行くんですか！？」

日切「撤退するんだよ！悔しいけど、新入りのあたしじゃあいつとまともに戦えないからね！それに、キュウべえがここに張り巡らせた魔女の連鎖もゲハバーンによって消されたみたいだし、旧ジェム式の概念は雛見沢から消えたよ！もうお互いここには用はないはずさ！」

カイト「待て日切！！お前にはまだ話がある！！お前は俺の父さん

と母さんと、どんな関係があるんだ！！」
日切「それは今度に話すって！今はそれどころじゃないんだから、カイト達もさっさと逃げた方がいいよ！それじゃ、悲しいシナリオで死なないでねっ、心一家の子供カイト、ミリア！！」

日切はゲハバーンの感覚の範囲が自分を入れる前に、瞬間移動を駆使してその場から退いた。最後はテレポートで空間移動し、雛見沢から姿を消した。

ミリア「待って！！」
ラムザ「カイト、ミリア！追いかける余裕はないみたいだぞ！」
カイト「くっ！」

追いかけようとするも、すでにゲハバーンはカイト達に視線と気を向けている。下手に離れれば殺されかねない。

ネプギア「ど、どうしよう…魔法少女達が…！」
フウ「あ…そん、な…！」

『ちっ、変わりなさい』

ぶあぁぁぁっ！

ショックを受けるネプギアとフウ。この時フウがまともにいられないとみなされたのか、彼女の別人格であるフウカに入れ替わった。

フウカ「どうやら、下手に逃げたら全員無事で済むかわからないし、かといってあいつをこのままにしていたら、雛見沢が滅びてしまってフウがうるさいでしょうね…」
なのは「やるしか…ないよね？」

ネプテューヌ「当然だよっ！私には何が何だかさっぱりだけど、あいつをほっといたら他に犠牲者が出てしまいそう！だから、絶対に止めなきゃ！！」
圭一「あぁ、雛見沢には手を出させねえ！！」
レナ「レナも戦うよ！！」
ラムザ「こいつは危険だ！何としても止めるぞ！！」

ラムザ達は危機感を抱き、だが逃げてはいけないと判断して戦うことを決意した。

ミリア「…そうだね、戦おう！！」
カイト「…テク達、すまねえ…！せめて、これ以上犠牲を出さないためにも、奴はここで倒す！！！」
ほむら「そうね…それで彼女達の弔いにしましょう！」
マミ「でも、相手は強大なのは間違いないわ！絶対に無茶はしちゃだめよ！」

そして、カイト達も彼女達を安らかに天へ昇らせるために、ゲハバーンを倒すと心に決めた。

ゲハバーン「さあ…器よ…私と1つになりましょう。そして、全てに救いを与えましょう…」

カイト達の戦いは、ゲハバーンとの戦闘へと変化したのだった。
果たしてゲハバーンは何者なのだろうか？
そして、勝ち目はあるのだろうか？

６４話「救世の悲愴降臨」（後書き）

ゲハバーンの思い出は、俺にとっても悲しいものでした。
そこで、今作でこの悲愴の話に自分なりの決着をつけたくて入れました。

しかし、次回はさらにとんでもないことになります。

65話「最悪の展開」（前書き）

ゲハバーン戦です。
しかし…

65話「最悪の展開」

あらすじ
日切、魔法少女達との戦いの中、突如ゲハバーンと名乗る謎の美女が乱入。彼女は恐るべき戦闘力で、簡単に魔法少女5人を亡き者にしてしまったのだった。日切は身の安全のために逃げるが、カイト達にはそれは許されなかったし、逃げるわけにはいかなかった。ハートレス達もいつの間にかいなくなった戦場で、今度はゲハバーンとの戦いが始まる…

……

どばばばばばばばばばっ！！！

まずカイトが先制攻撃に出て、他にネプテューヌ、なのは、フェイト、ラムザ、ラルム、圭一、レナ、ヴルフレイムハート、フウカが続いて攻撃するために続いている。他のメンバーは、後から誰かがやられた時に入れ替わるために後方で待機。ネプギアも先程から寒気を感じているため、まともに戦えそうになかったので待機だ。

カイト「でりゃあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

ぶうぅぅんッ！！！

風刃を飛ばす大振りで攻撃した時、相殺し続けていたゲハバーンは瞬間移動で回避。その後、カイトを貫こうと突きをかましてきたが、カイトはこれをうまく弾いてかわす。

ヴォルフレイムハート「そこおおぉっ！！！」

次の動きをされる前に、ヴォルフレイムハートがダッシュ突きでゲハバーンへ突進。だが、これも瞬間移動でよけられる。カイトが飛翔斬で追撃にかかるが…

ゲハバーン「悲しみを背負っている者が、ここにも…」

ちゅどおおおぉぉぉぉぉぉんっ！！！

カイト「ぐおわあっ！！？」

ヴォルフレイムハート「きゃあぁぁぁっ！！？」

ゲハバーンは左手で大地を叩き、そこから紫炎の衝撃波を爆発させて二人を吹っ飛ばした。

フェイト「カイト！！セレナ！！」

ゲハバーン「ここにもいる…」

なのは「アクセルシューター！！！」

次になのは達が攻撃。なのはがアクセルシューターを一度に１５発発射したが、ゲハバーンはそれを簡単に魔剣で斬り裂いて消していく。その相殺の隙を見つけ、なのははレイジングハートを薙刀に変形させて斬り上げを放つ。

きいいぃぃぃんっ！！！（相殺）

フェイト「逃がさない！！！」

その瞬間を狙い、フェイトが兜割を仕掛ける。

ゲハバーン「ここにももう1人…」

がきぃぃんっ！！

なのは「きゃあっ！！？」

フェイト「これも駄目なの！？」

ゲハバーン「悲しみを、私が飲んであげないと…」

ぶうんっ、どおおぉぉぉぉんっ！！！！

なのは・フェイト「きゃあああああぁぁぁぁぁぁっ！！！」

連携攻撃も読まれて弾き飛ばされ、同時に剣を振るって地をはう巨大な衝撃を飛ばして二人を波動で飛ばす。またもや返り討ちにされてしまったが、カイト達は怯んでる余裕はない。

カイト「てめえええぇぇぇっ！！！」

ネプテューヌ「このおおぉぉぉーーーっ！！！」

ゲハバーン「あぁ……そんなところにいた…」

どばあぁぁん！！！（風圧の斬撃）

カイト「ぐはあぁっ！！！」

ネプテューヌ「カイト！？」

ゲハバーン「…あぁぁ…お姉ちゃん…」

ネプテューヌ「って、え！？今何て…！？」

圭一「惑わされるなネプテューヌ！！！」

がきぃぃぃぃんっ！！！

レナ「っ！！この人…腕力がありすぎる！？」
圭一「こいつ、一体どうなってやがんだ！？」

ネプテューヌへ向けられた斬撃を止めた圭一とレナ。しかし、彼女の腕力は見た目に反して異常にあるらしく、二人はこのまま鍔迫り合いを挑んでは負けると判断。一瞬迷ってしまったネプテューヌだが、すぐに迷いを振り払った。

ネプテューヌ「何迷ったんだか…！ええぇぇいっ！！！」

ふっとばす強攻撃をはなち、ゲハバーンを防御されても吹っ飛ばす。圭一とレナは追撃に向かい、フウカが上空から攻めにかかる。

圭一「雛見沢から出ていきやがれえぇぇぇぇぇぇっ！！！」
レナ「皆には手を出させないっ！！！」

しゅばばばばばばばっ！！！

圭一とレナのコンビネーション攻撃が凄まじい打撃弾幕を展開するが、一発もゲハバーンに当たらない。彼女の素早さは、二人でも追いつかない。

フェイト「はあぁぁぁぁぁぁっ！！！」
フウカ「大人しくしなさい、化け物！！！」

フェイトとフウカが上空から奇襲。弾幕をよけるのに必死のはずだと見たが、それも読まれている。

ゲハバーン「何を必死になってるんですか…？」
カイト「必死になるに決まってんだろうが！！！命張ってるんだ！

！！」

カイトが後ろから次元衝で襲いかかる。

ゲハバーン「そんなに頑張らなくていいのに…」

どばばばばばっ！！！

カイト「ぐあああぁぁぁっ！！？（何でだ！？こいつの斬撃が見切れない！？）」

フェイト「うあああぁぁぁぁぁっ！！！」

圭一「ぐおおおおおおっ！！！」

レナ「きゃあああぁぁぁぁぁっ！！？」

自分の周囲を振り払う斬撃の弾幕張りで、カイト達をまたもや返り討ちにしたゲハバーン。フウカだけ斬撃を回避し、一人で突撃した。

フウカ「このっ！！！」

がきぃぃぃんっ！！！

ゲハバーン「貴方も、そうなの…女神フウカさん……」

ががががががががががっ！！！

今度はフウカとゲハバーンが相殺合戦を繰り広げ、姿が見えなくなるほどのスピードで戦った。しかし、これでもゲハバーンに決定的なダメージを与えられないことから、あのフウカですら物ともしない強さを持っていることがわかる。ゲハバーンは焦りどころか表情を一切変えずに戦っているからでもある。

ラムザ「フウ！！今行くぞ！！！（飛翔）」
ラルム「蔦よ！！！」

ばしゅるるるるるるっ！！

蔦を無数に出現させ、ゲハバーンの動きを翻弄しようと試みた。しかし、それでもゲハバーンは何ともないように蔦をよけては斬り続ける。フウカはよけることを想定して、思いきった攻撃に出ることにした。

ラルム「雷鳴を糧とする竜、いでよ！！！」

魔法陣を前に召喚すると、その中から3体の雷竜が出現。神雷3頭は勢いよく飛び、ゲハバーンへ牙を立てようと襲いかかる。

ずどがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！！

一斉にぶつかる音がした。さらに、フウカがさらに上空へ飛んで剣に闇と魔力を集める。

フウカ「終わりよ！！テラブレイク！！！！」

一点集中の魔力と闇を込めて、思いっきり縦に振り下ろした。

ずがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！

大地は広く木端微塵に吹き飛んだ。しかし、そこにはゲハバーンの姿はなかった。

フウカ「何！？」

びしゅん！（真上に出現）

ゲハバーン「苦しいだけなんです…全て」

ラムザ「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」

ラムザがアイスブランドにさらなる冷気を集中させせて、巨大な刃に変えて断ち切ろうと急降下してきた。

しかし…

ゲハバーン「そして、今も…」

どばばばばずがあぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！！

ゲハバーンは魔剣から闇の蛇を幾多に生み出し、周り全体に飛ばした。

ラムザ「ぐあああぁぁぁっ！！！？（弾き飛ばされる）」

カイト「ラムザあぁぁぁっ！！！（また突撃）」

フウカ「うあああぁっ！！！（多段ヒットしながら、ふっとばされる）」

カイトは蛇の牙を回避しながら飛ぶ。

カイト「怒龍割殺撃いいいいいいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！！！！」

ずがあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！

カイトの強烈な一撃とゲハバーンの斬撃がぶつかりあい、鍔迫り合いが発動。カイトは相手を押しきろうと全力で攻撃するが、ゲハバーンは動じない。

カイト「ぐっ！！！（何なんだこいつ！？能力の根っこもうまく見えねえ…！）」

ゲハバーン「全て…滅びれば…」

どばあぁぁぁぁぁんっ！！！（競り負け）

カイト「何いぃっ！！？」

ゲハバーン「救われる…」

どおおおぉぉぉぉぉぉぉんっ！！！！

カイト「ぐわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

剣から闇の波動が放射され、強大な威力を前にカイトはたやすく破れてしまう。

どざざーーっ！！（滑りながら地面に倒れる）

ミリア「カイト君っ！！？」

ラムザ「ぐっ…くそっ！何て強さだ…！」

ラルム「これだけ攻撃したのに、傷一つすら負わないなんて…！？」

ゲハバーンの実力は予想以上のもの。その壁を前にカイト達は圧倒されてしまった。

レナ「うっ…強すぎるよ…！」

こなた「ば、化け物…ううん、悪魔だ…！？」
かがみ「いやいや、どこぞのスーパーサイヤ人以上よあれは！？」
メタな発言をしても笑えないくらい、今は危機的状況である。このままではまずい。
ネプテューヌ「でも、このまま何もしないんじゃやられるだけ！皆、頑張ろうよ！！」
ネプテューヌは負けたくないという一心で皆にエールを送り、そして自分は突撃していく。
この時、ネプギアは感じた。
ネプギア「！…だ、駄目…お姉ちゃん…！」
何故かわからないが、このまま突撃させてはいけない。ネプテューヌが殺されてしまう…そんな予感が彼女の脳裏を横切る。
ゲハバーン「苦しいよね……私が、救ってあげるよ…」
しゅばっ！！（ネプテューヌの前に瞬間移動）
ネプテューヌ「！！？」
ゲハバーン「お姉ちゃん…」
ネプギア「駄目えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！！」
ざすううぅぅっ！！！
カイト達「！！！？？」
ネプテューヌ「え、ネプギア…！！？」

突然の悲劇だった。
ネプギアが直感で動いてネプテューヌを庇い、自分はゲハバーンの刃に胸を貫かれたのだ。カイト達が…ネプテューヌが、その悲劇を目の当たりにした。

ネプギア「うあぁ…あ…！！」
ゲハバーン「ようやく…器が来てくれた……これで…私の形が元に戻る…」

じゅおおおぉぉぉぉぉぉっ！

そして、魔剣のオーラが先程とは違う働きを起こし、美女の体が魔剣ごとオーラに変わってネプギアに宿っていく。

ネプギア「あああぁぁ…あああああぁぁぁぁぁぁぁ…！！！」
ネプテューヌ「ネプギア…！？ネプギアあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

ネプギアは魔剣の闇に全て包まれた。

ごおおおぉぉぉぉぉっ！！！（強風）

ミリア「きゃあああぁっ！！？」
シルフィ「ネプギア…！！」
フェイト「ど、どうなってしまうの！？」

しばらくすると、球体となった闇が晴れた。
そこにいたのは…

『今…私は自分を取り戻した…』

あの美女と同じ格好をしたネプギアだった。

カイト「ネプギア！！？」

フウカ「まさか…飲まれた…！？」

ステラ「ううん、違う！あれは…支配したんじゃ！？」

ネプギアが魔剣に支配された。そう判断した方がわかりやすいのだろう。今のネプギアの瞳も、赤い目になっていて普段のものとは思えない。

ネプギア『やっと…私は…戻れた……これで、ちゃんとした言葉も話せる…もっと楽にしてあげられる…』

ネプテューヌ「ネプ…ギア…！？」

ネプギア『後は…全部の世界を、悲しみで埋まってしまう前に…皆を救うだけ……』

変貌したネプギアは魔剣を掲げ、闇を空の上で集中し始めた。

カイト「な、何をする気だ！？」

「逃げろ！！今のお前達ではどうにもならん！！」

ミリア「え！？」

その時、カイト達の前に忍者の姿をした人物とシャドウ・ザ・ハードが現れた。

カイト「シャドウ・ザ・ハード！？」

千早「逃げろって言うんですか！？」

シャドウ・ザ・ハード「こくっ（頷く）」

ネプテューヌ「!?やだっ!!ネプギアを置いてくなんてできない!!このままじゃネプギアが…!!!」
忍者「いいから避難するぞ!!どの道今逃げなければ、ネプギアにお前達全員殺されるだけだ!!!」
カイト「だけど…!!!」
忍者「文句なら後でいくらでも聞く!!シャドウ殿!!」

シャドウ・ザ・ハードは煙弾を3個程取り出し、地面に投げつけた。

ばしゅうううぅぅぅっ!!

カイトや仲間達の言葉を聞く前にシャドウ・ザ・ハードの煙弾は煙を噴射し、煙の効果によってカイト達全員その場から姿を消した。
魔剣によって変えられたネプギアただ1人を残して。

……

その頃…

チート・ザ・ハード「我が主、たった今シャドウ・ザ・ハードとリュウによって避難が完了、及び雛見沢の住民達も学園の難民所に移動し終わりました」
真王「よし…お前達、準備はいいな?」
淫霊「いつでもいいわよ!」
聖音「こっちもいけます」
戦獄「さっさと始めようぜ!」
真王「これより、雛見沢を帰る場所の保管のために、亜空間へ移転する!大陸移転術式解放!!」

理事長4人が、雛見沢の空の上で術式を刻んで唱え、雛見沢の大地

を異次元のどこかへ空中浮遊大陸へ一時的に変えて、別の空間へ飛ばした。

４理事長「大陸転移・発動！！！」

………

そして…

ネプギア『救世の闇よ、ここに……ジハード・エターナル！！！』

どおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉんっ！！！！！！

今、ネプギアは闇を解放して今いる森林地帯を全て消し飛ばした。
そこに残っているのは、動物も瓦礫も何もない海の跡だけ。

ネプギア『…さあ…救世を、始めましょう………あは…あはは、あはははははははは、あはははははははははははははははははははははははは』

感情のこもらないネプギアの言葉は、次に狂ったような笑いと変わった…

………

今、たった1人の妹が変えられてしまった。ゲハバーンによって、恐れていた流れに入ってしまった。

ネプテューヌ「…ネプギアが……ネプギアが……」
カイト「ネプテューヌ…」
ネプテューヌ「うああぁ……あぁぁ……」

『うわああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!!!!!』

自分達の避難場所で、姉ネプテューヌは号泣したのであった……

65話「最悪の展開」（後書き）

ネプギアがとんでもないことになりました。

さらに、ネプテューヌには辛いことがまだ続きます。

66話「ゲハバーン」（前書き）

ゲハバーン戦後の話です。

66話「ゲハバーン」

あらすじ

ゲハバーンを止めるために戦いを挑んだが、圧倒的な実力を前に返り討ちにされるだけだった。さらに、ネプテューヌを庇った時に、ネプギアがゲハバーンの魔剣で貫かれてしまい、同化してゲハバーン・ネプギアと変貌してしまった。何とかしようとカイト達は動こうとするが、シャドウ・ザ・ハード達に今はどうすることもできないと告げられ、そのまま雛見沢から強制撤退された。雛見沢は亜空間へ移転させったが、他の大地はネプギアの闇によって無と化した。だが、ゲハバーン・ネプギアの狂行はこれで終わらなかった…

……

超次元学園

カイト達はあの後、ひとまず魔法少女関連の任務は達成したので帰還した。ラムザとラルムとマミが新たに学園へ迎えられ、こなたとかがみも新たに入学したゆたかとみなみと再会したのだが、タイミングは良くなかった。

なんせ、ネプギアがゲハバーンに支配されてしまい、しかも離れてしまったのだ。暗い気分がほぼ大きいままだった。パーティーを解散した後、ネプテューヌは一人部屋にこもったのだった。

19：20

寮の食堂

ベール「そう…それで、ネプテューヌがあんなに落ち込んでるんですのね…」
カイト「……」

あの後、カイトは他の女神達を中心に事の詳細を皆に伝えた。ミリアはクルトとカノンノに連絡しに行っている。

ユニ「…嘘でしょ…？ネプギアが、ネプギアじゃなくなったなんて…」
ラム「そのゲハバーンって奴が、ネプギアを…！」
ロム「…ネプギアちゃん…うぅ…（泣）」

ネプギアがゲハバーンに支配されて変貌してしまったこと、ネプテューヌがそのショックで酷く落ち込んでしまったことを伝えると、女神達もまた落胆した。
いろいろあれど、仲間が酷い目にあってしまっては平気でいられるわけがない。

ノワール「…ゲハバーン……一体何なのよ…」
ブラン「カイト達全員でかかって、歯が立たなかった相手……そして、ネプギアを支配した…」
ベール「情報によれば、本体は握られていた魔剣ということですわね？」
カイト「あぁ…あの時は気にせず戦ったけど、仮に魔剣を集中攻撃しても今の俺達じゃ同じ結果になる可能性が高い。まず…戦力差が大きすぎる…」

カイトも認めざるを得ない、ゲハバーンの脅威。全員でかかっても勝てなかった相手だと言い、女神達までも悩ませる。

ノワール「……正直、今すぐにどうするかって言われても…考える気にはなれないわね……こんな気分じゃ、ね」
ユニ「そうね……それで、今後の方針はどうするのか、理事長達はもう話し合ってるの？」
カイト「これから話すってさ。まずは上の話し合いの結果を待つしかないだろうな…独断で行動するにしても、どうやってネプギアを助ければいいのかさっぱり案が思い浮かばねえ…」
ベール「そうですわね…一体何がどうなってしまったのか、まずはそれをはっきりと理解しないと何もしようがありませんわね…」

自分から動くにしても流石にまだ無理があると、カイト達は皆思った。今は待とうと決め、理事長達の報告を待った。

……

職員室前

クルト「…魔剣ゲハバーン…か…」

ミリアから事情を聴いているクルトとカノンノは、ゲハバーンについて考えている。軸とする点は、ネプギアが器とされたこと、ゲハバーンの闇のオーラについてである。

カノンノ「ネプギアは器……ゲハバーンは神殺し……まず、何かの存在というより集合体である可能性が高いのかな？」
ミリア「かもしれない。あの存在の闇は、まるで魔力とかそういう類のものじゃなかったし…」
クルト「…どっちにしろ、何としてもネプギアをゲハバーンから救い出さねえとな。ゲハバーンも野放しにしてたら、被害はどんどん

拡大してしまう」
ミリア「でも、どうすれば…」

今はあまりにも情報が少なすぎるため、すぐに策や方法が思いつくのは至難の業。何にしろ、はじめにするべきことは限られる。

クルト「まずは情報収集からするしかない。ゲハバーンについて知っていないと、打開策はおろか行動すらままならないんだ」
ミリア「…うん、そうだよね…」
カノンノ「じゃあ、今から図書室を貸してもらいに行ってくるから待ってて」

カノンノは図書室を開けてもらおうと、職員室に戻った。

クルト「で、理事長達もどんな決断を下すか…」

……

２０：３５

理事長室

話し合いが終わったとの報告が入ったので、カイトが結論を聞きに行った。
しかし…

カイト「え…結論はなし??」
真王「あぁ……はっきり言うと、意見が分かれてしまったんだ」
カイト「え?」

普段の理事長なら、これからどうすればいいのかなど、できる限りの方針や作戦を考えて伝える。
しかし、今回は結論どころかそれらすら出なかったらしい。

カイト「意見が分かれたって……他の理事長達やハード達も一緒になって話し合ったのに、何で？」
真王「…言いたくはなかったが……ネプギアを殺すべきという意見が多く出たのだ」
カイト「なっ！！？」

意見が違う時ぐらいいつだって、誰にだってある。されど、共通して持つ大切な物があるとカイトは信じている。だから、そこまで不安にはなっていなかった。
しかし、今の言葉を聞いたカイトは衝撃を受けた。

カイト「殺すべきって…そんな馬鹿な！？」
真王「俺は反対したよ。だが、聖音と戦獄とその二人の連れの部下がその意見に決めてしまってな…もちろんどうでもいいとかじゃなくて、ネプギアのためにも悪行を起こしてたくさんの人々の命を奪う前に、殺して楽にしてあげるべきだっていう意見だがな。実際、現在も変貌したネプギアがテロリストや悪組織の人間を殺戮したという報告も入ってる。このままでは住民達まで殺しかねない…そう考えたためだろう」
カイト「…そんな…」

仲間思いである戦獄、正しい秩序を好む聖音。真意が何なのかは全く分からないが、ネプギアのためにネプギアを殺すという意見にたどり着いたことに、ある意味思いきった選択だろう。

カイト「…もし、次の会議でもその意見が多数だったら、あんたも

賛同するのか？」
真王「……賛同するべきなのだろうか…」
カイト「？」

突然、理事長はらしくないように暗い表情を浮かべた。

真王「いつか前に、もう1人のセレナを殺したことを覚えてるか？」
カイト「あぁ、あの時は人として罰するために殺したんだっけ…」
真王「…実はな、今回のネプギアと闇のセレナが重なって見えるんだ。あの時は、はっきり言って別次元の人間だったから赤の他人ともいえたが…今回は我が生徒……人の義のため、正義のためにネプギアを殺す……果たして、それで本当に救われるのかって…わからなくなってしまってな…」
カイト「お、おいおい…大切な生徒なんだろ？だったら、ちゃんと生きて救うことが大前提じゃないのか？」
真王「もちろんその通りだ。容易な殺しなど何も生まない……だが、そうわかっているはずなのに…今思えば何故あのセレナを殺すことを第一にしたのだろうか…今度はネプギアにまで、それをしろというのだろうか……」
カイト「理事長……」
真王「……って、らしくないことを言ったな…すまない。カイト、後で皆に伝えておいてくれ。今回…俺達は何の力にもなれないだろうって」

そう言った後、奥の作業室へ入ろうと足を運ぶ。ところが、唐突にカイトは言った。

カイト「…なあ、ヒントになるかはわからないけど…ラムザが言ってたことがある」
真王「ラムザ…？あの金髪の少年か？」

カイト「あいつは俺よりも人殺しを嫌ってるんだけど、ラムザはある時俺に言ったんだ。『罰は生きて償いをさせるものであるべきだ』って……もちろん、やむを得なくて殺す必要があるのも彼はわかってる。それでも、ぎりぎりまで人殺しの選択はしてはいけないって…」

真王「……」

カイト「…俺も…そう思えるようになった」

カイトもまた、ラムザと同じ意見であることを最後に付け加えた。

理事長はカイトの言葉…というよりラムザの言葉を聞き、目をとして首を少し下げた。ちょっとの間黙り込んだ後、こう言って部屋に戻った。

真王「……もう一度、考えることにしよう」

残されたカイトは、しっかりと彼の言葉を耳にしたのだった。

……

２１：２０

図書室

あの後、カイトはミリア達の調べ物に協力することにした。後からイストワールも参加し、時間をかけてゲハバーンのことに関連することを調べた。

結果……

イストワール「……そういうことでしたか…」

クルト「何かわかったのか？」

イストワール「はい…ようやく、全てわかりました」

ゲハバーンについて理解しきったイストワールに、クルトが訪ねた。

イストワール「あの魔剣ゲハバーンは、私達ゲイム業界の先祖の第2世代からやってきた存在です」

ミリア「え?それって、未来から来たってこと?」

イストワール「その通りです。ゲハバーンは別名・呪われし魔剣といわれ、大昔に世界を救うために使用されたという禁断の剣なのです。その本質は『吸収』…血や命を吸えば吸う程に剣の威力は増していきます」

カノンノ「…!」

カイト「血と命を吸う…だと?」

ゲハバーンの本質、すなわち誰かを…何かを殺すことで力を増していき、最終的には驚異的な威力を持つ最強の魔剣になるということ。確かに、これは代償が大きい禁断の剣である。

イストワール「第2世代のゲイム業界が犯罪組織マジェコンヌと犯罪神によって窮地に陥った時、打つ手がなくて途方に暮れていた先祖の女神達はゲハバーンを手にし、犯罪神を倒すために殺し合いをしたそうです…そして、最後にたった1人残った女神がその剣を持って犯罪神を倒した……調べた歴史をまとめると、これが事実でした」

ミリア「そんな…!?」

クルト「その後のことは?」

イストワール「…残念ですが、わかったのはここまでです。けど、ゲハバーンは吸う力によっては時空移動すらも可能にするらしく、それを永く吸い続けてきたとなると…自我を持つこともありえますね」

クルト「そして、俺達が生きる次元にやって来た…と？」
イストワール「はい……ある意味、今まで私達が目にしてきたチート能力の何よりも危険な魔剣です」

歴史が主ではあるが、ひとまずゲハバーンの正体の概要はわかった。
だが、まだ解決策を出すには情報が少ないことに変わりはない。

カノンノ「…まさか、そんなに恐ろしい剣が次元を超えて存在してたなんて…」
クルト「チート能力を目にしていて、1つか2つはそんな存在があるのかもしれないって思ってたが…正直存在してて驚いたよ」
カイト「どうする？相手が吸収する魔剣となると、どうすれば破壊なり解放なりできるんだろう…」
クルト「普通のやり方でいくなら、俺とカノンノが時間をかけて作る封印の加護を魔剣に打ち込み、性質を一時的にでも封印した後に全力を持ってぶっ壊すのが一番だな。だが…ネプギアのことが絡むのなら、この方法はお勧めできない」
ミリア「どうして？」
クルト「ネプギアの心と命までも破壊する可能性があるからだ。ネプギアをゲハバーンから離して破壊するにしても、吸収性質といった外殻を相殺する必要がある上に、今の俺達では封印と吸収の両方を一度に行うのに骨が折れる。多大な時間がかかるから、加護が完成した後にはいろいろ手遅れになる可能性が高いだろう」
イストワール「それは…他のチート能力では不可能なのでしょうか？」
クルト「不可能だな…カイトとミリアの情報に間違いがなければ、あの存在は力で無理矢理どうこうできるものじゃないし、絶対空間とか絶対能力といった小細工で何とかするのもはっきり言って無駄に等しい。何故なら、今のゲハバーンは負の感情によって生まれた産物だからだ。今のあれを何とかするには、融合した闇ともぶつか

る必要がある。つまり、直にあの魔剣の闇と戦わなければいけない」
カイト「ということは…」
クルト「ゲハバーンの闇を上回らなきゃいけない。そして恐らく…ネプテューヌも必要だ。彼女なしでは、魔剣からネプギアを救うこともできない」

これがクルトの案だった。要するに、直接魔剣と戦う必要があるということであり、魔剣の性質を封印する加護を打ち込むためにもう一度挑まなければいけない。そう、カイト達全員でかかっても苦戦したあの魔剣を相手に押し切らなければ全面的に解決しないのだ。そして、ネプテューヌはネプギアの姉であるが故に、魔剣を揺るがす役割を必然的に持つために欠かせない。この2点を揃えることが、最低条件である。

ミリア「でも、ネプちゃんは…」

しかし、今のネプテューヌは失意にある。当然、今のまま戦わせても望みは薄いし、何よりネプテューヌまで危険に晒しかねない。だが、今は一刻も争う事態であるため、何としても彼女には立ち直ってもらわなくてはいけない。

カイト「…ちょっと、ネプテューヌの様子を見てくる」
カノンノ「うん、そうしてあげて」

カイトとミリアは、ネプテューヌの部屋に行くことにした。

……

その頃、ネプテューヌは部屋で失意のまま眠りについていた。精神的にも疲れて、寝たくなったのだろう。睡魔はあったようで、普通

に眠れているようだ。
しかし…

……

（…あれ…？ここは…何の夢…？）

ネプテューヌは夢を見ていた。それは、ここではないどこかの世界の夢。そこで目にしたのは、自分だった。

（私…？パラレルワールド…？）

それは、イストワールが言ったゲイム業界にして第2世代の先祖達の世界だった。そして、夢の内容は自分や仲間達が集まって話し合ってる場面だった。その中にはネプギアもいたが、右手には何の反応も持たないゲハバーンが握られていた。説明を受けているのだろう。

（ゲハバーン…？）

内容は自分にも聞こえ、自分なりにゲハバーンの正体が何なのか少しずつ理解した。
この場面の後に、次の映像が目に移った。

それは、ネプギアがゲイム業界の人々を救うために全てのシェアを集めると決めたことを告げ、結果として女神達皆と敵対してしまった後の展開だった。

はじめはラステイションでノワール達と自分達プラネテューヌの女神が戦い、その過程でネプギアが出された魔剣でノワールが自害した。後に、ユニが自分の殺害をネプギアに強要して死を遂げた。

次に、ルウィーでブラン達と対峙して魔剣で殺害。途中、ラムとロムが恐怖で一度泣き叫んだ光景が見えた。

次に、リーンボックスでベールと対峙。一度は引いたが、犯罪組織の下っ端リンダによってベールが死にかけてしまった。激怒してリンダを殺害した後、瀕死のベールに頼まれて彼女を殺害。

その後だった…

今度は、ネプテューヌが自分の命をネプギアに捧げた光景が目に移ったのだ。何故自分がそうしたのか、光景を見ていくうちに次第に理解していく。そして…その時の自分はどんな気持ちだったのかと。

（……そっか……私、ゲイム業界を救うために…自分の命を……）

そして、全ての女神の命を奪ったネプギアは、残された仲間達と共に犯罪神を倒したのだった。これによって、ゲイム業界はプラネテューヌ…いや、ネプギアの元に統一されたことで平和を迎えたのだった。これで、ゲイム業界を救うという願いも叶ったことになる。

だが、この夢にはまだ続きがあったのだ。

その後、ネプギアは一人ぼっちでゲイム業界を治めていたのだが、

ある日リーンボックスの教祖であるチカが破壊工作をもって反逆。
すぐに鎮圧されたのだが、図らずもネプギアは暴走し続けるチカを平和のために処刑してしまったのだ。いくら説得しても、反逆をやめるどころがますます破壊に身を任せたためだ。
ひとまず安息は得られたのだが、この反逆によってゲイム業界統一の真実が世界中にばれてしまい、結果としてゲイム業界は混沌に陥ってしまったのだった。ネプギアがマジェコンヌ以上の独裁者と見る者も当然いたし、自分の国を奪われて憎しみに囚われるのも無理もなかった。

（……何で、こんなことに…？おかしいな……ゲイム業界は、平和になったのに……）

やがて、国の裏で革命連合軍が結成され、ゲイム業界は戦争時代に突入してしまった。ネプギアは必死で国の平和を保とうとあの手この手を尽くしたが、どれも焼け石に水程の結果しか得られず、最終的にチカのように武力で鎮圧及び処刑するしかなくなってしまった。
そしてこの時、ネプギアは度々に続く鬱の出来事に嘆き続け、ついに心が折れて絶望してしまったのだ。
自分の選択は誤りで、自分は結局死んでいった女神達の心までも無駄にしたばかりか、犯罪組織のように自分の思想に沿わない者達を排除してきたのだと、たくさん後悔して希望をなくした。最後は、自分のアイデンティティすらも失った。

その後のネプギアが取った選択は…

（…ネプギア……？）

『自分の国もろとも全てを滅ぼした』

そう、犯罪神の望みと同じように、全てをあきらめて自分の国も民衆も何もかも滅ぼしてしまい、結局こんなに悲しい形で全ての人が死ぬくらいならば、もうはじめから存在しない方が幸せなのだと悟った。

気がつけば、ネプギアはゲハバーンと同化して感情を無くしていた。

こうして、1つの物語が幕を下ろしたのだった…

夢の中で、ネプテューヌはこれら全てを目にして考えた。自分がしてきたこと、自分の願いはどうなったのだろうかと。

（…このために…私は、自分を捨てたの…？…ネプギアも…皆ああやって死んでしまうゲイム業界の平和のために……なら、私がしたことって……）

答えはこうだ。

ゲイム業界を救うという信念や志のために、あのような選択をした。そして同時に、ネプギアにもその選択を強制して辛い荷を背負わせたのだ。言ってしまうと、平和になった先のことをおろそかにしていたのだと、ネプテューヌは気付いた。

自分の正義が、ゲイム業界の未来を惨劇に変えた…

そう、それは正義・信念・志が招いた結果なのだと……

……

２２：２０

それは、突然のことだった。

ミリア「皆、大変！！ネプちゃんが学園のどこにもいなくなっちゃったよ！！」

全員「何！！？」

ネプテューヌが部屋から姿を消し、どこかへ行ってしまったのだ。

学園のあちこちを探しまわったが、どこにも姿が見えない。失踪してしまったのだろう。

カイト「学園の隅々まで探したがどこにもいねえ！きっと学園の外に出て行ったんだ！」

ベール「そんな、置き手紙とかはなかったんですの！？」

カイト「手紙どころか書き残しなんてなかった…あいつ、急にどうして…」

ノワール「考えても仕方ないでしょ！？さっさとあの馬鹿を連れ戻さないと！」

ラム「でも、どこに行けば…」

イストワール「…私に心当たりがあります」

ミリア「えっ、わかるんですか！？」

動揺と焦りが渦巻く中、イストワールが前に出て言った。

イストワール「本来なら、クルトさんとカノンノさんにも来てほし

いのですが、二人はゲハバーンの対策を用意するために手が離せません。カイトさん、ミリアさん、貴方達二人だけ一緒に来てくれませんか？」

カイト「え？いいけど、どこに行くんだ？」

イストワール「それは目的地へ向かいながら教えます。とにかく、今は私についてきてください」

銀時「…おい、俺は行かなくていいのか？」

イストワール「…いえ、今回はあえて待機しててください。もしかしたら、銀時さん達がいては話せないことになりそうなので」

ミリア「…？」

イストワール「さて、外は雨が降り始めています。急ぎましょう」

ミリア「は、はいっ！」

カイト「わかった！」

失踪したネプテューヌの行方を予測しているイストワールと、彼女についていくカイトとミリア。

一体どこに向かうつもりなのだろうか？

そして、ネプテューヌは…

66話「ゲハバーン」（後書き）

次回、ちょっと気合入れて書くことにします。

67話「ネプテューヌの心」（前書き）

ネプテューヌは…

67話「ネプテューヌの心」

あらすじ
ゲハバーンに支配されたネプギアを救うために、それぞれ準備なり会議なりしていたカイト達。ところが、ネプテューヌが突如どこかへ失踪してしまった。あてすらなくて焦る中、彼女の行方に心当たりがあると言ったイストワールは、カイトとミリアのみを連れて学園を出発したのだった。

……

２３：１０

外はすでに大雨になっており、カイトとミリアが傘をさしながら３人は移動している。

カイト「イストワール、ネプテューヌは一体どこに行ったっていうんだ！？」
イストワール「ネプテューヌさんが向かった場所は、プラネテューヌのある場所です」
ミリア「ある場所？」
イストワール「はい。これから向かう場所は、私とネプテューヌさんとネプギアさんの思い出の場所であり、秘密の場所です」

ミリアの左肩の上に体だけ乗っている彼女は、二人にわかりやすくそう伝えた。

イストワール「以前、ネプテューヌさんとネプギアさんが落ち込んだり悲しんだりした時、よくその場所に行ってました。それは今も

同じで、恐らく一人で考えたくて帰ったんでしょう」
カイト「一人で考える…？」
イストワール「どういうつもりなのかはわかりませんが、きっとその可能性が高いはずです」
ミリア「そうですか…とにかく、まずはプラネテューヌに向かわないと！」

会話をしながら、３人はプラネテューヌのある場所へ急いだ。雨もまだひどくなってきている。

……

０：１２

プラネテューヌ

激しい雨が降る中、巨大な建物の屋上に立つ者がいる。雨にうたれることを気にすることなく立ちすくむ、結ばれた紫髪に黒と紫の長袖つきレオタードを見にまとう美女の目には元気がない。

パープルハートに姿を変えた、ネプテューヌだ。

暗闇を月が照らす下町の上で、彼女は激しい雨にうたれていることを気にせず、ある事を振り返っていた。それは、プラネテューヌで生まれ、生きてきた思い出である…

……

ネプテューヌとネプギアは、星空の下…この屋上にて生まれた。ゲイム業界の女神は、司書であり創造神であるオリジナル・イストワ

ールが生み出す存在。今この物語に存在しているネプテューヌもネプギアも、はじめは司書に卵という名の箱として生み出された。今いる教祖イストワールもまた、二人よりも前に創造された。
そして、二人の人生をスタートさせたのは紛れもない彼女なのである。

ぱぁーー…！

教祖イストワールは、今から数百年前に一つの箱を開けた。光と共に箱から出てきたのは、赤ん坊の姿のネプテューヌだった。ゲイム業界の女神は、人間とは違って寿命は基本的にそこまでなく、人々のシェアと心が生き続ける限り永遠に生きる特殊な生命。されど、始まりは赤ん坊からだった。

イストワール『…ようこそ、ゲイム業界の大陸プラネテューヌへ。貴方はプラネテューヌの女神として、この世界に誕生しました。これから貴方は、人と同じ心…自由を持って生きることになりましょう。私は、その貴方に尽くすと誓って名前を授けます。以後、よろしくお願いいたします…女神・ネプテューヌ…』

ネプテューヌの誕生、そして教祖イストワールの物語の始まりだ。

……

誕生したネプテューヌは、我らが見る完全な神々などとは違って、人間と同じような心を持っていた。何かを司るなんてこともなく、ただ歩いて…導かれて生きてきた。幼児の頃も、それがはっきりと出ていた。

ネプテューヌ『あれ…？いーすん、なんだかへんなきぶんだよ…むねがほかほかする…？』
イストワール『その気持ちは、喜びといいます。今、貴方は気分が良くなって、嬉しい気持ちが温かさとなってこみあげていることでしょう。人は、その喜びも求めて生きているのです』

イストワールは、ネプテューヌに様々なことを教えてきた。少しずつ学んでいくネプテューヌと生き続けて、気がつけば少女の姿へと成長していた。やがて、ネプテューヌは自我をはっきりと持つようになり、自分のアイデンティティも生まれたのだ。

ネプテューヌ『ねえ…人を助けるって、どうしてこんなに嬉しい気持ちになるんだろう…？胸がほかほかして、もっと助けたいって思うの…』
イストワール『それは、笑顔を見たからです。自分が何かの助けをした後に見られる笑顔…これは、普段の笑顔とは特別な物で、助けた人の心を満たします。今、貴方は誰かを助けたことで笑顔を見ました。そして、貴方はその笑顔のためにもっと人を助けたいと求めている…これも、人生にはよくあることなのです』
ネプテューヌ『じゃあ、もっと人を助けたら、もっと嬉しい気持ちになれるのかな？』
イストワール『もちろんです。貴方が意志を持てるようになれば、まだまだたくさんの笑顔を見れるようになりますよ』

たくさんのことを学び、経験し、話、そしてネプテューヌは女神として備えるべき物を一通り備えた。そうして時を生きていくうちに…

イストワール『ネプテューヌさん、今夜は貴方に特別なプレゼントがあります』
ネプテューヌ『その箱は？』
イストワール『何だと思いますか？…ふふ、早速開けますよ』

ぱあぁーーーー！…！

そう、ネプテューヌへのプレゼント。それが、妹の誕生だ。箱の中から、同じ赤ん坊の姿で彼女が出てきた。

イストワール『はい、これがプレゼントの妹であり…新しい存在の誕生です』
ネプテューヌ『妹…！』

イストワール『貴方がこれまで頑張って生きてきた、私からのささやかなご褒美です。ぜひ、受け取ってくださいね』
ネプテューヌ『うん…っ！ありがとういーすん！』
イストワール『さあ、名前をその子に授けましょう。ネプテューヌさん、何かありますか？』

ネプテューヌ『じゃあネプギア！この子の名前は、ネプギアがいい！』
イストワール『ネプギア……ふふ、いい名前で可愛らしい感じがしますね。では、その名前を授けましょうか。…さあ、この妹を迎え入れましょう』
ネプテューヌ『うんっ♪初めましてネプギアっ、そして…』
二人『ようこそ、ゲイム業界の大陸プラネテューヌへ…』

この日、妹のネプギアがプラネテューヌの女神候補生として誕生したのだ。ネプテューヌもイストワールも、短い時間で成長するネプギアに好かれ、いつしか3人で仲良く生きるのが当たり前になった。特に、ネプテューヌとネプギアはお互いに想い合うほどの仲になり、それを見守ることもイストワールの新しい楽しみとなっていた。

ネプテューヌ『よしっ、決めた！ネプギア、これからいつまでもずっと…ネプギアは私が守るよ！』
ネプギア『お、お姉ちゃん…？』
ネプテューヌ『ネプギアは大切な妹だし、私のことを誰よりも理解

してくれる人だから…私はネプギアを守りたい！例え、ネプギアがやだって言っても、絶対に離れないんだから！』
ネプギア『…！…ありがとう…お姉ちゃん…！』
イストワール『ふふっ…ネプテューヌさんも、成長しましたね』

こうして、3人の日常は末永く続くことが約束されたのだった。

……

現在、ネプテューヌは自分の刀を右手に持って横にし、刃身を見つめ初めてようやく口が開いた。その刀も、雨に濡れていく。

パープルハート「…あの日、ネプギアは私が絶対に守るって…約束したのに……この剣は、ネプギアを守るためにも振るってきたのに……私は…」

今まで行きてきたネプテューヌは、様々な経験を通して超次元学園へ入学し、そこで銀時をはじめとするたくさんの仲間達とも出会った。そこで彼女は、侍の魂も心に持つようにもなった。

しかし、彼女は震えていた。ネプギアを、そしてネプギアに誓った約束を守れなかったことが、彼女の心をきつく締めつける。

パープルハート「…何のための力なの…？何のための信念なの…？

…こんな……こんなに醜い私が、どうしてこんな……」

自分を責めるようにつぶやく女神パープルハート。

たったったっ…

その時、後ろから足音と声が聞こえた。感じだけで、来たのはカイトとミリア、そして自分の教祖であり母親のような存在イストワールだとわかった。

カイト「ネプテューヌ…ここにいたのか…」

ミリア「ネプちゃん…」

二人は心配そうに言い、彼女を傘に入れてあげようと近付くと、彼女は身をすくめて拒絶の反応を示した。二人は足を止め、何故と言う表情を見せる。

イストワール「ネプテューヌさん…どうしてここに来たんですか？何を、考えていたんですか？」

イストワールは彼女に問いかけ、真意を聞こうとした。横向きで3人を見るパープルハートは、正面を向いて空を見上げるようにして語り始めた。

パープルハート「……私、夢を見たの……あの魔剣は、私達の先祖が使ったもの…ゲイム業界を救うために使われて、結果として滅びを与えたものっていうことがわかった……そして知ったわ…私があの魔剣に命を捧げたことも…」

イストワール「…！」

パープルハート「ゲイム業界を救いたい…その一心で、私は大切な

妹に全ての可能性をかけて、自分を犠牲にした。犯罪神は倒されて、ネプギアが作る新しい世界として平和は戻った…私達の願いは、叶ったはずだった……でも…」

その先の言葉は、今の3人には何なのか言わずともわかった。彼女自身も、夢で見てはっきりと理解してるのだろう。

パープルハート「…ネプギアは…最後は悲しい最期を迎えてしまった……そして今、ネプギアは別世界からやって来た魔剣によって支配されて、どこかでたくさんの人の命を奪っているかもしれない……」

カイト「…っ！」

パープルハート「それで思ったの…私は、自分の信念と志のせいでネプギアに苦しい思いをさせているんだって…」

イストワール「…どうしてそう思われるんですか？ネプテューヌさんは悪くありません…貴方が別次元でしたことにしても、貴方は自分の意志を貫いただけなのですから」

パープルハート「……その意志を貫くことが、いけなかったの…」

ミリア「え…？」

彼女は自分を責め、イストワールは意志のために行動しただけだとフォローするが、逆にそれ自体がいけなかったと言う。何故なのか？

パープルハート「あの世代にいた私は、そのゲイム業界を救うっていう志をネプギアに押し付けたのよ…彼女の願いを受け入れずに、ただやらなきゃだめだって言って強制したから、結果的にネプギアは酷く苦しむ羽目になって絶望させてしまった……私は間違ってたんだわ……あんな結末になることを考えもしないで、正義任せにネプギアに全てをなすりつけてしまったの…っ」

全てを押し付けたのだと彼女は言う。自分の志のために、ネプギアにもその志の元でまっすぐに行動してもらおうと、より先のことを考えもせずに強制したのだと。

カイト「…気持ちは理解してきたよ。けど、それはあの世代での話なんだろ?それと今に何の関係が…?」
パープルハート「…私は、あの子に自己犠牲の心を植え付けてしまったのよ…」
ミリア「自己犠牲って…そんな…ネプちゃんはそこまで…」
パープルハート「いいえ…私は、あの子にそうさせてしまったのよ…だから…っ!」

よく見ると、彼女の頬には涙が流れていた。泣いているのだ。

パープルハート「…私なんて…女神どころか、姉失格だわ……あの世代や今の出来事が仕方のないことだとしても…少しもネプギアの気持ちを受け入れず…押しつけて苦しめて、無理やりさせて、何が志よ…っ」
カイト「…ネプテューヌ…」
ミリア「…でも、まだ間に合うよ?きっと、まだ助ける方法は…」
パープルハート「…間に合うとか…そういうことなんて関係ないじゃないっ!!!」
3人「…!?」

いきなり怒鳴りだしたパープルハートと、突然の声に怯んだカイト達。

パープルハート「あの時理事長がした選択を、ネクロにしたことを忘れたの!?多くの人を殺めた者は、皆殺してきた!!ネクロも、もう1人のセレナも、どんな事情であれ人々のためと語って殺した

じゃない！！私も、それを正義して受け入れてたのよ！！！それが、今のネプギアに対して何を意味するのか、貴方だってわかってるはずよ！！！」

カイト「…っ！」

パープルハート「理事長だって、皆同じことを考えてるはずよ！！！今はまだ悪人だけであっても、沢山の人々を殺めてしまったネプギアは、人として許せないことだと語って殺すしかないって！！！それが、ネプギアを救うことだとも言いながら、償いをさせることなく殺すしかないって！！！！それも、学園の志だから…侍の魂だから！！！！」

この言葉を聞き続けているうちに、彼女は志と信念を貫くためなら犠牲を払うのもためらわないと誰もが体現していると訴えているのだと気付く。

そう思っていなくても、心の闇と体がそれを表しているのだと、ネプテューヌは知ったのだと。

パープルハート「それを考えたら、どの道ネプギアを殺す以外にできることなんてないじゃない！！！私は…その志のために平気で犠牲を払い続けて、その果てに私はネプギアを苦しめてしまったのよ！！！あの世代にいた私も、そうやってネプギアを不幸に陥れたのよ！！！！」

ミリア「…ネプちゃん……」

涙がどんどん流れるパープルハートが、叫びたいことを爆発させたためか、ふと力が抜けて両膝をついた。

パープルハート「……もうすぐネプギアは人々のために殺される…私はもう…ネプギアを救えない…助けてあげられない……どうしたらいいのか…もう、わからない……これから先も…どうやっ

て生きたらいいのかも……っ」
カイト「…っ」
パープルハート「…怖い……志が……志でなくしていくのが……傷ついていくのが…怖くてたまらない……っ」

とても痛々しくて見ていられない程に、パープルハートの心は折れてしまっている。雨にうたれ嘆くその姿は、絶望で心が満ちた人間そのもの。もし、旧ジェム式魔法少女ならば、これで魔女となって命を失うだろう。

ネプテューヌの心には、とても深い恐怖が焼きついている。何と声をかけてあげればいいのか、カイトとミリアにはわからなくて何も言えなかった。
そんな時、イストワールが前に出た。

イストワール「…ネプテューヌさん……今の貴方の気持ちは、私にもわかります。今まで貴方は、志を掲げてまっすぐに生きてきました。それ故に…さぞ辛い気持ちでしょう…」

イストワールは、ちゃんとパープルハートを見て話す。

イストワール「確かに、志を貫くために犠牲を平気で払う人はたくさんいますし、志に縛られる人だって少なくありません。今の超次元学園にも、はっきり言って志に縛らている人は多数です。そして、正義や志を盾にして欲を貪る人も…」
カイト「イストワール…」
イストワール「見方によっては、ネプテューヌさんの言う通りなのでしょうね…貴方もまた、志を…そしてもう1つ、侍や学園の魂に縛られていたかもしれません。ただ…それが間違いなのか正しいのか、私にはわかりません。クルトさんやカノンノさんも、そうおっ

しゃってました」
パープルハート「…っ」

そして、パープルハートの目前にしゃがみ、語りかける。

イストワール「…でも、貴方は今『もうネプギアを救えない』と言いましたね?それは違いますよ。何故なら…貴方は今、知ったことで変わったのですから」
パープルハート「…?」

まだ救うことができるという言葉に、パープルハートは顔を上げた。

イストワール「貴方はまた1つ…志や信念の負の側面を知ったことで、より公平な目で見ることができるようになりました。それはすなわち、人の信念について深く見れるようになったということにもなります。そして、ネプギアさんを救う想いを形にできるようになれたのです」
パープルハート「…いーすん…?」
イストワール「大丈夫…クルトさん達も、ゲハバーンからネプギアさんを救い出す用意をしてくださってます。後は、ネプテューヌさん…貴方の手で救ってあげるだけなんです。信念を深く見れるようになった貴方が、ネプギアさんの心を深く見て、彼女を呼び覚ましてあげれば、ネプギアさんは助かります」
パープルハート「…私に…できるの…?信念に捕らわれていた私が……ネプギアを不幸にした私が……」
イストワール「ネプテューヌさんにしか、できないのです。それに…志、信念、魂よりもずっと大切なものが、貴方の心にあるはずです。思い出してください…貴方が1番に大切な気持ち、本当の願いを」
パープルハート「…!」

この言葉を聞いた途端、パープルハートの心に何かが浮かび上がる。
それこそ、本音の言葉。

パープルハート「……私は……一緒に、いたい……」

震えた声で、しかし3人にはっきりと聞こえるように言った。

パープルハート「私は…ネプギアと一緒にいたい…っ！ネプギアといつまでも笑顔でいたい…幸せで居続けたい…一緒に頑張っていたいの…っ！私には、ネプギアがいなきゃ…生きていけない……我が儘でもいい…だって、私は…ネプギアと一緒にいることが楽しいから…！！…ネプギアのことを、誰よりも愛してるから！！」

泣き声で必死で伝えようと、パープルハートは大きな声を上げた。

パープルハート「ネプギアが笑ってくれるなら、私は何だってする！！ネプギアが幸せでいてくれるなら、私はどんなことだってやり遂げる！！ゲイム業界や仲間達を守ることが、人々を助けることが、ネプギアの喜びなら…私は…貫きたい！！ネプギアの喜びは私の喜びだから…！！ネプギアと…いーすんや皆と楽しくいられることが、私の楽しみだから！！！」

泣き顔で女神の威厳が台なしになっていようが構わない。それよりも大切なものがあるのだから。もちろん、目の前にも。

パープルハート「だから……お願い……私に、力を貸して…っ」

ようやく聞けた…そう思った3人は、微笑みを見せて答えた。

カイト「…言われなくても、そのつもりさ。俺達も、志のあり方についていろいろ考えて、見つめてるからな」

続くように、ミリアはパープルハートに手をさしのべた。

ミリア「一緒に、ギアちゃんを助けよう。そして…一緒に志の答えを探そう。ボクとカイト君とイストワールさん…そして、皆で…ね？」

パープルハート「…ミリアちゃん…っ」

カイト「俺達はネプテューヌの今の心が生き続ける限り、ずっと助ける。そして…俺達はネプテューヌの友達だ」

パープルハート「…！！カイト君…！」

二人の答えを聞き、イストワールも笑顔になった。

イストワール「志のあり方の答えは、これからゆっくり探せばいいんです。今は、貴方の優しい望みを叶えるために…私達なりのやり方で前へ進みましょう。ネプギアさんと…そして、友達と一緒に」

イストワール、カイト、ミリアが来なかったら、自分は絶望したままだっただろう。それを思ったパープルハートは、また別にこみ上げた気持ちを微笑みの泣き顔で伝えた。

パープルハート「…皆…ありがとう…っ…ありがと……うぅ……うあぁぁぁぁ……！！！」

ミリアに抱きしめられ、パープルハートはすっかり泣き虫になって泣きじゃくった。

ミリアも、カイトとイストワールも、笑顔で見守るだけだった…

完璧な志を持つ者ばかりでは、物語はつまらないというもの。こんな振り返りや悩みもあるからこそ、志は輝く。
波のように変わる志と心に、変化の終わりなどない。カイトとミリアも、そう思っているだろう…

……

翌日

7：00

学園の入り口で待つ者達がいた。これは理事長からの指令を受けてはおらず、必要な情報と手段をそろえた後の独断の行動。

ネプテューヌが、そこに到着した。

カイト、ミリア、クルト、カノンノ、ラムザ、ラルムが彼女を待っていた。

カイト「準備は、いいんだな？」

カイトが尋ね、ネプテューヌは元気な笑顔で答えた。

ネプテューヌ「うん…大丈夫。何でも絶好調だよっ！」

返事を聞いた仲間達は、笑顔で返して頷いた。

クルト「それじゃ…」

カノンノ「ネプギアを助けに行こっ！」
ネプテューヌ「うんっ！」

ネプテューヌ達は出発した。

目指すは、ゲハバーン・ネプギアがいる場所のみ。

67話「ネプテューヌの心」（後書き）

ネプギアを救うべく、いざ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2514x/

超次元学園へようこそ！『アナザーストーリー』

2011年12月16日19時51分発行